# わが闘争(上)

## I 民族主義的世界観

アドルフ・ヒトラー　平野一郎　将積茂 訳



角川文庫

ヒ
3-1
Y800

アドルフ・ヒトラー

わが闘争(上)

角川文庫

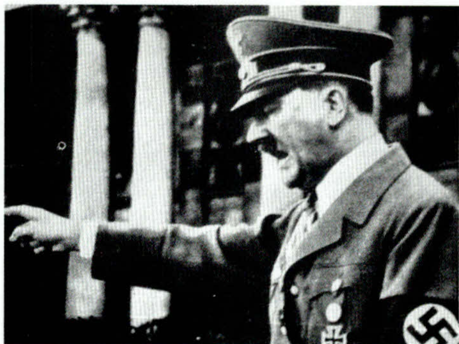
写真提供　オリオンプレス
共同通信

Adolf Hitler

ヒトラーとその愛人エヴァ・ブラウン(右)

ヒトラーと労働戦線指揮官ロベルト・ライ夫人インガ

熱狂的歓迎を受けてズデーテン地方に入るヒトラー(1938年)



雄弁家ヒトラー

ニュールンベルクでのナチ党大会（1933年）

完訳

# わが闘争

（上）

アドルフ・ヒトラー
平野一郎・将積茂＝訳

角川文庫　3143

# 序言

一九二四年四月一日、わたしは、同日付のミュンヘン国民裁判所の判決によって、レヒ河畔のランツベルクの要塞（ようさい）拘置所で禁固刑に服さなければならなかった。

それと同時にわたしは、絶え間ない数年の活動の後に、多くの人々から要求されており、またわたし自身からいっても運動に役だつと感ぜられる著作に、はじめて取りかかることができるようになった。そこでわたしは二巻の書において、われわれの運動の目標を明らかにするだけでなく、われわれの運動の発展の姿をも記そうと決心した。この方がどのような純理的な論文からよりも、学ぶところが多いであろう。

さらにそのさいわたしは、わたし自身のおいたちを、第一巻と第二巻の理解に必要であり、またユダヤ新聞がつくりあげたわたし個人に関する不当な伝説を破壊するのに役立つかぎり、述べておいた。

わたしはここでこの著作を、無縁の人々にではなく、心からこの運動に従い、知性がさらに心から啓蒙（けいもう）を求めているこの運動の信奉者に、向けているのである。

人を説得しうるのは、書かれたことばによるよりも、話されたことばによるものであり、この世の偉大な運動はいずれも、偉大な文筆家にでなく、偉大な演説家にその進展のおかげをこうむっている、ということをわたしは知っている。

けれども教説を規則的、統一的に代弁するためには、その原則的なものが、永久に書きとどめられねばならない。それゆえ、この両巻を、わたしが共通の事業に加える礎石たらしめんとするのである。

レヒ河畔ランツベルク
要塞拘置所にて

著　者

一九二三年一一月九日一二時三〇分、ミュンヘンのフェルトヘルンハレ前および旧陸軍省構内において、左記の人々は民族の再興を固く信じつつ倒れた。

フェーリクス・アルファルト、商人、一九〇一年七月五日生
アンドレーアス・バウリードル、帽子製造人、一八七九年五月四日生
テーオドール・カゼラ、銀行員、一九〇〇年八月八日生
ヴィルヘルム・エールリッヒ、銀行員、一八九四年八月一九日生
マルティン・ファウスト、銀行員、一九〇一年一月二七日生
アントーン・ヘヒェンベルガー、錠前屋、一九〇二年九月二八日生
オスカー・ケルナー、商人、一八七五年一月四日生
カール・クーン、料理店給仕長、一八九七年七月二六日生
カール・ラフォルツェ、工業大学学生、一九〇四年一〇月二八日生
クルト・ノイバウアー、官吏、一八九九年三月二七日生
クラウス・フォン・パーペ、商人、一九〇四年八月一六日生
テーオドール・フォン・デア・プフォルテン、州最高裁判所判事、一八七三年五月一四日生
ヨーハン・リクマース、退役騎兵大尉、一八八一年五月七日生
マックス・エルヴィン・フォン・ショイプナー＝リヒター、工学博士、一八

八四年一月九日生
ローレンツ・リッター・フォン・シュトランスキー、技師、一八九九年三月一四日生
ヴィルヘルム・ヴォルフ、商人、一八九八年一〇月一九日生
いわゆる国家当局は、これら亡き英雄たちを、いっしょに埋葬することを拒否した。
それゆえわたしは、共通の記念として本書の第一巻をかれらにささげる。かれらが本書の血ぬられし証人として、われわれの運動の信奉者のために、たえず前途を照らさんことを。

一九二四年一〇月一六日

レヒ河畔ランツベルク、要塞拘置所にて

アドルフ・ヒトラー

# 訳者序

最初、わたしはこの書を、ナチの大学政策を研究する資料として、手にした。ナチズムの研究においてこの『わが闘争』は、絶対不可欠の資料であるからである。たまたま本書の全訳出版計画がもちあがったとき、わたしはこの仕事にかなりの躊躇(ちゅうちょ)をおぼえずにはおられなかった。第一は、現代の日本においてこのナチのバイブルともいうべき書物を翻訳する意義が、はたしてあるだろうか、と疑ったこと、第二は、この翻訳がネオ・ファシズムのために好個の材料を提供することになりはしないだろうか、と恐れたこと、第三は、すでに十分な研究をつんだナチ研究家こそ、もっと適切な訳者ではないだろうか、と考えたことが、躊躇した理由であった。

だが当初のわたしのこの躊躇は、時がたつにつれ、『わが闘争』を全訳して出版すべきだ、という考えに急速に傾いていった。この書を読み進むにつれて、次のような疑問が生じてきたからである。

一、かつて戦時中、日本では英雄ともてはやされ、戦後は一転して極悪な犯罪者と称されているヒトラーについて、われわれはいったいどれほどのことを知っているだろうか。とりわけかれの思想一般、あるいは思想形成の過程についてどれほどの知識をもっているだろうか。

二、戦時中、日本で出版された抄訳が、ヒトラーについて客観的に見る妨げとなったのではなかろうか。特に戦時中の日独伊三国同盟のために『わが闘争』の中の訳出されなかった部分——両国間を離反せしめるという理由で——を、日本人のどれだけが、その内容まで知っているだろうか。

こういう疑問に加うるに、わたしをこの仕事にふみきらせたものは、最近の一部の青少年のヒトラ

ー礼讃の声——それはしばしば仮借なき残酷さをもつ青少年特有のヒロイズムに由来するのでもあろうが——であった。戦争体験なき世代こそ、この書を読むべきではないだろうか。この書をくもりなき目で読み、客観的に判断することが、この世代にとって必要であり、戦後の教育を受けたものなら、十分な批判力をもって読むことができるのではないか、と考えたからである。さらにヒトラーが痛烈に攻撃している議会の腐敗堕落、これは形を変えて現代の日本の社会にも存在しているのではなかろうか。もしそうだとするならば、議会主義という近代民主政治の最低擁護線を確保し、ファシズム勢力の台頭を予防するためにこそ、ナチ勢力の伸長過程とナチの論理をつぶさに見ることが必要なのではないか、というのがわたしの立場である。

したがってわたしは、この翻訳を、なによりもナチズムの客観的な研究の不可欠の資料として提供し、ふたたびかかるファシズムの蹂躙（じゅうりん）を招来せざるためにこそ提供するのである。

しかしここにただ一つだけ注意していただきたいことがある。それはヒトラーの論理——極端な国家主義、なかんずくプロイセン＝ドイツ的軍国主義という大前提にささえられた、単純でしかもしばしば飛躍はあるが、大衆説得力をもつ論理——を見抜いてほしい、特にマルクシズム＝西欧的議会制民主政治＝ユダヤ主義と考える場合のヒトラーの大衆の心に火をつけるような扇動的言辞の中の論理の飛躍に、注意してほしい、ということである。ヒトラーが天才であったことを、わたしは否定しない。シャイラーがいうように「第三帝国を建設し、これを情け容赦なく、しかもしばしば非凡な抜け目なさで統治し、あのような目がくらむような高みと、あのような悲惨な最後に導いた人物は、邪悪であったが、疑いもなく天才だった。」（W・L・シャイラー著、井上勇訳『第三帝国の興亡』第一巻一八ページ）ことは事実である。しかしこの邪悪な天才が、「すべてを単純化する恐ろしい人」（F・マイネッケ著

『ドイツの悲劇』一ページ)であり、それゆえにこそ、わずか十二年間のことではあったが、ドイツ人をしてあれほど熱狂せしめた大衆説得力をもっていたのだ、ということを、この第三帝国の青写真となった『わが闘争』の中で見抜いてほしいのである。

さらにいうならば、かかる狂気の天才に活動の場を与えた国民大衆の側の責任、ヒトラーのことばの魔術に幻惑されるような政治的、あるいは精神的な幼稚さの責任について、他山の石として考えてほしいのである。しかしこのことは逆に見るならば、それは邪悪ではあったけれどもヒトラーが、ありきたりの政治家に比して大衆の心理をはるかに的確につかみ、政治的な大衆扇動力を実際にそなえていた証拠であり、その点で現代の政治家にとっても興味深い資料ともなっているのである。

ともあれ、この書はドイツ・ファシズム研究のアルファであるとともに、政治的術策を知るうえにも不可欠のものである、といえよう。

＊

『完訳わが闘争』(全三巻)が黎明書房より出版されたのは、一九六一年の夏から秋にかけてであった。わたしは心の一部で、この翻訳が与えるかも知れない悪影響を危惧しながらも、戦後世代のくもりなき判断力がこの危惧を追いはらってくれるに相違ないと期待してきた。そしてこの期待は裏切られなかった。

若い世代は『わが闘争』をバイブルとしてではなく、客観的に批判すべき書として取扱ってくれた。同時にこの書が一度は読まるべき書であるとのわたしの考えを、いっそうたしかなものにしてくれたのである。

一昨年五月、初訳の時同様の時間と労力とを費して、全面的に改訳し、『改訳わが闘争』として、

同じく黎明書房より出版された。今度、角川文庫から全二巻のかたちで出版されるようになったのを機会に、改訳版に多少の加筆修正を加え、巻末の解説をより簡明なものに全面的に書きあらためた。
この文庫版が、より多くの若いかたがたの思想的成長に役立てば幸いである。

一九七三年八月十日

# 凡例

一、本書の人名および地名は、日本語としてなじみ深いものはそのまま用い、他はドイツ語の発音にできるだけ忠実に表記した。ただドイツ人以外の人名の表記は、主として岩波西洋人名辞典によった。

二、本文中の（　）および——は原文にあるままである。ただ——については二、三原文にないばあいでも訳者が用いたところもある。

三、すべて注は、巻末にまとめた。

四、原文のままでは日本語として通じにくい部分は、原文にないことばをいくらか挿入した。

# 目次

# I

# 民族主義的世界観

# 第一章　生家にて

**生家にて**　今日わたしは、イン河畔のブラウナウが、まさしくわたしの誕生の地となった運命を、幸福なさだめだと考えている。というのは、この小さな町は、二つのドイツ人の国家[1]の境に位置しており、少なくともこの両国家の再合併こそ、われわれ青年が、いかなる手段をもってしても実現しなければならない畢生(ひっせい)の事業と考えられるからだ！

ドイツ・オーストリアは、母国大ドイツに復帰しなければならない。しかもそれはなんらかの経済的考量によるものではない。そうだ、そうなのだ。たといこの合併が、経済的に考えて重要なことでなくても、むしろそれが有害でさえあっても、なおかつこの合併はなされなければならない。**同一の血は共通の国家に属する。**ドイツ民族は、自分のむすこたちを、共通の国家に包括することすらできないかぎり、植民政策の活動への道徳的権利をもちえない。ドイツ国の領域が、ドイツ人の最後のひとりにいたるまでも収容し、かれらの食糧をもはや確保しえなくなったときにはじめて、自国民の困窮という理由から、国外領土を獲得する道徳的権利が生ずるのである。そのときに鋤(すき)が剣になり、戦いの涙から後世のために日々のパンが生育してくる。だからわたしには、この小さな国境の町が、大使命のシンボルであるように思える。しかし、なお別の観点からしても、この小都市は、今日注意をひきつけるようにそびえている。百年以上も前に、この見ばえのしない町は、全ドイツ国民に痛く感

動を与えた悲劇的災禍の舞台として、少なくともドイツ史の年代記に、永久に記録さるべき特権をもったのである。わが祖国が極度に屈従していた時代に、この地で、ニュールンベルクの書籍商人で、頑迷なまでの「国家主義者」であり、フランスぎらいであったヨハネ・パルムが、不幸の中でも熱愛したドイツのために倒れたのである。かれは、共謀者[2]──むしろ主謀者であるが──の名をいうことを、頑強に拒否した。さればレオ・シュラーゲターのごとくである。いうまでもなく、かれもちょうどシュラーゲターと同じように、ある政府官吏によって、フランスに密告されたのである。ひとりのアウグスブルクの警察署長が、この悲しむべき名誉を獲得し、そしてゼヴェリン氏の新ドイツ国家当局に手本を与えたのである。

このドイツ的殉教の光によって美しく照らされたイン河畔の小さな町に、血統はバイエルン人、国籍はオーストリア人であるわたしの両親[3]が、前世紀の八十年代の終りに住んでいた。父は義務に忠実な官吏であり、母は家政に専念し、ことにわれわれ子供たちにいつも変わらぬ愛情深い世話をしてくれた。この当時のことは、わたしの記憶にはあまり残っていない。というのは早くも数年後、父はイン河を下って、パッサウで新しい地位につくために、この好ましい小さい国境の町を、もう一度離れねばならなかったからである。かくしてドイツ国内にきた。

しかし、オーストリア税関吏の運命は、当時よく「さすらい」だといわれていた。父は、まもなくリンツへ移り、ついにそこで恩給生活にはいった。もちろん恩給生活は、この老人にとって「休息」を意味するものではなかった。貧しい日雇農夫[4]のむすこであった父は、若いころ早くも家にいることに耐えられなかった。まだ十三歳になるかならないのに、当時小さかった若者は、リュックを背負い、故郷ヴァルトフィールテルから歩きつづけた。「世故にたけた」村人のとめるのも聞かずに、かれは

ヴィーンへ向かった。そこで手工業を学ぼうとしたのだった。それは前世紀の五十年代のことだった。痛々しい決意である。だがこの十三歳の子供が十七歳になったとき、かれは職人試験をすませたが、満足しなかった。むしろ反対だった。長い年月にわたるそのころの困窮と、いつまでも続くみじめな状態と悲惨さとが、いまや手仕事をまたまた放棄して、なにか「もっとりっぱなもの」になろう、という決心を固めさせた。かつては、この村の貧しい青年には、牧師というものが、人間として到達することのできる最高のものと思えたのだが、ところが視野をいちじるしく拡大させる大都市の中では、国家官吏の地位が最上のものに思えた。困窮と悲憤のため、まだなかば子供でありながら「老成した」おとなの不屈な粘り強さで、この十七歳の青年は、新しい決心にこりかたまった。——そして官吏になった。(5)ほぼ二十三年後に、その目的が達せられた、とわたしは思っている。そしてまたこの貧しい青年が、何ものかになるまでは愛する故郷の村に帰るまい、とかつて約束した誓いの前提は、みたされたように思えた。

さて目的は達した。だが村では、かつての小さい子供のことを思い出しうるものは、だれもなかった。そして村は、かれ自身にとって、親しみのないものになってしまった。

だからかれは、五十六歳でついに恩給生活にはいったとき、この隠退生活で「無為者」として日を過ごすことに耐えられなかった。かれは上オーストリアの市場町ラムバッハの近郊に土地を買い、それを管理して、長く働き続けた一生を終え、ふたたび祖先のもとへ帰ったのである。(6)

**ガキ大将**　このころわたしに、おそらくはじめての理想が形づくられたようだ。戸外でのバカ騒

ぎや、学校への回り道や、特に母に幾度かつらい心配をさせた非常にたくましい子供たちとの交友が、部屋に閉じこもってばかりいる子供とは、むしろまったく違ったものにわたしを成長させた。だからそのころわたしはまた、自分の将来の職業についてまじめに考えたことがほとんどなかったが、もともと父の人生経路には一度も同情したことがなかった。そのころ早くもわたしの弁舌の才は、わたしの仲間との多少とも迫力のある対決の中で、訓練されたと思う。わたしは、学校ではたやすく、そしてそのころまた非常によく勉強したが、そのうえにかなり取扱いにくいガキ大将になっていた。わたしは、暇なときにラムバッハ修道院で歌を習っていたから、非常にきらびやかな教会の祭典の厳粛な点に、しばしば陶酔する絶好の機会をもった。だからちょうど父にとって、小さな村の牧師がかつてそうであったように、わたしには修道院長が最も努力するねうちのある理想と思えたのも当然であった。[7] 少なくとも一時はこれが事実であった。しかし父は自分のけんか好きのむすこに、弁舌の才がその子の将来のために何か有望な結論をひきだすために、はっきりした根拠から評価できなかったので、かれは少年のそのような考えにもちろん理解を示さなかった。父はこの性質の葛藤(かっとう)を十分心配しながら監視していた。

**戦争の感激**　実際にはこの職業への一時的なあこがれは、たいへん早く消えてしまった。事実わたしの気性にもっとよく合った希望に場所をあけ渡すためにである。父の蔵書をくまなく探しているさい、わたしはいろいろな軍事問題の書物を手にしたが、その中に一八七〇年―七一年の普仏戦争の普及版があった。それはこの時代のさし絵いりの二巻の雑誌であった。これがわたしの愛読書になった。まもなくこの偉大な英雄的闘争が、わたしにとって最大の内面的な体験になった。以後わたしは、

戦争とかあるいはとにかく軍制とかに関係するあらゆることに、ますます熱中した。

しかしこれは他の観点から見ても、わたしに重要な意味をもつようになった。はじめて——まだ非常に漠然たる観念ではあったが——この戦闘をするドイツ人と、他のドイツ人との間に相違があるのだろうか？ それはどんな相違なのだろうか？ という疑問がしつように迫ってきた。なぜオーストリアはこの戦争にいっしょに戦わなかったのだろうか？ 父もまた他のドイツ人たちみんなも、なぜ戦わなかったのだろうか？

われわれもまた、すべてのドイツ人と同じではないのだろうか？

われわれは、みんなともに一つの全体をなしているのではないのか？ はじめてこの問題が、わたしの小さい頭脳を攪乱(かくらん)しはじめた。ひかえ目な質問をするのに対して、すべてのドイツ人がビスマルクの国家に属する幸福に浴していないのだ、という答えを聞かされて、わたしは内心で嫉妬(しっと)を感じた。

わたしはこれが理解できなかった。

＊

**職業選択**　わたしは学校へ行かねばならなかった。

わたしの全体の特性やそれ以上にわたしの気質から見て、父は人文科ギムナジウムがわたしの素質に反している、という結論に達しうると思った。かれは実科学校が適しているように思った。特にかれは、わたしにはっきりした絵の才能があると見て、この考えをいっそう強めた。かれは、絵画がオーストリアのギムナジウムでは等閑に付されている、と確信していたのだ。しかしおそらくはかれ自身が生業の苦労をなめてきたので、人文科の勉強が、かれの目には非実際的で重要視するにたらない、という決心がいっそう加わったのだ。だがかれは原則としては、むすこもまた自分のように官吏にな

るだろう、ぜひそうせねばならない、という意見をもっていた。かれの青年時代がつらかったため、後年達しえた地位がまったく自然に、ただもっぱらかれの鉄のような勤勉さと実行力の結果として、いっそう大きく見えたのでもあろう。自分で成りあがったものの誇りが、自分のむすこも同じような、できればもちろんもっと高い地位につけてやろうとさせたのだ。かれは自分の生涯の精励によって、子供自身が成りあがることをたいへん容易にしてやることができたのだから、なおさらのことである。

かつて全生涯の内容になったものが、むすこによって拒否されるということは、かれには考えもおよばないことであった。だから父の決心は単純で、決定的で、はっきりしており、かれの目から見れば自明のことであった。つまり生涯を通じてつらい生存闘争のため横柄になっていたかれの性質は、しかしながらこういうことがらについて、かれの目から見れば経験も浅くまた同時に無責任な少年自身に、最後決定をまかせることがまったく耐えがたく思えたらしい。またそんなことは、子供のその後の人生のために父として当然なすべき権威と責任をはたすうえから、悪い非難すべき弱点として、かれが以前からもっていた義務履行の観念とは合致することができなかったであろう。

けれども、そうはいかなかった。

生まれてはじめてわたしは——当時やっと十一歳であったが——抗論せざるをえなかった。そこで父も、一度注目した計画と意図を実行しようと頑固に決意したが、かれのむすこもまた、自分にとってまったく承服できないかほとんど承服できない考えを拒むことにこりかたまり、反抗的であった。

**官吏はごめんだ**　わたしは官吏になるつもりはなかった。

説得も「熱心」な訓戒も、この反対をなんら変えることができなかった。わたしは官吏になりたく

なかった。いやだ、どうしてもいやだった。父は自分の生活を話してくれて、わたしにこの職業への愛着や喜びをめざめさせようといろいろ試みたが、結果は反対になった。自由のない人間として、いつかどこかの事務室にすわることを許され、自分の時間をもつことができず、全生活の内容をいやいや書式用紙に書きいれなければならないということは、考えただけでもアクビがでるほどいやなことだった。

こういうことは、実際にありきたりの意味で、「感心な」とはいえない一人の若者には、どうでもよいことであった。学校の勉強は、こっけいなほどやさしかったので、わたしには暇な時間がうんとあった。そこでわたしは、へやの中にいるよりも戸外にいるときの方が多かった。もしも今日、わたしの政治的反対者が愛情深くご親切にも、わたしの生涯を当時の青年時代までせんさくするならば、この「ヒトラー」という男は、若いころにがまんのならぬいたずらをしていたのだろう、ということをはっきり確認するかも知れないが、わたしはかれらが、この楽しかった時代の思い出をいまもなお与えてくれることを天に感謝している。野原と森が当時の戦場でありそこでいつもおこる「口論」を解決させたものだ。

そこで実科学校へ出席したが、このくせはいっこうにやまなかった。
だがもちろん、また他の口論も決着をつけねばならなかった。

**むしろ美術画家だ**　わたしを官吏にしようとする父の考えが、わたしの原則としての官職ぎらいに対立している間は、この衝突は容易にがまんできた。そのかぎりでわたしも、自分の内心の意見をおさえることができ、いつも同じように反抗する必要はなかった。わたしは、自分の気持ちをまった

く平静に保つため、将来決して役人にはならぬ、という自己の確信に満足していた。そしてわたしはこの決心を変えることがなかった。わたしの計画が父の計画に対立するようになると、問題はもっとむずかしくなった。十二歳のときに早くもこれが起った[8]。それがどうして起ったのか今日でさえわからないが、ある日、画家に、美術画家になろうということが自分にはっきりした。もちろん、わたしの絵の才能は確かにあった。とにかく父がわたしを実科学校へ行かせたという理由が、しかもそこにあった。しかしこの方面での職業教育を受けさせようとは、かれは一度も、断じて考えなかったであろう。反対である。父の好む考えをあらためて拒否したとき、わたしははじめて、おまえはもともと何になりたかったのだ、と尋ねられた。そしてかなり出しぬけに、いままで固く心にいだいていたわたしの決心をいいだしたとき、父ははじめは声も出なかった。

「絵かきだ？　美術画家だ？」

かれはわたしの理性を疑った。おそらくは聞きちがいか思いちがいと思ったらしい。かれはもちろんそれについて説明を聞き、そして特にわたしの考えの真剣さに気づいたとき、かれはありったけの頑固な特性で、これに反対してきた。この点かれの決心は、非常に単純なものだった。そのさい、わたしに実際何か才能があるかも知れぬということは、まったく考えてもみなかったのだ。

「美術画家！　わたしの生きているかぎり断じていけない」。だがむすこも他のいろいろの特性とともに、やはり同じような頑固さを遺伝していたらしく、やはり同じような答えを返した。もちろんその意味は反対だった。

両方とも自分の主張を曲げなかった。父は「断じていけない」をやめず、そしてわたしは「だからといって」を強調した。

だからもちろんこれは、たいへんおもしろくない結果を生じた。老人は憤慨したし、わたしもかれをたいそう愛してはいたが、やはり腹をたてた。わたしはさらに一歩を進めて、わたしが画家になる勉強をしようとする希望をすべて禁止してしまった。わたしはいつか、それ以上なにも勉強しないつもりだ、と宣言した。とにかくこの老人が、いまやかれの権威を容赦なく貫徹しようとしたかぎり、もちろんこうした「宣言」だけでは不利な立場におちいるので、それ以後は沈黙して、そしてわたしの脅迫を実行に移したのである。父が実科学校での不十分な勉強を見るならば、かれはよかれあしかれ、わたしの夢見た幸福に進ませてくれるだろう、と思ったのだ。

わたしはこの計算が合っていたかどうか知らない。わたしの学校の成績がすぐに目に見えて落ちたことだけは確かだった。自分の好きなもの、なかでも自分で画家として後に必要だと考えたすべてのものを学んだ。この点で無意味と思うものや、その他の心をひかれないものを、わたしは徹底的になまけた。この時代のわたしの成績は、科目やその評価によって、いつも極端さを示した。「優」や「良」とならんで、「可」や「不可」があった。地理の成績はずばぬけてよく、世界史はさらによかった。この二つの好きな科目は、クラスで抜群だった。(9)

若き国家主義者　幾年か後に、わたしがいまこの時代の成績をはっきりと吟味してみると、二つのきわだった事実が特に重要であるように思える。

第一に、わたしが国家主義者になったこと。

第二に、わたしは、歴史の意味を理解し、解釈することを学んだこと。

ドイツ・オストマルク[10]　旧オーストリアは「多民族国家」であった[11]。ドイツ国民は当時、少なくともこの事実が、このような国家における各人の日常生活にとってどんな意味をもつか、ということを少しも考えなかった。人々は、普仏戦争における英雄的な軍隊のすばらしい凱旋(がいせん)行進以後、次第に国外のドイツ人から疎遠になる一方であり、一部ではもはやかれらの価値を認めなくなったか、認める能力すらなくしてしまっていた。特にドイツ系オーストリア人については、そもそも核心において根本から健全な民族と腐敗した王国とを、簡単に混同してしまっていた。

もしオーストリアにいるドイツ人が、真に最上の血をもっていなかったならば、オーストリアはドイツの国家だ、というあやまった考え[12]が、しかもまさしくドイツに起りうるほど、五千二百万人の国家にドイツの極印を押させるような力はもちえなかったのだ、ということが人々にはわかっていなかった。これはきわめて重大な結果をともなう不合理なことであるが、オストマルクの一千万のドイツ人にとっては、実にりっぱな証明書であった。ドイツ語、ドイツ語学校やドイツ的制度をめぐる長い間のきびしい闘争については、ドイツ国内のドイツ人のほんのわずかのものだけが、おぼろげに知っていたにすぎない。ようやくこの悲惨な困窮が、幾百万のわが民族を強いてドイツ国から離れさせようとし、外国の支配下で共通の祖国を夢み、それをあこがれながら、少なくとも最も神聖な母国語の要求権だけは維持しようと試みているいま、自分の民族のために戦わねばならないことが意味するものを、人々は広い範囲で理解するようになった。いまではおそらくだんだんと、ドイツ国の旧オストマルクにおけるドイツ主義の偉大さを正しく評価することができるかも知れないが、ドイツ主義というものは、幾世紀もの間他に頼らずに、最後にはドイツ語の領域を維持するため小さい消耗戦で、ドイツ国をまず東方で守ったのだ。その時に、ドイツ国自身は植民地に関心を向けていたが、その門前

の自分の肉と血に注意しなかったのだ。

**ドイツ主義の闘争**　すべての闘争において、どこでもいつでもそうであるように、古いオーストリアの言語闘争にも三層あった。**闘争者、日和見主義者および反逆者**がこれである。

早くも学校時代にこのふるいわけがはじまっていた。思うに、言語闘争の注目すべきところは、一般に、その波が来たるべき世代の養成所としての学校で、おそらくは最も激しく洗ったということである。この闘争は児童をめぐって行なわれ、この闘争の最初のラッパは、児童に向かって吹かれた。「ドイツ少年よ、なんじはドイツ人たることを忘れるな」、また「少女よ、なんじはドイツの母となるべきことを思え」と。

若人の心を知るものは、かれらこそいちばん喜んでかかる闘争の叫びに耳をかすものだ、ということが理解できるだろう。またかれらはいろいろの形で、かれら独特の方法やかれら独自の武器で、この闘争をいつも行なったものだ。かれらは非ドイツ的な歌を歌うことを拒み、人々がドイツの英雄の偉大さを忘れさせようとすればするほど、いっそう陶酔する。食物を節約したわずかの金を、おとなの闘争資金に集める。かれらはドイツ人でない教師に対しては、信じられぬほど耳さとく、同時に反抗的である。自国民族の禁止された記章をつけ、そのために罰せられたり、なぐられたりすれば、うれしがる。このようにかれらは、小さいながらもおとなの正確な映像である。もっともその心情はもっと善良で、もっと純正なのだが。

わたしもかつて比較的小さかったとき早くも、旧オーストリアの民族闘争に参加する機会をもった。警告されたり、刑罰を受けたりしたにもかかわらず、南マルク[13]や学校連盟のため献金し、矢車菊や黒

赤金の旗によって精神を強調し、「ハイル[14]」というあいさつをし、また皇帝歌[15]のかわりに「ドイッチュラント・イューバー・アルレス[16]」が歌われた。それと同時に若いものは、いわゆる多民族国家の国民が、かれらの民族性に関して言語のほかには何も知らない時期に、政治的に訓練されたのである。わたしがそのころすでに日和見主義者でなかったことは、はっきりと記憶している。まもなくわたしは、熱狂的な「ドイツ国家主義者」になった。

この発展は、わたしの場合には非常に早く行なわれた。もちろんこれは今日の党派の概念とは同じではないが。それで十五歳ですでに王党的「**愛国主義**」と民族主義的「**国家主義**」の区別を、理解するようになった。そしてわたしは当時すでに、後者にだけより親しみを感じていた。

ハープスブルク王国の内面的な状態について研究したことのないものにとっては、こういう経過は、おそらく全然わからないかも知れない。特別のオーストリア史というものは、ほんのわずかだけ教えられたにすぎないが、学校での世界史の授業だけでも、この国家においてはすでにこの発展の萌芽とならねばならなかった。この国家の運命は、そのように全ドイツの生命と発展とに密接に結びついていた。歴史をドイツ史とオーストリア史にわけることは、まったく考えもおよばないように思えた。そうだ、ついにドイツが二つの勢力範囲にわかれはじめたとき、むしろこの分裂さえもがドイツ史になったのだ。

ヴィーンに保管されているかつての神聖ローマ帝国の皇帝の印璽(いんじ)は、永遠の共同体の保証として、いっそうすばらしい魅力をふりまいているように思える。

ハープスブルク国家崩壊の日に、ドイツという母国と合併しようとするドイツ系オーストリア民族の不可抗の絶叫は、実に、決して忘れえない父家へ復帰しようとするあこがれの、全民族の心深くま

どろんでいた感情の結果にすぎなかった。だがこれも、個々のドイツ系オーストリア人の歴史教育が、こうした一般的なあこがれの原因にならなかったならば、決して説明がつかないであろう。歴史教育にこそ、決して枯れることのない泉がある。それはとりわけ忘却の時代において、無言の警告者として刹那的な栄華を超越し、つねに過去を思いだすことによって、新しい未来をささやくのである。

**歴史教育**　いわゆる中等学校での世界史の教育は、もちろん現在でもなお非常にひどいものである。歴史教育の目的が、決して歴史上の日付や事件の暗記や棒読みをすることではなく、いつあれやこれやの戦争があったかとか、将軍が生まれたとか、あるいはそのうえ（たいていはたいして重要でない）ある君主が先祖代々の王冠を頭にいただいたとかいうことを、子供が正確に知っていてもいなくてもどうでもよい、ということを知っている教師はまことに少ない。いや実際神に誓って、そんなことは重要でない。

歴史を「学ぶ」ということは、歴史的な事件としてわれわれの目に見えるものを、実際にひき起した原因としての力を発見し、見いだすことである。

読書や学習の技術というものはまた、次の点にある。すなわち、**本質的なものを保持し、本質的でないものを忘れること。**

わたしがかつて幸いにも、歴史についてひとりの教師を得たことは、その後のわたしの全生涯に対して多分に決定的な影響を与えた。かれは教えるときにも試験のさいにも――歴史をそのようなものと考えている教師はまったく少ないのだが――この視点に熟達させることを知っていた。リンツ実科学校にいた当時のわたしの教師レオポルト・ペッチュ博士[17]の中に、この要求が真に理想的な状態で具

体化されていた。老人でまったく親切であったが、しかしキッパリした態度で、かれは特にまぶしいばかりの雄弁で、われわれをひきつけたばかりでなく、真に人を感動させることができた。いまもなお、わたしはこの白髪の人を思いだすと、かすかに感動する。かれはわれわれに火をはくような口調で、しばしば現在を忘れさせ、魔術のように過去につれもどし、無味乾燥な歴史の追憶を、数千年のかすみの衣からいきいきした現実につくりあげるのだった。そのときわれわれは、しばしば強い情熱に力づけられ、しかもときどきは涙を流して聞きいったものだ。

この教師は現代から過去を解明し、また過去から現代に対する因果関係をひきだすことを知っていたので、幸福もそれだけ大きかった。さらにまたかれは、他の教師以上に、当時われわれを息もつかせずに駆りたてていた時事問題のすべてについて、説明してくれた。われわれの小さい国家主義的熱狂が、かれにはわれわれを教育する手段となった。つまりかれは、一度ならず国家主義的名誉感に訴え、それだけで他の手段を用いるよりもはるかに早く、われわれ悪童どもを手なずけることができたのだった。

**大好きな科目、歴史**　わたしはこの教師のおかげで、歴史が大好きな科目になった。

もちろんわたしも——かれから望まれたのではないが——そのころすでに若き革命家になっていた。こういう教師のもとでドイツ史を学ぶことができたもので、国民の運命がかくも不利な方法で支配王家(18)の影響にさらされている国家に対して、敵対しないものがあろうか？

過去と現在を通じて、恥ずべき自己の利益のために、幾度もドイツ民族の利害関係を裏ぎった王家に対して、最後までだれが忠誠をつくし得ようか？

このオーストリア国家がわれわれドイツ人を愛していなかったばかりか、むしろ一般にまったく気にもかけなかったのではないか？　ということを、われわれは小さいときからよく知っていたのだ。

**歴史的認識**　ハープスブルク王家がやったことについての歴史的認識は、日々の見聞によっていっそう固められた。北部においても南部でも、異民族の肉体をむしばみ、ヴィーンすらもますます非ドイツ的都市に見えてきた。「オーストリア大公の家[19]」はいつもできるかぎりチェコ化した。そしてオーストリア・ドイツ主義の最もにくむべき敵、皇太子フランツ・フェルディナント大公を弾丸で倒したものはとりもなおさず、永遠の正義と仮借なき報復をくだす神の鉄拳だった。その弾丸は大公みずからが鋳造を助けたものである。だがかれこそ天下り式にオーストリアをスラブ化しようとしたパトロンだったのだ！

人々がドイツ民族に強要した重荷はたいへん大きなもので、重税と血の犠牲は未曽有のものだった。けれどもまったくの盲目でないものは、これらすべての犠牲が無益だ、ということを認識せねばならないはずだ。そのさいわれわれを最も苦しめたものは、あいかわらずこの全体系が道徳的にドイツとの同盟によっておおわれているという事実であった。それによって古い王国内のドイツ主義が次第に絶えていくことが、ドイツ自身によっても、なおある程度まで認可されていたという事実であった。ハープスブルクの偽善は、外部に対しては、オーストリアがあたかも依然としてドイツ国であるような外観を見せることを知っていたが、同時にそれとこの王家に対する憎悪を、火のような怒りと軽侮にまで高めたのだ。

ただドイツ国自体では、当時みんなの中で、「選良」だけがこれについて何も知らなかった。盲目

になったようにかれらは屍の側につき、そして腐敗の徴候の中になお「新しい」生命の徴表を発見しうると信じていたのだ。

若いドイツ国がオーストリアというえせ国家と不健全な結合をしていることの中に、後の世界戦争の、しかもまた崩壊の萌芽があったのである。

わたしはこの本の中で、もっと根本的にこの問題に没頭しようと思う。ここではただ、要するにわたしがほんの子供のときに、すでにある洞察に達していたこと、それを決して忘れなかったばかりかますます深めていったこと、をたしかめれば十分である。

すなわち、

**ドイツ主義の確保はオーストリアの滅亡を前提とすること、そして国民的感情は王党的愛国主義とは決して同一でないこと、なかでもハープスブルク大公家はドイツ国民を不幸にする運命をもっていたということ、**を。

そのころ早くもわたしは、この認識から当然の結論をひきだしていた。それはわがドイツ・オーストリアの故郷に対する熱烈な愛と、オーストリア国家に対する深い憎悪とである。

＊

**ワーグナー崇拝**　こうした学校でわたしに与えられた歴史的な考え方は、その後も決して忘れなかった。世界史は次第に現代の歴史的行動、すなわち政治に対する理解を深める無尽蔵の源となった。わたしはそのさい「学ぼう」とするのでなく、教えてもらうのだった。

わたしはたいそう若いときに政治的「革命家」となったが、芸術的にもまたそうであった。

上オーストリアの地方都市には、当時比較的悪くない劇場があった。ほとんどすべてのものが上演

された。十二歳のときにわたしははじめて「ヴィルヘルム・テル」を見た。それから二、三か月後「ローエングリーン」を見たのが、わたしがオペラを見た最初である。わたしは一度でひきつけられた。バイロイトの巨匠[20]に対する若者の感激は、とどまるところを知らなかった。なんどもわたしはかれの作品にひきつけられた。そして地方での上演がひかえ目であったため、その後印象を高められる可能性があったことは、今日特に幸運だったと思っている。

これらはすべて、特に生意気ざかり（わたしにはただ非常に苦しいときだったが）をすぎた後に、父がわたしに選んだような職業に対する深い嫌悪を確かめたのだ。わたしは官吏としては決して幸福になれないだろう、ということをますます確信した。そして実科学校でのわたしの絵の素質が認められてからは、わたしの決心はいっそう固くなった。

これについては、懇願されようが脅迫されようが、変わることがなかった。

わたしは画家になるつもりだった。そして決して官吏にはならないつもりだった。

ただ年が進むにつれ、だんだんと建築について興味がでてきたことが、特色として認められた。わたしはそのころ、これはわたしの絵画家としての才能の当然の補足だと思い、わたしの芸術家としてのわくがこうして広くなっていくことを、ただ内心で喜んでいた。

いつかそれが変わるだろうということを、わたしは予感しなかった。

＊

**両親の死**　だが、わたしの職業の問題は、わたしがかねがね期待していたよりも、もっと早く決定されることになった。

十三歳のときにわたしは突然父を失った。脳溢血（のういっけつ）の発作が平素は非常に強健であった父に起った。

そして家族みんなを深い悲しみに沈めたまま、なんの苦しみもなくこの世の旅を終えたのだ。かれがこのうえもなく熱望していたこと、自分の子供をかれ自身の貧しい成長の過程から守り、生計をともに整えてやろうとしたことは、当時かれには達せられなかったように思う。しかしながら、かれはまったく無意識にも、そのころ父にもわたしにもわかっていなかった将来に対する萌芽を、植えつけていたのだった。

さしあたりは、むしろ外面的には何も変わらなかった。

たしかに母は、父の希望に合わせてわたしの教育を今後も続けること、つまりわたしに官吏としての人生行路を進ませるために勉強させること、を義務と感じていた。わたし自身は以前にもまして、決して官吏の地位にはつかないと決心していた。中等学校が教材と教育の面でわたしの理想からかけ離れるにしたがって、わたしは内心いっそう冷淡になった。そこへとつぜん病気がわたしの助け舟となった。そして数週間にして、わたしの将来について父の家人との長く続いた論争の問題に結末がついた。医者はわたしの重い肺結核のため、わたしを今後事務所のような環境へいれてはならない、との切なる助言を母にしてくれたのだ。実科学校もまた少なくとも一年間休学しなければならなかった[21]。わたしがあれほど長く無言で熱望していたこと、またいつも争ってきたことについては、いまやこのでき事によって一度に、ほとんどひとりでに実現してしまった。

母はわたしの発病を気にして、その後実科学校を退学し、美術学校へ行かせることを、ついに承知した。それはわたしにとってまるで美しい夢のように思える幸福な日々だった。そしてそれは実際また夢にすぎなかった。二年後母の死がこの美しい計画をすべて急激に終りにした[22]。

それははじめからほとんど全治の望みのない、長い、きわめて苦しい病気の結果だった。けれども

わたしには特にそのショックは驚くほどだった。わたしは父を尊敬していたが、母を愛していたのだった。

困窮とつらい現実が、わたしをいまやすぐさま決心するよう強いていた。わずかな父の遺産も母の重い病気のために、大部分消えていた。わたしに与えられる孤児年金は、生きていくだけにも満たなかった。かくてわたしはいまやどこかで自分でパンを得るために働かねばならなかった(23)。

**ヴィーンへの移住**　手には服と下着をいれたトランクを持ち、心には不動の意志をもって、わたしはヴィーンへ行った(24)。五十年前父が果たしたものを、わたしもまた運命からかちとろうと望んだのだった。わたしもまた「なにもの」かになろうとした。もちろん決して官吏になろうとはしなかった。

# 第二章　ヴィーンでの修業と苦難の時代

母が亡くなった時、ある点で運命はすでに決定されていた。

母が病床にあえいでいた時、わたしは美術大学の入学試験を受けるためにヴィーンへ行った。そのときわたしは試験はやすやすと通るだろうと確信して、かさばった大きな絵の包みをもって出発した。実科学校ではずっと以前から、わたしはクラスの中で、ずぬけて絵がうまかった。その後もわたしの能力はたいそうすばらしく発達していたので、自己満足で誇りと幸福感に満ちて、最善のものを期待していた。

ただひとつの不明朗なことが幾度か起った。わたしの画家としての才能よりも、図案家としての才能、とりわけ建築のほとんどあらゆる分野での才能のほうが、まさっているように思えたことである。するとそれと同じくわたしの建築学に対する興味それ自体が次第に増してきた。それはわたしがまだ十六歳になる前に、はじめて二週間ヴィーンへ旅行[1]して以来ますます強くなった。わたしは帝室博物館の絵画室を見にいったのだが、目はほとんど博物館そのものに対してだけ集中していた。毎日、朝早くから夜遅くまで、名所から名所へと走りまわったが、何はさておきわたしをひきつけたのは、いつも建物ばかりだった。こうして何時間もわたしは歌劇場の前に立ち、何時間も議事堂に目を見はっていた。環状道路がすべて千一夜物語の魔法のように、わたしに働きかけた。

　さて、こうしてわたしは、ふたたび美しい都会へきた。そして火のつくようにじれったく、しかしまた入学試験の結果に対する誇らかな自信をもって待っていた。わたしは成功について確信していたので、不合格の通知は青天のへきれきのようであった。けれどもそれは事実だった。わたしは学長に面会し、そして美術大学の一般絵画科の不合格理由を説明してくれるようたのんだ。かれはわたしに、わたしがもってきた絵が画家としての不適性を示していることには異論がないが、しかしわたしの才能がはっきりと建築の分野にあり、わたしには美術大学の絵画科でなく建築科だけが問題となる、と確言した。[2] わたしがそれまで建築学校へ行ったこともなければ、また建築の授業を受けたこともないことを人々は初めはまったく知らなかった。

　わたしは、打ちのめされて、青年時代にはじめて自分自身に不和を感じ、シラー広場にあるハンセン[3]の豪壮な建物を後にした。というのは、わたしの素質について聞いたことが、いままでわたしになぜか、なんのためか、ということについて明瞭な説明が与えられずに、ずっと長い間苦しんでいた内心の葛藤を、まばゆいばかりの電光で、とつぜん暴露してくれたように思えたからである。数日のうちに、わたしもいつか建築家になるのだということを、自分自身で意識した。

　もちろん道はたいそう険しかった。というのは、いままでわたしが反抗心から実科学校でゆるがせにしていたことが、いまやきびしく報いてきたからである。美術大学の建築科へいくためには、技術の建築学校を出ていなければならなかった。さらにそこへ入るためには、その前に中等学校での卒業試験をすませておかねばならなかった。これらすべてがわたしには完全に欠けていた。人間として考えれば、このように芸術家になろうとする夢は、もはやみたされる可能性がなかったのであった。

　さて、わたしが母の死後[4]三度目にヴィーンにきたとき――そして今度は何年間もいたのだが――わ

たしにはその間に歳月がたっていたので、平静と決断力がもどっていた。以前の強情がふたたび出てきた。そして決定的に自分の目標をめざしたのだった。わたしは建築家になろうとした。そこには人々がそれに屈服する抵抗はなく、粉砕すべき抵抗があった。わたしは、かつての貧しい村の靴屋の小せがれから、官吏にまで成り上った父の姿をいつも目にうかべながら、この抵抗を粉砕しようとした。わたしの基盤はそれでなくてさえ父のときよりよかったし、戦いの可能性もずっと容易だった。当時、わたしには運命のきびしさと思われたものを、今日では神の摂理の英知と感謝している。困窮の女神がわたしをだきしめ、しばしばむりやりわたしをくじこうとしたことによって、抵抗の意志が成長し、そしてついに意志が勝利をおさめたのだ。

わたしが強くなったこと、そして強くありうることを、当時に感謝している。それ以上になおありがたいことは、その時代が快適な生活の空虚さからわたしをひきはなし、おかあさんっ子を羽毛布からひきだし、憂愁夫人を新しい母として与えてくれ、反抗心の強いものを悲惨と困窮の世界に投げいれて、かれがずっと後に戦うべきものを知らせてくれたことである。

＊

**悲惨な数年**　このころわたしにはまた、二つの危険に対して目が開かれた。わたしは両方ともそれ以前は名前すら知らなかったし、そのドイツ民族の生存に対する恐ろしい意味も全然理解していなかった。すなわちマルクシズムとユダヤ主義がこれである。

ヴィーン——多くのものには悪意のない歓楽の縮図と考えられ、遊び人には華やかな場所と考えられるこの都市が、わたしには、いかんながら自分の生涯のいちばんあわれな時代を、まざまざと思いださせるだけである。

今日でもなおこの都市は、わたしに悲しい思いを起させるだけである。この奢侈な都市[5]の名声の中で、わたしは五年間の貧困と悲惨の時をすごしたのである。この五年間、わたしはそこでまず補助労働者となり、ついでちゃちな画工になり、パンをかせがねばならなかった[6]。日常の空腹をおさえるためにさえ、決して十分であったことのないほんのわずかのパンを、である。空腹は当時わたしの忠実な用心棒であった。それはいっときもわたしから離れないただひとりであり、すべてにおいて忠実にわたしの分け前にあずかった。わたしが本を買うごとに、その関心が起った。歌劇場へ行けば、数日にわたって空腹がわたしの相手をした。この無情な友との戦いが続いた。けれどもわたしはこの時代に、かつてないほど勉強した。建築学と、食物を節約してたまにオペラへ行くことをのぞけば、書物だけが唯一の友であった[7]。

わたしはそのころ、むやみと多く、しかも徹底的に本を読んだ。わたしの仕事の暇な時間を、休みなく勉強に向けた。それによって数年でわたしは今日もなお養分をひきだしている知識の基礎をつくった。

しかしこれだけではない。

**世界観の形成**　この時代のわたしには、世界像と世界観が形成された。それがわたしの目下の行動の固い基礎になった。かつてわたしがつくりあげたものに、それ以上学ぶべきものはなく、変更すべきものもなかった。

逆であった。

わたしは今日、一般にすべての創造的思想というものは、そのようなものが一般に存在するかぎり、

早くも青年の時代に原則として現われるということを固く信じている。わたしは長い生活経験の結果として、非常な徹底さと用心の中においてだけ通用しうるおとなの英知と、無尽蔵の豊かさで思想と理念をぶちまき、その数が多いためすぐには消化されえない青年の独創性と、を区別する。青年の独創性は、建築材料や未来の計画を供給し、そこからより賢明なおとなが石をとりだし、切り、そして建物を建てるのである。それはいわゆるおとなの英知が、青年の独創性を窒息せしめないかぎりである。

＊

**プチブル的目隠しの除去**　わたしがそのときまで父の家で過ごしてきた生活は、他の人たちみんなの生活とほとんどかあるいはまったく変わるところがなかった。わたしは心配なく新しい日々を期待することができたし、社会問題などは考えてもみなかった。わたしの子供のときの環境は、プチブルの群からなっており、純粋の職人とはほとんど関係のない世界からなっていた。というのは、一見して奇異に思われるかも知れないが、経済的にあまり豊かでない地位にある層と、腕ひとつの労働者との間の割れ目は、考えられているよりしばしば、ずっと深いからだ。この原因は――これをほとんど敵視といってよいが――つい近々、職人の水準から脱したばかりの社会的グループというものは、ふたたびもとの見くだされた地位にもう一度落ちはしないか、少なくともかれらと同じに見られはしないか、というおそれの中にあるのだ。さらにこの下層階級の文化的な貧しさ、おたがいの環境のかさねがさねの粗野さへの記憶が、多くのものに思いだされ、そのとき自分の社会生活における地位が軽いので、この打ちかかってきた文化的、生活的段階と接触することが、耐えがたい重荷となるのである。

に、無心に近づくことがあるものだ。だから上層階級のものが、この「成り上りもの」にはできそうにもみえぬほど、最下層の人間仲間

なにしろ実際に成り上りものというのは、かつて自分の実行力だけで従来の社会的地位から、より高い地位にたたかい上ってきたものなのだからだ。

しかし、しばしば非常にきびしいこの闘争が、ついに同情心を失わせてしまう。自己の苦しい生存競争が、後に残されたものの悲惨さに対する感情をおし殺すのである。

運命はこの点でわたしに慈悲があった。かつて父が、かれの生涯において、すでに抜けだしてきた貧困と不安の世界にふたたびもどし、運命はわたしに限られたプチブル教育の目隠しを取りのぞいてくれたのである。いまやわたしは人間をはじめて知り、空虚な外見や粗野な外観と、内部の本質との間の区別を学んだのだ。

**ヴィーンの社会的対立**　ヴィーンは世紀が変わってから、社会的に不健全な都市に属していた。輝かしい富といとうべき貧困とが、たがいにきわだって交錯していた。中心部や内部の区域では、多民族国家の危険な魅力をすべてそなえた五千二百万の国家の脈搏(みゃくはく)が、正確に感じられた。目くるめくばかりの華美さをもった宮廷は、磁石のように他国の富と知性に働きかけていた。そのうえになおハープスブルク王国の強度の中央実権化が行なわれていた。

その中で、この民族のごった煮を確固とした形で維持していくためには、一つの可能性だけが示されていた。しかしその結果は、高級、最高級の官庁を、首都でありお膝元である都市に極度に集中することであった。

けれどもヴィーンはただ政治的、精神的に古いドーナウ王国の中心であったばかりでなく経済的にも中心であった。高級士官、官吏、芸術家や学者の軍勢に対し、もっと大きな労働者の軍勢が対立しており、貴族主義と商業の富に、血のにじむような貧困が対立していた。環状道路の宮殿の前には、幾千もの失業者がぶらぶらしており、旧オーストリアの凱旋道路の下には運河の薄明と泥濘の中に、浮浪者が住みついていた。

社会問題を研究するのにヴィーンほどよい都市は、ドイツでは他になかっただろう。しかしだまされてはいけない。この「研究」は上から下を見たのではできない。息の根を止められそうなまむしの羽交いじめをみずから経験したことのないものは、その毒牙に決して通暁することができない。そうでない場合は、皮相的な雑談かあやまった感傷性以上のなにものもでてこない。両方とも害がある。一つは問題の核心にまで透徹できないからであり、他はその上を通りすぎるからである。多数の幸運に恵まれているものや、あるいはまた自分のかせぎで成り上ったものたちの大部分に毎日見られるような、あるいは高慢で往々にして出しゃばりで気がきかず、しかもいつもたしかに「民情に通じようとしている」スカートやズボンをはいた流行マダムの慈悲深い腰の低さのような、社会的困窮への無関心ほどひどいものをわたしは知らない。とにかくこれらの人間は、かれらの直観の欠けた理解力では一般につかみえないほど、はるかに罪深いのである。だからかれらによって実行された社会的「心がけ」の結果が、いつもなんにもならなかったり、場合によってはしかもひどい拒否――もちろんこれは民衆の恩知らずの証拠とされるのだが――にあったりして、びっくりするのだ。

社会的活動はそれとはまったくなんの関わりもなく、なかんずく恩に着せる権利などは決してあってはならないのであり、社会的活動というものは慈悲を分け与えるものでなく、権利を回復してやる

べきものであるということを、そういう種類の人々は認めようとしないのだ。

わたしはこんな態度で、社会問題を学ぶことからまぬがれた。社会問題はわたしを苦しい生活にひきこんだが、それはわたしを「学習」に招待するためでなく、むしろわたし自身を試そうとしたように思われた。それにもかかわらず家兎が手術をもちこたえて快癒し、健康になったのは、手術の功績ではなかったのだ。

＊

わたしはそのころ感じた一連のことを、いま再現しようと思うが、それは決して完全に近いものにはなりえない。ただ最も本質的な、そしてわたしにとっては、しばしばショッキングな印象を、この時代に早くも身につけた多少の教訓とともに記そうとするのである。

＊

**補助労働者**　当時、仕事をみつけることは、わたしにはたいして困難ではなかった。というのはわたしは熟練工でなく、ただのいわゆる補助労働者であり、ときには臨時雇として、日々のパンをつくり出そうとしなければならなかったからだ。

そのさいわたしは、足からヨーロッパのちりを払い、仮借ない志をもって新世界に新しい生存の基礎をつくり、新しい故郷を獲得しようとする連中と同じ立場にいた。かれらは、職業とか地位とかいういままでの活動力を奪うすべての観念や、環境とか伝統とかを離れて、目の前にさしだされるすべての利益をつかみ、あらゆる仕事をやり、こうして次第に堅気な仕事であればどんな種類の仕事であろうともまったく同じように、決して恥ではない、という考えにつき進んでいったのだ。わたしもまたそのように、わたしにとっての新世界に両足で飛び込み、切り抜けようと決心した。

**パン仕事の不確実さ**　なにかしら仕事はいつもあるものだということを、わたしはまもなく知った。[8] けれども同じようにまたそれが、急速に簡単になくなるものだ、ということも知った。

日々のパン仕事の不確実さがわたしには、やがて新生活の最も困難な暗黒面の一つだと思えた。「熟練」労働者は、未熟練労働者の場合のようには、そんなにたびたび首を切られない。しかしかれもまた、このような運命から全然害を受けないこともない。かれには仕事がなくてパンをかせげないというかわりに、工場閉鎖か、自分たちのストライキがあるのだ。

ここでは日々のもうけの不確実さが、経済全体にこの上もなく報いてくるのはたしかだ。

自分勝手に想像したり、あるいはまた実際にあったりするのだが、もっとたやすい労働と、もっと短い労働時間にひかれて大都市に出てくる若い農民、しかしたいていは大都市が現に放射しているまぶしい光にさそわれて出てくる若い農民は、まだある程度の確実なかせぎに慣れている。かれは新しいポストが少なくとも見込みがないならば、古いポストを捨てようとしない。けっきょく農村の労働力不足は大きく、長期にわたる失業の確率というものは、もともと非常に少ない。ところが、大都市に行く若者が、はじめからずっと篤実に農地で生計を立てているものよりも素質が悪いのだ、と信ずることは誤りである。いや反対だ。経験したところによると、故郷を離れた分子がむしろ逆に最も健全で、最も実行力に富んだ素質をもっていることを示している。だが、こうした「移住者」の中には、ただアメリカ移民だけが数えられるのではなくて、未知の大都市へ行くため故郷の村を捨てようと決意した若い作男もそうである。かれもまた不安な運命に身をまかせる覚悟ができているのである。たいていかれは、いくらかの金をもって大都市にくるから、不幸にしてそうとう長い間仕事がみつから

なくても、たしかにはじめのうちは絶望する必要はない。しかし健全な働き場所を短期間で失うと、困ったことになる。新しい仕事をみつけることは、特に冬は、不可能ではないまでもたいへん困難である。はじめの数週はなんとかなる。かれは労働組合金庫から失業手当をもらい、できるかぎり切り抜ける。だが最後の一銭一厘を使いはたし、金庫も失業が長期にわたるため手当を停止したとき、大きな困窮がやってくる。そうなるとかれは、空腹をかかえてうろつきまわり、しばしば最後のものまでも質におき、売り払い、着のみ着のままでだんだんと零落し、そして肉体的不幸に加うるに精神的にも毒された環境の中に、外見的にも沈んでしまうのだ。そのうえさらに宿もなく、そしてこれが冬であったときは（こういう場合がしばしば普通なのだが）たしかに悩みはさらにたいへん大きくなる。ついにかれは再度なにか仕事をみつける。だが同じことが再演される。二度目はそれが同じようなものでも、三度目はもっとつらいかも知れない。こうしてかれは次第に、いつまでも続く不安定さを平気で耐えるようになる。ついにはこの反復が習慣になるのだ。

**労働者の運命**　このようにして、普通なら勤勉な人間も、その人生観全体にゆるみが出てきて、次第にわずかな利益のために、他人を利用する道具になっていくのである。かれは何度も自分の過失もないのに失職してしまう。これはもはや経済的な権利の闘争でなく、国家的、社会的あるいは一般の文化的価値の破壊の問題ですらあるのだが、そこで、いつかは多かれ少なかれどうでもよくなってしまう。かれはストライキ好きでないまでも、もはやストライキ熱がなくどうにでもなれとなってしまうのだ。

この経過を幾千となくわたしは、目を見開いて追うことができた。この動きを長く見ていればいる

ほど、わたしは人々を残酷にもすりつぶしてしまうために、貪欲にひきつけるこの大都市に対して、いっそういや気がさした。

かれらが出てきたときは、依然として国民に数えられていた。しかしかれらがとどまっておれば、かれらは国民ではなくなっていくのだ。

わたしもまた生活のために、この世界的都市のいたるところで投げつけられ、運命の力を自分のからだで試し、精神的にも味わいつくした。さらにもう一つ感じたことがある。就職から失職、失職から就職と急速にかわり、このようにして収入と無収入の間の制約された動揺が、長くいつまでも続くにつれて、多くのものは倹約の感覚とりこうな生活配分に対する理解力を、破壊してしまうということである。肉体は、見たところでは景気のいいときにはせいいっぱいの生活をし、不景気のときには空腹をかかえている、ということに徐々になれてしまう。そればかりでなく、かせぎのいいときはその後の理性的配分を考えるが、空腹はこの配分に対するすべての注意をくつがえしてしまうのである。同時に空腹は、苦しんでいるものたちに、あくほどの裕福な生活の像を長い蜃気楼の中で、手品のように見せ、そして利益と賃銀がこれを少しでも許すかぎり、こういう病的な欲望を自分でおさえきれないほど、それを熱望する夢を高進させるのだ。かろうじてある職を得たものが、すぐさま理性を失い、すべての計画を忘れ、そのかわりに出たとこ勝負で毎日をすごす理由がここにある。これはささやかな週給生活の解消にさえ導く。というのはしかもそこでりこうな金の使い道を忘れてしまうからだ。はじめは七日間はむりとしても五日間はたりる。その後は三日間だけ、ついにはかろうじて一日だけになってしまい、けっきょくは最初の夜に使いはたしてしまうのである。

さらに往々にして家には妻子がいる。多くの場合かれらもまたこの生活に染まってしまう。もとも

と男が妻子によい場合、とにかくかれのやり方でしかもかれらを愛している場合は、とりわけそうである。その場合には、週給は二、三日で家庭でいっしょに使いはたされてしまう。金の続くかぎり飲み食いが続き、そしてあとの数日はやはりいっしょに空腹をかかえてすごすのである。そこで妻君は隣近所をこっそりとわずかばかり借り歩き、小売店にも少額の借金ができる。そのようにしてよくない週末の二、三日をもちこたえるのだ。お昼にはかれらはみんな貧しい食卓につく。ときには何もないことがある。そして給料日を待ち、給料日のことについて話し合い、計画を立てる。このようにかれらは空腹の間、ふたたび来るべき幸福について夢みているのである。

このようにして小さい子供たちも、ごく幼いときにこの困窮になれきってしまう。

しかし男がはじめから自分勝手なやり方で進み、妻が子供たちのためにまったく反対のいき方をすると、悪い結果になる。争いと不和がおこり、男が妻によそよそしくなるにしたがって、かれはアルコールに近づいていく。かれは土曜日ごとに酔っぱらい、妻は自分と子供の「自己保存衝動」で、わずかの金のためにつかみあいをする。しかもそれはたいてい、工場から怪しげな酒場への途中で奪いとらねばならないのだ。ようやく日曜日の晩か月曜日の晩方、酔っぱらい荒れ狂って、しかも最後の一銭一厘までも使いはたして家へもどってくる。そこで往々にして、神よあわれみたまえ、という場面が演じられるのだ。

はじめは嫌悪を感じたり、よく憤慨したりもしたが、その後この苦しい悲劇のすべてを把握し、もっと深い原因を理解しようとして、何百という例で、わたしはこれらのすべてをいっしょに体験してきた。これらは悪い社会状態の不幸な犠牲なのだ。

当時の住宅事情は、もっと陰鬱（いんうつ）だった。ヴィーンの補助労働者の住宅のみじめさは、途方もないも

のであった。悲惨きわまる住家、独身者合宿所と大衆下等合宿所[9]、ちりと嘔吐をもよおさせる汚物や、不快なものを考えたとき、今でもなお身ぶるいするほどである。

これらの悲惨な洞穴から解放された奴隷たちの流れが、他の無遠慮な社会や人間仲間[10]のところへ流れこむならば、どんなことにならねばならなかっただろう。また今後どんなことにならねばならないのだろう。

実際、このただならぬ社会[11]は無思慮である。

このただならぬ社会は軽率に物事をなげやりにしているのである。かれらは感受性がにぶいので、もしも人々が今のうちに運命と和解しないならば、早晩仕返しの運命が近寄るにちがいないということを予期していないのである。

わたしは今日、わたしをこの学校へ行くように命じた摂理に、どんなに感謝していることか。そこでは気にいらないことでも怠けることができなかった。この学校はわたしを急速に、そして徹底的に教育したのだ。

そのころわたしが、周囲の人々に絶望しないようにしようとするならば、わたしは、かれらの外面的なしきたりや生活とかれらが堕落していく原因との間の区別を、学ばねばならなかった。絶望せずにこれらのすべてを耐えていくのは、これだけであった[12]。その場合にすべての不幸と悲惨の中から、汚物と外面的堕落の中から、もはや人間ではなく、悲しむべき法則の悲しむべき結果が生じてくる。そのさいに、自分の決して容易でない生存競争の苦難が、悲惨な感傷性におちいって、この進行過程の堕落した産物に敗れることからわたしを守ったのである。

いや、これはそのように理解されてはならない。

**改善への道**　そのころすでにわたしは、この状態を改善するために、ここには二つの道しかないことを認めていた。すなわち、

**われわれの発展のよりよい基礎をつくる最も深い社会的責任感と、これに対応して、改善しがたい怪物をくじく断固たる決心、**がこれである。

自然が最大の注意を集中するのは、現状の維持にでなく、種の担い手としての若人の規律にである。同様に人間生活においてもまた、現存している悪を人工的に教化するよりも——これは人間の素質からして九十九パーセント不可能なのだが——むしろ将来の発展により健全な道を、はじめから確保することが肝要である。

**社会的活動の本質**　ヴィーンでの生存闘争の間に早くも、わたしには次のことがはっきりした。すなわち、

**社会的活動は、決して笑うべき無意味な福祉を夢みることに、その課題を認めるべきではない。むしろ各人を堕落に導いたり、あるいは少なくとも誤り導くような、われわれの経済生活や文化生活のしくみの中にあるそのような根本的欠陥を除去することに、その課題を認めねばならない、**ということがそれである。

国賊的犯罪に対して決定的な、仮借ないやり方でもってたちむかう困難さというものは、とにかく少なくとも、こうした時代現象の内面的な動機や原因に関する判断が確固としていないことにある。

この不確かさは、ただ自己がこういう堕落の悲劇に対して責任があると感じていることに、その根

拠がある。しかしそれは、真剣なしっかりした決意をマヒさせ、そのため自己保持にいちばん必要な処置をとることすら動揺し、弱く、中途半端であるがため、そのようにしてしまうのだ。
　自分の責任であるという意識の陰影につきまとわれなくなったときにはじめて、内心の落ちつきとともに、野草の芽を残酷に、断固として刈りとり、雑草を引き抜く外面的な力をもつようになるのだ。
　オーストリア国家は、社会的な司法や立法一般を、まったく知らなかったし、悪しき弊害を制圧することにおいてさえ、非常にはっきりと弱点を露呈したのである。

＊

**「国民的誇り」の欠如**　実際この時代ほど多くのものが、自分を驚かせたことをわたしは知らない。すなわち、そのころのわたしの仲間の経済的なみじめさ、風紀上、道徳上の下品さ、あるいはその精神的文化の低劣さ。
　わがブルジョアジーが、みじめな浮浪者の口から、ドイツ人であろうがなかろうが同じことであり、ただ必要な収入さえあればどこでも同じように満足だ、ということを聞いて、何度道徳的憤激を感じたことだろう。
　その場合この「国民的誇り」が欠けていることが、極端に嘆かれたのであり、このような考えに対して強い嫌悪の声が投げかけられたものである。
　しかし、それでなくてさえかれらの中で本来、自分自身によりよい考え方をさせている原因が何であるか、と問うてみたものがどれほどたくさんいるだろうか。
　文化的、芸術的生活のすべての領域における祖国や国民の偉大さを、個々無数に思い出すことが、総合的な結果としてかくも恵まれた民族の一員であるという当然の誇りをかれらにもたせているのだ

が、それをどれだけ多くのものが理解しているだろうか。祖国への誇りが、これらすべての領域での祖国の偉大さを知ることにかかっている、と少しでも感じているものが、どれほどいるだろうか。

ところが祖国への誇りのためのこの前提となるものが、「民衆」に伝えられている程度がどんなに少ないかということについて、わがブルジョア階級は、考えているのだろうか。「他の国でもやはり事情は同じだ」しかしそこの労働者は「やはり」自分の国民性に立脚しているのだ、と人々はいいのがれることはできない。よしんばそうだとしても、そういうことが自分の怠慢の口実にはなりえない。だが事実はそうではない。というのは、たとえばわれわれがいつもフランス民族の「偏狭な愛国主義」教育と称しているものが、やはり文化の、フランス人のことばでいえば「文明」の全分野におけるフランスの偉大さを、極度に引き立てている以外の何ものでもないからだ。若いフランス人は、かれの祖国の政治的あるいは文化的偉大さの意義を問題とするかぎり、決して客観性をもつようには教育されず、かえって人々が考えうるかぎりの主観的観点に立つよう、教育されるのである。

そのさいこの教育は、つねに一般的な、きわめて大きな観点に制限されるべきであり、それは必要ならば、永遠に反復して、民族の記憶と感覚にきざみこまるべきである。

ところがしかし、われわれの場合には、消極的な怠慢の罪以上に、学校でならうという個々人がもっているわずかの幸福をも、積極的に破壊してしまうのである。わが民族を政治的に毒そうというねずみは、大衆の心を思い出の中に、これらのまだわずかに残っているものをも、あらかじめ困窮と悲惨がそれを包んでしまっていないかぎり、むさぼり食ってしまうのだ。

けれども、一度次のようなことを思いうかべてほしい。

**労働者の子供の苦難の道**　うっとうしい二部屋からなるある地下の住居に、労働者の七人家族が住んでいるとする。五人の子供の中には男の子が一人いる。いま三歳としておこう。このころは、最初の印象が子供の意識にのぼってくるころだ。頭のよい子なら年をとっても、このころの思い出が残っているものである。場所の狭さと過密が、お互いの関係をまずくしている。こうして往々にして争いと不和が起る。人々はいっしょに生活しているのではなく、むしろ押しあって生活しているのだ。広い住居にいるなら、ちょっと離れていることによって、とっくに仲なおりすることができるごく小さい対立も、ここでは果てしない、いやな争いにまで導くのだ。子供の場合はもちろん、これは我慢できる。かれらはこういう状態ではいつもけんかをするが、互いにすぐにけろりと忘れてしまう。しかしこの争いが両親の間で行なわれ、それもほとんど毎日、内心の下品さを実際に遺憾なくさらけだすと、こういう直観教育の結果は、徐々にではあるがついには子供たちにも及ばないわけにはいかない。このお互いの不和が、父の母に対する乱暴な暴行の形をとり、泥酔の虐待となってあらわれるときには、それはどうなるか。こういう境遇を知らないものには、想像することさえできないのである。六歳になれば、この小さなあわれむべき子供にも、おとなでさえ恐ろしいと感ずる事態がわかってくる。道徳的に毒され、身体的には栄養不良で、かわいそうに小さい頭はしらみだらけで、この幼い「公民」は、民衆学校[13]へ入るのである。かろうじて読み書きだけおぼえるが、ほとんどそれで全部だ。家庭で勉強は話題にさえならない。反対である。それればかりでなく、父母はいうに耐えぬやり方で、教師と学校について、それも子供たちに向かって悪口をいう。そしてかれらの小さい子孫をひざまず

かせ、道理をわきまえさせるよりも、無作法な言をはくことのほうがはるかに多いのだ。この小さな男が、そのほかに家で聞くことはすべてまた、当代の人々の尊敬を強めることにはならない。ここでは人類に関するよいことはなにもかも放置され、制度は攻撃されないことがなく、教師をはじめとして国家の元首にいたるまで攻撃される。宗教についてだろうが、道徳についてだろうが、国家や社会についてだろうが、なにもかもみんな対象にする。すべてを誹謗し、淫猥な方法できわめて下品な考え方の泥中に引きこむ。この若年者が十四歳で学校を卒業すると、実際の知識や技能に関するかぎり信ずることができない愚行と、この年ごろとしては身の毛もよだつような不道徳と結びついているその態度のむなくその悪いあつかましさと、どちらがはなはだしいのか、もはや決めることができなくなっている。

このころから早くも神聖なものは何もなくなり、同じように偉大なものは何も知らず、かえって低劣な生活についてはするどく感じ、よく知っているこの人間は、これから歩んでいこうとする生活の中で、どのような地位につきうるのだろうか。

**若い権威軽蔑者**　三歳の子供から、すべての権威を軽蔑する十五歳ができあがる。この若者は淫猥とけがらわしいもののほかには、何かより高い感激の刺激となるものはなにも知らないのだ。かれはいまや、この生活という高等な学校へ行く。

今度は、かれが子供のときに父親から摂取したと同じ生活がはじまる。かれはほっつき歩き、いつ家へ帰ったのか神でさえもご存じない。そのうえ気分転換のために、かつては母であったくずれかかった存在をなぐりつける。神と世の中をのろい、そしてついになにか特別な原因から罪の判決を受け、

少年鑑別所へぶちこまれる。

そこで最後のみがきがかけられる。

だが愛すべき当代の市民たちは、この若い「公民」に「国民的情熱」が欠けていることに、まったくあきれる。

かれらは演劇や映画や、また三文文学やエロ新聞で、毎日毎日、おけから水を流すように民衆の中に毒がそそぎこまれるのを見るのだ。そしてそれについて、この民衆の大群の「道徳的内容」の少ないことや「国民的無関心さ」に驚いている。あたかもインチキ映画やエロ新聞やその類似物が、祖国の偉大さを認識させる基礎を与えているかのように、である。個々の人間がそれ以前に受けた教育については、まったく度外視している。

わたしは以前にはまったく予期しなかったものを、当時急速に学び、徹底的に理解した。

「国民化」の予備条件　ある民族を「国民化」する問題は、まず第一に、各人に教育を与えうる基礎として、健全な社会状態をつくるということである。というのは、教育と学校によって自分の祖国の文化的、経済的な、なかんずく政治的な偉大さを十分知るものでなければ、かかる民族の一員であり、またありうるという内心の誇りを獲得することができないし、また獲得しないであろうからだ。そしてわたしは、わたしが愛するもののためにだけ戦う。わたしは尊敬するものだけを愛し、少なくとも知っているものだけを尊敬するのである。

＊

図工兼水彩画家　社会問題に対する関心がめざめてまもなく、わたしはこの問題を根本にさかの

ぼって研究しはじめた。それはわたしに開かれた、今まで知らなかった新しい世界であった。

一九〇九年から一九一〇年にかけて、わたしはもはや補助労働者として毎日のパンをかせぐ必要がなくなっていて、そのかぎりでわたし自身の状態もいくらか変化していた。当時すでにわたしは、ちっぽけな図工兼水彩画家として一本立ちで生活していた[14]。これはもうけの点ではひどかったが——実際にそれはかろうじて生活に足りた——しかしわたしの選んだ職業としてはよかった。いまではわたしは、前のように夕方仕事場から帰ってくると、死んだように疲れはて、本を読むとすぐ居眠りをするというほどではなかった。わたしのいまの仕事は、もちろん将来の職業と並行をたどっていた。またわたしはいまでは自分の時間を自己のものとして、以前なしえたよりもずっとうまく配分することができた。

わたしはパンを得るために描き、喜びのために学んだ。

そのようにして、社会問題についての直観教育に必要な理論的補足を、獲得することができるようになった。こうして、これらすべての分野について本の中で得ることのできるすべてのものをかなり研究し、その上にわたし自身の考えを深めた。

そのころ周囲のものは、わたしを多分変人と考えていたと思う。

同時にわたしが、燃えるような熱意で建築学への自分の愛情を捧げていたことは、もちろんであった。建築学は音楽とならんで、芸術の女王のように思えた。こういう状態であったから、いまの仕事は「仕事」ではなく、最高の幸福だった。わたしは夜遅くまで読んだり描いたりすることができ、決してあきなかった。こうしてわたしの美しい未来の夢が、長年月かかるかも知れないが、実現されるだろうという信念を強めたのだった。わたしは建築家として、将来いつか名をなすと確信したのだっ

た。

それと並んで政治に関係しているすべてのものにも、この上ない興味をもったが、わたしにはたいして重要でないように思えた。反対にこれはわたしの目から見れば、一般に理性のあるすべての人間の自明の義務であった。政治に対してなんの理解力をももっていないものは、すべての批評権も、苦情をいう権利も失っていたのだった。

これについてもまた、わたしは多く読み、そして学んだ[15]。

**読書法**　もちろんわたしは「読むこと」を、いわゆる「インテリゲンツィア」の大部分のものとは、おそらくいくらか違ったものとして理解しているのである。

際限もなく多く「読む」人、一冊一冊、一字一字読む人々を、わたしは知っている。けれどもわたしはかれらを「博識」ということはできない。かれらはもちろん多量の「知識」をもっている。だがかれらの頭脳は、自分にとり入れたこの材料を分類したり、整理したりすることを知らない。かれらには、本の中から自分にとって価値あるものと価値なきものを選別する技術が欠け、さらにあるものはいつも頭の中に保持し、あるものはできるなら無視するというように、どんな場合にも無用なやっかい物を引きずっていくことをしないという技術が、欠けている。その上、読書というものは、それ自身目的ではなく、目的のための手段である。第一に読書は、各人の素質、能力を引き出し、骨組みを充実させるために助力すべきものである。だから読書は、各人が自己の職業に――これが原始的なパンかせぎであろうと、あるいは比較的高級な使命を満足するためであろうとまったく同じなのだが――必要な道具や資材を供給すべきである。しかし第二に、読書は一般的な世界像を媒介すべきもの

である。だがいずれの場合にも読書は、その時々に読んだ内容が、本の記述の順序や、あまつさえ読んだ本の順序に従って記憶にとどめられるのでなく、モザイク様の石のように、一般的世界像の中でそれらに与えらるべき地位に場所を占め、そして読者の頭の中にこの像を形成する助けとなることが必要である。そうでない場合には、覚えこんだがらくたから錯綜した混乱が生ずる。それは無価値であるだけでなく、他方においてその不幸な持ち主をうぬぼれさせる。というのは、かれは実際に大まじめに「教養がある」と信じ、人生に関して何か理解しており、知識をもっていると信じているからである。であるのに、かれはこの種の「教養」が新たに増すにつれ、世の中の実際にますます遠ざかり、サナトリウムでか、あるいは「政治家」として議会で生涯を終えるにいたるのがまれでないのである。

そうした頭をもっているものは、決してかれの混乱した「知識」の中から、時代の要求に適合したものを引き出すことができない。というのはかれの精神的重荷は、生活の線にそって整理されておらず、かれが読んだ書物の順序にそって、またその内容がかれの頭の中に入ってきた順序にしたがって、場所を占めているからである。もしも運命がかれの毎日の生活の要求にしたがって、かれにいつもかつて読んだものを正しく適用するよう警告するならば、運命はもう一度本とページ数とを述べなければならない。そうでない場合は、このあわれなやつは、永久に正しいものを見いだすことができないからである。しかし運命はそうしないから、この九倍もりこうなやつは、危機的なときにはいつも極度にあわて、けいれんを起さんばかりに同じ場所をさがし、そしてもちろん非常に確実にまちがった「処方箋」をつかむのである。

もしそうでないなら、人々は病理学的素質のかわりに、やくざのような卑劣さをもっているのだ、

と信ずる以外に、最高の地位にいるわが教養豊かな政府の英雄の政治的行為を理解することができないのである。

しかし、正しい読書技術をもっているものは、どんな本、どんな雑誌やパンフレットを読んでも、有用であるかあるいは一般に知っておく価値があるという理由で、長く記憶すべきだと考えるすべてのものにただちに注意するだろう。こうした方法で得られたものが、あれこれの問題について、すでにどうにか頭の中にある観念像の中で意味ある場所を見いだすやいなや、それが誤りを正したり、その像の正確さや明瞭さを高めてくれるのである。いま人生に、突然なんらかの検討や解決を要する問題があるとするならば、こういう方法で書物を読んでいるなら、ただちに既存の観念像の規準をとらえ、そこからこの問題に関係している過去十年間に集められた個々に役立つものをすべて引き出し、問題を解明したり、解決したりするまで検討したり、新しい検分をしたりするために、知性を提供するのである。

読書は、その時にのみ意義と目的をもつのである。

たとえば、そうした方法で必要な手がかりをかれの知性に提供しない演説者は、その見解がいかに正しく、また現実にかなっていても、抗弁のさいにむりやりに自分の見解を弁護しうるほどの立場には決して立ちえないのである。すべての討論のさいに、記憶が侮蔑的にかれを見すてる。かれは、自分自身で主張していることを証明する根拠も、反対者を反駁する根拠も見いだせないのだ。それも演説者の場合のように、なにはさておきただかれ個人の恥をさらすのであるかぎりは、まだ我慢しうる。だが、運命がそのように博識家ではあるが無能力者を国家の指導者に任命したならば、さらに悪くなる。

わたしは若いときからずっと、正しく読むことに努力してきた。それと同時にさいわいにも記憶力や理解力がよかった。そしてその意味ではヴィーン時代はわたしにとって、得るところも多く、価値のある時代であった。日々の生活経験は、いろいろの問題をつねに新しく研究しようとする刺激になった。ついには現実を理論的に基礎づけ、理論を実際で試そうという姿勢をとったため、わたしは、理論の中で窒息してしまったり、現実の中で浅薄化されたりすることからまぬがれたのである。

このようにして、この時代に、社会問題以外に二つの最も重要な問題について、日常生活の経験から、その最も徹底的、理論的な研究に対して、心を決め、刺激されたのである。

そのころ、もしもこの問題にまったく没頭しなかったならば、わたしはマルクシズムの教説と本質に一度も沈潜するときがなかったであろう。

＊

**社会民主党**　わたしが青年時代に社会民主党について知っていたことは、はなはだ少なく、また非常に正しくなかった。社会民主党が無記名普通選挙権のために戦ってきたことを、内心で喜んでいた。当時わたしの理解したところでは、これこそわたしが非常に憎んでいたハープスブルク統治を弱体化に導くものにちがいなかったからである。ドーナウ国家は、ドイツ人を犠牲にしなければ決して維持しえないだろうし、さらにドイツ分子を徐々にスラブ化するという代償すら——スラブ人の国家維持力はこの上もなく疑問に思われねばならないから——その上実際にも生命力のある国家を保証することを決して意味しない、という確信をもっていた。そこでわたしは、このとうてい国家たりえず、一千万人ものドイツ人に死刑の判決をくだすようなことをしている国家を、崩壊に導くにちがいないと確信しているすべての方向を歓迎していたのである。言語的混沌（こんとん）が議会を腐蝕（ふしょく）し分裂させればさせ

るほど、このバビロンのような国家の滅亡の時期が近づき、それとともにしかし、わがドイツ系オーストリア民族の解放の時期も近づくに違いなかった。そうすることによってのみ、いつか古い母国への再合併をなしえたのだ。

だからわたしには、このような社会民主党の活動は、気に入らぬものではなかった。この運動はけっきょく、労働者の生活条件の向上をめざしており——当時のわたしの無邪気な心情はまだこれを信ずるほどバカであった——やはりこれは労働者にとって不利でなく、むしろ有利であるように思えた。わたしが最も反発したのは、ドイツ主義維持の闘争に対してかれらが敵意ある態度をとっていることと、スラブの「同胞」の好意を求めるあわれむべき情事とであった。スラブ人たちはこの求愛を、それが実際的な譲歩と結びついているかぎり、たしかに受け入れるが、そうでない場合は思いあがって、高慢ちきに引きこもり、こうしてうるさいこじきにふさわしい金しかやらないのである。

十七歳のころ、「社会民主主義」と社会主義とはわたしには同一の概念に思えたのだが、「マルクシズム」ということばもほとんど知らなかった。ここでも第一に、この未曽有の民衆欺瞞（ぎまん）について、わたしの目を開かせるためには、運命のこぶしが必要だった。

そのころまでわたしは、社会民主党をただ二、三の大衆デモのさいに傍観者として知っていただけで、その支持者のメンタリティとか、教説の本質とかについては、いささかも見識がなかった。そこで突然、社会民主党の教育とその「世界観」をつくりだすものとに、接触するようになった。その上おそらく二、三十年後に現われてくるだろうものを、いまや二、三か月の間に受けとったのである。すなわち、社会道徳とか、隣人愛とかの仮面のもとにさまよっているペストであり、人類はこれをできるだけ早く地上から追放すべきであり、さもなければ人類が地上から追いはらわれてしまうだろう

という理解が、それである。

### 社会民主党員との最初の出合い

それははじめから非常に不愉快だった。わたしは建築場ではじめて社会民主党員と出合った。ことばはきちんとしており、人間もひかえ目だった。わたしの衣服はまだ多少ととのっており、ことばはきちんとしていないほど、自分の運命と戦わねばならなかった。わたしは周囲のことにあまりわずらわされることができないほど、自分の運命と戦わねばならなかった。飢えないために、それとともにたとえ少しずつでも教養を広げることができるように、仕事ばかり探していた。早くも二、三日で、わたしにただちに態度決定をしなければならないでき事が起らなかったならば、おそらく新しい環境に全然関心をもたなかったであろう。わたしは組織に加入することをすすめられたのだ。

労働組合組織についてのわたしの知識は、そのころまだほとんどゼロであった。わたしはこの存在が目的にかなっているか、かなっていないかも、証明することができなかった。そこで加入しなければならないといわれたとき、わたしは拒否した。わたしはこの理由をよくわからないからとか、とにかく強制されることがきらいだからとか述べた。人々がわたしをすぐに追いださなかったのは、たぶん第一の理由であった。かれらはおそらく二、三日のうちに転向させるか、いいなりにさせることができると思ったらしい。いずれにしてもかれらはその点で根本的に誤っていた。しかし二週間後には、もし加入を望んだとしても、もはやどうすることもできなかった。この二週間のうちにわたしは、この世のどんな権力であろうと組織に加入するようには動かしえないほど詳細に周囲を知った。その間に、組合員たちがわたしにそれほどまでに悪印象を与えたのだ。

最初の数日間、わたしはシャクにさわった。

昼間は一部のものは近所の飲食店へ行く。その間に他のものは仕事場に残り、たいていそこで非常に貧しい昼食をとるのだ。かれらは結婚しており、その女はみすぼらしい食器に昼食のスープをもってくる。週末になるとその数がだんだんと多くなる。わたしはその後はじめて理由がわかった。さてそこで政論がたたかわされる。

わたしは一びんのミルクを飲み、どこか隅の方でパンをたべ、注意深く新しい仲間を研究したり、あるいは自分の悲惨な運命について追想したりした。けれどもわたしは十二分に聞いていた。またわたしにおそらく態度を決定させようとするのか、しばしば、わたしには故意に近寄ってくるかのように思えた。どんな場合にもわたしが聞いたことは、わたしにとっては極端に刺激的だった。かれらはそこではすべてのものを否定した。すなわち、国民は「資本家階級」――このことばをどんなにしばしば聞かねばならなかったことか――の仮構であり、祖国はブルジョアジーが労働者階級を搾取するための道具であり、法律の権威はプロレタリアを弾圧する手段であり、学校はしかもまた奴隷要員と奴隷所有者を飼育するための施設であり、宗教は搾取されるために運命づけられた民衆をひどい精神遅滞者にする手段であり、道徳はおろかな羊どもの従順さの象徴である等。だがそこでは、恐るべき泥の深みに引きこまれないものは、一人もないのだ。

**はじめてのテロ**　最初わたしは沈黙していようとした。だがついにそれ以上黙っておれなかった。わたしは立場を明らかにしはじめ、反論しはじめた。少なくともいま争われている点について一定の知識をもっていないかぎり、これがまったく見込みがないということを、わたしはもちろん認識せねばならなかった。そこでわたしは、かれらの自己流の知識を引きだしてくる源泉を追求しはじめた。

本やパンフレットを次から次へ読んでいった[16]。

その後建築場ではしばしば激論がたたかわされた。わたしが一日一日とかれらの知識について、相手方よりもよく知った上で争ったので、ある日のことかれらは理性をいちばん簡単に征服する例の手段を用いるにいたった。暴力とテロだ。反対者側の主だったもの数人が、わたしにすぐに建築場をたち去るか、足場から落されるか、どちらがいいかとつめよってきた。わたしは一人だったから、抵抗はムダだと考えた。経験が豊富になったのだから、第一の忠告に従うほうを選んだ。

わたしはむなくそが悪くなってたち去った。だが同時にこの事件にまったくそっぽを向くことができないだろうと思った。いや、最初のいきどおりが爆発したあとで、強情がふたたび優勢になってきた。そこでもう一度建築場へ行こう、とかたく決心した。この決意は困窮によっていっそう強くなった。二、三週間後、わずかな貯金を使いはたしたあとで、困窮の無情な腕にとじこめられたのだ。いまやいやが応でもそうせねばならなかった。そしてまた、最初からふたたび同じことが演じられ、最初と同じように終った。

そのころわたしは、わたしの内心と格闘していた。これでもなお、かれらは偉大な民族の一員たるに値する人間なのだろうか?!

苦悩にみちた問題である。というのは、もしもその答えが是ならば、民族をめぐる闘争は実際に努力や犠牲にもはや値しない。それは最善のものをそのような人間のくずにやることになる。だが答えが否ならば、その時にはわが民族がすでに人間において貧しいことである。

くよくよ考えたり、追求したりで日をすごして、わたしは不安な重圧を覚えながら、もはやその民族に数えられない大衆が、おそるべき軍勢に膨脹していくのを見ていた。

**社会民主党の新聞**　いまやわたしは、いくらか違った感情をもって、ある日行なわれたヴィーンの労働者の大衆デモのはてしない四列縦隊を凝視していた。ほとんど二時間近くそこに立ち、息を殺して、ゆっくりとそばをねっていく巨大な人間の龍を見つめていた。わたしは不安に圧せられながら、やっと広場を離れて、家の方へゆっくりと帰った。途中にあるタバコ屋で、わたしは「労働者新聞」という古くからのオーストリア社会民主党の中央機関紙を目にした。わたしが新聞を読むためによく行く安い大衆カフェーにもそれは置いてあった。だがいままで、全体の調子がわたしにとっては精神的腐蝕剤のように働いていたこのみじめな新聞を、わたしは二分間と見ていることができなかった。ところがデモの沈鬱（ちんうつ）な印象を受けていたので、内心の声がこの新聞を一度買って、徹底的に読むようにと、せきたてた。夕方になるとわたしは、幾度もこみあげてくるカンシャクをおさえながら、この寄せ集めのデマを読んでみた。

いまではわたしはあらゆる理論的文献からよりも社会民主党の新聞を毎日読みながら、この思考過程の内的本質を研究することができた。

理論的文献の中の自由とか、美とか、品位に関するキラキラ光る名文句や、見たところこの上もなく深遠な知識を苦心さんたんして表現している大言壮語、いやみたっぷりの人道的道徳――みんな予言者的確信の鉄面皮で書かれているが――と、新しい人間救済の教えという獣のような下劣さにもしりごみせず、あらゆる中傷やもっともらしい梁がまがるほどのたくみな嘘を手段としている日刊新聞との間に、一体いかなる区別があるというのか。前者は、上流はもちろんのこと、中流の「インテリ層」の愚鈍なお人よしのためであり、後者は大衆のためである。

わたしはこの教説と組織の文献や新聞に沈潜して、わが民族を見なおすことを知った。はじめはわたしに越えがたい割れ目と思われたものが、いまでは前よりももっと大きな愛を感じさせる原因となるに違いなかった。

この途方もない毒化活動を知れば、バカでなければ、犠牲者に罪があるということはできないだろう。わたしが数年たって、だんだん自立するにしたがい、ますます社会民主党の成功の内部原因に対する洞察がより高度に成長した。いまやわたしは、赤の新聞だけを読め、赤の集会だけに出席せよ、赤の本だけを読め等の残酷な要求の意味を理解した。この寛容ならざる教説の不可避の結果をはっきりした形で、まのあたりに見たのである。

**大衆の心理**　大衆の心理は、すべて中途半端な軟弱なものに対しては、感受性がにぶいのだ。女性のようなものだ。かの女らの精神的感覚は、抽象的な理性の根拠などによって定められるよりも、むしろ足らざるを補ってくれる力に対する定義しがたい、感情的なあこがれという根拠によって決せられるのだ。だから、弱いものを支配するよりは、強いものに身をかがめることをいっそう好むものである。大衆もまた哀願するものよりも支配するものをいっそう好み、そして自由主義的な自由を是認するよりも、他の教説の併存を許容しない教説によって、内心いっそう満足を感ずるものである。かれらはまた、たいていそれをどう取扱うべきかを知らないし、しかも容易に見捨てられているとと感ずるものである。かれらは破廉恥な精神的テロや、かれらが人間的自由をシャクにさわるほど虐待されていることにも気がつかないのだ。かれらは全教説のうちにひそむ狂気に決して気づかないのである。そのようにしてかれらは、目的のはっきりしているこの傍若無人な力や残虐さを見て、いつ

も屈服しているのだ。

もしも社会民主党に対して、もっと真実さにみちた、しかも同じように残忍な実行力をもった教説が対立するならば、たとえ非常な苦しい闘争のあとであるにせよ、後者が勝つに違いない。

**社会民主党の戦術**　二年とたたないうちにわたしは、社会民主党の教説はもちろんその技術的道具もはっきりわかった。

わたしはいやしむべき精神的テロ行為を理解した。この運動はそれをまず第一に、こういう攻撃に対して道徳的にも精神的にも抗しえないブルジョアジーに行なっている。同時にかれらは、最も危険だと思われる敵に対して、虚偽と中傷の連続速射を正面からきまりきったやり方でいつも浴びせかけ、攻撃を受けるものの神経が破られ、かれらがただふたたび落ち着きをとりもどすために憎ったらしいものを犠牲に供するまで、手をゆるめないのだ。

しかしこれらのバカ者どもは、これだけでは落ち着けないのだ。

演技が新たにはじまる。そして狂暴な赤の恐怖が暗示的なマヒ状態になるまで、たびたびくり返して行なわれるのである。

社会民主党は自己の経験から力の価値をこの上なくよく知っているので、かれらはいずれにせよ何かめったにない資質をその本質の中にもっていることをかぎつけた勢力に対しては、何度も突撃を行なう。逆に反対派でも弱者には、自分たちが認め、あるいは推測する精神的特性にしたがって、あるいは注意深く、あるいは大声でかれらをほめるのである。

かれらは、たとえひかえ目な人物でも、力のあるものを、無力で意志の弱い天才よりも、もっと恐

れるのだ。

精神と力の弱いものに対しては、かれらは徹底的にほめる。

社会民主党は、あたかもそのような方法でのみ安寧が保たれるかのように、見せかけることを知っている。その間に、かれらは怜悧な用心深さで、しかも不撓不屈の精神で、陣地を一つ一つ占領していく。一般の注意が他のものに向けられて妨害されたくないと思っているときや、ささいなことでセンセーションをまきおこしたり、悪意ある敵を新たに刺激したくないときには、あるいはひそかに恐喝したり、あるいは事実上窃盗することで、ちょっとの間にも占領するのである。

これはすべて人間の弱点を正確に計算した上で発見された戦術であり、相手側が毒ガスをもって戦うことを学ばないかぎり、その結果はほとんど数学的正確さで成功に導くに違いない。

弱々しい性格の人々は、このさいまさしくそれが生きるか死ぬかの問題だということを、いわねばならない。

それに劣らず個人や大衆に加える肉体的テロの意味が、わたしにはわかってきた。

ここでもまた、心理的効果が正確に計算されている。

**仕事場での、工場での、集合場での、時には集団示威でのテロは、同程度のテロで対抗しないかぎり、必ず成功に終るものである。**

そうするともちろんこの政党は、途方もない叫び声をあげて、人殺し助けてと泣きわめき、すべての国家の権威を昔から軽蔑しているのに、混乱がたいしたことのない場合にもたいてい、事実上その目的を達するために、金切声をあげて官権を呼ぶのだ。——すなわち、かれらはそうとう高い官職にある愚物をみつけてくる。かれらはそのために多分いつかは、自分の恐れている反対者にも好意を示

してくれるだろうというバカげた望みをもって、この世界のペストの相手方を倒す手助けをしてくれる。

このような一撃が味方はもちろん、敵の大衆の意志にどんな印象をおよぼすかということは、本からでなく生活から民衆の気持ちを知ったものでなければ、はかることができない。というのは、味方の線ではこの成功した勝利がそれ以後自己の権利の勝利と思われるのに対し、打ちのめされた反対者はたいていの場合、今後の抵抗が一般に成功するかどうかについて、絶望的な気持ちになるものだからである。

わたしは、なによりも肉体的テロの方法を知れば知るほど、それに属している何十万という大衆に、すまないと思う気持ちがますます大きくなってきた。

わたしは当時の苦しかった時代に、切実に感謝している。その時代のみがわたしにわが民族の本姿を返還してくれたのであり、犠牲者と誘惑者とを区別することを知ったのである。

この人間誘惑の結果は、犠牲という形容をする以外にしかたのないものである。というのは、いまわたしがこの「最下層」の人々の生活から二、三の像を描こうとするならば、これを完全なものにするためには、このようなどん底においても、特に当時のかなり年老いた労働者たちの中にまれに見る献身、この上もなく誠実な友情、非常な節制やひかえ目なけんそんの形の中に、光明が見いだせることを確信しないわけにはいかないからである。この美徳はすでに大都市の一般的な影響を受けて、若い世代ではだんだんと失われているけれども、なお生活の卑俗な下劣さを越えたいたって健全な血をもっている多数のものさえも、ここにはいるのだ。そしてこれらの心の底から善良な感心な人間が、しかし政治活動においては、わが民族の仇敵（きゅうてき）と伍して隊列を詰めるのを助けているのは、かれらがこ

の新しい教説の卑劣さを理解しようとせず、また理解できなかったためであり、そのほかにだれもかれもかれらのことを心配してくれるような骨折りをしなかったためであり、けっきょく社会環境がその他のあらゆる既存の反対意志よりも強かったからである。いずれにせよかれらがある時落ち込んだ困窮が、かれらを社会民主党の陣営におもむかせたのである。

**ブルジョアジーの罪**　ブルジョアジーは幾度となく最も拙劣かつ不道徳なやり方で、一般的人間的な正当な要求に対してすら反対し、しかも往々にしてそのような態度から得られる利益は何もないかあるいはまったく期待もできなかったので、きわめてまじめな労働者でさえもが、労働組合組織から政治活動の方へとかりたてられてしまったのである。

幾百万の労働者たちは、はじめはかれらの心の中ではたしかに、社会民主党の敵であった。しかしかれらの抵抗はけっきょく幾度も常軌を逸しているようなやり方で、克服されてしまった。ブルジョア政党の側では、社会的性質の要求にはすべて反対する態度をとったからである。労働条件の改善、少年労働の廃止、婦人は少なくともかの女が生まれんとしている同胞を胸の下にいだいている数か月間は保護すること等のあらゆる試みを、単純に偏狭に拒否することは、このような場合、この卑劣な精神をありがたがってことごとに攻撃している社会民主党が、大衆を自分の網に引きこむのを助けたようなものである。わが政治的「ブルジョアジー」は、このようにして犯した罪を、決して二度ととりかえすことはできない。というのは同時に、社会的弊害を除去するためのあらゆる試みに対して抵抗し、憎悪の種をまき、そして社会民主党だけが働く民衆の利害を代表する唯一のものである、という全民衆の仇敵の主張をさえも、正当に見せたからである。

こうしてかれらはまず第一に、昔から政党に最大の客引き奉仕をしている組織たる労働組合の存立に対し、実際上道徳的に基礎を供給したのだ。

**労働組合問題**　わたしはヴィーンでの修業時代に、欲すると否とにかかわらず、労働組合問題に対する態度を決定しないわけにはいかなかった。

わたしは労働組合を、社会民主党それ自体の切り離しえない成分と見ていたので、決断も早かったし――間違ってもいた。

もちろんわたしは労働組合をきっぱりと拒否した。

この際限もなく重要な問題においても、また運命がわたしを教育してくれた。

その結果は、わたしの最初の判断をくつがえさせた。

二十歳でわたしは、労働者の一般的、社会的権利の擁護と、労働者各人のよりよい生活条件を戦いとるための手段としての労働組合と、政治的階級闘争の政党の道具としての労働組合との間を区別することを知った。

社会民主党が労働組合運動の重要な意義を理解していたことが、かれらに自己の道具を確保させ、それとともに成功をも確保させたのだ。ブルジョアジーはこれを理解していなかったので、かれらの政治的地位をまもるために金がかかったのだ。なまいきな「拒否」でもって論理的展開にとどめをさしうると信じていた。さて実際には非論理的な道へ強要するためであったのだ。思うに、労働組合運動がそれ自体何か反祖国的であるとすることは、不合理であり、その上まちがっている。むしろその逆が正しい。もしも労働組合運動が国民の大黒柱に属する階級の地位改善を目的としてめざし、それ

を実行するならば、それは反祖国的、反国家的でなく、かえってことばの真の意味での「国家的」活動である。かくして労働組合運動は社会的前提をつくり出すのを助け、これなくしては普通国民教育というものは、まったく考えることができないからである。この運動は社会的ガンを除去することによって、からだの精神的、肉体的病原を移動させ、民族統一体の一般的健康に貢献しながら、最後の功績を獲得するのである。

かくして、労働組合の必要性いかんの問題は、実際に無用である。

雇主の間に社会の理解がほとんどないか、あるいは正義感や公正感がまったく欠けているものがいるかぎり、かれらに雇われているがしかしわが民族の一部を構成しているものが、個人の貪欲や非常識に対して一般の利益を守ることは、単にかれらの権利であるばかりでなく、義務でもある。というのは民族体の中で誠実さと信仰を維持することは、民衆の健康の保持と同様に国民の利益に関しているからである。

この両方ともに、民族共同体全体の成員としての自覚のない下劣な企業家によって、はなはだしく危殆(きたい)にひんしている。かれらの貪欲さや無情さをともなう邪悪な活動から、将来に対する深刻な害が生ずるのだ。

このような発生の原因をとり除くことは、国民のために利益を獲得することであり、その反対ではない。

かれに実際上あるいは想像上不正を加えられた場合、各個が自由に結論をひき出し、各自好きな方法をとればよい、ということを、このさいいってほしくない。そうだ。これは八百長戦争であり、注意をそらす試みであると見られるにきまっている。劣悪な、非社会的事件を除去することは、国民の

利益になるかならないかのどちらかである。もし利益になるとすれば、それに対する闘争は、成功の見込みのある武器でなされねばならない。だが労働者は単独で、大企業家の力に対して目的を完遂する立場には決していない。ここではより高い権利の勝利ということが問題ではなく——これが認められればその場合実際、全闘争はその原因がなくなるためにまったく存在しなくなるのだが——より大きな力が問題なのである。さもなければ正義感さえあれば、すでに闘争はりっぱに終えられるか、よ り正しくいえば、闘争にはなりえなかったのだ。

そうだ。非社会的な、あるいは人間として下品な態度が抵抗をよび寄せるときは、この害悪を除去するために、法律的、司法的な官庁がつくられないかぎり、この闘争はただより大きい力によってのみ決せられることができるのだ。しかもそれと同時に、すでにはじめから勝利の可能性を断念しないためには、企業家個人およびその集中力には、一人であるかのように集合した多数の労働者のみが対抗しうるのだということは、自明のことである。

そのように労働組合組織は、毎日の生活における実際の成果の中で、社会思想を強化し、同時につねに不満と不平の原因を与えている刺激物を除去することができる。

それがそうでないのは、大部分、社会的弊害の法的規制には何でも妨害する手段を知っていたり、あるいはそれを政治的影響によって阻止したりするものの債務勘定に帰するのである。

政治的ブルジョアジーが、労働組合組織の意義を理解せず、あるいはもっとよくいえば、理解しようとせず、それに抵抗するにしたがって、社会民主党はこの論義の余地ある運動の世話をしたのだ。こうしてかれらは遠くをおもんぱかって確固たる基礎をつくり、すでに二、三度、危機的時機に最後の支柱として功を奏したのである。もちろんそれとともにその内的な目的は、新しい目標に場所を与

えるために、次第に没落した。

社会民主主義は、自分がつかんだ職業運動を、その本来の課題をもったまま維持していくことを、決して教えなかった。

そうだ、そのようには決して考えなかった。

二、三十年の間に、かれらの巧妙な手にかかって、社会的人権擁護の手段から、国民経済の破壊の道具になった。労働者の利害は、そのさいいささかも障害とならなかった。というのは、政治的にも、一方が不誠実に無理じいしても、他方が十分にバカげた羊のような忍耐をもっていさえすれば、経済的に圧迫する方法を用いて、いつでも強要することが許されているからである。

この場合はどちらもそのとおりだったといえる。

*

**労働組合の政治化**　すでに世紀の転換期に、労働組合運動は、従来の課題[17]に奉仕することをとっくにやめていた。年を経るごとに、それはますます社会民主党の政策の勢力圏にはいり込み、ついに階級闘争の鉄槌として用いられるにいたった。それは、苦心して建設した経済機構全体をたえざる打撃によってついに崩壊にまでもちこまれ、その経済的下部構造をとり去られた国家機構にも、同様な運命をもっとたやすく加えることができるに違いなかった。それとともにすべての労働者階級の実際の要求を代表するということは、政治的にずるく考えて、大衆の社会的な、そしてその上文化的な困窮を除去することがもはや望ましくない、とついに思われるにいたるまで、次第に問題にならなくなった。その上、労働組合運動は自己の欲求を満足させると、もはや無気力な闘争団体として永久に利用できないという危険におちいるのだ。

こういう不吉な予感がする展開は、階級闘争の指導者たちに恐怖の念を起させた。すなわちかれらは、実際に祝福さるべき社会改善をすべて即座に拒否し、しかも断固として反抗的態度をとったのである。

その上かれらは、そのような身勝手な理解しがたい態度を根拠づけることに決して困らなかった。人々が要求をますます広げていくことによって、その要求が充足されるのはたいへん少なく、かつ小さく思えてくるので、かれらはつねに大衆に次のように信じさせることができる。すなわちこの場合、ただ悪魔的な試みで、神聖な要求を少しばかり満足させ、労働者階級の打撃力を安易な方法で弱め、できるならマヒさせようとしていることが問題だ、と。大衆の貧弱な思考力を考えれば、人々はその結果におどろく必要はない。

ブルジョア陣営では、かかる社会民主党の戦術の見えすいた不誠実さに憤激したが、そこから自分たちの行動の方針に対するわずかな結論さえも引きだすことができなかった。今までの文化的、社会的なみじめさの深みから、労働者階級が実際に立ちあがることを社会民主党は恐れて、階級闘争の代表者から次第にこの道具をもぎとるために、まさしくその目標に向かって最大の努力がなされねばならなかったのだ。

けれどもこれはなされなかった。

みずから攻撃して反対側の立場を占領するかわりに、人々は押され圧迫されるのをむしろ好み、ついにはまったく不十分な援助[18]に手を出したが、遅かったため効果がなかったし、つまらないものであったため、なお簡単に否定されたのだった。そのように、実際にはすべては昔のままにとどまり、ただ不満が以前より大きくなっただけであった。

すでにそのころ、政治的地平線や個人の生存上に、「自由労働組合」がやがて来たらんとする雷雲のようにたれこめていた。

それは国民経済の安全と独立、国家の不変と個人の自由に反対する最も恐るべきテロ器械の一つであった。

とりわけ自由労働組合は、民主主義の概念を、否定しうる笑うべき空語となし、自由を侮辱し、兄弟のような親密さを「なんじ、仲間になることを欲せずば、われなんじの頭蓋を打ちくだかん」といって、永久に嘲笑した組合である。

こうしてそのころわたしは、これらの人類の友を知ったのだ。年がたつにつれ、かれらについてのわたしの見解が広まり深くなった。わたしはそれを変える必要はなかった。

＊

**社会民主党の秘密を解く鍵**　社会民主党の外面的特質を看破すればするほど、この教説の内部的核心をつかみたいという欲望がますます大きくなった。

党の公的文書は、もちろんこの場合ほとんど役に立たない。それが経済問題を取扱っているかぎり、その主張も論証もまちがっており、政治目的が取扱われているかぎり、嘘である。その上、わたしは特に新しい三百代言的表現法や叙述の方法に、内心で反発を感じた。不明瞭(ふめいりょう)な内容や、不可解な意味のことばを恐ろしく用いて、文章がくどくどと並べられており、無意味であると同じぐらい才気煥発(かんぱつ)たらんとしている。この理性の迷路の中で、家にいるように心地よく感じたり、自分にいちばんわからないものの中にいつもより深遠な真理をかぎつけるわが民衆の一部の、ことわざにあるような謙虚さにささえられて、この文学的ダダイズムの汚物から「内面的体験」をつかみとろうとするものは、

この退廃的な大都市のボヘミアンだけだろう[19]。

しかしながらわたしは、この教説の理論的な虚偽と不合理を、その現象の事実と比較しているうちに、次第にその内面的な要求のはっきりした像を得た。

そういう時に、暗澹(あんたん)たる予感といやな恐怖におそわれた。わたしは、わたしの前にあらわれたこの教説を見た。それは利己主義と憎悪より成りたっており、数学の法則に従えば、勝利に導くことはできるが、同時にまた人間を破滅に導くに違いないものであった。

その間にわたしは、この破滅の教説とそれまでわたしが知らなかった民族の本質との間の関係を理解した。

**ユダヤ民族についての知識だけが、社会民主党の内面的な、それとともに現実的な意図をつかむべき鍵を示している。**

この民族を知っているものは、この政党の目的と意味についての間違った観念のヴェールが消えさる。そして社会に関するきまり文句の霧とかすみの中から、マルクシズムのしかめ面が嘲笑(あざわら)いながら出てくるのだ。

*

**ユダヤ人問題**　「ユダヤ人」ということばがはじめてわたしに特別な考えを起させたのがいつであったか、を語ることは、今日では不可能でないとしても、困難である。父の家で、父の生存中に、このことばを聞いたことがあったかどうか、思い出せない。年老いた父はこの名称を特別に強調することは、すでに文化的に時代遅れだと考えていたらしい。かれはこの上もなく強固な国家主義的心情をもっていただけでなく、わたしにもその影響がおよんだが、かれは生存中に多少とも世界市民的な

考え方をするようになっていた。

学校でもまた、わたしが受けついできたこの像を変えることができるような誘因は見つからなかった。

実科学校で、わたしは一人のユダヤ少年と知りあった。かれはわれわれ一同から用心深く扱われていた。けれどもただかれが無口であったし、こちらもいろいろの経験で知恵がついていて、特別に信頼しなかったからである。わたしも、また他の連中も、それでどうするという考えもなかった。

十四、五歳のときにようやく、わたしは、いくらか政治的な話に関連して、ユダヤ人ということばにしばしばつきあたった。これに対してわたしは軽い嫌悪を感じ、宗教上の口論がわたしの前で行なわれるときにはいつも、不愉快な感情をおさえることができなかった。

だが、当時はこの問題をわたしは、それだけのものとしか見ていなかった。

リンツにはユダヤ人はほんのわずかしか住んでいなかった。幾世紀もの間に、かれらの外見はヨーロッパ化し、人間らしくなっていたので、実際わたしはかれらをドイツ人だとさえ思っていた。こう考えることの不合理さが、わたしにはほとんどわかっていなかった。というのは異教徒ということだけが唯一の区別の徴表だと思っていたためである。このためにかれらが迫害されたのだと思っていたので、かれらの不利益になるような発言に対して、わたしの反感はしばしば嫌悪となるほどだった。組織的な反ユダヤ団体の存在について、わたしはまだ何も知らずにいた。

こうしてわたしはヴィーンへ来た。

建築の領域でのおびただしい印象にとらえられ、自己の運命の重圧におしひしがれて、最初のころはこの巨大都市の民族が、内面的にどんな分類構成をもっているのかについて、見る目をもっていな

かった。ヴィーンはこの数年の間に、二百万人の人口のうち二十万人近くのユダヤ人を数えていたにもかかわらず、わたしはユダヤ人が目につかなかった。わたしの目もわたしの意識も、最初数週間は、たくさんの価値あるものや回想におそわれて成長しなかった。次第に平静をとりもどし、興奮させられていた像がはっきりしはじめたとき、はじめてわたしは、自分の新しい世界を徹底的に見まわし、そしてそこでユダヤ人問題にぶつかったのである。

わたしは自分がかれらを知った経緯を特に好ましく感じた、と主張しようとするのではない。わたしはまだユダヤ人の中にただ宗教しか見ていなかった。だから、人間的寛容さから、この場合にもまた、宗教的に闘争を拒否する態度を堅持した。したがってまずなによりも、ヴィーンの反ユダヤ主義の新聞が打ち出している論調は、大民族の文化的伝統に値しないように思っていた。わたしは中世のある種の事件[20]を思い出すと気がめいり、好きこのんでくり返されるのを見たくなかった。この種の新聞は一般に一流新聞として通用していなかったので――それがどこに由来するのか当時わたし自身には十分にわからなかった――わたしはそれをいまいましい嫉妬の結果と思いこんで、たといそれが誤った見解であるにしても、根本的な見解の違いからくる結果であるとは思わなかった。[21]

わたしが見るところでは、ほんとうの大新聞がこれらすべての攻撃に答える形式は、無限に品位のある形式であり、わたしにとってはそれ以上尊敬に値すると思われたものにはまったく言及せず、簡単に黙殺したことによって、わたしのこの意見は強められた。

**いわゆる世界的な新聞**　わたしは、いわゆる世界的な新聞（「ノイエ・フライエ・プレセ」「ヴィーナー・タークブラット」等）を熱心に読んだ。そしてこれらが読者に与えるものの広さと、個々の

叙述の客観性に驚いた。わたしはその上品な論調をもっともであると認め、実際には文体の熱烈さについて内心ではしばしば満足せず、不愉快に感じていたにすぎなかった。しかしこれはこの世界的都市全体の活気のせいだろうと思っていた。
当時わたしはヴィーンをそのようなものと思っていたので、自分で自分に与えたこの説明で解明できるだろうと思っていた。
だが、たびたびわたしを反発させたのは、これらの新聞が宮廷にいちゃつく威厳のない形式だった。宮廷に小さなでき事があると、有頂天の感きわまる調子でか、ため息まじりのあわてた調子で読者にうったえる。仰々しい所作であり、特にそれが空前の「最も賢明な君主」について書かれたときは、ほとんど大雷鳥の交尾にも似た大さわぎをする。
わたしにはこのことがつくりごとのように思われた。
わたしの目から見れば、自由主義的民主主義はここに汚点があったのだ。
宮廷の寵愛(ちょうあい)にこび、そしてこういう不体裁な形で国民の品位を犠牲にしたのである。
これがヴィーンの「大」新聞についてわたしの精神状態を暗くした最初の暗影であった。

**ヴィルヘルム二世批判**　いままでと同じように、わたしはヴィーンにおいても、ドイツでのすべてのでき事を、それが政治問題を取扱っていようが文化問題を取扱っていようがまったく同じに、この上もない燃えるような熱意で追求した。ほこらかな驚嘆をもって、わたしはドイツ帝国の興隆とオーストリア国家の衰退とを比較した。外交上のでき事はたいてい心からの喜びを刺激したが、国内の政治生活がそれほど喜ばしくないので、しばしば心が痛んで暗澹とした。この時代にヴィルヘルム二

世に対して行なわれた抗争は、当時わたしの賛成できないものだった。わたしはかれの中に単にドイツ皇帝であるばかりでなく、なによりもドイツ海軍の創設者を見ていたのだ。だから議会が皇帝に課した演説禁止にわたしは極度に腹を立てた。わたしの目から見れば、実際にそれは、こういうことをする根拠をもっていない地位から出たものであり、議会の雄ガチョウどもはただ一度の会期だけで皇帝家の全王朝が――その最もとるにたらぬものを含めて――数世紀の間にしゃべったことよりも多くの無意味なことを、いっしょになってガアガア鳴きたてたからである。

うすバカものたちがみんな、批判のことばを発する権利を要求するだけでなく、議会ではしかも「立法者」として国民に放ち飼いにされている国において、帝冠をいただくものが、どの時代を通じてもこの上ない浅薄なおしゃべり機関によって「非難」されたことに、わたしは腹が立ったのだ。

しかし、わたしは次のことでいっそうしゃくにさわった。すなわち、最もつまらない宮廷の駄馬の前でもなお平身低頭し、偶然にしっぽをふったことについても常軌を逸しわれを忘れる同じヴィーンの新聞が、外見上は心配そうな顔つきで、だがへたにかくされた悪意をもって――わたしにはそう見えたのだが――ドイツ皇帝に対する疑念を表明したことに、だ。ドイツ帝国の内政に干渉しようとする意志はないが――そうだ、まっぴらだ――しかし親切なやり方で傷口に指を触れるのは、同じように相互同盟の精神に課せられた義務をはたすことであり、逆に新聞としての真実にも十分かなったものである、等々。そして傷口にいれたこの指を心ゆくばかりさしこむのだ。

こういう場合、わたしは逆上した。

わたしが大新聞をだんだんと注意深く観察するようになったのは、このことからであった。

反ユダヤ新聞の一つである「ドイッチェ・フォルクスブラット」がそういう場合にまじめな態度を

とっていたことを、わたしはいつか認めなければならなかった。

**新聞のフランス崇拝**　さらにわたしの神経にさわったのは、そのころすでに大新聞が書いていた実際いやらしいフランス崇拝だった。人々はこの「偉大な文化国民」に対する甘ったるい頌歌（しょうか）をまのあたりにして、まったくドイツ人たることを恥じねばならなかった。このあわれむべきフランスかぶれが、一度ならずしばしば、わたしにこの「世界的新聞」を投げすてさせた。わたしはそこでいつもくりかえし「ドイッチェ・フォルクスブラット」を読んだ。もちろんこれは小さな新聞だが、このことについてはなにかもっと純粋に思えた。わたしは鋭い反ユダヤ調には同意しなかったが、二、三深く考えさせられる論拠もあちこちに散見された。

いずれにしてもそのようなきっかけから、わたしは次第に、そのころヴィーンの運命を規定していた人物と運動を知ったのである。カール・ルエーガー博士とキリスト教社会党がそれであった。

ヴィーンへ来たとき、わたしは両者に敵意をもってのぞんだ。

人物も運動もわたしの目には「反動的」に見えたのだ。

しかしわたしが人物と活動を知る機会をもつにしたがって、ありきたりの正義感からこの判断を変えなければならなかった。そして次第に公正な判断が、明らかな敬服へと成長した。今日、わたしは以前にもましてこの人物を、あらゆる時代を通じて最も力のあるドイツ人の市長と見ている。

しかし、キリスト教社会主義運動に対するわたしの立場がそのように変わったことによって、わたしの先入観がどんなに多くくつがえされたことであろう。

**反ユダヤ主義への転向**　こうして徐々にわたしの反ユダヤ主義に関する考えが、時がたつにつれ変わっていった。だがこれはわたしの転換の中で最も困難なものだった。

この転換のためにわたしには、最大の内面的精神的格闘が必要であった。そして数か月の理性と感情の格闘の後に、ようやく勝利は理性の側にかたむき始めた。二年後、理性が感情を追いはらい、それ以後感情は理性の最も忠実な番兵となり、忠告者となった。

育っていく感情と冷静な理性との間で激しい格闘が行なわれていたころ、ヴィーンの街はわたしに直観教育で、たとえようもないほど奉仕してくれたのだ。そのころには、わたしははじめのころのように、盲目的にこの巨大な都市をうろついてばかりいないで、目を開いて、建物以外に人間をも注視するようになっていた。

あるときわたしが市の中心部を歩きまわっていると、突然長いカフタン[22]を着た、黒いちぢれ毛の人間に出くわした。

これもまたユダヤ人だろうか？　というのがわたしの最初に考えたことだった。

かれはリンツではもちろんそのような外見をしていなかった。わたしはひそかに注意深くその人物を観察した。だがこの見知らぬ顔を長く見つめれば見つめるほど、そしてその特色をさぐるように調べれば調べるほど、ますますわたしの頭の中で最初の疑問が他の表現に変わった。

これもまたドイツ人だろうか？

こういう場合、わたしはいつものように、この疑問を本から引きだしてみようとしはじめた。当時わたしは、数ヘラー支払ってわたしの生涯ではじめての反ユダヤ主義のパンフレット[23]を買った。遺憾ながらこれらのパンフレットは、すべて原則として、読者がすでにユダヤ人問題を少なくともかなり

の程度まで知っているか、きわめてよく理解しているという立場から出発していた。けっきょく、その論調は大部分、その主張に対する非常に浅薄で極度に非科学的な論証であったため、わたしにまたしても疑いを生ぜしめるようなものであった。

わたしはそこで、幾週間も、実際幾月も、またもとのところへ逆もどりした。問題は非常に大きく、非難は極端であるように思えた。わたしは誤りをおかすのではないかという恐れに苦しめられ、ふたたび不安で、自信がなくなった。

もちろんここでは、ある特定の宗派に属するドイツ人を問題としているのではなく、ある民族自体を取扱っているのだということを、わたしも疑うことはできなかった。というのは、わたしがこの問題に没頭しはじめて、ユダヤ人にはじめて注意するようになって以来、ヴィーンについて以前と違った印象を受けたからである。いつもわたしが行くところで実際にユダヤ人を見た。そしてわたしが見れば見るほど、かれらが他の人間と違っているのが、ますますはっきりと見えてきたのである。特に市の中央部とドーナウ運河の北部の区域は、外見的にもドイツ民族と似かよっていない民族が密集していた。

だがわたしがまだ疑っていたとしても、けっきょくは一部のユダヤ人の態度によって、そのあいまいな点が除かれた。

ヴィーンではかなり広範囲にかれらの間で大きな運動が行なわれていたが、これこそユダヤ人の民族性をこの上もなくはっきりと証明するものであった。すなわちシオン主義[24]がそれである。

もちろんこの立場は、あたかも一部のユダヤ人だけが賛成しているが、大多数はそういう取りきめに反対し、心から拒否しているかのように見えた。しかしこの外見をもっと詳細に眺めると、純粋の

ご都合主義の根拠から発した嘘といわぬまでも逃口上という不快な霧の中に飛び散ってしまった。というのはいわゆる自由主義的な考え方のユダヤ人たちが実際シオン主義者たちを拒否するのは、かれらがユダヤ人でないからではなく、ユダヤ人として公然とユダヤ教に対する信仰告白をすることは非現実的であり、しかも危険であるかも知れないからであった。

かれらが内心でいっしょに組んでいることには、まったく変わりなかった。

シオン主義ユダヤ人と自由主義ユダヤ人の間のこの見せかけの闘争は、それでなくてもまもなくわれわれに吐き気をもよおさせた。それは徹頭徹尾真実でなく、もちろん嘘であり、さらにいつも主張されるこの民族の道徳的な高尚さと純粋さに適合しないものであった。

一般に、この民族の道徳上の、あるいはその他の清潔さというもの自体が問題点であった。水好きでないことが問題であることは、人々が外見を見ただけで、遺憾ながら往々にして、しかも目を閉じていてもわかる。その後わたしは幾度もカフタンをまとっているものの臭気で、気持ちが悪くなった。その上なお、きたない衣服をつけているし、外貌も雄々しくない。

すでにこうしたものだけでも、はなはだ人をひきつけるところがない。肉体的な不潔以上にはからずも、この選ばれた民族の道徳的汚点を発見したときは、嫌悪の情をいだかずにはおれなかった。

まもなくある領域でのユダヤ人の活動のやり方に対する洞察が徐々に深くなってきたとき、これほど考えさせられる気持ちになったものはなかった。

どんな形式のものであれ、まず第一に文化生活の形式において不正なことや、破廉恥なことが行なわれたならば、少なくともそれにユダヤ人が関係していないことがあったであろうか？

こういうはれものを注意深く切開するやいなや、人々は腐っていく死体の中のウジのように、突如

さしこんだ光によってまぶしく目の見えないユダヤ人を、しばしば発見したのである。
新聞、芸術、文学、演劇における活動をわたしが知ったとき、わたしの目に映ったのは、ユダヤ人がもっている重荷であった。かざりたてられたすべての格言も、ほとんど無用であるか、まったく無意味である。広告塔の一つを見て、そこでほめそやされている映画や演劇のぞっとする駄作の精神的創作者の名前をしらべ、しばらく動かずにいるだけで十分である。それは民衆が感染したかつての黒死病よりももっと悪質のペストであり、精神的なペストだ。しかもこの害毒がいかに多くつくられ、ばらまかれたことか！　もちろんこうした芸術製造業者の精神的、道徳的水準が低ければ低いほど、それだけ無限にかれらを実らせるのであり、ヤツは遠心機以上にかれの汚物を他人の顔にふりまくのだ。その場合、かれらの数が無限であることを考えてほしい。自然が一人のゲーテに対し、いつもなお何万という当代のヘボ小説家でなやませ、最も悪質のバチルス保菌者として魂を毒するのだ、ということを考えてほしい。
恐ろしいことだ。だがユダヤ人こそこの不名誉きわまる使命に、自然によって大量に選びだされたように見えることを見すごしてはならない。
かれらが選ばれたものだという理由を、そこに見いだすべきではないだろうか？
当時わたしは公の芸術生活のこの不潔な作品の創作者の名前を全部、注意深く調べはじめた。結果は、ユダヤ人に対してわたしがいままでとっていた態度にとって、いっそう悪いものであった。そこではなお感情が千倍も反対しても、理由がその結論を引きださねばならなかった。
すべての文学的な汚物、芸術上のキワ物、演劇上のバカ騒ぎの九割が、国内の全人口の百分の一にも達していない民族の債務勘定に帰するという事実は、簡単に否定されなかった。事実そのとおりだ

った。

またわたしはそこで、わが愛する「世界的新聞」を、このような観点から調べはじめた。ここでも測深機を深く入れれば入れるほど、ますますわたしのかつての驚きの対象が小さくなった。文体はいよいよ耐えがたいものになる。わたしは内容を、内心浅薄で平板なものとして拒否せねばならなかった。叙述の客観性が、いまやわたしには、りっぱな真理としてよりもむしろ嘘に見えた。ところが編集者は――ユダヤ人だった。

以前にはほとんど見なかった幾千のことが、いまや注目に値するものとしてめだってきた。そのほかにかつていままでにわたしに考えさせる誘因を与えたものを、もう一度理解し、判断することを学んだ。

この新聞の自由主義的な志向を、いまや違った光の中で見た。攻撃に対する回答の上品な調子もその黙殺もわたしにはいまや、怜悧（れいり）な卑劣なトリックと見えてきた。その輝かしく書かれた劇評は、いつもユダヤ人作家に関しており、そしてかれらの不評はドイツ人以外のものには向けられなかった。かたくなにもヴィルヘルム二世を軽くあてこすることもなく、フランスの文化や文明を賞賛するのと同様に手段だとわかってきた。小説のキワ物的内容はいまやわいせつなものとなり、わたしはそのことばに異民族の声を聞いた。ところで全体の意味は明らかにユダヤ人に有害であった。これは意図されていたのだ。

しかしだれがそこに関心をもっただろうか？

これらのすべては単に偶然だったのか？

そこでわたしは次第に不安になった。

しかしこの発展は、わたしが他の一連のでき事で得た洞察によって拍車をかけられた。これは、それが大部分のユダヤ人によってまったく公然と誇示され、実証されているのを人々が見ることができるように、かれらの慣習や道徳の一般的見解であった。

ここで街が、もう一度しばしば有害な直観教育を示したのだ。

淫売(いんばい)制度とさらに少女売買に対するユダヤ人の関係さえも、人々はおそらく南フランスの港町をのぞけば、ヴィーンでその他のどの西ヨーロッパの都市よりも、よく研究することができた。夕方、レオポルトシュタットの通りや小路を歩けば、一歩ごとに欲すると否とにかかわらず、大戦前まで大部分のユダヤ民族にかくされていた光景が見られた。大戦が東部戦線にいた兵士に同様なものを目撃しうる――もっとよくいえば見ざるをえないような機会を与えたのだが。

ユダヤ人が、大都市の廃物たるこのにくむべき淫売業の、氷のように冷く、また厚顔無恥な仕事をしている支配人であることをそういう方法ではじめて見たとき、背筋がかすかにゾッとするのを覚えた。

だが、次には憤慨した。

もうわたしはユダヤ人問題を論議することを回避しなかった。そうだ、わたしはいまやそれを望んだのだ。だがそのようにわたしが文化生活、芸術生活のあらゆる方面で、そしてそのさまざまな表現にもとづいて、ユダヤ人を探し求めることを覚えたとき、突然まさかと思えるようなところでユダヤ人にぶつかった。

### 社会民主党の指導者としてのユダヤ人

ユダヤ人を社会民主党の指導者として認めたとき、迷夢

からさめはじめた。長い間の内面的な感情闘争は、これとともに終った。

わたしが労働者仲間と毎日つきあっているときに早くも、驚くべき変節性が目につくにいたった。かれらは同じ問題について時には数日で、往々にして数時間で、いろいろの立場をとるのだ。人間というものは一人でしゃべっておればいつも理性的な考え方をもっているのに、それが大衆の勢力圏に入ってしまうと、どうして突然失われるのかわたしにはわからなかった。しばしば絶望的になった。わたしが何時間もかかって説得し、こんどこそ端緒を開いてやった。あるいは不合理を啓蒙してやったと確信して、成功を心から喜んでいると、次の日にはがっかりしてもう一度はじめからやりなおさなければならなかった。すべてはムダだった。永遠の振子のように、かれらの常軌を逸しているような考え方がいつも新たにはねかえすように思えた。

かれらが自分たちの宿命に不満であり、かれらをしばしばそんなにも苛酷にうちのめした運命をのろい、かれらがこの運命の無情な執行人と考えている企業家をにくみ、かれらの目から見れば自分らの境遇に対して無情な当局を罵倒し、食料品価格に対してデモを行ない、かれらの要求のために街をねり歩いたこと、これらすべてをその時わたしは理解することができた。これらすべてのことを人々は、少なくとも理性に訴えないでも理解できた。しかし理解できなかったものは、かれらが自己の民族性を憎悪し、その偉大さを侮蔑し、その歴史を汚し、そして偉大な人々をドブにひきずり込んだ果てしない憎悪の念であった。

自己の民族、自己の村、自己の故郷に対するこの闘争は、無意味であるし不可解であった。不自然であった。

人々はかれらをこの悪徳から一時的に回復させることはできた。けれどもわずか数日、せいぜい数

どっていたものだ。

不自然が、かれを前のようにとらえていた。

＊

**ユダヤ的詭弁**　社会民主党の新聞が圧倒的にユダヤ人によって指導されていることに、わたしは次第に通暁した。しかしわたしはこの状態に、特別の意味を負わせなかった。他の新聞の状態も同じようであった。おそらくは一つだけ異様なことがあった。わたしの受けた教育と理解力が及ぶかぎりでは、真に国家主義的と称される新聞でユダヤ人が関係しているものが一つもなかった、ということである。

そこでわたしは我慢してこの種のマルクシズムの新聞記事を読もうとしたが、それに応じて嫌悪感が無限に大きくなってくるので、今度はこの総括的な悪事製造者をもっとくわしく知ろうとした。

発行人をはじめとして、みんなユダヤ人だった。

わたしはどうにか手に入る社会民主党のパンフレットを買って、その編集者の名前をしらべた。ユダヤ人だった。わたしはほとんどすべての指導者の名前に注意した。議会の代議士を問題にしても、労働組合の書記を問題にしても、また組織の議長、街頭の扇動者を問題にしてみても、そのほとんど大部分が、同様に「選ばれた民族[25]」に属しているものたちであった。同じような不愉快な現象はいつも生じていた。アウステルリッツ、ダーヴィット、アドラー、エレンボーゲン等の名は永久に忘れないだろう[26]。いまや一つのことがはっきりした。すなわち、数か月来わたしは、ある政党のちょっとした代表者たちと激しい論争をたたかわしてきたが、その党はほとんどもっぱらある異民族の手で指導

されていた、ということである。なぜならユダヤ人はドイツ人にあらずということを、内心幸福な満足感を覚えてわたしは決定的に意識していたからである。

だが、わたしはいまや、わが民族の誘惑者を完全に知った。

労働者というものが、よりりっぱな知識やよりすぐれた説明に屈しないほど頑迷ではないという確信をうるためには、わたしの一年のヴィーン滞在でもう十分だった。わたしは次第にかれらの独自の教説の通になった。そしてそれを、わたしの内心の確信のために闘うときの武器としてふりむけた。

ほとんどいつもわたしのほうが勝った。

時間と忍耐というきわめて困難な犠牲をはらった後にだけ、大衆を救う見込みがあった。

しかしユダヤ人は決してかれらの意見を変えようとはしなかった。

当時のわたしはまだ子供のようだったから、かれらの常軌を逸しているような教説をはっきりさせてやろうとして、わたしの狭い交際範囲で舌をかみ、のどをからして演説し、かれらが狂ったようなマルクシズムの有害さを確信することができるに違いないと思っていた。だがわたしはまさに反対のものに到達したのだった。ちょうど社会民主党の理論とその実現の破壊的作用についての洞察が深くなることだけが、かれらの決心の強化に奉仕するかのように思われたのだ。

かれらと争えば争うほど、ますますかれらの詭弁（きべん）がわかってきた。最初かれらは相手の愚鈍さを考慮に入れる。だがもはや逃げ道がみつからないとなると、簡単に自分をバカに見せるのだ。なにをやっても役に立たないと、かれらは正確に理解することができないとか、あるいは即座に他の領域に飛躍したり、放棄したり、わかりきったことをいい、しかしそれが受けいれられるやいなや、ふたたび本質的に違った材料を引き入れ、さてふたたびつかまえられると回避して、そしてくわしいことは何

も知らないという。そういう使徒を攻撃しても、いつもくらげのような粘液で手をつかみ、くらげのような粘液が指の間をすべり抜けると、次の瞬間にはふたたび合流して結合する。しかしかれらが周囲から観察されると同意せざるをえなくなり、そして少なくとも一歩自分の意見に近づかせたと思うと、次の日はかえって逆になって驚きが大きい、というような実際ムダなことにぶつかる。ユダヤ人はきのうのことは何も知らず、あたかも何事も起らなかったし、しなかったかのように、かれらの古い不法なことを幾度も話し続ける。そしてそれに憤慨して論駁すると、驚いたふりをして、かれの主張が正しかったことは前日にすでに証明されているということ以外まったく何も思い出すことができないのだ。

わたしは幾度もつっ立ったままでいた。かれらの口達者と嘘の手ぎわと、どちらのほうをよけいに驚いたらいいのかを人々は知らなかった。わたしは次第にかれらを憎みはじめた。

これらのすべてには、ただ一つだけよいことがあった。社会民主党のもともとの担い手や少なくとも宣伝者がわたしの目に触れるにしたがって、わたしの民族愛が成長せざるをえなかったことである。この誘惑者の悪魔のような老獪さによって、われわれの犠牲にされたものたちを、だれが呪うことができようか？　この種族の詭弁的な嘘に打ち勝つことが、わたし自身にもどんなにむずかしいことであったか！　だが、真実を口先でゆがめ、いまいったばかりのことばを如才なく否定し、次の瞬間にはそれを自分に利用するような人間には、そのような勝利の結果がいかに無益であったことか。

そうだ、わたしはユダヤ人を知れば知るほど、ますます労働者を大目に見なければならなかった。わたしの目から見れば、最も重い罪は労働者にでなく、労働者に同情し鉄のような正義感で民族の

子に、かれにふさわしいものを与えてはいるが、しかしながら誘惑者と有害者を壁にたたきつけることを努力するに値しない、と考えているすべてのものにあるのだ。

**マルクシズムの基礎の研究**　日々の生活の経験に刺激されて、いまやわたしはマルクスの教説の源泉自体を吟味しはじめた。その努力は一つ一つ明白になった。毎日わたしの注意深い目の前に効果があらわれた。わたしは結論をいくらか想像して頭に描くことができた。疑問はただ、この創始者には、かれがつくりだしたものの成果を、とっくに最後の形において眺め、ありありと念頭に思いうかべていたかどうか、あるいはかれら自身が誤謬の犠牲になったのかどうか、ということだけであった。

両方ともわたしの感じからいえば、ありうることだった。

ある場合には、ひょっとしたらその最も極端なものを阻止するために、この不快な運動の第一線に乗り出すことが、すべての思慮ある人間の義務であった。しかし他の場合にはこの民族病のもともとの創始者は真の悪魔であったに違いない。というのは怪物の――人間のでなく――頭の中でなければ、その活動が結果として人類文化を破壊に導き同時に世界の荒廃に導くに違いない組織のための計画が、意義ある内容をとることができるはずがないからであった。

この場合には、闘争が、運命がその祝福を天秤にかけてだれにくだそうとも、人間の精神、知性、意志がつかみうるかぎりのあらゆる武器をもった闘争が、同様に最後の救済として残ったのである。

そこでわたしはいまや、運動の基礎を研究するために、この教説の創始者たちと親しくしはじめた。わたしがはじめに自分で考えていたよりも、多分早く目的に到達したが、これはわたしが当時すでにただわずかながらも、ユダヤ人問題の知識を獲得していたからである。

その知識があったので、わたしは社会民主党建設の使徒の理論的大言と活動とを、実際に比較することができたのである。ユダヤ民族が思想をかくすため、少なくとも偽装するために語ったかれらのことばを、社会民主党がわたしに理解させ、教えてくれたからである。だからかれらの実際の目的はことばの中に見いだすことができず、その間にうまくかくされ眠っているのだ。

わたしがいままで内心で経験した最も大きな転回の時期がやってきた。

わたしは弱々しい世界市民から、熱狂的な反ユダヤ主義者になった。

もう一度だけ——それが最後だったが——ずっと深い重苦しさの中で不安に圧迫されるような考えが浮かんできた。

わたしが人類の歴史の長い期間を通じてユダヤ民族の活動を研究し観察したとき、突然心配な問題が出てきた。神秘な運命がわれわれあわれむべき人間には理解できないという理由で、この小民族の最後の勝利を永遠に変わらない決意で望んでいるのではないかどうか？　ということである。

永遠にただ地上にのみ住む(27)この民族が、地上を報酬として与えられることになっているのではなかろうか？

われわれは自己保存のために戦う客観的権利をもっているのではないか、あるいはこれもわれわれが主観的に根拠づけているだけだろうか？

わたしがマルクシズムの教説に沈潜し、ユダヤ民族の活動を冷静にはっきりと、観察している間に、運命自体がその答えを与えてくれた。

**文化破壊者としてのマルクシズム**　マルクシズムというユダヤ的教説は、自然の貴族主義的原理

を拒否し、力と強さという永遠の優先権のかわりに、大衆の数とかれらの空虚な重さとをもってくる。マルクシズムはそのように人間における価値を否定し、民族と人種の意義に異論をとなえ、それとともに人間性からその存立と文化の前提を奪いとってしまう。マルクシズムは宇宙の原理として人間が考えうるすべての秩序を終極に導く。そしてこの認識しうる最大の有機体において、そのような法則を適用した結果は、ただ混沌（こんとん）のみであるように、地上ではこの星の住民にはただ自己の破滅あるのみである。

ユダヤ人がマルクス主義的信条の助けをかりてこの世界の諸民族に勝つならば、かれらの王冠は人類の死の花冠になるだろうし、さらにこの遊星[28]はふたたび何百万年前のように、住む人もなくエーテルの中を回転するだろう。

永遠の自然はその命令の違反を、仮借なく罰するであろう。

だから、わたしは今日、全能の造物主の精神において行動すべきだと思う。**同時にわたしはユダヤ人を防ぎ、主の御業のために戦うのだ。**

# 第三章　わがヴィーン時代の一般的政治的考察

**政治家**　わたしは今日、人間というものは、まったく特殊な才能をもっている場合は別として、一般に三十歳以前には公的に政治にかかわるべきではないと確信している。そうすべきでないというのは、このころまでに大部分はまず一般的な土台がつくられ、そのころはじめていろいろの政治問題を吟味し、それに対する独自の立場を決定的に確定しうるからである。こうした基礎的な世界観を獲得し、そうすることによって個々の時事問題に対する自分の見方が確実なものになった後にはじめて、少なくとも内面的に十分成熟した人間が、国家の政治的指導に参加すべきであり、してもよいのである。

そうでない場合には、本質的な問題において、かれのいままでの立場を変えねばならないか、あるいはずっと以前に知性や信念が拒否したある観念で、かれのよりよい知識や認識に反してまでも満足する危険が生ずる。第一の場合には、これはかれの個人にとって非常に苦しく、かれはいまや動揺しているので、以前と同じようにかれの仲間たちがしっかりと信じてついてくることを、もはや当然のこととして期待できないからである。だがかれに導かれているものたちにとっては、指導者のこうした急変は途方にくれることを意味し、いままで戦ってきたものに対して、ある羞恥(しゅうち)の感情をもつこともめずらしくない。しかし第二の場合には、特に今日われわれがしばしば見るようなことが生じている。指導者たちがもはや自分が語ったことを信じなくなるにしたがって、かれの弁論は空虚になり、

浅薄になり、そのかわりに手段の選択においても卑劣になってくることである。かれ自身がもはや自分の政治的表明をまじめに保証しようと考えなくなっている間に（人間は自分自身が信じていないもののためには死なないものだ）、かれの傾倒者への要求がこの状態につれて、ついには「政治家」になるために指導者として最後に残されたものを犠牲にするまでに、いよいよ大きくますます図々しくなる。すなわち臆面もないあつかましさと、しばしば恥知らずに発達した嘘の手腕とが対になって、無節操が唯一実際の節操であるようなこの種の人間になる。

まじめな人間にとっては不幸だが、こういうヤツがさらにまた議会にくると、かれにとって政治の本質なるものは、ただかれの生活とかれの家族のための牛乳ビンを長く維持しつづけるための英雄的闘争になるだけだ、ということを人々ははじめから知っていなければならない。さらに妻子がこれに執着すればするほど、かれはますます議席のためにねばり強くたたかう。政治的本能をもっている他人はすべて、それだけですでにかれの個人的な敵である。すべて新しい運動がはじまると、かれは自分に起きるかも知れない終末のはじめではないかと邪推し、すべて偉大な人物に会うと、おそらくこの人物からいつか脅迫される危険があると邪推する。

こういう種類の議会の南京虫についてはもっと徹底的に語ろう。

三十歳でもまだ、かれの人生行路において学ばねばならないもっとたくさんのものがあるにちがいない。しかしそれはただ、原則的に自分にとりいれた世界観が提示している骨組の補充であり、充塡（じゅうてん）であるにすぎない。かれの学習はもはや原理的な学び直しではなく、習いたしていくことになり、そしてかれの傾倒者たちは、いままでかれから誤って教えられてきたという重苦しい感情に苦しめられる必要がなく、むしろ逆に、指導者の目に見える組織的な成長がかれらに満足感を与えるのである。

かれの学習はただかれ自身の教説の深化を意味するだけだからである。だがこれが、かれらの目にはかれらのいままでの観念の正しかったことに対する証拠である。

自己の一般的世界観の土台が誤っていると認めるからこそ、それをすてねばならない指導者は、かれのいままでの欠点のある洞察を認めて最終的に結論をだす覚悟があってこそりっぱな行動をしているのである。そのようなばあいには少なくともかれは、今後の政治の仕事での公的な活動を断念せねばならない。というのは、かれはすでに一度基礎的認識において誤りにおちいったのだから、またふたたび誤りをおかす可能性があるからである。だがいずれにせよかれは同市民の信頼を獲得したり、ましてそれを要求したりする権利を決してもっていないのだ。

もちろん、今日こういうりっぱな行動にふさわしい人がどんなに少ないかは、現在政治において「取引きする」ことを使命と感じているゲスどもの一般的愚劣だけでも証明している。

政治のために選ばれたものは、かれらの中にほとんど一人もいないのだ。

わたしはいままで、たとい他人以上に大いに政治に没頭したと信じていても、とにかく公的に行動することをさしひかえてきた。ただきわめて少数の仲間の間で、内心で動かされ、あるいはひきつけられたものについて語った。ごく狭い範囲でのこれらの話は、それ自体多くの貴重なものをもっていた。すなわちわたしは「演説」することはほとんど学ばなかったが、そのかわりしばしば計り知れないほど単純な観念や異論をもっている人々を知った。そのさいわたしは自己教育をつづける時間も可能性も失わずに勉強した。そのための機会は、当時ヴィーンほど好都合なところは、たしかにドイツにはなかった。

*

**政治思想**　旧ドーナウ王国の一般的な政治思想は、まず第一にその範囲にしたがって、――プロイセンの一部、ハンブルク、北海沿岸を除いた――同時代の旧ドイツにおけるよりも大きく、もっと包括的だった。わたしはいまではもちろん、このばあい「オーストリア」という名称の中に大ハープスブルク帝国の領域、すなわちあらゆる点から見てドイツの植民の結果、たんにこの国の形成の歴史的誘因であったばかりでなく幾世紀も国内の文化生活をこの政治的に、それゆえ人工的につくられた国に付与することができた力を主としてその住民の中で示した領域を指しているということを理解している。時代が進めば進むほど、ますますこの国の存立と未来は、まさしく帝国のこの胚細胞を維持することにかかってきたのだった。

この古い世襲領地が、たえず新鮮な血液を国家的文化的生活に循環せしめる帝国の心臓だったとすれば、そのときにはヴィーンは頭脳であり、同時に意志であった。

すでにその外観において、自己の壮麗な美しさによって全体のいまわしい老衰現象を忘れさせるようなこの都市に、そのような多民族集団において統一的女王として君臨する力があることを思わせた。

**ヴィーン最後の興隆**　帝国がその内部において、個々の諸民族の血みどろの闘争によって激しくけいれんしているにもかかわらず、外国、特にドイツは、ただこの都市の愛想のよい姿だけを見ていた。ヴィーンはこの時代に恐らくは最後の、そして最大の顕著な興隆を示しているように見えたので、それだけその錯覚も大きかった。ほんとうに天才的な市長の支配のもとで、老帝国の皇帝の尊厳な居住地はいま一度、驚くべく若々しい生にめざめていた。公式にはいわゆる「政治家」に数えられなかったが、オストマルクの植民民族の系列から生まれた最後の偉大なドイツ人で、同時にこの「帝国の

首都であり、国王の居住都市」たるヴィーンの市長として、ルエーガー博士は、次から次と、市の経済と文化政策の――あえていうが――あらゆる領域に、未曽有の業績を魔術で呼びよせるように残した。かれは全帝国の心臓部を強化し、この回り道を通って当時のいわゆる「外交官」がみんな集ったよりも、もっと偉大な政治家になった。

**オーストリアのドイツ人**　それにもかかわらず、「オーストリア」といわれる多民族組織はついに没落したが、これは決して古くからオストマルクにいるドイツ人の政治的手腕のせいとはいえず、時機をえたときにまったくしっかりした前提を与えられなければ、一千万の人間でもって種々の民族からなる五千万人の国家を永続的に維持することができない、という避けえない結果であった。

ドイツ系オーストリア人は大志をいだいていた。

かれらはつねに大ドイツ帝国の枠内で生活することに慣れており、ドイツに関連している課題に対する感覚を決して失っていなかった。かれらはこの国家において、狭いオーストリア帝国直轄地の境界をこえて、なおドイツの領域を見ていた唯一の人間であった。そのうえ運命がかれらをついに共通の祖国から分離したとき、かれらはこの巨大な課題を解決し、父祖たちがたえまない闘争でかつて東部からもぎとったドイツ主義をいつもなお維持しようとしたのだった。そのばあいなお次のことに注意すべきである。すなわち分裂した力だけではこれはなしえなかったのだ、ということである。というのは、最もすぐれたものの心と追憶は、決して共通の母国を感ずることをやめたのではなく、ただその残余だけが故郷にとどまっていたからである。

たしかにドイツ系オーストリア人の一般的視野は、比較的広かった。その経済的関係はしばしば、

多様な形式をもつこの帝国のほとんど全部を包括していた。技術家や官吏という指導的人員は大部分、ドイツ系オーストリア人によってしめられていた。だがかれらはまた、ユダヤ人がその固有の分野に手をのばさないかぎり、外国貿易の担い手でもあった。政治的にもドイツ系オーストリア人だけがなお国家をまとめていた。すでに軍隊の服務期間中は、故郷の狭い領域をこえて送りだされていた。ドイツ系オーストリア人の新兵は、その連隊自体はヴィーンやガリシアはもちろんのこと、ヘルツェゴーヴィナにもおかれていた。将校団はつねにドイツ人であったし、上級官吏階級も優勢だった。最後に芸術や科学もドイツ人が優勢だった。黒色人種でもまちがいなく無造作につくりだせるような近代芸術表現のキワ物をのぞけば、真の芸術精神の所有者や普及者は、ただドイツ人のみであった。音楽、建築、彫刻、絵画でも、ヴィーンは決して目に見えるほど枯渇しておらず、汲めどもつきぬ豊富さで、この二重王国[1]全般をささえている源泉であった。

最後に、ドイツ人は、少数のハンガリー人をのぞけば、すべての外交の担い手であった。けれどもなお、この帝国を維持しようとするすべての試みは、ムダであった。そこには本質的に前提が欠けているからである。

**オーストリアの諸民族の遠心性**　オーストリアという多民族国家のために、個々の国民の遠心力を克服する可能性はただ一つだけであった。この国が中央集権で統治され、それでもって内政的にも組織されるか、あるいは国家が一般に考えられぬかであった。

いろいろとよくわかるときには、「至高」の地位にあるもの[2]もこういう考えをもったが、たいがいはすぐに忘れるか、あるいは実行困難だとしてまたもやかえりみなかったのである。帝国をもっと連

少数の異民族の破片をのぞけば、一民族に属するものだけを包括していた。なによりもまずドイツ帝国は、の基盤があったから政治的伝統を克服することだけが問題であった。ドイツではつねに文化的に共通オーストリア国家には別の本質的な国内的前提条件が加わっていた。そのうえ、ビスマルクのつかんでいるドイツ帝国と反対に、ならず失敗におわらねばならなかった。

邦国家的に形成するという考えはすべて、すぐれた権力ある強力な国家的胚細胞を欠いているためかならず失敗におわらねばならなかった。

オーストリアでは状態が逆であった。

ここではハンガリーをのぞけば、各地方における自己の政治が偉大であったという追想がまったくなくなっているか、時間という海綿で吸いとられるか、少なくともぼかされ、不明瞭にされていた。それにかわっていまやいろいろの地方で多民族主義の時代に入って、民族主義的勢力が発展し、その克服は王国の辺境に民族国家が形成されはじめるにしたがって困難にならざるをえなくなった。その諸民族は人種的にはオーストリアに散在する個々の民族と同類か類似していて、かれらの側では、逆にドイツ系オーストリア人がなしうる以上の引力を、それ以来およぼすことができたのである。

ヴィーンすら長い間には、この闘争に耐えることができなかった。

ブダペストが大都市へと発展するとともに、ヴィーンははじめて競争者をもった。しかもその競争者の課題は全王国の連繫でなく、むしろ王国の一部を強化することであった。まもなくプラハがその例にならい、さらにレムベルク、ライバッハ等が続いた。これらかつての地方都市が個々の地方の国家的な首都に上昇してくるとともに、だんだんとその地方の自立的な文化生活の中心点を形成してきた。ところでこのようにしてまず、民族的、政治的本能がその精神的基礎をもち深化してきた。それぞれの民族のこの推進力が、共通の利益の力よりも強くなるときがいつかくるに違いなかった。そう

すればオーストリアは破滅するにきまっていた。

この進展はヨーゼフ二世の死後、その経過が非常にはっきりとたしかめられた。その促進要因は一部は王国自体にあったが、他の一部は当時のドイツ帝国の外交的立場の結果がつくりあげた一連の要因にかかっていた。

もしこの国家を維持するための闘争を真剣にとりあげ貫徹しようとするならば、ただやはり仮借なき、不屈の中央集権化のみが、目的に達することができるものだった。そのばあい、しかしまず統一的な国語を原則的に確立することによって、純粋に形式的に共属であることを強調し、これによって行政に対する技術的方策が与えられねばならなかった。それなくして統一国家は元来存立しえないのだ。同様にそれができてはじめて学校や教育による統一的国家観念が永続的に養われるのである。これは十年や二十年では達せられず、一般に植民問題ではすべて、瞬間的エネルギーよりも不屈の精神により大きな意味があるように、幾世紀間を勘定に入れなければならなかったのだ。

さらに行政も政治的指導も、きわめて強く一元化されて行なわねばならないことは、自明のことである。

なぜそういうふうにならなかったのか、あるいはもっとよくいえば、なぜそうしなかったのか、ということを確かめることは、わたしにとって有益きわまりないことだった。この怠慢の罪を負うもののみが、この帝国の瓦解に責任があるのだ。

古いオーストリアは、他国以上に指導力が大きくなければならなかった。そのうえにここには――指揮そのものも非常に無能だったが――民族主義的な基礎のうえにたえずその維持力をもっている国民国家の基礎が欠けていた。統一的な民族国家は、住民の自然的な惰性と、それと結合した抵抗力に

よってしばしば驚くほど長期間、内部的に崩壊することなく、悪質の行政や支配に耐えうることができる。さらに、そういう身体には生命がなく、息が絶え、死んでしまったかに見えるときにも、けっきょくは死んだと思ったものが突然もう一度起きあがり、破壊しがたい生命力の驚くべき徴表を他の人間に示すことがよくあるのだ。

**血の相違の結果**　だが、こうしたことは同一民族から成りたっていない、共通の血によるよりもむしろ共通の拳で維持されている国のばあいは違っている。ここでは支配のすべての弱点は、国家の冬眠を招来するのでなく、有力な意志の支配している時代には広がることができず、血の中に存在していた個々の本能をすべてめざめさせるための誘因となるのだ。数世紀にわたる共通の教育、共通の伝統、共通の利害関係等によってのみ、この危険が緩和されうるのだ。だからそういう国家組織は、国家が若ければ若いほど、ますます指導力の強さにかかってくる。実際すぐれた権力者や才知にとむ英雄によってつくられたものであっても、一人の偉大な建設者の死後、すぐにふたたび崩壊することが往々にしてある。しかもなお数世紀を経たのちでもこの危険が克服されたとはいえない。危険はまどろんでいるだけであり、共通の支配の弱点や、教育の力や、すべての伝統の崇高さが、いろいろの種族の独自の生命衝動の飛躍するのをもはや克服することができなくなるやいなや、突然危険だけがめざめることがしばしばあるのだ。

これを理解しなかったのは、ハープスブルク王家の悲劇的な罪であろう。

ハープスブルク王家のあるすぐれた一人に、運命はいま一度かれの国土の未来について炬火(きょか)をかかげさせたが、さらにそれも永遠に消えてしまった。

**ヨーゼフ二世**　神聖ローマ皇帝ヨーゼフ二世は、かれの家が帝国の外隅におしつめられているように、もしも最後の瞬間に父祖の怠慢をいま一度つぐなわないならば、バビロンのような諸民族の渦の中にいつか消えうせるに違いないと急に不安を覚えた。この「人類の友」は超人的な力をもって先祖の過失をせきとめ、数世紀にわたってゆるがせにされたのを十年で回復しようとした。かれの仕事のためにわずか四十年だけでも許され、そしてかれのあとに二世代だけでも手をつけた仕事を同じように継続したならば、この驚異は恐らく達成されたであろう。しかしかれがわずか十年たらずの統治のあとに、心身ともに困憊(こんぱい)して死んだとき、かれといっしょにかれの仕事も墓穴に埋もれ、永遠にカプツィーン修道会(4)の霊廟に眠るために、もはやふたたびめざめることがなかったのだ。かれの後継者たちは精神的にも意志の上でも、その課題を進捗(しんちょく)させなかった。

さて、ヨーロッパ中にはじめて新時代の革命のあらしの前兆が燃えあがったとき、オーストリアにも徐々に火がつきはじめた。だが、ついに炎が燃えあがったときには熱火は社会的、集会的あるいは一般政治的原因よりも、むしろ民族的源泉からの衝動力によってあおられたのだった。

**ドーナウ王国の崩壊**　一八四八年の革命(5)はいたるところで階級闘争の形をとったかも知れないが、オーストリアではそれは新しい人種闘争の発端であった。当時ドイツ人はこの原因を忘れているか、認識しないで、革命的な高まりに奉仕している間に、それとともに自己の宿命に封印をしてしまった。ドイツ人は西欧民主主義の精神をめざめさせることを助け、この精神はまもなくドイツ人からその存立の基礎をとりあげてしまったのである。

共通の国語をあらかじめ定め、そして確立することをせずに、議会の代表団を形成したことでもって、王国におけるドイツの優勢の終焉の礎石がおかれることになった。この瞬間から、それと同時に国家自体もまた失われた。その後に続くものはすべて、ただ帝国の清算の歴史のみであった。

この崩壊を追求することは、有益であると同時にショッキングなものであった。この歴史のくだした審判の執行は、個々に非常にまちまちの形で実行された。大部分の人々が瓦解の現象を盲目的にさまよったことは、ただオーストリアを滅亡させるべき神の意志を証明している。

わたしはここで個々のものに触れたくない。それは本書の課題ではないからだ。わたしはただ、諸民族、諸国家の没落のいつも変わらぬ原因としてわれわれの現代の時代にとっても意義をもち、けっきょくわたしの政治的な考え方の基礎を確立するのを助けたすべての過程を、根本的考察の範囲内で引用しようと思う。

**議会主義**　そのほかのことについては鋭い目を与えられていない俗物たちにも、はっきりとオーストリア王国の腐蝕を示しうる制度の中で、その先端にあって、最も多くその力を自己のものとしてもっている制度が――議会、あるいはオーストリアでいうライヒスラート(6)である。

この団体の手本は明らかに、イギリス、すなわち古典的「民主主義」の国にあった。そこからこの恵まれた機構を完全に転用し、それをできるだけ変えずにヴィーンに置いたのである。

衆議院と貴族院という形でイギリスの両院組織がその再生を祝った。ただ「建物」自体がいくらかちがっていた。バリィ(7)がかつてテムズの洋々たる流れから議事堂をつくりあげたとき、かれは世界に冠たる大英帝国の歴史の中に手を入れ、その中からかれの壮麗な建築物の千二百の壁龕、腕木、柱の

飾りを選びだした。そのようにして彫刻と絵画で、上院と下院は国民の名誉の殿堂になった。

ヴィーンにとってはここに最初の困難があった。というのはデンマーク人ハンセンが、新しい民衆代表の大理石建築に最後の破風をつけ終ったとき、かれは装飾を古代芸術から借りてくる以外に方法がなかった。ローマやギリシアの政治家や哲学者がいまではこの「西欧的民主主義」の劇場の建物に美をそえ、そして象徴的な皮肉ともいえるものは、両院の上に四頭立ての馬車が東西南北の四方の天空に向かって引っぱりあい、これによって当時国内で行なわれていたことを、外部に最もよく表現していることである。

「諸国民たち」はこの建物の中で、オーストリアの歴史が賛美されているのを、侮辱であり、挑発であるとして拒否した。同様に、ドイツ帝国自体においても、世界大戦の砲声がはじめてとどろくまで、ヴァロット(8)の作った議事堂の建物を、その碑銘だけでドイツ民族に捧げることをあえてするものがなかったのだ。

わたしが二十歳にもならないころ、フランツェンスリンクにあるこの壮麗な建物へはじめて行き、見物人として、傍聴者として衆議院の会議に出たとき、わたしはこのうえもなく不快な感情につつまれた。

わたしはずっと以前から議会を憎悪していた。けれども断じて制度それ自体を憎んだのではない。反対に、自由な感情をもっている人間として、わたしはこれ以外に政治の可能性があるとは全然考えなかった。というのはある独裁政治の考え方は、わたしのハープスブルク王家に対する姿勢からいえば、自由にさからい、すべての理性に反対する犯罪であるように思えたからである。

わたしは若いころに新聞を多読したために、自分自身もちろん気づかずに、イギリス議会に対する

ていた。イギリスでは下院もまたその任務に品位をもって責任をとる（新聞はこれを実に美しく描くことを心得ていた）というが、その品位はわれわれに強力な印象を与えた。一体、民族自治にとってより高度な形式がありえようか？

だがまさにそれだからこそ、わたしはオーストリア議会の敵だった。わたしは全体の行動の形式が偉大な手本にふさわしくないと思えた。しかしいまやなお次のようなことがつけ加わった。すなわち、オーストリア国家におけるドイツ人の運命は、オーストリア議会におけるドイツ人の立場にかかっていた。無記名普通選挙を導入するまでは、ドイツ人は議会でたいした勢力ではなかったがとにかく多数を占めていた。この状態でもすでに危険であった。というのは社会民主党の国家的に信頼しがたい態度によって――個々の異民族に属しているものをそむかせないため――ドイツに関する問題になると、いつもドイツ人の利益に批判的な態度をとったからである。社会民主党は当時すでに、ドイツ人の政党として見ることができなかった。しかし普通選挙権の導入とともに、ドイツ人の優越も純粋に数字どおりにとどまった。そこで国家をいっそう非ドイツ化しようとする道程には、もはや妨害物はなかった。

当時すでにこうした理由から、国民的自己保存衝動がドイツ人を代表せずいつも裏切っている民衆代表機関を、あまり好ましく思わなかったのだ。だがその欠陥は、他の多くのばあいと同様にまた、ことがらそれ自体にではなく、オーストリア国家に帰するものだった。わたしは以前はまだ、代表団の中にドイツ人がもう一度多数をしめるようになれば、この古い国家がなお存続するかぎり、原則的な態度についてこれに反対するきっかけはもはや存在しないだろう、と信じていた。

このように内心で考えて、わたしははじめてこの神聖にして異論のある場所にふみいった。もちろんそれはただ壮麗な建物の崇高な美しさによって聖化されているだけだった。ドイツの地にたてられたギリシア風の驚くべき建築である。

しかし、やがてわたしは、眼下に展開されているあわれむべき光景をみるやいなや憤慨した。ちょうど重要な経済的意義をもつ問題について態度を決定するために、数百人の民族代表が出席していた。

この最初の日だけで、数週間考えこますに十分だった。

提案の知的な価値は、その演説を一般に理解しうるかぎり、ほんとうに意気消沈する「水準」のものだった。というのは代議士のあるものはドイツ語でしゃべらず、かれらの母語たるスラブ語か、あるいはよくいえば方言でしゃべっているのだ。わたしがいままで新聞で読んで知っていたことを、いまや自分の耳で聞く機会をもっただけだった。大げさな所作で、あらゆる音調がいりみだれて叫び、荒々しく動く人の群、その間に人のよさそうな老人が、鈴を激しく振りながら、あるいはなだめ、あるいはさとすかのようにまじめに呼びかけ、議会の尊厳をふたたびとりもどそうと、顔じゅう汗を流しながらいっしょうけんめいになっていた。

笑わずにはおられなかった。

二、三週間後わたしはあらためて議会に入った。様子が変わっていた。認識をあらためねばならなかった。議場はまったくガラ空きだった。下の方ではねむっていた。二、三の議員がかれらの席にいて、お互いにあくびをしており、一人が「演説」していた。副議長がいたが、あきらかに退屈そうに議場を見ていた。

最初の疑惑が頭をもたげた。そこでわたしは、とにかく時間に余裕があるかぎり、いつも何度も行き、そのときの様子を静かに注意深く観察し、理解できるかぎり演説に耳を傾け、この悲しむべき国家の国民の選良の多少とも知的な顔つきを研究した——そして次第にわたし独自の思想をつくっていった。

だがわたしが以前にこの制度の本質についてもっていた考えを、まったく変えるかあるいは除去するためにも、一日の静観で十分であった。わたしの内心はもはや、この思想をオーストリアに採用したつくりそこないの形式に反対するのではない。そうだ、わたしは議会そのものをもはや認めることができなくなったのだ。その時までわたしは、オーストリア議会の不幸はドイツ人が多数を占めていないことにある、と考えていた。だがいまやこの制度の様式と本質全体にそもそもわざわいがあるのだと思えた。

当時わたしにはたくさんの疑問がうかんできた。

わたしはこの制度全体の基礎としての多数決の民主主義的原理を研究しはじめた。しかしまた国民の選良としてこの目的に奉仕すべき人物の知的、道徳的価値に多大の注意をはらった。

わたしはこのように制度と、その制度の担い手を同時に知ったのだ。

二、三年たつうちに、わたしにはさらに、近代の最も威厳ある幻影をもっている型が、わたしの認識と洞察の中に彫塑のようにはっきりとうかんできた。すなわち国会議員だ。かれは決してそれ以上本質的な変化をする必要のない形で、わたしに印象づけられはじめた。

今度も実際上の現実の直観教育が、最初ちらっと見ただけでは非常に魅惑的に思えるが、だがそれにもかかわらず人類を破滅させる現象に数えられるべき理論だおれになることからわたしを守ったの

である。

今日の西欧民主主義は、マルクシズムの先駆であり、マルクシズムはそれなしにはまったく考えられないに違いない。民主主義がまずこの世界的ペストに培養基を与え、そこからさらにこの伝染病が広がることができたのだ。その議会主義という外面的な表現形式で、民主主義はさらに「汚物と火から生まれた奇形児[9]」をつくったのだ。そのさいわたしには遺憾ながら、この「火」がすぐに燃えきってしまったように思えた。

わたしは今でもこの問題をヴィーンで検討するために提出してくれた運命に、十二分の感謝をしなければならない。というのは、わたしは当時のドイツにおいてであったら、簡単に答えをだしてしまっただろう、と恐れるからである。もしわたしがこの「議会」という笑うべき制度を、はじめてベルリンで知ったならば、多分わたしは反対の方向におちいり、そして民族とドイツ帝国の福祉がドイツ皇帝中心思想の権力をもっぱら促進することにのみ求め、そのくせ時代と人間とを理解しようとせず、同時に盲目的に対立しているものの側に、はっきりしたりっぱな理由もなく立ったに違いない。

オーストリアではこれは不可能だった。

ここでは一つの誤りから他の誤りに簡単におちいることはできなかった。議会は何にも役に立たなかったが、さらにハープスブルク王家はそれ以上に役に立たなかった――断じてそれ以上にである。ここでは議会主義を拒否しただけではなんにもならなかった。というのは依然として「さて何をするか」という問題がはっきり残っていたからである。ライヒスラートを拒否し、廃止してしまうと、唯一の政治権力として実際にハープスブルク王家だけが残るであろう。こう考えるだけで、特にわたしには、まったく我慢ならなかった。

わたしはこの特別のばあいの困難を研究して、さもなければこの程度の若年ではふみこみえないほど、この問題自体をさらに徹底的に観察するようにした。

**責任の欠如**　まず第一に、そしてなにより多くわたしを考えこませたことは、個々人がおよそ責任というものを明らかに欠いている、ということであった。

議会が何か決議する。その結果が非常にとんでもないことであっても——だれもそれに対して責任をとらず、だれも責任を問われることがない。一体破綻したあとでも、罪のある政府が総辞職すれば、これでなんらかの責任をとったというのか？　あるいは連立を変更したり、そればかりでなく議会を解散すればそれでいいのか？

一体全体、多数の優柔不断の人間にいつか責任を負わすことができるだろうか？

すべての責任感というものは、人に結びついていないのだろうか？

だが、もっぱら多数の人間の意志と好みを勘定にいれたものから成りたち、そして遂行されるような行動に対して、政府の指導的人間に実際に責任を負わせることができるだろうか？

あるいは指導的な政治家の課題は、創造的な思想や計画そのものを生みだすかわりに、むしろかれの企画の独創性をからっぽの頭をもった羊の群に理解させ、さらにかれらの好意ある賛成を請い求めるための技術においてのみ見られるのだろうか？

政治家の規準は、かれが大方針を定め、あるいは大きな決断をし、政治家らしい怜悧さの技術と同じ高度の説得の技術をもっていることなのか？

指導者の無能さというものは、こうしてある一定の理念に対して多少とも幸運によって集められた

群集の過半数を獲得しえない、ということで証明されるだろうか？

実際この群集が、そもそもその成果がその偉大さを示すまえに、理念を理解したことがかつて一度だってあるのか？

この世のすべての独創的な事業は、大衆の怠惰に対する天才の目に見える抗議ではないのか？

政治家はかれの計画のためにこれらの群集の好意にへつらって、それを得ることができなかったならば、何をすべきなのだろう？

政治家はそれを買いとるべきなのか？

あるいはかれが、同市民の愚鈍さを考慮にいれて、生活に必要なものとして認められた課題を遂行することを断念して、引退すべきなのか、あるいはそれにもかかわらず居すわるべきなのか？

そのようなばあいに真の品格をもつものは認識と品位あるいはもっとよくいえばりっぱな志操との間の解決しがたい葛藤（かっとう）におちいらないだろうか？

このばあい一般の義務と個人的名誉の責任との間をわける境界はどこにあるのか？

真の指導者というものはすべて、こういうばあいに政治的やみ商人に堕することを、ことわらないでいいのか？

そして逆にやみ商人がすべて、最後の責任は決してかれになく、把捉（はそく）しがたい群集が負うべきであるということから、政治で「取引きする」ことを実際に天職と感じていてもいいのか？

**指導者思想の破壊**　われわれの議会の多数決原理が指導者思想一般の破壊に導く必然性はないのか？

ところでこの世の進歩はおそらく多数の頭脳にもとづくもので、一人の頭脳にもとづくものではない、と信じているのか？

あるいは将来のためにこの人類文化の前提を欠くことができるぐらいに考えているのか？

反対に今日、これまで以上にそれが必要であると思われないのか？

多数決という議会主義の原理は、個人の権利を否定し、そのかわりにその時々の群集の数を置くことによって、自然の貴族主義的根本思想を凌辱(りょうじょく)する。もちろんそのばあい、貴族という観念は、決してわが一万人の上層階級の今日の退廃の中に具体化されているわけではない。

この近代民主主義議会主権という制度が、いかに被害をもたらしているかは、もちろんユダヤ人新聞の読者は、かれが自主的に考え吟味することを学ばぬかぎり、想像しがたいのである。まず第一にこれが、政治生活全体に現代の最も劣悪な現象が信じられないぐらい氾濫(はんらん)している原因である。大部分が、創造的な功績や仕事でなく、むしろ多数のものの好意をけずりとったり、取引したりすることでなりたっている政治活動に関して真の指導者がいかにひきこまれようと、この活動は小人物に対応して、したがってかれらを引きつけるにちがいないのである。

**人物の排除**　こういうつまらぬ人物が、今日、精神、能力ともに矮小になればなるほど、また自分で自分を見て実際の姿のみじめさを意識すればするほど、ますますかれに巨人のような力や独創性を求めず、むしろ村長のずるさに甘んずる体制、ペリクレス[10]の賢明さよりもこの種の賢明さが好ましく見える体制を、かれは称揚するにちがいない。そのさいこういうアホウは自分の行為の責任で決して苦しむ必要はない。かれはこういうような心配からは、とっくに根本的に解放されている。かれは、

かれの「政治家的」不細工の結果がどうであろうと、かれの運命がすでにとっくに定まっていることを十分知っているからである。すなわちかれはいつか他の同じぐらい偉大な人物にその席を明け渡さねばならないのだ。思うに個々人の水準が低下するにしたがって大政治家の数が増すのが、こうした没落の徴候なのである。かれはしかし議会主義的多数への依存が増すとともに、だんだんと小さくならねばならない。というのは偉大な人物はバカな無能者や饒舌家(じょうぜつか)の小使になるのを拒否するし、逆に大多数の代表者たちは――それはかくのごとくバカであるが――すぐれた頭脳のものを心から憎むものだからである。

先端に立っている指導者が、その知能の水準が出席者の水準と同程度であるのを知っているのは、シルダーの市会[11]のような議会の代表にとって、いつもなぐさめになる気がするのだ。だれでも時々自分の精神をその間にひらめかしうる喜びをもち――そしてとりわけヒンツェが親方になれるなら、いつかペーターだってなれぬはずがない、ということがあるからだ。

だが民主主義のこの発明は、最近になって真の恥辱にまで発展した特性、すなわちわれわれのいわゆる「指導者たち」の大部分の卑怯(ひきょう)な特性に、最もぴったりと応ずるのだ。いくつかの重要なことをすべて実際に決定するばあいに、いわゆる大多数というスカートの影にかくれることができるのは、なんと幸福なことだろう！

こういう政治のおいはぎを一度見るがよい。あらゆる仕事を行なう場合に、いかにかれらが自分のために必要な共犯者を確保し、それとともにいつでも責任をのがれうるようにするために、大多数の賛成を心配そうに請い求めていることか。しかし、この種の政治活動は、心から上品で、同時にしかし勇気もある男はいやがり憎むけれども、すべてのあさましい性質のものたち――自分の行動に対し

て個人的に責任をとろうとせず、防御物を求めるものは卑怯なルンペンである——を引きつけるおもな理由がこれである。だが、もしも国民の指導者が、一度こういうあさましい人間からなりたつならば、すぐに悪い報いがくるであろう。そうなるともはや決定的行動に対して勇気をふるいおこすことができず、決断に向かって奮起するよりは、屈辱的な名誉毀損をあまんじて受けるようになる。とにかく仮借なき決意を遂行するために自己の身体と頭脳を投げだす覚悟ができているものが、もはやいないからである。

実際、一つだけ決して忘れてはならないことがある。すなわち多数は、このばあいにも、決して一人の人間の代理ができない、ということである。多数はいつも愚鈍の代表であるばかりでなく、卑怯の代表でもある。百人のバカものからは実に一人の賢人も生まれないが、同様に百人の卑怯者からは、一つの豪胆な決断もでてこない。

しかし個々の指導者の責任が軽くなればなるほど、自分はあわれむべき程度のくせに、人なみに国民に対して不朽の努力を捧げるために招かれている、と感じているものの数もだんだんと多くなっている。実際かれらはまったく、いつになったら自分の順番がくるか待ちきれないのである。かれらは長い縦隊でならび、遺憾の念で苦しみながら自分たちの前で待っているものの数を数え、人間的な考慮によってかれらが車に乗せられる時間をほとんど数えつくすのだ。だからかれらは自分たちの目の前にちらついている役職の更迭を待ちこがれ、そしてかれらの順番を早くしてくれるどんなスキャンダルでもありがたがる。けれどもだれかが自分の占めている地位を二度と譲ろうとしないときは、かれらはこれをほとんど共通の連帯責任という神聖な協定の違反と感ずる。そうしたらかれらはたちが悪くなり、この恥知らずがついに失脚し、その暖まった席をふたたび一般に用だてるまでおとなしく

していない。そのためかれはすぐにはこの地位にもどることができない。というのはこういう無頼の徒がそのポストを放棄するように強制されるやいなや、他のものが叫び声をあげたり悪口雑言をはいたりして、かれをそこから離しておかないかぎり、かれはすぐにふたたび待っているものの一般の列にすべりこもうとするからである。

これらすべてのものから生ずる結果は、こうした国家制度の最重要な地位や役職における驚くべく早い更迭である。どんなばあいにもその結果は好ましくなく、往々にしてまさしく破滅的に作用する。というのは、実際に愚鈍なものや無能なものだけが、この慣習の犠牲になるからである。人々が一度これを認識するやいなや、特にこういう人物が自分の列から出たものでないのに、この崇高な社会にあえて侵入してきたときには、かれらはただちに防衛のためにがっしりした抵抗線をつくるのである。人々は原則的にかれらだけでいようと欲し、そしてゼロの中からなにか一を生じえた頭脳の人をすべて、共通の敵として憎悪するのである。そしてこの方面でその本能は、他のすべての方面で欠けているだけいっそう鋭いのである。

そのようにして結果は、いつも指導者層の精神的貧困化がますます広げられることになる。そのさい国民や国家のために何が生ずるかは、この種の「指導者たち」に個人的に属さないかぎり、すべての人間がみずから判断しうるのである。

旧オーストリアはすでに正真正銘の議会主義政府をもっていた。

たしかその時々の首相は、皇帝や国王によって任命されたが、すでにこの任命からして、議会の意志の執行以外のなにものでもなかった。しかし個々の大臣のポストをけずりとったり取引したりすることが、すでに生粋の西欧民主主義であった。その結果がまた応用された原則にかなった。特に個々

の人物の更迭はもちろんますます短期間に、ついにはほんとうにせきたてられるように行なわれた。それに応じてかつての「政治家たち」の偉大さはますます低下し、ついには一般にただ議会的やみ商人というう小さいタイプのものだけが残るまでになる。その政治家の価値は、その時々の連立をのりではりあわせることができること、すなわち実際の仕事にはこの民衆代表者の能力だけを基礎とすることができるという最も些細な政治的行為を遂行することだけで、その能力がはかられ認められるのである。

ヴィーンという学校は、この分野で、そのように最良の洞察を仲介することができたのだ。

それ以上にわたしをひきつけたものは、これら民衆代表者のもっている能力と知識とを、かれらを待っている課題と比較することであった。もちろんそのばあいには、欲すると否とにかかわらず、この民衆の選良たちの知的水準について、もっとくわしく研究しなければならなかった。そのさい、またわれわれの公的生活のこの華やかな現象を露呈するのに役立つ過程についても、必要な注意をおこたるわけにはいかなかった。

またこれらの紳士の真の能力が祖国の奉仕に配置され用いられているか、その種類と方法、いいかえればかれらの活動の技術的過程を、徹底的に調査し、検討すべき価値があった。

この内部の状態に入り込み、人物や事物の根本を仮借なき鋭い客観性で研究する決心を固めれば固めるほど、議会生活の全像がますますあさましくなってきた。実際、何かを検討したり、態度を決定したりするたびごとに、その担い手を通して唯一の公平な根拠として二言目には「客観性」ということばに論及する制度に対しては、以上で述べたような見方はたいそう適当である。これら紳士たち自身とその不愉快な存在の法則とを試してみるがいい。結果はただあきれるばかりである。

客観的に観察すれば、この議会主義ほど誤った原則はない。

このばあい民衆代表諸君の選挙がどんな方法で行なわれるか、一般にいかにしてかれらが官職につき、新しい顕職に達するかということは、まったく度外視しよう。これとともに、一般の欲求やあるいは必要をみたすことがほんのわずかだけ問題になるということは、大衆の政治的理解力が、まだ一定の一般的政治的観念に達するまでには進歩せず、そのために必要な人物をさしだすまでになっていないことをよく知っているものならば、だれにでもすぐにはっきりとわかるであろう。

**「世論」**　われわれがつねに「世論」といっているものは、自分でえた経験や個々人の認識にもとづくものはごく小部分だけで、大部分はこれに対して、往々にしてまったく際限なく、徹底的にそして持続的にいわゆる「啓蒙（けいもう）」という種類のものによって呼びおこされるものである。

信仰上の態度決定が教育の結果であり、宗教上の要求それ自体がただ人間の内心にまどろんでいるに過ぎないのと同様に、大衆の政治的意見もまた往々にしてまったく信じられないほど強靭で徹底的な加工を、心と理性にほどこした究極の結果であるにすぎない。

このばあい、宣伝ということばが非常にぴったりするが、政治「教育」に図抜けて強力に関与しているものは新聞である。新聞はまず第一にこの「啓蒙活動」を考え、それによっておとなに対する一種の学校をなしている。ただこの授業は国家の手になく、ある部分は最も劣等な勢力の手中にある。わたしは若くしてヴィーンで、この大衆教育の機関の所有者や精神的な製造者を正しく知るまさしく絶好の機会をもった。わたしははじめは、国家の中にいるこの不快な大勢力が、一般のものがしっかりといだいている内心の願望や観念をまったくつくり替えようとするときに、どうしてそんな短期間

為をつくりあげ、その間同時に逆に生活上の重要問題は一般に忘却され、もっとよくいえば大衆の記憶と回想の中から簡単に盗みだされてしまうのである。

そのようにして、二、三週間たつうちに、魔法のように何もないところから名前がつくり出され、その名前に公衆の信ぜられぬほどの希望が結びつけられ、さらに実際にすぐれた人物でもしばしばかれの全生涯においても与えられないような人気をつくろうとするのである。そのさい、一か月前にはだれも聞いたことがないような名前で、一方では同時に国家生活やその他の公的生活で古くから定評ある人々が、最も健全でありながら簡単にその時代社会から抹殺されてしまうか、あるいはかれらの名前がやがて、まったくはっきりと下劣で無頼なシンボルになるように脅迫する悲惨な誹謗を浴びせかけられるのだった。このゴロツキ新聞の危険を完全に正しく評価しうるためには、りっぱな人間を一度で呪文をかけたように、同時に何百という方向から清潔な衣服に下劣な誹謗と、名誉毀損の汚物桶を注ぎかける、卑しいユダヤ人のやり方を研究しなければならない。

こういう精神的な盗賊騎士には、自己の卑しい目的を達するために合致しないものは何もない。かれはそのさい、家族の最も内密なことまで中へはいってかぎつけ、不幸な犠牲者にとどめをさすにちがいないようなあわれむべきでき事を、キノコを探し出すような本能で探し出すまで止めないのだ。しかし公的な生活にも、私的な生活にさえも、まったく何もかぎだすものを見つけえないと、幾度となく取消しても、それだけを取ってみると何かが引っかかるだけでなく、かれの遊び仲間のみんなによって誹謗をただちにみつけ、幾百回となくくり返した結果、たいていのばあいにそれに対する犠牲者の闘争がまったくできなくなるのだ、という不動の確信をもってヤツは簡単に誹謗するのであ

る。そのさいこういうゴロツキどもは、他の人間には信じられないぐらいの、あるいは理解さえもできないような動機から何か企てるのである。神よ守りたまえ！　そういうようにルンペンは愛すべき同時代の人々を、最も無頼な方法で攻撃しながら、このイカは実直さとかもったいぶった文句とかいうまことらしい墨雲の中へかくれ、「ジャーナリストの義務」とか、それに似た虚偽のくだらないことをしゃべり、しかもそのうえ増長し、会議とか、会合とか、またこういう疫病がたくさん集まる機会には、まったく特殊な、すなわち、ジャーナリストの「名誉」についてムダ口をたたき、おまけに集まってきた無頼漢どもはおたがいにおもおもしく確認しあうのである。

だが、このゲスどもが、いわゆる「世論」の三分の二以上を製造していて、その泡から議会主義という愛の神が発生したのだ。

このやり方を正確に描き、そのまったくの嘘にみちた不誠実さをのべるためには数巻を要するであろう。しかしまたこれを度外視し、そしてその活動とともに所与の結果だけでも観察するならば、正しく信ずる気持ちをもつものならば、この制度の客観的に見た狂気を想像するためには、これで十分であるように思う。

この常軌を逸した、危険な人間の錯乱は、民主主義的議会主義を真のゲルマン的民主主義と比較するやいなや、最も早く最も容易に理解できるのである。

**多数決の原理**　前者の注目に値する点は次のところにある。すなわち一定数の男女――たとえば五百人の男子、最近では婦人も――が選ばれる。いまやどんなことでも最後決定をすることがかれらの義務である。かれらだけが実際上政府である。というのは、かれらから外面的には国家事務を管理

する内閣が選ばれるとしても、それにもかかわらずこれはただ見せかけにすぎない。実際にこのいわゆる政府は、まず事前に一般会議の承認を得なければ、何も行なうことができない。しかし最後の決定は政府にはなく、議会の多数者にあるのだから、政府は同時にまた何も責任を問われない。しかし最後の決定は政府にはなく、議会の多数者にあるのだから、政府は同時にまた何も責任を問われない。どんなばあいにも政府は、ただその時々の多数の意志の執行者であるにすぎない。人々は政府の政治的能力を、それがわかるならば、多数者の意志に順応するか、それとも多数者を自己に引きつけるか、という技術によって判断しうるだけである。だが政府はそれとともに、事実上の統治者の地位から、その時々の多数者に対するこじきにまで転落するのだ。しかり、政府の最も緊急な課題は、いまや一般に、ことあるごとに現在の大多数の好意を確保するか、あるいはもっと好意ある新しい多数をつくることを企てるかというところだけにある。これが達せられれば、さらにふたたび政府は短期間「統治」を続けることができ、これが達成されなければ、やめてもよいということになる。元来、そのさい政府の意図が正しいかどうかは、まったく重きをなさないのである。

しかし、それと同時にすべての責任は、実際上除外されてしまうのだ。

これがどんな結果に導くかは、ごく簡単な考察から推論できる。すなわち、職業とか、あるいはまったく個人の能力とかにしたがっている選出された五百人の民衆代表者たちの内部構成は、分裂して多くはまたあわれな像を生じている。というのは、これら国民から選ばれたものが、同様に精神や知性の点でも選ばれたものであるとはどうしても信じられないからだ！　才知あるとはいえないすべての選挙人の投票用紙からは、政治家が同時に百人も生ずるなどと希望的に考えないでほしい。一般に普通選挙から天才が生まれるだろうなどというナンセンスなことには、いくら鋭く対抗してもしすぎることはない。第一に、ある国民の中にはすべてが聖化されるぐらいの長い間に一度だけ真の政治家

が生ずるのであり、同時に百人もまたそれ以上も一度に出ることはない。そして第二に、大衆がすべてのすぐれた天才に対して感ずる嫌悪というものはまさしく本能的なものなのだ。選挙によって偉大な人物が「発見」されるまえには、ラクダも針のアナを通っているであろう。

実際に大衆の平均水準をこえてひいでているものは、たいてい世界史に個人的に出てくるのが常である。

だが、五百人というかなりの数の人間が、国民の最も重要な利害について票決し、政府を指定する。すると政府は一々個々のばあいに、すべての特殊な問題に、ふたたび議員閣下の同意をえなければならない。それゆえかくのごとく事実と政治は、五百人によってなされるのである。

たいてい政治はまたそんなようなものだ。

しかし、この民衆代表の独創性はまったく問題外としても、解決をまっている問題がいかに多様であるか、解決したり決定したりされねばならない領域がいかに広いか、ということを考えてほしい。そして、いつもまったくごく少数のものだけが、いま取扱っていることがらについて知識と経験をもっているにすぎない人間の大集会に最後の決定権を委任している統治制度というものが、このためにいかに不適当であるかがよくわかるであろう。最も重要な経済的措置さえ、経済的予備教育をその構成員の中の十分の一だけがもっているにすぎない論壇に提出される。しかしそれはあることがらの最後決定を、これについてのあらゆる前提を完全に欠いている人々の手にゆだねることにほかならない、といえる。

しかし他のすべての問題についてもまた然りである。この制度の構成は変わらないから、いつも決定は無知無能の多数者によってなされるだろう。取扱われる問題は公の生活のほとんどすべての領域

に広がっているので、したがってそれについて判断したり決定したりする議員はいつも交代することが前提とされるだろう。けれども、たとえていえば、高度の外交問題についてと同じその人間に、交通の事項まで処理させることは不可能である。かれらが、数世紀にかろうじて一度現われるぐらいのほんとうに万能の天才ならば、事情が違うだろう。だが、遺憾ながらたいていは一般に、「頭」のないことが問題になるのであり、同じように偏狭でうぬぼれが強くてしかも尊大ぶったディレッタントや、このうえもなく悪質な精神的な娼婦社会が問題になるのだ。また最も偉大な人物でさえ、注意深く熟慮しなければならないことがらについて、これらの支配者たちが、しばしば理解しがたい軽率さで話をしたり、決定したりするのはここに原因があるのだ。国家全体の、実際国民の将来に対して最も重要な意義のあるものについての処置が、そこではあたかも人種の運命がでなく、シャーフコップやタロックの一ゲーム(12)——そのほうがかれらにはずっとよく適しているが——が机上にあるかのごとく、取扱われる。

そういった議会の代議士がいずれも、最初からずっとかかる責任感のなさにとりつかれていた、と信ずることはたしかに正当でないであろう。そうだ、断じてそうだ。

**性格の腐敗**　しかし、この組織が個々人を強制して、かれにはまったく畑ちがいの問題に態度を決めさせている間に、次第に性格がそこなわれてくる。「諸君、われわれはこの事項については、何もわかりません。少なくとも、わたくし個人はまったくわからないのであります」と、宣明する勇気をふるいおこすことのできるものはあるまい。(そのうえ、こんなことはあまり役に立たない。というのは、かかる種類の率直さはまったく理解されないばかりか、このようなバカ正直によって、一般

的な遊びを台なしにさせるようなことはないからだ。）しかし、人間を知っているものならば、こういう貴顕社会では、だれも好んでいちばんバカなものになりたくないこと、そしてある社会では正直はいつも同時にバカを意味することがわかるだろう。

こうしてはじめは高潔な代表者も、必然的に一般的虚偽とごまかしの軌道に投げこまれてしまう。まさしく個人が違った態度をとっても事態そのものにはなんら変化がないという確信が、一、二のものにはまだ生ずるかも知れない正直な衝動を、すべて殺してしまうのだ。かれはついに、自分自身はまだまだ他のものの中でいちばん悪くはない、自分といっしょにやっていることによってもっと悪くなっただろうものを阻止したのだ、と自分に信じさせるかも知れない。

もちろん人々は、次のように異論をとなえるでもあろう。たしかに個々の議員はあれやこれやの事項に特別に精通していないが、しかしかれの態度決定は実際当人の政策の指導者としての党派から助言されるのだ。この党派はもともと専門家から十二分に説明を受ける特別委員会をもっているのだ、と。

これは一見正しいように思える。だが問題はさらに次の点にあるのだ。すなわち最も重要な利害において、態度決定をするために必要な知識をもっているものが二、三人しかいないのに、なぜ五百人も選挙するのか？　ということである。

しかり、まさにこれがことの真相なのだ。

今日の民主主義的議会主義の目的は、おそらく賢人の会議を形成することでなく、むしろ精神的に従属しているゼロにひとしい群を寄せ集めることにある。個々人の人格的偏狭さが大きければ大きいほど、一定の方向へ指導することがますます容易になる。ただそうしてのみ、今日の悪い意味での政

党政治がなされうるのである。しかしそうしなければ、本来の黒幕がつねに個人的に責任を負わされることなしに、いつも注意深く背景にかくれていることができないのである。というのは、また国民にとってそれほど有害などんな決定でも、だれの目にも実際はっきりとルンペンに見えるものたちには負わされず、党派全体の肩にかけられるからである。

しかし、それと同時に実際の責任はすべてなくなる。なぜなら責任というものは個々の人物の義務感の中にだけあるもので、議会主義的おしゃべり同盟の中にはないからである。

**ユダヤ的民主主義**　この制度は、正直で誠実で個人的責任をとる覚悟がある男は、それを憎まねばならないのに、このうえもない嘘つきで、同時に特に日光を恐れる潜行者だけに好まれ、価値があるものだ。

それゆえこの種の民主主義はまた、かれらの内心の目的にしたがって、いまもなお未来永劫に太陽を恐れるべき人種の道具である。ただユダヤ人だけがこの制度——かれ自身のごとく不潔で不正直なこの制度を賞賛しうるのである。

＊

**ゲルマン的民主主義**　これに対立しているのが行動に対してすべての責任を完全に引き受ける義務を負っている指導者を自由に選ぶ、真のゲルマン的民主主義である。そこには個々の問題に対する多数決はなく、ただ自己の決断に対して能力と生命をかけるただ一人の決定だけがある。

このような前提のもとに、こうした危険な課題に一身を捧げる覚悟ができているものはなかなかいだろうと異議をとなえたならば、それについてはただ一つの答えがあるだけである。すなわち、

ありがたいことには、手近な価値のない野心家や道徳的不徳義漢が、回り道をして民族同胞の政府をつくることができず、引きうけるべき責任の大きさによって、無能者や弱者がしりごみする、というところにこそゲルマン的民主主義の意義があるのだ。

しかし、それにもかかわらず、いつかそのようなものが忍びこもうとするようなことがあれば、人々はかれを簡単にみつけ、容赦なくどなりつけるであろう。さがれ、卑劣漢！　足をひっこめろ、階段が汚れる！　というのは、歴史のパンテオン[13]へ登るきざはしは、潜行者のためにあるのでなく、英雄のためにあるからだ！

＊

**崩壊にひんする二重王国**　わたしはヴィーン議会に出席すること二年で、こういう見解に達した。わたしはそれ以上議会へ入らなかった。

老ハープスブルク国家の近年ますますいちじるしくなった脆弱（ぜいじゃく）さには、議会政治が主たる功績があった。その影響によってドイツ人の優勢が破られれば破られるほど、ますます多民族同士が漁夫の利を占めうる体制に堕した。国会においてさえ、これがつねにドイツ人の犠牲で行なわれ、それとともにもちろん最後には帝国の損失をもたらすものであった。というのは、すでに世紀の転換期には、どんな愚直な人間でも、王国の引力では各地方の分離志向をこれ以上封ずることができない、ということがわからねばならない状態だったからである。

それどころではない。

国家が自己を保持するために用いなければならない手段があわれなものになるにつれ、国家に対する一般の軽侮の念がますます高まった。ハンガリーにおいてのみならずまた個々のスラブ人の地方で

た。人々はむしろそのような老衰の徴候を喜んだ。とにかく人々は王国の再興よりも、むしろその滅亡を望んでいたのだ。

しかしなお完全な崩壊は、議会でどんな恐喝に対しても品位なく譲歩し、それを履行することによって阻止された。そのばあい、国内では個々の民族が互いに反目して、できるかぎり巧妙に漁夫の利を占めようとすることによって、ドイツ人が償いをせねばならなかった。それにもかかわらず一般的な発展の方向は、ドイツと反対の方向に向かっていた。特に王位継承権がフランツ・フェルディナント大公にある程度の影響を認めはじめて以来、天くだり的に計画や法規のチェコ化が促進された。可能なかぎりのあらゆる手段で、この二重国家の未来の支配者は非ドイツ化を援助し、あるいは非ドイツ化を促進させようとし、少なくとも庇護しようとした。そのようにして純粋のドイツ人の土地は、国家官吏の更迭によって徐々に、しかし迷うことなく確実に、言語混淆の危険地帯にずり動いていった。下オーストリアにおいてさえこの過程が次第に急速に進みはじめ、そして多くのチェコ人はヴィーンをとっくに自分たちの最大の都市とみなしていた。

その家族がもはやチェコ語だけで話をしていたこの新しいハープスブルク王家の指導的な考え方は（大公妃はもとはチェコ伯爵令嬢で王子と身分ちがいの結婚をしたのだ。かの女は反ドイツ的立場を伝統的にとっている階層の出である）中部ヨーロッパに正統的ロシアに対する防壁として、厳格なカトリック派の基礎のうえに立つスラブ国家を漸次建設することであった。それとともにいままでしばしばハープスブルク王家の人々によって行なわれたように、ふたたびまた宗教が純粋の政治思想に——少なくともドイツの視点から見れば——不幸な思想のために役立たせられるにいたったのである。

その結果は、いろいろの点から見て悲しむべき結果以上のものであった。ハープスブルク王家は王位を失い、ローマは大きな国を失った。

ハープスブルク王家もカトリック教会も、期待された報酬は得られなかった。なぜなら王位が宗教的要素をその政治的考量に用いたため、王位自体がはじめはもちろんありえないと考えていたある精神をよびおこしたからである。

**ハープスブルクとドイツ主義**　ハープスブルク王家は王位を失い、あらゆる手段で旧王国内のドイツ主義を根絶しようとした試みから、その答えとしてオーストリア内に汎ドイツ主義運動が起ってきた。

前世紀の八十年代に、根本的にユダヤ的立場に立つマンチェスター派の自由主義[14]が、この王国においても、踏み越えたといわぬまでも最高潮に達した。しかし、これに対する反動は、旧オーストリアではすべてのばあいにそうなのだが、まず第一に社会的観点からでなく、国家的観点から出てきた。自己保存衝動が、ドイツ人を最も鋭い形で防御させるようにしたのだ。そして第二に経済的考量も徐々に決定的な影響をおよぼしはじめた。そのようにして一般的な政治的無秩序から、二つの党派が形成された。一つはより国家主義的な党、他の一つはより社会主義的な党であり、しかし両者とも将来のために興味深いものであり、有益なものであった。

一八六六年の戦争[15]が敗北に終ったのちも、ハープスブルク王家は戦場で報復しようとする考えをもっていた。ただメキシコでのマックス皇帝の死が――その不幸な遠征の原因を人々はまず第一にナポレオン三世に帰し、その惨死がフランス人によってなされたということから、一般的な激昂をよび起した――フランスとの緊密な提携をさまたげていた。それにもかかわらず当時ハープスブルク王家は、

付をつくったのである。

とき、全君主の中の「最も賢明な君主[18]」は時機適せずとみて、この悪い賭に対してできるだけよい顔知れない。だが戦場からの最初のそれも奇跡的な、ほとんど信ぜられぬぐらい雄々しい報告が着いたたならば、おそらくヴィーン宮廷はザドーヴァ[17]の復讐のために、たしかに流血の一戦を強行したかも機をうかがっていた。一八七〇年および七一年の戦争[16]があれほど比類のない勝利をおさめていなかっ

**ドイツ系オーストリア人の反乱**　この両年の雄々しい戦いは、しかし、もう一つの非常に大きな驚異をもたらした。というのは、ハープスブルク王家の人々にとってこの態度変更は、決して内心の衝動からでなく、諸事情の強制に応じたものだからである。しかし旧オストマルクのドイツ民族は、ドイツ帝国の勝利の陶酔によって感動させられ、そして深い感動とともに父祖の夢の再興をりっぱに実現させようとした。

実際誤ってはならない。すなわち真にドイツを思うオーストリア人は、ケーニヒグレーツ[19]の戦いの中でも、この瞬間から、もはや旧式な連邦という腐敗した老衰にとりつかれているべきでない――それはもはやそうではなかったが――という帝国の再興のために悲劇的ではあるが必然的な前提を認めていたのである。かれらはハープスブルク王家がその歴史的使命をついに終え、そして新しいドイツ帝国はその皇帝に、その雄々しい志操からいって、「ラインの王冠」に値する元首[20]を選ぶことができるということを、まずなによりもそして最も根底から身体で感じとったのである。かつてずっと以前に、国民にフリードリッヒ大王を永遠の高揚のための輝かしい表象として贈った王家の子孫に、運命がこの封土を授与したことを、どれほど多く賞賛したらいいのだろうか。

しかし大戦の後にハープスブルク王家が断固として二重国家の危険なドイツ人（かれらの内的心情は疑う余地もなかった）を徐々に、だが容赦なく絶滅させることに着手しはじめたとき――というのはこれがスラブ化政策の目的であらねばならなかったが――最後の宣告を受けた民族の反抗が、近世ドイツ史上未曽有の高さに燃えあがった。

初めて国民的、愛国的な心情をもった人々が、反徒となったのだ。

反逆が国民に対するものでなく、国家そのものに対するものでもなく、かれらの確信によれば、自民族を滅亡に導かざるをえない政府のやり方に対してだった。

近世ドイツ史上はじめて、ありきたりの王党派的愛国主義が国民的祖国愛、民族愛から分離されたのだ。

**国家の権威は自己目的にあらず**　国家の権威は、それが民族の利害に応じ、少なくとも民族に害を与えるものでないときにのみ、尊敬と支持を要求する権利をもっていることを、明確に一義的方法で確認するにいたったことは、九十年代のドイツ系オーストリア人の汎ドイツ主義運動の功績であった。

自己目的としての国家の権威というものはありえない。というのはこのばあいには世界のどの専制政治も、犯しがたく神聖なものといえることになるからである。

もし政治権力のたすけによって、ある民族が滅亡に導かれるならば、そうした民族に属するものがみんな反逆することは、その時には権利であるばかりでなく義務でもある。

しかしそういうばあいがいつ生ずるかという問題は、理論的論文では決せられず、力とそして――

その成果によって決せられるのである。

とにかく政治権力というものはすべて、それがいかに悪くとも、また民族の利害を幾度となく裏切ろうとも、もちろん国家の権威維持に対する義務を要求するものだ。だからこうして権力を抑圧することによって、自由と独立をうちたてるべき民族的自己保存衝動は、敵が自己を維持するために用いるのと同じ武器を用いなければならない。だから闘争は、くつがえさるべき権力が「合法的」手段を用いるかぎり、「合法的」手段でもって戦われるだろう。だがまた圧制者が非合法的手段を用いたならば、非合法的手段の前でしりごみする必要もない。しかし一般に次のことは決して忘れてはならない。人間存在の最高の目的は、国家を維持することやあまつさえ政府を保持することではなく、種の保存であるということである。

しかしひとたびこの種が圧迫されたり、それ以上に絶滅されるような危険がある場合には、そのときには合法性の問題はもはや副次的な役割を演ずるだけである。そのときにも支配権力は何回となくいわゆる「合法的」手段をその行動に用いることがあるかも知れない。けれども圧迫されたものの自己保存衝動が、あらゆる武器を持って戦うことは、つねにこのうえもなく高く正当と認められることである。

ただこの原則が承認されているからこそ、その地上の諸民族の内的、外的な奴隷化に反対する自由の闘争が、非常に力強く歴史の手本の中に伝えられているのである。

**人権は国権を破る**　人間としての権利は国家の権利を破る。

ある民族が人権闘争で負けるならば、それを運命のはかりにかけてみると、この世界で存続する幸

もないものには、永遠に公正な摂理がすべてに終末を定めているのだからである。
世界は臆病な民族のためにあるのではない。

＊

**汎ドイツ主義運動**　しかし、専制政治がいわゆる「合法性」の仮面をかぶっていることが、いかに容易であるかは、いま一度オーストリアの例がこの上もなく明瞭に、最も徹底的に示したのだ。

当時、合法的な国家権力は、非ドイツ人の大多数からなる議会の反ドイツ的地盤と――同様に反ドイツ的王家の地盤とを基礎にしていた。この二つの要素の中に、国家権威のすべてが具体化されていた。この立場からオーストリアのドイツ民族の運命を変えようとすることは、ナンセンスであった。だが唯一可能な「合法的」方法と国家の権威の崇拝者たちはそれと同時に、合法的手段では実行しえないから、中止すべきであるという意見であった。しかしこれは不可避の必然性をもって――しかも実際短期間に――王国内のドイツ民族の終末を意味することになっただろう。実際上、ドイツ人はこういう運命になるまえに、この国が滅亡したからこそ助かったのだ。

もちろんめがねをかけた理論家は、つねに民族のためよりはむしろ学説のために喜んで死ぬであろう。

かれは、人間がまず法律を作るがゆえに、やがて人間が法律のためにあるように、信ずるのである。

すべての理論的な杓子定規の人間や、その他の国家的な呪物崇拝の島国根性の持主を驚かせて、この不合理を一掃したことは、当時のオーストリアの汎ドイツ主義運動の功績であった。

ハープスブルク王家があらゆる方法でドイツ人をなやませようとしている間に、この党は「崇高

べき王国の抱擁から解放したのは、この党の功績である。

党の発足の初期には、その支持者は法外に多く、実際まさしくなだれのように迫った。だが成功は持続しなかった。わたしがヴィーンへきたとき、この運動はすでにその間に力を得たキリスト教社会党によってとっくに凌駕(りょうが)され、そのうえほとんどまったく意味をもたないまでに圧倒されていた。一方汎ドイツ主義運動の盛衰の過程と、他方キリスト教社会党の未曽有の興隆のこの全過程は、わたしにとって典型的な研究対象として意義深いものになるに違いなかった。

わたしがヴィーンへ来たとき、わたしの同情はまったく完全に、汎ドイツ主義運動の側に立っていた。

かれらが議会で「ホーエンツォレルン王家バンザイ」を叫ぶ勇気をふるいおこしたことは、わたしに畏敬の念を与えると同時に喜ばせた。かれらが依然としてたんにドイツ帝国の一時的にわかれている一部分であると見たこと、そして一瞬でもこれを公的に表明することがおとろえていないことが、わたしの中に楽しい確信をめざめさせた。かれらがドイツ主義に関するすべての問題で遠慮なく旗幟(きし)鮮明にし、そして決して妥協を甘受しないことが、わたしにはわが民族の解放のために進みうる唯一の道であるように思えた。しかし、この運動がはじめのすばらしい興隆の後に、いまではかくもはなはだしく沈滞していることを、わたしは理解できなかった。しかしキリスト教社会党が同時にこんなにも巨大な勢力に達しえたことは、なおいっそうわからなかった。キリスト教社会党は、当時まさにその人気の絶頂に達していた。

そのさいわたしは、両方の運動の比較に着手するために、ここでもまた運命は、わたしのそのころの悲惨な境遇にうながされて、このなぞの原因を理解するための最良の教育を与えてくれるのである。

**シェーネラーとルエーガー**　わたしはまず両党の指導者で、創設者とみられる二人の人物について、考察しはじめた。すなわちゲオルク・フォン・シェーネラーとカール・ルエーガー博士である。

純粋に人間的に見るならば、かれらはともにいわゆる議会主義的人品の枠や程度をはるかにこえて、そびえたっていた。一般の政治的腐敗の泥沼の中で、かれらの全生活は清潔でおかしがたいものであった。それにもかかわらず、はじめはわたしは汎ドイツ党のシェーネラーの側に好意を寄せていたが、次第にキリスト教社会党の指導者にも同様に向かっていった。

かれらの能力を比較してみると、当時すでにシェーネラーは原理的な問題では、いっそうすぐれた、いっそう根本的な思想家であるように思えた[21]。かれはオーストリア国家が必ず崩壊するに違いないということを他のだれよりも正しく、はっきりと認識していた。特にドイツ帝国にいる人々が、ハープスブルク王国に関するかれの警告をもっとよく聞いていたならば、ドイツが全ヨーロッパに敵対した世界戦争の不幸は、決して起らなかったであろう。

だがシェーネラーは、問題をその内面的本質にしたがって認識してはいたが、その時にかれは人間を見る点でいっそう多くの誤りをおかしていた。

他方、ここにルエーガー博士の強味があったのだ。

かれはまれに見る人間通であった。かれは特に人間をかいかぶって見ることを警戒した。それゆえ、かれはまた人生の現実的な可能性に多くの考慮をはらったが、一方シェーネラーはこの点についてほ

とんど理解がなかった。また汎ドイツ党の考えたすべてのことは、理論的に見れば正しかった。だが同時にその理論的認識を大衆に伝えたり、もともとつねに限られたものである大衆の理解力に適応した形でそれをもちこんだりする力と理解力とを欠いていたために、すべての認識はまさしく、ただ予言者的知識であり、いつも実際に現実化しうることがなかった。

しかしこのような実際上の人間的知識に欠けていたことが、その後の経過において、全体の運動や古くからの制度のもつ力の評価を誤らせたのである。

最後にシェーネラーはもちろん、ここでは世界観が問題であることを認めてはいたが、しかし、このようなほとんど宗教的な信念の担い手としてまず第一に、つねにただ大衆だけが適しているのだということがわかっていなかった。

遺憾ながらかれは、いわゆる「ブルジョア」階級というものが、かれらの経済的地位のために、各自が多くのものを失うことを恐れて、その結果またいっそうしりごみして闘争意欲が非常に限られる、ということをほとんど理解していなかった。

そしてたしかに、一般に世界観は、大衆がこの新しい教説の担い手として、必要な闘争を自己に引き受ける覚悟ができているときにだけ、勝利の見込みがあるのだ。

下級の民衆階層の意義に対する理解がなかったために、さらにまた社会問題についてもまったく十分な見解をもち得なかった。

それらすべてにおいてルエーガー博士は、シェーネラーの反対であった。

根本的に人情世態に通じていたことが、かれをして実現可能な力を正しく判断させ、かくしてまた現存の制度の過小評価からもまもり、そのうえおそらく、まさしくそのためにこそむしろ自己の意図

を達成する補助手段として役立たせることを、学ばしめたのである。

かれはまた今日の上層ブルジョアジーの政治的闘争力が、新しい大きな運動で勝利を戦いとるためにはあまりにも少なく、不十分であることを、正確に知っていた。だからかれは、自己の政治活動の重点を、生存をおびやかされ、そのために闘争心をマヒさせられるよりも刺激されている階層の獲得に置いた。同様にかれは、既存の権力手段をすべて利用し、現存している有力な制度を味方にし、そのようにして古くからある力の源泉を自己の運動のためにできるだけ大きく利用する傾向をもっていた。

そこでかれは、新しい党の目標を第一に、没落するようおびやかされている中産階級に置き、かくして強靭な献身性と不屈の闘争心をもっている非常に動揺しがたい支持層を確保したのである。カトリック教会に対してもこのうえもなくりこうな関係を保って、しばらくの間は若い聖職者を味方に獲得したのである。古い聖職者の政党はその戦場を明け渡すよう強要し、あるいはもっと狡猾(こうかつ)にゆっくりとひとつひとつ地歩をもう一度得るために、新しい党に合流せしめたものなのだが。

しかしこれだけがこの男の性格の本質と見られるならば、それはかれをはなはだ正しく見なかったことになる。なぜならば、かれはりこうな戦術家であり、また真に偉大な天才的改革者の特性をもっていたからである。もちろんこのばあいもまた、いま現に存する可能性と、さらにかれ自身の能力とを正確に知っていたため、制約を受けていたのである[22]。

この真にすぐれた人物が立てた目標は、あくまで実際的であった。かれはヴィーンを征服しようとした。ヴィーンは王国の心臓であり、この都市から腐敗せる王国の病的な老いた肉体に最後の生命が流れ出ていた。心臓が健康になればなるほど、また肉体の他の部分もますます新鮮に蘇生するはずで

あった。この原則的に正しい考え方は、しかし、ただ一定のかぎられた時期だけ通用しうるものであった。

そしてここにこの男の弱点があった。

かれがヴィーン市長としてなしとげたことは、最もよい意味で不滅である。しかしかれは、もはやこれによって王国を救うことはできなかった——時すでに遅かった。

これを、かれの対抗者シェーネラーは、もっとはっきり見ていた。

ルエーガー博士が実際に着手したことは、すばらしく成功した。しかしかれがそれによって望んだことは実現しなかった。

シェーネラーが欲したことは成功しなかった。しかしかれが心配していたことは、遺憾ながら恐ろしく的中した。

そのように両人ともそれ以上の目標に達しなかった。ルエーガーはもはやオーストリアを救いえなかったし、シェーネラーはもはやドイツ民族の没落を阻止しえなかった。

両党が役に立たなかった原因を研究することは、現代にとって限りなく有益である。これは特にわたしの友人にとって有用である。なぜなら多くの点で今日の状態は当時と似ており、かつて一方の運動を終焉（しゅうえん）に、他方を徒労に導いた失敗を、こうして避けることができるからである。

**シェーネラー不成功の原因**　オーストリアにおける汎ドイツ主義運動の崩壊は、わたしが見たところ三つの原因がある。

第一に、新しいその内面的本質にしたがった革命的な政党として、社会問題の意味について明瞭（めいりょう）な

観念をまったくもっていなかったこと。

シェーネラーとその支持者たちは、第一にブルジョア階層に頼ったので、結果はただ非常に弱々しく穏健であらざるをえなかった。

ドイツのブルジョアジー、特にその上層部は、個々人では自覚していないかも知れないが、平和主義的で、国民や国家の内部のことがらが問題になると、まったく自己放棄におちいる。よい時代なら、すなわちこの場合はしたがってよい政府の時代なら、こういう心情は、この階層が国家にとって非常に価値ある基礎となる。しかしもっと悪い治世においては、それはまさしく破壊的に作用する。それでなくてさえ、実際に真剣な闘争一般の実行を可能にするためには、汎ドイツ主義運動はまず第一に大衆の獲得に専心せねばならなかった。かれらはこれをしなかったので、この運動ははじめから、こういう波が短期間で退潮しないようにするためには、実際にそれが必要とした本質的な活気を失ったのである。

しかし、この原則が最初から注目され、また実行されないかぎり、この新党は、ゆるがせにしたことをその後に取り返す可能性をすべて失ってしまう。というのは、非常にたくさんの温和なブルジョア分子を採用すれば、運動の内的傾向というものはつねにこの方向に向けられ、そしてもっと広い大衆からいうにたる力を獲得するより広い見込みが、すべて失われるからだ。しかしそれと同時に、そういう運動はたんなる酷評から出られなくなる。多かれ少なかれほとんど宗教的な、また同じような犠牲的精神と結びついている信念は、もはや見いださるべくもない。しかし「積極的」協働によって、この場合にはしかし、与えられたものを承認することによって、闘争の冷酷さを次第ににぶらせ、最後には不精な平和に達しようとする努力が、それにとってかわるのである。

汎ドイツ主義運動もまた、はじめから大衆の中からその支持者を獲得することに重点を置かなかったので、同様な経過をたどった。(23)

この運動は「ブルジョア的な、上品な、やわらげられた急進派」になった。

この欠点から、しかし急速な没落の第二の原因が生じてきた。

オーストリアの地位はドイツ人にとって、汎ドイツ主義運動の登場した時代に、すでに絶望的であった。議会は一年一年と、徐々にドイツ民族を滅ぼす体制になっていった。土壇場で救うすべての試みは、この制度を除去すること以外に、ほとんど成功の見込みがなかった。

それとともに、この運動にとって原則的に重要な問題が生じてきた。すなわち、

議会を滅ぼすためには、議会の中へ入っていき、よくいわれる表現を用いれば、「内部から骨抜きにす」べきか、あるいは外部からこの制度そのものに対して攻撃する闘争をなすべきか？　ということである。

人々は入っていき、そして敗れて出てきた。

もちろん、かれらは入っていかねばならなかったのだ。

**汎ドイツ党と議会**　こういう勢力に外部から闘争するのは、揺るがしがたい勇気で身をかため、しかしまた際限ない犠牲を覚悟すべきだ、ということを意味している。それと同時に人々は牡牛を両角でつかみ、そして幾度も猛烈な頭突を受け、幾度も地面にたたきつけられるであろう。おそらく手足を折らなければ、ふたたび立ちあがれぬだろう。そしてこの猛烈な格闘のあとに、はじめて勇敢な攻撃者に勝利が与えられるのだ。最後に不撓不屈が成功の報いとなるまでは、ただ大きな犠牲だけが

このばあいの新しい闘争者を獲得しうるのだ。

しかしそのためには、大衆に属する民族の児童を必要とする。かれらのみが、この闘争を血まみれになる最後まで戦い抜く決意と、強靭さとを十分にもっている。だがこの大衆を、まさしく汎ドイツ主義運動はもっていなかったのであった。そこでかれらは議会に入っていくより他に、残された方法が何もなかったのだ。

この決心を、長い間内心で苦しんだり、ただ熟慮したりした結果だと信ずることは、誤りであろう。否、かれらは他の方法をまったく考えなかったのだ。このような不合理なことに関与することは、ただ、原則においてたしかに誤りと認められている制度にそのようにみずから関与することであり、その意味と影響について、一般に明瞭にわかっていなかった観念の沈殿したものであった。一般に人々は、実際にいまや「全国民の集会場」で語る機会を得たのだから、そうとう広範囲の大衆の啓蒙が容易になる、ともちろん期待していた。また悪の根源に対する攻撃は、外部からの突撃よりももっと効果があるにちがいないということが、自明のことと思われた。議員の不可侵権にまもられているのだから、個々の闘士の確信が強まり、そのために攻撃力も高まることができると信じた。

もちろん実際には事情は本質的にはちがったものになった。

汎ドイツ党の代議士がしゃべる集会場は、大きくなるどころかかえって小さくなった。というのは、各人がただ自分のしゃべることを聞きうる範囲に対してだけ語り、あるいは新聞の報道によって演説の複写を読むものだけにかぎられたからである。

だが聴衆に対する最大の直接の集会場は、議事堂の講堂ではなく、公開民衆集会である。

なぜなら、衆議院の議場にはただ数百人しかおらず、しかもたいていはただ日当をもらうためにだ

けそこにおり、決して一人か二人の「民衆の選良」氏の知識で啓発されようとして、たまたまそこにきているのではないのに、民衆集会には演説者がいわんとすることを聞くためにだけ集まってきた数千という人間がいるからである。

だがなによりもまず、かれらがつねに、決してそれ以上おぼえようとはしない同じ聴衆であり、それに必要な知識が欠けており、そのうえまたこのために必要な、たとえわずかの意志さえももっていない同じ聴衆である、ということだ。

このような民衆の選良の中の一人といえども、みずからより正しい真理に敬意をはらい、さらにまたその真理に役立とうとするものは、決していないであろう。否、転向をしたばあい今後の会期においても選出されうるという希望をたくすことができる理由をかれが持っていないかぎり、だれ一人としてそうするものはないであろう。そのように、いままでの党が次の選挙に失敗しそうな気配が見えるとはじめて、この男らしい誇りをもったものが動き出し、そしてもっとうまくいきそうに思える党や方向に参加できるかどうか、どうすればできるかを考える。そのばあいもちろん、この立場の変更にあたっていつも豪雨のように道義的理由を述べるものだ。だから現存の政党が民衆の機嫌をそこねて、殲滅的な敗北をまちがいなくこうむることが予想され大くずれするように思われるといつも大転換がはじまる。すなわち議会のねずみたちは、党という船をすてるのである。

しかしこれは、よりよい知識や意図と関係するものではなく、ただ例の予言者的天分と関係するにすぎず、まさしくその天分がこのように議会の南京虫に正確な時を予告し、いつでも他の暖かい党というベッドへ入れさせてやるのである。

こういう「集会場」で語ることは、それにもかかわらず、実際によく知られた動物(24)に真珠を投げて

やるようなものである。まったくムダなことだ！　ここでは結果はまったくゼロ以外の何物でもない。

そして事実そうだった。汎ドイツ党の代議士たちが、のどがかれるほどしゃべったところで、効果は全然なかった。

そして新聞も黙殺するか、その演説を断片的なものにし、おのおの関係はもちろんのこと、しばしば意味さえもゆがめられ、あるいはまったく失われていき、そのために一般の世論が、この新しい運動の意図について非常に悪い印象しかもたなかったのである。個々人が語ったことはまったく無意味であった。人々が、かれらについて書かれたことを読んだことのほうが重要であった。しかしこれはかれらの演説からの抜粋であり、きれぎれになっているためにただ無意味に作用しえたにすぎず、また——無意味に作用しなければならなかったのだ。しかもそのさいかれらがその時ほんとうにしゃべった唯一の集会場は、五百人たらずの代議士から成り立っていた。そしてこれだけで十分意をつくしている。

だが最も悪かったのは、次の点であった。すなわち、

汎ドイツ主義運動は、それが最初の日から、新党運動を問題としないで、むしろ新しい世界観が問題であることを理解していたならば、もっと成功をあてにすることができたのである。それだけで、この巨大な闘争を戦い抜くための内面的な力を、ふるい起すことができたのだ。しかしそのためには指導者としてはただ最善の、そしてまた最も勇気のある人物だけが、役に立ったのだ。

世界観のための闘争が、一身を犠牲に供する覚悟のある勇士にとって行なわれないならば、やがてまた死をも恐れない闘士は、もはや見いだせなくなるであろう。ここでかれ自身の生存のために戦うものは、もはやほとんど一般のために戦うという気持ちを失っているからである。

しかし、この前提をみたすためには、各人が新運動は後世のために名誉と栄誉とをささげるものであるが、現代においては何も提供しえない、ということを知ることが必要である。ある運動が、たやすく得ることができるポストや地位を簡単に与えれば与えるほど、この政治的日雇労務者が実効をおさめていた党をついにその数でおおいつくすまで、たくさんの劣等者がますます数多く入ってくるのである。すなわち、かつては誠実な闘士であったものが、昔の運動をまったく再認識せず、新しく加入したものが、かれ自身をやっかいな「不適任者」として決定的に排斥するにいたるのである。そして、これとともに、そういう運動の「使命」は終るのである。

汎ドイツ主義運動が議会に身売りするやいなや、運動はやはり指導者や闘士のかわりに「議員」を獲得した。それとともに運動はありきたりの政治的な世間的政党の水準に下落し、宿命的な運動に殉教者のような頑強さで対抗する力を失った。戦うかわりに、汎ドイツ主義運動は、いまや「演説すること」と「討議すること」を学んだ。しかし、新議員はまもなく、議会的雄弁という「精神的」武器で新しい世界観のために戦うことが、必要なときには自己の生命を投げ出して、その結末も不確かでいずれのばあいも何ももたらしえないような闘争に飛び込んでいくことよりも、危険も少ないがゆえにより美しい義務と感じたのである。

さていまや議席をもったので、支持者たちは外部ですばらしいことを望み、期待しはじめた。もちろんそれは起らなかったし、まったく起りえなかったのである。だからしばらくすると人々はジリジリしてきた。というのは人々が自分の代議士から聞きうることはまた、決して選挙人の期待に応ずるものではなかったからである。これは容易に説明しうることであった。なぜなら反対派の新聞が、汎ドイツ党代議士のありのままの活躍のすがたを民衆に伝えることを警戒したからである。

しかし新しい民衆の代表者が議会や地方議会で「革命的」闘争のいくらか穏健なやり方に興味をもてばもつほど、かれらはますます民衆のより広範な層に対するもっと危険な啓蒙（けいもう）活動にもどる覚悟が少なくなってきた。

大衆集会というものは、直接個人的であるからこそ真に効果ある影響を与え、この方法のみが大部分の民衆を獲得しうる唯一の道なのだが、それがもとでだんだんと後退していった。

民衆集会の演壇から演説を、民衆のかわりにいわゆる「選良」の頭に注ぎこむために民衆集会の講堂のビールのテーブルが、決定的に議会の演壇といれかわるやいなや、汎ドイツ主義運動と民衆運動であることをやめ、しばらくして多少ともまじめにアカデミックな討論をするクラブに崩壊してしまった。

したがって新聞によって伝えられた悪印象は、もはや決して個々の人々の個人的集会によって是正されなかった。そこでついに「汎ドイツ主義」ということばは大衆の耳に非常にいやな響きを与えるようになったのである。

**演説の意義**　今日、文筆にたずさわる騎士やうぬぼれ屋はみんな、次のことをよく覚えておくがいい。すなわちこの世界における最も偉大な革命は、決してガチョウの羽ペンで導かれたものでないのだ！　ということを。

そうだ。ペンにはつねに革命を理論的に基礎づけることだけが残されている。

だが、宗教的、政治的方法での偉大な歴史的なだれを起した力は、永遠の昔から語られることばの魔力だけだった。

おおぜいの民衆はなによりもまず、つねに演説の力のみが土台となっている。そして偉大な運動はすべて大衆運動であり、人間的情熱と精神的感受性の火山の爆発であり、困窮の残忍な女神によって扇動されたか、大衆のもとに投げこまれたことばの放火用たいまつによってかきたてられたからであり、美を論ずる文士やサロンの英雄のレモン水のような心情吐露によってではないのである。民族の運命はただ熱い情熱の流れだけが、転換させることができる。そして情熱はただ情熱をみずからの中にもっているものだけがめざめさせることができるのである。

さらに情熱のみが、情熱によって選ばれたものに対して、ハンマーでたたくように、民衆の心の扉を開きうることばを与えるのである。しかし情熱がほとばしらず、口が閉じられているものを、天は自己の意志の告知者に選んだことはない。

それゆえすべての文筆家は、知性と知識がこのために十分あるならば「理論的」に実証するために、インキ壺のそばにおればよい。しかしかれは指導者として生まれでたのでもなければ、指導者に選ばれたのでもない。

**大衆への効果**　だから偉大な目標をもつ運動は、幅広く民衆と関係を失わないよう、几帳面すぎるほど努力しなければならない。

どの問題もまず第一にこの観点から吟味し、そしてこの方向に決定をくださなければならない。

それは、大衆へ影響をおよぼす能力を減少し、あるいは弱くするだけであるかも知れないものをすべて避けなければならない。それも「民衆扇動的」理由からでなく、おおぜいの民衆の強力な力なく

しては、偉大な理念もそれがどんな崇高で高遠にみえても、実現することができない。という簡単な認識からである。

きびしい現実のみが、目標への道を決定せねばならない。いやな道を行きたくないということは、この世では往々にして目標を断念することである。それを欲すると欲しないとにかかわらずそうである。

汎ドイツ主義運動が議会主義の立場から、その活動の重点を民衆におくかわりに議会におくやいなや、未来を失い、そのかわりに瞬間のつまらない勝利を得たのである。

汎ドイツ主義運動はより安易な闘争を選んだ。しかしそれとともに、もはや最後の勝利に値しなかったのである。

わたしはこの問題をすでにヴィーンで、できうるかぎり徹底的に考えた。そしてわたしの目から見て、当時ドイツ主義の指導をひきうけるに適任だと思われたこの運動の崩壊のおもな原因の一つが、かれらの認識不足にあると見たのである。

汎ドイツ主義運動を分裂させた最初の二つの欠点は、たがいに親密な関係にあった。偉大な革命の内的推進力についての知識が欠けていることが、おおぜいの民衆の意義を十分に評価させなかった。ここから社会問題について無関心が生じ、国民の下層階級の心をつかむ努力が不完全、不十分になり、これにただ拍車をかけるだけのような議会の態度が生じたのだ。

もしかれらが、すべての時代に革命的抵抗力の担い手としての大衆がもっている途方もない力を認めていたならば社会的な方向においても、宣伝的方向においても、違った活動がなされたでもあろう。そのばあいには、また運動の重点は議会におかれず、作業場や街頭におかれたであろう。

しかしまた第三の失敗は、大衆の——大衆はすぐれた人々によってまずひとたび一定の方向に動かされると、さらにはずみ車のように、攻撃の強さに重みと一様な持続性を加えるものだが——価値を認識しなかった点に、最後の萌芽を含んでいる。

**ローマ教会からの分離運動**　汎ドイツ主義運動が、カトリック教会との困難な闘争を戦い抜いたことは、民衆の精神的素質の理解が不十分であったということから、明らかに説明することができる。

この新しい党がローマに猛烈な攻撃を行なった原因は、次の点にある。すなわち、ハープスブルク王家がオーストリアをスラブ国家に改造するよう最後的に決心するやいなや、この線で適当と思えるあらゆる手段に訴えた。宗教上の制度もこのうえもなく非良心的な支配王家によって、新しい「国家理念」の用に供された。

チェコの主任司祭を利用したことは、オーストリアの一般的なスラブ化というこの目標に到達するためにとった多くの手段の中の一つにすぎなかった。

その経過はおそらく次のようにおこった。すなわち、

純粋なドイツ人の聖堂区にチェコ人の主任司祭が任命された。かれらは徐々に、しかし着実にチェコ民族の利益を教会の利益の上におきはじめ、非ドイツ化過程の胚細胞になった。

ドイツ人聖職者はこういう処置に対して、遺憾ながらほとんどまったく思うようにならなかった。かれら自身がドイツ的意味における同様な闘争にまったく役に立たなかったばかりでなく、かれらはまた相手の攻撃にも必要な抵抗を起すことができなかった。そのようにしてドイツ主義は、一方では宗派の濫用という回り道を通りながら、他方では防衛が不十分なために、徐々に、だが絶え間なく押

し返されたのだった。

これは上述したように、小さなことで起ったのだが、遺憾ながら大きなことにおいても事情はたいして変わらなかった。

ここでもハープスブルク王家の反ドイツ的な企ては――まず第一に上級の聖職者によって行なわれたが――ドイツ人の利益代表自身が完全に背後にかくれていたあいだ、はっきりした妨害にあわなかったのである。

一般の印象は、ここではカトリック聖職者そのものによってドイツ人の権利がひどくそこなわれている、という以外にありえなかった。

しかしそれとともに教会が必ずしもドイツ民族といっしょに感ずることなく、不法にもドイツの敵の側に立ったように見えた。だがすべての悪の根源は、なかんずくシェーネラーの意見によれば、カトリック教会の指導庁が現にドイツになく、そのためそれだけで生じているわが民族の利害に対立する敵性があるのであった。

そのさい、いわゆる文化問題は、当時すでにオーストリアではすべてがそうだったが、まったく背後にかくれていた。カトリック教会に対する汎ドイツ運動の態度に対して決定的となったものは、教会の科学等に対する態度よりも、むしろドイツ人の権利を十分に代表していないことや、反対に特にスラブ的越権と貪欲をたえず促進した点にあった。

ところがゲオルク・シェーネラーは、中途半端でやめる男ではなかった。かれは、自分だけがドイツ民族をまだ救うことができるという確信をもって、教会に対する戦いをはじめた。「ローマからの分離(25)」運動は、敵の牙城を粉砕すべき、強力無比な、だがもちろんまた極度に困難な攻撃行動と思わ

れた。もし成功したならば、さらにドイツにおける不幸な教会分裂も克服され、ドイツ帝国とドイツ国民の内面的な力がその勝利によって、途方もなく巨大になりうるものであった。

だが、この闘争の前提も結論も正しくなかった。

疑いもなく、ドイツ人に関するすべての問題においては、ドイツ国籍をもつカトリック聖職者の国民的抵抗力は、非ドイツ国籍の、特にチェコの同職者にくらべてはるかに少なかった。同様にドイツ人聖職者が、ドイツ人の利益をはっきりと代表して一肌ぬごうなどと考えてもいなかったことは、バカでなければわかっていたことだ。

同じく、盲目でなければだれでも、何よりもまず、われわれドイツ人がみなこのうえもなく苦しまねばならぬ事情がここにある、ということを認めねばならなかった。その事情は他のものに対しても同様であるが、自分の民族に対しても、われわれの態度が客観的だということである。

チェコ人の聖職者はかれの民族に対しては主観的な態度をとり、教会に対してだけ客観的であるが、ドイツの主任司祭は教会には主観的に身をゆだね、国民に対してはいつも客観的であった。この現象はわれわれが他の幾千のばあいにもまさしく見うけられる不幸な現象である。

これは決してカトリック派に特に見られる遺伝的素質ではなく、われわれのばあいには、短期間にほとんどすべての特に国家的あるいは理念的制度をむしばんでいるのである。

たとえばわが国の官僚が国家を再興しようとする試みに対してとる態度を、こういうばあいに他の民族の官吏がとるだろう態度と比較するだけでよい。あるいはまったく別の世界の将校団が同様に、国民の利害を「国家の権威」のきまり文句のもとに無視してしまう——これはわれわれのばあい五か年来自明のことであり、しかもなお特に功績あることとされていた——ということが、信ぜられるだ

ろうか？　たとえばユダヤ人問題においても今日両宗派は、国民の利益にも宗教上の実際の要求にも対応しない立場をとっているのではないだろうか？　ユダヤ人のラビ師(26)が人種としてのユダヤ人のためには、ほんのわずかの意味しかないあらゆる問題においてとる態度と、わが大部分の――しかし親切きわまりない両宗派の――聖職者の態度とを比較してみるがいい！

われわれは抽象的な理念の擁護が問題になると、いつもこういう現象をみるのである。

「国家の権威」、「民主主義」、「平和主義」、「国際的連帯」等は、われわれの場合にはいつもほとんど固い純粋の教義的観念になった公然たる概念である。すなわち一般の国民生活に必要なものの判断がすべて、この観点からだけ生ずるのである。

一度入りこんだ先入観という視角のもとに、あらゆる利害を考察するというこのいやなやり方は、客観的には自己の信条に矛盾することを主観的に考えてみるという能力をすべて殺し、ついに手段と目的を完全にひっくり返すようになる。国家的高揚のすべての試みに対しても、これがただ悪質の腐敗した政府をまず廃止することからはじまるなら、人々は「国家の権威」に対する違反だと反対するだろう。しかし「国家の権威」はこういう客観性狂信者から見ると、目的のための手段でなく、むしろ自分のあわれむべき全生活をみたしてくれるに十分な目的それ自体なのである。それゆえたとえば独裁を試みるばあいに、その担い手がフリードリッヒ大王のような人物で、そして議会の多数をしめる現在のような国家の技巧家が無能な小人物であるか、あるいは低能な人間であったとしても、こういう原則亡者には民主主義の原則のほうが、国民の福祉よりも神聖に見えるのであるから、かれらは憤激して抵抗するであろう。このようにあるものは、他のものが最も祝福すべき政府でさえ、それがかれの「民主主義」の観念に対応しないかぎり、拒否している間に、民衆を破滅させるこのうえもな

く悪質な暴君政治を、「国家の権威」が目下そこに具体化されているという理由で、擁護するであろう。

それとまったく同様に、わがドイツの平和主義者は、国民に対する血のにじむような圧制にもすべて——最も邪悪な軍隊の権力から出たものであっても——抗争によらなければ、すなわち暴力によらなければこの運命を変えることができないばあいは、黙って止まっているであろう。というのは暴力は実際かれの平和社会の精神に反するからである。ドイツの国際的社会主義者は連帯的な他の世界からいろいろまきあげられるかも知れないが、かれ自身はそれに兄弟のような好意で答え、報復とかあるいは抗議すらも、かれがまさしく——ドイツ人である——がゆえに、考えないのだ。

これは悲しむべきことかも知れない。だが事態を変更しようとするならば、あらかじめそれを認識していなければならない。

ドイツ人の利害が一部の聖職者によって細々と代表されているのも同様な事情である。

これはそれ自体意地の悪い悪意でもなければ、われわれにいわせれば「上」からの命令によって制約されているのでもなく、そのように国家的決断が不足していることの中に、若いころのドイツ精神に関する教育が同じように欠けていた結果であり、しかし他方偶像にまでなっていた理念に徹底的に征服されていた結果を見るのである。

民主主義、国際的色彩を帯びた社会主義、平和主義等への教育は、非常に強固で排他的で、それゆえ、かれらから見れば、純粋に主観的である。それとともにまた他の一般的な世界像も、ドイツ主義に対する態度が実際に若いときから非常に客観的であったので、この原則的観念に影響されているのだ。こういうふうに平和主義者は、かれが主観的にまったく自己の理念に身をゆだねているのに（か

れがまさしくドイツ人であるかぎり）、自己の民族に非常に公正でないどのような困難な脅威が加えられたばあいにも、いつもまず客観的な正当さを求め、純粋な自己保存衝動から、自分と同じ群衆の線に身をおいて、いっしょに戦おうとは決してしないのだ。

これがまた個々の宗派にどんなによくあてはまるかは、なお次のことが示すであろう。

プロテスタンティズムは、これがたしかにその発生とその後の伝統一般の中に基礎をもつかぎり、もともとドイツ人の利害をかなりよく代表している。けれどもプロテスタンティズムは、この国家的利益の擁護がその観念の世界や伝統的発展の一般的な線になかったり、あるいはなんらかの理由でまったく拒否される分野で行なわねばならなくなると、たちまち断念してしまうのである。

だからプロテスタンティズムは、国内の純潔の問題だとか、国家への専心の問題だとか、ドイツ的本質、ドイツ語、さらにはまたドイツの自由の防御が問題になるやいなや、もちろんこれらのすべてがプロテスタント自体の中に基礎をもっているために、つねにあらゆるドイツ主義の促進のためにのりだしてくるであろう。しかし国民が、その最もにくい敵にしがみつかれているのから救い出そうとするといつもユダヤ主義に対してもともと多少とも独断的な態度をとっているために、すぐさま最高度の反感をあらわして反対するのである。けれどもそのばあい問題はこのユダヤ人問題を解決することなしに、ドイツの再生や興隆を別に試みることはすべてまったく無意味であり、不可能でありつづけるということである。

わたしはヴィーン時代に、この問題を先入観にとらわれず検討するのに十分な暇と機会をもった。またそのさい毎日の交際の中で、この考えの正しさを幾度も確認しえたのである。

この雑多きわまりない民族の中心点では、ただちに次のことがきわめて明瞭になった。すなわちド

イツの平和主義者だけが自国民の利益をいつも客観的に観察しようとするのであっておよそユダヤ人は決してユダヤ民族の利害をそういうふうには見ない。またドイツの社会主義者だけがある意味で「国際的」であり、かれらは国際的な仲間にシクシク泣いてみせたり、メソメソ泣いてみせたりしなければ、自己の民族の正当性を謂いえてはならないと思っている。しかしチェコ人やポーランド人等はそんなことはない。要するに当時すでにわたしは、災いの一部はこれらの信条それ自体の中にあるが、他の一部はしかしながら、自己の民族一般に対するわれわれのまったく不十分な教育と、それがため自己の民族に対する献身が制限されて少ない点にある、ということを理解した。

以上でカトリシズムそれ自体に対する汎ドイツ主義運動の闘争の最初の純理論的根拠がなくなった。人々はドイツ民族をすでに少年時代から、自己の民族の権利をもっぱら承認するように教育し、まして自己を維持することにおいてまでも、われわれの「客観性」という呪いで童心を汚してはならない。そのようにしてやがては（さらにまた急進的な国家主義政府があるならば）、アイルランド、ポーランドあるいはフランスにおけると同様にまたドイツでも、カトリックがますますドイツ的になってくることが示されるであろう。

しかしこれに対する最も力強い根拠を、ついにわが民族が歴史の審判の前に自己の存在を守るため、興亡を賭した戦いについたあの当時が、提供したのである。

当時、上からの指導が失われないかぎり、民族は実にめざましくその義務と責任を果たした。プロテスタントの牧師だろうが、カトリックの主任司祭だろうが、かれらはともに前線においてのみならず、それ以上に銃後において、われわれの抗戦力を長く維持するために、限りなく貢献したのだ。この数年間、特に最初の勃発時に、両陣営には唯一の神聖なドイツ帝国が、実際上あるのみだった。

その存立と未来のために、各人は同じように自分の神にすがったのだ。

オーストリアにおける汎ドイツ主義運動は、一度次のようにみずから問うてみるべきだった。すなわちオーストリアのドイツ主義の維持は、カトリックの信仰のもとでは可能か、不可能か？　と。もし可能ならばその場合政党は宗教上あるいはそのうえ宗派上のことにわずらわされてはならないし、もし不可能ならば、そのさいは宗教改革がなされねばならず、決して政党が介入してはならないのである。

政治組織という回り道をとおって、宗教改革に達することができると信ずるものは、それはかれが宗教的観念の成長が教義やその教会の影響がどういうものかということについて、何も知らないということを示しているだけである。

このばあい実際二君に仕えることはできない。そのさい、わたしは一つの宗教の建設や破壊を一国家の建設や破壊よりも本質的に大きいと考えている。いわんや一政党においておやである。

上述の攻撃が、ただ他の側の攻撃を防ぐだけだった、といってはならない！

もちろんいつの時代にも非良心的な男が、宗教を自己の政治商売の（というのは商売だけがほとんどいつも、またもっぱらこういうヤツには問題なのだが）道具にして、平気でいるのだ。だがそのうえに、おそらくは何か他のことでも自己の下劣な本能に利用するように、宗教やまた宗派を濫用する多数のルンペンに対して、宗教や宗派自体の責任だとすることも、同様にたしかに誤りである。

こういう議会の無能者や怠けものには、少なくともあとから、なお自己の政治的不正取引を合理化しうるような機会を提供されたときほど、好都合なことはありえないのである。というのは、人々が宗教やまた宗派にかれの個人的な劣悪な言行に対する責任を負わせそのために攻撃するやいなや、こ

の嘘つき男はただちに大声をあげて全世界に、かれのいままでの処置がいかに正しかったか、また宗教と教会の救済がいかにかれとかれの口先のおかげだけをこうむっているか、という証言を求めるからである。バカな忘れっぽい同時代の人々は、叫び声が大きいために、たいていはもう全闘争の真の主謀者を記憶していないか、忘れてしまっている。そこでこのルンペンは、いまや実際に本来の目的を達成するのである。

これが宗教とまったく無関係であることを、そういう狡猾(こうかつ)なきつねはちゃんと十分承知している。だからかれは正直だがしかし不器用な相手が演技に失敗し、いつか人間の誠実さと信仰心に絶望し、すべてのことから手をひいてしまう間に、ますますひそかにくすくすと笑うのだ。

しかし他の点だけから見ても、宗教そのものが、あるいは教会すらが、個人の過失に対して責任がある、というのは正しくないであろう。目の前にある目に見える組織の偉大さを、一般に人間の平均的な不完全さと比較し、そしてそのさい善と悪との関係が多分どこかで他のものよりもよいことを、認めねばならないであろう。もちろん司祭自身の中にもまた、その神聖な職務をたんに自己の政治的野心を満足するための手段であるとし、そのうえ政治闘争においては、自分たちはより高い真理の守護者であり、虚偽と誹謗(ひぼう)の代弁者であるべきでないということを、しばしば嘆かわしい以上に忘れているものもいる。——だがそのような体面を汚す一人のものに対してまた幾千人もの正直で、自己の使命に最も誠実に身をささげている司牧者がいる。かれらは今日の虚偽にみち堕落した時代に、一面の泥海に小島のごとくそびえているのである。

司祭服をまとった一人の堕落したヤツが、一度けがらわしいやり方で、人倫にもとることをしたとしても、わたしは教会それ自体を有罪とはしないし、またしてはならない。そのように多数の中の一

人が民族性を汚し、裏切ったとしても、もともとこういうことがまさしく日常茶飯事である時代においては、また罪ありとしてはならないのである。特に今日、そういう一人のエフィアルテスに対して、民族の不幸を断腸の思いで共感し、そしてわが国民の中の第一流の人々とまったく同じように天がわれわれにふたたびほほえむ時がくるのをあこがれている千人のものがいることを、忘れてはならないのである。

しかしここでは、そういう日常茶飯事が問題なのでなく、原則的真実さとか教義的内容一般が問題だ、と答えるものには、もう一つの他の問題を示して必要な答えを与えうるだけである。

なんじがもし運命によってここで真理をつげるために選ばれたと信ずるならば、それをなせ。だがさらに勇気をもって、政党という回り道によってこれをなそうとしてはならず――というのはこれはまた奸策(かんさく)であるから――まさしく今日のより悪しきもののかわりに、未来のよりよきものを置け、と。

もし勇気に欠けるところがあれば、あるいはなんじのよりよきものすら完全にはっきりしていないならば、しからば手を引け。しかしいずれのばあいにも、なんじが堂々となすべきことをあえてしないばあい、政治運動の回り道を通って、陰険な手段で手に入れようとするな、と。

政党は、宗教問題が民族に疎遠で、自己の人種の慣習や道徳を破壊しないかぎり、宗教問題になんら関与すべきではない。それは宗教が政党の不法行為と結合してはならないのとまったく同じである。

教会の威厳を担っているものが、民族を害するために、宗教的な制度や教義をも利用しても、決して同じ方法でまねをしたり、同じ武器で戦ったりしてはならない。

政治的指導者には、自己の民族の宗教的な教義や制度が、つねに不可侵のものであらねばならない。さもなければかれは政治家でなく、もしかれにその能力があるならば、宗教改革者になるべきである。

その他の態度は、特にドイツでは破滅に導くであろう。

汎ドイツ主義運動と、そのローマに対する闘争とを研究して、わたしは当時、そして特にその後年を経るにしたがって、次のような確信に達した。この運動は社会問題の意義に関する理解が少なかったので、民族の中の実際に闘争力ある大衆を失った。議会へ入っていったことが力強い情熱をとり、運動はこのすべての制度に独特の弱点を背負いこんだ。カトリック教会に対する闘争が、多くの中、下層階級の中でこの運動を、不可能にし、それとともにそもそも国民が自己に固有のものと称しうる最善の要素を無数に奪ったのだ、ということを。

オーストリアの文化闘争[27]の実際的効果は、ほとんどゼロにひとしかった。たしかに教会から十万人の信者を奪いとることはできた。だが教会はそれによってたいして特別の被害は受けなかった。このばあい教会は、失われた「小羊」に実際上一滴の涙も流す必要はなかった。というのは、教会はずっと以前から、教会に完全に心服していないものばかりを失ったのだったからである。これが新しい宗教改革と昔の宗教改革との相違点であった。かつては教会の最善のメンバーの多くが、内心の宗教的確信から教会を見すてた。しかるに今度はもともとなだれがおきたにすぎず、それも実に政治的性質をもつ「打算」からであったのだ。

しかしまさしく、政治的観点から見ても、この結果は笑うべきであると同時に悲しむべきものであった。

成功の見込みのあった政治的なドイツ国民救済運動はふたたび壊滅した。それが必要な容赦のない冷静さで行なわれず、ただ分裂に導くに違いない領域に迷いこんでしまったからである。けだし、一つだけたしかに真実なことがある。すなわち、

**一人の敵への集中**　汎ドイツ主義運動が、もし大衆の心理をもう少しよく理解していたならば、この運動はこんな失敗はしなかったであろう。人々が一般に成果を戦い取ろうとするならば、純粋に心理的考慮からも、決して大衆に二つまたはそれ以上の敵を示してはならない。そうでなければ、闘争力を完全に分裂に導くからだ、ということをこの運動の指導者が知っていたならば、この理由からだけで汎ドイツ主義運動のほこ先は、ただ一人の敵にのみ向けられたであろう。ある政党が、もしもなにかを決定するばあいに、ごく些細なことすら実際に達成しえないのに、すべてを欲しようとするようなどの横丁にもいるでしゃばり屋によって指導されること以上に、政党にとって危険なことはない。

また個々の宗派には実際にもっとたくさんの非難すべき点があるかも知れないが、政党は一瞬も次の事実から目を離してはならない。すなわち、いままでのすべての歴史の経験によれば、純粋の政党がよく似た立場で一度も宗教改革に達しえたことがない、ということである。しかし人々は、歴史を実際に利用すべきときに、その教えを思い出すことができないために、歴史を研究するのではなく、あるいはいまでは事情が変わっていて、歴史の永遠の真理はもはや適用することができないということを信ずるためでもない。人々は歴史から、まさしく現代に対する利用を学ぶのである。これをなしとげない人は、政治的指導者だとうぬぼれてはならない。そういう人は実際にうぬぼれており、たとえたいてい非常に空想的なアホウであり、どんなによい意志をもっていようとかれの実際上の無能さのうめあわせにはならない。

概してどんな時代でも、ほんとうに偉大な民衆の指導者の技術というものは、第一に民衆の注意を

分裂させず、むしろいつもある唯一の敵に集中することにある。民衆の闘志の傾注が集中的であればあるほど、ますます運動の磁石的吸引力は大きくなり、打撃の重さも大きくなるのである。いろいろの敵を認識することは、弱い不安定な性格のものにとっては、自己の正当を簡単に疑わせるきっかけだけをつくりやすいから、別々にいる敵でさえもただ一つの範疇に属していると思わせることが、偉大な指導者の独創力に属しているのである。

動揺している大衆は、自分がおおぜいの敵と争っているのを見ると、すぐに客観的な態度をとり、実際に他のすべてのものたちが間違っていて、ただ自己の民族や自己の運動だけが正しい状態にあるのかどうかと、疑いを投げかけるものである。

しかしそれと同時に、はやくもまず自己の力が衰えてくる。だから内的には異なっている敵をいつも一つにまとめねばならない。そうして自分の支持者たる大衆の目には、ただ一つの敵に対してだけ闘争がなされているのだというように、まとめねばならない。これが自己の正義に対する信頼を強め、正義を攻撃するものに対する憤激を高めるのである。

かつての汎ドイツ主義運動が、これを理解していなかったことが、その結果を失敗させたのだ(28)。

運動の目標は正しく、意図も純粋であるように思えた。しかしその採用した方法が誤っていた。それは登攀すべき頂上からはもちろん目を離さず、またこのうえなき偉大な決意と力とをもって出発する。ところが道それ自体には注意をはらわず、いつも目を目標に向け、登り道の状態は見もしなければ、調べもせず、そしてついにそのために失敗する登山家と同じであった。

## キリスト教社会党の道

その巨大な競争相手たるキリスト教社会党のばあいは、事情は逆であっ

たように思える。

キリスト教社会党がとった道は、りこうであったし、また正しく選んでいた。しかしながら目的についての明白な認識を欠いていた。

汎ドイツ党が失敗したほとんどすべての点において、キリスト教社会党のとった態度は、妥当で計画的であった。

キリスト教社会党は、大衆の意義に関して必要な理解をもち、発足の日から社会的性格をはっきりと強調することによって、少なくとも一部の大衆を確保していた。本質的に、小下層中産階級および手職人階級の獲得に焦点を合わせることによって、辛抱強く、献身的で、同時に誠実な服従者を得た。キリスト教社会党は、宗教制度に対する闘争をすべて避け、こうすることでそのような強力な組織――教会はもともとそういうものだが――の支持を確保した。その結果、キリスト教社会党は、主として唯一の真に大きい相手だけをもったのである。大規模な宣伝の価値を認識し、自分の支持者である大衆の精神的本能に影響をおよぼすことにおいては、ベテランであった。

けれどもこの党もまた、オーストリア救済という夢に描いた目標に達することができなかったのは、その方法の二つの欠点と、同じくその目的自体についての不明瞭さにあった。

**宗教的基礎に立つ反ユダヤ闘争**　この新運動の反ユダヤ主義は人種的認識の上にでなく、宗教的観念の上に立てられていた。この失敗をおかしたために、それが同じようにまた第二の誤りをひきおこしたのであった。

キリスト教社会党の創立者の意見によれば、この党がオーストリアを救済しようとするならば、人

種原理の立場に立ってはならず、そうでないとやがて国家の一般的解体が起きるに違いないから、であった。党の指導者の考えにしたがえば、しかし、特にヴィーン自体の状態は、あらゆる分裂的要素をできるだけ度外視し、そのかわりにすべてを統一する観点を強調することが必要であった。

ヴィーンはこの時代にすでに、特にチェコ的要素が強く混入していたので、はじめから汎ドイツ的でないこの党は、あらゆる人種問題について、このうえもなく寛容な態度をとることだけが必要であった。オーストリアを救おうとしたならば、この点を無視してはならなかった。そこで人々は、自由貿易主義者マンチェスター派に対する闘争によって、特にヴィーンにたくさんいたチェコ系の小企業家を獲得しようとした。そしてそのさいに宗教的基礎の上に立ってユダヤ主義に対して戦うことによって、旧オーストリアのすべての民族の相違を超越したスローガンを見いだしえたと信じたのだ。

こういう基礎の上に立つこうした闘争が、ユダヤ人をほんのわずか心配させただけであったことは、明白である。最悪のばあいでも、一杯の洗礼水がいつも商売とユダヤ主義とを、同時に救ったのだ。

**キリスト教社会党の外見的反ユダヤ主義**　こんな皮相的根拠で、決してこの問題全部をまじめに科学的に取扱うことはできなかった。こういうやり方だけでは、この種の反ユダヤ主義を理解しないにちがいない多くのものに、一般にきらわれた。人々は純粋に感情的な感覚から脱して、真の認識に達しようとしなかったので、理念のはたした力は、それによってほとんどもっぱら精神的に限られた範囲にとどまった。インテリは原則として、拒否的な態度をとった。事態は次第に、あらゆる事件のさいにただ新しいユダヤ改宗の試みにすぎないとか、あるいはまったく一種の競争的嫉妬のあらわれが問題だ、というような外観を呈するにいたった。しかし同時にこの闘争は、内面的なより高尚な神

聖さの特徴を失い、そして多くの人々、しかも極悪でない人々にとって、不道徳な唾棄すべきものに思われたのだ。全人類の生活が問題であり、すべての非ユダヤ民族の運命がその解決にかかっているという確信が欠けていたのである[29]。

この中途半端さによって、キリスト教社会党の反ユダヤ主義の態度は、その価値を失った。それは外見的な反ユダヤ主義であり、全然何もないよりもっと悪かった。というのは、人々が安心してなだめられ、相手の耳をひっぱったつもりでいたものが逆に実際は、自分の鼻をつままれて、引きずり回されていたからである。

しかしユダヤ人はやがてまたこの種の反ユダヤ主義に慣れ、それがかれらの存在を妨害するよりは、かれらにはそれがなくなったらたしかに物たりなく感ぜられたにちがいなかったのである。

人々がここでこの多民族国家に大きな犠牲を払わねばならなかったのなら、ドイツ主義それ自体の代弁にもっと大きな犠牲を払うべきであった。

もし人々がヴィーン自体において、足もとの地盤を失いたくなかったならば、「国家主義的」であってはならなかった。人々はこの問題をおだやかに敬遠することによって、ハープスブルク国家を救うことを望んだ。そしてまさしくそれゆえにこそ、崩壊にいたらしめたのである。しかしこうして運動は、長く政党をその内的推進力でみたすことができた強力な力の源泉を失ったのである。キリスト教社会主義運動は、かくしてまさしく平凡な一つの政党になった。

わたしはかつて両運動を、一方では内心の脈搏（みゃくはく）から、他方ではすでにその当時わたしには全オーストリアのドイツ主義の苦しいシンボルに思えたまれに見る人物に対する驚嘆に魅せられて、細心の注意で追求した。

る数十万の人々の中にいた。

力強い葬式が、死せる市長を市庁舎から環状道路の方へ導いていったとき、わたしもこの悲劇を見

内心に感動を覚えながら、その時この男の仕事もまた、この国を滅亡に導くにちがいない必然的な宿命によって無に帰せざるをえなかったのだ、という感じをもった。カール・ルエーガー博士がドイツに生まれていたならば、かれはわが民族の偉大な人物の列に伍したであろう。かれがこの何もできぬ国で働いたということが、かれの業績および自身にとって不幸であった。

かれが死んだときすでにバルカンの小さな火の手は、日を追って貪欲に急激に広がっていた。かれがまだ防止できると信じていたことを見ずにすんだことは、運命の慈悲だったのだ。

**汎ドイツ党とキリスト教社会党**　しかしわたしは、第一の運動の不成功と第二の運動の失敗とから、原因を見つけだそうとした。そして旧オーストリアにおいては、国家を強固に建設することが不可能だということをまったく度外視しても、この両党の失敗は次のことにあるという確固たる確信に達した。すなわち、

汎ドイツ運動は、そのドイツ更新の目標に関して、原則的意図においてはもちろん正しかった。けれども方法の選択においては失敗であった。この運動は国家主義的だったが、遺憾ながら大衆を獲得するにたるほど十分に社会的ではなかった。しかしその反ユダヤ主義は、人種問題の意義の正しい認識にもとづいており、宗教的観念にもとづくものではなかった。ある特定の宗派に対する闘争は、これに対し、実際的にも戦術的にも誤っていた。

キリスト教社会主義運動は、ドイツ再興の目標については明確な観念をもっていなかったが、党と

して進む道を求めるばあいには、理解もあり、運もよかった。その運動は社会問題の意義もつかんでいたが、ユダヤ主義に対する闘争において誤り、そして国民思想の力については夢にも知らなかった。
もしキリスト教社会党が大衆に対する抜け目のない知識に加うるに、人種問題の意義について汎ドイツ主義運動がつかんでいたような正しい観念をもっていたならば、そしてけっきょく党自体が国家主義者であったならば、あるいはまた、汎ドイツ主義運動がユダヤ人問題の目標や国民思想の意義についての正しい認識に、なおキリスト教社会党の実際的狡猾さ、特にその社会主義に対する態度を受けいれていたならば、わたしの確信にしたがえば、当時すでに、その成果をもってドイツの運命に関与し得たに違いないのだ。
しかし、これがそういかなかったということは、大部分は、オーストリア国家の本質にあったのだ。
わたしは自分の確信が、どの党においても実現されているとは思えなかったので、後日、また現存の組織の一つに入ろうとか、ましてともに戦おうなどと決心することはもはやできなかった。わたしは当時すでに、政治運動のすべてに、ドイツ民族の国家的再興を皮相的にでなく、大規模に遂行するには不適当であり、能力もないと思っていた。

**ハープスブルク国家に対する嫌悪増大**　しかし、ハープスブルク国家に対するわたしの内心の嫌悪は、そのころにますます増大した。
わたしが特に外交問題に没頭しはじめるにつれ、この国家構造はただドイツ主義にとって不幸にしかならざるをえないという確信が、ますます基礎を得てきた。ついにわたしにはドイツ国民の運命はもはやこの地から決せられるのでなく、ドイツ帝国自体において決せられるのだ、ということがいっ

そうはっきりしてきた。これはしかし、一般的な政治問題に対してだけではなく、全文化生活一般のあらゆる現象に対してもあてはまったのである。

オーストリア国家はまた、純文化的あるいは純芸術的な仕事の領域で、弛緩（しかん）のあらゆる特徴を示し、少なくともドイツ国民に対して無意味さを示してきた。これは建築の分野で最も多くあてはまった。少なくともヴィーンでは環状道路の完成以来、ドイツにおいて勃興しつつある計画に対して、建築の課題が重要でなかったということだけで、すでにオーストリアの近代建築は、特に大きな成果が得られなかったのである。

そこでわたしは二重生活をますますはじめるようになった。知性と現実は、わたしに、オーストリアできびしいが、しかし収穫の多い学校を終えるように命じた。だが心は他の土地にあった。

当時わたしはこの国家の内面的な空虚さと、この国家を救うべき可能性のないこととを認識すればするほど、しめつけられるような不満にとりつかれた。しかしその際この国家は、あらゆる点でドイツ民族の不幸でしかありえない、という確信を感じたのだった。

この国家は、真に偉大なドイツ人をすべて圧迫し、妨害するに違いなく、同時に逆にすべての非ドイツ的現象を助長させるだろう、と確信したのであった。

**古いモザイク像――オーストリア**　この国の首都が示している人種集団は、わたしにとって不愉快であり、チェコ人、ポーランド人、ハンガリー人、ルテニア人、セルビア人やクロアチア人等の諸民族の混淆（こんこう）は、いとわしいものだった。しかしそれよりも人類の永遠のバクテリアはなお不愉快だった。――ユダヤ人、そしてもう一度ユダヤ人だ。

わたしにはこの巨大都市が、近親相姦の権化のように思えた。
少年時代のわたしのドイツ語は、下バイエルン人もしゃべっている方言であった。わたしはそれを忘れることもできなかったし、ヴィーンの下層社会のなまりを覚えることもできなかった。わたしがこの都市に長く住めば住むほど、この古いドイツ文化の地をむしばみはじめた異民族混淆に対する憎悪の念が、ますます高まってきた。

ところがこの国家がまだかなりの間つづくだろうという考えは、わたしにはまったく笑止千万に思えた。

オーストリアは当時古いモザイクのようなものであった。個々の石片を結び合わせている接合剤は古く、もろくなっていた。この芸術品に手を触れないかぎり、それはまだその存在をさもありそうに見せかけることができた。けれども一撃を加えるやいなや、たちまちたくさんの小さい破片に散ってしまうのである。かくして問題はただ、その一撃がいつくるか、ということだけであった――。

わたしの心臓は、決してオーストリア王国のためでなく、いつもただドイツ帝国のために鼓動していたから、わたしにはこの国家の崩壊の時期が、ドイツ国民の救済のはじまる時だとしか思えなかった。

こうしたすべての理由から、ずっと以前の少年のころからわたしがいだいていたひそかな希望と愛情をひきつけたかの地へいずれ行こう、という憧憬がますます強くなってきた。

わたしはいつか建築家として名をなそう、そして大小にかかわらず運命がその時わたしに示してくれるだろう範囲で、国民にわたしの誠実な奉仕を捧げようと望んだ。

しかしついにわたしは幸運のわけ前にあずかり、いつか実際にわたしのこのうえもなく熱烈な心の

欲求、すなわちわが愛する故郷がわが祖国ドイツ帝国に合邦されることができるにちがいない地位について、働きうるようになりたいと望んでいた。[30]

こうしたあこがれがいかに大きかったかは、今日でもまだ多くのものが、理解できないだろう。だがわたしは運命によっていままでこの幸福を拒まれたり、あるいは残酷無情にもこの幸福をふたたび奪われたものに呼びかける。わたしは、母国から引き離されても、言語という神聖な財宝のために戦っている人たち、祖国に対するその忠誠心のために迫害され苦しめられている人たち、そして悲痛な感動でふたたび誠実な母の胸にもどる時をあこがれている人たち、これらすべての人たちに呼びかけるのである。わたしはこれらすべての人たちに呼びかけ、そしてかれらが理解してくれるだろうことを知っている。

ドイツ人であって、愛する祖国に属しえないことが何を意味するかをわが身に感じているものだけが、母国から離れた子供の心に絶えず燃えている深いあこがれを考量することができるのだ。かれらは、父祖の家の門が開き、共通の帝国で共通の血が平和と安寧をふたたび見いだすまでずっと長く、それをつかむことに苦しみ、満足と幸福を拒まれるのである。

**わが人生の学校**　しかしヴィーン[31]はわたしにとって最も根本的ではあったが、最も苦しい人生の学校であったし、今もそうである。わたしはこの都市になかば子供のときに、はじめて足を踏みいれた。そして冷静でまじめな人間になってこの都市を去った。わたしはこの都市で大きくは世界観の基礎を、小さくは政治の見かたを得た。わたしはその後ただ個々に補足を加える必要があっただけで、決してすてたことはなかった。わたしは当時の修業時代のほんとうの価値を、もちろん今日になって

はじめて十分に評価し得たのである。

だからわたしはこの時代を、いくらか詳細に取扱ったのだ。とにかくこの時代は極めて小さい初歩からはじめて、五年にもならない間に、大きな大衆運動にまで発展しようとしている党の原則に属しているこれらの問題について、最初の直観教育をわたしに与えてくれたのだからこんなにも若い時代に運命に強いられ――また自己の学習を通して個人的な見解の基礎が形成されていなかったならば、ユダヤ主義、社会民主主義、もっと適切にいえば全マルクス主義、社会問題等に対するわたしの態度が今日どうなっていたか、わたしにはわからない。

というのは、たとえ祖国の不運が、何千人、何万人の人々に、崩壊の内部的原因について関心を呼びおこし得たとしても、長年月の苦闘の後にはじめてみずから運命の主人となったものが推論するような、徹底さと、より深い洞察には決して導かれ得ないからである。

# 第四章　ミュンヘン

一九一二年春、わたしは最後的に決心してミュンヘンにきた[1]。わたしには都市自体が、あたかもすでに何年来もその市壁内に住んでいたかのように、よくなじんでいた。これは実際一歩一歩このドイツ芸術の首都へ導いてくれたわたしの研究のためであった。ミュンヘンを知らざればドイツを見ないばかりか、いやミュンヘンを見ないものは、第一にドイツ芸術を知ることができないのだ。

いずれにしても大戦前のこの時代はわたしの生涯のいちばん幸福な、このうえなく満足な時代であった。たとえわたしの収入がいつもたいへん乏しかったとはいえ、わたしはむろん絵を描くために生活しているのではなく、それによってただしっかりと生活できるようにするために、もっとよくいえばそれでもって今後の研究をしていくために、描いたのだ[2]。わたしは自分が定めた目標がいつかはやはり達成されるという確信をもっていた。そしてこれだけで、その他の毎日の生活上の小さい心配をすべて容易に、気にもとめずにしんぼうすることができた。

しかし、そのうえになおわたしの滞留の初期から、わたしの知っている他の土地よりもずっとわたしをこの都市にひきつけた内心の愛着があった。ドイツの都市だからだ！　ヴィーンにくらべて何という違いだろう。この多種族のバビロンの都市を思いだすだけでも、胸が悪くなった。そのうえここのなまりは、わたしにとってたいそう親しいものだった。特に下バイエルン人とのつきあいが、わた

しのかつての少年時代を思いださせてくれた。わたしにとって心から愛らしく貴重なものであり、また多くのものがそうなった。しかし、野性的な力と芸術的雰囲気の驚くべき結合、ホーフブロイハウスからオデーオンにいたる無比の線、ピナコテーク絵画館にいたる十月祭が、わたしをいちばんひきつけた。わたしが今日もこの都市に、この世界中の他のどの場所よりも愛着をおぼえているのは、この都市がわたし自身の生活の発展と不可分に結びつき、結びついたままでいるという事実にその基礎がある。しかしそのころわたしが早くからほんとうに内心の満足という幸福をおぼえたのは、もちろんすばらしいヴィッテルスバッハの王城が数学家的知性を備えていたからばかりではなく、豊かな情緒にめぐまれたすべての人にはたらきかけるその魅力によるのである。

**ドイツの誤った同盟政策**　わたしの職業としての仕事以外に最もわたしをひきつけたのは、ここでもまた毎日の政治的でき事、なかんずく特に外交事件の研究であった。わたしはドイツの同盟政策という回り道を通って後者に達した。わたしは同盟政策をオーストリア時代からすでに、絶対にまちがっていると思っていた。いつもヴィーンではドイツ帝国の自己錯誤の程度が、十分にわかっていなかった。わたしは当時、次のような考えに傾いていた。——あるいは次のことを単に口実として自分にもっともらしくいい聞かせていたのかも知れない——すなわちひょっとするとベルリンは、この同盟国が実際に弱くあまりあてにならないだろうということを早くから知っていたが、しかし多少とも神秘的な理由から、この考えを同盟政策をささえるために抑制していたのだろう、また突然中止すると、すきをうかがっている外国が驚いて立ちあがるようなことが考えられるし、あるいは国内の俗物を不安にさせることからも、望ましくないからだ、と。

もちろん民衆自身と交際してみてわたしがまず驚いたことは、この信念が誤まっていることがやがてわかったことである。驚いたことには、ハープスブルク王国の本質について、その他のことはよく知っている階層さえ、全然何も知らなかったことをいたるところで確認しなければならなかった。まさしく民衆の間では、同盟国は危急のときには必ずすぐさま力いっぱい働いてくれるまじめな強国と見てよいと狂気のように考えられていた。大衆の中ではこの王国はつねに「ドイツ国家」と思われ、頼りにすることができると信じられていた。人々はここでもその力をあるいはドイツ自身と同じように、幾百万をもってはかり得ると考え、そして、第一にオーストリアはとっくの昔にドイツ的国家制度をやめていること、だが第二に、この国の国内事情は刻一刻と崩壊に向かって進んでいることを完全に忘れていた。

わたしはそのころ、この国家構造が、たえずほぼ盲目的に宿命に向かってよろめいていることを、いわゆる公的な「外交官」よりも、よく知っていた。(3) というのは、民衆の気分はいつもただ、上から世論を注ぎ込んだ発露だったからである。しかし上からはこの「同盟国」をまるで金銭のように崇拝させた。誠実さの欠けているところは、愛嬌(あいきょう)でうまくおぎなえると思っていた。そのさい人々はことばがいつも現金の価値があると思っていたのだ。

ヴィーンにいたころすでに、わたしはときどき現われる政治家の公的な演説と、ヴィーンの新聞の内容との間の相違を観察したときに、シャクにさわったものだった。それにもかかわらずヴィーンは、少なくとも外見上は、ドイツ都市であった。だが、ヴィーンから、もっと適切にいえばドイツオーストリアから離れて、この国のスラブ地域にきたときには、なんと事情が違っていたことだろう。

そこでは三国同盟というまったく崇高なまやかしの演技がどう判断されているかを知るために、

人々はプラハの新聞だけを手にすることが必要であった。ここでは、この「政治家的傑作」に対しては、すでに残虐な嘲笑と侮蔑以外に何も存在しなかった。両皇帝が、お互いの友情の接吻をまさに額におしつけているまったく平和な時に、人々は、ニーベルンゲン的理想の微光を実際に現実に移そうとするときになれば、この同盟は無に等しいのだ、ということをまったく隠さなかったのだ。

けれども数年して、ついに同盟が実効を発するときがきて、イタリアが三国同盟から飛びだし、そして二国同盟を進むにまかせ、そのうえついにイタリア自体を敵にまわしたとき、人々はどんなに憤慨したことか。一般にまた人々がこうした奇跡、つまりイタリアがオーストリアといっしょに戦うこともありうるだろうという奇跡を一瞬でもあえて信じたことは、外交官的盲目でないものには、まったく理解することができなかった。だがもちろんオーストリア自体においても、事態は少しも変わるところはなかった。

オーストリアでは同盟思想の担い手は、ハープスブルク王家とドイツ人だけであった。ハープスブルク王家は打算と義理からであり、ドイツ人は善良な信頼と政治的な――愚鈍さからであった。善良な信頼からというのは、ドイツ人はこの三国同盟によってドイツ帝国自体に大なる奉仕をささげ、これを強化し、安泰にする助けになる、と考えたためである。しかし、政治的愚鈍さからというのは、最初に考えていたことが適中しなかったし、逆にかれらがそのために両国をどん底におとしいれるような死せる国家にドイツ帝国をしばりつける助けをしたがためである。しかし、とりわけかれら自身がこの同盟だけでますます非ドイツ化されてしまったためである。というのは、ハープスブルク王家はドイツとの同盟によってドイツ側からの干渉をまぬがれ得ると思い、そして遺憾ながらそれは正しかったのだが、かれらはドイツ主義を徐々に駆逐する国内政策をたしかに質的に容易に危険なく遂行

することができたからである。人々は有名な「客観性」によって、ドイツ政府の側からの攻撃をまったく心配する必要がなかっただけでなく、またオーストリアのドイツ主義自身にも、いつでも同盟に関連して、ひょっとしたらなまいきな口がスラブ化の卑劣な方策に対して開かれようとするのを、すぐに沈黙させることができたのである。

ドイツ帝国のドイツ人自身が、ハープスブルク政府を認め信頼を表明しているときに、オーストリアのドイツ人はどうすべきであったのだろうか？　全ドイツ社会の中心で自己の民族の裏切者として烙印を押されるために、かれらは反抗をなすべきだったろうか？　幾十年も、まさしく自己の民族のために、未曽有の犠牲をはらった、かれらがだ！

しかしハープスブルク王国のドイツ主義がまず根絶させられたら、この同盟はどんな価値をもつのだろう？　ドイツにとってこの三国同盟の価値は、まさしくオーストリアにおけるドイツ人の優位を確保することにかかっていたのではないのか？　あるいはまた人々はほんとうにスラブ的なハープスブルク帝国となお同盟して生きることができる、と信じていたのだろうか？

公的なドイツ外交や、同じくオーストリア国内の多民族問題に対する全体の世論の態度も、もはや愚鈍どころか、まったく狂気のさたであった！　人々は同盟の上に、七千万民族の未来と安全をたくしていた。――しかもこの同盟の唯一の基礎は、相手によって年々計画的に、迷うことなく、着実に破壊されていた。そのばあいいつの日か、ヴィーン外交との「協約」は残るが、しかし同盟国の援助は失われるに違いなかった。

これはもともとイタリアのばあいにもはじめから同じであった。

ドイツにおいてもう少しはっきりと歴史を研究し、民族心理学が研究されていたならば、おそらく

人々は、いつかクヴィリナール[4]とヴィーンの宮廷がいっしょに前線に立つだろうなどとは、一時たりとも信じえなかったはずである。敵として以外に、あれほど狂信的に憎んでいるハープスブルク国家のために政府がただ一人のイタリア人でも戦場にあえて立たしめるならば、実際その前にイタリアは火山になっているだろう。わたしはイタリア人がオーストリア国家に「加え」た激しい軽蔑と、底知れぬ憎悪が、一度ならず再々ヴィーンで燃えあがるのを、見た。ハープスブルク家が数世紀にわたってイタリアの自由と独立に対して犯した罪は、たとえ忘れる気があったとしても、忘れ得ないほどあまりにも大きかった。だが民族にもイタリア政府にも忘れる気は毛頭なかった。だからイタリアにとっては、オーストリアと共存するには二つの可能性があっただけである。すなわち同盟か、戦争かである。

人々は前者を選んだがゆえに、平静に後者を準備することができたのだ。

特にオーストリアとロシアの関係が、ますます軍事的対立を加えて以来、ドイツの同盟政策は無意味で、また危険だった。

これは大きい正しい道筋が考え方にまったく欠けていたことを示す典型的なばあいであった。

一体、なぜ同盟を結んだのか？　もちろんただ自分だけで自分の肩をもつよりは、ドイツ帝国の未来をよりよく維持せんがためである。しかし、ドイツ帝国の未来は、ドイツ民族の生存の可能性を維持する問題にほかならなかった。

その場合もちろん問題は、次のことだけに思える。すなわち、近い将来にドイツ国民の生活はどんな形をとるべきか、そして一般のヨーロッパの勢力関係のわく内で、人々はこの発展にさらに必要な基礎と、必須の安定をどのようにして保存しうるのか？　ということである。

ドイツ政治の外交上の活動に対する前提をはっきりと観察すれば、人々は次のような確信に到達せざるを得なかった。すなわち、

ドイツは毎年ほぼ九十万人の人口増加がある。この新しい国民の大軍を養う困難さは、年々大きくなり、もしこの飢餓貧困化の危険を時機を失わずに予防すべき手段と方法が発見されないならば、いつかは破局に終るに違いないのだ。

**ドイツ政策の四つの道**　かかる恐るべき将来の展開を避けるために四つの道があった。

一、フランスの手本にしたがって、出生の増加を人工的に制限し、それでもって人口過剰に対処することができた。

自然自身は、非常な窮乏の時代とか、気象的に悪い状態の時とか、ひどい飢餓の時にもまた、一定の地方や人種の人口増加にやはり制限を加えるのを常としている、もちろん無情と同時に賢明な方法ではあるが、自然は生殖力そのものを阻止しないが、しかし生まれてきたものを困難な試練と窮乏にさらし、強靭さや、健康で劣るものをすべて、ふたたび永遠に未知なるものの膝下へ帰すように強制することによって、生まれてきたものの存続維持を妨害するものである。それでもなお生存の不公平に屈しなかったものは、千倍もの試練に耐えた堅固で健全なもので、さらに生殖に適しているのである。こうして根本的な淘汰をはじめからくりかえすことができるのである。自然はそのように個々のものに対して残虐にたちむかい、そしてかれが生活の嵐に耐えられないかぎり、ただちに呼びもどすことによって人種と種自身を力強く維持し、むしろ最高の能力にまで高めるのである。

しかしそれとともに、数の減少は人の強化となり、したがって結局は種の強化となる。

人間が数の制限を行なおうと準備するときには話が違う。人間は自然を木彫りしたものではなく、「人間的」である。人間はこの残忍な全知の女王よりももっとよく知っている。人間は各個の存続維持を制限しないで、むしろ生殖そのものを制限する。これはむしろつねに自分自身だけを見て人種を見ないものには、逆の方法よりもより人間的であり、より正当だと思える。しかし遺憾ながらまたその結果は逆である。

自然は生殖を自由にさせておきながら、しかし存続維持は極度に困難な試練にゆだね、ありあまる個体の中から最良のものを、生きていくに値するものとして選び出す。こうして自然はそれだけを維持し、そして同様にその種の存続維持の担い手たらしめるものであるが、人間は生殖を制限するが、しかし一度生まれたすべてのものをどんな代価をはらっても維持しようとし、ひきつけんばかりにいっしょうけんめいになる。神の意志を訂正することが、かれには人間的であると同時に賢明であるように思える。そしてもう一度ある点で自然を凌駕し、そのうえ自然のたりないところは証明したと喜んでいる。もちろん実際には数は制限したが、これに対し個々の価値は低下させられたのだということを、神の愛すべき小猿はもちろん好んで見ようともしなければ、聞こうともしないのである。

というのはひとたび生殖自体が制限され、出生数が減少するやいなや、最も強いものや最も健康なものだけしか生きることを許されない自然的な生存競争の代りに、最も弱いものや、それどころか最も病弱なものも、どんな代価を支払っても「助け」ようとする当然の欲望、また自然と自然の意志を軽侮することが長ければ長いほど、ますます悲惨なものとならざるをえない子孫のために胚を残しておこうとする当然の欲望が、生ずるからである。

しかし結局かかる民族には、いつかこの世界の生存権がとりあげられるようになるであろう。とい

うのは、人間はある期間は存続維持の意志という永遠の法則に反抗することができるが、しかし、遅かれ早かれ報復がくるからである。より強い種族が弱者を駆逐するであろう。生きんとする衝動は最後の型においては、強者にその場所を譲るために、弱者を滅ぼすという自然のヒューマニティをその代りに置かしめるために、個々人のいわゆるヒューマニティという笑うべき束縛がすべて、どんどん破壊されるのだからである。

こうしてドイツ民族の増加をみずから制限するという方法で、ドイツ民族にその生存を確保しようとするものは、同時にドイツ民族から未来を奪うものである。

二、第二の道は、われわれが今日もしばしばくりかえし提案し称揚されていると聞いているもの、すなわち国土開発である。この提案を多くのものはよい意味に考えているが、たいていのものは、想像しうるかぎりでは、考えうるかぎりの大きな損害をひきおこすように、誤解されているのが常である。

疑いもなく、土地の収益力は一定限度までひきあげることができる。しかしただ一定の限度までであり、無限にということではない。一定の期間人々は、かくしてわが国土の利用度を増すことによって、飢餓の危険なく、ドイツ民族の増加の困難を防ぐことができるであろう。しかし生活上の要求は一般に住民数よりも急速に増加するという事実が、これに対立する。衣食に関する人間の要求は、年々大きくなり、たとえば今日でもおよそ百年前のわれわれの祖先の要求とはくらべようもないほどの状態になっている。だから生産の増加が人口の増大のすべての前提をはたした、と考えるのは誤りである。そうだ、それはある程度までしか当っていない。というのは少なくとも土地の増産の一部は、人間の増大せる必要性を満足させるために用いられるからである。単に一方では大いに節約し、他方

ではいっしょうけんめい働いてすら、それでもなお、それ以上に土地自体から生産される限界がくる。どんなに勤勉に働いても、それ以上土地から生みだすことが、もはやできなくなる。たとえば一定期間引きのばしたとしても、ふたたび宿命がおとずれる。飢餓ははじめは凶作等があったとき、ときたま現われるにすぎない。人口数の増加とともにこれは、ますますしばしば現われるようになり、ついにはめずらしい豊作の年に穀物倉がみたされているときだけ、飢餓がこないのである。しかしそのばあいでもなお困窮はいやされず、そして飢餓がそういう民族の永遠の同伴者になるときが近づくのである。そうなるとふたたび自然が助けて、生存のためにみずから選び出したものの中で淘汰を行なうか、あるいは人間がまたしてもみずからを助けねばならない。すなわち、人種および種に対してすでに述べたような重大な結果をともなう人口増加の人工的妨害に手をのばすのである。

この未来はいずれにせよ、いつかは全人類に迫ってくる、したがってまた個々の民族はこの宿命からもちろん逃れることができないのだ、と人々はなお反論することができるだろう。

これは一見まことに正しい。けれどもしかしこのばあい、次のことを熟慮すべきである。たしかに一定の時点に達したときには、土地の生産力は、増加しつづける人口数にもはや平衡を保つことができなくなるから、全人類は人種の増加をやめなければならなくなるだろう。そしてふたたび自然に決定させるか、あるいはできるなら自助によって、このばあいもちろん今日よりも正しい方法で、必要なつりあいを保たせてやらざるを得なくなるであろう。目下のところ、ただそういう危急に迫られている人種は、自分に必要な土地をこの世界に確保するに十分な力と強さをもっていない人種だけであるが、しかしこれはその次にはすべての民族に一様にあてはまるであろう。というのは、目下この地上にはまったく巨大な面積の土地が、依然として利用されないまま残されており、そして

開拓者を待ちこがれているだけだという状態だからである。しかしこの土地は自然によって、もともとある一定の国民あるいは人種に未来のための保留地帯として残しておかれたものではなく、それを獲得する力をもつ民族のための、そしてこれをいっしょうけんめい開拓するための土地であり、大地である、ということも同様にまた正しいのである。

自然は政治的境界を知らない。自然は生物をまずこの地球上に置き、そして諸力の自由な競争を見ている。そして勇気と勤勉さで最も強いものが、自然の最愛の子供として生存の支配権を受けとるのだ。

他の人種がこの地上の大きな面積に永遠にしがみついているときに、もしある民族が国土開発にとどまっているならば、ある時期になると他の民族が絶えず増加しつづけるのに、自己制限することを余儀なくさせられるであろう。しかしいつかはこういうばあいがくる。そして実際にある民族の自由に処置しうる生活圏が小さければ小さいほど、ますます早くなる。とにかく遺憾ながら、しばしば総じて最善の国民が、あるいはより正しくいえば、唯一の真の文化的人種、あらゆる人種の進歩の担い手だけが、その平和主義に眩惑(げんわく)されて、新しい土地獲得を断念し、「国土」開発で満足することを決意しているが、しかし劣等な諸国民が、この世界の巨大な生活圏を確保することを知っているから、これは次のような結果に導くであろう。すなわち、

文化的には劣っているが、しかし生来より残忍な民族は、最も大きな生活圏をもっているために、その位置でなお無限に増加をつづけることができるのに、文化的にはすぐれているが、しかし遠慮がちな人種がその制限された土地のためにいつかはその人口増加を制限せねばならないのである。いいかえれば、世界は、こうして文化的には価値は少ないが、しかし実行力のある人類の所有に帰するこ

とになる。

　そこでなお遠い将来のことではあるが、ただ二つの可能性だけが残る。つまり、世界はわが近代民主主義の観念にしたがって、すべての決定が数の上でより強い人種のために有利な結果に終わるか、あるいは世界は自然的な力の秩序の法則によって支配され、その場合残虐な意志をもつ民族が勝つことになり、したがって自制する国民が敗れるか、である。

　しかしこの世界がいつかこのうえもなく激しい人類の生存の闘争にさらされるだろうことは、誰人も疑うことができない。最後には自己保存欲だけが、永遠に勝利を占める。この欲望の下では、愚鈍や臆病やうぬぼれの強い知ったかぶりがごっちゃまぜになって表われているいわゆるヒューマニティは三月の太陽のもとでの雪のようにとけてしまう。永遠の闘争において人類は大きくなった——永遠の平和において人類は破滅するのだ。

　しかしわれわれドイツ人にとっては、「国土開発」のスローガンは、だからまったく因果なことである。それは、平和主義的な心がけに応じて平穏な仮睡生活の中で生存を「儲ける」ことが許される手段が見つかったという意見を、すぐにわれわれの間に強めるからである。この説がひとたびわれわれの間にまじめに受けいれられるならば、それはこの世界で、われわれにふさわしい場所を確保しようとするあらゆる努力の終焉（しゅうえん）を意味するのである。このような方法ででも、生活と未来を確保しうるという確信を、平凡なドイツ人がいだきはじめるやいなや、ドイツ人に必要な生を積極的に、したがって効果的に主張しようとするあらゆる試みは、空虚になるであろう。しかし国民のこういう態度によって、すべて真に効果的な外交政策は葬り去られ、それとともにドイツ民族の未来も一般に葬られると見ることができよう。

この結果をよく知っていて、こういう死ぬほど危険な思考過程をわが民族に植えつけようとし、植えつけることを知っているのが、いつもまずユダヤ人であることは偶然ではない。ユダヤ人はかれの期待にそむかぬものだけを、よく知っている。ユダヤ人は、スペイン的蓄財ペテン師のためにありがたがって犠牲になってくれるということを知らないはずがなく、自然を愚弄し、苛酷無情な生存競争を無用にするようにし、その代りに「その場その場のご都合」次第で、あるいは労働によって、時にはまた何もしないで、この遊星の支配者になりあがる手段が見つけられるだろうと、かれらを瞞着することを知っているのだ。

**すべてのドイツ国土開発は、まず第一に社会的弊害を除き、なかんずく一般的な思惑から土地をひきはなすのに役立っただけである。だが新しい土地や土壌なくしては、国民の未来を確実にするために決して十分ではありえない。ということは、いくら強調しても、しすぎることはない。**われわれが別の方法をとるならば、やがてわれわれは、わが国土の末端に到達してしまうだけでなく、われわれの力もつきてしまうであろう。

最後になお、次の点が確認されねばならない。すなわち、

国土開発によってある一定の小さい地面に拘束されていること、同じようにまた出産制限によってもたらされる同じような終局の結果は、当該国民を軍事政策上、極度に不利な状態に導くのである。

民族の居住地域の大きさの中にはすでに、それだけで外的な安全性を決定する本質的要素がある。ある民族が自由に用いる地域の範囲が大きければ大きいほど、それだけ自然の守りも大きくなる。というのはいつも小さく押しつぶされた地面にいる民族に対して軍事的に決着をつけることはより早く、

したがってまたより容易で、特により効果的に、より完全なやり方でねらうことができ、領土的に大きい国家はこの逆が可能となるからである。それゆえ国家の領土が大きいということは、いつも無分別な攻撃に対しては確実な守りとなる。というのはそのさいには長期の苦しい闘争によってのみ所期の結果に達しうるからであり、まったく特別な理由が存在しないかぎり、不遜な奇襲をしては冒険があまりに大きすぎると思われるからである。したがって国家が大きいということの中には、すでに民族の自由と独立をより容易に維持する基礎があるのである。一方逆にかかる構造が小さいとそれを無遠慮に占領しようと挑戦するのだ。

事実上、人口がふえるのと並行して土地を拡大してその間に均衡をつくろうとした最初の二つの可能性は、またドイツ帝国のいわゆる国家主義団体によって拒否された。こういう態度をとった理由は、もちろん以上述べたこととは違っていた。つまり出産制限については、かれらはまず第一に、一種の道徳観から拒否する態度をとった。国土開発を人々が憤激して拒否したのは、人々がそこにおいて大土地所有を攻撃すると邪推し、そしてその中に私有財産に対する一般的闘争の端緒を見たからである。特に後者を後援する学説が提唱した形式では、人々がいきなりそのように受けとったのも正しかったのである。

一般に大衆に対する防御策は、非常にまずく、そしてまた決して問題の核心をついてもいなかった。かくして増加する民族数に労働とパンを確保するには、ただ二つの道しか残っていなかった。

三、人々は過剰な幾百万人を毎年移住させるために、新しい土地を手に入れ、そして自給の原則でずっと国民を養っていくか、あるいは、

四、外国の需要に応じて商工業を起し、その売上高によって生活をまかなっていくかであった。

だから領土拡大政策か、植民地政策、商業政策をとるかのいずれかである。この二つの道は種々の方面から注目され、検討され、推挙され、そしてついに後者が決定的に採用されるまでたたかわれた。

両者の中で、より健全な道は、もちろん前者であったろう。

**新しい土地の獲得**　過剰人口を移民させるために新しい土地の領土を求めることは、現在をでなく、特に将来を注視するならば、無限に多くの利益がある。

全国民の基礎としての健全な農民階級を維持していく可能性でさえも、決して十分に高く評価されているとはいえない。

今日のわれわれの多くの悩みは、そもそも農村の民衆と都市の民衆との間の不健全な状態に由来する。中小農民の固い株は、いつの時代でも、われわれが今日もっているような社会的疾病に対する最良の防御である。しかし、これは国民が経済の国内循環において日々のパンを獲得する唯一の解決法でもある。商工業はその不健全な指導的地位から退いて、国家的な需要均衡経済という一般的なわく内に組みいれられる。それとともに両方とももはや国民を扶養する基礎でなく、その補助手段になる。商工業はあらゆる分野で自国の生産と需要の均衡だけを課題とすることによって、全国民の扶養を多少とも外国から独立させ、特に重大な時に、こうして国家の自由と国民の独立を安全にするのを助けるのである。

もちろんこのような領土拡大政策は、カメルーンにおいてではなく、今日ではかろうじてもっぱらヨーロッパにおいて実現されるのである。人々はそれと同時に、冷静に、まじめに、ある民族がこの

世界で他の民族より五十倍も多くの土地や領土を与えられているのは、たしかに神の意志ではありえない、という観点に立たねばならない。このばあい人々は、政治的な境界によって、永遠の権利の境界から遠ざけられてはならない。この地上が真にすべての人の生活圏を有しているならば、しからば、われわれにも生活に必要な土地が与えられてもよいはずである。

　もちろんだれも喜ぼうとはしないであろう。けれどもそのばあいには自己保存の権利がその効力をあらわす。そして示談が拒否されれば、まさしく拳骨でいかねばならない。もしもかつてわれわれの祖先が、その決意を今日現代と同じような平和主義的ナンセンスにもとづかせていたならば、しからばわれわれは、われわれの現在の領土のわずか三分の一ぐらいしか所有していないであろう。そしてそのばあいにはドイツ民族は、ヨーロッパではもはや何もなすところもなかったにちがいない。そうだ――ドイツ帝国の二つの東部辺境州および、これとともにそもそも今までわれわれを存立せしめてきたわが国家と民族の領域の大きさの内部的強靭さは、われわれが自己の生存のために戦うための自然的な決断力のおかげなのだ。

　いま一つの理由からも、この解決は正しかったといえるであろう。すなわち、

　今日ヨーロッパ諸国の多くは、ピラミッドをさかさにしたに等しい。そのヨーロッパの底面は、植民地、外国貿易等における他の重荷に対して笑うべきほど小さい。ヨーロッパに尖端があり、全世界に基底があるといってもよい。基底をなお自己の大陸にもち、そしてただ尖端のみが他の土地に触れているアメリカ合衆国とはちがうのである。それゆえにこそ、しかしまたこの国は未曽有の国内的な力をもち、ヨーロッパの植民地国家がたいてい脆弱なのである。

　イギリスもまた例外ではない。とにかく人々は大英帝国を見るばあい、そもそもアングロサクソン

系の世界そのものを見ることを簡単に忘れる。イギリスの地位は、ひとりでアメリカ合衆国と言語上、文化上で共同しているために、それでなくてさえ他のヨーロッパの国々とも比較されえないのである。それゆえドイツにとって健全な領土拡大政策を実施する唯一の可能性は、ヨーロッパ自体の中で新しい土地を獲得することだけにあった。植民地は、それが大規模のヨーロッパ人の植民のために適していないと思われるかぎり、この目的に奉仕することはできない。だが平和的方法では、十九世紀においては、そういう植民地領域をもはや得ることはできなかった。したがって、ただ困難な闘争の方法でのみ、かかる植民政策を実施することができたのである。そしてヨーロッパ以外の地域よりも、むしろ故郷の大陸の土地のために戦われたほうが、いっそう目的にかなっていたのである。

このような決意はもちろん、さらに終始一貫せる献身が必要である。中途半端な方法や、あるいはぐずぐずしているだけでは、最後の精神力まで緊張させてはじめて遂行できると思われるような課題に、近づくことはできない。そのときにはまた、ドイツ帝国の全政治的支配が、この唯一の目的に向かって熱中しなければならなかった。こうした課題や条件を認識する以外に、他の考慮に導かれる方策は決して生じえなかった、この目的は闘争によってのみ達せられる、ということを明白に認識させ、しかしまた冷静に、沈着に戦闘にたち向かわねばならなかったのだ。

**親英反露**　そこで同盟はすべてもっぱらこの観点から検討し、その利用しうる度合いにしたがって評価すべきであった。人々がヨーロッパで土地と領土を欲するならば、そのさいは大体においてロシアの犠牲でのみ行なわれえた。そのばあいには、ドイツの鋤には耕土を、だが国民には日々のパンを与えるために、ドイツの剣でもって、新しいドイツ帝国はふたたび昔のドイツ騎士団の騎士の道を

進まねばならなかったのだ。

かかる政策のためには、もちろんヨーロッパにはただ一つの同盟国があった。すなわちイギリスである。

イギリスと結んでのみ、背面を保護されて、新しいゲルマンの行軍をはじめることができたのである。なおまたその権利は、われわれの祖先の権利よりも決して小さくはないであろう。わが平和主義者といえども、たとい最初の鋤といったものがかつては「剣」と呼ばれたとしても、東方のパンをたべることを拒みはしない。

イギリスの好意を得るためには、だがどんな犠牲でも大きすぎることがあってはならなかった。植民地と海上勢力を断念し、そしてイギリス工業に対して競争をさしひかえるべきだった。

絶対的に明白な態度だけが、このような目的に達することができたのだ。すなわち、世界貿易と植民地を放棄すること、ドイツ海軍を断念すること。陸軍に対して国家の全勢力機能を集中することである。

その結果はたしかに一時的には抑制であったかも知れない。だが偉大なそして力強い未来でもあった。

この意味でイギリスがわかりがよかったならば、その時期があったのだ。ドイツが自国の人口増加のために何かある打開策を探さねばならず、そしてイギリスと結んでそれをヨーロッパに求めるか、あるいはイギリスと結ばずに世界に求めるかを、イギリス人は非常によく理解していたのだからである。

世紀の転換期に、ロンドン自身のほうからドイツに接近しようとした時があったが、この考えはな

によりもまずイギリスが先にのべたようであったからである。最近の数年間にわれわれがほんとうに恐ろしく思って観察することができたことが、当時はじめて現われたのであった。人々はイギリスのために火中の栗を拾わねばならないという考えから、いやな感じを受けた。あたかも同盟とは一般に相互取引の原則とは異なった原則でありうるかのようであった。しかしこういう取引は、イギリスとは非常にうまくできたのである。イギリス外交はいつも相互履行なくしては、何もしてくれることを期待できないということを知らないほど、バカではなかったのである。

そして、賢明なドイツ外交が一九〇四年の日本の役割[5]を引受けていたと考えてみよう。そうすればその結果がどれほどドイツのためになったか計り知れないのである。

決して「世界戦争」にまでいたらなかったに違いない。

一九〇四年の血は、一九一四年から一九一八年[6]にかけて流した血を十倍も節約したのだ。

そうすればドイツは、今日世界でどんな地位を占めていたことだろう!

**対オーストリア同盟の廃止**　もちろんこのばあいオーストリアとの同盟は、無意味であった。というのはこの国家的なミイラは、戦争を貫徹するためにドイツと結んだのではなく、永久の平和を維持するために結んだのであり、さらに平和は、りこうにも徐々にだが確実に、王国内のドイツ主義を絶滅するために用いることができたからだ。

しかしこの同盟は次の理由からも不可能であった。すなわち、直接に国境を接しているところで行なわれている非ドイツ化の過程に終末をもたらすだけの力と決意を一度ももったことのない国からは、ドイツの国家的利益を積極的に代表することなどまったく期待できないからである。ドイツが、頼り

にならないハープスブルク国家から一千万の同胞種族の運命についての処置を奪いとるだけの国家感情と無遠慮さをもたないならば、その場合には先を見通した思いきった計画にいつか手を出すだろうなどとは、まったく期待することができなかった。オーストリア問題に対する旧ドイツ帝国の態度は、全国民の運命を決する闘争における行動の試金石だったのである。

いずれにせよ、オーストリアの同盟の能力の価値は、もっぱらドイツ的要素の維持ということから決められたのであるから、年々歳々ドイツ主義がますます抑圧されるのを傍観していてはならなかった。

しかしいっこうにこの方法はとられなかった。人々はなにによりも戦闘を恐れた。それにもかかわらずついに最も不利なときに、戦争にまきこまれたのであった。

人々は運命からいそいで逃げようとした。そして運命にすぐに追いつかれたのだ。世界平和の維持を夢見て、世界戦争に達したのだ。

そしてこれが、なぜドイツの未来を形成するという第三の道にかつて一度も注目しなかったか、という最も重要な理由であった。新領土の獲得はただ東方においてのみ達せられることは知っていたが、それには戦争が必要だと考え、いかなる代価を払っても平和を欲したのだった。というのは、ドイツ外交のスローガンは、とっくの昔に、どんな方法を用いてもドイツ国民を維持するというのではなく、むしろあらゆる手段をつくして、世界平和を維持するのだ、と称していたからだ。そしてこれがどんな成果をおさめたかは、よく知られている。

わたしはこの点について後に特に触れるつもりである。

**経済拡張政策** かくして第四の可能性が残された。工業と世界貿易、海軍と植民地がそれである。もちろんこのような発展は、はじめは比較的容易に、そしてまた恐らく迅速に達成されるものである。土地や領土の植民は、往々にして幾世紀も続く緩慢な経過をたどる。そのさい、突然に燃えあがるものでなく、徐々にではあるがしかし根本的な、また絶え間ない成長が行なわれていることにこそ、その内面的な強靭さを求めるべきである。それが、数年の間に膨脹しうるが、堅牢な強さというよりもシャボン玉に似ているような工業の発展との相違点である。軍艦をつくることは、ねばり強い闘争をして農場を開き、農民を植民させるよりは、もちろん速い。だがこれはまた、後者よりも、もっと速く水泡に帰するものである。

それにもかかわらずドイツがこの道を進んだばあいは、人々は少なくとも、ある日この発展も最後は戦争になるだろうということを、はっきりと認識していなければならなかった。友情にあつい、そして礼儀正しい態度で、平和的な心がけを絶えず強調しながら、人々が美しく、もったいぶって語るように、「諸民族の平和的競争」において、自分のバナナはとってくることができる、だから武器をとる必要はない、と考えることができるのは子供だけである。

そうだ、もしわれわれがこの道を歩むならば、そのばあいいつかはイギリスがわれわれの敵となるに違いない。イギリスが他日無遠慮にもわれわれの平和な活動に対して、無法な利己主義者の粗暴さで対立したことについて憤慨するのは——だがまったくドイツ人独自のお人好しにかなっているが——ナンセンス以上である。

われわれならもちろんこんなことはしないだろうが。

**親露反英**　ヨーロッパの領土拡大政策が、ただイギリスと提携し、ロシアを敵としてのみなしえたとするならば、一方反対に植民地および貿易政策は、ロシアと結んでイギリスに対立することによってのみ、考えられることであった。しかしその際人々はここでも仮借なく結論を引き出さねばならなかった。――そしてなによりもまずオーストリアと手を切らねばならなかった。

どの方向から見ても、世紀の転換期にはこのオーストリアとの同盟はもともと、まったく狂気の沙汰であった。

ところが人々は、ロシアと結んでイギリスに対することも、同じくイギリスと結んでロシアに対することも、まったく考えなかった。そしてこれを避けるために人々は、たしかに一般にまず商工業政策を決意した。それはかりではなく、いまやこの「経済的」世界制覇においては、いままでの権力政策を断然挫折させるべきだ、という使用説明書をもっていた。人々はしかし、往々にしてこれにまったく確信がなかったらしい。特にイギリスからまったく不可能な脅迫がくるごとにそうであった。だから人々は、海軍の建設も決意したが、しかしまたそれもイギリスを攻撃したり、殲滅したりするためのものではなく、上に述べた「世界平和」と「平和的」世界制覇の「防衛」のためであった。したがって、それはまたあらゆる点で、その数のみならず、個々の艦船のトン数や艤装も、そのようにしてまで最後の結末として「平和的意図」をあらわすために、多少ひかえ目であった。

**経済的平和的征服**　「経済的平和的」征服をうんぬんすることは、かつて国家政策の指導原理にあげられた中で、無意味きわまりないものであった。人々がこういうことができる証人としてイギリ

スを立てることを恐れなかったのが、そのためにこの無意味さをいっそう大きくしている。そのさいわが大学教授のような歴史学説や歴史観がともに犯した罪はほとんど取り返しのつかぬものであり、歴史を理解したり、把握したりすることをせずに、歴史を「学ぶ」ものがいかに多いか、ということに対する適切な証明でもある。イギリスにおいてこそ、この説が的確に否定されていることを、人々は認識しなければならないであろう。けれどもいかなる民族といえども武力による経済征服をイギリス民族ほどきわだった残忍さでよりよく準備したり、無遠慮に弁護したりしたものはない。政治力から経済的利益を引き出し、あらゆる経済的強権をふたたびただちに政治権力に鋳直すことが、まさしくイギリス政治の特徴ではないか？　それにもかかわらずイギリスを、なにか人間的には臆病であり、自己の経済政策には自己の血も賭けないと考えたのは、なんという誤りであろう！　イギリス民族が「国民軍」[7]をもたなかったことが、ここでは決して反証にはならなかった。なぜならここでは、その時々の国防軍の軍制形式が問題になるのではなく、むしろ現存の形式に植え込むべき意志と決断が、問題だからである。イギリスはつねに必要とするだけの装備をもっていた。イギリスはいつもある成果に達する武器をもって戦った。傭兵で十分であるかぎりは傭兵で戦った。しかし全国民の尊い血において、そのような犠牲のみが勝利をもたらしうるときには、そこまで深く手をのばした。しかしいつも戦いに対する決意を失わず、戦いに対する強靭さと、仮借なき遂行という点では、いつでも変わるところがなかったのである。

**ドイツの漫画の中でのイギリス人**　だがドイツでは、学校、新聞、漫画雑誌によって、イギリス人やイギリス帝国の本質について、この上もなく悪質な自己欺瞞を招くにきまっている観念を、人々

に徐々に植えつけたのである。というのは、こうしたナンセンスに人々が徐々に感染し、その結果、過小評価し、それがもっとも峻厳に報いたからである。この誤謬は、イギリス人が老獪であると同時に、人格的にもまったく信ぜられぬほど卑怯な商売人だと確信したほどまでに、深かったのである。イギリスほどの大きな世界帝国が潜行やペテンだけで簡単にできあがらないのだということが、遺憾ながらわが大学教授式学問の崇高な教師にはわからなかったのだ。二、三の警告者は、聞きながされるか黙殺されたのだ。わたしはいまでもはっきりおぼえているが、われわれがフランドル地方でイギリス歩兵に直接にぶつかったとき、われわれの仲間の顔にあらわれた驚きがどんなだったか。最初の数日の戦争で、早くもこれらスコットランド兵は、漫画雑誌や通信電報で信じさせられていたものと正反対のものだ、という確信が、その時おそらくみんなの頭に浮かんだのである。

　当時わたしははじめて、宣伝形式の有効性について考察しはじめた。

　しかしこの誤謬は、もちろん流布者にとっては、つごうのよいことだった。たとえまちがった例ではあるが、この例で経済的な世界制覇の正しさを実証することができたのだ。イギリス人にできたことはわれわれにもできるにちがいないし、その際にさらにあの特殊なイギリス的「不信」をもたず、非常に偉大な正直さをもっていることが、まったく特別のプラスであると思われた。というのは、これによって大国の信用と同時に、とりわけ小国の好意をそれだけ容易に得られると思っていたからである。

　われわれの正直さが他国にとって内心恐るべきものであったということが、われわれがこれらすべてのことをまったくまじめに、みずから信じていたがため、われわれにはそのさいわかっていなかったのだ。他の世界がかかる態度をまったくすれっからしの虚偽のあらわれと見ており、革命が起って

はじめて、われわれの正直な意向の徹底的なバカサかげんに深い洞察を加えて、驚きはてたというのに、だ。

**三国同盟の内面的な弱さ**　この世界の「経済的平和的な制覇」が無意味だということからだけでも、ただちに三国同盟の無意味さは、はっきりと理解しうることだった。それとは別にそれでは一体どこの国と同盟を結べばよかったのか？　もちろんオーストリアと結んでも、ヨーロッパだけすらも、戦争で征服することに着手できるはずがなかった。まさにこの点にこそ、そもそも最初からこの同盟の内面的な弱さがあった。ビスマルクのごとき人は、かかる応急処置をあえてやり得たが、少なくともビスマルクがなした同盟のための本質的前提がとっくの昔になくなった時代において、てぎわの悪い後継者たちではもはや何もできなかった。というのは、ビスマルクはオーストリアの中に依然としてドイツ国家があると信じていたからである。しかし普通選挙権が次第に導入されるとともに、この国は議会政治で統合される非ドイツ的混乱状態におちいったのだ。

いまやオーストリアとの同盟は、人種政策的にもまったく有害であった。人々はドイツ国境に新しいスラブ強国ができあがるのを甘受していた。この国は遅かれ早かれドイツに対して、たとえばロシアに対するのとはまったくちがった態度をとるに相違なかった。それと同時に、この王国における同盟思想の唯一の担い手が、影響力を失い、決定的な地位から駆逐されるのに比例して、同盟自体が年々歳々、内部的に空虚にかつ弱くなった。

すでに世紀の転換期に、オーストリアとの同盟は墺伊同盟とまったく同じ段階に到達していた。ここでもまた、可能性が二つだけ残されていた。すなわちハープスブルク王国と同盟を続けるか、

あるいはドイツ人の駆逐に対して抗議をするか、であった。しかしこういうことが一度はじまると、結末はたいてい公然の戦争になるものだ。

また三国同盟の価値は、心理的にもすでに些細なものであった。というのは同盟の堅固さというものは、同盟が目的を現状そのものの維持に制限すればするほど、それにつれて減少するものだからである。しかし、反対に同盟は、個々の締約国がそれによって、一定の明確な包括的な目的に達しうる希望をもつことができればできるほど、ますます強くなるものである。どこにでもあてはまることであるが、ここでもまた強さというものは、防御にではなく攻撃にあるのだ。

**一九一二年のルーデンドルフの建白書**　これまた当時いろいろの方面によって認められていた。遺憾ながらいわゆる「その職にあるもの」だけが認めなかったのだ。特に当時の参謀本部付士官たるルーデンドルフ大佐は、一九一二年の建白書の中で、この弱点を指摘した。もちろんこのことは「政治家」の側からは、なんらの価値も意義も認められなかった。というのは、見うけるところ、一般に明瞭(めいりょう)な理性は、普通の人間の目的にかなうように現われるだけであって、原則としてしかし、「外交官」に関するかぎり除外されるようだからである。

一九一四年の大戦がオーストリアという回り道で勃発し、したがってハープスブルク家も参加しなければならなかったことは、ドイツにとってはほんの少し幸いであった。なぜならもし逆にドイツで勃発していたならば、ドイツは孤立していたであろうからだ。ハープスブルク国家はドイツによって起った戦争には、決して参加することができなかったであろうし、また参加しようとさえしなかったであろう。人々はその後、イタリアを非難したが、それがもっと早くオーストリアに対して起ったで

あろう。少なくともその初期に同時に革命から国家を救うために、オーストリアは「中立」にとどまっていたに違いない。オーストリアのスラブ民族は、すでに一九一四年にドイツのための援助を認めるよりは、王国をたたきこわしていたであろう。

だが、ドーナウ王国との同盟がもたらした危険と困難がどんなに大きいものであったかを、当時理解し得たものはほとんどなかったのである。

第一、オーストリアには、その腐朽した国家を継ごうと考え、したがって時がたつにつれてドイツに対するある憎悪を生ぜざるを得なかった多くの敵があった。なぜならドイツこそ人々は、あらゆる方面から期待され、待ちこがれている王国の崩壊を阻止している本元だと認められていたからである。結局ヴィーンはベルリンという回り道を通ってのみ到達すべきもの、と確信されるにいたったのだ。

**誘惑的遺産としてのオーストリア**　それとともにしかし第二に、ドイツは最も見込みのある同盟の可能性を失ったのだ。それどころか、その代りにロシアやイタリアとすら、ますます大きな緊張の度を加えたのだ。しかもローマでは一般的気分は、イタリア人の最後の一人の心の中にまでも反オーストリア的気分が眠っており、しかもしばしば燃えあがるのと同程度に、親独的であったのである。

人々が一度商工業政策をとった以上、もはやロシアと戦う原因は同様に少しもなかった。両国民の敵だけが、この争いに旺盛(おうせい)な興味をもつことができた。事実、ここにおいてもあらゆる手段で両国の間を戦争に扇動し、けしかけたのは、まず第一にユダヤ人とマルクス主義者であった。

最後に、そして第三に、この同盟はドイツにとってはかり知れない危険を蔵しなければならなかった。というのは、いまやビスマルク帝国に実際に敵対している大国が、オーストリアの同盟国の犠牲

ですべての国が富裕になれることを予期させる地位にいたので、すべての国々をドイツに対抗するためにいつでも、容易に動員することができたからである。

ドーナウ王国に対しては、全東ヨーロッパを扇動させることができた。特にロシアとイタリアを。イギリス王エドワードの主導的活動によってつくられた世界連合は、もしドイツの同盟国たるオーストリアが、必ずしもそのような誘惑的遺産と思われなかったならば、決して成立しなかったであろう。この遺産があったからこそ、そうでなければ異質の欲望や目標をもっている国々を、唯一の攻撃戦線に加えることができたのである。いずれの国も、ドイツに対する共同戦線によって、オーストリアの犠牲で各自の富を増すことができると思っていた。ところで、このような不幸な同盟にさらにまたトルコが、匿名関与者として属していると思われたことは、この危険を極度に強くした。

しかし、国際的なユダヤ人の世界的金融家が、普遍的な超国家的金融経済支配になお服しないドイツを滅亡させようと多年熱望してきた計画を遂行しうるためには、このオーストリアという餌を必要としたのである。それによってこそ人々は、いまや幾百万の進軍する軍隊の純然たる数によって強化され、勇気づけられ、ついに不死身のジークフリートに肉薄する覚悟をもった連合を、でっちあげることができたのである。

わたしにはすでにオーストリア時代からいつも不満でいっぱいだったハープスブルク王国との同盟は、いまや長期にわたる、内面的検討の原因になりはじめ、その後においてもいままでに抱いていた考えをなおいっそう強くするだけだった。

当時すでにわたしは、いつも行き来している小グループにおいて、没落するにきまっているこの国家との不幸な協定は、時機を逸しないうちに解消しないと、ドイツの破滅的な崩壊にまで導かれると

いうわたしの確信をかくさなかった。ついに世界大戦の嵐が、すべての理性的な熟慮を断ち切ったかのように思われ、いちばん冷静に現実の考察だけをなすべき地位にあるものまでいっしょに感激に陶酔したときも、このわたしの岩のように固い確信は、瞬時も動揺しなかった。わたし自身が前線に立っていた間も、この問題が語られるごとに、この同盟は破られることが早ければ早いほど、それだけドイツ国民のためになり、またハープスブルク王国を放棄することで、それだけドイツの敵を少なくしうるならば、決して犠牲を払ったことにはならない、というわたしの意見を主張したのだった。というのは幾百万のものが鉄カブトの緒を締めたのは、堕落した王国を維持するためではなく、むしろドイツ国民を救済するためであったからだ。

大戦前に数度、少なくともある陣営においては、あたかもこの同盟政策のとる方向にかすかな疑惑が浮かびあがったかのように見えた。ドイツ保守階層は時々、あまりのお人よしに警告しはじめたが、しかしこれはすべての理性的なものがそうであるのと同様に、聞き流されたのであった。人々はその効果は巨大で、犠牲はゼロに等しい世界の「制覇」の正しい道を歩んでいる、と確信していた。しかし著名な「その職についていないもの」[8]は、「その職にあるもの」が、なにゆえにそしてどうしてハメルンの捕鼠者のように、愛する民族を後に引き寄せながらまっすぐに破滅に進んでいくかを、だまって傍観するよりほかに仕方がなかった。

＊

**国家と経済**　全民衆に「経済的制覇」というナンセンスなことを、実際政治の方策として、その反面「世界平和」の維持を政治の目標として全民衆に提示し、おまけに理解させることができたことについては、われわれすべての政治思想が一般に不健全であったことにかなり深い原因があった。

ドイツの技術と工業の凱旋行列、ドイツ貿易の上昇しつつある成果とともに、これらはみなただ強力な国家を前提としてのみ可能なのだ、という認識が次第に失われた。反対に、多くの仲間の間では、ただこの現象のおかげで国家自体が存在しており、国家自体がまず第一に経済的利益にしたがって統治さるべき一つの経済的制度であり、だからこそその存立も経済に依存しているのだ、という信念を主張するにいたった。さらにその状態が最も健全で最も自然なものとみなされ、また称揚されていたのだ。

しかし国家は、特定の経済観や経済的発展とはまったく無関係である。

国家は経済的課題を実行するために、ある一定の制限された生活圏に経済的な契約者をまとめたものではなく、種の発展維持をいっそう可能ならしめ、摂理によって規定された自己存在の目標を達成するための心理的、精神的に同一な生物の共同社会組織である。国家の目的と意義はこれであって他の何物でもない。そのさい経済は、この目標を達成するためにまさしく必要な数多くの補助手段の一つにすぎない。しかし経済は、国家がはじめから不自然なために誤った基礎に立っていないかぎり、国家の原因でもなければ、目的でもない。国家それ自体は、前提条件として領土的境界をもつことを決して必要としないということは、これによってのみ明らかにされる。これはみずから種族同胞の扶養を確保しようとし、したがって、自己の労働によって生存競争を戦い抜く覚悟がある民族によってのみ必要とされる。雄バチのように他の人類の中に忍びこむことができ、あらゆる口実をもうけて人類を自己のために働かせるような民族は、独自の一定の境界をもった生活圏なしでも国家を形成することができる。このことは第一に、その寄生性のためにとりわけ今日、正直な全人類が悩んでいる民族、すなわちユダヤ民族にあてはまるのである。

ユダヤ国家は、地域的に一度も境界のあったことがなく、地域の上では普遍的で際限なく、ただ人種の集合という点に制限があっただけである。それゆえこの民族はいつもまた国家の中に一つの国家を形成していた。この国家を「宗教」として航海させ、かくしてアーリア人種[9]が宗教上の宗派と認める心がまえのできている寛大さによって自己を安全なものにしてきたことは、まだ見たことのない最も天才的なトリックに属する。というのは事実上モーゼの宗教[10]は、ユダヤ人種保存の教説にほかならないからである。それゆえこの宗教は、一般にユダヤ人種保存のためにだけ問題になりうる社会学的、政治的な、同様に、経済的な知識分野を、ほとんどすべて包括しているのである。

人間が共同社会を形成した最初の動機は、種の保存の衝動である。しかしながら、それと同時に国家は民族的な有機体であって、経済的組織ではない。この相違は、それが特に今日のいわゆる「政治家たち」にはもちろんいつまでもわからないぐらい大きいのである。それゆえ政治家たちはまた、国家というものは、実際永遠にただ種と人種の保存意志の線にある本性の活動の結果であるのに、国家も経済によって建設できると信じている。しかしこの本性はつねに英雄的な徳であって、決して小売商人的利己主義ではない。そのうえ種の存在の維持は、各人の献身に進んでおもむく覚悟を前提としているからである。詩人のことばの意味はまさにそこにある。「なんじが生命を賭せざれば、生を得ることなかるべし[11]」、種の保存を確保するためには、個人の存在の献身が必要だということである。それゆえ国家の形成と維持のためには、同質同種を基礎とした一定の共属感情の存在と、そのためにはあらゆる手段をつくして進んでおもむく覚悟を本質的前提とする。もしこの本性を非常に多種多様な国家の存在形式の前提として指示し得ない存在であるならば、これは自己の領土にいる諸民族のばあいは英雄的徳の形成に導かれ、寄生民族のばあいには嘘つきの偽善や陰険な残虐行為に導かれるの

である。しかし国家の形成はいつも、少なくとも本来はこの本性の傾注によって生ずるであろう。さらにその場合自己を保存するための格闘において、お互いが戦うばあいに、英雄的な徳をほとんどもっていないような、あるいは敵の寄生民族の虚偽の策略に対抗できないような民族は、敗北させられる。すなわち征服され、それと同時に遅かれ早かれ、死滅しはてるであろう。だがまたこのばあいにも敗北はいつも、怜悧さが不足しているためではなく、むしろ人道的志操というマントの下にかくれることだけを考えている決断力と勇気の欠如に帰するのである。

国家を形成し、国家を維持する本性が経済とどんなに薄い関係こそないかは、次の事実がこのうえもなく明白に示している。すなわち、国家の内面的な強さがいわゆる経済的発展と一致することはほとんどまれであり、むしろこの繁栄は無数の多くの例によれば、国家がすでに滅亡に近づいていることを示しているようである。しかし、もし人間の共同体の形成がまず第一に経済力あるいは経済的衝動に帰するものであるとするならば、最高度の経済的発展はまた同時に国家の最も強力な勢力を意味しなければならず、この逆であってはならないはずだ。

経済力が国家を形成し、国家を維持するという信仰が、あらゆる点から見て歴史的に反対であることが明らかに、かつ徹底的に示されている国においても通用しているということは、まことに理解しがたい妙な気持ちをおこさせる。まさしくプロイセンは、国家の形成を資格づけるものが物質的特性でなく、観念的な徳のみであることを、驚くほど明確に示している。この支持のもとにこそはじめて、経済も繁栄することができ、純粋な国家形成能力が崩壊するとともに、経済もふたたび崩壊するにいたる。ちょうどいまわれわれは、恐ろしくも悲しいことながら、この過程を眺めることができるのである。人間の物質的利益が最も繁栄することができるのは、つねにそれが英雄的徳性の庇護のもとに

ある時だけである。しかしそれを生存の第一条件としようとするならば、たちまちそれは自己存立の前提を破壊することになる。

ドイツでは力の政策が高まったとき、いつも経済も隆盛になりはじめたが、経済がわが民族の生活の唯一の内容となって、それによって理念的徳性が窒息したときは、ふたたび国家は崩壊し、やがて経済がそれにまきこまれたものである。

だが、国家を形成したりあるいはまた国家を維持するだけの力とは現実に何であるか、と問うならば、それは二、三のことばに要約しうる。すなわち全体のために個人を犠牲にする能力と意志である、と。この徳が経済となんら関係がないことは、次の簡単な認識から推定できる。人間は決して経済のために一身を犠牲にしない、すなわち人間は商売のために死ぬものでなく、ただ理想のために死ぬものだということである。イギリス人が民衆の心を認識するうえで心理的にすぐれていることは、かれが戦うばあいに与える動機づけを知ること以上によく示してくれるものはない。われわれがパンのために戦っているのに、イギリスは「自由」のために、それも自国民のためでなく、そうだ、小国の国民のために戦ったのだ。われわれはこの鉄面皮を笑ったり、それについて立腹したりしたが、それこそドイツのいわゆる政治が、戦前からいかに無思慮で愚昧であったかを示しているのである。男子が自由な意味や決意から死におもむくことができる力の本質について、ほとんど考えても見なかったのだ。

一九一四年にドイツ民族がまだ理想のために戦っていることを信じていた間は、がんばっていた。だが日々のパンのためにのみ戦わさせるやいなや、この賭をむしろ投げてしまったのだ。

しかしわが聡明な「政治家」は、この考え方の変化に驚いた。人間は、自分が経済的利益のために

戦う瞬間から、できるかぎり死を避けるものである。というのは死はかれがこの戦いの報酬を享受することをいつもとりあげてしまうからだ、ということが、かれらにはわからなかったからである。自分の子を助けようとする気づかいは、弱々しい母をすら英雄ならしめる。そして種とそれを庇護する家庭あるいはまた国家を維持するための闘争のみが、いつでも男子を敵のヤリにたち向かわせるのだ。

次の命題を永遠に通用する真理として定立してもよい。すなわち、

国家はいまだかつて平和な経済によって建設されたことがなく、それが英雄的徳の領域にあるか、狡猾な老獪さの領域にあるかは知らないが、つねにただ種の保存本能によってのみ建設されるのである。すなわち前者がまさしくアーリア人の労働国家、文化国家を作りだし、後者がユダヤ人の寄生者を作った。けれどもある民族やある国家で、経済それ自体がこの衝動を肥大のあまり圧迫しはじめるやいなや、経済自体が圧制と抑圧の誘因になる。

商業政策と植民地政策によって平和的な方法で、世界をドイツ民族に開拓したり、あるいはそのうえ征服したりしうるという戦前の信念は、実際に国家を形成し維持する有用な能力やすべてそこから出てくる洞察、意志力および事を行なう決断力を失った典型的な徴表であった。そしてこれに対する自然法則の受領証が、その結果としての世界戦争であった。

**腐敗の契機**　あまり深く研究しないものにとっては、たしかにドイツ国民のこの態度は——それが事実上一般的な態度だったが——解きえぬなぞとしか思えなかった。しかしドイツこそ、まさに純粋の力の政策の基礎からたちあがってきた国のまことにすばらしい例であった。ドイツの胚細胞たるプロイセンは、輝かしい英雄たちによっておこり、金融操作や商取引によってではない。そしてドイ

ツ帝国自体がまた、力の政策的指導と軍人のような決死の勇気のきわめてりっぱな報いであった。ドイツ民族がこのようにかれの政治的本能を侵されたりすることが、どうしてあり得たのだろうか？というのは、ここでは個々の現象が問題であるのではなく、真に恐ろしいほどの数でたちまち鬼火のようにパッと燃えあがり、民族の体にあちこちとまといつき、あるいは有毒な潰瘍(かいよう)のようにすぐさまあちらこちら国民をむしばんでいく腐敗の契機が問題なのだからである。それは、ちょうど毒の流れが断え間なく、健全な理性と素朴な自己保存衝動をいっそうマヒさせるために、このかつての英雄の肉体の毛細血管にいたるまで、神秘な力によって流れこんだかのように思えた。

わたしは一九一二年から一九一四年までに、ドイツ帝国の同盟政策と経済政策についてのわたしの態度を決定することを通じて、これらすべての問題を、幾度となくわたしの心に浮かべてみたが、このなぞの解答としてはいつも、まったく他の観点からではあるが、かつてヴィーン時代にすでに学び知っていたあの力が残っていたのであった。すなわちマルクシズムの教説と世界観、同様にその組織的効果であった。

わたしは生まれて二度目だが、この破壊の教説に頭をつっこんだ。――そしてこんどはもちろん日々の環境の印象や影響に支配されることなく、政治的生命の一般的過程の考察によって指示されながらつっこんだ。わたしはあらためてこの新しい世界の理論的文献に沈潜し、そしてその影響をできるだけ明らかにしようとしながら、さらに政治的、文化的、そしてまた経済的な生活におけるこれらの活動の実際的な現象やでき事とそれとを比較した。

だが、いまやはじめてわたしは、この世界的ペストを支配せんとする試みにも注意を向けたのである。

**マルクシズムに対するドイツの態度**　わたしはビスマルクの例外立法を、その意図や闘争や結果について研究した。そしてわたしはだんだんとわたし独自の確信に対して、ほんとうにたしかに確固たる基礎を得た。そこで、この時以来、この問題におけるわたしの内心の観念は、もはや決して変更を余儀なくさせられることはなかった。同様にマルクシズムとユダヤ人との関係をいっそう徹底的に吟味するようにした。

以前ヴィーンにいたときには、なかんずくドイツが揺るがしがたい巨像のように思われたものだが、しかしいまでは幾度もわたしに不安な疑惑が起りはじめた。わたしは静かに、知人の小さな集まりの中で、ドイツの外交政策と、当時一般にドイツにとって最も重要な問題であったマルクシズムを信じられぬほど軽率に取扱った――わたしにはそう思えたのだが――ことについて主張したものだ。わたしはマルクシズム特有の意図に応じて、いつかは恐るべき効力を現わすに違いない危険に、人々がどうしてそんなに盲目的によろめくことができるのか、実際には理解できなかった。当時すでにわたしは、今日でも広範囲に行なわれていることだが、わたしの周囲のものに卑怯なみじめな人間がみんな「われわれは何でもない！」という慰めの文句をいうのをいましめていた。これに似たような精神のペストがたしかにかつて巨大な国を滅ぼしたのだ。ドイツだけは、他のすべての人間の共同社会のようには、きちんと同じ法則に服しないに違いないとでもいうのか？

一九一三年と一九一四年に、わたしははじめていろいろの仲間の間で――その一部は今日ナチ運動を忠実に支持しているが――ドイツ国民の将来の問題が、マルクシズムの絶滅の問題であるという確信を述べた。

不幸なドイツ同盟政策の中に、わたしはただこの教説のもつ分解作用によってひきおこされた結果現象を見た。というのはまさしく、最も恐ろしいものは、またこれにとりつかれたものが、そうでなければこのうえなくきびしく拒否されるこの世界観によってもたらされる結果が、いかにその行動と意欲にでているかということを、往々にして自分で予感さえすることなく、この害毒が健全な経済観や国家観のほとんど目に見えないあらゆる基礎を破壊してしまうことなのだ。

ドイツ民族の内面的没落は、しばしば世の中がそうであるように、人々が自己の生存の破壊者を知ることなしに、当時ずっと以前からはじまっていたのだ。しばしば病気を治療しようとしたが、しかし病原体をもつ徴候の形を間違えたのだ。人々はこれを知らず、あるいは認識しようとしなかったがため、マルクシズムにたいする闘争もヤブ医者のムダロぐらいの価値しかなかったのである。

# 第五章　世界大戦

若い腕白小僧として放埒な生活を送っていたころ、栄養の殿堂があきらかに小商人や官吏のためにだけ建てられたような時代に生まれ合わせたことほど、わたしを悲しませたことはなかった。歴史的でき事の大波はすでにおさまってしまったらしく、実際にはただ「諸民族の平和的競争」だけ、すなわち暴力的防衛方法を除外しておとなしく相手をだますことだけが、未来に属しているように思えた。個々の国家は次第に企業と同じになりはじめ、お互いに地盤を奪い合ったり、お得意や注文をつかみあったり、なんとかしてお互いを瞞着しようとし、そしてこれらのすべては声は大きいが、害にならぬ叫びをあげて打って出てきた。しかしこの発展は止まらないばかりか、いつかは（一般のものが推薦するところによれば）全世界を唯一の大きな百貨店に改造しようとしたように思えた。さらにその入口には、すれっからしのやみ商人や最も人のいい行政官の胸像が不朽に、蓄えならべられるのである。商売人はイギリス人、行政官はドイツ人を置くことができる。しかし店主にはもちろんユダヤ人が犠牲にならねばならない。というのは、ユダヤ人は、かれが自分でいうところにしたがえば、決してもうけたことがなく、永久にただ「支払う」だけであり、そのうえたいていのことばを話すからである。

一体、なぜ百年前に生まれていなかったのだろう？　解放戦争[1]のころであったなら、男は「商売」しなくても、実際に何かしら価値があったのではないか？

そこでわたしは、わたしのあまりに遅くはじまったこの世の旅――わたしにはそう思えたのだが――について、しばしば腹立たしく思い、そしてわたしに近づいている「安寧と秩序」の時代を、運命の不当な下劣さと見なしていた。それでなくてさえわたしは若いころからまさしく「平和主義者」ではなく、この方向へどんなに教育しようと試みてもムダだった[2]。

そこで南ア戦争[3]が勃発したのが、わたしには遠くで光る稲妻のように思えた。わたしは毎日、新聞を待ちわび、電報や通信をむさぼり読んだ。そしてせめて遠くからでもこの英雄的闘争の目撃者でおられるだけで幸福だった。

日露戦争は、すでにわたしが大きくなっていたし、また注意深く見たのである。わたしはそこではほとんど多くの国家主義的理由から一方にくみし、当時われわれの意見を決定するさいには、ただちに日本人の側に立ったのである。ロシア人の敗北の中にまた、オーストリアのスラブ主義の敗北を見ていたからだ。

**近づく破局**　それ以後、幾年かが流れ去った。そしてかつて少年時代に病的な重患に思えたものが、いまや嵐の前の静けさと感ぜられた。わたしのヴィーン時代の間にすでに、いつも台風の前ぶれであるどんよりした蒸し暑さが、バルカン一帯をおおい、すぐ無気味な闇の中へふたたび消えさってしまうけれども、明るい光輝がたびたびひらめいたのであった。そのときバルカン戦争[4]が勃発した。そしてこれとともに神経過敏になっていたヨーロッパ全体に最初の一陣の風が吹き去った。いまや来たらんとする時代は、重苦しい夢魔のごとく人間を圧し、熱病めいた熱帯の灼熱(しゃくねつ)のごとく卵を孵化(ふか)せんばかりで、破局が近づきつつある感じは絶えざる不安のために、ついに、神よ、防ぐことができな

いならば、運命に自由な進行を許したまえ、と熱望するようになった。かくしてその時また最初の強力な電光が地上にうちおろされた。嵐がはじまった。天の雷鳴に、世界大戦の砲台のどよめきがまじった。

**偉大なスラブの友の殺害**　フランツ・フェルディナント大公暗殺の報がミュンヘンにとどいた時（わたしはちょうど家にいて、ただ死の経過を不正確に聞いただけである）、まずこの王位継承者がたえずスラブ化工作を行なったことに対する憤激から、ドイツ人学生がドイツ民族をこの内部の敵から解放しようとして、発射したピストルの弾によって恐らく倒れたのではないか、ということがまず心配になった。その結果がどうなるかはすぐに考えることができた。すなわち、いまや全世界に「正当と認められ」そして「論拠を明らかにされ」た新しい追求の波が起るにきまっていた。けれどもその後まもなく、暗殺容疑者の名を聞き、それのみならずセルビア人と確定したことを読んだとき、計り知れぬ運命の懲罰にかるい戦慄をおぼえはじめた。

スラブの最大の友が、狂信的スラブ主義者の兇弾に倒れたのだ。

最近数年間におけるオーストリアのセルビアに対する関係を絶えず観察する機会をもっていたものならば、石が回転していて、もはや止めることができないことを一瞬も疑うことができなかった。

**オーストリアの最後通牒**　人々はヴィーン政府が発した最後通牒（つうちょう）の形式と内容について、今日非難を浴びせかけるが、それは正しくない。世界のいかなる国も、同じ状態や同じ立場にあったならば、これ以外のやり方はできなかったであろう。オーストリアは南部国境に冷酷な仇敵（きゅうてき）があり、最近つね

に王国を挑発し、そしてついにオーストリア帝国の崩壊に好都合な時がくるまで、少しもゆるめようとしなかった。人々が、このばあいが遅くとも老帝の死とともにくるに違いないと恐れていたことは、根拠があった。しかしその時には恐らく王国は一般に真剣に対抗する地位にはもはやなかった。全オーストリア国家は最近数年間、まちがいなくフランツ・ヨーゼフの両眼のにらみによって成り立っていた。そこでこの国の老齢の化身の死は、大衆感情としてはもともと帝国自体の死として通用したのであった。そのうえそれは、特にスラブ政治の最も狡猾な技術にのみよっている、という外見を呼びおこすことに属していたのである。お世辞だ。このお世辞はこの皇帝の実際の功績がそれ以上だったので、ヴィーンの宮廷はたいへんいい気でいた。この称賛の中にかくれてすきをうかがっているトゲを、人々は発見することができなかったのだ。王国があらゆる時代を通じてこの「最も賢明な君主」のすぐれた統治技術——人々はそういうのが普通だったが——の上にのみ立っていればいるほど、ここでもいつか運命が貢物を取るため扉をたたいたとき、事態がますます破滅的になるに違いないということを、人々は見なかった。あるいはもはやそこに見ようとしなかったのかも知れない。

一体、旧オーストリアは老帝なしに、その場合なお考えられたであろうか？

かつてマリア・テレジア(5)が遭遇したような悲劇が、すぐさま繰り返されなかったであろうか？　そうだ、あるいはなお避けられたかも知れない戦争に現に参加したことで、ヴィーン政府が非難されるならば、人々は実際にヴィーン政府に対して誤りをなしたことになる。戦争はもはや避けることはできず、せいぜい一年か二年先へ追いやることができたぐらいのものである。しかし不可避の決算をいつものばそうとしたのに、それがついに最も不利な時にむりやり戦端を開くにいたったのは、ほんと

うにドイツとオーストリア外交の災難であった。人々は平和を維持しようとするいま一度の試みが、戦争をもっとも不利な時に勃発せしめたのに違いない、ということを固く信ずることができた。

そうだ、この戦争を欲しなかったものは、またその結果を負うべき勇気をもたねばならなかった。しかしこれは、オーストリアを犠牲にしてのみ成り立つことができたであろう。それでもなお戦争は起ったただろう。ただ全世界を敵にまわす戦いとはならなかったかも知れないが、そのかわりにハープスブルク王国の分割という形で起ったに違いない。そのさい人々はともに戦うか、あるいは手をこまねいて運命の進むにまかせて傍観しているかを、決しなければならなかった。

しかし、今日、戦争の勃発をだれよりも呪い、だれよりも賢そうに判断しているものこそ、戦争に介入するという最も宿命的な手助けをしたものである。

社会民主党は数十年来、ロシアに対する最も破廉恥な戦争扇動をしてきた。しかし中央党は宗教的観点から、オーストリア国家をドイツ政治の最もたいせつな軸であり、要点であるとしていた。今や人々はこの狂気の結果を背負うべきであった。来たるべきものは来なければならず、そしてもはや回避すべき状態になかった。ドイツ政府の責任は、その場合ただ平和を維持するために開戦に好都合な時機をいつも逸していたこと、世界平和の維持のために同盟にさそい込まれ、そして遂に世界大戦を決意してまでも世界平和の維持への衝動に対抗した世界連合の犠牲になったことにあった。

だがヴィーン政府が当時、他のもっとやわらかい形の最後通牒を発していたとしても、もはや事態はまったく変わらなかったであろう。せいぜい政府自体が民衆の憤激によって捨てられたぐらいであろう。というのは、大衆の目からみれば、最後通牒の調子はまた慎重で、決して行きすぎたものでもあるいは粗暴なものでもなかったからである。今日これを否認しようとするものは、忘れっぽいカス

頭のものか、あるいは十分意識した嘘つきである。一九一四年の戦いは、誓って、大衆に押しつけられたものでなく、全民衆がみずから要望したものである。

人々は一般の不安状態についに結論を出そうとした。この最も困難な闘争に二百万人を越えるドイツの男子や少年が、最後の血の一滴まで守ろうと覚悟して自発的に国旗の下に立ったことが、それだけで理解できる。

＊

**ドイツの自由の闘争**　わたしは当時の時期を、青年時代のいらだたしい気持ちからの救済であったように感じた。わたしは今日でもはばかるところなくいえることであるが、嵐のような感激に圧倒され、くずおれて、神がこの時代に生きることを許す幸福を与え給うたことにあふれんばかり心から感謝した。

地上で、未曽有の猛烈な自由のための闘争が勃発したのだ。というのは、運命がその進行をはじめるやいなや、すぐにまた、今度こそはセルビアやオーストリアの運命が問題であるのではなく、ドイツ国民の生か死かが問題なのだ、という確信が最も多くの大衆の心の中に、ほのかに現われたからである。

民衆が、自己の未来について見通しできるここ数年間の最後の機会になった。そのようにして巨大な闘争が開始されるや、同時に熱狂的な感激に興奮して、必要にして真剣な倍音が生じてきた。なぜならこの認識のみが、国民的反抗をたんにわら火以上のものたらしめたからである。しかし真剣さはいやがうえにも必要であった。というのは当時一般に、いまはじまった戦争がどのぐらい長く続くか

ということについて、全然わかっていなかったからである。人々は冬には、新たな平和な仕事を続けるために、ふたたび家にもどることを夢みていたからである。

人間は、自分が欲するものを希望し信ずるものだ。国民の圧倒的大多数は、長い間の不安な状態にとっくにあきていた。そこで人々はオーストリアとセルビアの間の紛争の平和的調停などは、もはやまったく信ぜず、決定的対決を望んでいたこともまたわかっていた。わたしもまたこの数百万人に属していた。

暗殺の報がミュンヘンに報ぜられるやいなや、ただちに二つの考えが、わたしの頭をひらめきすぎた。第一に、戦争はけっきょく不可避だろうということ、しかし第二にいまやハープスブルク国家は、同盟を維持することを余儀なくされたということであった。というのは、わたしがいつも最も恐れていたことは、ドイツ自体が、恐らくまさしくこの同盟のために、オーストリアがこれに直接の誘因を与えることなくいつか紛争にはいり込み、しかもオーストリア国家は内政的根拠から、みずから同盟国の後だてとなる決断力を起しえないかも知れない、という可能性であった。オーストリア帝国の多数を占めるスラブ民族は、自分できめた意図をただちにサボタージュしはじめるに違いない、そして同盟国に必要な援助を与えるよりは、むしろ全国家をみじんにくだくことを好むに違いない。いまやしかしこの危険は排除された。この老国家は欲すると否とにかかわらず、戦わねばならなかった。

**自由のための戦いの意義**　この紛争に対するわたし自身の立場もまた、非常に簡単で明瞭だった。わたしにとっては、オーストリアがセルビアに何か贖罪させるために戦っているのではなく、ドイツが自己の存続のために、ドイツ国民がその死活のために、自由と未来のために戦っているのだった。

いまやビスマルクの仕事が、争われねばならなかった。かつて祖先がヴァイセンブルクからセダンやパリにいたる戦いで雄々しい血を流して戦いとったものを、いまや若きドイツが新たに得なければならなかった。しかしこの戦争がもし勝利に終わったならば、その場合わが民族はまたもう一度対外的勢力をもって大国民の仲間にはいり、そのときはじめてふたたびドイツ帝国は、愛する平和のために日々のパンを子供に節約する必要もなく、力強い平和の城郭としての実を示しえたであろう。

わたしはかつて少年として、また若人として、少なくとも一度はまた国民的感激が空虚な妄想でないことを、行動によって確認してみたいという望みを、何度ももったものだ。それが心から正しいと思えそうもないのに、バンザイと叫ぶのは、ほとんどつねに罪悪のように思えた。というのは、すべての戯れが終りになり、運命の女神の無情な手が、民族や人間をその志操の真実さや永続性のはかりにかけはじめた場所で一度も試されたことがないようなものが、このことばを用いたからである、かくして幾百万の他の人々と同じように、わたしの心もいまやついにこのたるんだ感情から解放されうるという誇らかな幸福でふくれあがった。わたしは何度も「ドイッチュラント・イューバー・アルレス」を歌い、大声でバンザイを叫んだ。この気持ちの真実さを表明するために、いまや永遠の審判者たる神の法廷へ証人として立つのを許されたことは、わたしには遅ればせながらももたらされた恩恵に近いように思えたのだ。なぜなら、わたしははじめから、戦争が起ったならば——それは不可避に思えた——いずれにせよただちに本を捨てることが確実であったからである。しかしそれとまったく同様に、わたしはまた、わたしの部署は内心の声が示したところでなければならない、ということを知っていた。

わたしはまず第一に、政治的根拠からオーストリアを見すてていた。しかし戦争がはじまったいま、

この考えをまず正しく考慮に入れなければならなかったことは自明であった。わたしは、ハープスブルク国家のために戦いたくなかった。しかしわが民族と、その具体化されたドイツ帝国のためには、いつでも死ぬ覚悟があった。(6)

**バイエルン連隊への入隊**　八月三日、わたしはバイエルン国王ルートヴィッヒ三世陛下に直訴して、バイエルン連隊へ入隊する許しを求めた。内閣官房は、そのころたしかに多忙だった。わたしがすぐ翌日にわたしの請願の答えを受けとったとき、それだけわたしの喜びも大きかった。わたしがふるえる手で書状を開き、バイエルン連隊へ志願するようにという勧告を記したわたしの請願の認可書を読んだとき、歓喜と感謝はとどまるところを知らなかった。かくて数日後わたしは、軍服を着た。そしてほぼ六年後にはじめて、軍服を脱いだのだった。(7)

このように、すべてのドイツ人にとってそうであったごとく、わたしにとってもまた、わたしのこの世の生活で最も忘れがたい、最も偉大な時期がいまやはじまった。この極度に猛烈な苦闘のでき事に対しては、すべて過去のものは浅薄な無の中に消えうせた。この猛烈な事件から十年たった今日、わたしは誇らしい悲哀とともに、運命が恵み深くわたしに参加することを許したわが民族の英雄的な闘争の初期の数週間を回想するのである。

つい昨日のように次から次へと当時の光景が浮かんでくる。わたしが愛する戦友の間に伍して軍装をし、はじめて行進し、はじめて訓練し、ついに出征の日が来たことなどまでが浮かんでくる。

このころに、わたしだけでなく他の多くのものもそうだったが、前戦に出遅れないだろうかどうか、という心配がただ一つわたしを悩ませた。このことだけでわたしはしばしば落着きを失った。新たに

というのは新しい勝利のたびごとにわれわれの出遅れの危険が増すように思えたからである。英雄的行為を聞いて、勝利の歓呼があがるごとに、かすかな一滴のにがみがその中にかくされていた。

**初陣**　かくて、ついにわれわれの義務を履行するために、ミュンヘンを去る日が来た。われわれがドイツの川の王者たるラインを仇敵(きゅうてき)の貪欲から守るために、静かな流れにそって西の方へ下ったとき、はじめてわたしはライン川を見た。朝もやのやわらかいヴェールを通して、朝日のおだやかな光が、われわれの頭上でニーダーヴァルト記念碑を照らし出したとき、はてしなく続く輸送列車からは、朝空高く古い「ラインの守り」が響きわたり、胸がしめつけられる思いであった。

それから、湿った冷たいフランドル地方の夜がくる。われわれは夜中黙々と行進する。そしてもやを破って一日がはじまったとき、突然、鋼鉄の挨拶がわれわれの頭上を越えてシューと流れ、鋭い銃声をたてて、小銃弾を挑発的に、われわれの隊列の湿地に打ち込んだ。だがこの小さい硝煙がまだ消え去らぬうちに、死の最初の招待に対して二百ののどから最初の突撃の声が響いた。だが銃声は、さらにパチパチと響き、こだまし、うなり、ほえはじめた。そしてみんな熱っぽい目でいまや前進した。ますます早く。突然かぶら畑と生垣を越えたところで戦争がはじまった。白兵戦だ。すると遠くの方から歌声がわれわれの耳に押し寄せてきた。だんだん近く、中隊から中隊へと流れてきて、まさに死がわれわれの隊列にとりついたとき歌もわれわれのところに達した。われわれはふたたび続けた。「ドイッチュラント、ドイッチュラント、イューバー、アルレス、イューバー、アルレス、イン、デア、ヴェルト。」

四日後にわれわれは復帰した。いまや歩き方すら変わってしまった。十七歳の少年もいまではおと

なのように見えた。

リスト連隊の志願兵たちは、正しい戦闘法を教わっていなかったであろう。だがかれらは死ぬことは古兵と同様に知っていたのだ。

これがはじめてだった。

**志願兵より古兵へ**　そのようにして一年一年と過ぎた。だが戦闘のロマンティシズムにかわって戦慄（せんりつ）がやってきた。感激は次第に冷たくなり、熱狂的な歓呼も、死の不安によって窒息させられた。各自が自己保存衝動と義務の催促との間で格闘する時期がきた。わたしもこの戦いをまぬがれることができなかった。死が狂奔したとき、何か漠然としたものがいつも反逆を試み、弱い肉体にこれを理性と考えさせようとする。しかし、これはそのような仮装のもとに個々人をまどわそうと試みる臆病にすぎなかった。そうなると移動には重苦しさがつきまとい、警戒がはじまり、ただ良心の最後の一片がかろうじて決断を与えることが、しばしばであった。しかし注意を促すこの声が高まれば高まるほど、ますます大声で、そしてますます徹底的に誘惑すればするほど、反抗心がいよいよ鋭くなり、ついに長い内心の争いののちに、義務意識が勝利を得るのである。すでに一九一五年から一六年にかけての冬に、わたしのばあいはこの闘争が決着した。ついに意志が完全に勝ったのだ。わたしは最初のころには歓呼の声をあげ、笑いながら突撃することができたが、いまでは落着いてもいたし、決意もかたまっていた。しかしこれは最も永続的なものであった。いまやはじめて運命が、神経をひきむしったり、知性を拒否したりすることなく、最後の試練に着手することができた。

若き戦争志願兵から、古兵になったのだ。(8)

しかしこの転換は軍隊全体に実現した。軍隊ははてしない戦闘から老練で頑強になってきた。嵐に耐ええなかったものは、やはり嵐によって粉砕された。

**不滅の警告**　だがそこではじめて人々はこの軍隊に価値判断を下さねばならなかった。さて、二、三年の後に一つの戦闘から他の戦闘へとかりたてられ、いつも人数と武器においてすぐれた勢力と戦い、飢えをしのび、欠乏に耐えてきた間に、いまやこの唯一無二の軍隊の優秀さを評価する時が来たのだ。

たとえ数十年すぎようとも、英雄的精神について述べ語るものは、世界大戦のドイツ軍を決して考えないではおられないであろう。さらに過去のヴェールの中から、灰色の鉄カブトからなる鉄のような前線がはっきりと現われ、めげず臆せず、不滅の警告となる。そしてドイツ人が生存するかぎり、かれらにこれがかつて自己の民族の息子であったことを考えるであろう。

当時わたしは兵士だった。政治を語ろうとは思わなかった。なおまた実際にその時ではなかった。今日でもわたしは、最下級の荷馬車引きでも祖国に不断にりっぱな奉仕をしたことは、第一級のいわゆる「代議士」より以上だったと確信している。わたしはこれらの饒舌家（じょうぜつか）を、この時ほど憎んだことはない。というのは、何かいうべきことをもっている真の人間は、面と向かって敵に叫ぶか、さもなくば目的にかなうように弁舌の才は家に置いて、黙々としてどこかで義務を果たしていたからである。しかり、わたしは当時これらすべての「政治家」を憎んだ。そして、それがわたしにできるなら、ただちに代議士の塹壕（ざんごう）歩兵大隊をつくってやったであろう。そうすればかれらは、まじめな、正直な人たちをおこらせたり、害したりせずに、心ゆくばかり要求にまかせてしゃべることができるだろうか

らである。

**感激の人為的抑圧**　このようにわたしは当時、政治についても何も知ろうとはしなかった。しかし実際に国民全体に関する、特にわれわれ兵士に関係のある一定の現象に対しては、態度を決定しないわけにはいかなかった。

当時わたしが内心で憤激し、有害だと思っていたものが二つあった。

すでに最初の勝利の知らせがあったあとで、ある新聞が徐々にそしておそらくは多くのものに最初わからないようにして、一般の感激に二、三滴のベルモットの苦汁をさしはじめた。これは一種の好意や善意や、しかもそれどころか一種の心づかいという仮面のもとに行なわれた。勝利の行きすぎた祝賀に対する疑念であった。こんな形式の祝賀は大国民の祝賀に値せず、同時にまたふさわしくないと人々はおそれたのだ。ドイツ兵の勇敢さと雄々しい勇気は、まったく自明のことだ。だから人々がそれについてあまりにも歓喜の爆発によって分別なく感動させられすぎるのはよくない、外国のためにも静かな品のある喜びの形式のほうが、法外な歓呼等よりもお気に召すだろう。最後にわれわれドイツ人はいまでも、戦争はわれわれの意図ではなかったのだから、われわれはいつでも人類の融和のためにわれわれの部分で貢献することを公然と男らしく自白することは恥ではない、ということを忘れてはならない。だから大声で叫んで軍隊の行為の純粋さをすすけさせることはりこうではないであろう。というのは他の世界はこうした振舞いにほとんど理解をもたないだろうからである。真の英雄が自己の行為を黙って、そして落着いて——忘れてしまう謙虚さほど、人を感嘆させるものはない。というのはすべてが帰するところはここだからである。

人々はそういうやつを、かれの長い耳をもって、長い柱まで引っぱって行き、なわでひっぱりあげ、そして三文文士に、かれの美的感覚が勝利を祝っている国民をそれ以上侮辱できないようにするかわりに、事実上人々は勝利の歓呼の「ふさわしくない」やり方に対して警戒を示しはじめたのだ。

人々は感激というものが一度くだけたら、もはや必要に応じてめざめさせることができないということに、少しも気づかなかった。感激は陶酔であり、そしてその状態でずっと維持すべきだ。しかし人々はこの感激の力なくしては、人間として考えられるかぎりの最も巨大な要求を、国民の精神的本性におくこの戦争に、どうして地歩を維持すべきだろうか？

わたしは大衆の心を十分に知っていたので、人々は「美的」な高揚では鉄を熱しておくために必要な火をかきおこすことができない、ということもよく知っていた。わたしの目から見れば、人々がこの熱情の沸騰熱を高めるために何もしなかったことは、正気の沙汰ではなかった。しかし、幸いにも存在していた熱情までも断ち切ろうとしたことは、わたしには絶対に理解することができなかった。

**マルクシズムの誤解**　さらに第二にわたしを憤慨させたものは、人々がマルクシズムに対して正しいと思ってやったやり方であり、方法であった。わたしから見れば、それは人々がこのペストについてまったくなんらの予感ももっていないことを証明したようなものだった。政党はもはや認めないと確信することによって、マルクシズムが分別して遠慮するだろう、と人々は真剣に信じていたらしい。

ここでは一般に政党が問題なのではなく、全人類を破滅に導くに違いない教説が問題なのであり、人々はこれをユダヤ化した大学では聞くことができず、そのうえおおぜいのものの、特にわが高級官

吏の習い性となったバカげたうぬぼれから、本を手にとって大学の教授題目に属さないものを学ぶことは、努力に値しないと思っていたので、人々には理解されなかった。これ以上もない激しい変革も、たいていまた国家制度が私的制度から遅れをとったため、このような「頭の人々」にはまったくあとかたなく通りすぎたのだ。農民は知らないものは食べない、という民衆のことわざは、神かけて、かれらに最もよくあてはまるのだ。少数の例外がまたここでむしろ原則を立証するのである。

一九一四年八月当時、ドイツの労働者をマルクシズムと同一視したことは、ナンセンスきわまりないことであった。ドイツ労働者は、当時実際この有害な伝染病の抱擁から解放されていた。さもなければとにかく労働者は決して戦争に出ることすらできなかったであろう。しかし人々がいまではマルクシズムが「国家的」になったのであろうと考えたことは、まったく愚かだった。そうとうな才智のひらめきである。ただそれは、この長年にわたって公職にある為政者のうちのだれもが、この教説の本質を研究することをそもそも努力する価値あるものと見なかったことを示している。というのはそうでなければ、そのような誤りをするはずはほとんどないからだ。

あらゆる非ユダヤ国民の国家絶滅をつねに究極の目標としているマルクシズムは、一九一四年の七月に、かれらによってワナにかけられていたドイツ労働者階級が目覚め、そして刻一刻と急速に祖国への奉仕に歩きはじめたことを見て、驚かねばならなかった。わずか数日でこの恥ずべき民族欺瞞の霧とペテンが消えさり、そしてユダヤ人の指導者群は、あたかも六十年も大衆に注ぎ込んだたわごとや迷信のあとが、もはやなくなったかのごとく、とつぜん一人でさびしくとり残されたのだ。これはドイツ民族の労働者階級を欺瞞しようとする者たちにとっては、悪い瞬間だった。しかし指導者は、かれらに迫る危険をはじめて認識するやいなや、大いそぎで、嘘のかくれずきんを耳までかぶり、あ

つかましくも国家的高揚をいっしょに演じたのだ。

**しなければならなかったこと**　いまやしかし、このユダヤ人の民族毒殺者の詐欺的仲間全部に、峻厳(しゅんげん)な処置をとるべき時点に来ていた。そこで、叫喚や号泣がはじまろうとまったく考慮せずに、さっさと手っとり早く片づけねばならなかった。一九一四年八月には、国際的連帯というユダヤ語は、いっぺんにドイツ労働者階級の頭から消えさった。そしてそのかわりに数週間後には、アメリカの榴霰弾(りゅうさんだん)が行軍縦隊の鉄カブトの上に、親しく祝福を注ぎはじめた。ドイツ労働者がふたたび民族のための道を見いだしたとき、この民族の扇動者を無慈悲に絶滅することは、今や責任感ある政府の義務であったろう。

前線で最も善良なものが倒れているとき、国内では少なくとも害虫を抹殺することぐらいはできた。しかしその代りに皇帝陛下は、みずから昔からの犯罪者に手をさしのべ、それとともに陰険な国民暗殺者に保護を与え、内心落ちついておられるようにしたのだ。

こうしていまでは、蛇のように陰険なものたちは、前よりも注意深く、だがいっそう危険の多い活動を続けることができた。

正直者が国土の平和を夢みている間に、偽誓した犯罪者たちは、革命を組織したのだ。

当時人々がこの言語道断なあいまいな決心をしたことを、わたしは内心でますます不満に思った。しかしその結末があのように恐ろしくなろうとは、当時わたしもまだ考えることができなかった。

**あらわな暴力の行使**　しかし、人々はその時、何をしなければならなかったのか？　運動の指導

者をすべてただちに獄にいれ、裁判にかけ、国民の厄介払いをしてやることであった。人々はこのペスト菌を絶滅させるためには、容赦なく軍隊の全武力を配備しなければならなかった。党は解散すべきだった。議会は必要なときには銃剣で本心にたち返らせ、しかしいちばんいいのはただちに廃止させることであった。今日、共和国が党を解散させることができるように、人々は当時もっとたくさんの根拠から、この手段に訴えねばならなかった。とにかく全民族の死活がかけられていたのだ！

だがもちろんまた次のことが問題になった。すなわち、一体精神的理念を武力で根絶することができるだろうか？　粗暴な暴力を使って「世界観」を克服しうるだろうか？　ということである。

わたしは、その当時何度もこの問題を自問した。

類似のばあいを、特に宗教的基礎で歴史の中に見いだせるばあいを熟慮したさいに、次のような原則的認識が明らかとなった。すなわち、

観念および理念、同様に一定の精神的基礎をもつ運動は、これが誤っていると真なるとにかかわらず、ある程度発達してからは、技術的な権力手段でもってしても、この有形の武器が同時に新しい扇動的思想や理念あるいは世界観の裏づけがないときは、粉砕することができないということである。

暴力だけを用いて、その前提としての精神的基礎観念という推進力がないばあいには、理念の担い手の最後の一人まで徹底的に根絶し、最後の伝統まで破壊する形をとらぬかぎり、理念と、理念を流布することを決して絶滅させることはできない。けれどもこれは、たいていこういう国家という団体がしばしば際限なく、また時には永久に、権力政治的に重要な圏内から除かれることを意味する。というのは、こうした流血の犠牲は、経験によると民族の最良の分子に的中するからである。すなわち、精神的前提なしに行なわれるすべての迫害は、道徳上正当なものとは考えられず、民族のほんとうに

価値ある分子をむちうって反抗させ、不当に迫害された運動の精神的内容を獲得することに全力をつくすからである。これは多くの場合たんに粗野な暴力による理念弾圧の試みに対する反感から、生起するのである。

だから迫害が増せば増すほど、内心で信奉する者の数が増加する。したがって新しい教説の徹底的な殲滅は、その絶滅をさらに大きくしつねに高める方法でのみ実施され、その結果ついに当該民族や国家からも、真に価値ある血をすべて奪い去ることになる。しかしこれは報いがくる。いわゆる「国内」の純化は、一般的な無力化という代償の上でのみ行なわれうるからである。だがこういう過程ももともと、支配すべき教説がある一定の小範囲をすでにふみ越えてしまったときには、もはやいつもムダである。

それゆえここでもまたすべての生物と同じように、幼年時代の初期が、いちばん早く絶滅される可能性にさらされている。ところが年が進むとともに抵抗力が増し、老衰が近づくとはじめて、他の形と他の理由からではあるが、ふたたび新しい青春に譲歩するのである。

しかし実際上、精神的基礎のない暴力によって、教説やその組織的成果を根絶しようとする試みは、ほとんどすべて失敗に帰するのである。実際次のような理由から、望んだものと正反対に終わることもまれではない。すなわち、

露骨な暴力という武器をもってする闘争方法の第一の前提は、堅忍さということにある。それは、ある教説などを抑圧するためには、その方法をたえず一様に適用した場合にだけ、その意図を達成する可能性があるということだ。しかしここでまた暴力が動揺して寛大な態度に変わるやいなや、抑圧せらるべき教説はたちまちふたたび息を吹きかえすだけでなく、圧迫の波がないだあとには、耐え忍

んだ苦難をこえた憤激が、古い教説に新しい支持者を導き入れ、前からの信奉者は前より大きな反抗心と、より深い憎悪をもってこれを支持し、そのうえすでに分散してしまった変節者も危険が除かれるとふたたび古い立場に復帰しようとして、この教説は迫害されるごとに新しい価値を得ることができる状態になってくる。けれどもこの堅忍さは、いつもただ一定の精神的確信の結果である。確固たる精神的基礎から生じたのでないあらゆる権力は、動揺せる不安定なものになる。ただ熱狂的な世界観だけにありうるような安定性を欠いているのだ。暴力は個々のその時々のエネルギーや狂暴な決断から出てくるものであり、だがそれゆえ人格や本質的性格や強さの変化に従属するのである。

しかし、さらになお次のような理由が加わる。すなわち、

**世界観の攻勢**　すべての世界観は、宗教的要素が多かろうと、政治的な要素が多かろうと——往々にしてここでは限界を定めがたいが——反対者の理念の世界を消極的に絶滅するために戦うよりも、むしろ自己の理念を積極的に実現するために戦うのである。しかし、それゆえこの闘争は防御よりも攻撃である。そのさい、この目標は自己の理念の勝利であるから、目標の設定においてすでに有利な地位にある。これに反して敵の教説を絶滅するという消極的な目標は、いつ達せられるか、確保されたとみなされてよいか、ということを定めがたい。それゆえ世界観の攻撃は、世界観の防衛よりも組織的であり、強力でもある。一般にそうであるように、ここでもまた判定は攻撃に属し、防御には属しない。しかし精神的勢力に対して暴力を用いてする闘争は、剣それ自体が、新しい精神的教説の担い手、宣布者、弘布者として現われないかぎり、ただ防御にすぎないのである。

かくして人々は次のように総括的に断定することができる。すなわち、その闘争がある新しい精神的立場のための攻撃という形をとらないかぎり、ある世界観を、権力を用いて打倒しようとするあらゆる試みは、最後には失敗する。相対立する二種の世界観の戦いにおいてこそ、残酷な力の武器を不屈に、容赦なく用いて、その支持した側に判定をもたらしうるのである。

しかしこの点で、いままでマルクシズム打倒はいつも失敗した。

ビスマルクの対社会主義者立法が、あるゆる努力にもかかわらず、ついに失敗したのも失敗せざるをえなかったのも、理由はこれである。新しい世界観高揚のために戦うことができるその世界観の足場がなかったのだ。というのは、いわゆる「国家の権威」あるいは「安寧と秩序」というたわごとが、生死をかけた闘争の精神的動因としてふさわしい基礎でありうるということは、本省高級官吏のことわざのような知恵だけが考えることができるからである。

**ブルジョア階級政党**　しかしこの闘争の真の精神的担い手を欠いていたがために、マルクシズムはかれの対社会主義者立法の遂行を、それ自体すでにマルクシズムの考え方から出た制度の考量と意向にゆだねなければならなかった。鉄血宰相はかれのマルクス主義者に対する闘争の運命をブルジョア民主主義の好意にゆだねることによって、ねこにかつおぶしの番をさせたのである。

しかしこれらのすべては、ただ徹底的な、マルクシズムに対抗する猛烈な征服欲をもった新しい世界観が欠けていた必然的な結果であった。

それだからビスマルクの闘争の結果は、はなはだしい失望をもたらしたにすぎなかった。

しかし、世界大戦争、あるいはその初期の状態は、多少とも違っていたであろうか？　遺憾ながら、

否だ。

**社会民主主義の代用物はない**　わたしは当時、現下のマルクシズムの具体化としての社会民主主義に対する国家政府の態度を必ず変えねばならないという考えに没頭すればするほど、ますますこの教説に対する有用な代用物が欠けていることを認識した。もし社会民主主義が破られたと仮定したならば、それでは大衆に何を与えようとするのか？　多かれ少なかれ、いまや指導者をなくした労働者の大群を、自己の道にひきつけうると期待することができる運動は存在しなかった。階級政党から離れた熱狂的な国際主義者たちが、今度はただちにブルジョア政党、つまりある新しい階級組織に入るだろうと考えることは、たわけたことであり、愚劣どころではなかった。というのはこれらの種々の組織には、不愉快であるかも知れないが、ブルジョア政治家は政治的に自己に不利な影響がはじまらないかぎりかれらには、たいがいの階級的差別がまったく自明のことと思われている、ということが否定できないからである。

この事実を否定することは、ただ嘘つきの鉄面皮か、愚鈍さを証明するだけである。

人々は一般に、大衆を実際以上に愚鈍だと考えないよう注意しなければならない。政治的なことがらにおいては、知性よりも感情の方がより正しい判定をすることがめずらしくない。しかし大衆のこの感情の誤謬については、その愚劣な国際主義的態度が十分に物語っているという意見は、平和主義的民主主義がそれに劣らず狂気じみているし、そしてその担い手がほとんどもっぱらブルジョア陣営から出ている、ということを簡単に指示することによって、すぐさま徹底的に反駁(はんばく)することができる。幾百万のブルジョアジーが毎朝、信心深くユダヤの民主主義新聞をなお崇拝しているかぎり、扮装は

同じ組み合わせであっても、けっきょくは同じ汚物をのみこんでいる「同胞」の愚劣さをからかうのは紳士淑女にとってふさわしくないのである。いずれにせよ、その製造業者はユダヤ人である。

人々はいま現存するものを否認するばあいに、よく注意しなければならない。階級問題については、特に選挙前にはいつも喜んで真実と思いこませるような、理念の問題だけが問題なのではないという事実は、否定することができない。わが民族の大部分の階級的うぬぼれは、なかんずく手工労働者に対する軽蔑と同様に、夢遊病者の幻想に由来する現象ではない。それはまったく別として、しかしいまやペスト——マルクシズムが本来ペストなのだが——のまんえんを防ぐことができない状態では、失われたものをふたたび獲得することが到底できない状態だということをインテリ層がまったく理解できないならば、われわれのいわゆるインテリゲンツィアの思考力の貧しさを示すものである。かれらみずからいうような「ブルジョア」政党は、決して「プロレタリア」大衆を自己の陣営にしばりつけておくことはできない。なぜならここでは二つの世界が対立しており、一部分は自然に、一部分は人為的に分離されているからであり、その相互の対立状態はただ闘争あるのみであるからだ。しかしここでは若いものが勝つだろう——そしてこれがマルクシズムであろう。

事実上、一九一四年の社会民主主義に対する闘争は、ほぼ想像しえた。だが、実際的な代用品がみんな欠けているのに、この状態をいつまで長く維持しえたかは疑問であった。ここに大きな間隙があった。

**政治活動への最初の考え**　わたしはすでに戦前からずっとこの意見をもち、したがって既存の政党の一つに近づく決心もできなかった。世界大戦のでき事が進行している間にわたしのこの考えは、

まさしく「議会主義的」政党より以上の運動が欠けているため、社会民主主義に対して仮借ない闘争をすることが明らかに不可能であることから、いっそう強くなった。

わたしは親密な友達に、これについて公然と意見を述べていた。

そのうえいつかは政治的に活動しようという考えがはじめてわたしに起った。

まさしくこれが、わたしが戦後にわたしの職業とならんで演説者として活動しようと思っている、とわたしの少数の友人にその時しばしば確言していた原因であった。

それとともに、これはまた非常に真剣な問題だった、とわたしは信じている。

# 第六章　戦時宣伝

あらゆる政治的でき事を注意深く追求したさいに、わたしは以前からずっと宣伝活動にたいへん興味をもっていた。わたしは宣伝活動に、まさしく社会主義的＝マルクス主義的組織が老練な技倆（ぎりょう）で支配し、使用することを知っていた道具を、見たのである。そのさいわたしは、宣伝の正しい利用が、ブルジョア政党にはほとんど理解しえなかった、また理解しえない現実的な技術である、ということを早くから理解し学んでいた。ただキリスト教社会主義運動だけは、特にルエーガーの時代に、この道具をある程度じょうずに使い、また非常に多くの成果をおさめていた。

しかし、宣伝を正しく利用するとどれほど巨大な効果を収めうるかということを、人々は戦争の間にはじめて理解した。けれども遺憾ながら、ここでふたたびすべてを相手側に学ばねばならなかった。というのはわれわれの側の活動は、この点ではひかえ目どころではなかったからである。ただし、ドイツ側の教化すべてにわたる完全な失敗、特にすべての兵士に非常に目に余るものであった失敗が、わたしのばあいいまやなおいっそう徹底的に、宣伝問題に没頭する動機となった。

そのさい思索の時間は、往々にして十分すぎるほどあった。しかし残念ながら実際上の教授は、敵がじょうずすぎるほどにやってくれた。

というのは、われわれのこの点でぬかっていたものを相手は未曽有の巧妙さと真に天才的な計算で出迎えたからである。この敵の戦時宣伝から、わたしもまた限りなく多くのものを学んだ。もちろん

いちばん早くこれを学ばなければならなかった人々は、何もせずに時を過ごしてしまった。人々は、そこで一方では、他人から教訓を与えられるほどバカではないとうぬぼれていたし、他方では、学ぼうとするまじめな意志を欠いていたのである。

一体、われわれには宣伝があったのだろうか？

遺憾ながら、ただ否と答えるほかはない。この方面で現実に企画されたすべてのことは、はじめから不十分で、間違いだらけだった。それは少しも役に立たないか、しばしば害をおよぼすぐらいであった。

形式は不十分であり、本質的には心理的に誤っている。ドイツの戦時宣伝を注意深く検討した結果は、こういわざるをえなかった。

第一の問題、すなわち宣伝は手段であるか、目的であるか、ということについて、人々はまったくわかっていなかったらしい。

**宣伝は手段**　宣伝は手段であり、したがって目的の観点から判断されねばならない。それゆえ宣伝の形式は、それが奉仕する目的を援助することに有効に適合していなければならない。目標の意義は、一般的必要の観点から見ればいろいろでありうるし、それとともにまた宣伝はその内面的価値において種々規定されることも明白である。戦争をしているあいだそれに向かって戦ってきた目標は、人間として考えられる最も崇高かつ最も強力なものだった。それはわが民族の自由と独立、将来のための食糧の確保、そして——国民の名誉であった。それは、今日あらゆる反対意見があるにもかかわらず、存在しており、もっとよくいえば存在していなければならないものである。というのは名誉な

き民族は、自由と独立を早晩失うのが常であり、名誉なきルンペン・ジェネレーションは、自由に値しないがゆえに、これはただより高い正義にかなったことなのだからである。だが卑劣な奴隷たらんとするものは、名誉をもってはならないし、もつこともできない。そうでなければ、むしろ名誉はすぐさま一般的軽蔑に帰するからである。

**宣伝の目的**　ドイツ民族は、人間的存在のための闘争を戦った。そしてこの闘争を援助することが、戦時宣伝の目的であったはずである。これを勝利にまで助けることが、目的であらねばならなかった。

しかし民族がこの遊星の上で自己の生存のために戦うならば、したがって生か死かの運命の問題が国民に近づくならば、ヒューマニティとか、美とかの考量はすべて無に帰してしまう。というのは、これらの観念はすべて宇宙のエーテルの中に浮かんでいるのではなく、人間の幻想から生じたものであり、人間と結びついているからである。人間が、この世から分離すれば、概念もまた無に消えさってしまう。というのは自然はそれを知らないからである。しかしまたそれは、人間の中でも民族の、よりよくいえば人種の中の少数のものだけに——それ自身の感情にもとづく程度によるが——固有である。この概念の創造者であり、担い手である人種がなくなるやいなや、ヒューマニティや美は、人間が住んでいる世界からさえも消えうせるだろう。

しかしそれとともにこれらすべての概念は、ある民族がこの世での存在をかけて闘争する場合は、ただ副次的な意味をもつにすぎない。実際それによって闘争中の民族の自己保存力がなえるおそれがあるとなると、実際戦いの形式を決定するものとしては完全に除外されるのである。しかしこれがつ

ねに目に見える唯一の結果である。

ヒューマニティの問題に関しては、モルトケがすでに次のようなことをいっている。戦争のさいにはつねに行動の簡潔さの中にヒューマニティがある。それゆえ最も激烈な戦闘法がたいていそれに適するのだ、と。

しかし、人々がその場合に美学などのたわごとをいいながら進歩しようとするならば、実際にはただ一つの答えだけがありうるのだ。民族の生存闘争の意義に関する運命問題は、美に対するすべての義務を止揚するのだ、と。人間の生活の中で与えることができる最も美しくないものは、奴隷のくびきであり、それをつけていることである。あるいはシュヴァーベンのデカダン主義者たちは、ドイツ国民の今日の運命を「美的」だと感ずるのだろうか？　しかし人々は、こういう文化的香水の現代的発明者としてのユダヤ人と、これについて実際に話し合う必要はない。ユダヤ人という存在はすべて、神の似姿(1)の美学に対する化肉的反抗である。

しかし、ひとたび闘争のために、ヒューマニティとか美とかの観点が分離されるならば、これはまた宣伝の規準として適用されえないのである。

宣伝は戦争においては、目的のための手段であった。しかしこの目的はドイツ国民の生存のための闘争だった。かくして宣伝もまたこれにあてはまる原則からのみ考察されえたのである。残酷きわまる武器も、それがより迅速な勝利を条件づけるならば、人道的であった。そして国民に自由の尊厳を確保するのを助ける方法のみが美であった。

これが、生死をかけたそのような闘争における戦時宣伝の問題についての唯一可能な態度であった。いわゆる権威ある地位にいる人々が、これについてはっきりしていたならば、この武器の形式と利

用について決してあのようにおぼつかなくはなかったであろう。というのは宣伝はそれが識者の手にあれば真に恐るべき武器なのだが、またたんに武器にすぎないからである。

**宣伝はただ大衆に対してのみ**　まさに決定的な意義をもつ第二の問題は、次のようであった。すなわち宣伝はだれに向けるべきか？　学識あるインテリゲンツィアに対してか、あるいは教養の低い大衆に対してか？

宣伝は永久にただ大衆にのみ向けるべきである！

インテリゲンツィアや、今日遺憾ながら往々にしてインテリと称するものに対しては、宣伝は不用で、学術的教化というものがある。それはポスターがその表現自体およそ芸術でないのと同じである。しかし、宣伝はその内容上学問ではない。ポスターの技術は、形や色によって大衆の注意をひきつける企画者の技倆にある。芸術展覧会のポスターはただその展覧会の芸術に注意をうながすべきである。これが達成されればされるほど、ポスターそれ自体の技術はさらに偉大である。ポスターは大衆に展覧会の意義についての観念を媒介すべきである。しかし決してここに出品されている芸術の代用品であってはならない。だから芸術そのものに没頭しようとするものは、ポスターを研究する以上に研究しなければならない。実際それにはただ展覧会を「ぶらつく」だけでは決して十分ではない。かれには、個々の作品の徹底的な観察に沈潜し、そしてだんだんと公正な判断を形成することが、期待されてよい。

今日われわれが宣伝ということばで呼んでいるものも、また事情は似ている。

**宣伝の課題**　宣伝の課題は、個々人の学問的な形式ではなく、ある一定の事実、ある過程、必然性等に大衆の注意を促すことにある。そのために宣伝の意義は、まず大衆の視野にまでずらされねばならない。

それだからその技術は、すぐれた方法で、ある事実の現実性、ある過程の必要性、必要なものの正当性等について、一般的確信ができるようにするところにのみもっぱら存する。しかし宣伝はそれ自体必要なものではなく、またそうではありえず、その課題はまさしく、ポスターのばあいと同様に、大衆の注意を喚起することでなければならず、もともと学問的経験のあるものや、教養を求め洞察をうるために努力しているものの教化にあるのではないから、その作用はいつもより多く感情に向かい、いわゆる知性に対してはおおいに制限しなければならない。

宣伝はすべて大衆的であるべきであり、その知的水準は、宣伝が目ざすべきものの中で最低級のものがわかる程度に調整すべきである。それゆえ獲得すべき大衆の人数が多くなればなるほど、純粋の知的高度はますます低くしなければならない。しかし戦争貫徹のための宣伝のときのように、全民衆を効果圏に引き入れることが問題になるときには、知的に高い前提を避けるという注意は、いくらしても十分すぎるということはない。

宣伝の学術的な余計なものが少なければ少ないほど、そしてそれがもっぱら大衆の感情をいっそう考慮すればするほど、効果はますます的確になる。しかもこれが、その宣伝が正しいか誤りであるかの最良の証左であり、二、三の学者や美学青年を満足させたかどうかではない。

**宣伝の心理**　宣伝の技術はまさしく、それが大衆の感情的観念界をつかんで、心理的に正しい形

式で大衆の注意をひき、さらにその心の中にはいり込むことにある。これを、われわれの知ったかぶりが理解できないというのは、ただかれらの遅鈍さとうぬぼれの証拠である。

ところで人々が宣伝技術の大衆に向かう態度が必要なことを理解するならば、そこからさらに次の教訓が生ずる。すなわち、

宣伝におよそ学術的教授の多様性を与えようとすることは、誤りである。

大衆の受容能力は非常に限られており、理解力は小さいが、そのかわりに忘却力は大きい。この事実からすべて効果的な宣伝は、重点をうんと制限して、そしてこれをスローガンのように利用し、そのことばによって、目的としたものが最後の一人にまで思いうかべることができるように継続的に行なわれなければならない。人々がこの原則を犠牲にして、あれもこれもとりいれようとするとすぐさま効果は散漫になる。というのは、大衆は提供された素材を消化することも、記憶しておくこともできないからである。それとともに、結果はふたたび弱められ、ついにはなくなってしまうからである。

表現の線が太くなればなるほど、その戦術のきめ方は心理的にますます正しくなければならない。

たとえば、オーストリアやドイツの漫画宣伝がまず第一に配慮したように、相手を嘲笑したような例は、根本的に誤りであった。実際に遭遇してみると、たちまち相手の人々に関してまったく異なった信念をもたねばならなかったから、根底から誤っており、さらに最も恐ろしい報いがくるからだった。というのは、ドイツ兵が敵の抵抗という直接の印象にぶつかって、いままで自分たちを啓蒙してくれたものにだまされたと感じ、そして自己の闘争欲やあるいはまた確固たる心がまえを強化するのと反対のものが、はいってきたからだ。気おくれがしたのだ。

これに反して、イギリス人やアメリカ人の戦時宣伝は心理的に正しかった。かれらは自国の民族に

ドイツ人を野蛮人、匈奴だと思わせることによって、個々の兵士に前もって宣伝が、戦争の恐怖に対する準備をし、幻滅をおこさせないように努力していた。いま自分に向けられたどんな恐ろしい武器も、かれらにはただ、かれらにいままで与えられた啓蒙が正しかったことを確認した以上には感じられず、他方、極悪な敵に対する怒りと憎悪の念を高めると同様に、政府の主張が正しかったという信念を強めたのである。というのは、かれらは、自分たちの武器がおそらく——しかもほんとうに——もっとほんとうに恐ろしく効力があるということを考えるいとまもなく、かれら自身が、敵の側から体験させられた武器の残酷な効力が、すでに先刻承知の野蛮な敵の「匈奴的」残虐の証拠だと漸次考えるにいたるからである。

だからイギリス兵は、特に自国から嘘を教えられたとは、決して感じえなかった。遺憾ながらドイツ兵の場合は、ついに自己の側からくるすべてのものを「ペテン」だ「発作」だとして拒否したことが非常に多かった。人々が宣伝のためには、どんな天才的な心理研究者であっても十分すぎることがないと考えるかわりに、手あたり次第バカ気たもの（あるいは「他の方面では」頭のよい人物）を任命すればよい、と考えていたことの結果である。

そこでドイツの戦時宣伝は、あらゆる心理的に正しい熟慮が完全に欠けていたために、「啓蒙」効果が正反対に働く場合の無比の教育と教授例を示したのである。しかし広い視野とにぶくない勘をもっているもので、四年半の長い間突進してくる敵の宣伝の津波を自己の内に消化したものには、敵から無限に学ぶべき多くのものがあった。

## 絶対に——主観的——一方的なること

けれども最も悪いことには、人々はすべての宣伝活動一

般の第一前提を理解していなかった。すなわち、宣伝に用いられるすべての問題に対する原則的に主観的一方的な態度である。この方面ではあるやり方で罪が犯された。しかも戦争の初期には上層部からである。人々が、あんなにも多くの無意味なことは、実際にただ純粋にバカさだけに帰することができるだろうか、と疑ったことはもちろん正しかった。

たとえば人々が、ある新しい石鹼（せっけん）を吹聴しようとしているポスターについて、そのさいまた他の石鹼も「良質」であると書いたなら、人々はなんというだろう？

人々は、これにはあきれて頭を横にふるよりしかたがないだろう。

政治の広告でも、事情はまさしくそのとおりである。

宣伝の課題は、たとえば種々の権利を考慮することではなく、まさに宣伝によって代表すべきものをもっぱら強調することにある。宣伝は、それが相手に好都合であるかぎり、大衆に理論的な正しさを教えるために、真理を客観的に探究すべきではなく、絶えず自己に役立つものでなければならない。

戦争の責任について、ただドイツだけがこの破局の勃発に責任があるのではない、と論ずることは、この観点からすれば根本的に誤りであった。かえって実際には、ほんとうの経過はそうでなかったにしても、事実そうであったように、この責任をすべて敵に負わすことが正しかったであろう。

ところで、こういう中途半端の結果は何だったか？

**ドイツ人の客観性ぐるい**　大衆は外交官から成り立っているのではなく、また国法学者のみから成り立っているのでもなく、まったく純粋に理性的判断からでもなく、動揺して疑惑や不安に傾きがちな人類の子供から成り立っている。一度、自国の宣伝によって敵側の一まつの権利さえも認められ

るようになると、すでに自己の権利に疑惑をもたらす根拠を置いたことになる。大衆は相手の不正がどこで終り、自分の不正がどこからはじまっているか、その時判断する立場にはいない。そういうばあいにかれらは不安になり、邪推したりする。特に相手が必ずしも同じように無意味なことをせず、何もかも責任をこちら側に負わせてくる場合がそうである。そこで団結して一元的に行なわれる敵の宣伝を、ついにわが民族が、しかも自国の宣伝より以上に信ずることは、はっきりしないだろうか？ドイツ人のようにもともと非常な客観性ぐるいになっている民族のばあいにはなおさらだ！　というのは、ドイツ人のばあいは、自分の民族や国家のこのうえなき重荷や、そのうえ破滅の危険をおかしてまでも、敵に対してとにかく不正なことをしないように、すべてのものが努力するからである。権威ある地位ではもちろん考えないが、これは大衆には全然意識されないのである。

民衆の圧倒的多数は、冷静な熟慮よりもむしろ感情的な感じで考え方や行動を決めるという女性的素質を持ち、女性的な態度をとる。

しかしこの感情は複雑でなく、非常に単純で閉鎖的である。この場合繊細さは存在せず、肯定か否定か、愛か憎か、正か不正か、真か偽かであり、決して半分はそうで半分は違うとか、あるいは一部分はそうだがなどということはない。

これらすべてのものを、特にイギリスの宣伝は、真に天才的に知っていた――そしてよく考えていた。そこには疑惑をひきおこしうる中途半端さは、実際なかった。

大衆の感情の幼稚さをすばらしく知っていたしるしは、この状態に適したゾッとする宣伝の中にある。天才的な容赦ない方法で、前線での道徳的堅固さに対する予備条件を――事実上の最大の敗北の場合すらも――確保し、さらにドイツという敵を戦争の勃発の唯一の責任者として、同様に的確にく

ぎづけしたのである。嘘である。ただ無制限な、あつかましい、一方的な頑固さによってのみ、この嘘が宣伝せられ、感情的なつねに極端な大部分の民衆の態度を考慮し、だからこそまた信じられたのである。

こういう宣伝のやり方がどんなに効果的であったかは、それが四年後でもなお強く敵に味方することができたのみならず、そのうえわが民族をも腐蝕(ふしょく)しはじめた事実が、このうえもなく的確に示している。

こういう成果がわれわれの宣伝に少なかったことは、なんら驚くにあたらない。われわれの宣伝は、その内面的なあいまいさの中に、すでに無効の胚があったのだ。ついにその内容のために、宣伝が大衆に必要な印象を起こさせることが、まったくありそうになくなった。こういう無味な平和主義者流のすすぎ水で、人間を死に陶酔させようと望むことは、わが精神の自由な「政治家」でなければできないものである。

かくして、このみじめな作品は無意味で、しかも有害であった。

しかし宣伝工作の独創性はすべて、いつも同時に基礎的原則が鋭敏に顧慮されなければ、成果はあがらない。宣伝は短く制限し、これをたえず繰返すべきである。この堅忍不抜さが、世の中の多くのばあいがそうであるように、ここでも成功にいたる第一の、かつ最も重要な前提である。

宣伝の分野こそ、耽美(たんび)主義者や鈍感なものによって決して指導されてはならない。前者からは、その内容が形式上、表現上やがて大衆に通ずるかわりに、その魅力が文学的お茶の会向きになってしまい、後者は独特な新鮮な感覚が欠けているために、いつも新しい刺激を求めてくるから、この点に配慮して警戒しなければならない。これらの人々はすぐに、すべてのものにあいてしまう。かれらは変

化を望み、かれらのようには冷淡でない同時代人の必要とするものを、かれらの身になって考えるとか、理解しようとか決して考えない。かれらはつねに、宣伝の、よりよくいえば、かれらにとってはあまりに古くさく、あまりに陳腐な、さらにあまりに時代遅れな、等に見えるその内容の、第一の批判者である。かれらは、いつも新しいものを欲し、変化を求め、こうしてすべての効果的な政治的大衆獲得の真の仇敵（きゅうてき）になる、というのは宣伝の組織と内容が大衆の要求に向かいはじめるやいなや、宣伝はすべてのまとまりを失い、そのかわりに完全に散漫になってしまうからである。

けれども宣伝は、鈍感な人々に間断なく興味ある変化を供給してやることではなく、確信させるため、しかも大衆に確信させるためのものである。しかしこれは、大衆の鈍重さのために、一つのことについて知識をもとうという気になるまでに、いつも一定の時間を要する。最も簡単な概念を何千回もくりかえすことだけが、けっきょく覚えさせることができるのである。

変更のたびに、宣伝によってもたらされるべきものの内容を決して変えてはならず、むしろけっきょくはいつも同じことをいわねばならない。だからスローガンはもちろん種々の方面から説明されねばならないが、しかし考察の最後はすべていつも、新しいスローガン自体にもどらねばならない。そのようであってこそ宣伝は統一的であり、まとまりのある効果をおよぼすことができ、また効果がおよぶのである。

この決して離されてはならない大きな線のみが、いつもかわらず首尾一貫した調子で、究極的成果をあげるのである。しかしさらに、かかる堅忍不抜さが、どんなに巨大な、ほとんど理解しがたいほどの成果に導きうるか、驚嘆とともに確認しうるであろう。

すべての広告は、商売の分野でも、政治の分野でも、継続とその利用のむらのない統一性が成果を

もたらすのだ。

**敵の戦時宣伝**　ここでも敵の戦時宣伝の例は、模範的であった。すなわち、少数の観点に制限し、もっぱら大衆を考慮し、うまざる根気をもって行なった。全戦争の間、一度正しいと認められた根本的な考え方と実施形式は、ほんの少しの変更さえも一度もなされずに、用いられた。それは、はじめはかれらの主張のあつかましさに、常軌を逸しているように思えたが、その後不愉快になり、最後には信ずるようになった。四年半後にドイツに革命が起った。その時のスローガンは敵の戦時宣伝から出ていた。

さらにイギリス人は、なおもう一つのことを知っていた。この精神的な武器に対して、成功はただ大衆に利用するばあいにのみ可能である。だがその成果は費用を十分に償うものである、ということを。

宣伝はわれわれの場合には、失職した政治家の最後のパンかせぎや、ひかえめな英雄の小さい避難所であったのに、イギリスでは第一位の武器と考えられていた。

実際その成果は、全体としてゼロに等しかった。

**心理的大量虐殺**　一九一五年とともに敵の宣伝がわれわれに対してはじまり、一九一六年以降それはますます集中化し、ついに一九一八年のはじめにまさしく洪水のようにふくれあがった。だから早くも一歩一歩この心をとらえる効果が認められてきた。軍隊は次第に、敵の思うつぼ通りの考え方をするようになった。

それなのにドイツの反撃は、まったく役に立たないものだった。

軍隊には、当時の精神的、意志的指導者の中に、もちろんこの分野でも戦いに応じようとする意図と決意があった。だがこれに必要な器具がなかった。また心理的にも、この啓蒙(けいもう)工作を軍隊自身にやらせることは誤りであった。啓蒙はそれが効果的であるためには、本国からもたらされたものでなければならなかった。すでにほとんど四年来、けっきょくはただ、本国のために英雄的勇気と辛苦という不滅の行為をなしとげた人々によってのみ、効果を期待することができたのである。

だが、本国からは何がきたのか？

あの無能さは、バカだったのか、犯罪だったのか？

一九一八年の盛夏に、マルヌ南岸の撤退後、なかんずくドイツの新聞は、毎日わたしの立腹が増してきて、軍隊の英雄たちのこの精神的消耗に終止符を打ちうるものが実際に一人もいないかどうか疑問が起ったぐらい、みじめで拙劣な、そのうえ犯罪のようにバカ気た態度をとったのだった。

一九一四年にわれわれが未曽有の勝利の突進でフランスを掃蕩したとき、フランスでは何が起ったか？　イタリアがイゾンゾ戦線で壊滅したころに、何をしたか？　さらに一九一八年の初頭、ドイツ混成軍団の攻撃が配備を根本から変えるように思えたとき、そして長距離重砲が猿臂をのばしてパリをノックしはじめたとき、フランスは何をしたか？

そこではつねに退却をいそぎつつある連隊が、その面々の国民的情熱の沸騰にいかにむちうたれたことか！　敗れた戦線の兵士の胸に、究極的な勝利に対する信念をいまこそ植えつけようとして、宣伝と天才的な大衆感化がいかに活動したことか！

その間にわれわれの間では、何が起ったのだ？　無か、それよりももっと悪いことが起ったのだ。

当時わたしは最新の新聞を読もうとして手にとり、そこに犯されているこの心理的大量虐殺を人々がまともに見たときに、しばしば怒りと憤激が燃えあがったものだ。

もし摂理が、わたしを、宣伝工作のこの無能なあるいは犯罪者的な無能者や意欲のないものと代らせてくれたならば、戦争の運命は違ったものになっていただろうという考えが、しばしばわたしを苦しめた。

この数か月でわたしは、はじめて運命のいたずらを感じた。運命は、わたしが祖国に対して他の場所で他の任務をはたすことができたのに、わたしを前線に、しかもどんな黒人兵の気まぐれな撃ち方でもわたしを撃つことができる場所に置いたのだ！

というのは、すでに当時わたしは、これをなしとげることができるという自負を、十分に信じていたからである。

しかしわたしは無名の八百万人の中の一人であった。そこで、黙々としてこの地位で、自分の義務をできるだけよくはたすほうが、もっとよかったのだ。

**最初の敵のビラ**　一九一五年の夏、はじめて敵のビラが手にはいった。

その内容は、叙述形式がいくらか変わっていたが、ほとんど不変だった。すなわちドイツの窮乏はますます大きくなり、ますます勝つ見込みがなくなるのに、戦争はいつまで続くかはてしがない。それだから故郷の民衆はまた平和にあこがれている。しかし「軍国主義」と「皇帝」がこれを許さない。だから全世界は――これは非常によく知られていることだが――決してドイツ民族に対して、戦争をしているのではなく、むしろもっぱら唯一の責任者、すなわち皇帝に対して戦っているのだ。したがって戦争は平和な人類のこの敵が排除されるまでは終わらないであろう。自由主義的、民主主義的国民は、戦争の終結後、ドイツ国民を永久世界平和同盟に加えるであろう。それは「プロイセン軍国主義」の殲滅の瞬間から確立せられるであろう、と。

さらにそのような主張をいっそうよく説明するために、「故郷からの手紙」が印刷されていることもまれではなかったが、その内容はこの主張を確認しているように思われた。

一般には当時、この試みを人々はすべて嘲笑した。ビラは読まれ、さらに後方の上級司令部へ送られ、風が再度上から積荷を――すなわちビラの輸送につとめたのはたいてい飛行機だった――塹壕へ送り込むまでは、たいがい忘れられていた。

この種の宣伝によって、まもなく一つのことが注意をひかざるをえなかった。すなわちバイエルン兵がいるすべての戦区には、異常な首尾一貫性でいつもプロイセンに対する抵抗が起ったことである。

一方において全戦争に対する本来の罪と責任がプロイセンにあると確言するのみでなく、他方特にバイエルンに対してはまた少しも敵意はない。バイエルンがプロイセン軍国主義に奉仕して、火中の栗を拾うために協力するかぎり、もちろんバイエルンを助けることはできない、と確言するのである。

この種の影響は事実上早くも一九一五年に、一定の効果をおさめはじめた。反プロイセンの気分が、軍隊の間にまったく目に見えて生育した。――上層部からはまたただの一度もこれに対して干渉が試みられなかったのである。これはもはやたんなる怠慢の罪以上のものであった。それは遅かれ早かれいつか最大の不幸な報いがくるに違いなかった。しかも「プロイセン」にではなく、ドイツ民族に対してである。そしてまたたしかにバイエルン自身もその末端に属していたのである。

この方面において敵の宣伝は、早くも一九一六年から絶対的な効果をおさめはじめていた。

**故郷からのみじめな手紙**　それと同様に故郷から直接くる悲惨な手紙が、とっくに影響をおよぼしていた。いまではもはや、敵がそれを特別にビラ等で前線に伝える必要はまったくなくなっていた。またこれに対して、「政府筋」からの二、三の心理的ひらめきのにぶい「警告」を除いては、何も行なわれなかった。前線は依然としてこの害毒でいっぱいだった。これは考えのない妻君たちが家庭で、もちろんこれが敵の勝利の確信をこのうえもなく強める道であり、したがって戦線にあるかの女らの身内のものの苦しみを長びかせ、激しくすることも考えもせずに、共同製作したものであった。ドイツ婦人たちの無感覚な手紙が、その後、数十万の男の生命を浪費させたのである。

一九一六年にはすでに、こういう方向でいろいろの気づかわしい現象が現われた。前線はこごとをいい、そして「つむじを曲げ」、それでなくてさえ多くのことに不満であり、そしてまた当然である

がしばしば憤慨した。かれらは空腹であり、耐えており、家にいる家族は悲惨な状態におかれているのに、別の場所には充溢（じゅういつ）とぜいたくざんまいがあった。そのうえしかも戦線においてすら、この点ではすべてが秩序を保っていなかった。

当時すでに、そのようにややもすれば雲行きがあやしかった。――しかしこれはなおつねに「内部」のことであった。最初にごごとをいい、不平をのべた同じ人間が、数分後にはあたかもそれが自明のことであるかのように、だまってかれの義務をはたしたのだ。まっさきに不満をいったその中隊が、ドイツの運命がこの百メートルの泥穴にかかっているかのごとく、かれらが守るべき塹壕の一角にしがみついたのだ。その前線はやはり昔のままのりっぱな、勇敢な軍隊だった。

わたしは前線と故郷の間のいちじるしいちがいを、区別して知るようになった。

**負傷**　一九一六年九月末、わたしの混成軍団は、ソンムの戦場へ出発した。それはわれわれにとって、その後引続いた恐ろしい物量戦の最初であった。そしてその印象は実際筆舌につくしがたかった。――戦争よりはむしろ地獄だった。

ドイツ軍の前線は、数週間にわたる連続速射の大旋風の中で、固守していた。幾度か少しばかり撃退されたが、さらにふたたび突撃した。だが決して退却しなかった。

一九一六年十月七日わたしは負傷した。(1)

わたしは幸いにも後方へもどり、輸送列車でドイツへ送られることになった。

わたしが故郷を見なくなってから実に二年たっていた。このような状態のもとではほとんど無限の月日のようだった。軍服を着ていないドイツ人がどんな外見をしているか、わたしはほとんど想像す

どひきつけんばかりに驚いた。

そんな声は二年ぶりではじめてだった！

さらにわれわれを故郷へ運ぶ列車が国境に近づけば近づくほど、みんなの内心はますます落ち着きがなくなってきた。二年前、若い兵士としてわれわれが通った場所は、みんな通りすぎた。ブリュッセル、ルーヴァン、リュティッヒ、そしてついに高い破風とその美しいよろい戸を見て、はじめてドイツの家屋を認め得たように思った。

祖国だ！

一九一四年十月、われわれが国境を通過したとき、われわれは嵐のような感激に燃えたが、いまや平静と感動があった。みんな幸福だった。運命は、かれが生命をかけて苦難と戦って守らねばならなかったものを、もう一度かれに見せてくれたのである。みんな他人に自分の目を見せるのが恥ずかしいぐらいだった。

出征したとほとんど同じぐらいの日に、わたしはベルリン近郊のベーリッツの野戦病院についた。なんという変化だろうか！　ソンムの戦場の泥土から、この快適な建物の白いベッドの中へ。人々は、はじめは正しく寝床につこうともしなかったぐらいだった。まずこの新しい世界にふたたび徐々になれる必要があった。

しかし遺憾ながらこの世界は、また他の点から見ても新しかった。

**自分の卑怯の自慢**　前線における軍隊の精神は、ここではもはや招かれざる客のようであった。戦線ではまだ知られていなかった何かを、わたしはここではじめて聞いた。すなわち自分の卑怯の称賛を！　というのは外地でも不平をいったり、「つむじを曲げたり」するのを耳にすることはできたが、しかしこれは決して義務の侵害を要求するものでもなく、そのうえ臆病者を賛美するのでもなかった。そうだ、卑怯者は、あくまで卑怯者とされ、それ以上の何物としても通用しなかった。そして卑怯者に対する軽蔑は、人々が真の英雄に払う賛美とまったく同じく、やはり一般的であった。しかしここ野戦病院では、ある点ではほとんど逆だった。無節操な扇動者たちが大口をたたき、あらゆる方法であさましい雄弁を試み、まじめな兵士の観念を笑うべきものとし、卑怯者の無節操を模範的なものとして、言明しようとしたのだった。なかんずく若干のみじめなヤツどもが、調子をあげた。一人は野戦病院へはいるために、自分で手を鉄条網でひっかいたと自慢した。しかもかれは、こんな笑うべき負傷にもかかわらず、ペテンで、ドイツへ輸送されたと同じ手口で、すでに長い間ここにいるらしかった。そのうえこの有害なヤツは、しかし、あつかましくも自己の卑怯を、勇敢な兵士が雄々しい死をとげるよりも勇敢な行為の発露だと広く言明していた。多くのものは黙って聞いていたが、他のものは出て行った。しかし若干のものはやはり賛成していた。

わたしはのどまで吐き気をもよおした。だがこの扇動者は、この病院で平気で許容されていた。どうすべきだったか？　かれが何者であり、どんな人間かということを管理者たちは正確に知っていなければならず、そしてまた知っていたのだ。それにもかかわらず、何も起らなかった。

わたしはふたたびまともに歩けるようになったとき、ベルリンへ行く許可をもらった。

困窮はいたるところではっきりと猛烈にひどかった。数百万人の都市は飢餓で苦しんでいた。不満

は自分の考えを広げるために、あたかもそういう場所を訪ねるかのごとき印象を受けた。こういうヤツらは大きかった。兵士が訪問したいろいろの家の調子は、野戦病院のそれと似ていた。けれどもミュンヘン自体の状態はもっともっと悪かった。

**逃げかくれ**　わたしが全治して野戦病院を出て、補充大隊へ行かせられたとき、この都市はわたしにはもはや見覚えがないように思えた。そこにはただ不平、不満、悪口だけがあった。補充大隊自体も、気分は沙汰のかぎりであった。ここでは古参の教官がまったくまずいやり方で従軍した兵士を取扱っていたが、かれらはまだ一時間も戦場にいたことはなく、この理由でただそれだけでもすでに古兵としっくりした関係を保つことができなかった。かれらは、前線に勤務したものにはわかる一種の特質を事実もっていた。同じように前線からきた将校は少なくとも、了解できるのだが、なんといってもこの補充部隊の指導者たちにはまったくわかっていなかった。前線帰りの将校はもちろんまた、兵站部指揮官と違って、兵士たちから完全に尊敬されていた。しかしそれをまったく別とすれば、一般の気分はみじめだった。逃げかくれは、すでにほとんどより高いりこうさのしるしとして通用した。だが忠実に辛抱することは、内面的に弱さと偏狭さの特徴として通用したのだ。事務局はユダヤ人が占めていた。ほとんどすべての書記はユダヤ人であり、すべてのユダヤ人が書記であった。わたしはこの選ばれた民族の戦士の氾濫に驚き、そしてそれを前線にわずかにいたかれらの代表と比較せざるをえなかった。

経済の場合、事態はなおいっそう悪かった。ここではユダヤ民族が事実上「欠くことのできぬもの」になっていた。クモは徐々に民族の毛穴から血を吸いはじめていた。軍需会社という回り道をし

て、国民的自由経済に次第にとどめをさす道具を見いだしていたのだ。

際限のない企業の集中の必要性が強調された。

そのようにして事実上一九一六年と一七年にはすでにほとんど全生産が、金融ユダヤ人の支配下にあった。

**反プロイセン扇動**　しかし民衆の憎悪は、いったいだれに向けられていたのだろうか？　このころにわたしはある宿命が近づいているのを見て驚いた。それは適当なときに向きを変えないと、破滅に導くにちがいなかった。

ユダヤ人が全国民から盗み、自己の支配下で圧迫しているのに、人々は「プロイセン」に対して扇動していた。前線におけるとまったく同様に、国内でもまたこの有毒宣伝に対して、上層部からは何もなされなかった。プロイセンの崩壊がバイエルンの興隆ということになかなかなるものでなく、そのうえ逆に一方の崩壊は他方を絶望的にどん底にひきずり込むに違いないことを、まったく考えていないように思えた。

このふるまいは、わたしにはこのうえもなく遺憾だった。わたしはそこに一般の注意を自分からそらし、他人にむけるユダヤ人の天才的トリックを見ることができた。バイエルン人とプロイセン人が争っている間に、ユダヤ人は両者を鼻先であしらっていた。バイエルン人がプロイセンに対してののしっている間に、ユダヤ人は革命を組織し、バイエルンとプロイセンを同時に倒したのである。

わたしはドイツ種族のこのいまいましい不和に耐ええなかった。そこでふたたび前線へ行くことを喜んだ。そのためにわたしはミュンヘンについてすぐ、新たに志願を申し出たのだった。

一九一七年はじめ、わたしはもう一度わたしの連隊にもどった。[2]

＊

**軍隊の新たな希望**　一九一七年の終りに軍隊の意気消沈の極点は克服されたように見えた。全軍はロシアの崩壊後ふたたび新たな希望と、新たな勇気を得た。戦争はやはりドイツの勝利に終るだろうという確信が、軍隊をますます風靡（ふうび）しはじめた。ふたたび歌が聞こえるようになった。そして不幸を予見するものもまれになった。人々はふたたび祖国の未来を信じた。

特に一九一七年秋のイタリア戦線の崩壊は、絶大な驚くべき影響をおよぼした。とにかくこの勝利に人々は、ロシアの戦場以外でも、戦線を撃破しうる可能性の証を見たのだ。すばらしい信念がいまやふたたび幾百万の心に流れ込み、かれらはほっとした安心で一九一八年の春を待ちこがれた。だが敵は明らかに意気消沈していた。この冬はいつもよりいくらか静かであった。嵐の前の静けさがきたのだった。

だがまさに、前線ではこのはてしなき戦いに終局的な結末をつけるための最後の準備にとりかかっており、西部戦線へ人員や物資の輸送がきれ目なく行なわれ、軍隊が大攻撃の訓練をうけている間に、ドイツでは戦争全体の中で最大の詐欺が勃発した。

ドイツは勝つはずがなかった。最後の瞬間に、勝利がもはやドイツの国旗にくっつきそうな時に、一撃でドイツの春期攻勢を芽のうちにつみとり、勝利を不可能にするために最適だと思われる手段がとられた。

軍需工場のストライキが組織されたのだ。

ストライキが成功したならば、ドイツ戦線は崩壊せねばならなかった。そして勝利は今度はもはや

ドイツの旗にくっつかないに違いないという「フォアヴェルツ」紙[3]の望みがみたされるに違いなかった。前線は弾薬不足のために数週間で突破されたに違いなかった。それとともに攻撃は阻止され、連合軍は救われ、そして国際資本がドイツの支配者になり、マルクシズムの民族欺瞞という内的な目的が達せられたに違いない。

国際資本の支配権を樹立するための国民経済の破壊――この目的が達せられたのは、一方では愚鈍さとお人よしの、他方ではまた実際底抜けの臆病さのおかげである。

もちろん軍需工場のストライキは、前線に武器を欠乏させるという点に関しては、究極的に望まれた成果をおさめなかった。軍需品欠乏自体が――計画通りに――軍隊を破滅に落しいれるよりも早く崩壊した。しかし、それによってひきおこされた精神的損害は、それだけ途方もなく大きかったのだ！

第一に、本国自体がまったく勝利を欲していないのに、軍隊はいったい何のために戦っているのか？　巨大な犠牲と窮乏はだれのためだ？　兵士は勝利のために戦うべきだ。それに対して本国ではストライキとは！

そして第二に、敵に対する影響はどうであったか？

**ロシアの崩壊**　一九一七―一八年の冬に、はじめて連合国の天に暗雲が高まってきた。ほとんど四年の間、かれらはドイツの勇士にぶつかり、それを崩壊させることができなかった。しかし、剣は、あるいは東部で、あるいは南部でふりかざさねばならなかったので、そのさいドイツが自由に防御のためにもったのは楯のみであった。いまやついに巨人の背後はからになった。敵の一人を決定的に倒

すことができるまでに、たくさんの血が流れた。いまや西部では楯に剣が加わるに違いなかった。そして敵はいままで防御を破ることができなかったが、こんどは攻撃に遭遇せねばならなくなったのだ。敵は攻撃を恐れ、勝利を心配した。

ロンドンやパリでは、会議、会議に狂奔した。敵の宣伝すらもはや困難になった。ドイツの勝利が見込みのないことを証明することが、もはや容易でなくなった。

**連合軍の意気消沈**　けれども同じことは、ぼんやりと沈黙していた前線でも、また連合軍自体でもそうであった。敵の紳士諸君に、あつかましさが突然消えた。かれらにも徐々に無気味な光がさしはじめた。ドイツ兵に対するかれらの内心の考え方は、いまでは変わってしまった。いままでかれらには、ドイツ兵が敗北するにきまっているバカ者と思われていたかも知れない。だがいまでは同盟国ロシアを殲滅(せんめつ)させたものとして、かれらの前に立っていた。やむをえず生じた東部のドイツの攻撃に拘束されていたことが、それ以来独創的な戦術と思えた。三年間東部のドイツ軍はロシアを攻撃した。はじめはほんの少しの成果さえもなかったように思えた。かれらはこの効果のない開始を嘲笑せんばかりであった。というのは、けっきょく、人間の数の多い大男ロシアが勝利者であるに違いなかった。そしてドイツは出血して倒れるのだ。事実はこの希望を確認するかに見えていた。

はじめてタンネンベルクの戦から、ロシアの捕虜の無数の群が道路や鉄道でドイツへ運ばれだした一九一四年九月のある日以来、この流れはほとんど終りがなかった。――しかしおのおの打ち破られ殲滅された軍隊のあとからは、新しい軍隊がたちあがったのである。この巨大国は無尽蔵にたえず新しい兵士をツァーに捧げ、また新しい犠牲を戦争に与えたのだ。いつまでドイツはこの競争を続け

られたであろうか？　ドイツが最後の勝利を得た後にも、なお最後のロシア軍がほんとうに最後の戦いに出てこないような日は、いつまでもこないに違いなかった？　そうすればどうなるのか？　人々が推量するところでは、ロシアの勝利はまったくのろのろしているかも知れないが、くるに違いなかった。

いまやこの希望はすべて終りをつげた。共同の利益という祭壇にこのうえもなく大きな血の犠牲を捧げた同盟国は、力つきて、仮借なき攻撃者の前に倒れたのだ。恐怖と戦慄(せんりつ)が、いままで盲信していた兵士の心に忍びこんだ。かれらはきたらんとする春を恐れた。けだし、ドイツが西部戦線にはただ一部だけを配置することができただけであったのに、いままでドイツに勝つことができなかったとなると、この気味悪い英雄国の全力が西部攻撃に集まると思われるいまでは、どうして人々は勝利を期待することができようか。

南ティロールの山々の影は、不安げに幻想を与え、フランドルの霧の中にまでカドルナ[4]の敗軍が陰鬱な幻影を与えていた。そして勝利の信念は、来たらんとする敗北を前にして、恐怖に道をゆずった。

**革命直前のドイツ！**　冷たい夜のやみの中から、早くもドイツ軍の寄せくる突撃隊の規則正しい車輪の音が聞こえてくるように思い、不安な心配が、来たらんとする審判をまちこがれていたとき、――その時、突然ドイツからまぶしく赤い炎がもえあがり、敵の前線の最後の榴弾痕(りゅうだんこん)にまでもその光を投げたのである。ドイツ混成軍団が大攻撃のための最後の訓練を終った瞬間に、ドイツでゼネストが勃発したのだ。

まず第一に世界が唖然(あぜん)とした。しかしその後十二時間にして敵の宣伝は、この助けにホッと救われ

てひっくり返った。一撃で、連合軍兵士の沈滞した確信をふたたび高め、勝利の確率を新たに自己のものと思いこませ、来たらんとするでき事に対する不安な心配を、断固たる確信に変化させる手段が見つかったのだ。かれらはいまや、ドイツ軍の攻撃をまちうけている諸連隊に、この戦争の終結を決するものはドイツ軍の突撃の大胆さではなく、自己の防御の耐久力であるという確信を、未曽有の大会戦にせんべつとして与えることができたのである。ドイツが欲するかぎりの勝利をいまかち得ても、本国では革命が勝利の前に立ち、勝利の軍隊は立つことができなかったのだ。

巧妙きわまりない宣伝が前線の軍隊をふるいたたせている間に、イギリス、フランスおよびアメリカの新聞はこの信念を読者の胸中にうえつけはじめた。

「ドイツは革命直前である！　連合軍の勝利は必至だ！」これは動揺しているポアリューとトミイ(5)を助け起すためには、最良の薬であった。

いまや小銃や機関銃がもう一度発射され、突然の驚愕（きょうがく）にかられて逃走するかわりに、希望にみちた抵抗が現われた。

**軍需工場ストライキの結果**　これが軍需工場ストライキの結果であった。それは敵の民衆の勝利の信念を強め、連合軍前線のしぼんだ絶望を追いはらい、――その結果幾千のドイツ兵は、これを自己の血でもってあがなわねばならなかった。しかしこの最も卑劣な悪事の主謀者は、革命ドイツの最高の国家的地位を得る見込みのあるものたちであった。

もちろんドイツの側では、さしあたりこの行為のはっきりした反応は克服し得たかのようであった。けれども敵の側では、その効果は現われないはずがなかった。その抵抗ぶりは、すべてを投げていた

軍隊の無目的状態を脱し、それに代って勝利のために戦う激しさが現われた。

というのは西部戦線が、ドイツの攻撃をわずか数か月間もちこたえたならば、勝利はだれが考えても、くるに違いなかったからである。そこで連合国の諸議会では、人々は将来の可能性を認識して、ドイツ壊敗のための宣伝継続に対して未曽有の資金を可決した。

＊

**不滅の月桂冠の最後の花輪**　わたしには幸いにも、最初二回の攻撃と最後の攻撃に参加すること[6]ができた。

これはわたしの生涯の最も巨大な印象になった。巨大なというのは、いまや最後の回に、一九一四年におけると同じように、戦争が防衛の性格を失って、攻撃の性格を負うたがゆえである。敵の地獄に三年以上ももちこたえて、ついに報復の日がきたとき、ドイツ軍の塹壕(ざんごう)と壕道いっぱいほっと息をついた。常勝大隊はいまいちど歓呼の声をあげ、不滅の月桂冠の最後の花輪を勝利をはらんだ旗にかかげた。いまいちど祖国の歌が、はてしなき行進縦隊にそって、天にまで響きわたった。そして最後に神の恵みが恩知らずの子らにほほえんだのだ。

＊

**壊敗的現象の増大**　一九一八年の盛夏に、前線には沈鬱な不安がただよっていた。本国では争っていた。何のためか？　野戦軍の個々の部隊では、人々がいろいろのことをうわさしていた。戦争はもはや見込みがないだろう。そしてなお勝利を信じうるのはバカ者だけだ。民衆はこれ以上の辛抱にもはや何の関心ももっていないばかりか、それは資本家と王家だけだ――こんなことが本国から伝えられ、また前線でも話された。

前線は最初これについてほとんど関心を示さなかった。普通選挙権がわれわれにどんな関係があったのか？　そのためにわれわれは四年間も戦ってきたのか？　そういう方法で墓の中にいる死せる英雄たちから戦争目的を盗むとは卑劣な盗賊行為であった。かつて若い兵士たちは、フランドルで、「無記名普通選挙権を与えよ」と叫んで死んだのではなく、「ドイッチュラント・イューバー・アルレス・イン・デァ・ヴェルト」と叫んで死んでいったのだ。小さいが、しかしまったく重大な相違である。しかし選挙権について叫んでいたものは大部分、かれらがこれを戦いとらんとするところにはいなかった。前線は政治的な政党のゲスどもをまったく知らなかった。当時まともな四肢をもっているまじめなドイツ人がいたところには、代議士諸氏は大部分いなかったのだ。

だから古くから前線にいる兵士は、エーベルト、シャイデマン、バルト、リープクネヒト等の諸氏[7]のこの新しい戦争目標はあまりピンとこなかった。人々は、なぜこの徴兵忌避者たちが、軍隊をさしおいて国家の支配権を横領する権利を突然手にいれることができたのか、まったく知らなかった。

わたしの個人的な立場は、はじめから固まっていた。このあさましい、民衆欺瞞的政党ルンペンのヤツらをみんな極度に憎んでいた。かかるやからにとってはたしかに国民の福祉が問題になるのではなく、からの財布をみたすことが問題なのだ、ということは、ずっと以前からわたしにははっきりわかっていた。そしてかれらは、いまやこのために全民族を犠牲にし、必要ならばドイツを滅ぼさせることすら覚悟していた。かれらはわたしの目から見れば、縛られるねうちがあった。かれらの希望を顧慮することは、働く民衆の利益を一群のスリのために犠牲にすることである。そして人々がドイツを放棄する覚悟ができたときだけ、この希望を満たすことができたのだ。

**若い補充兵の無能**　しかし戦闘をしている軍隊のほとんど大部分は、依然としてそのように考えていた。本国からくる補充兵は、どんどん悪くなるばかりだった。だからかれらがくることは、強化ではなく、戦闘力の弱化を意味したのだ。特に若い補充兵は大部分価値がなかった。これがかつてイープルの戦いに青年を送ったその民族の息子であるとは、往々にして信じられなかった。

八月と九月には、敵の攻撃の効果は、かつてのわれわれの防御戦の恐怖とは比較にならないほど少なかったにもかかわらず、崩壊現象がますます急速に増大した。これに対して、ソンムやフランドルの戦いは、過去のことではあったが恐ろしかった。

九月末にわたしの混成軍団は、かつてわれわれが若い志願兵連隊として突撃した場所に、三度きた。何という思い出だろう！

一九一四年十月と十一月に、われわれはそこで砲火の洗礼を受けたのだ。心は祖国愛にみち、口唇には歌をくちずさみながら、わが若き連隊は、ダンスに行くように戦闘をしに行った。このうえもなく尊い血が、そうすることによって祖国に独立と自由を確保するという信念で、そこで喜んで捧げられたのだ。

一九一七年七月にわれわれは、われらみんなにとってこのうえもなく神聖なこの地を再度踏んだ。ここには、かつて無比の尊い祖国のために目を輝かせて死んで行った最良の友――まだほとんど子供だった――が眠っていたのだ。

かつて連隊とともに出征したわれわれ古参兵は、畏敬の感動で、「死にいたるまでの忠誠と服従」のこの誓いの場所に立った。

連隊が三年前に強襲したこの地を、いまや苦しい防御戦で守らねばならなくなった。

三週間の連続速射で、イギリス兵はフランドル大攻撃を準備した。その時死んだものの霊が、生きかえったように思えた。連隊はきたない泥土にしがみつき、一つ一つの穴や弾痕の中で歯がみして、退かず、尻ごみせず、かつての時と同じように、一九一七年七月三十一日イギリス軍の攻撃がついにはじめられるまでに、この地点でますます小さく、減っていった。

八月のはじめにわれわれは解きはなされた。

連隊から数個中隊になった。全身泥まみれになって、人間よりも幽霊のようによろめきながら退却した。だが二、三百メートルの榴弾痕を除いては、イギリス軍はただ死だけをたぐり寄せたのだった。さて、一九一八年秋に、われわれは一九一四年の突撃の地に三度立った。われわれがかつて休息したコミネという小さい町が、いまや戦場になった。もちろん戦場は同じだったが、人間は変わっていた。いまでは軍隊の中でも「政論」がたたかわされていた。故郷の害毒が、いたるところでそうであるように、ここでもまた活動的になりはじめた。だが若い補充兵は完全に役に立たなかった。——補充兵は故郷からきたのだった。

**黄十字ガス中毒**　十月十三日から十四日の夜、イープルの前方の南部戦線にイギリス軍のガス射撃がなされた。そのときかれらは黄十字ガスを用いた。それは、わが身でためすというかぎりでは、その効力をわれわれはまだ知らなかった。この夜わたし自身それを体験しなければならなかった。また十月十三日の夕方にわれわれはヴェルヴィックの南の丘で、ガス榴弾の数時間の連続速射につきあたった。その速射は程度の差こそあれ、一晩中、猛烈に続いた。早くも真夜中ごろわれわれの一部は退いた。その中には即死した若干の戦友があった。朝方わたしも、十五分おきにひどい苦痛になやま

された。そして、七時前に戦闘に関するわたしの最後の報告書をたずさえて、やけるように痛む目で、つまずき、よろめいて帰ってきた。

数時間後にはもう目は灼熱(しゃくねつ)した炭火と化し、わたしはなにも見えなくなった。

こうしてわたしはポンメルンのパーゼヴァルク野戦病院につき、そしてそこで――革命を体験――せねばならなかったとは！

「共和国」　何かはっきりしないが、しかしうっとうしい気持が、長い間空中をさまよっていた。人々はここ二、三週間のうちに「はじまる」と話し合っていた。――わたしにはそれが何のことであるか、想像さえもつかなかった。はじめは春のストライキのようなものかと思っていた。陰悪なうわさが、たえず海軍から流れてきた。海軍は動揺しているということである。だがこれもわたしには、多数の大衆の事件であるよりも、個々の従兵たちの想像から生まれ出たものだと思われた。野戦病院ですらみんなが、戦争がなるべく早く終ればよい、とよく話をしてはいた。しかし「すぐに」とはだれも話していなかった。わたしは新聞を読むことができなかったのだ。

十一月になると一般の緊張が増してきた。

そしてある日のこと、突然にだしぬけに不幸な事態が勃発した。水兵たちがトラックでやってきて、革命を叫んだ。数人のユダヤ学生が、わが民族生活の「自由と美と品位」のためのこの闘争の「指導者」だった。かれらのうち一人として前線に出たことのあるものはなかった。三人の近東人は、いわゆる「淋病野戦病院」という回り道をして兵站(へいたん)部から本国に帰されたものだった。いまやかれらが本国で赤のぼろぎれをあげたのだ！

そのころわたしはいくらか快復に向かっていた。眼窩のさしこむような痛みはやわらぎ、徐々に周囲のものの大体の輪郭がふたたび見わけられるようになっていた。少なくとも後には何かの職につきうるぐらいには見えるようになる、という希望をいだいてもよかった。もちろん、いつかふたたび絵を描くことができるということは、もはや望むべくもなかった。とにかく、その凶行が起ったとき、わたしは快復途上にあったのである。

わたしが最初に望んだことは、この反逆が多かれ少なかれ、単なる地方的な問題にとどまることだった。わたしはまた二、三の戦友にこの点を強調しようとした。特にわたしのバイエルンの野戦病院友達は、この点について十二分にわかっていた。そこでの気分は「革命的」とはまったく異なっていた。わたしは、ミュンヘンでも狂乱が起されるとは、想像することもできなかった。崇拝すべきヴィッテルスバッハ家(8)への忠誠は、たしかに二、三のユダヤ人の意志よりも強固であるように思えた。それゆえわたしは、これは海軍の暴動の問題であり、近日中に鎮圧されるだろうとしか、思えなかった。

数日がすぎた。そしてそれとともにわたしの生涯の最も恐ろしい事実がやってきた。いまやうわさはますます圧倒的になった。わたしが地方問題と思っていたことが、全面的な革命であるに違いなかった。そのうえ戦線からは屈辱的な報告がきた。人々は降伏しようとしたのだ。そうだ、一体そのようなことがありうるだろうか?

十一月十日、牧師が野戦病院へ来て、簡単な話をした。そこでわれわれはすべてを知ったのである。

わたしも、極度に興奮して、その短い談話に出席した。ホーエンツォレルン王家がもはやドイツ皇帝の冠を戴くことができなくなったこと、祖国が「共和国」になったこと、人々はこの転換に神が浄福を拒まざるよう、そして将来もわが民族を見すてないよう神に請いねがわねばならないことを、か

れがわれわれに告げたとき、年老いた品のあるこの牧師は、非常にふるえているように思えた。そのさいかれは、ことば少なに王家を思い、ポンメルンにおける、プロイセンにおける、いな全ドイツに対する王家の功績をほめようとする以外に、何もなしえなかった。そして――そのときかれはかすかにすすり泣きはじめた。――またこの小講堂はみんなの極度に悄然と気落ちした心でみちていた。だれ一人として涙を禁じえなかったと思う。だが老人がさらに語り続けようとし、そしてわれわれがいまやこの長い戦争をやめねばならないこと、そうだ、わが祖国はいまや敗戦のうき目を見、われわれを勝者の仁慈にゆだねるのだから、将来重い圧制にさらされるだろうこと、休戦はいままでの敵の広量を信じて受諾されるようになったことを告げはじめたとき――わたしはもはや辛抱しきれなくなった。これ以上長くそこにいることができなくなった。わたしは目の前がふたたび真暗になったので、よろめきながら寝室へもどり、自分のベッドに身を投げだして、燃えるような頭をふとんと枕に埋めたのだった。

わたしは母の墓前に立った日以来、二度と泣いたことはなかった。わたしは若いころ残忍な運命につかまれると、反抗心が燃えあがったのだ。この長い戦時中、死が多くの愛する戦友や友人をわれわれの戦列から奪い去ったときにも、嘆くことはほとんど罪悪のように思えた。――かれらはとにかくドイツのために死んだのだ！　そしてついにわたし自身が――戦慄すべき戦闘もあと数日というときに、――忍びよるガスに倒れ、両眼をおかされ、永久に盲目になりはしないかという恐怖で一瞬絶望しそうになったときも、良心の声がわたしをどなりつけたのだ。あわれむべき男よ、なんじは、幾千のものがなんじより幾百倍も悪い状態に陥っているのに、それでも泣こうとするのか、と。そのようにして、そのときもわたしは、鈍感に黙ってわたしの運命にしたがったのだ。だがいまわたしは泣く

以外に方法がなかった。いまはじめてわたしは、祖国の不幸にくらべれば、個人的な苦悩というものがすべてなんと小さいものか、ということを知ったのだ。

**すべての犠牲はムダであった**　かくしてすべてはムダであった。あらゆる犠牲も、あらゆる労苦もムダだった。はてしなく幾月も続いた飢えもかわきもムダだった。しかもわれわれが死の不安に怖れながらも、なおわれわれの義務をはたしたあの時々もムダだった。その時倒れた二百万の死もムダだった。祖国を信じて、二度と祖国に帰らない、とかつて出征していった幾百万の人々の墓はすべて開かれてはならなかったのではないか？　墓は開いてはならなかった。そして無言の、泥まみれ、血まみれの英雄たちが、この世で男が自己の民族にささげうる最高の犠牲を、かくも嘲笑にみちた裏切りで、故郷へ復讐の亡霊として送られてはならなかったのではないか？　こんなことのために、一九一四年八月と九月にかれら兵士たちは死んだのだろうか？　こんなことのために、同年秋に、志願兵連隊は古い戦友のあとを追ったのだろうか？　こんなことのために、十七歳の少年は、フランドルの地に埋もれたのだろうか？　ドイツの母親たちが当時決して再会しえない悲痛な気持ちで、最愛の若者たちを出征させたとき、かの女たちが祖国にささげた犠牲の意義は、これだったのか？　これらいっさいのことは、いまや一群のあさましい犯罪者の手に祖国を渡さんとするために生じたことなのか？

　こんなことのためにドイツの兵士は、灼熱の太陽や吹雪の嵐の中に、飢え、かつえ、そして凍えながら、眠られぬ夜と、はてしなき行軍に疲れてもちこたえてきたのだろうか？　こんなことのために、兵士はつねに祖国を敵の侵略から守るべき唯一の義務を忘れず、退却せずに、連続速射の地獄の中で、

また毒ガス戦の熱の中で倒れたのだろうか？
たしかにこれらの英雄たちも一つの碑銘に値したのだ。
「旅人よ、なんじドイツへ来たりなば、故国に告げよ。われら祖国に忠誠に、義務に忠実に、ここに眠れる」と。
であるのに故国はどうだ――？
だが――われわれが考えねばならないのは、これが唯一の犠牲だったろうか？　ということである。過去のドイツは価値において劣っていたか？　自国の歴史に対してもまた義務はなかったのだろうか？　われわれはなお、過去の栄誉をまたわれわれに適用する価値があっただろうか？　だがいかにして将来この行為を弁明すべきであったか？
みじめな堕落せる犯罪者よ！
わたしがこの時、この巨大な事件を明確にしようとすればするほど、ますます憤激と恥辱の不名誉感が、額に燃えあがった。この悲嘆にくらべれば、目の苦痛ぐらいまったく何だ？
その後にきたものは、恐ろしい日々と、それよりもさらに悪い夜であった――わたしはすべてが失われたのを知った。敵のお情けを期待することは、せいぜいバカが、あるいは嘘つきと犯罪者が――やりうることだ。夜ごとに、わたしの内にこんな行為の元凶に対する憎悪が増してきた。

**政治家になろうとの決心**　その後数日して、わたしはまた自己の運命を自覚するにいたった。わたしがついこの間までひどく心配していた自分の将来についての考えなどは、いまや笑わずにはおられなかった。こんな土台の上に家を建てようなどとは、笑わずにおられようか？　ついにわたしにも、

前々から何度も心配していたが、ただ感情的にどうしても信ずることができなかったことが起ったにすぎないのだ、ということがはっきりしてきた。

皇帝ヴィルヘルム二世は、マルクシズムの指導者たちに融和の手をさしのべた最初のドイツ皇帝だったが、無頼漢どもは、名誉をもちあわせていないことに気がつかなかった。かれらはなお一方で皇帝の手を握っているのに、他方ではとっくに短剣をまさぐっていたのだ。

ユダヤ人とは契約などはなく、ただきびしい二者択一だけがあるのだ。

そこでわたしは、政治家になろうと決意した。[9]

# 第八章　わが政治活動のはじめ

一九一八年十一月もまだ終らぬころ、わたしはミュンヘンに帰ってきた[1]。わたしはふたたびわたしの連隊の補充大隊へ行ったが、それは「兵士評議会」の手に帰していた。全体の動きはいとわしかった。わたしはできればそこを去ろうとすぐ決心した。出征中の誠実な友、シュミート・エルンスト[2]といっしょにわたしはトゥラウンシュタインへきて、陣営が解散するまでそこにいた。

一九一九年三月、われわれはふたたびミュンヘンへもどった。

情勢は不安定であり、革命の広がりは必然的に迫っていた。アイスナー[3]の死はこの展開にただ拍車をかけただけであり、そしてついに労働者兵士評議会[4]の独裁に導いたのだった。もっとよくいうならば、全革命の元凶が本来目標としてめざしていたような、一時的なユダヤ人支配に導いたのだ。

このころわたしの頭の中を際限のない計画がかけめぐっていた。何日間もわたしは、人々はいったいどうすることができるのかと熟考した。だがいつも、いくら考えてもその結末は、自分が無名の人間として、何か目的にかなった行動をとるためのわずかの前提すらももっていないことを、平凡に確認するだけであった。わたしがなぜ、当時既成の政党に行くべき決心をしえなかったかという理由については、あとで述べよう。

この新しい評議会による革命の行なわれている間に、わたしははじめて、中央評議会にきらわれるような行動をとった。一九一九年四月二十七日の早朝、わたしは逮捕されるところだった。——だが

三人の従兵はつきつけた騎兵銃に面して、必要な勇気をもっておらず、来た道をふたたびひき返して行った。[5]

ミュンヘンの解放後数日で、[6]わたしは歩兵第二連隊の革命経過調査委員会に行くよう命ぜられた。これが多少ともわたしの純政治的な積極的活動の最初であった。

それから数週間して、わたしは国防軍所属者のために開催されたある「講習」[7]に参加することを命ぜられた。そこで兵士は公民思想についての一定の基礎を受けとることになっていた。わたしにとってこの催しの価値のすべては、現下の情勢について徹底的に熟議することができるような同じ考えをもった二、三の同僚を知ることのできる機会が、わたしに与えられたことにあった。われわれは多かれ少なかれみんな次のようにしっかりと確信していた。すなわちドイツは、中央党や社会民主党のような十一月革命の犯罪政党によっては、大きくなりつつある崩壊からもはや救われない。しかしまたいわゆる「ブルジョア的＝国家主義的」組織も、最良の意欲をもっていてさえも、起きてしまったものをそれ以上改革することは決して心得ていない、と。ここでは多数の前提が欠けていたが、それなくしては、こうした仕事を達成することはできなかったのだ。われわれのその当時の見解が正しかったことは、それに続く時代が証明してくれた。

**新党結成の論議**　だからわれわれの小さいサークルで、新党結成が論議された。そのさいわれわれの念頭に浮かんだ根本思想は、その後「ドイツ労働者党」として実現されたものと同じだった。新しく結成された運動の名称は、はじめから大衆に近づく可能性を示すものでなければならなかった。というのは、この特質がなかったならば、すべての仕事は、無益な不必要なものと思われるからであ

った。そこでわれわれは「社会革命党」という名称を思いついた。これは、新しい基礎の社会観が、事実上革命を意味したがゆえである。

それのみでなく次のようなもっと深い理由があった。すなわち、

**資本の二種類**　わたしはずいぶん若いときからずっと経済問題に没頭したが、多少ともいつも社会問題そのものの考察から生ずる範囲内にとどまっていた。やっとその後、ドイツの同盟政策の検討のために、このわくがひろがったのである。この同盟政策は大部分、将来のドイツ民族の扶養に関して起りうべき基礎についてはっきりしていなかったことと同様に、経済の誤った評価から生じた結果であった。しかしこれらの考え方はすべて、資本というものはどんなばあいでもただ労働の成果にすぎず、したがって労働そのものと同じように人間の活動を促進させるか、あるいは阻止させうる要因による訂正にすべて裏打ちされているのだという意見に立っていた。その場合にも、資本の国家的意義は次の点にあるだろう。すなわち、資本自体は国家の大きさ、自由および力に、いいかえれば国民に完全に依拠しているものであり、この依存こそ、自己保存もしくはより以上の増大という単純な衝動から、この資本の側によって国家と国民の助長に導かれるに違いない、と。このような独立の自由な国家への資本の依存状態は、このように国家の側では、国民の自由、力、強さ等のために、資本に一役かわせざるをえないことになる。

それとともにまた資本に対する国家の課題は、比較的簡単で、明瞭(めいりょう)であった。国家はこれに対して、資本を国家の召使にしておき、国民の支配者であると思わせないように配慮することだけだった。そこでその態度には二つの限界を定めることができた。すなわち一方では、生活力のある国家的、独立

的経済の維持、他方では労働者の社会的権利の確保である。

わたしは、以前には、その存在と本質がもっぱら投機にもとづいている資本と、創造的労働の終局的成果としての純粋の資本との区別を、ねがわしくはっきりとは認識することができなかった。なおまたわたしには、最初の問題提起が欠けていた。問題提起が必ずしもわたしに近づいてこなかったのである。

さて、上述した講習で講演したいろいろの人々の一人によって、徹底的にこれがもたらされた。すなわちゴットフリート・フェーダー[8]である。

生まれて初めてわたしは、国際的な株式資本と貸付資本の原理的説明を聞いたのだ。

わたしはフェーダーの講演をはじめて聞いた後に、すぐにまた、いまや新党樹立のためのいちばん本質的な前提の一つに対する道を発見したという考えが頭にひらめいた。

*

わたしの見るところでは、フェーダーの功績は、仮借なく残酷に、株式と貸付資本の投機的性格と、国民経済的性格とを規定し、だが利息の永久不変の前提を暴露した点にもとづく。かれの詳論は、すべて原則的な問題では正しかった。かれの論の批評者は、はじめからその理念の理論的正当性については争わず、むしろそれが実際に遂行できるかどうかに疑いをいだいたのだ。だが、他の人の目には、そのようにフェーダーの論述の弱点であったものが、わたしの目にはすぐれた点とうつったのであった。

*

**綱領立案者の課題**　綱領立案者の課題は、ある問題の実行可能性について種々の程度を定めるこ

とではなく、問題そのものを明確にすることにある。すなわちかれは方法よりも目標に関係するのである。だがこのばあい、ある理念の原理的正当性を決めるのであって、その実施の困難さを決するのではない。綱領立案者が絶対的真理のかわりに、いわゆる「合目的性」とか「現実性」とかを考慮しようとするやいなや、かれの仕事は探索している人類の北極星たることをやめ、そのかわりに平凡な処方箋になってしまう。

**綱領立案者と政治家**　ある運動の綱領立案者は、その目標を確立すべきであり、政治家はその実現に努力すべきである。それゆえ、前者はその考え方において永遠の真理によって規定され、後者はその行動においてむしろその時々の実際的な現実によって規定される。前者の偉大さは、かれの理念の絶対的抽象的な正当さにあり、後者の偉大さは、所与の事実に対する正しい態度とその有効な利用にある。そのさい、かれには綱領立案者の目標が導きの星として役立つのである。政治家としての意義に対する試金石として、人々がかれの計画や行為の結果を見ている間は、すなわちかくのごとくその実現化で判断している間は、綱領立案者の究極の意図は決して実現されるものではない。なぜなら人間の思想は、真理を把握し、水晶のように澄明な目標を立てることができるかも知れないが、しかしその完全な履行は、一般的な人間の不完全さや不十分さで挫折させられる。理念が抽象的に正しく、したがって力強くなればなるほどその完全な実現は、それが実際人間に依存するかぎりますます不可能になる。それであるから、綱領立案者の意義は、その目標の実現によってはかられるのではなく、その目標の正しさや、それが人類の発展におよぼした影響ではかられるのである。そうでないばあいは、宗教の創始者はこの世の最も偉大な人間に数えられてはいけないことになる。というのはかれら

の倫理的意図の実現は、むしろ決して完全に近いものにすらなりえないからである。愛の宗教すらその効果においては、その崇高な創始者の願望のかすかな反照にすぎない。だがその意義は、愛を一般的人間的な文化や人倫やモラルを発展せしめようとする方向にあるのである。

綱領立案者と政治家の課題の非常に大きな差異は、一人の人物の中に両者がほとんど結合しない原因でもある。これは特にいわゆる小さく「成功した」政治家に妥当する。その活動はたいてい、ビスマルクが政治一般をいくらかひかえめに特徴づけたように、事実ただ「できることのコツ」だけである。こういう「政治家」は、偉大な理念から自由にされればされるほど、それだけ容易に、またしばしばそれだけはっきりと、しかもいつもより迅速に、成果をあらわすものである。もちろん、それとともにその成果は、またこの世の無情さに捧げ、そして往々にしてそれを生み出したものの死後も生きのびることはない。こういう政治家の仕事は、大体において後世にとって無意味である。というのは、現代におけるかれらの成功は、実際上すべて真に偉大な、そして決定的な、それ自身後のジェネレーションにも価値を残すような問題や思想に触れないことだけにもとづいているからである。

ずっと後の時代にも価値と意義を持つそのような目標を遂行することは、そのために戦うものにとってたいていほとんど報いられず、そして大衆に理解されることはまれである。先を見通した将来の計画は、ずっとその後にやっと実現されうるのだし、そして一般にその利益は後世にはじめて役に立つのであるから、そんな将来の計画よりも、ビールやミルクの値下げのほうが、最初はよくわかるのである。

だから政治家の大部分は、いつもバカの親族たる一種のうぬぼれから、大衆の一時的同情を失わないために、ほんとうにむずかしい将来の計画からはいっさいはなれている。その場合こうした政治家

の成功や意義は、もっぱら現代にあって、後世のためには存在しないのである。小さい人間はいつもこれにいささかも気がねしないものだ。かれらはそれで満足しているのだ。

綱領立案者のばあい、事情は異なる。かれの意義はほとんどつねに未来のみにある。というのは綱領立案者は、往々にして人々が「世間ばなれ」ということばで特徴づけることがまれでないからである。なぜなら、もし政治家の技術が、実際にできうることのコツとして通用するならば、そのばあい綱領立案者が不可能なものを求め欲するならば、ただ神のみのお気に召すのだからである。かれは現代の承認を得ることをほとんどつねにあきらめねばならない。しかしそのかわりに、かれの思想が不滅である場合には、後世の栄誉をうるのである。

長い人類の時代においては、政治家が綱領立案者と融合することがいつかありうるだろう。だがこの融合が緊密であればあるほど、さらに政治家の活動に抵抗する度合いもいっそう大きくなる。かれは近辺にいるすべての俗物にもわかるような要求のために仕事をするのではなく、きわめてわずかなものしか理解できない目標のために仕事をするのである。だからかれの生涯は愛憎にひきさかれる。この男を理解しない現代の抗議が、かれがまた実際にそのために働いている後世の承認と格闘するのである。

**史上のマラソン選手**　なぜなら未来のための人間の仕事が大きければ大きいほど、現代はその仕事を理解することがいっそう困難であり、また闘争もそれだけ苦しく成功することもまれである。しかしそれにもかかわらず幾世紀かの間には、一人のものに花が咲き、かれの晩年に来るべき栄誉のほのかな光がかれを照らすことがあるかも知れない。もちろんこういう偉大な人は歴史上のマラソン選

手にすぎない。現代の月桂冠は、死んでいく英雄のコメカミにただちょっと触れるだけである。
しかし現代からは理解されないが、それにもかかわらず理念や理想のために闘争をやり抜く覚悟があるこの世の偉大な闘争者は、かれらの中に数えることができる。かれらは、いつかもっと民族の心に近く立つようになる人である。民族というものは概して、かつて現代が偉人に対して犯した罪を、その場合各自がすぎ去った既往において償う義務を感ずるもののように思われる。かれらの生涯と努力は、感動的な感謝にみちた驚嘆の念で追求され、特に悲観的な時代には、くじけた心や絶望的な魂をふたたび奮いたたせることができる。
だがこれには、真に偉大な政治家のみならず、その他の偉大な改革者もみんな属するのである。フリードリッヒ大王と並んで、ここにはマルティン・ルターやリヒァルト・ワーグナーも立つのである。

**国際金融資本との戦い**　わたしがはじめてゴットフリート・フェーダーの「利子隷属の打破」についての講演を聞いたとき、わたしはすぐ、ここでは理論的な真理が問題となっており、ドイツ民族の将来に対して計り知れぬ意義のあるものになるに違いない、と思った。国民経済から株式資本を鋭く分離することによって、資本一般に対する戦いと同時に、独立した民族的自己保存の基礎を脅かされることなく、ドイツ経済の国際化に反抗する可能性を示したのだ。わたしは、困難きわまりない闘争がもはや敵性民族に対してでなく、国際資本に対して攻撃されねばならないことを知らなかったときよりも、ずっとはっきりとドイツの発展が目にうつったのである。フェーダーの講演の中にわたしは、この来たらんとする闘争に対する力強い合ことばを感知したのである。
そしてここでもその後の発展は、われわれの当時の感じがいかに正しかったか、ということを証明

している。今日、われわれはわがブルジョア政治家の狡猾者からも、もはや笑われない。今日では、かれらが意識して嘘をついていないかぎり、国際的な株式資本は最大の戦争扇動者であるのみならず、闘争の終った現在でさえも、平和を地獄と化するためには何物をも放置しておかないことに、気づいているのである。

国際金融資本と国際貸付資本に対する戦いは、ドイツ国民が経済的独立と自由を達成するための最も重要な綱領となった。

しかしいわゆる政治家の異論については、次のように答えることができる。すなわち、「利子隷属の打破」を遂行することによっておそるべき経済的結果が生ずると心配するのは、すべて余計なことである。というのは、第一に、いままでの経済の処方は、ドイツ民族に非常に害になったからである。国民的な自己主張の問題に対するいろいろの立場の決定は、われわれに、ずっと昔に同じような専門家によってとなえられた意見を非常に強く思いださせるのである。たとえば鉄道施設問題にさいしてのバイエルン衛生局の例だ。この貴顕な人々からなる団体の当時の危惧はすべて、その後よく知られているように、実現しなかった。この新しい「蒸気馬車」の列車の旅客は、めまいを催さなかったし、見物人もまた病気にならなかった。そしてこの新しい設備を見ないようにするための板べいを、人々はやめた。——ただ、いわゆるすべての「その道の専門家」の頭にだけ、板べいが後世までも残されていたのである。

**唯一の信条、すなわち民族と祖国**　しかし第二に、人々は次のことに気づかなければならなかった。すなわち理念というものはどれも、そしてそれがまた最善の理念であっても、それ自体が目的で

あるかのように自負すると危険になる。だが実際は目的のための手段にすぎないのだ。――だがわたしにとっては、そしてすべての真の国家社会主義者にとっては、ただ一つの信条だけがある。すなわち民族と祖国だ。

われわれが闘争すべき目的は、わが人種、わが民族の存立と増殖の確保、民族の子らの扶養、血の純潔の維持、祖国の自由と独立であり、またわが民族が万物の創造主から委託された使命を達成するまで、生育することができることを目的としている。

およそ思想や理念、教説や一切の知識というものは、この目的に奉仕すべきである。またすべてのものはこの観点から吟味すべきであり、その目的にかなう度合いにしたがって、利用しあるいは拒否すべきである。それゆえ、すべてのものは実際に生活にのみ役立つべきものであるから、どんな理論も死んだ信条にこりかたまることはできないのである。

そのようにゴットフリート・フェーダーの認識が、わたしを、徹底的にわたしがそのころまでほとんど精通していなかった領域に、関係せしめる誘因となった。

わたしはふたたび勉強しはじめた。そしてそのときはじめて、ユダヤ人カール・マルクスのライフ・ワークの意図の内容を理解するようになった。国民経済に対する社会民主党の闘争が、真に国際的な金融および株式資本の支配のための地盤を準備するのみであることがわかったとまったく同様に、かれの「資本論」もいまやはじめてわたしに正しく理解されたのである。

＊

「教育係将校」[9]　しかし、さらに別の点から見て、この講習はわたしにこのうえもなく大きい影響をその後もおよぼした。

ある日、わたしは討論を申しでた。参加者の一人は、ユダヤ人のために一試合せねばならないと思って、長々とユダヤ人を弁護しはじめた。これに刺激されてわたしは抗弁した。出席していた参加者の圧倒的大多数は、わたしの見解に味方した。だがその結果は、わたしが二、三日後いわゆる「教育係将校」として、当時のミュンヘン連隊へ編入するよう定められたことであった。

そのころ軍紀はまだかなりゆるんでいた。労兵評議会時代の余波をこうむっていたのだ。「自発的な」従順——人々はクルト・アイスナーのもとにある豚小屋をいつも美しくそうよんでいたものだ——の代りに、ふたたび軍紀と従属を導入することは、きわめて徐々に、そして注意深く移行するのでなければできなかった。それと同様に軍隊自身には、国家的、祖国的感情や思想を教えねばならなかった。わたしの新しい活動領域は、この両方面にまたがっていた。

わたしは熱意と愛情をもってはじめた。というのはわたしにはいまや、一度にかなり多数の聴衆の前でしゃべる機会が開かれ、そしてわたしが以前からつねに、知ってはいなかったが純粋な感じから簡単にうけとっていたものが、いまや適中したからである。つまりわたしは「演説する」ことができたのだ。またむろん声も非常によくなっていて、少なくとも小さい中隊室ならどこでも十分わかってもらえた。

これほどわたしにとって幸福だった任務はなかった。というのは、いまや除隊まえに、わたしの非常に気にいっている制度、すなわち軍隊で有益な奉仕をすることができたからである。

わたしは、また成功したといってよかった。わたしは自分の講話を通じて、幾百、おそらくは幾千という戦友を、ふたたびその民族と祖国に連れ帰った。わたしは軍隊を「国家化」し、そしてそれによって一般の軍紀を強化することをも助けることができた。

その際ふたたびわたしは、後年新しい運動の礎石を建設しはじめた同じ志をもつ多数の戦友を知ったのだった。

# 第九章　ドイツ労働者党

「ドイツ労働者党」　ある日わたしは、「ドイツ労働者党」という名前で、近日中に集会を開こうとしている──そこではゴットフリート・フェーダーも講演するに違いなかったが──おそらく政治団体とみられる団体が、いかなるものであるか見てくるよう、上官から命ぜられた。わたしはとにかくそこへ行ってその団体を一度見て、報告せねばならなかった。[1]

当時軍の側が政党に示していた好奇心はわかりきっていた。[2]革命は兵士にも政治的活動の権利を与え、いまや最も経験のないものでもその権利を十分に行使していたのだ。[3]人々が軍隊からふたたび選挙権をとりあげて、政治活動を禁止すべきだというきっかけを与えたように見えたのは、兵士たちの同情が革新政党から国家主義的運動や国家主義的奮起の方向に向かいはじめたことを、中央党[4]や社会民主党が遺憾ながら認めねばならなくなった瞬間からはじまったのだ。

中央党とマルクシズムがこの処置をとったことは、よく理解できた。というのは、もし人々が、この「市民権」──人々は兵士の政治的同等権を革命後そう呼んでいた──の剝奪に着手しなかったならば、数年後にはもう十一月革命の国家は存在しなかったかも知れず、それにつれてまたこれ以上国家的な凌辱や侮辱を与ええなかったかも知れないからである。当時軍隊は、国内における連合国の吸血鬼や手先きを、国民から追いはらう最善の道を歩んでいたのだ。しかしまたいわゆる「国家主義的」政党が十一月革命の犯罪者のいままでの見解を修正することに感激して賛成し、こうして国家主

いつもながらの独断的観念がどんなところへ落着するか、ということをふたたび示したのである。中央党やマルクシズムは軍隊から危険な国家主義的毒牙を抜きとることだけを考えていたのに、実際に精神的老衰にかかっているブルジョアジーは、みんなまじめに、軍隊はふたたび元のような軍隊になる、すなわちドイツ防衛力の財宝になると考えていたのだ。その毒牙さえなければ、軍隊は永久に警察たるにとどまり、敵前で戦闘をしうるような軍隊ではなくなる。これはその後十分に実証されたものである。

あるいはわが「国家主義的政治家たち」は、軍隊の発展を、国家主義的以外のものに発展しうるとでも信じていたのだろうか？ この考えは、これらの紳士たちにいまいましいほど似つかわしく思える。なぜそうなるのかというと、戦争中かれらは兵士でなくて、おしゃべり屋すなわち議会屋であったからであり、かつては世界の第一級の兵士であったというこのうえなく力強い過去を思い出す男の胸中にはなにがあるかを、少しも理解していなかったからである。

こうしてわたしは、上述の、いままで全然知らなかった党の集会に行く決心をした。

わたしが夕方、ミュンヘンにある元のシュテルンエッカーブロイの「親衛隊員室」——これはその後われわれの歴史的な部屋になった——にきたときに、そこには主として下層階級のものたちが二十人から二十五人ほど、出席していた。

フェーダーの講演は、講習以来すでにわかっていたので、わたしは団体そのものの観察に注意を集中することができた。

わたしの受けた印象は、よくも悪くもなかった。つまり他の多くのものもやっているような新党樹

立だった。ちょうどそのころは、いままでの進展に満足できず、そして既存の政党にも信頼をおけなくなったものたちが、各自、新党を樹立するに適していると自分で感じている時代だった。そこでいたるところにこうした団体が地面から突如現われ、やがてひっそりとふたたび消え去るのだった。創立者たちはたいてい、団体から、政党あるいは一つの運動をつくりあげるということがなんであるかについて、まったくわかっていなかった。それゆえこの創立は、ほとんどいつもみずから笑うべき俗物根性の中で窒息してしまったのである。

約二時間聞いたあとで、わたしは「ドイツ労働者党」もこんなものだと判断した。フェーダーの話がやっと終ったとき、わたしはホッとした。十分見たし、もう帰ろうと思っていた。その時自由討論をすると告げられたので、もう少し残っていようという気になった。だがこれもまた、突然一人の「教授」が発言するまでは、すべて無意味に終りそうに思えた。かれはまずフェーダーの論拠の正しさに疑問をもったが、その後――フェーダーの非常にりっぱな答弁があったあとで――突然「事実の基礎」に立脚して、綱領の特に重要な点として、バイエルンが[5]「プロイセン」から「分離」する闘争をおこすべきことを、きわめて熱心にこの新党に推薦した。この男はあつかましくも、このばあい特にドイツ・オーストリアはただちにバイエルンに合邦するだろうこと、さらにもっとよい平和がくるだろうし、とか同じようなたくさんの無意味なことを主張した。そこでわたしは同じように発言を求め、この点についてのわたしの意見を、学識ある方に申しあげる以外に方法がなかった――成功だった。この演説者氏は、わたしの話が終らないうちに、水をぶっかけられたプードル犬のように会場から立ち去った。わたしが話をしているとき、人々は驚いたような顔で聞いていた。そしてわたしが会衆に別れをつげて立ち去ろうとしたとき、一人の男がわたしを追いかけてきて、名を名のって（わた

しはその名前がはっきりわからなかったが）これをどうか読んでくれと切に請うて、明らかに政治的パンフレットと思われる小冊子をわたしの手に押しつけた。[6]

これはわたしにとって非常にうれしかった。というのはこれからはもうこんなに興味のある集会に出席しなくても、恐らくもっと簡単にこの退屈な団体を知ることができると思われたからである。そのうえこの一見労働者風の男は、わたしによい印象を与えた。こうしてわたしは立ち去った。

当時わたしは、まだ第二歩兵連隊の兵営の小さい部屋に住んでいた。そこにはまだ革命の痕跡が非常にはっきりと残っていた。一日中わたしは外出し、たいていは第四十一狙撃兵連隊か、あるいはまた集会や、どこか他の部隊の講演等にでかけていた。夜だけ自分の住居で眠った。わたしは毎朝早く、五時前にはいつももう目がさめたので、この小さい部屋で生計をたてている小ねずみに、かたいパンの残りや皮を二、三片、床のうえに置いてやり、このかわいらしい小動物が、二、三の好物のまわりをかけめぐるのを見るという遊びをよくやった。わたしは自分の生涯にすでにたくさんの辛苦をなめてきたので、この小動物が空腹であり、したがってまた満足する気持ちもよくわかるのだった。

この集会のあった翌朝も、わたしは五時に目覚めてベッドに横になり、かけ回るのを見ていた。それ以上眠ることができなかったので、突然昨夜のことを思い出した。そしてあの労働者がわたしに渡してくれた小冊子を思い出した。そこで読みはじめた。それは小さなパンフレットだった。その中で著者――まさしくあの労働者は、自分がいかにしてマルクシズムの、また労働組合のきまり文句のごたまぜの中から、ふたたび国家主義的な思想に達したかを述べていた。だから表題も「わが政治的目覚め」としてあった。わたしは一度読みはじめたので、その小冊子をおもしろく読み通した。そのうえそこには、わたし自身が十二年前に自分の体できり抜けねばならなかったような過程が、反映して

いたのである。[7] 知らず知らずわたしは、自分自身の発展をもう一度いきいきと見ることができた。わたしは一日中二、三回このことについて追想した。そしてついにもう一度まったくそれを忘れかけようとした。が、そのときまだ一週間もたっていなかったが、あなたを「ドイツ労働者党」に加入せしめたから、それについて話をしたい。それゆえ来週水曜日に党の委員会にこられたい、という内容のハガキを受けとって驚いた。

**「委員会」**　わたしは、こういう党員「獲得」法にはもちろんあきれかえった。それについて怒っていいのか、笑っていいのかわからなかった。わたしは既成の政党へ加入することはまったく考えておらず、わたしで独自のものをつくろうと思っていた。こういうムリな要求は実際、わたしには問題にならなかった。

わたしは返答をかれらに書面で送ろうとしたが、その時好奇心が勝ち、わたしの理由を口頭で説明するために、定められた日に出頭する決心をした。

水曜日になった。例の会が行なわれるという食堂は、ヘルン街の「アルテ・ローゼンバート」であった。何年かに一回だけまぎれ込む人もあろうかと思われるような、非常にみすぼらしい店だった。もっとも一九一九年では驚くにはあたらない。メニューは大レストランでさえも非常に質素であり、そしてあまり魅力的でなかった。だがこの飲食店をわたしはその時まで全然知らなかった。

わたしはだれもすわっていない、明りも満足についていない客室を通って、別室へ通ずる扉を探した。そして「会議」をしているところへきた。半分こわれかけているガス灯の薄明りの中で、一つのテーブルを囲んで四人の若い人々がすわっていた。その中にあの小冊子の著者もいた。かれはすぐさ

またいへんうれしそうにわたしに挨拶をし、「ドイツ労働者党」の新党員として歓迎してくれた。
わたしはいささか唖然とした。実際の「全国議長」がもうくるとつげられたので、わたしも自分の説明をもう少し待とうと思った。ついに議長があらわれた。フェーダーの講演のさいの、シュテルンエッカーブロイの集会の指導者がそれだった。
わたしはその間にふたたび好奇心を覚え、これからきたるべきものを待ちこがれた。そこで少なくともわたしは一人一人の名をおぼえた。この「全国的組織」の議長はハーラーであり、ミュンヘンの委員長はアントーン・ドレクスラーだった。
そこで前の会議の議事録が読みあげられ、書記長に対する信任の辞がのべられた。さらに会計報告の番だった――総計七マルク五十プフェニッヒがこの団体の財産だった――、これに対して会計係に全面的な信頼が確言された。これがふたたび議事録に書き込まれた。さらに議長がキールから一通、デュッセルドルフから一通、そしてベルリンから一通の手紙に対する回答文が読みあげられた。それらについて全員が了解した。そこで到着書類が報告された。ベルリンから一通、デュッセルドルフから一通、キールから一通、その到着はたいへんな喜びで受けとられたように思えた。かれらは、文通がひんぱんになったことを、「ドイツ労働者党」の意義が普及していく最善の目に見える徴候であると宣言し、そしてさらに新しく発送せらるべき回答文について、長い相談が行なわれた。
ひどい、ひどい。これはたしかに最もひどいインチキな団体マニアだ。とにもかくにもこんなクラブに加入しなければならないのか?
さらに新加入が話題になった。すなわちわたしをとらえることが問題になったのだ。
そこでわたしは質問しはじめた。――しかし二、三の主旨をのぞいては何もない。綱領もない。ビ

ラもない。一体、印刷物は何もない。党員章もない。そのうえつまらない印ももちろんない。明白なよき信念と、善良な意志があるだけだ。

わたしは笑うことさえできなかった。というのは、これこそすべて、従来の政党、その綱領、その意図、その活動、これらすべての完全に途方にくれた、まったく絶望的な存在の典型的な徴表以外のなにものでもないからではないか？　この数人の若い人々をそこで、外見的にはこんなに笑うべき行為にかりたてているものは、かれらの内心の声の発露だけであった。それがかれらには、もちろん意識的にというよりは感情的に、従来の政党が完全にドイツ国民の高揚のためにも、その内面的な傷を回復させるためにも、適していないように見えたのだ。わたしはいそいでタイプライターで打たれた主旨に目を通した。そしてそこから、わかっているのではなく、模索しているのだ、と見てとった。多くの点がそこではぼんやりしているか、不明瞭(ふめいりょう)で、欠けているところも多かった。だが苦心して認識をえようとしている徴表として通用しうるものは、何もなかった。

これらの人々が感じていることは、わたしにもわかっていた。それは従来のことばの意味での政党より以上のものであるべきある新しい運動へのあこがれであった。

わたしがこの夜ふたたび兵営に帰ったとき、この団体についてのわたしの判断は、すでにできあがっていた。

わたしは、自分の生涯のたしかに最も困難な問題に直面していた。すなわちこれに加入すべきか、あるいは拒絶すべきかである。

理性は拒絶せよと忠告するだけだった。だが感情が、わたしを落ち着かせなかった。そしてわたしがこのクラブ全体の狂気の沙汰を眼前にうかべようとすればするほど、そのたびごとに感情が弁護す

るのだった。
わたしは数日間落ち着けなかった。
わたしはあれこれとよく考えはじめた。政治にかかわることは、すでにずっと前に決心していた。これがある新運動においてのみ起りうるということも、同様にはっきりしていた。ただ実行のきっかけがいままでずっと欠けていただけであった。わたしは今日何かはじめると、明日にはもうやめてしまい、できれば何か新しいことに移行していくという人間ではなかった。だが完全なものになるに違いないか、さもなければご都合次第でやめるというような新党へ加入する決心をすることが、なぜこんなにむずかしかったかというおもな理由は、まったくこの信念にあった。わたしは、これがわたしにとって永久の決心になり、そのさい、もとへということがもはや決してできない、ということを知っていた。だからこれはわたしにとって一時的な戯れではなく、血の出るような真剣なものだった。そのころすでにわたしはいつも、何でもやりはじめて、また何一つとして実行できない人間に対して本能的な嫌悪を感じていた。どこの横丁にもいるこの出しゃばり屋を憎んでいた。こういう人間の活動は、何もしないよりも悪いと思っていた。
いまや運命自体が、わたしに暗示を与えているように思えた。わたしは決して既存の大政党には行かなかったであろう。その理由はあとでもっとくわしく述べよう。この笑うべく小さい創造物は、わたしにはまだ一つの「組織」にかたまっておらず、真の人間的活動の可能性が個々人に許されている長所をもっているように思えた。ここならまだ活動できる、そして運動が小さければ小さいほど、ますます早くその運動を正しい形にすることができるのだ。ここではまだ運動の内容や目標や方法を決めることができた。既存の大政党の場合にはすでにはじめから欠けていたのだが。

わたしが長く考えようとすればするほど、わたしの心の中の確信はますます大きくなってきた。すなわちかかる小さな運動からこそ、いつかは国民の高揚が準備されうるのだ。——しかし非常に古い観念に執着しているか、あるいは新政府の利益のわけまえにあずかっている多くの議会政党からは、決してそれ以上になされることがないのだ、と。というのは、ここで告知されねばならないものは、新しい世界観であって、新しい選挙のスローガンではなかったからだ。

もちろん、この意図を実現に移そうとすることは、きわまりなく困難な決意であった。

**無名のもの**　いったいこの課題のために、わたし自身にどんな予備条件がそなわっているのだろうか？

財産もなく貧しかったことは、まだわたしにはきわめて耐えやすく思えた。だが、もっと困難なことは、わたしがやはり無名の一人、偶然が生かしたりあるいはこの世から呼び戻したりする、しかも最も親しい周囲のものさえもそれと気づくだけの心づかいをしてくれない幾百万のうちの一人であることだった。そのうえ学校へ行っていないことから生ずるに違いない困難が、加わった。

いわゆる「インテリゲンツィア」はもともといつも、義務教育を完全に受けず、そして必要な知識を注ぎこまれていないものをすべて、実にかぎりない見さげた態度で見るものである。あの人間は何ができるかということは決して問題にならず、かえってかれは何を学んだか？　が問題になるのだ。こういう「教育のある人々」には、どんなにひどいノロマでさえも、かれが十分な免状にくるまれておれば、この貴重な紙袋をもっていない最も頭脳明晰な青年よりも通りがよいのだ。わたしは、これらの「教養ある」人々がわたしにどんな態度をとるか、容易に想像できた。そしてそのさいまたわた

しは、その当時人間を、飾り気のない現実において、遺憾ながら大部分、実際以上に買いかぶっていたが、そのかぎり誤っていたのだ。人間はそうしたものであるから、もちろんどこでもそうであるように、例外者がつねに光り輝くのである。しかし、それによってわたしは、いつも永久に学生にとどまっているものと、真にできる人との間を区別することを知ったのである。

**党員番号七番**　二日間、悩みに悩んで沈思熟考したすえに、ついにわたしは一歩を踏み出さねばならないと確信するにいたった。

それはわたしの生涯を決める最も重要な決断であった。

もはや後退はありえず、それは許されぬことであった。

そこでわたしは、ドイツ労働者党の党員として登録し、番号七と記された仮党員証をもらった。(8)

# 第十章　崩壊の原因

なにかある物体が落下した場合、その落下の深さはつねにその物体の最初あった場所から現在の場所までの距離で計られる。民族や国家の没落についても同じことがいえる。したがって、以前の地位、否むしろ高さとでも呼ぶべきものが決定的な意味をもってくる。つねに一般的な限界をこえて高く抜きでるものだけが、またきわだって深く落下し、没落しうる。そこであらゆる思慮のある人々、また感じやすい心をもった人々にとって、ドイツ帝国の崩壊は非常につらく、またひどいものになる。というのもその崩壊は現今、当面している屈辱的な苦境からはもはや想像もできぬほどの高さからの没落だったからである。

すでにドイツ帝国の建国からして、全国民を感激させる事件の奇跡によって、金色に縁どられて輝いていた。一つの帝国が無類の勝利の前進ののち、ついに不朽の英雄的精神の報酬として、子孫のために成立したのである。意識的にせよ、無意識的にせよ、そんなことはまったくどうでもよいが、ドイツ人はだれもが、この国は議会の諸党派のごまかし、ペテンのおかげでもって誕生したのではなく、崇高な建国という生まれからしてもすでに他の国々の標準を越えてそびえ立っていた、といった感情を抱いていた。なぜならドイツ人は諸侯も民衆も、将来一つの国家をつくり、あらたに帝冠をその象徴としてささげようと決心しているのだという意思表明を厳粛に行なったが、その表明はじつに議会の演説戦におけるおしゃべりの中ではなく、パリ包囲戦の最前線での砲声のとどろきの中で挙行され

たからである。それはけっしてだまし討ちによって行なわれたのではなく、ビスマルク国家の建設者は最前線の連隊であって、けっして逃亡兵や徴兵忌避者などではなかったのである。

このような比類のない国家の誕生と、その砲火による洗礼は、それだけでもすでにドイツ帝国を輝かしい歴史的栄光で包んだのである。そうした栄光は最古の国々にだけ——それもまれに——与えられうるものである。

そして、そののちなんという興隆がはじまったことだろう。

海外へ向かっての自由な進出は国内での毎日のパンを保証した。国民は人口の増加とともに、現世の財貨を富ませていった。しかし国家の名誉、そしてそれにともなう全民族の名誉は、旧ドイツ連邦との違いをもっとも明瞭（めいりょう）に示し得た一つの軍隊によって守護され、擁護された。

ドイツ帝国とドイツ民族の遭遇している没落はあまりにも深刻だったので、だれもがめまいを覚えた人のように、さしあたり感覚や意識を失ってしまったかのように見える。人々はもはや以前の高さを思いだすこともできないので、当時の偉大さや輝かしさが、今日の困窮と比較して夢のような、非現実的なことのように見えるのだ。

**崩壊の前兆**　だから人々は、ただあまりにも卓越した面によってまどわされ、そのさい恐ろしい崩壊の前兆を探すのを忘れているということも明らかである。その前兆は、それにもかかわらず、とにかくすでに存在していたに違いなかった。

もちろんそのことは、ドイツを金もうけや、散財のための単なる滞在地より以上のものと考えた人々によってだけ通用することなのだ。なぜなら、そのような人々だけが、今日の状況を崩壊と感じ

ることができるからである。これに反して、他の人々にとっては、この状況はかれらが長い間待ち望みながら、今日まで満たされなかった願望の実現なのである。

だが前兆は、当時明瞭に存在していたのに、ただそれらからなんらかの訓戒を学びとろうと努力した人が非常に少なかったというだけである。

しかし、今日ではこのことは以前にましていっそう必要なのである。

**崩壊の原因**　その病原体が知られていなければ病気を治すことはできないが、政治的な病気の治療についても同じことがいえる。もちろん病気の外面的な形態、つまり目につく現象のほうを、内面的な原因よりもいっそう容易にわれわれは見、発見するものである。このことはじつに、なぜ、非常に多くの人間が外面的な結果を一般的に認識する以上には出ず、そのうえ、それらの結果を原因とまちがえ、さらにもっとも好んでそのような原因の存在をまったく否定しようとさえ努めているのか、といったようなことの理由である。だから今日でも、われわれの大部分は、ドイツの崩壊が主として一般的な経済的窮乏、およびそれから生じた結果だけによるものと考えている。これらの諸結果は、ほとんどすべての人々が個人的に共に負担しなければならないものである――したがって、これらはあらゆる個人にとって破局を理解するためのもっともな理由なのである。しかしながら、大衆は崩壊を政治的、文化的、倫理・道徳的見地から見ることなどはほとんどない。こうした面では感覚も知性もまったく役に立たない人が多い。

大衆がそのようなものであることにはまだ我慢ができる。だが、インテリ仲間においても、ドイツの崩壊が主として「経済的破局」と見なされ、したがってその治療が経済に期待されているというこ

とは、今日まで少しも回復に向かうことができないでいることの原因の一つである。ここでも、経済にはただ第二義的、あるいはまったく第三義的役割しか与えられず、政治的、倫理・道徳的、そしてまた血液的な要素にこそ第一義的役割が与えられることを人々が把握してはじめて今日の不幸の原因が理解され、それゆえまた治療の手段、方法も見いだされうるだろう。

ドイツの崩壊の原因を問うことはしたがって決定的な意味をもつが、敗北の克服を当の目的とするような政治運動にとってはとりわけそうなのである。

しかし、過去のこのような探究においても、より多く目にはいってくる結果を、目になかなかつきにくい原因とまちがえないようにきびしく用心しなければならない。

今日の不幸に関するもっとも容易な、したがってまたもっとも一般化している理由づけは、それは完全な敗戦による結果であり、それゆえにこの敗戦が今日の災害の原因であるという趣旨のものである。

このナンセンスをまじめに信じる人も多く存在するだろうが、しかしそのような理由づけが単なる嘘であり真実でないことを意識しえていて口にするものはもっと多い。意識的な虚偽は今日政権の甘い汁を吸っている人々全体に通用する。なぜなら、この戦争がどのように終ろうが大衆にとってはまったく無関係だということを、以前くり返し熱烈に大衆に向かって訓戒していたのはまさしく革命の布告者たちではなかったろうか？　かれらは逆に、せいぜい「大資本家」だけは、途方もない国家間の闘争が勝利に終ることに関心をもちえても、しかしドイツ国民自体、さもなくばドイツ労働者はけっしてそうはなりえないと、大まじめで保証しなかっただろうか？　それどころかおよそこれら世界調停の使徒たちはまったく反対に、ドイツの敗北によってはただ「軍国主義」が絶滅されるだけであ

り、他方ドイツ国民はみごとな復活を祝うようになるだろうと断言したのではないか？　およそ、これらの仲間の中では連合国の寛容が賞賛され、すべて血なまぐさい闘争の責任はドイツになすりつけられたのではなかったか？　しかしそのことは、軍隊の敗北も国民に対して特別な結果をもたらさずにすむだろうという言明などしなくても、なしえたのではなかったか？　およそ、革命によってドイツ国旗の勝利が阻止されるかも知れないが、しかしそのことによって、ドイツ国民は国内および国外での自由をいよいよ手に入れることになるだろうというきまり文句で、この全革命が飾られていたのではなかろうか？

そうではなかったのか？　なんじらあわれな嘘つきどもよ。

**崩壊の責任者**　いまや、軍隊の敗北に崩壊の罪をきせるのは、もちろん、真にユダヤ的なあつかましさにほかならない。というのは、それにもかかわらず、すべての反逆者の中央機関であるベルリン「フォアヴェルツ」紙は、ドイツ国民は今度こそ、もはや勝利して国旗を故国へもち帰ることはできないだろう！　と書いたからである。

そしていまや、それがわが国の崩壊の理由だなどというつもりなのだろうか？

このような忘れっぽい嘘つきたちと争おうとすることは、もちろんまったく無価値なことだろう。わたしはしたがって、もしもこのナンセンスが残念にも非常にたくさんのまったく無思慮な人間によって、悪意そのものや意識的な嘘からではないにしても、次々にしゃべり散らされるようなことがないとするならば、それについてはまったくむだ口をたたくこともないであろう。さらにまた、これらのわたしの議論はわが啓蒙（けいもう）の闘士のための方策となるように意図されたものであり、それらは、とに

かく語られた言葉がしばしば曲解されがちな時代には非常に必要なものである。

だから敗戦がドイツの崩壊に責任があるという主張に対しては、次のようにいうべきであろう。つまり、確かに敗戦はわれわれの祖国の将来にとって巨大な意味をもった。しかし敗戦は原因ではなく、それ自体またしても諸原因から生じた一結果であるにすぎない。生死をかけた今度の戦いが不幸な結末をつけるならば、非常に破壊的な結果に到達するに違いないということは、まったくあらゆる洞察力があり、しかも悪意のない人々には完全に明白であった。しかし残念なことには、この洞察が適当な時期に欠けているように思われる人間も存在した。あるいは良心に反してこの真理をまず否認し、否定し去る人間も存在した。それらの人々は大部分、自分たちのひそかな願いを満たした後に、かれら自身もひきおこすのを手伝ってしまった破局を、後になってから急に気づいた人々である。しかしかれらこそ崩壊に責任があり、かれらが急に随意にいったり、また知ったりしだしたように、敗戦に責任があるのではない。なぜなら、敗戦はまったくかれらの活動の結果にすぎず、かれらが現在主張せんとしているように「悪い」指揮の結果ではない。敵もまた臆病者から成立っていたのではなく、かれらも死を覚悟していた。敵の数は戦いの第一日からドイツ軍より多かったし、かれらの技術的動員には全世界の兵器廠が用立てられた。四年間の長きにわたって全世界と戦ったドイツの戦勝は、あらゆる英雄的精神と「組織」に支えられながらも卓越した指揮にのみ負うものであった。この事実は、したがって、けっしてこの世から否認し去られることはできない。ドイツ軍の組織と指揮は、この地上で今までに見られた最強のものであった。それらの欠点などは一般的な人間の能力そのものの限界にもとづくものであった。

この軍隊が崩壊したということは、われわれが今日味わっている不幸の原因でなくて、他の犯罪の

結果にすぎなかったが、確かにその結果自身は、ふたたびより後の、今度はだれの目にもはっきりと見える崩壊の端初となった。

そのことが真実であるということは次の事柄から示される。

**民族は敗戦で亡びるか？**　つまり、軍隊の敗北は国民および国家のそのような徹底的壊滅にいたらねばならないものだろうか？　壊滅が戦争に負けた結果であるというのはいつからはじまったことなのか？

いったい、民族は敗戦それ自体によって滅亡するものだろうか？

これらに対してはきわめて簡単に答えることができる。民族が軍事的な敗北によって、自己の内面的な腐敗、臆病、無節操、要するに無資格であることの報いを受けるのであるなら、答えはイエスである。もしそうでなければ、軍事的な敗北はある民族がかつて存在したことの墓碑となるよりも、むしろ未来のより大きな興隆の刺激となるだろう。

歴史はこの主張の正当であることに対して、無限に多くの例証を提供している。

残念なことに、ドイツ国民の軍事的敗北は不当な破局ではなく、永遠的な因果応報による正当な懲戒である。われわれにとって、この敗北は当然すぎるほど当然のことである。敗北は、おそらく明白でありながらもほとんどの人の目につかずにいたり、あるいは人がこわいためにダチョウの流儀にならって、見ようともしなかったような、そういった内面的な堕落現象全体の中でももっとも大きく、しかも外面的なものであるにすぎない。

人々はとにかく、ドイツ民族がこの敗北を迎えた際におこった随伴現象に注目すべきである。多く

か？　しかり、さらに進んでは、ついに前線を浮き足立たせたようなことが自慢されなかったことを喜ぶだろうか？　だが、実際にそのような罰に値する人でなくて、だれがこんなことを喜ぶだろうか？　そしてこのことはおよそ敵によってなされたのではなかっただろうか？　そしてこのことはおよそ敵によってなされたのではなかった。否、否、このような恥をドイツ人は自分で頭からひっかぶったのである！　ドイツ人が不幸にあったのは不当だなどといえようか？　だが、さらに、いつからかれらは引っ返して、戦争の責任はやはりわれわれお互いにあるなどというのか？　しかも、十分承知のうえであり、良心に反してだ！

否、そしていま一度否という。ドイツ民族が敗北を受けとめた態度の中にきわめて明白に見うけられることはわれわれの崩壊の真の原因は、二、三の陣地での純粋に軍事的な失敗や攻撃の不成功などとはまったく違ったところに求めなければならない、ということである。なぜなら実際に戦線そのものがうまくいかなくて、その戦線の失敗によって祖国の災難がもたらされたのであれば、ドイツ民族はきっと敗北をまったく違ったふうに受けとったであろう。そしてもしそうであれば、人々はそれ以来生じている不幸を歯を食いしばって耐えたか、あるいは苦悩に打ちひしがれて嘆いたことだろう。またそれならば偶然のいたずら、あるいは運命の意志によって勝利者となった敵に対して、激しい憤激が心に満ちただろう。さらにまた、国民はローマ元老院と同じように、いままでの犠牲に対する祖国の感謝の念、および国家に絶望しないようにとの願いをこめて、打ちひしがれた軍団を迎えたに違いない。そして降服条約すらも知性の力によってのみ署名されたにすぎず、他方心臓はすでに将来の反抗を夢見て高鳴っていたはずである。

「三人に一人のドイツ人は反逆者」　ただ運命にだけ返礼すべきものである敗北は、以上のように受け入れられるべきだったろう。その場合には、人々が笑ったり、踊ったりはしなかっただろう。また臆病を自慢したり、敗北をたたえたりはしなかったであろうし、戦っている部隊を侮辱したり、軍旗や帽章をどろで汚なくすることもしなかったに違いない。だがなによりもまず、一人の英国士官レピングトン大佐に、「ドイツ人の三人に一人は反逆者である」といった軽蔑的な言葉をいわせたような、驚くべき現象は起らなかったに相違ない。否、こうしたペストが、五年このかた他の国々からわれわれに対して与えられていた尊敬を根こそぎ溺死させた、あの致命的洪水にまではんらんすることはけっしてなかっただろう。

敗戦がドイツの崩壊の原因であるなどという主張が嘘であることは、以上の点からきわめてはっきりと知ることができる。否、この軍事的崩壊はそれ自体、すでに平和な時代からドイツ国民をおそっていた病状と、病原体の全体から生じた結果にすぎなかった。これは倫理的、道徳的中毒および自己保存衝動の衰弱から生じ、そしてまたすでに多年にわたって国民と国家の基礎をくつがえしはじめていたそれら中毒や衰弱の諸前提条件から生じた、だれの目にも明らかな最初の破局的結果であった。

危険な弾劾者の道徳的武装解除　しかしユダヤ人およびかれらのマルクス主義的闘争組織のすべて底の知れぬ嘘は、ほかならぬただひとり超人的な意志力と実行力でもって、自己に予見できた破局を防ぎ、国民をどん底の屈辱と不名誉の時代から免れさせようと努力した男に、崩壊の責任を負わせたのである。かれらは、ルーデンドルフが世界大戦の敗北に責任があると極印を押すことによって祖国の反逆者に対抗して立ち上りうる唯一の危険な弾劾者の手から、道徳的正義という武器を取り上げ

つまり嘘が大きければ信じてもらえる、というのはまったく正しい原則であり、それがつねに信じてもらえる一定の要素をもっている。なぜなら国民大衆の心は本質的に、故意に悪人になるというよりも、むしろ他から容易に堕落させられるものであり、したがって、意識してしまったのである。かれらはその際、まったく正しい原則、つまり嘘が大きければ信じてもらえる

てしまったのである。かれらはその際、まったく正しい原則、つまり嘘が大きければ信じてもらえる一定の要素がつねに存在するという原則、から出発した。なぜなら国民大衆の心は本質的に、意識して、故意に悪人になるというよりも、むしろ他から容易に堕落させられるものであり、したがって、かれらの心情の単純な愚鈍さからして、小さな嘘よりも大きな嘘の犠牲となりやすいからである。というのは、かれら自身、もちろんしばしば小さな嘘をつくのだが、しかし大きな嘘をつくのはなにしろあまりにも気恥ずかしく感じてしまうからである。そのような大きな嘘はかれらの頭にはとてもはいり込めないし、したがって不名誉きわまる歪曲をするような、まったく途方もない厚かましさは他人の場合でも可能だなどと信じえないだろう。それどころか、このことについて説明を受けてさえも、なお長く疑いつづけ、動揺するだろうし、そして少なくとも、なにか一つくらいの理由はやはり真実だと受け取るだろう。したがって、実際きわめてずうずうしい嘘からは、つねになおなにかあるものが残り、続いていくだろう。――以上は、この世のあらゆる大嘘つきや、大嘘つき団体が底の底まで知っており、したがって卑劣にも利用している事実なのである。

しかし嘘と、真相の否認が利用されうる可能性についての、この真理をもっともよく知っているものは、どの時代でもユダヤ人であった。なにしろ、かれらの全存在がすでに比類のない大きな嘘の上に建てられているからである。すなわち、その嘘とは、一つの人種――しかも何という人種であることだろうか――がそもそも問題であるはずだのに、かれらの間では一つの宗教団体が問題だと主張される点である。だが人類のもっとも偉大な精神の所有者の一人により、根本的な真理を表わす、永遠に妥当する格言でもって、かれらが永遠にそのようなものであると確認された。その人[1]は、かれらを「嘘の大名人」と呼んだ。この点を認識し、あるいは信じようとしないものは、この世で真理を勝利

させるように、助力することはけっしてできないであろう。

**破局は潜行性疾病よりはよい**　ドイツ民族にとって、潜行性疾病の期間が突然このように恐ろしい破局によって縮められたということは、おそらく、大変幸福なことだったと考えてよい。なぜならそうでなかった場合には、国民はおそらくゆるやかではあるが、だがそれだけより確実に滅亡したであろう。病気は、あるいは慢性になったかも知れなかったのに、しかし崩壊という急性の形式をとることになって、少なくともより多数の民衆の目に明瞭(めいりょう)に認められることとなった。人間が結核よりもペストのほうを容易に支配できたのは偶然ではなかった。一方は恐るべき、人類の眠りをさます死の波浪となってやってくるが、他方はゆっくりと潜行的にやってくる。一方は途方もない恐怖を起させるが、他方は次第に冷淡にさせる。しかしその結果として、人間は一方に対しては少しの容赦もなく精力を傾けて当ったが、他方では結核を弱体な手段でくいとめようと努めているのだ。したがって、人間はペストを支配したが、結核にはみずからが支配されている。

民族体の疾病についてもまったく同じ関係にある。それが破局的に出現しない場合には、人間は次第にそれに慣れてしまい、ついには、そのためにかなりの時が経ってからではあるが、なおそれだけいっそう確実に滅亡する。したがって、運命がこの緩慢な腐敗過程に干渉して、突然の打撃でもって病気の結末を病人の目前にもたらすように決意するならば――もちろんいたましくはあるが――まったく幸福なことである。というのも、そのような破局が以上のように終ることが一度ならずあるからである。破局はそのような場合、いまやぎりぎりの決意によってはじめられる徹底的な治療の原因となりやすい。

**病原体と病状**　しかしそのような場合にも、なおその前提条件として、問題となっている疾病の誘因となった内面的な原因の認識がまた必要である。

一番大切なことは、ここでもまた病原体を、それによってひきおこされた病状から、区別することである。この区別は、民族体内に病毒が長く存在すればするほど、そしてこれが民族体にとってすでに自明な属性になっていればいるほど、それだけいっそう困難となるだろう。なぜなら、人々は一定の期間が過ぎてしまうと、文句なしに有害である毒物を自己の民族性の構成要素と見なしてしまうか、あるいはせいぜい必要悪として甘受するようになり、その結果、未知の病原体の探究がもはや必要だとまったく考えなくなってしまうことが、きわめて容易に起りうるからである。

そのようにして、戦前の長い平和な時代にはある疾患がひじょうによく現われていたし、しかも疾患として認識されていたのだ。しかしながら、人々はその病原体については、若干の例外を除いてはほとんど気にしなかった。この例外というのは、ここでもまた、主として経済生活の現象のことであった。これらの経済現象は個々人にとって、他の全領域に現われるような疾患よりもいっそう強く意識された。

真剣な熟慮を行なわなければならないような多くの没落の徴候が存在していた。

＊

**戦前ドイツの没落の徴候**　経済に関しては、さらになお、次のことがいわれなければならないだろう。

すなわち、戦前のドイツの人口のはなはだしい増加によって、必要な日々のパンを生み出す問題は

ますます切実さを増し、あらゆる政治的経済的な思考と行動の中に重きをなしてきた。残念ながら、人々は唯一の正しい解決に乗り出す決心がつかず、より安易な方法で目的を達することもできると信じた。新しい領土の獲得をあきらめ、それを世界経済の征服という妄想でもって埋め合わそうとしたことは、結局、際限のない、そして不利でもある工業化に進まなければならなかった。

重大な意味をもった第一の結果は、工業化のために農民階級が弱体となったことであった。農民階級が衰えるのと比例して、大都市のプロレタリアート大衆がますます増加し、ついには、均衡が完全に失われてしまったのである。

いまや、貧乏と富裕の激しい変動もかなり目立ってきた。過剰と貧困が相互に隣り合って生活していたので、その結果は非常に痛ましいものがありえたし、またかならずそうならざるをえなかった。困窮とひんぱんな失業は人間をもてあそびはじめ、そして警告として不満と憎悪を残したのである。その結果は政治的な階級分裂であるように思われた。あらゆる経済の繁栄にあっても、それでもなお不満はますます大きくまた深くなり、ついに「もはやこれ以上やってゆかれないだろう」という信念が一般化するまでに、その不満は広まったのである。しかし人々は、なにが起ったらよいのか、ということについて確固とした考えをもたなかったし、またもつことすらできなかったのである。

以上のような姿をとって現われようとしていた、深刻な不満の典型的徴候が存在した。

**貨幣の支配**　だが国民の商業化がもたらしたその他の結果現象は、それよりもいっそう悪かった。経済が国家の決定的な支配者の地位にのぼるのにきっちり応じて、貨幣は神となり、あらゆるものはこれに奉仕し、だれもがこの前に屈服しなければならなかった。天上の神々はますます時代遅れで、

すたれたものとなり、隅の方へしまわれてしまい、代りにマンモン[2]の偶像に香がたかれた。まことに困った堕落がはじまった。国民にとって、他のどの時代にもまして危機の襲来が予想され、極度の英雄的信念が必要である、そんな時代に堕落がはじまったのだから、とくに困ったものであった。ドイツは「平和的、経済的な労働」の道を歩んで日々のパンを確保する努力を、いつかは武力でもって擁護する覚悟をしなければならなかった。

貨幣の支配は残念ながら、それに対してもっとも反対すべきだった地位からも裁下された。つまり、ドイツ皇帝はとくに貴族を新しい金融資本の勢力範囲に引き入れたのであるが、このことはうまくゆかなかった。ビスマルクさえも残念ながらこの点について、さし迫った危険を認識しなかったことを、皇帝のためにもちろん考慮してやらなければならない。しかしそれとともに、精神的な美徳が実際上貨幣の価値の陰にかくれてしまった。なぜなら、そんな道をまず選んだのであるから、剣の貴族がもうわずかのまに金融貴族の陰にひっ込まなければならなくなったのは明らかなことだったからである。貨幣の操作・作戦のほうが戦闘よりも成功は容易である。したがって真の英雄やあるいは政治家にとっても、手近かのユダヤ人の銀行家と取り引きさせられるのはもう興味のないことであった。真に功績ある男は安っぽい勲章授与などにはもはや関心をもてず、自分には辞退したのである。しかし、このような事件の展開は、純粋に血液的な面で考えてみても深く悲しむべきものであった。貴族はますます彼の生まれの人種的前提を失い、大部分はむしろ「卑族」とでも呼ばれたほうがずっと似合うほどになった。

個人の所有権が徐々に排除され、株式会社の所有に全経済が次第に移行したことは、重大な経済的没落現象であった。

**株式の国際化**　だから、まず労働が良心のない不正商人の投機の対象に下落したのも大変もっともなことであった。雇人からの所有物の取り上げ・疎外は無際限に強められた。取引所は凱歌をあげはじめ、そしてゆっくりとではあるが確実に、国民生活をかれらの監視と管理の下におこうと準備したのである。

ドイツ経済の国際化は、すでに戦前において、株式という間接的なやり方で準備されていた。もちろん、一部のドイツ産業は、なお断固としてそのような運命から身を守ろうと努力した。しかしかれらも結局、この戦いをとくにもっとも忠実な仲間であるマルクス主義運動の助力によって戦い抜いた、貪欲な金融資本の集中攻撃の犠牲となって倒れた。

ドイツ「重工業」に対する永続的闘争は、マルクシズムによって追求された、ドイツ経済の国際化の明白な発端であった。もちろん、ドイツ経済は革命におけるマルクシズムの勝利によって、はじめて完全に没落させられえたのである。わたしがこれを書き下している最中に、ついにドイツ国鉄に対する総攻撃も成功してしまい、国鉄はいまや国際金融資本の手に譲渡されたのである。「国際的」社会民主主義はこれによって、またもやその最高目標の一つに到達したのだ。

ドイツ国民のこのような「エコノミック・アニマル化」がどれほど成功したかは、ついに戦後ドイツ産業のとりわけ商業の指導的地位にある一人が、ドイツを復興させる役割を果しうるものはただ経済そのものである、という見解を公にしえた点から見ても、きわめて明白であるだろう。このナンセンスは、フランスが学校教育を、第一に、再び人文主義的基礎の上におき、それによって国民および国家が存続するのはいわば経済のお陰であり、永遠的、理想的な諸価値によるものではない、という

思い違いを予防しようとした、そんな時期に話し出されたのである。当時シュティネス[3]という男が発表したこの意見は、まったく信じられぬほどの混乱を引き起した。なにしろその意見はたちまち、わっととびつかれて、いまや驚くほどの速度で、運命が革命後ドイツ国中に「政治家」として解放した、やぶ医者やおしゃべり連中の中心的思想となったからである。

＊

**中途半端——教育の欠陥**　最悪の堕落現象の一つとして、戦前のドイツには、いたるところにますます広がりつつあった、すべての問題に対する中途半端があった。それはつねに、なにかの問題についての自己の不確かさの結果であり、さまざまの理由から出てくる臆病の結果である。この病気は、なおいっそう教育によって助長された。

戦前のドイツ教育は非常に多くの弱点をもっていた。それはきわめて一面的な仕方で、純粋な「知識」を教え込む目的で編成され、そして「能力」が目標となることは少なかった。個々人の性格形成——このことが一般に可能な限り——はよりいっそう軽く見られ、喜んで責任を引き受ける気持ちを奨励することなどはまったく少なかったし、意志と決断力のための教育などは全然なかった。その教育結果は実際に、強い人間ではなく、むしろ従順な「物知り」となって現われた。われわれドイツ人は戦前、たしかにそのような人間として一般に通用したし、またそのため尊重されもした。非常によく役立つところからドイツ人は愛されたが、しかしまさに意志が弱いということのために、ほとんど尊敬されなかった。まさしく、ドイツ人がほとんどすべての民族の中でも、もっとも容易に国民性と祖国を失ったのも理由のないことではない。「腰を低くすれば、どこでも通って行ける」という、りっぱなことわざがすべてを語っているのだ。

## 君主政治の墓掘人④

だが、この従順さがそれによって君主と交渉を持つことが許されていた唯一の形式をも制約してしまったとき、まさにそれは不幸なものとなった。その形式は、このことに応じて、皇帝陛下がかしこくも望み給うものを、否認することなく、なにごともすべて是認するよう要求した。しかし、ほかならぬこの形式のかわりに、自由な男子の体面こそがもっとも必要なものであった。さもなければ、君主制度はいつの日にか、こうした追従によって滅亡すべき運命であった。なにしろ、あるものは追従ばかりで、それ以外のなにものも存在しなかった！　そしてただみじめな追従家や、はいつくばり屋、要するに、古来、誠実でまじめな尊敬すべき人間にくらべて、至高な玉座のそばをより居心地よく感じたような、あらゆる退廃した人間だけが、この追従をば王冠の所有者とまじわるための自分達に与えられた唯一の形式だとみなしうるのだ。この「きわめて行儀よい」お気に入り達は、まったくのところ、支配者や雇主の前ではひじょうに従順であるのに、他の人間に対してはすでに昔から極度に厚かましくふるまっていたのである。そしてかれらが厚顔にも自分以外の同罪者たちに向かって、自分一人だけが「君主主義者」だと好んで名乗る場合、それは最高となる。貴族の紋様があろうとなかろうと、回虫どもにしかやれぬようなそれはじつに恥知らずの行ないだ！　なぜなら事実、このような人間は相変らず君主政治の、そしてとくに君主政治を擁護する思想の、墓掘人であるからである。これはまったく、それ以外に考えようもない。一つの事柄を断固として擁護しようとする男はけっして卑屈な人間だとか、主義のない追従家ではないだろうし、またそのようにはありえない。一つの制度を維持し、促進することに本当に真剣である人は、全身全霊をこめてそれに打ち込むだろうし、その中になにか欠陥が存在した場合、おそらくそれを許すことはできないだろう。

かれはそのさい、もちろん、君主政治の民主主義的な「友人」がまったく嘘っぱちなやり方でそうしたように、白昼わめき回るようなことはしないだろう。そしてきっと、皇帝、つまり王冠の所有者その人にきわめて真剣に警告し、決心させるよう努力するだろう。そのさい、自己の意志に従って行為することが、あきらかに破滅に導くに違いないし、また導くだろうときでもなお、それをすることは皇帝の自由であるというような、そんな見地にかれは立たないだろうし、また立つこともできないだろう。かれはそのような場合、君主政治を君主から擁護しなければならないだろうし、しかもどんな危険を冒してもそうしなければならぬだろう。その時々の君主の人格の中に、この制度の価値が存在していると考えなければならぬとしたら、これはおよそ考えられうる制度の中でも最悪のものであるだろう。なぜなら、君主達はごくまれにしか、より抜きの優秀な知恵と理性あるいは性格をもたぬからなのである。しかし、人々はこうした抜群さを設定するのを好むと言ってよいだろう。だが、その人々——結局のところこのような人こそ国家にとってもっとも価値があるのだが——はすべてそのようなことはただ職業的な追従家とはいつくばり屋だけが信ずるのであり、それに反して、誠実なようなナンセンスを弁護することには、ただ反発を覚えるだけであろう。かれらにとっては、たとえそのさい、君主が問題になっていようとも、まさしく歴史は歴史であり、真実は真実である。否、偉大な人間であるような、偉大な君主をいただくという幸福は国民にとってきわめてまれにしか与えられない。それゆえ、国民は運命の悪意が少なくとも最悪の過失を思い止まったならば、それだけでも満足しなければならない。

**君主政治的理念**　だから、神が王冠をフリードリッヒ大王のような天才的英雄だとか、ヴィルへ

ルム一世のような賢明な人物の頭にのせるように決意した場合の外は、君主政治の理念がもつ価値や意味が、君主の人格そのもののうちに存在することはありえない。こうしたことは数百年に一度現われるものであり、けっしてひんぱんに生じるものではない。だがしかし、この場合、理念が人物に先立つ。というのもいまやこの組織の意味はもっぱら制度それ自体になければならぬからである。けれども、そのことによって、君主自身が服従する仲間に落ち込むのである。かれもいまや、この機械の一つの歯車にすぎなくなり、歯車として機械に拘束される。かれはまたいまや、より高い目的に服従しなければならない。その場合もはや黙ったままでいることによって、王冠の所有者に王冠を傷つけるようなことをさせる人ではなく、それを阻止する人こそ、「君主主義者」なのである。理念のうちに意味があるのではなく、「神聖な」個人のうちに意味があるのだと是が非でも信じこもうとするならば、精神病でもあることが明らかな王侯の廃位を企てることもけっして許されないであろう。

**君主政治の「戦士」**　今日ではもはやこうした意味づけをやめることが必要である。なにしろ少なからずそのあさましい態度に君主政治の崩壊の原因がある亡霊どもが、最近になってますます昔の顔をのぞかせてきている。一種の愚直な厚顔さでもって、いまやふたたびこれらの連中は「自分達の王様」についていっそうさかんに論じだすのであり――だがなんといってもほんの数年前、かれらは危機にさいして、その王様をまったくなさけなくも見殺しにしたのだった――そしてかれらの嘘っぱちの長広舌に賛同しようとしないすべての人々を、悪いドイツ人であると主張しはじめる。しかし実際には、これらの亡霊どもは、一九一八年に、赤腕章[5]をみるや、てんでに逃げだし、かれらの王様をほったらかしにし、あわてて、ほこやりを散歩用ステッキと取り替え、色あせたネクタイをしめ、そ

して平和な「市民」となって跡さえも残さず姿を消した臆病者とまったく同一人なのだ！　これら王の勇士は当時突然消えてしまったが、革命の嵐が他の人々の活躍のおかげで治まり、ふたたび「国王バンザイ、バンザイ」が大空に高く叫ばれうるようになった後、ようやくこの王冠の「奉仕者および顧問官」は用心深く再び姿を現わしはじめた。しかしいまや、かれらはすべて顔を揃えており、エジプトの饗宴[6]にまたもやあこがれの眼を注いでおり、忠誠心や功名心に燃えざるをえないが、それもおそらくいつかふたたび最初の赤腕章が姿をみせはじめるまでのことであり、ねこの前のねずみのように、旧君主政の利益にあずかっている亡霊はすべてまたも逃げ去るのだ！

君主達がこのようなことに、自身責任がないとすれば、かれらは、今日のかれらの擁護者達のせいだとして、人々によって心から残念がられうるに違いない。だが、君主はいずれにしても、こんな騎士連中の手では、おそらく自分の王座を失うことになろうとも、だがかれらが王冠のために戦ってくれることはない、と確信してよい。

だが、このような追従は、われわれの全教育の欠陥であり、そしてその欠陥はいまやこの地位に対して、とくに恐ろしい方法で復讐(ふくしゅう)した。なぜなら追従によって、これらのみじめな亡霊はあらゆる宮廷にくっついていることができ、そして君主政の基礎を次第に掘り崩すことができたからである。そののち建物がついにゆり動かされたとき、亡霊は吹き消されたように見えた。もちろん、追従家やおべっか使いはかれらの主人のために自分を犠牲にしはしない。君主達がこの事情をけっして知ることなく、ほとんど根本的に学ぼうともしないことが、古来かれらの滅亡の原因となっているのである。

＊

**責任に対する臆病さ**　間違った教育の一つの結果現象は責任に対する臆病さと、それから生じて

くるところの、重大な問題の処理そのものに現われる意志の弱さであった。

われわれのこの悪疫の根源はまったくのところその大部分が、無責任がまさに純粋培養で繁殖させられている議会制度にある。残念にも、この病気はゆっくりとではあるが、その他の生活全般にも伝染し、政治生活がもっとも強く冒された。人々は一般に責任を回避しはじめ、このような理由から中途半端な方法がもっとも好んで採用された。なにしろ、そうした方法を使用すれば、個人で負わなければならない責任者の限度を、つねに最少の範囲に止めておくことができると思われたからである。

人々は、わが国の社会生活に現われている、じつに有害な一連の現象に対する個々の政府の態度だけでも見るならば、容易に、この一般的な中途半端と責任に対する臆病さとがもつ恐るべき意味を理解するだろう。

わたしは無数に存在する例から、ただ二、三の場合だけをとりだしてみよう。

**三つの新聞読者グループ**　すなわち、ほかならぬジャーナリストの仲間の中では、新聞を国家の中での「国家」と好んで表現する習慣がある。事実、新聞の意味はなんといっても、じつに巨大なものである。新聞は一般的にいって、いくら高く評価しても過大評価されるということはありえない。なにしろそれは現実に、相当の年輩になった人々に対し、教育の延長という働きをするからである。

新聞の読者はその際、一般に三つのグループに分類されうる。

すなわち、第一は読んだものを全部信じる人々、

第二はもはやまったく信じない人々、

第三は読んだものを批判的に吟味し、その後で判定する頭脳をもつ人々、である。

第一のグループは数字の上からは、けたはずれの最大グループである。かれらは大衆からなっており、したがって国民の中では精神的にもっとも単純な部分を表わしている。しかしかれらを職業でもって示すことはできず、せいぜい一般的な知的程度で示すことができるだけである。自分で考えるだけの素質もなければ、またそのような教育も受けていない人々は、みなこのグループにはいる。そしてかれらは半ば無能から、半ば無知から白地に黒く印刷して提供されたものを全部信じる。さらに、たしかに自分の頭で考えることもできようが、それにもかかわらず、考えることの単なる無精さから、他人はきっと正しく頭を働かしたに違いなかろう、とつつましく仮定して、その他人がすでに考えたことをありがたく全部そのまままもらってしまうような、無精者もまたこのグループにはいる。ところで、大衆を意味するこれらすべての人々にとって、新聞の影響はまったく驚くべきものであるだろう。かれらは提供されたものを自分で吟味する境遇にもないし、またそんな意志もないので、あらゆる時事問題に対するかれらの一般的態度というものは、ほとんど例外なく他からの外的影響に還元できるのである。このことは、かれらの啓蒙が、真剣で真理を愛する方面から企てられるならば有利であるだろうが、しかし人間のくずや、嘘つきがこれに手を出す場合には害悪となる。

第二のグループは数ではまったく決定的に少なくなる。かれらの一部は、最初は第一のグループにはいっていたが、長い間の苦い幻滅を経験した後いまや反対側に移って、ただ印刷されて目に映るものならばなんでも、もはや全然信じなくなってしまった分子から構成されている。かれらは新聞という新聞を憎み、およそ読まないか、あるいは、その内容がかれらの意見からすれば、まったく嘘と、事実でないことだけで構成されているにすぎないのだから、例外なしに、そうした内容に憤慨するかである。なにしろ真実に対してもつねに疑ってかかるだろうから。これらの人々はきわめて取扱いが

むずかしい。かれらはそれゆえ、あらゆる積極的な仕事に対してはだめな人間である。

最後に第三のグループはけたはずれて最少のグループである。かれらは生まれつきの素質と教育によって自分で考えることを教えられ、あらゆることについてかれ自身の判断を形成することに努力し、また読んだものはすべてきわめて根本的にもう一度自己の吟味にかけて、その先の結論を引きだすような、精神的にじつに洗練された頭脳をもった人々からなり立つ。かれらはいつでも、自分の頭をたえず働かせながらでなければ新聞を読まないだろう。だから、編集者の立場は容易ではない。ジャーナリストはこのような読者を実際括弧つきでしか愛しはしない。

この第三のグループに属する人々にとっては、新聞がでっち上げうるナンセンスもほとんど危険がないか、あるいは意味があるとさえも考えられる。とにかく、かれらはたいてい生活の過程の中で、ジャーナリストなどは通例として、真実をただたび語るにすぎない詐欺師とみなすことに慣れてしまっている。しかし残念なことは、このようなすぐれた人間の価値が、まさにかれらの知能にだけあるにすぎず、その数にはないことである。――このことは賢明であることに意味がなく、多数がすべてであるような時代における不幸なのだ。大衆の投票用紙があらゆることに判決を下す今日では、決定的な価値はまったく最大多数グループにある。そしてこれこそ第一のグループ、つまり愚鈍な人々、あるいは軽信者の群集なのである。

**国家と新聞**　これらの人々がより低劣な、より無知な、あるいはまったく悪意のある教育者の手に落ちるのを妨げることは、もっとも重要な国家、および国民の利益である。国家はしたがってかれらの教育を監視し、あらゆる不正を阻止する義務をもつ。国家はそのさい、とくに新聞を監視しなけ

ればならない。なぜなら、新聞の影響は、それが一時的ではなく継続して与えられるから、これらの人間にきわめて強烈でしかも効果的であるのだ。こうした教育が変わらぬ調子で、永遠にくり返されることの中に、新聞のもつまったく比類のない意味がある。したがって、もしどこにというならば、まさしくこの点で、あらゆる手段は一つの目的に役立たせなければならない、ということを国家は忘れてはならないのである。国家はいわゆる「新聞の自由」という、たわいもない嘘に迷わされてその義務を怠り、国民に必要であり、また有益である精神の糧を与えることができないように、いいくるめられてはならない。国家は断固とした決意で民衆教育のこの手段を確保し、それを国家と国民の役に立たせなければならない。

しかし、戦前のドイツの新聞はどのような糧を人々に与えたろうか。それは想像しうる限りでも、もっとも邪悪な毒物であったのではないだろうか？　われわれ国民の心に、他の国々がドイツを徐々にではあるがしかし確実に押えつけようとすでに着手している時期に、最悪の平和主義が植えつけられたのでなかっただろうか？　この新聞は平和な時代からすでに国民の頭に自国の権利についての疑念を流し込んで、その結果、最初から国民の防衛手段を選択する権利に制限を加えたのであった。「西欧民主主義」のナンセンスをわれわれ民族の口に合うように料理することに通じていたので、ついには、国民があらゆる熱烈な長広舌にとらわれてしまい、自分達の将来は国際連盟に任せてよいとまで信じこむようになったのも、このドイツ新聞のせいではなかったか？　わが民族をみじめな風紀退廃へと訓育するのに、新聞は協力しなかっただろうか？　道徳や風紀は新聞によって笑いものにされ、時代遅れで、偏狭固陋なものと説明されなかっただろうか？　その結果、ついにわが民族も「現代風」になってしまったのである。新聞は不断の攻撃によって国家の権威の基礎を、ついにこの建造

物が崩壊するにはただの一押しで十分であるというところまで、掘り崩しはしなかっただろうか？新聞はかつて、国家のものは国家に与えよう、というすべての人々の意志に反対して、あらゆる手段を使って戦わなかっただろうか？　またさらに、不断の批判によって軍隊を非難したり、一般的な兵役義務を妨害したり、または軍事債を人々に拒否するよう勧告したり等々して、ついに、その結果がもはや起らないではすまされないようにまでしなかっただろうか？

いわゆる自由主義的新聞の活動はドイツ民族とドイツ帝国の墓掘人夫の仕事であった。マルクシズムの嘘っぱちな新聞については、このさいまったく触れる必要はないだろう。かれらにとって嘘は、ねこにとってのねずみとまったく同じで、生存に欠くことのできないものである。なにしろかれらの課題はただ、民族のもつ民族的、国家的バックボーンを折りくだき、それによって国際資本と、その支配者であるユダヤ人の奴隷的束縛に国民を十分慣らすことであったからである。

**ユダヤ人の新聞戦術**　しかし、この国民の大量毒殺に対して国家はなにを企てただろうか？　なにも、正真正銘まったくなにもしなかったのである。二、三の笑うべき訓令と、あまりにもひどい破廉恥に対する二、三の処罰、それでおしまいだった。だが、この代りに、おべっかを使ったり、新聞の「価値」、「意味」、「教育的使命」、それに似た愚にもつかぬことをもっともっと称賛したりして、この悪疫に好意をもってもらおうと望んだのだ。――ユダヤ人はしかし、ずるく作り笑いを浮かべながらそれらの称賛を受け入れ、狡猾（こうかつ）に感謝して、これに答えた。

だが、国家のこのような恥ずべき手控えの理由は、危険を認識しなかったことにあるのではなく、むしろ天罰が当ってほしいくらいの臆病さと、それから生じるすべてに中途半端な決断、および処置

にあった。だれにも断固とした徹底的な手段を使用する勇気がなく、ここでも他の場合と同じように、ほんとうに中途半端な計画でもってちょっと試してみただけであり、心臓を一突きにするかわりに、せいぜいのところまむしのような連中を怒らせただけである。——それだから、すべては昔のままに止まっているだけでなく、逆に、克服されねばならない諸制度のもっている力が年ごとに増してゆくという結果になった。

国民を次第に堕落させてゆく、主としてユダヤ系の新聞に対する当時のドイツ政府の防衛戦は、すべてまっとうに行なわれず、決断もなく、しかも、なによりもまず一つとして明白な目標をもたなかったのだ。ここでは枢密顧問官的な知性は完全に役に立たず、この戦いの意味の評価においても、手段の選択と明確な計画の決定においても、同じように無能だった。無計画にあれこれと素人療治をしては、あまりにもひどくかまれた折には、時々そのような新聞社のまむしを二、三週間、あるいは二、三か月間拘禁したが、その蛇の巣そのものは丁重にそっとしておいたのである。

もちろん——部分的には、これもまた、一面でユダヤ人のこの上もなくずるい戦術の結果であるとともに、他面ではじつに枢密顧問官的な愚鈍さ、あるいは無邪気さの結果であったのだ。ユダヤ人はまったく賢明だったので、自分の全新聞を一様に攻撃させるようなことはけっしてしなかった。否、その新聞の一部は他をかばうために存在したのだった。マルクス主義的新聞が、人間にとって神聖でありうるようなあらゆるものに対して、もっとも野卑なやり方で出兵し、国家と政府をもっとも下劣なやり方で攻撃したり、民衆の大部分を相互にけしかけたりしたのに対して、他方ブルジョア民主主義的ユダヤ新聞は、評判のよい客観性の外観で身を包むことを心得ており、またすべて頭のからっぽな人間は外面だけからしか判断できず、内面にはいり込む能力をもたぬことを十分に知っているので、

すべて無遠慮な言葉を使うことは綿密すぎるくらい慎んだ。そこでこのような人々にとって、事物の価値がその内容からでなく、外面によって測られることとなり、また、この人間的弱点のおかげでかれらにも入念な顧慮が払われるのである。

**「上品な」新聞**　「フランクフルター・ツァイトゥング」紙は、これらの人々にとってあらゆる上品さの権化であったし、もちろんいまもそうである。なにしろ、この新聞はけっして粗野な表現を使用しないし、あらゆる肉体的な野蛮さを退けて、つねに「精神的」武器による闘争に訴える。奇妙なことにこの精神的闘争こそ、ほかならぬもっとも精神に欠けている愚かな人々が一番深く心にかけているものである。これは人間を自然の本能から切り離し、われわれの中途半端な教養の結果である。なぜなら、そのような認識に達するためには、勤勉と十分な意欲だけではなんの効果もなく、それに必要な知性、それも生まれつきの知性がなければならないからである。究極的認識は、つねに本能の根源を理解するということである。――つまり人間はけっして、――中途半端な教養による自負心が簡単に取りはからってくれるように――実際に自然の支配者、主人に昇進したと信じ込むような、そんな妄想にふけることを許されないのである。それとは反対に、かれは自然が支配しているという根本的必然性を理解し、また、上方を目指す永遠の闘争や格闘のこの自然法則に、かれの存在もまたどれほどきびしく屈服させられているかということを把握しなければならない。そうすれば、遊星が太陽の回りを回っており、月が遊星の回りを動いている世界では――、そこでは、つねに力だけが弱者を支配するものであり、そして弱者を従順な召使になるように強いたり打ち砕いてしまう――人間にとって特別な法則が通用

しえないということを感じるだろう。人間にとっても、この究極的知恵・神の永遠の根本法則が支配する。かれがその法則をとらえるように努力することはできるが、けっしてその法則から解放されることはできないのである。

ところが、ユダヤ人はまさしく精神的には売春婦のようなドイツ人の社会に向かって、いわゆるインテリ新聞を書いているのだ。そのような社会の人々のためにこそ、「フランクフルター・ツァイトゥング」紙や「ベルリナー・ターゲブラット」紙は発行されたのであり、かれらに語調は合わされ、その影響もかれらに対して加えられているのである。それらの新聞は見たところ、皮相で粗野な形式をきわめて注意深く避けながら、それにもかかわらず他の容器から読者の心の中に毒物を流し込んでいる。美しい語調や、いい回しでもって下らぬおしゃべりをしながら、それら新聞は読者に、あたかも純粋な学問と道徳がかれらの行為の原動力であるかのように信じこませているのだ。ところが、真実のところは、このようなやり方で、新聞一般に向けられる武器を敵対者から取り上げようとする、天才的な、そしてまた狡猾な手くだであるにすぎない。なぜなら、一方の新聞があふれるばかりの上品さをもっているので、愚鈍な人々はみな、それをますます信じてしまって、他の新聞では、ただ軽い弊害がおきているだけだと思い込むのだ。そしてこれは、けっして新聞の自由に害を与えるまで進みえないとされる。――この罰せられることのない国民欺瞞と国民中毒化の不正を、人々は、新聞の自由と呼んでいる。したがって、人々は、この暗殺的行為に対して断固たる手段を取ることをためらうが、実際、かれらがそのようなことをすれば、すぐにも「上品な」新聞を自分の敵に回すようになることを恐れなければならないのであり、その恐れも十分理由を有するのだ。なにしろ、これらの悪徳新聞の一つに断固たる手段をとろうと試みるが早いか、ただちに、他のすべての新聞がそちらに味

方するだろうからである。けっして闘争のやり方を是認するためではない、とんでもないことだ、——ただ新聞および言論の自由の原則を問題にするだけだ——ただこの原則だけを弁護したい、かれらはこんなふうにいうのである。この叫び声を聞いたのでは、きわめて強気の男達でも、弱くなってしまうだろう。なにしろ、ほんとうに「お上品」な新聞の口からそれが出てくるからである。

　だから、この毒物はなんの妨害もなく、わが国民の血液循環の中にはいり込み、利き目を現わすことができたが、国家はその場合にもこの病気を支配する力をもたなかった。国家がそれに対してとった笑うべき中途半端な手段の中に、ドイツ帝国にすでに迫りきていた崩壊が見られた。**なぜなら、もはや自分自身をあらゆる武器で守ろうと決意しないような制度は、実際上自己を放棄しているものであるからである。**あらゆる中途半端さというものは内部的崩壊の明白な前兆であり、その前兆に続いて遅かれ早かれ、外面的な崩壊が生じなければならないし、また生じるであろう。

　わたしが思うに、今日の世代は、もし正しく指導されるならば、この危険をいっそう容易に克服するだろう。かれらはいろいろな事件に出会ってきたが、それらの事件はまだ気力をすっかり失ってはいなかった人々の神経を多少とも強めることができた。将来とも、ユダヤ人は、ひとたび自分達のいとしい巣に手がかけられ、新聞の横暴に結末がつけられ、またこの教育手段が国家に奉仕させられて、もはや異国民の手、国民の敵の手に任せられなくなるとすれば、きっと自分達の新聞で大いに騒ぎ立てることだろう。しかしながらわたしが思うに、この大騒ぎは、昔われわれの父祖を悩ましたほどには、われわれ、より若いものを悩ましはしないだろう。三十センチの榴弾（りゅうだん）一発はつねに千人のユダヤ新聞のまむし連中より、もっと大きな音でシュッシュッと響く——だからかれらにはまあシュッシュッと舌を鳴らさせておこう！

なっていた。

＊

**梅毒**　国民のもっとも重要な生活問題についての、戦前のドイツ国支配者層における中途半端と愚鈍さに対するその他の例としては次のものがある。国民の政治的、倫理的、道徳的悪風と平行して、すでに数年前からそれに劣らず恐ろしい、民族体に対する健康上の毒化が広がった。梅毒がとくに大都市でますます流行しはじめたが、他方結核も同様にほとんど全国にわたって死の刈り入れを行なっていた。

この二つの場合とも、国民に対する結果は恐るべきものであったにもかかわらず、人々はそれに対し奮起して断固たる処置をとることができなかった。

とくに梅毒に対する民族、および国家の支配者層のとった態度は、完全なお手上げとしか呼ぶことができない。真剣にその克服が考えられるならば、もちろん、現実に行なわれている以上に手を広げなければならなかった。いかがわしい種類の治療薬が発見されたり、また、その薬を商売上手に使用したりすることは、この病気にはほとんどなんの効果もあげえない。ここでも、問題とされるのは、原因に対する闘争のみであり、現象の除去ではなかった。しかし、その原因は、第一に、われわれの愛を汚す売春にある。その結果が、たとえこの恐るべき病気でなかったとしてさえ、なお、売春は民族にとってもっとも深刻な害悪をおよぼすだろう。なぜなら、一民族を徐々にではあっても、確実に滅亡させるには、この堕落にともなう道徳的荒廃だけでもう十分であるからである。このわが国の精神生活のユダヤ化と、結合本能の黄金万能主義化は遅かれ早かれ、われわれの次の世代のすべてのものをだめにしてしまうだろう。なぜなら、自然の感情をもった、力にあふれた子供の代りに、ただもう経済的な都合にかなっただけの、みじめな結果が現われてくるからである。なにしろ、経済上の都

他のところでうさばらしをするのだ。

合が、ますます、われわれの結婚の基礎となり、唯一の前提となるからである。しかし、愛はどこか

**自然的な結婚前提の軽蔑**　ある期間は、もちろん、人々がこうした点で自然を軽蔑することもできる。しかし、その返報はやってこないわけでなく、この場合、ただ遅れて現われてくるにすぎない。あるいは、より適切にいうならば、その返報を人間はしばしばあまりにも遅くなって気づくのである。しかし、結婚に対する自然的前提を絶えず軽蔑してきた結果がどれほど破壊的なものであるかは、わが国の貴族によって十分知ることができる。一方には、純粋に社会的制約にもとづき、そして他方には、経済上の理由にもとづいて行なわれた、生殖の結果がそこに見られる。一方は、一般に虚弱な子孫を結果し、他方は、敗血症をもたらした。というのは、あらゆる百貨店のユダヤ女は殿下の子孫――かれらはまったくそのようには見えない――を補充するのにかっこうなものと考えられているからである。どちらの場合も完全な退廃に終っている。

わが国のブルジョアジーは今日、同じ道を歩もうと努めており、そして結局同様の目標に終ることだろう。

人々は、まるで、そのような挙動によって事件そのものが起きずにすませるかのように、よそよそしく、この不愉快な事実に目をふさいで、急いで通り過ぎようと試みる。否、わが国の大都市の住民が、ますます愛の生活において汚されており、まさしく、そのことによって、梅毒性伝染病がより広い範囲に広がっているという事実は、単純に否定できないし、また現存しているのだ。この大量伝染のもっともはっきりした結果は、一方では、精神病院に見られうるが、他方には、残念ながらわれわ

れの家族——子供たち——の中に見られる。とくに、これら子供たちは、われわれの性生活で絶え間なく進行する病毒伝染から生じた、悲しむべきみじめな産物である。子供の病気の中に親達の不道徳は姿を現わしているのだ。

**結婚についての「態度」**　このような不愉快な、まったく恐るべき事実に妥協してゆくためには、さまざまなやり方がある。第一は、一般になにも見ないか、あるいはもっと適切にいうならば、なにも見ようとはしないやり方である。これはもちろん、もっとも単純で、安直な「態度」である。第二は、笑うべき、そしてまた嘘っぱちな、ねこかぶりという神聖なマントにくるまって、こうした領域のことについてはすべてただ大きな罪悪であるとばかり語り、とりわけ、取り押えられたこのような罪人の前では、いつも心の奥底からの憤激を吐露するやり方である。そして、こうした神にそむいた害悪を前にしては、信心ぶって目を閉じたり、愛する神に次のように祈ったりするのだ。つまり、ぜひ神様が——もし可能ならば、かれらが死んで後に——このソドムとゴモラの町全体に硫黄と瀝青(れきせい)を雨のように降らせ[7]、その結果、この恥知らずの人間にもう一度信仰をおこさせるような、見せしめを与えられますように、というのである。最後に、第三は、この害悪が将来おそらくもたらすに違いなく、またもたらすであろう、恐るべき結果をすこぶるはっきりと見通してはいるが、しかし、かれらはどっちみち、この危険に対してどうすることもできないのだから、そのまま、なるようにさせておくよりしかたがないと思い込んでしまい、ただ肩をすくめるだけのやり方である。

以上のすべては、もちろん容易であり、また簡単であるが、ただ、国民はそのような怠惰の犠牲となって滅亡する、ということだけはけっして忘れてはならない。他の民族の場合でも、けっして、よ

りうまくいってはいない、といういいわけも、もちろん国民の破滅という事実には、ほとんどなにも変更を加えるものではありえない。ただ、他人もまた不幸に見舞われているのを見て起きる感情が、もっぱら多くの人々自身の苦悩をやわらげてきた、ということはある。しかしそうであれば問題はなおさらのこと、どの民族が自分でこのやっかいものの最初にしてしかも唯一の支配者となりうるだろうか、そして、どの国民がそれによって滅亡するか、といったことである。これこそが究極の問題である。この問題はまた、人種の価値の試金石にほかならない――この吟味に耐えられない人種はまさしく死滅し、より健全な、もっと頑強で、抵抗力のある人種にとってかわられるだろう。なぜなら、この問題は、第一に、子供に関係しているから、父祖の罪の報いが十代後の世代にまで及ぶといった、まったく恐ろしいほどの裁きが肝心である諸問題の一つである。――これは、血と人種に対する犯罪についてのみ妥当するような真理である。

**血と人種に対する罪　血と人種に対する罪とは、この世での原罪であり、その罪に服した人間どもの破滅を示すものである。**

戦前のドイツは、まさにこの一つの問題に対して、なんという、じつにあわれな態度を示しただろうか。わが国の大都市の青年に、病毒が感染するのを阻止するために、なにが行なわれたか？　われわれの愛の生活の病毒感染、および金銭化を攻撃するために、なにがなされたのか？　また、それから結果する民族体の梅毒化を克服するために、なにがなされたのか？

その答えは当然、なされるべきであったと思われることを確認することによって、きわめてたやすく出てくるのだ。

人々はこの問題を、さし当り軽く見てはならなかったし、その問題の解決に幾世代かの人々の幸、不幸がかかっているということを、いや、その解決がわが民族の全将来にとって、決定的でなければならぬということはないにしても、少なくとも、決定的でありうるということを、理解しなければならなかったのである。だが、そのような認識は、容赦することのない処置や、干渉をすることを義務づけた。すべてに、考慮の中心とされなければならなかったことは、なによりも、まず第一に、全国民がこの恐ろしい危険に注意を集中すべきであり、そして、それによって、各個人がこの闘争の意味を心から自覚することができる、という確信である。各人が強制以外に、なおその必要性を認識することができてはじめて、真に決定的な、そして時折は耐えるに困難なほどである義務や、責任をあまねく果たすことができるのである。しかし、そのためには、その他なお注意をそらせてしまう時事問題をすべて排除した、きわめて大がかりな啓蒙が必要である。

唯一の課題への集中　不可能に見える要求や、課題を満たすことが問題である場合には、例外なく、一民族の全注意を、ただこの一つの問題に限って、統一しなければならない。しかも、その解決に実際、生死がかかっているかのように、注意させなければならぬ。ただそのような場合にのみ、一民族は真に偉大な仕事や、労苦を喜んで引き受け、また、それを行なうこともできるだろう。

この原則は個々の人間にも、かれが偉大な目標に到達しようと意欲している限りでは、妥当する。個人もまた、階段状に区切りをつけながら進んでのみ、この目標をなしとげることができるだろう。またその場合でも、かれはつねにある特定の、限定された課題に到達することに、この課題が満たされたように思え、そして、新しい区切りの測量が企てられうるときまで、全努力を集中しなければな

らないだろう。征服されなければならない行程を、このような個々の段階に分割しようとせず、またさらに諸段階を計画的に、あらゆる力をきびしく集中して、一つずつ克服しようと努力しないものは、けっして、究極目標にまで到達することはできず、どこか道の途中で、おそらくは、道からそれてさえしまい、まごまごしつづけるだろう。目標に向かって近づこうとする、この努力は一つの技術であり、こうして、一歩一歩行程を克服するため、最後の精力までも、時には注入することを必要とするのだ。

だから、人間の行程のそのように困難な区間にとりかかるに必要な、最初の予備条件は、まさしくいま到達さるべき、あるいは、むしろ克服さるべきといったほうがよいような部分目標が、人間の唯一の注目に値し、この克服にすべてがかかっている目標であると、国民大衆に思わせる操縦が成功するということである。国民大衆はもともと、全行程をはっきり見とどけるなどということができずに、うんざりしてしまったり、その課題に絶望したりするものである。大衆はある一定の範囲では目標に注意するだろうが、その行程をただ小さな区間だけ見わたすことができるに過ぎない。それはちょうど、旅の目的地は同様によく知っており承知しているが、しかし、果てしない道を区分して、その一つ一つをあたかもそれぞれがまったく望む目標そのものであるかのように思い込んで前進したほうが、よりうまくその行程を克服できるような旅人に似ている。ただ、そのようにしてのみ、かれは絶望せずになおも前進できるのだ。

**課題としての梅毒克服**　だから、人々はあらゆる宣伝の手段を利用して、梅毒の問題は国民の**真に唯一の課題**であると思えるように示すべきであり、けっして**それも一つの課題**だなどと思い込まれ

るように示してはならない。この目的のためには、梅毒の害悪がもっとも恐るべき不幸であるということを、十分にしかもあらゆる手段を利用して、全国民が、まさしくこの問題の解決に、すべてのことが、つまり自分たちの未来も、破滅もみんなかかっているという確信に到達するまで、人々の頭にたたき込まなければならない。

このような、必要ならば幾年もかかるほどの準備の後にはじめて、全国民の注意力と、したがってまた決意が非常に強く呼び起されるだろうし、その結果いまやきわめて困難で、犠牲に満ちた処置をも、おそらく理解されなかったり、あるいは急に、大衆の意向から見捨てられてしまうといった危険を冒すことなく、採用することができるのだ。

なぜなら、この病毒感染を真剣に攻撃するためには、巨大な犠牲、および同様に大きな苦労が必要だからである。

梅毒に対する闘争は、売春制度との闘争、偏見や旧習に対する闘争、いままでの考え方や一般的な意見に対する闘争、その中でも以上に劣らず、あるサークルにおける嘘っぱちのねこかぶりに対する闘争を必要とする。

**売春制度との闘争**　これらのものと抗争する権利、それも単なる道徳的にすぎぬ権利のための第一の前提は、次の世代の人々の早婚を可能にすることである。まったく、晩婚の中にのみ、人がどのようにこじつけようと望みのままだが、とにかく、人類の恥であるに変わりはない制度を保存するように強いる原因が見出される。この制度は、その他の慎しみ深い性質のために、好んで自己を神の「似姿」と見なしている被造物には、まったくもって似合わない制度といえよう。

売春制度は人類の不名誉であるが、だが、それを道徳的説教や、信仰深い意志などによって取り除くことはできない。この制度の制限、および最後的な撤廃には、無数の先行条件全体を除去することが先決である。その第一は、しかし、人間の本性にかなった、とりわけ男子の早婚の可能性を作り出すことであるに変わりはない。なぜなら、女子はまったくのところ、この点では元来、受動的部分に過ぎぬからである。

一部の人々が、今日すでにどれほど正道を踏みはずしているか、いや、理解しがたいほどにまでなっているかということは、いわゆる「上流」社会の数少なくない母親たちが、自分たちの子供のために、「痛い目にあって、すでに思い知っている」夫を見つけたことに感謝している、と語るのを聞くことによっても知られるであろう。多くの場合、そのような夫の不足はほとんどなく、むしろ逆なくらいであるから、もちろん、あわれな娘たちはこのような若気の道楽から落ちついた夫を幸運にも見つけるだろう。そして、子供たちはこの賢明な結婚の明白な結果なのであろう。その上、なお可能な限りの産児制限が続行され、そしてもちろん、すべて生まれればどれほど惨めなものでも育てられるに違いないので自然の淘汰が妨げられるにいたることを考慮に入れれば、事実上、なぜ、このような制度は一般になおも存続するのであるか？　またどのような目的をもっているのか？　という問題だけが残るのである。これでは、それは売春そのものとまったく同一ではないだろうか？　後世に対する義務は、もはや全然なんの役割も果たさないのか？　あるいは究極的な自然権だとか、自然の義務を維持するのに、このような犯罪者的に無思慮であるやり方をとるのであっては、どんな呪いが子供や、そのまた子供にかけられるか判らないだろうか？

文化民族は以上のように堕落し、また次第に破滅してゆくのである。

**早婚** 結婚も、それ自体を目的とするものではありえず、種と人種の増加および維持という、より偉大な目標に奉仕しなければならない。これのみが結婚の意味であり、課題なのである。しかし、このような前提からすれば、結婚の正当性は、それがこの課題を満足させるやり方からだけ測ることができる。この点からしてすでに、早婚は正しいのである。なにしろ、若い夫婦だけが健全で、抵抗力のある子孫を生むことができる能力をまだ与えられているからなのである。もちろん、早婚が可能なためには、それがなくては早婚がまったく考えられないような、社会的前提条件の全体が必要となってくる。したがって、このただ非常に小さな問題の解決だけでも、社会的見地からする徹底的な処置なくしては行なわれえないのである。この処置にどんな意味があるかは、いわゆる「社会主義的」共和国が、住宅問題の解決ができぬだけのことによって多くの婚姻をまったく阻止し、そのため売春に手を貸しているような時代には、もっともよく理解できるに違いない。

家族とその養育の問題に考慮をほとんど払わない俸給分配についての、わが国の不合理なやり方は、以上と同じく、非常に多くの人々にとって早婚を不可能とさせる原因である。

だから、売春のほんとうの克服はただ社会関係の根本的な改革によって、現在一般的に行なわれているよりも、もっと早く結婚できるようになって、はじめて近づきうる問題である。これがこの問題を解決する、まず第一の前提条件である。

**健全な身体にのみ健全な精神が** 第二にはしかし、教育と訓練とで害悪の総体を取り除かなければならない。だが、これらについては今日、一般にはほとんど気にかけられてはいないのである。な

によりもまず、いままでの教育に精神的教授と身体的鍛練の間の平衡がとり入れてゆかれなければならない。今日、ギムナジウム[8]と呼ばれるものは、ギリシアの模範を侮辱するものである。わが国の教育では、結局のところ、健全な精神は健全な身体にのみ宿りうるものであるということが、完全に忘れさられている。個々の例外を除いて、国民大衆に注目するとき、とくにこの命題は無条件の妥当性を保っているのだ。

戦前のドイツにおいては、一般的にいってこのような真理がもはや考慮されなくなった時期が存在した。人々は身体をまったく不当に扱い、「精神」の一面的な鍛練によって、国民が偉大になるためのより確実な保証がえられると思いこんだのだ。しかし、それは思い違いであって、人々が考えていたよりもずっと早く、この誤りは報いられることになった。ボルシェヴィズム[9]の波が、空腹と打ち続く栄養不良とによって退化した住民の住んでいるところ、すなわち中央ドイツ、ザクセン、およびルール地方に、この上ないよい地盤を見出したのもけっして偶然ではない。これらすべての地方では、いわゆるインテリからも、このユダヤ的疾病に対する真剣な抵抗が見出されなかったが、それはまったくインテリ自身が、たとえ困窮のせいというよりは、むしろ教育のせいであるとしても、肉体的にすっかり退化していたという簡単な理由からなのである。わが国の上流階層における、もっぱら精神主義的な教育態度は、精神より拳骨が万事を解決するような時代には、なにかやりとげることなどいうに及ばず、自己の階層をただ維持するだけのことも不可能にしたのである。虚弱な身体はしばしば、人間の臆病さをもたらす第一の原因となるものなのだ。

純粋に精神的な教授を過度に強調し、身体的鍛練をおろそかにすれば、まだあまりにも若すぎる年頃から性的観念の芽ばえを促すことにもなる。スポーツや、体操によって鉄のような鍛練がなされた

青年は、もっぱら精神的な食物を食べさせられて、部屋の中に閉じこめられていたものよりも、官能的満足の要求に負けることは少ない。合理的な教育はこの点を考えなければならない。さらに、そうした教育は、健全な青年男子が女子にかける期待は若い時から堕落してしまった弱虫の期待と違ったものであるだろう、ということを見落してはならない。

だから全教育は、青年の自由時間をかれらの身体の有益な鍛練に使うようにすることに、その目標を向けなければならない。青年は、その年頃にぶらぶらとさまよい歩いたり、街頭や映画館に足を向けたりする権利はない。かれらはきまった毎日の仕事のあとは、若い肉体を鍛え、強固にして、将来かれの生活ぶりがあまりにも弱々しい、などと思われないようにしなければならない。そのために準備し、遂行し、かじをとり、導いてやることが、青年教育の課題であって、いわゆる知恵をもっぱら詰め込むことが課題なのではない。教育は、自分の身体を処理することが、各個人だけに関する事柄であるかのような観念をも取除かなければならない。後世を犠牲にして、そしてそれとともに人種を犠牲にして、罪を犯すような自由は決して存在しないのである。

**精神毒化に対する闘争**　身体の教育と平行して、精神の毒化に対する闘争がはじめられなければならない。我々のあらゆる社会的生活は今日、性的想像と性に対する刺激の温室に似ている。とにかく、人々がわが国の映画、寄席、演劇のメニューを見るならば、それらが適当な飲食物でないこと、そしてとくに、青年にとってそうでないことをおそらく否定できないだろう。陳列窓も、広告塔も群集の注意を引きつけるために、きわめて低級な手段を使って努力がはらわれている。これらが青年に途方もなく深刻な害悪を及ぼすに違いないことは、かれらの精神を立ち入って考えてみる能力を失っ

ていない人々になら、おそらくだれにでも明白なことである。こうした官能を刺激する環境は、そのような事柄にはまだなんの理解をももつ必要がないような年頃の子供に想像と刺激を与える。この種の教育の結果は、今日の青年たちを見れば明らかなように、けっして喜ばしいことではない。かれらは早熟であり、したがってまた早く年をとってしまう。わが国の十四、五歳の子供の精神生活を見せつけられてぞっとするような事件が、法廷からしばしば明るみに出てくることがある。だからこんな年齢層の中に、すでに梅毒がその犠牲をもとめはじめていることについて、だれが驚こうか？　そしてまた、はなはだ多くの身体的には虚弱だが、精神的には堕落した若者が、大都市の売春婦に媒介されて結婚の手ほどきを受けているのを見ることは、なんと悲惨なことではないか？

否、売春制度に立ち向かおうとするものは、第一にその制度の精神的前提条件を取り除くことに援助しなければならない。かれはわが国の大都市「文化」がもつ風紀的伝染病の災害を排除しなければならない。しかも、断固として、当然起ってくることが予想されるあらゆる騒ぎや、悲鳴にためらうようなことがあってはいけない。われわれが青年たちを、かれらが現在いる環境の泥沼から救い出さなければ、かれらはその沼の中に沈んでしまうだろう。この事態をみようとしないものは、それを支持するものであり、そのことによって、成長してくる世代の中に結局は存在しているわれわれの将来を、徐々に汚辱する共犯者になるのである。わが国民の文化のこの大掃除は、ほとんどあらゆる領域に広げられなければならない。演劇、芸術、文学、映画、新聞、広告、陳列窓は、腐敗している世間の諸現象によるよごれを洗われて、倫理的な、国家および文化の理念に奉仕するものとされなければならない。社会生活は、われわれの現代的な性愛が発散する、むせるような香水から解放されなければならないし、そしてまた、まったく同様に、すべての男らしくないねこをかぶった不正直さからも

全さを保存しようとする心づかいに従って決められねばならない。個人的な自由の権利は、人種保存の義務の前では引き込むのである。

解放されなければならない。あらゆるこのような事態について、目標と方針は、わが民族の心身の健

### 不治者の断種

この処置を実施したのち、はじめてこの疾病そのものに対する医療上の闘争を、結果についていくらかの希望をもちながら、実行することができる。しかし、その際にも中途半端な方法は問題とはなりえないので、ここでも、もっともきびしい、そしてあくまで徹底した決意をしなければならない。不治の病人に、絶えず他の健康な人々に感染する可能性を許しているのは中途半端である。これは、一人に苦痛を与えないために、百の他人を破滅させるような人道主義と一致する。欠陥のある人間が、他の同じように欠陥のある子孫を生殖することを不可能にしてしまおうという要求は、もっとも明晰な理性の要求であり、その要求が計画的に遂行されるならば、それこそ、人類のもっとも人間的な行為を意味する。その要求は幾百万の不幸な人々に不当な苦悩を免れさせるだろうし、そして結果として、一般的な健康増進をもたらすだろう。この方向に断固進もうと決心することは、性病の拡大に対しても堤防を築くことになるだろう。なぜなら、この面では、必要ならば、不治の病人を無慈悲にも隔離しなければならぬに違いないからである――不幸にもそれにかかったものに対する野蛮な処置も、しかし、同時代および後世の人々にとっては祝福である。百年の一時的な苦痛は数千年を苦悩から救いうるし、救うだろう。

梅毒や、その案内人である売春に対する闘争は人類のもっとも巨大な課題の一つである。それが巨大なのも、そのさい、各々の問題そのものの解決が問題なのではなく、まさしく随伴現象としてこの

疾病のきっかけをつくるような、害悪全体を取り除くことが問題だからである。なぜなら肉体の病気は、この場合ただ倫理的、社会的、人種的本能の病気の結果にすぎないからである。

だが、この闘争が怠惰やあるいはまた臆病のために戦い抜かれなければ、その場合には三百年たった後の民族を注視したらよいだろう。けっして最高の神を冒瀆しようと欲しなくても、神の似姿などはもはや、ほとんど見ることはできないだろう。

**旧ドイツ国の無能**　しかし、旧ドイツ国ではこの疾病と対決するに、どのようなことが試みられただろうか？　冷静に吟味すれば、それに対してじつに悲しむべき答えがでてくる。おそらくその病気の結果については十分に熟考ができなかったとしても、政府の人々の間ではこの病気の恐るべき害悪が、非常によく認識されていたのは確実である。しかし、その闘争では完全に無能であり、徹底的な改革の代りに、むしろ憫笑すべき処置をえらんだのである。その病気にあれこれと素人治療をし、原因はそのまま放っておいたのだ。個々の売春婦を医者に診療させて、それがまさに実行可能な限り、彼女らを監視し、そして確実に病気である場合にはどこかの病院に押し込み、外面的に治療が成功したのちに、そこからふたたび外の人々に向けて解放したのである。

「予防条項」　もちろん、「予防条項」も制定されたが、それによるとまったく健康ではないもの、あるいは治ってはいないものは性交をさしひかえねばならず、それに応じねば罰せられるというのである。この処置それ自体はたしかに正しい。しかし実際に実施されるかという点では完全に無効といってよい。第一に女子が性交によって不幸に遭遇したならば――われわれの教育、あるいはむしろ彼

女たちの教育といったほうがよいが、ただそうした教育の結果としても——多くの場合彼女の健康をとりあげたあわれな盗人に対する証人として、——なにしろ不快な、付随する事情もまれではないので——その上、法廷へ引きずり込まれることを拒否するであろう。まさしくこの条項は、彼女にほとんど有利とはならない。彼女はいずれにしても、多くの場合この条項によってもっとも苦しむものとなるだろう。——とにかく思いやりのない周囲の人々の投げかける軽蔑は、それが男の場合よりもいっそう彼女には深刻に感じられるものである。最後に病気を移した人が自分の夫である場合には、彼女の境遇はどのように考えられたらよいだろうか？　彼女は、さて訴えるべきだろうか？　あるいはそうしない場合はどうすべきだろうか？

男の場合にはしかし、残念ながらおびただしく酒をのんだあとで、この災いに出会うことがあまりにも多いという事実が加わる。なにしろそんな状態では、ほとんど彼の「天使」の質を判断することもできないのである。このことを元来病気をもった売春婦も十分すぎるほど知っているので、したがって彼女は常に、このような理想的状態にある男たちをひっかけようとするのである。その結果として、後になって不愉快にもことの意外さにびっくりさせられた男が真剣に考え抜いても、慈悲深い恵み主をもはや思い出すことはできないのである。このようなことはベルリンのような町や、あるいはミュンヘンのような町でさえ、珍しいことではない。それに加えてなお、あらゆる大都市の魅力に、そうでなくてもすっかりぼんやりさせられている田舎からの見物人もしばしば問題となることがある。

最後に、ところで一体、病気であるか健康であるかを、だれが知ることができるだろうか？　見かけは治ったものがふたたびぶり返し、最初は自分でも気づかずに、恐るべき災いをひき起しているといった数多くの例がないだろうか？

したがって、この病気の伝染に責任あるものを法律で処罰することによる、この予防の実際的影響はまったくゼロに等しい。まったく同じことが売春婦の監視についてもいえる。そして、最後に、治癒そのものが今日でさえも、なお不確かであり、疑わしい。確かなことはただ一つ、病気感染はあらゆる処置にもかかわらず、よりいっそう広がっているということである。しかし、そのことによって、それらの処置の無効さがもっとも適切に裏書きされるのである。

**民族精神の売春化**　そういう事情だからその他になお行なわれたことがすべて、不十分であると同様に、笑うべきものであった。国民の精神的売春化は阻止されなかったし、そしてまた、およそ阻止するためになにごともなされなかったのだ。

だが、これらのことをなんでも軽率に引き受けようとするくせのある人は、この疾病のまんえんについての基礎的統計を一度でも研究し、この百年間に見られた増加を比較し、その後にこの先の病気の進展を立ち入って考えてみるがよかろう。——そして、もし不愉快な寒気が背筋を走るのを覚えないのであったら、その人はまったくロバくらいの単純な頭の持主にちがいない！

旧ドイツ国においてすでに、そのように恐るべき現象に対してとられた態度が弱々しく、また中途半端であったことは、民族の堕落を明白に表わす徴候と評価されてよいだろう。**もし、自己の健康のために闘争する力がもはや存在していないとするならば、この闘争の世界において生きる権利は消滅する。**この世界は力に満ちた「完全な人」のものであり、弱々しい「中途半端な人」のものではない。

旧帝国のもっとも明白な没落現象の一つは、一般の文化程度が次第に低下したことであった。ここで、わたしは文化という言葉でもって、現在、文明と呼ばれているものを考えているのではない。文

明というものはむしろ反対にほんとうの精神水準、および生活水準の敵であるように思われる。
今世紀になる以前すでに、その当時までは完全に異常なもの、未知数的なものとみなされえていた要素が、われわれの芸術の中に割り込んできはじめた。たしかに、より以前の時代にもしばしば趣味の脱線がみられたが、しかしそのような場合でも、なお後世の人々が少なくともある種の歴史的価値を承認できるような、そういった芸術家的脱線であって、およそ、もはや芸術家的などというものではなく、むしろ愚鈍さにまでおちこんだ、精神的退廃の生み出す産物などではなかった。後になればもちろんより明白になってくるところの政治的崩壊が、これらの脱線の中ですでに文化的に予想されはじめたのである。

**芸術のボルシェヴィズム**　芸術のボルシェヴィズムは、ボルシェヴィズム一般の唯一可能な文化的生活形式であり、精神的表現である。

このことを不審に思う人は、ついにボルシェヴィズム化された国々の芸術を考えさえすればよい。そうすれば、驚くべきことに、われわれが今世紀になってからキュービズム[10]だとか、ダダイズム[11]といった総括的概念でもって知り合いになっている精神錯乱的、退廃的人間の病的な奇形が、それらの国で国家的に公認された芸術として賛美されているのがみられるだろう。この現象はバイエルンの人民委員会共和国という短い期間にあってさえ、もう現われたのである。すでに、ここに人々はあらゆる公の広告だとか、新聞の宣伝図案などが、どれほどはっきりと政治的退廃だけでなく、文化的退廃そのものをも表わしているかを知ることができた。
およそ六十年ほど以前には、今日生じているほどの大きさをもった政治的崩壊は考えられなかった

ように、千九百年以来、未来派や、立体派の描写に示されはじめた文化的崩壊も、当時はまだ考えられなかった。六十年前には、いわゆるダダイズム的「体験」の展覧会はまったく不可能と思われたことだろうし、その主催者たちなどは精神病院に入れられたことだろう。それなのに今日では、かれらは芸術協会で司会さえしているのである。この疾病は当時には、顔をのぞかすことができなかった。なぜなら、世論がそれをがまんしなかったし、国家が静観するはずもなかったからである。なにしろ、国民が精神的錯乱の手中に追い立てられるのを阻止するのは、国家管理に属する仕事だからである。しかし、このような事件の展開はおそらくいつかは、精神錯乱に終るに違いない。すなわち、この種の芸術が、実際に一般の人々の判断と一致するようなそんな時代には、人類のもっとも重大な変化の一つが生じていることだろう。人間の頭脳の退化は、それとともにはじまっているに違いないが、しかし、人々はけっしてその終末を予断することはできないだろう。

まずこの観点から、この二十五年間に起ったわれわれの文化生活の展開を眺めるとき、すぐに、どれほどわれわれがもうこの退化にひきこまれてしまっているかをみて驚くだろう。われわれはいたるところで、われわれの文化を遅かれ、早かれ、破滅させるに違いない流行のはじまりとなる徴候にぶつかる。これらの流行の中にも、われわれは次第に腐ってゆく世界の没落現象を見ることができる。この病気をもはや克服できないような民族に災いあれ！

**演劇の堕落**　そのような病気はドイツでは、芸術や、文化一般のほとんどすべての分野で確認することができた。そこでは、すべてのものが峠を通り越してしまって、深淵(しんえん)へと急いでいるように見えた。演劇は目立って深く落ち込んだ。そして、少なくとも宮廷劇場が芸術の売春化に、なおもさか

らっていなかったならば、演劇はおそらく当時すでに、完全に文化要素として失格したことだろう。宮廷劇場と、その他二、三のあっぱれな例外を除けば、舞台で上演されるものはそれを見にゆくのをまったく避けたほうが、国民にとって、より有用であるような種類のものであった。こうした、いわゆる「芸術の殿堂」の大部分にもはや青年をゆかせることがまったく禁じられたということは、内部堕落の悲しい徴候であった。そのことは、「未成年者ははいることができません！」という一般的な観覧注意でもって、まったく恥しらずだが、しばしば公認されさえしたのである。

第一に、青年の教養のために存在すべきであって、けっして、年とって、倦怠した年齢層の楽しみに奉仕するのであってはならぬ場所で、このような予防策がとられなければならなかったことを考えてみよう。あらゆる時代の偉大な劇作家は、このような処置に対して、いったいなんというだろうか？　とりわけ、そのような処置をとらせた事情に対して、なんというだろうか？　シラーだったら、どんなに怒りを燃え上らせたことだろうか？　またゲーテなら、どんなに憤慨してそっぽをむいたことだろうか！

**偉大な過去の誹謗**　しかし明らかに、シラーも、ゲーテも、あるいはシェークスピアも近代のドイツ詩文学のヒーローたちにとっては、実際なんの意味もないのだ！　シラーらは古い陳腐な時代遅れの、否、克服されてしまった亡霊である。すなわちこの時代の特徴なのだが、かれら自身がただけがらわしい作品を生産したばかりではなく、おまけに過去のあらゆる真に偉大な作品が、かれらによって冒瀆されたのである。もちろんこのようなことは、そうした時代にはいつも見られる現象である。ある時代の、そしてまたその時代の人々の創作物が卑しく、みじめであればあるほど、それだけ以前

の時代のより偉大な高尚さと、品位の証人は憎まれるのだ。そのような時代には、人々はなによりも好んで、人類の過去の記念物を一般的に抹殺し、その結果として、あらゆる比較可能性を取り去ってしまい、自分のいかさま物を相変わらず「芸術」であるかのように、うまく見せかけるだろう。したがって、どんな新しい制度も、それがみじめで、あさましいものであればあるほど、それだけ過ぎ去った時代の証拠を徹底的にぬぐい去ろうと一心になる。他方、あらゆる真に価値がある人類の革新は、むとんちゃくにも、過去の世代が残した、すぐれた成果に結びつくことができる、いやそれどころか、しばしばそれらの成果を、はじめて一般に認めさせるよう努力さえするのである。そうした革新は、過去と比較されて、色あせてしまうことを少しも恐れる必要がなく、進んで、人類文化の共有財産に非常な価値のある貢献をするのである。したがってそうした革新はしばしば、まさにその貢献の価値を十分に認めさせるために、過去の作品そのものの回想の火をかき立てるだろう。つまりはそうして新しい贈物がいよいよ確実に現代人の十分な理解をうるためにである。ただ、自分からは価値あるものをまったくなにもこの世に贈ることができないのに、さもなにかたいしたものを、この世に与えようなどというものにかぎり、現実にすでに存在しているすべてのものを憎み、またもっとも好んで、否認し、あるいは抹殺さえするであろう。

このことは、けっして一般的な文化の領域に新しく生じた現象にとってだけ妥当するものではなく、政治の新現象についてもいえることである。革命的な新しい運動は、それ自身が劣等であればあるだけ、ますます古い政治形態を憎むものである。この場合でも、自分のいかさま物を、なにか注目すべきものと見せかけたい一念が、過去のよりすぐれたよい物をどれほど盲目的に、憎悪するにいたらせるかを見ることができる。たとえば、フリードリッヒ大王についての歴史的思い出が死滅しない限り、

フリードリッヒ・エーベルト[12]が人々に驚嘆されるのも限定つきであるにすぎない。サンスーシに住んだ英雄・フリードリッヒ大王は、昔ブレーメンの居酒屋の亭主だったエーベルトに比べれば、およそ太陽と月の比較にも似ている。太陽の光が消えた後、はじめて月は輝くことができる。したがって、あらゆる人類の新月連中が恒星達を憎むのも明白すぎるくらい明らかなことである。政治生活の中で、このような能なし連中が、運命によって一時権力に恵まれる場合、疲れを見せることなく熱心に過去を冒瀆(ぼうとく)し、汚すばかりでなく、さらに皮相な手段でもって、自分自身を一般の批判から免れさせようとするのがつねである。この例としては、新ドイツ国、つまりいわゆるワイマール国家の共和国保護法がある。

したがって、なにかある新しい理念、教義、新世界観、あるいはまた政治的、経済的運動が過去全体を否定しようと努めたり、中傷したり、価値のないものに見せようとしている場合には、この動機からしてすでに極度に用心して、信用しないようにしなければならない。多くの場合、このような憎悪の理由はただ自分の低劣さだけにか、さもなくばまた悪意そのものにあると考えられる。人類の実に多幸な革新というものは、つねに、そしてまた永遠に、最後の確実な基礎づけが終っているところから、さらに建設を進めてゆかなければならぬだろう。その革新は、すでに存在している真理を利用するのを恥じる必要はないであろう。なにしろ、人類の全文化も人間自身も、それぞれの世代がめいめいの建築石材を運び、つぎ合わせていった、ただ一つの長い発展の結果であるにすぎないからである。したがって、革命の意味と目的は、全建築物をとりこわすのではなく、悪くつぎ合わされたところや、あるいは不適当なところを取り除き、そのようにして邪魔物が取り去られ健全さを取り戻した部分をさらに建て広げ、増築してゆくことにあるのだ。

このようにしてのみ、人々は人類の進歩について、語ることもできるし、語る理由もあるのだ。そうでない場合は、世界は無秩序から救い出されないに違いない。なぜなら、その時は、過去を拒否する権利がすべての世代に与えられることになり、したがってそれら世代が自分の仕事をするために必要な前提として、過去の成果を破壊することも許されるようになるからである。

**ボルシェヴィズムの精神的準備**　だからして、わが国の戦前における全文化状態に関するもっとも悲しむべきことは、ただ芸術的、一般文化的な創造力の完全な無能だけでなく、より偉大な過去の記念物を冒瀆し抹殺した憎悪であった。ほとんど、芸術、とくに演劇、文学のあらゆる領域にわたって、世紀の変わり目の前後から、価値ある新作が生産されはじめたというよりは、むしろ最良の古い作品が見下げられ、低劣なもの、克服されたものと言明されるようになりはじめたのである。まるで、このもっとも恥ずべき低劣な時代が、一般に、なにかを克服することができでもするかのようであった。しかし、このような過去を現代人の目から隠そうとする努力から、これらの未来の使徒連中の悪意が、非常に明白に読み取られたのである。それによって人々は、ここで問題になっているのは、たとえそれらは誤ったものであれ、ともかく新しい文化解釈ではないということ、またその反対に、文化一般の基礎を破壊させる過程と、これによって可能になる健全な芸術感覚の白痴化が問題であること、を認識すべきであったろう。――そしてさらには政治上のボルシェヴィズムの精神的準備が問題であるのだ。なにしろ、ペリクレス時代がパルテノン[13]によって具体的に表現されているとするならば、ボルシェヴィズム的現代は立体派のこっけいな絵で具現されているからである。

**「内面的体験」** それとの関係から、わが国民の一部にその結果再び現われてきている臆病についても触れなければならない。かれらはその教養、および地位からして、この文化的恥辱に反抗すべき義務があったと思われる人々である。自分たちの創作の精華を認めようとしてくれない人間をこの上ない激しさで攻撃し、時代遅れの俗物だとレッテルをはる、ボルシェヴィズムの芸術的使徒連中の叫び声に対する恐怖だけから、人々は真剣な抵抗をすべてあきらめ、まったくどう思えようと、もう運命として従ったのである。人々はこれらの半バカや、山師どもから、無理解をとがめられるのがまったくこわかったのである。人々がこのような精神的退廃や、狡猾(こうかつ)な嘘つきどもの作品を理解しないのは、まるで恥辱であるとでも思われているのだ。もちろん、この文化信奉者は、自分たちのナンセンスに、いかにもすばらしいものという極印を押すための、非常に簡単な手段を所有していた。つまりかれらはあらゆる理解不能で、明らかに狂っているナンセンスをばいわゆる内面的体験であると、びっくりしている同時代の人々にいい聞かせていたのだ。そしてこの場合、そのような安直なやり方でもってほとんどの人々の口から返す言葉をはじめから取り上げてしまっているのである。というのは、それもまた一つの内面的体験でありうることについては、まったく疑う余地はなかったからである。しかし健全な世界に精神病者や、犯罪人の幻覚を提供しても差しつかえないかどうかについては、十分疑いうるのである。モーリッツ・フォン・シュヴィントやベックリンのような人々[14]の作品もまた内面的体験であった。とはいえそれらはまさしく天分豊かな芸術家の内面的体験であるにすぎず、けっして道化役者のそれではなかった。

　しかし、以上でもって、人々はわが国のいわゆるインテリのもつあわれな臆病さを非常によく学ぶことができた。インテリたちは、わが国民の健全な本能のこうした毒化に対して、真剣な抵抗をなま

け、この厚かましいナンセンスと折り合いをつける仕事を、国民自身に任せたのである。芸術を理解できぬと見なされないために、人々はあらゆる芸術的愚弄をがまんし、ついには、善悪の判断がまったくあやしくなってしまったのである。

しかし全体から見て、このことは悪化しつつある時代の徴候であった。

＊

**現代の人口集中**　容易ならぬ徴候として、その上、次のことも確認されなければならない。つまり、十九世紀になって、わが国の都市はますます文化の所在地という性格を失いはじめ、単なる人間の居住地に下落しはじめた。わが国の今日における大都市プロレタリアートが、その住所とほとんど結合感をもたないのは、大都市では個人の偶然的な滞在場所だけしか現実に問題にならず、そしてそれ以上のなにものでもないことから生ずる結果である。一方、このことは社会事情によって制約された、ひんぱんな住所の変更と関係しているのであって、こうした社会事情は、人々に自分の住んでいる都市と密接な交渉がもてるほどの時間を与えないのである。しかし他方、これに対する原因を、わが国の現在の都市が、一般に文化的に無意味でみすぼらしい、ということの中に求めることもできる。

解放戦争[15]の時代には、ドイツの都市はまだ数からして少なかっただけでなく、大きさからみても、ほどよいものであった。少数の真の大都市は大部分が王城であって、王城としてほとんどつねに一定の文化的価値をもっており、多くの場合、一定の芸術的様相ももっていた。五万人以上の住民をもったこのわずかばかりの町は、今日同じ人口をもつ都市と比較して、学問的、芸術的財貨に富んでいた。ミュンヘンが六万人を数えた頃は、ドイツで一流の芸術所在地の一つとすでになりはじめていた。今

日ではほとんどすべての工場所在地がこの人口数をもう幾倍も越えているというのではないにしても、少なくとも同数には達している。それらの工場地はしかしながら多くの場合、真に価値がありその土地特有と呼べるものはほんの少しすらももち合わせていないのである。それらは、住宅と貸アパートの純然たる密集であり、それ以外のなにものでもない。このような無意味さにもかかわらず、どうして、こうした町とある特別な交渉が成立するなどと考えうるだろうか。他のどんな都市にでもあるもの以上に、なにものも提供することができず、それぞれの独特な色合いが欠けており、芸術やあるいはまた芸術らしく見えるものさえも、すべてきちょうめんに避けられた都市に、だれが特別に愛情をもつだろう。

しかし、それだけではない。真の大都市も人口の増加に比例して、ますます真の芸術的作品に乏しくなっている。それら大都市はますます個性を失うように見え、より大規模ではあっても、小さなつまらぬ工場所在地とまったく同じ光景を呈している。近代になって、わが国の大都市の文化的内容につけ加えられたものはまったく不十分である。わが国のすべての都市は過去の名声と財貨で、細々と生きているのだ。人々が、今日のミュンヘンから一度でもよいから、ルードヴィッヒ一世[16]時代に創造されたものを全部取り除くとしてみよう。そうすれば、めぼしい芸術的創作がこの時代以後、どれほど少ししかふえなかったかを知って驚くことだろう。同様のことがベルリンや、他のほとんどの大都市についても当てはまるのである。

**昔の記念的公共建物**　しかし本質的なことがらは、やはり次の点にある。つまり、わが国の大都市は、今日、都市の全印象を左右し、とにかく全時代の記念物といわれるような記念碑的作品をもっ

ていない。しかし、このようなものが、古代の諸都市には見られたのであり、それらはほとんど、それぞれ誇りとすべき特別の記念建築物をもっていた。古代都市の特徴は私有建築物の中に見られるのではなく、短い時代を目的としているのではなく、永遠の目的のために建てられたと思われる公共の記念物の中にあった。なぜなら、その記念物によって、個人的所有者の富が反映されるのではなく公共の偉大さと意味とが反映されるべきであったからである。したがって、個々の住民を、今日のわれわれには多くの場合、ほとんど理解できないと思われるようなある仕方で、その都市と結びつけるにきわめて適切な記念物が発生したのである。なにしろ、住民が念頭においたのは、私的所有者の貧弱な家であるよりも、むしろ全共同体の壮麗な建築物であった。この建築物に比較すれば、住宅は実際重要ではない副次的なものに下落させられたのだ。

　もし、人々が古代の公共的建築物と同時代の住居との大きさのつり合いを比較してみるならば、公共的な仕事に第一の位置をあてがうという原則をこのように強調したことの、並外れた重みと力がはじめて理解されるだろう。今日、われわれが古代の世界の廃墟や荒廃した野原の中に、わずかではあるが、なおそびえている巨大なものを見て、驚嘆するのは、昔の営業のための立派な建物ではなく、寺院や国家の建築物であった。つまりその所有者が公共であったような建築である。晩年のローマの華美でさえも第一の地位を占めたのは個々の市民の別荘や立派な邸宅ではなく、国家の、したがって全国民の寺院、浴場、競技場、円形競技場、水道、公会堂などであった。

　ゲルマンの中世ですらも、まったく別の芸術解釈によってではあるが、同様な指導的原則[17]が保存されていた。古代にアクロポリスやパンテオンの中で表現されていたものは、いまやゴシックのドームという形式にくるまった。これらの記念碑的建築物は、中世期の都市の木骨建築、木造建築、あるい

はレンガ建築の小さな群を見下す巨人のようにそびえ建ち、したがって、それらのそばに貸アパートがますます高くよじのぼってきている今日でさえ、なおその土地の特徴と印象を決める象徴となった。大寺院、市役所、市場の建物、そしてまた防壁の塔は、けっきょくのところ、まったく古代の見解に一致していたことを明白に知らせるものである。

**百貨店とホテル——現代的文化の表現**　しかし今日、国家建築と私有建築の関係は、じつに、なんとひどいものになったことであろうか。ローマの運命がベルリンを襲ったと仮定してみよう。そうすれば、子供たちは将来いつの日にか、われわれの時代のもっとも巨大な工事として、二、三のユダヤ人がもつ百貨店や、いくつかの会社が経営するホテルを挙げ、われわれの時代の文化を特徴的に表わすものとして、驚嘆することだろう。ベルリンのような都市にさえみられる、国家の建築物と、金融や商業のための建築物の間に支配している極端な不つりあいを比較するがよい。

　国家の建築に支出された金額からしてすでに、多くの場合、じつに笑うべきものであり、不十分なものである。工場は、永遠のために行なわれるのではなく、多くの場合、目先きの必要のためにのみ行なわれているにすぎない。そのさい、なにかあるより高遠な思想などというものは、全然考えられもしないのである。ベルリンの宮城はそれが建造された時代には、現代の型にはまったく新しい図書館なんかとは、違った意味をもった工事であった。一隻だけの戦艦でも、約六千万マルクの金額に達するのに、永遠を目ざすべきである、国家で第一にりっぱな建築物、国会議事堂には、ほとんどそれの半分も議会で同意されなかったのだ。いやそればかりか、内部を装飾する議案が大詰にきた時は、国会は石材の使用に反対投票して、壁を石膏（せっこう）で上塗りするよう命令した。たしかに、この場合は例外

的にも、議員連中は、じつに正しいことをしたのである。というのも、石膏で固めた頭は石壁につり合わないからである。

そのように、現代のわが国の都市には、住民の共同社会のきわだった象徴が欠けており、したがって、住民の共同社会が、それぞれの都市に、自分自身の象徴を見出せない場合にも驚くことはないのだ。荒廃はくるに違いない。それは、今日の大都市住民が自分の都市の運命について、完全に無関心でいるということの中で、実際効果を現わしだしている。

そのこともまた、わが国の文化が没落してゆき、わが国の全般的崩壊がおこっていることの証拠である。時代はもっともちっぽけな有用性に、もっと適切にいえば、貨幣に奉仕することに、圧倒されている。しかしその場合、こういった貨幣の神の下では、ヒロイズムに対する感受性など、ほとんど残っていないことに驚くこともない。今日の現状は、つい先頃までの時代がまいたものを刈っているにすぎない。

＊

**宗教関係**　このような没落現象はすべて、つまりは一定の、人々に一様に承認された、世界観が欠けていたことの結果であると同時に、その欠陥から生じたところの、時代がもつ一つ一つの大問題に対する判断と態度が、一般に不確かであったことの結果にすぎない。したがってまた、教育からはじまって、すべてが中途半端で不確実であり、責任を恐れ、その結果、ついには、害悪だと十分わかっていてさえ、臆病にもそれをがまんしてしまうのである。人道主義的昏迷（こんめい）が流行し、そして弊害に弱々しく妥協し、個人を大事にすることによって、何百万人もの将来を犠牲にするのだ。

どれほど、こうした一般的な心の分裂が流行していたかは、戦前の宗教状態の考察が教えてくれる。

ここでもまた、一元的で、効果ある世界観的信仰が、国民の大部分にとって、とっくの昔に失われていたのである。そのさい、教会から公に縁を切った信者たちは、まるっきり無関心な人々よりも、より小さな役割しか、果たしていないのだ。新教・旧教両派が、それぞれの教えに、新しい信者を導こうとして、アジアやアフリカの伝道にしがみついている間に――その活動は、とくに回教の信仰の押しの強さと比較すれば、非常につつましやかな効果しか示すことができなかった――ヨーロッパそれ自体では、何百万、そしてさらにもう何百万ものまじめな信者を失っている。かれらは宗教生活に対して、一般に冷淡にふるまうか、でなければ、やはり自分独自の道を歩むかのどちらかである。その結果は、とくに倫理的に見て、望ましいことではないのだ。

また、ますます激しくなってきている、各教会の教義の基礎に対する、闘争も注意されなければならない。しかし、この人間の世界で、教義なくして、宗教的信仰が実際に続くものとは考えられない。国民大衆は哲学者の集合ではない。しかも、まさにこの大衆にとっては、しばしば、信仰は倫理的世界観一般の唯一の基礎なのである。さまざまな代用手段も結果においては、それらが今までの宗教的信条にかわる有用な代償と認められえない場合には、あまり有効ではないことが証明されている。しかし、宗教的教義と信仰が、広い社会層を現実にとらえねばならぬというのなら、この信仰内容が絶対的な権威をもっているということが、あらゆる効力の基礎であるのだ。だから、幾十万のすぐれた人々は、なるほど、そのようなものがなくても、理性的に、賢明に生きてゆけるとしても、しかし、他の幾百万の人々にはまったく欠くことのできないような、その時々の生活様式が一般生活に対してもっているものこそ、国家にとっては国家原理であり、その時々の宗教にとっては教義なのだ。これによってはじめて、不確かな、無限に解釈が可能であり、純粋に精神的な、理念もきっぱりと境界が

つけられ、一つの形式にはめこまれる。このような形式をもたなければ、理念はけっして信仰とはなりえないだろう。そうする以外には、理念が、ある形而上学的直観、いや簡単にいって、哲学的意見を越え出ることはできないだろう。したがって、教養そのものに対する攻撃は、国家の一般的、法律的基礎に対する闘争と非常によく似ている。そして、この闘争が完全な国家的無政府状態でもって終りを告げるのと同じように、さきの攻撃も無価値な宗教的ニヒリズムに終るに違いない。

しかし、政治家にとって、ある宗教の価値が評価される場合、その宗教にたまたま付随している欠点によるよりも、むしろ、明らかにもっとよいと思える代用物がもつ美点によって、それは実行される必要がある。そしてそのような代用物が見たところ欠けている場合に、現在あるものを破壊しうるのはバカか、犯罪者のみである。

もちろん、宗教的観念に、あまりにも純粋なこの世の問題を負わせ過ぎて、きわめてひんぱんに、いわゆる精密科学とまったく不必要な衝突を引き起している人々は、このあまり喜ばしくない宗教状態に対して、その責任が小さくないのである。このような衝突の場合、猛烈な闘争の結果ではあるが、勝利はほとんどつねに科学の上に輝くのであり、そして宗教は、単に表面的な知識のわくを越えることができぬ、すべての人々の目からは、重大な損害をこうむるであろう。

**宗教の政治的悪用**　しかしなお、宗教的信念を、政治的目的のために悪用することによって引き起された荒廃は、もっとも不愉快である。自分たちの政治に、より適切にいうならば、むしろ事業に役立ってくれる手段を、宗教の中に見出そうとするようなあさましい不正商人は、実際のところ、どんなに鋭くやっつけてやっても、十分ということはない。これらの厚かましい嘘つき連中は、もちろ

ん、他の罪人たちに聞えうるようにステントル[18]のような大声でもって、自分たちの信仰告白を全世界に向かって叫んでいるが、しかしそれは、必要ならば死にもしようというためではなく、よりよい生活をしうるために、そうしているのだ。相応の代価さえあればただ一回の政治的な不正取引のために、全信条の精神がかれらにとっては売物になる。十の議席のためには、かれらはあらゆる宗教の不倶戴天の敵であるマルクシズムと手を結ぶのだ――一つの大臣のいすのためには、かれらはおそらく悪魔とでも結婚するのを承知するだろう。もちろん、このことはいくらかまだ残っている体面が悪魔を追っぱらわなければ、という話ではあるが。

戦前のドイツで、宗教生活が多くの人々にとって不愉快な臭味を感じさせたが、これにはいわゆる「キリスト教」政党の側から、キリスト教に対して加えられた悪用に責任があったし、同様に、カトリックの信条を政党と同一視しようとした人々の恥知らずにも責任があった。

このすりかえは、多くの役にも立たぬ人間をたしかに議席につけたが、他方教会にはわざわいをもたらした、致命的なものであった。

だが、その結果は国民のすべてが負わなければならなかった。そのさい、それから生じた宗教生活のゆるみによる結末は、そうでなくても、すべてが軟弱に、また不安定になりはじめて、慣習と道徳の伝統的基礎の崩壊がさし迫っていた、そのような時代に現われたのだ。

このことはまた、わが民族体に入ったひびであり、割目であった。それは特別の荷重がかけられないかぎり、危険ではなかったが、大きなでき事によって重圧がかけられて、国民の内面的緊密さの問題が、決定的に重大な意味をもちはじめるや、不幸を招かずにはいなかったのだ。

*

**ドイツ政治の無目標**　まったく同様に、政治の領域でも、注意深く眺めるものにとっては、害悪が存在していたのである。これら害悪は、近いうちに改善や、変更が企てられねば、ドイツ国の来るべき没落の徴候と見なされえたし、また、そのように見なされなければならぬものであった。ドイツ国内政治、および外交における無目標は、意識して目をつむっているのでないかぎり、だれにも明らかなことだった。妥協政策は、ビスマルクの「政治とは可能なことについての技術である」といった見解に、きわめてよく合致しているように見えた。だが、ビスマルクと後のドイツ首相の間には、少しばかり相違が存在した。その相違が、前者に政治の本質についてそのような言明をさせたのであるが、他方その同じ見解が、かれの後継者の口からはまったく違った意味を与えられねばならなかったのだ。なにしろ、ビスマルクはこの命題でもって、ある一定の政治目標を達成するのに、すべての可能な手段を用いること、とくに、あらゆる可能な手段に向かって行動すべきであることを、いおうとしただけである。だが、かれの後継者はこの言明の中に、およそ政治的思想とか、あるいは政治的目標さえもたなくてよいのだ、その必要性から晴れて解放されるのだ、と読み取ったのである。そして、政治的目標は、当時のドイツ国の指導層にとって、現実にはもはや存在しなかったのである。なにしろ、かれらには、ある特定の世界観による必要な基礎づけも、また政治生活全般の内部を支配する発展法則に対して必要な、明瞭（めいりょう）な認識も欠けていたのだ。

**戦前の議会政治の無能**　この方面での混濁を見、また国政の無計画、無思慮を責め、したがって、政治の内面的な弱点と空虚さを、きわめてよく認識した人々も数少なくなかったが、しかし、かれらは政治生活では局外者であるに過ぎなかった。政府の官職にある人々は、今日でもまだそうであるよ

うに、フーストン・スチュアート・チェムバレン[19]のような人の認識を、まったく冷淡に無視したのである。これらの人々は、自分でなにかを考えるには、愚か過ぎるし、そして他人から必要なことを学ぶには思いあがり過ぎていた——これはオクセンシェルナー[20]に、「世界は分別の一かけらで支配される」と叫ばせた、まったく永遠の真理である。もちろん、ほとんどすべての省参事官などは、そのかけらが一つの原子に具体化されたものに過ぎないのだ。ドイツが共和国になってからは、もちろん、そのことはもう当てはまらない——それゆえ、共和国保護法によっても、そのようなことを信じたり、口に出したりするのが禁止されているのだ。しかし、オクセンシェルナーにとっては、生きていたのがすでに当時のことであり、けっして今日の、このように分別に富んだ共和国でなかったことは、幸福なことであった。

すでに戦前から、国家の力が具体化されるべき制度、つまり議会、ライヒスタークはいろいろな面で、最大の弱点と認識されていた。臆病と無責任とが、ここでは申し分ないほど協力していた。

今日、しばしば、ドイツの議会政治は「革命以後無能になった」といわれているのを聞くが、このことは、無思慮の一例である。その言葉によっては、まるで、革命の前はなにかそんなではなかったかのように、ややもすれば受けとられてしまう。現実には、この議会という制度は、まったく破壊的にしか働けないので——大部分のものがまだ目隠し革をつけられ、なにも見ず、または見ようとも思わなかった時代にも、すでに、その制度はそうした働きをしていたのである。なにしろ、ドイツが崩壊したのは、この制度に負うところが少なくないからである。しかし、破局がもっと早くからはじまらなかったのは、帝国議会の手柄であるなどと見なすことはできない。その手柄は、ドイツ国民とドイツ帝国のこの墓掘人どもの活動に対して、平和な時代にも、なお反対していた抵抗にさまたげられな

ければならぬ。

**議会的中途半端**　この制度が、直接的、間接的に作り出している莫大な数にのぼる破壊的な害悪から、わたしはただ一つの弊害をとりだそうと思う。それはあらゆる時代に見られる、このもっとも無責任な制度のもつ、内面的本質に対応するものである。すなわち、内政と外交についてドイツの政治的指導層が示したぞっとするような中途半端と、弱々しい態度である。これは第一に、帝国議会の影響に帰せられるものであるが、それはまた、政治的崩壊の主因となったのだ。

とにかく、この機会の影響下にあるものは、すべて中途半端であった。ただ好きなものをなんでも見たらよい、そうすれば、すぐ理解されるだろう。

帝国の外交面での同盟政策は中途半端で、弱々しかった。平和を保とうとして、どうともならなくなり、戦争を目指して進まなければならなくなったのだ。

ポーランド政策が中途半端だった。真剣に、断固たる手段を一度もとったことがなく、刺激ばかり与えていた。その結果は、ドイツ主義の勝利でもなければ、ポーランド人たちとの和解でもなかった。そのかわりに、ただロシアとの敵対関係が生まれたのである。

エルザス・ロートリンゲン問題の解決が中途半端だった。容赦のないげんこつでもって、断固として、フランスという多頭蛇の頭を粉砕して、その次には、エルザス人に平等権を認めてやることが必要だったが、そのどちらも行なわれなかった。また絶対にそれはできなかったのである。なにしろ、最大の政党諸陣営の中に、また最大の反逆者連中がいたのだ——たとえば、中央党にはヴェタレ氏がいた。

しかし、これらすべてのことは、その存在が結局、ドイツの存続にかかわるような力、つまり陸軍をも、この一般的な中途半端が犠牲にするようなことがなかったならば、まだ我慢できたといえる。

**陸軍に対する議会政治の犯罪**　いわゆる「ドイツ帝国議会」が、ここで犯したことがらは、ただそれだけで、どのような時代になっても、ドイツ国民ののろいを負わされるに十分である。きわめてくだらぬ理由から、このような議会主義政党のルンペン連中は、国民の手から自己保存の武器、つまり、わが民族の自由と独立をまもるかけがえのない保証を奪い取り、粉砕したのである。今日、フランドル平野にある墓を開くならば、その中から血まみれの告発者が立ちあがってくるに違いない、最良の若いドイツ人が何十万となくだ。かれらは、これらの良心をもたぬ議会政治の犯罪者連中によって、劣悪で中途半端な訓練をうけ、死神の腕の中へ追い立てられたのだ。祖国はかれらと幾百万の身体障害者および死者を失った。そして、それもただたんに数百の国民を裏切る者どもに、政治上の不正取引や、ゆすりを、あるいはまた、空論的な理論の機械的なおしゃべりさえも、可能にするためだったのである。

ユダヤ主義がそのマルクス主義的、民主主義的新聞によって、ドイツ「軍国主義」についての嘘を全世界にばらまき、そうしてドイツにあらゆる手段でもって責任をかぶせようと努めていた時、他方では、マルクス主義的、民主主義的政党は、ドイツの国民力の包括的な養成を、すべて拒否したのである。そのさい、その拒否によって行なわれた巨大な犯罪というものは、来たるべき戦争が起きた場合には、もちろん全国民が武装しなければならず、したがって自分達のいわゆる「国民代表」を勤める、このとんでもない代議士どもの卑陋(ひろう)さのために、幾百万のドイツ人が劣悪で、中途半端な訓練の

まま、敵の前に追い立てられるに違いないということを少しでも考えた人々なら、だれでもすぐにわかったに違いない。しかし、その犯罪によって生じた、つまり、この議会のやり手ばばあ連中の残酷で、粗野な良心欠如から出てきた結果をまったく無視した場合でさえも、戦争の開始時におけるこのような既教育兵の欠乏はとかく敗戦に導くだけでしかなかったのだ。このことは、その後、世界大戦でまったく恐ろしいほど証明されもしたのだった。

ドイツ国民の自由と独立のためのこの戦争が敗北したことは、すでに、平和時代に現われていた、全国民力を祖国の防衛のために徴発するさいの中途半端と弱さの結果だったのだ。

＊

**誤った艦船建造政策**　陸上で、新兵がほんの申しわけ程度しか訓練されなかったとすれば、海上では、国家の自己保存のための武器を、多かれ少なかれ無価値にするような、同様の中途半端が効果を現わしていた。しかし残念ながら、海軍の指導層自身、中途半端な精神に感染してしまっていた。造船台におかれていたすべての艦船が、同じ時期にすでに造船台から進水させられたイギリスのものに比べて幾分小さく造られていた傾向は、目先きのきかぬことであったし、しかもそれ以上に考えのないことであった。最初から純粋な数の上で仮想敵国と肩を並べることができないような艦隊は、とくに数の不足分を一隻一隻の軍艦の敵にまさった戦闘力で補おうとしなければならない。優越した戦闘力が問題であるのであって、「性能」における架空の優越性が問題であるのではない。事実、現代技術は非常に進歩しており、各々の文明国では、ほとんど変わらなくなっているのだから、一強国の軍艦が、他国の同トン数の軍艦よりも、決定的に大きな戦闘価値をもつことが可能だ、などとは考えられぬ。まして、より小さな排水量でもって、より大きなものに対して、優越することなどそれ以上

に考えられないことである。

事実、ドイツ軍艦のより小さなトン数というものは、速力と、装備を犠牲にして、はじめてできたのである。この事実を正当化しようとして、使用されたきまり文句は、たしかに、平和時代にこれに関し権威筋が用いた論理の中にまったくひどい欠陥があったことを知らせてくれた。つまりかれらは、ドイツの大砲装備は、イギリスのに比べて明らかにまさっているから、ドイツの二八サンチ砲は、イギリスの三〇・五サンチ砲に対して、射撃性能において、けっして劣ることはない!! と説明したのだ。

しかし、さらにそれだからこそ、ますます同じように、三〇・五サンチ砲に代えるのが義務であったはずなのだ。なぜなら、目標は同じ戦闘力の獲得ではなく、優越した戦闘力の獲得であるべきはずだったからである。そうでなければ、当然、陸軍でも四二サンチ臼砲の発注は余分だっただろう。なにしろ、ドイツの二一サンチ臼砲はあらゆるその当時に存在したフランスの曲射砲に文句なしにずっとまさっていたし、また同様に、三〇・五サンチ臼砲でも要塞が落とせたことはたしかだった。しかし、陸軍の指導層は正しくかんがえたが、海軍のほうは残念にもそうでなかった。

優越した大砲の性能と卓越した速力を断念したことは、だが、まったくのところ、根本的に間違ったいわゆる「危険意識」にもとづくものだった。海軍の指導層は、もう艦隊拡張の形式からして攻撃を断念し、必然的にはじめから防御に没頭したのだ。しかし、そのことによって、決定的な勝利もあきらめたのだ。なにしろ、決定的な勝利は永遠に攻撃の中にのみあり、またありうるはずだからである。より速力が遅く、装備の劣った軍艦は多くの場合、より速く、また強力に装備された敵艦により敵に有利な射程内で撃沈されるだろう。これは、わが国のたくさんの巡洋艦が痛切に感じたことに違い

ない。海軍指導層の平時の見方が、どれほど根本的に間違っていたかは戦争が示した。戦争は、可能なかぎり、古い軍艦の改装と新しい軍艦の備砲改良を余儀なくさせたのだ。しかしスカーゲラク[21]の海戦で、ドイツ軍艦がイギリス軍艦と同じトン数、同じ備砲、そして同じ速力をもっていたと仮定するなら、命中が確かで、効力の大きなドイツの三八サンチ榴弾の大暴風の下に、イギリス艦隊は海の墓場に葬られたに違いない。

日本は以前、これとは違った艦隊政策を推し進めた。日本では、原則として、新造艦一隻一隻のすべてに対して、仮想敵より優越した戦闘力を与えることに、まったく重点がおかれたのだ。したがって、日本艦隊がそういう風にして、攻撃的出動が可能になったのも、その政策のお陰であった。

陸軍の指導層は、そうした原理的に間違った考え方から、まだ解放されていたが、他方海軍は、残念ながら、すでに、よりよい「議会主義的」代表となっていて、議会の精神に打倒されていたのだ。海軍は、中途半端な観念でもって組織され、後になっても、同じような観点によって拡張された。そうした場合にも、なお不滅の名声として、海軍が獲得しえたものは、かろうじて、すぐれたドイツ軍人の労苦、個々の士官と水兵の能力、および比類のない英雄的精神の賜物であったのだ。海軍の以前の最高指導層が、独創性の面で、かれらに負けなかったとするなら、かれらの犠牲もむだではなかったに違いない。

そのようにして、恐らくは、平時において、海軍の指導的人物がまさしく議会政治によりまさった技能をもっていたことが、海軍のわざわいとなったのだ。残念ながら、海軍の建設においても、純粋な軍事的観点のかわりに、議会的観点が決定的な役割を果たしはじめたのだった。中途半端、弱気、

それに加えて議会制度に固有な、貧弱な論理的思考、これらが艦隊の指導層の精神に影響を与えていた。

**中途半端に対する陸軍の闘争**　陸軍は、すでに強調したように、このような根本的に間違った考え方から、まだ遠ざかっていた。とくに、参謀本部づきの当時大佐であった、ルーデンドルフは、帝国議会が国民の死活問題に対して、多くの場合、それらを否決してしまった犯罪的中途半端と、弱気に対して、絶望的闘争を行なっていた。当時、この士官が戦い抜いた闘争が、それにもかかわらず、むだであったとはいえ、その責任の半分はまさしく議会が、そして、他の半分は、もし可能なら、それらよりも、もっとあわれな態度と弱気を示したといえるドイツ首相、ベートマン・ホルヴェークが負うものであった。このことは、ドイツ崩壊の責任者どもが、自分一人で国家的利益のこのような放任に反対したまさにその人物に、今日その崩壊の責任を押しつけようとすることを、なんら妨げないのである。――これらの、生まれながらのやみ商人連中には、多かれ少なかれ、嘘をつくことなど問題にならぬのだ。

これらの、きわめて無責任なものどもの途方もない軽率さによって、国民に負わされたすべての犠牲をじっくりと考え、無益な犠牲となったすべての死者と身体障害者を念頭におくならば、そしてまた、かぎりない屈辱と不名誉、われわれが今日当面している無限のみじめさをも考えるならば、そしてまた、これらすべてがただ、良心のない野心家や、官職を求める連中の群に、大臣の椅子への通路をあけてやるだけだったことを知るならば、その時は、これらの卑劣な人間は、実際のところ、ごろつき、ならずもの、やくざ、犯罪者といったような言葉でしか呼ぶことができないのだ。そうでなけ

れば、このような表現が言語の慣用中に存在する意味と目的がまったく理解できなくなるだろう。なにしろ、これらの国民を裏切る連中に比較すれば売春仲介者はみんな、まだ紳士といえる。

＊

しかし、旧ドイツ国のあらゆる実際の暗黒面は、奇妙なことに、それによって、国民の内面的堅実さに害が加えられねばならなくなった時、やっと、目にはいってきたのだ。まったく、そうした場合には、不愉快な真実がまっすぐに大衆に向かって叫び出されるのだったが、だが、そうでない時には、多くのことについて、むしろ、つつましやかに沈黙され、いや、一部はまるっきり否定されてさえいたのである。しかも、ある問題を公然と扱えば、おそらく、改良がなされえたでもあろうような場合に、そうした態度がとられたのである。そのさい政府の権威ある地位の人々は、宣伝の価値と本質については、ほとんどなにも知らなかったのだ。宣伝を賢明に、継続して使用すれば、国民自身に天国を地獄と思わせることができるし、逆に、きわめてみじめな生活を極楽と思わせることもできる。このことは、ユダヤ人だけが知っていたのであり、かれらはそれに即応して行動もしていたのだ。ドイツ人、より適切にいえばドイツ人の政府は、その点について、ぼんやりした予感すらも、もたなかったのだ。

これは戦争中、もっともひどく復讐（ふくしゅう）されなければならなかった。

＊

**ドイツの美点**　ここで示されたような、あるいはその他無数にも存在していた、戦前のドイツ人の生活におけるあらゆる害悪には、多くの美点も隣り合って存在していた。公正に検討してみれば、ほとんどのわれわれの欠点は、大部分が他の国や国民にも所有されており、それどころかわれわれを

はるかに圧倒する欠点も多いということをすら認めなければならない。しかも、かれらは、われわれがもつ真の美点の多くを所有しなかった。

これらの美点の第一のものとして、ドイツ民族がほとんどすべてのヨーロッパ民族の中で、今なお自国の経済の国民的性格を、もっとも多く保持しようと努力し、多くの悪い徴候があるにもかかわらず、国際的な金融支配にはもっとも従うことが少なかった、という事実を、とくに取り上げることができる。もちろん、それは危険な美点であり、後には、世界大戦を起させる最大の原因となったものである。

しかし、この美点および他の多くの美点を度外視すれば、無数にある健全な国民の力の源泉から、その性質が模範的であり、のみならず部分的にはおそらく無比の存在であったような三つの制度が取り出されなければならない。

新旧両統治の代表者[22] 第一のものとしては、政体そのもの、および近代になってそうした政体がドイツで見出した特徴がある。

ここでは事実上、一人一人の君主たちを度外視してよかろう。かれらは人間として、この大地、およびその大地の息子たちがもつのがつねであるすべての欠点から免れなかった。——もし、この点について寛大でないとしたら、その時はおよそ現状について絶望せざるをえないだろう、なにしろ現在の統治の代表者達も、まさに人物として見れば、たしかに精神的にも道徳的にもきわめて凡庸な人間であり、おそらく、人々が長く考えあぐんだ末にやっと思いだせもするような人々であるからである。ドイツ革命の「価値」が、一九一八年十一月以来革命によってドイツ民族に贈られた人物の価値およ

び大きさでもって計られるならば、もはや保護法等(23)でもって口を閉じさせることのできぬ後世の人々の判断に対しては、恥ずかしくて顔をおおわなければなるまい。そして後世の人々は、そんな法律がないものだから、われわれのだれもが今日もうすでに知っていることを、すなわち、わが新ドイツの指導者どもにあっては、知恵と美徳の乏しいのに反比例して口と悪徳が発達しているということを、語るだろう。

たしかに、君主政は多くの人々にとって、なかんずく大衆にとってよそよそしいものになっていた。これは、君主たちがつねに――われわれはあえていうが――きわめて賢明な人物によって、そしてとくにきわめて誠実な人物によって取り巻かれているとは限らなかった、という事実の結果だった。残念ながら、一部の君主たちは、率直な性質の人よりも追従家をより愛した。それゆえかれらもまたこれらの取り巻き連中に「教育された」。これは、世界が多くの古い考え方を大きく変えてしまった時代、しかも、もちろんこの大変動が宮廷に数多く古くから受け継がれている慣習の批判にまでも及ばずにすまなかったそのような時代には、きわめて重大な損害なのであった。

**古い統治の心理的誤ち**　それだから、世紀の変わり目の頃には、一般の人間はもはや制服の隊列の前を馬で巡られるプリンセスに対しても、特別の敬慕の念を抱くことはできなかった。そのようなパレードが国民の目にどんな印象を与えるかについて、まったく正しく考えられていなかったように見える。もし正しく考えられていたとすれば、あのような不幸な場面には、おそらくけっして立ち至らなかったはずである。こういう高貴な人々の、いつもまったく純粋だとは限らない人道主義的夢想もまた、人々をひきつけるよりもむしろ反感を呼び起した。たとえば、某プリンセスがある無料食堂

しても、しかし当時では効果は逆であった。その場合、高貴の方が、自分の試みた昼食がほんのちょっぴりではあるが、いつものと違っていたことに実際は感づかれなかった、ということは造作なく想像できる。——しかし、民衆がこのことを知っていたことでまったく十分であった。

そのようにして、おそらくはきわめて良かったもくろみも、たとえ人々をほんとうに怒らしてしまわないにしても、笑うべきものとなったのだ。

毎度ことわざのように語られている君主の節度つまり、大変な早起きや、夜遅くまで公式の仕事に精を出されること、さらにはさし迫った栄養不良の危険に絶えずさらされていることなどについて叙述することはそれにもかかわらず、大変気づかわしく思われる発言を呼び起した。君主がみずからなにを、どれほどたくさんめし上がるかを知るということなど人々は実際少しも望んでいなかった。人々は君主に「十分な」食事時間をもちろん喜んで差し上げたし、また、君主におよそ必要な睡眠を妨げようなどとは夢にも望まなかった。人々はただ君主がいつも個性をもった人間として、自分の一門の名前と国家に名誉をもたらし、支配者として自分の義務を果たしさえすれば満足していた。おとぎ話を語るのは、ほとんど無益であるばかりか、かえって、よりいっそうの損害を与えたのだ。

このことや、多くのそれに類したことがらは、それにもかかわらず、ささいなことに過ぎなかった。もともと自分たちは上から支配されており、個人はしたがって何もそれ以上心配する必要はない、という確信が、残念ながら国民の非常に大きな部分に、ますます影響を与えだしたのは一層悪いことであった。政府が実際によいか、さもなくば、少なくとも最善を欲していたかぎりはまだ問題はない。しかしひとたび、それ自体は善を望んでいた古い政府のかわりに、新しい、より節度に欠けた政府が

登場するとでもしたならば、災いあれ、だ。その時、意志に欠けた従順さと子供じみた信仰が、ただ想像され得る限りでも一番ひどい災いとなった。

しかし、このような、そしてまた多くの別の弱点に対して、他方まったく疑問の余地がないもろもろの価値が存在していた。

**君主政体の安定性**　その価値の第一は、君主政体によって制約されて、全国家指導が安定していたこと、および国家における最高の地位が功名心の盛んな政治家の思惑による混乱から免れていたことにある。その上、この制度それ自体の尊厳さや、すでにそれに基づいた制度の権威も考えられる。なお、また同様に、官吏層や、とくに、軍隊が政党政治的義務遂行の水準より高められたこともある。それらに加えて、国家の頂点が君主によって人格、および責任引き受けの模範として、個人に具体化していたという美点がある。なにしろ、君主は議会の多数決という偶然の積み重ねよりも、より強力に責任を負わなければならないのだ。——天下に周知な、ドイツ統治の清潔さは、第一にこの点に帰せられるべきものだった。そして、最後に、ドイツ国民に対してもつ君主政の文化的価値は、高度なものであって、非常によく他の欠点を償うことができたのである。ドイツの各々の王城は、相変わらず、芸術的趣味の守護者であった。この趣味も、現在の唯物的な時代では、いずれにしろ、ますます死滅に迫られているのだ。まさしく十九世紀において、ドイツの諸王侯が芸術と、学問のために行なったことは模範的であった。今日の時代は、どっちみち、それらと比較されるわけにもゆかぬのだ。

＊

**陸軍——代理のきかぬ学校**　われわれの民族体の解体がはじまり、ゆっくりと、それが広がって

いったこの時代に、もっとも価値の大きい要素としてはただ陸軍だけが記録されなければならない。それは、ドイツ国民のもっとも強力な学校であった。あらゆる敵の憎悪が、まさに、国民の自己保存と自由のこの保護所に向けられたのも理由がないことではない。陸軍が、あらゆる劣ったものから中傷され、憎まれ、非難され、しかも、恐れられもした、という真実を確認すること以上に、この比類のない制度に対する輝かしい記念碑設立はありえないのだ。ヴェルサイユの国際的な、民族搾取者連中[24]の憤慨が、第一に、旧ドイツ軍に向けられたことは、この軍隊が株式取引所の威力から、わが国民の自由を守る楯であったことを、いよいよ理解させてくれるものだ。この警告する勢力がなければ、われわれ国民に対するヴェルサイユの意図は、すでにずっと以前に、遂行されていたに違いない。ドイツ国民が陸軍に負っているところをたった一言に要約するなら、「すべて」なのである。

陸軍が当時、無条件な責任引受けの教育を行なった時代は、この特性がすでに、ほとんどまれとなってしまい、あらゆる無責任の模範である議会からはじまる責任の回避がますます流行していたのである。陸軍はさらに人間的な勇気を教育したが、その時代は、臆病が伝染病のように広がりかけ、公共の福祉のために尽そうとする犠牲心は、すでにほとんどばかげたことと見なされ、自分の「自我」をもっとも大切にし、また助長することを理解している人だけがわずかに賢いものであると思われていたのだ。陸軍は、国民の幸福が黒人、ドイツ人、中国人、フランス人、イギリス人等の間の国際的親善という嘘っぱちのきまり文句の中に探されることなく、自己の民族性のもつ力と団結の中に求められなければならぬことを、一人一人のドイツ人に、なおも、教えていた学校であったのだ。

陸軍は決断力を教育していたが、その頃、他の生活では、すでに不決断と、迷いとが人間の行動をとらえはじめていた。知ったかぶりをする人々が、いたるところで音頭を取っていた時代に、陸軍は、

つねにどのような命令も、命令しないよりはよいという原則を、尊重することを命じようとしたのだ。この比類のない原則の中に、まだ堕落していない、がんじょうな健康さが見られた。この健康さは、陸軍と、その教育が、この根源力を永続的に、回復することに注意しなかったとしたら、われわれの一般的な生活からは、もはや、ずっと以前に失われていたに違いなかった。人々は、現在のわが国指導層について、どんな行為でも奮発してやってみるということができない、驚くべき不決断だけでも、とにかく見る必要がある。ただしかし新しい略奪的な、押しつけ条約に署名を強制されたときだけは、例外であった。あの場合には、かれらは責任はもちろんすべて拒絶し、議会速記者のようなすばやさで、かれらに提出されさえすればよしとされたようなものすべてに、署名したのだ。なにしろ、この場合は、決断が容易になされた。とにかく決断はかれらに命令されていたからである。

陸軍は理想主義と、祖国およびその偉大さへの献身を教育したが、他方その他の生活では貪欲と唯物主義が広がっていた。陸軍は階級分離に対して、国民の一致団結を教えたが、ここにおそらく唯一の欠点として、一年志願兵制度があった。なぜ欠点を示すものというのかといえば、それによって、無条件な平等という原理が破壊されて、高等教育を受けたものはふたたび、共通な境遇のわくの外に置かれることになったからであり、またほかならぬその反対のことが利益があったに違いないからである。いずれにしても、わが国の上層部は非常な世間知らずで、自国民に対してますます距離を開いてゆく中にあって、陸軍が、もし、少なくともかれらの秩序の中だけでも、いわゆるインテリの分けへだてをすべて避けたとするなら、まさしく、かれらこそ、特に祝福に満ちた働きをなしえたに違いない。このことがなされなかったのは誤ちであった。しかし、この世界で、どんな制度が誤ちを犯さずにいるだろうか？　しかし、この制度では、いずれにしてもよい点のほうが、まったく圧倒的だっ

たので、少しばかりの欠陥は、人間の不十分さの平均より、はるかに低かったのである。

けれども、頭数でなんでも多数決する時代にあって、多数の上に頭の持ち主を引き上げたことは、旧ドイツ帝国陸軍の最高の功績と考えられなければならない。陸軍は、数を盲目的に崇拝するようなユダヤ的、民主主義的思想に対して、人格に対する信念を支持したのだ。したがって、軍隊は実際に、近代がもっとも入用としたもの、つまり、男らしい男を教育したのだ。――無気力と女性化が一般的に広がっている堕落生活の泥沼の中で、陸軍の隊列から、毎年三十五万の力に満ちた青年男子が勢いよく出ていった。かれらは二年間の訓練により、青年の柔弱さを失って、鋼鉄のように固い肉体を獲得したのであった。そしてこの年月の間に、服従することをならった若者は、その後に、はじめて、命令するのを学ぶことができたのだ。歩き方で、もう満期兵は見分けられたのである。

これがドイツ国民の上級学校であった。そして、そねみと貪欲から、国家の無気力と市民の無防備を必要とし、また望んだ連中のはげしい憎悪がこの学校に集中したのも理由がないことではなかった。多くのドイツ人が、だまされてか、あるいは悪意からか、見ようと望まなかったことを、他国の人々は認識していたのである。それは、ドイツ陸軍がドイツ国民の自由とかれらの子供の養育に奉仕する、もっとも強力な武器であったということである。

＊

**比類のない官吏団**　政体と陸軍に続いて、第三のものとして、旧ドイツ帝国の比類のない官吏団が同盟に加わっていた。

ドイツは、世界でもっともよく組織され、もっともよく統治された国であった。ドイツの国家官吏は、とかく、官僚主義的で、旧式だと陰口をたたかれもしたが、他の国々では、それだからといって、

よりましだったわけでもない。そればかりか、むしろ、もっと悪かったのだ。他の国々がもっていなかったものは、この装置のびっくりするような堅実さと、それをになっていた人々の清潔で、信用できる心術であった。やはり、いくらかは旧式でも、しかし正直で忠実なほうが、開けていて、現代的であっても、だが性格が劣等で、今日よく見られるように、無知で、無能力であるより、好ましいものだ。なぜなら、戦前のドイツ統治は、なるほど官僚主義的に堅実なことは堅実だったが、けれども、商業上ではよくなかったなどと今日好んでいわれることがあるが、その場合には、次のようにのみ答えられるからである。つまり、世界のどの国が、国有鉄道に関して、ドイツよりも、よりよく管理され、商業的によりよく組織された企業をもっていたか？　と問い返しうるのである。ついに、この模範的機関が国民の手から取り上げられ、現在の共和国の創設者たちのいう意味で、社会化されるに十分機が熟したと見えるまで破壊されたのは、革命による仕事だった。つまり、ドイツ革命の注文者であった国際金融資本に奉仕するほどまで破壊されたのだ。

その頃、ドイツ官吏団と、統治装置が、とくに、目立ったのは、それらが個々の政府から独立していたことであった。それら政府の、その時々の政治的意向は、ドイツ国官吏の地位になんの影響を与えることもできなかった。革命後は、もちろんこのことは根本的に変わってしまったのである。知識と能力のかわりに、党派的見地が現われ、自主的、独立的な性格は、なにかを促進するというより、むしろ妨害するものになってしまった。

**国家の権威**　旧帝国のすばらしい力と強さは、政体と、陸軍および官吏団にもとづいていた。これらは第一に、今日の国家に完全に欠けている特性、つまり、国家の権威の原因であったのだ！　な

にしろ、この権威は議会や州議会のおしゃべりから生まれるものではないし、またその権威を擁護するための法律、あるいはこの権威を厚かましく否認するものをおどすための判決からも生まれはしない。国家権威は、一つの共同体の指導と統治に対して示されてよいし、また示されうる一般的な信頼から生まれるものである。この信頼はなおまた、ただ、一国の政府と行政官庁の無私と誠実さを確固として内心から確信することの結果であり、同様に、法の精神と一般の道徳観のもつ感情とが一致する結果なのである。なぜかといえば、政治組織というものは、権力の圧迫によって持続されるのではなく、それら組織の良さと一国民の利益を代表し、促進する誠実さとに対する信用によって持続されるものである。

＊

**崩壊のもっとも深い原因**　したがって戦前に、ある種の害悪が、どれほどひどく、国民の内面的な強さを腐蝕(ふしょく)し、掘りくずそうと脅かしたかわからないが、しかし、他の国々がこれらほとんどの病気に、ドイツより以上にひどく悩んだにもかかわらず、危機の決定的瞬間に自由がきかなくなって破滅しなどしなかった、ということを忘れてはならない。だが、戦前のドイツの弱点に対しては、また同様に、大きな美点が並んで存在していたということを考える場合、崩壊の究極的原因は、もっと外の領域にありうるし、またあるに違いない。そしてこのことは事実でもあるのだ。

旧帝国の破滅のもっとも深い究極的原因は、人種問題および、それが民族の歴史的発展に対してもつ意味を、認識しなかったことにある。なぜなら、民族生活で起るすべての事件は、偶然の現われなのではなく、たとえ、人間が自分の行為の内面的根拠について意識しえない場合にも、種や人種の自己保存と増殖の衝動が進む自然法則的な過程だからである。

# 第十一章　民族と人種

あまりにも道端にごろごろころがっていて、まったくそのために、かえって一般の世人からかえりみられることのない、あるいは少なくとも認識されることのない真理というものがある。世人はしばしば、こうした自明の理を目隠しされたかのように通りすぎてしまい、もし突然、だれかがそれはやはりあらゆる人が知っていなければならぬものであることを発見するとすれば、極度に驚いてしまう。コロンブスの卵は幾百千となくそこらにころがっているのであり、ただコロンブスのような人々には、まったくまれにしかお目にかかれぬだけのことである。

このように、人間は例外なしに自然の園を歩きまわり、ほとんどあらゆることを見知っており、理解していると思いこんでいる。だが、かれらはほんの少しの例外を除いて、自然の摂理の中でももっとも目立った原則の一つを、盲目のように見ずに通りすぎてしまう。それというのは、この地上の全生物の種が内面的に隔離されているという原則のことである。

すでにきわめて表面的な観察でさえ、自然の生活意志の無限に存在する表現形式のすべてに妥当する、ほとんど鉄則とでもいえるものとして、自己の内部だけに制限された生殖の形式を見つけることができるのだ。動物はどれも同じ種の仲間とだけつがいになる。しじゅうからはしじゅうからのところにゆく、雀科は雀科に、雄のこうのとりは雌のこうのとりに、野ねずみは野ねずみに、はつかねずみははつかねずみに、雄おおかみは雌おおかみに等々である。

異常な状態においてのみ、このことは変更されうるにすぎない。それは第一に、捕まって強制される場合だとか、その外、同じ種の内部での結合が不可能な場合である。けれどもその場合には、自然はあらゆる手段を使ってでもそれに抵抗しはじめるが、もっとも明白な自然の抗議は雑種に対してその先の生殖能力を拒否するか、あるいはその後の子孫の妊娠能力を制限するかであり、しかしほとんどの場合、自然は病気や敵の攻撃に対する抵抗力を奪ってしまうのだ。

それは自然すぎるくらいのことである。

程度がまったく同じではない二つの生物を交配すれば、すべて結果は両方の親の程度の中間となって現われる。つまりこうなのだ。子供は両親の人種的に低いほうよりは、なるほどより高いかも知れぬが、しかし、より高いほうの親ほど高くはならない。その結果として、かれはこのより高い方との闘争の中でやがては負けるだろう。このような結合は、だが、生命そのものをより高度なものに進化させていこうとする自然の意志に反する。この意志が行なわれるための前提は、より高等なものと、より劣等なものとの結合の中にではなく、前者の徹底的な勝利の中に横たわっている。より強いものは支配すべきであり、より弱いものと結合して、そのために自分のすぐれた点を犠牲にしてはならない。ただ、生まれつきの弱虫だけが、このことを残酷だと感じるにすぎない。しかし、それだからこそ、かれも弱い愚かな人間であるにとどまる。なぜかといえば、この法則が支配しないとしたら、あらゆる有機的生物に可能と思われる進化が、まるで、考えられなくなるに違いないからだ。

このように、自然の中で一般に妥当する種族の純血への衝動の結果は、ただたんに、個々の種族を外部から鋭く区画するだけでなく、自分自身の内部でのその種族の一様な本質性を保つことでもある。きつねは相変わらずきつねである。がちょうはがちょう、とらはとら等々であり、区別はせいぜい

個々の実例での力、強さ、賢さ、器用さ、忍耐力がそれぞれ程度を異にしている点にあるにすぎない。だから、がちょうに対して人間的とでもいえるような気まぐれをその根性の奥底にもつかもしれぬような、そんなきつねなどはけっして見当らないだろう。それは、ねずみに対して友好的な愛情をもったねこがいないのと同じことである。

したがって、ここでもまた相互の闘争は、生来の嫌悪によるというよりも、むしろ空腹と性愛から起るとでもいえるものである。どちらの場合にも自然は静かに、いや満足して傍観している。毎日のパンのための闘争は、すべて弱いもの、病弱であり、より決断力に乏しいものを敗北させるが、他方、雌のための雄の闘争はもっとも健全なものにだけ、生殖する権利か、さもなくばその可能性を与える。しかし相変わらず、闘争は種の健全さと抵抗力を促進する手段なのであり、したがってその種の進化の原因でありつづける。

もし、この過程が違ったものであるとしたら、進化と向上はすべて中断し、むしろ、反対のことが現われることだろう。なにしろ、劣等なものは数では、もっとも優れたものをいつも圧倒するものであるから、同じ生命保存の繁殖の可能性があるとすれば、より劣悪なものはきわめて早く増加して、ついに、もっとも優れたものは不可避的に押しのけられてしまうに違いないからである。だからして、より優れたものに有利な改良が企てられなければならぬ。しかし、このことは自然がめんどうをみてくれる。自然は、より弱い部分をたいへん厳しい生活条件に従わせ、そのことだけでも数が制限されるようにするのであるが、しかも、残りのものにも結局、無選択な増加を許さず、ここでも新しく、無情な、力と健全さにもとづく淘汰にぶつからせるのである。

それから、自然はより弱い個々の生物が、より強いものと結合するのさえ望まなかったが、同じよ

うに、より高等な人種がより劣等な人種と混血してしまうのは、それ以上に望まないのである。なぜならば、そうでない場合には、自然によって昔から、おそらくは幾十万年も続けられてきた、より高度なものに進化させてゆくという仕事全体が、一挙に、ふたたび崩れ去ってしまうに違いないからである。

歴史的経験はこのことについて無数の例を示している。それはびっくりするほどの明瞭さでもって、アーリア人種[1]がより劣等な民族と混血した場合、その結果としてかならず文化のにない手であることを止めてしまったということを示している。その住民のほとんど大部分が、劣等な有色民族とはほとんど混血したことのないゲルマン[2]的要素からなり立っている北アメリカは、主にロマン民族[3]の移住民が、幾度となく広い範囲にわたって原住民と混血した中央アメリカや南アメリカとくらべて、別種の人間性と文化をもっている。この一つの例でさえも、人種混血の影響をきわめて明白に認識させるのだ。アメリカ大陸の、人種的に純粋で、混血されることなくすんだゲルマン人は、その大陸の支配者にまでなった。かれらは、自分もまた血の冒瀆の犠牲となって倒れないかぎり、支配者であり続けるだろう。

**人種交配の結果**　したがって、すべて人種交配の結果は、ごく簡単にいえば、つねに次の通りである。つまり、

a　より高等な人種の水準の低下、

b　肉体的、精神的退行と、それにともない徐々にではあるとしても、だが確実に進行する廃疾のはじまりである。

このような展開を招くことは、しかしなんといっても、永遠の創造者の意志に反した罪を犯すことに外ならない。

だが罪であるから、この行為にも報いがくる。

人間が、自然の鉄の論理に反抗することを試みれば、自分自身もまた人間としての存在をもっぱら負っている原則と闘争するはめにおちいる。そこで、自然に反対する人間の行動は自分自身の破滅に行き着かなければならない。

もちろんこの場合、現代の平和主義者からの純粋にユダヤ人的な厚かましい、だが同様愚かな抗議が出るに違いない。「人間は自然をまさに征服しているのではないか！」と。

非常に多くの人が、このユダヤ人的なナンセンスを無思慮にも機械的に口真似し、ついには、自分が一種の自然征服者の役割を演じているのだとまで実際思い込んでしまっている。だがそのさい、かれらの自由になる武器としては観念の外はなにもないのであり、しかも、その観念たるや非常におそまつであって、そんなものをつかって考えていたのでは、真に世界はわからないのである。

**人間と観念**　しかし、人間はどんな事柄についても自然を征服したことなどなく、せいぜい、自然の永遠のなぞと秘密をおおい隠している途方もない、巨大なヴェールのあの端、あるいはこの端をつかみ、持ち上げているにすぎない。また彼は、本当のところ、なにものも発明などせず、全部発見したにすぎない。次に、彼は自然を支配せず、個々の自然法則や秘密についての知識に基づいて、こうした知識がまったく欠けている他の生物の支配者の地位に上ったにすぎない。――以上の諸点を完全に度外視したとしても、ある観念が人類の生成と存在に対する前提を征服することなどできはしな

い。なぜなら、観念それ自体はまったく、ただ人間に依存するものだからである。人間がなければ、この世界に人間の観念など存在しないし、したがって、観念そのものは、どうしても、いつも人間の存在によって、それゆえまた、その存在の前提条件をつくったところのすべての法則によって制約されているのだ。

そして、ただそれだけではないのだ！　一定の諸観念は一定の人間に結びつけられてさえいる。このことは、その内容が精密な科学的真理にではなく、感情の世界に起源をもっている思想、あるいは今日、たいへんすっきりした表現でもってよく用いられているところに従えば、「内面的体験」を描写する思想に、きわめてよく妥当するのである。きびしい論理そのものとはなにも関係がなく、純粋な感情表現、倫理的概念等々を表わしているこれらすべての観念は、人間の存在に縛りつけられているのであって、この人間の精神的な想像力、創造力のおかげで観念も存在できるのである。まさにそれだからこそ、この一定の人種や人間の保存がこうした観念の存続のための前提条件なのである。たとえば、この世界で平和主義的思想が現実に勝利することを心から望んでいる人があるなら、かれはドイツ人による世界の征服を願って、あらゆる手段を用い全力を尽くすべきであろう。なにしろ、その逆にでもなろうものなら、最後のドイツ人とともに、最後の平和主義者もまた死滅するに違いないことは、まったく容易に考えられよう。というのも、他の国民は、この平和主義という自然と理性に反したナンセンスに、残念ながらわれわれ民族が落ち込んだほど、そんなに深く落ち込んだことは、古来ほとんどなかったからである。それゆえ、よかれあしかれ平和主義に行きつくためには、戦争をも辞さないことを、堅い意志で決意する必要があるだろう。他ならぬこの平和主義を、アメリカの救世主ウィルソンも意図した、少なくとも、わがドイツの夢想家連中はそのように信じた――それだか

らこそ、たしかにその目的は達せられた。

実際、平和主義的、人道的観念も、次のような場合には、おそらくまったくよいものとなろう。つまり、最高の人間が、自分をこの地上の唯一の支配者にしてしまうほどまで、あらかじめ世界を征服し、従わさせてしまっているとしたならばの話である。この場合には、その観念から有害な結果の出てくる可能性は、その観念の実際的な適用がまれとなり、しまいには不可能となる程度にまで、まさしく欠けてしまっている。だから、まず闘争が先であり、その後、おそらく平和主義となるだろう。そうでない場合には、人類はその発展の絶頂を通り越してしまったのであり、その終点は、なにかある倫理的観念の支配といったものではなく、野蛮であり、結局、混沌である。ここで、もちろん、二、三の人々は笑うかもしれない。しかし、この遊星はすでに幾百万年も、エーテルの中を人間なしで動いていたのであり、もし、人間が自分の高等な存在を、二、三の正気でないイデオローグたちの観念にではなく、自然の鉄則の認識と、断固としたその適用に負っていることを忘れる場合には、わが遊星はいつかふたたび、そのような状態に戻っていくだろう。

**人種と文化**　われわれが今日、この地上で賞賛しているすべてのもの——科学、芸術、技術、発明——はただ少数の民族、おそらく元来は**唯一**の人種の独創力の産物であるにすぎない。こうした全文化の存続もまた、かれらに依存している。かれらが滅亡すれば、かれらとともに、この地上の美しいものも墓穴に落ち込むのだ。

たとえば、どれほど大地が人間に大きな影響を与えようとも、それにもかかわらず、その影響の結果は、つねに、それぞれ問題となる人種によって違いがあるだろう。ある生活環境が生産性に乏しい

ことは、ある人種をば最高の能率をあげるように駆り立てるだろうが、他の人種の場合には、あらゆる結果をともなうただきわめて辛い貧困や決定的な栄養不良の原因となるにすぎないだろう。民族の内的素質は、外的影響がどのように実際働くか、その様式をつねに決定する。ある民族にとっては飢餓をもたらすことが、他の民族にはねばり強い労働を教える。

過去の偉大な文化はすべて、元来創造的であった人種が血をだめにすることによって死滅したため、滅亡したにすぎなかった。

そのような滅亡の究極的な原因は、つねに、あらゆる文化は人間に依存しているのであって、その逆でないこと、それゆえ一定の文化を保持するためには、それを創造した人間が維持されなければならぬということを忘れたところにある。しかし、この維持はもっともすぐれたもの、より強いものが勝利するという必然性および権利についての鉄則と結びついている。

生きようと望むものは、したがって戦わねばならぬ、この永遠の格闘の世界で、争うことを望まないものは生きるに値しない。

たとえ、そのことが困難であったとしても——いずれはそうしたものだ！　けれども、自然を征服しうると信じ、結局のところ、自然をあざけっているような**人間**の負わねばならぬ運命が、はなはだ苛酷なものであることはたしかである。困窮、不幸、病気がその場合の自然の答えである！

人種についての法則を誤解し、軽蔑する人間は、かれのために予定されたと思われる幸福を現実に失う。かれはもっともすぐれた人種の無敵の進軍を妨害し、そのことによってまた、すべての人間的進歩のための前提条件も妨げるのである。その結果、かれは人間の感受性をもちながら、救うこともできない動物の世界にはいってゆくのだ。

者であったのか、という点について争うことはむだな企てである。現代において、この問いを立てるのはより簡単であり、この場合、答えもまた容易に出てくるし、また明白でもあるのだ。われわれが今日、人類文化について、つまり芸術、科学および技術の成果について目の前に見出すものは、ほとんど、もっぱらアーリア人種の創造的所産である。だが外ならぬこの事実は、アーリア人種だけがそもそもより高度の人間性の創始者であり、それゆえ、われわれが「人間」という言葉で理解しているものの原型をつくり出したという、無根拠とはいえぬ帰納的推理を許すのである。アーリア人種は、その輝く額からは、いかなる時代にもつねに天才の神的なひらめきがとび出し、そしてまた認識として、沈黙する神秘の夜に灯をともし、人間にこの地上の他の生物の支配者となる道を登らせたところのあの火をつねに新たに燃え立たせた人類のプロメテウスである。人々がかれをしめ出したとしたら──そのときは、深いやみがおそらくもはや数千年とたたぬうちに再び地上に降りてくるだろう。そして、人間の文化も消えうせ、世界も荒廃するに違いない。

もし、人類を文化創造者、文化支持者、文化破壊者の三種類に分けるとすれば、第一のものの代表者として、おそらくアーリア人種だけが問題となるに違いなかろう。すべての人間の創造物の基礎や周壁はかれらによって作られており、ただ外面的な形や色だけが、個々の民族のその時々にもつ特徴によって、決定されているにすぎない。かれらはあらゆる人類の進歩に対して、すばらしい構成素材、および設計図を提供したので、ただ完成だけが、その時々の人種の存在様式に適合して遂行されたの

だ。たとえば、数十年もへぬ中に、東部アジアの全部の国が、その基礎は結局、われわれの場合と同様なヘレニズム精神[5]とゲルマンの技術であるような文化を自分たちの国に固有のものだと呼ぶようになるだろう。ただ、**外面的**形式——少なくとも部分的には——だけがアジア的存在様式の特徴を身につけるだろう。日本は多くの人々がそう思っているように、自分の文化にヨーロッパの技術をつけ加えたのではなく、ヨーロッパの科学と技術が日本の特性によって装飾されたのだ。実際生活の基礎は、たとえ、日本文化が——内面的な区別なのだから外観ではよけいにヨーロッパ人の目にはいってくるから——生活の色彩を限定しているにしても、もはや特に日本的な文化ではないのであって、それはヨーロッパやアメリカの、したがってアーリア民族の強力な科学・技術的労作なのである。これらの業績に基づいてのみ、東洋も一般的な人類の進歩についてゆくことができるのだ。これらは日々のパンのための闘争の基礎を作り出し、そのための武器と道具を生み出したのであって、ただ表面的な包装だけが、徐々に日本人の存在様式に調和させられたに過ぎない。

今日以後、かりにヨーロッパとアメリカが滅亡したとして、すべてアーリア人の影響がそれ以上日本に及ぼされなくなったとしよう。その場合、短期間はなお今日の日本の科学と技術の上昇は続くことができるに違いない。しかしわずかな年月で、はやくも泉は水がかれてしまい、日本的特性は強まってゆくだろうが、現在の文化は硬直し、七十年前にアーリア文化の大波によって破られた眠りに再び落ちてゆくだろう。だから、今日の日本の発展がアーリア的源泉に生命を負っているとまったく同様、かつて遠い昔にもまた外国の影響と外国の精神が当時の日本文化の覚醒者（かくせいしゃ）であったのだ。その文化が後になって化石化したり、完全に硬直してしまったという事実は、そのことをもっともよく証明している。こうした硬直は、元来創造的な人種の本質が失われるか、あるいは、文化領域の最初の発

展に動因と素材を与えた、外からの影響が後になって欠けてしまう場合にのみ、一民族に現われうる。ある民族が、文化を他人種から本質的な基礎材料として、うけとり、同化し、加工しても、それから先、外からの影響が絶えてしまうと、またしても硬化するということが確実であるとすれば、このような人種は、おそらく「**文化支持的**」と呼ばれうるが、けっして「**文化創造的**」と呼ばれることはできない。

この観点から個々の民族を検討するならば、存在するのはほとんど例外なしに、本来の**文化創始的**民族ではなく、ほとんどつねに**文化支持的**な民族ばかりであるという事実が明らかになる。

常に、民族発展の次のような概念が生れる。

すなわち、アーリア種族は――しばしば、ほんとうに奇妙なくらいの少ない人数で――異民族を征服し、そして新しい領域の特殊な生活環境（肥沃さ、風土の状態等）によって刺激されつつ、そしてまた人種的に劣った人間を多量に補助手段として自由に利用することに恵まれつつ、かれらのうちに眠っていた精神的、創造的な能力を発展させる。かれらはしばしば数千年、いや数百年もたたぬ間に文化を創造する。それらの文化は、前にすでに触れておいた、大地の特殊な性質や、征服された人間に調和しながらも、自己の存在様式の内面的特徴を、はじめから完全にもっているのだ。だがついに、征服が自分の血の純粋保存という、最初は守られていた原理を犯すようなことになれば、抑圧されている住民と混血しはじめ、それとともに自分の存在に終末をつける。というのは、楽園での人間の堕落には、相変わらずそこからの追放がまっているに違いないからである。

千年以上もたった後、抑圧された人種に征服者の血液が残した白味がかった皮膚の色合いの中に、あるいは、支配者が本来の創造者として、かつて創造したにもかかわらず現在は硬直してしまった文

化の中に、かつての支配民族による最後の明白な痕跡がしばしば示されている。なぜなら、実際の精神的征服者が被征服者の血の中に消滅するやいなや、人類の文化的進歩のたいまつのための燃料もまた失われてしまったからである！　昔の支配者の血による色合いがこの支配者の記念として、かすかな輝きを保っているように、文化生活の夜もまた、かつて光をもたらしたものたちの残した創造物によってやわらかに照らされている。これら創造物は、すべて昔に戻った野蛮を隅々まで照らしており、そして思慮のないせっかちな観察者にはほとんどの場合、かれがのぞいているのはただ過去の鏡であるにもかかわらず、現在の民族の姿を目の前に見ていると思い込ませるものである。

したがってこのような民族は二度にわたり、いやもっとひんぱんにさえも自分の歴史を通じて、必ずしも前の遭遇を思い起すことなく、自己の過去の文化をもたらした人種と接触することが生じうる。無意識的に、かつての主人の血の余燼はこの新しく現われたものにひかれ、強制されてのみはじめは可能だったことが、今や自分の意志で成就されうることとなる。新しい文化の大波は到来し、そのにない手が再び他民族の血液によって滅亡するまでは、継続するのである。

こうした意味を探究し、今日われわれの歴史科学が残念ながらほとんどそうであるような、外面的事実の描出に圧倒されないということが、今後の文化史および世界史の課題であるだろう。

だが、「文化支持的」国民の発展についてのこのスケッチの中にすでに、この地上の真の文化創始者であるアーリア人種自身の生成と働き、および——消滅の姿が現われている。

日々の生活でも、いわゆる天才が世に出るためには特別な機会、いや、しばしば形式的な刺激を必要とするが、民族の生活での天才的人種も事情は同じである。日常の単調さの中では重要な人間もしばしば軽く見られ、周囲の人々の平均以上にそびえ出ることはないのがつねである。ところが、他の

人々が絶望したり、困惑するような状況が現われてくるやいなや、目立たない普通の人間の中から天才的性質がはっきりと伸張してきて、その人間を今まで市民生活の平凡さの中で見ていたすべての人々がびっくりすることもまれではない。――だからこそ、予言者は故郷で重んじられることがまれなのである。(6) このことを観察するためには戦時が一番よい機会なのである。見たところでは無邪気な子供たちの中に、他のものが絶望する困難な時期には突如として決死の決意と氷のように冷静な思慮をもった英雄がぐんぐん成長する。この試練の時期がこなければ、だれもひげの生えていない少年の中に、若い英雄が隠れていることには少しも気がつかないに違いない。天才を登場させるためには、ほとんどの場合、なにかある刺激が必要であった。ある人間の意志をくじいてしまう運命の鉄鎚は、他の人間をにわかに鋼鉄に鍛え、そして、日常のおおいが破れると同時に今までに隠されていた核心が、驚いている世間の人々の眼前にあからさまに露出される。その際この人々はひどくびっくりして、かれらと見かけでは同じ種類の人間が突然別な存在になるなどと信じようと欲しない。この経過は、おそらくあらゆる卓越した人間に対してくり返されるものである。

たとえば、発明者は発明がなされた日にはじめてかれの名声を確実にするとはいっても、だが独創力そのものもまた、そのときになってはじめてその人間の中にはいり込んだなどと考えるのは誤りである。――独創力のひらめきは真に創造的な天分のある人間の頭脳に、生まれた時から存在している。真の独創力はつねに生まれつきであり、けっして教え込まれたり習得されたりするものではない。

だが、これはすでに強調されたように、個々の人間だけに妥当することではなく、人種についてもいえることである。創造的に活動している民族は、たとえ、表面的な観察者の目には認識されえないとしても、昔から、そして徹頭徹尾創造的な天分をもっているのだ。ここでもまた、外からの認知は

つねに実行された行為の結果としてのみ可能である。というのは、その他の人々は独創力そのものを認識することができないで、ただ、この発明、発見、建築物、絵画等々の形態をとって目に見える現象を認識しうるだけだからである。しかし、この場合でもまた、その人々がこの認知に達するまでには、しばしばなお長い時間がかかるのである。個々の卓越した人間の生活において、天才的であるかまたはとにかく非凡である素質も、特別な動機にかられてはじめて実際的な実現に努めるのとまったく同様に、民族の生活においても、存在している創造的な能力や素質の実際の使用は、多くの場合、一定の前提条件がそれに課せられた時はじめて行なわれうるのだ。

われわれはこのことを人類の文化発展のにない手だったし、今でもそうである唯一の人種——アーリア人種——によってもっとも明白に知るのである。運命がこの人種をさまざまな特別な状況の中に連れ込むやいなや、これらの状況はかれらに存在している素質を矢つぎ早に速度を早めて発展させ、明瞭(めいりよう)な形に流し込みはじめる。かれらがそうした場合に創始する文化はほとんどつねに、存在している大地、現地の気候および——征服された人間によって決定的に限定を受ける。もちろん、この最後のものはおおよそ最大の決定的要素である。文化活動に対する技術的前提条件が素朴であればあるだけ、組織的に集中され、応用されることにより、機械の力を代用するような人間の補助手段が存在することを必要とする。より劣等な人間のこのような利用の可能性がなければ、アーリア人種は、けっして、かれらの後代の文化に向かう第一歩を踏み出すことができなかったに違いない。そのことはアーリア人種が慣らすのを心得ていた個々の有用な動物の助けがなくては、今日、まさにこの動物を徐々に必要とさせなくなった技術にかれらが到達しえなかっただろうこととき っちり同じである。「ムーア人は義務を果したら下がってよい」(7)という言葉は、残念ながら十分すぎるくらいの深い意味

をもっているのだ。幾世紀もの間、馬は人間に奉仕し、今や自動車によって馬そのものを余分なものにした発展の基礎を作るため、協力しなければならなかった。幾年もたたぬ間に馬はその活動を止めてしまうだろうが、しかし、馬の以前の協力がなければ、人間はおそらく今日の状態にまで達するのはまず困難だったに違いない。

だから、より高い文化の形成には、より劣った人間の存在が一つのもっとも本質的な前提条件であったが、それはただかれらだけが、それがなくてはより高度の発展がまったく考えられないような、技術的補助手段の不足を補充することができたからである。人類の最初の文化が、慣らされた動物よりも、むしろ、より劣った人間の利用に基づいていたのは確実である。

征服された人種の奴隷化の後に、やっと同じ運命が動物にも襲いはじめたのであり、多くの人々がおそらく信じたがっているようにその逆ではなかった。なぜならまず敗者が鋤(すき)を引っぱった。――そしてかれの後に、はじめて馬が引くようになった。けれども、ただ平和主義の馬鹿者だけが、これを、あらためて人類のいまわしさの特徴だと見なしうるにすぎない。かれらはまさしくこの発展が、結局のところ、その立場に立ってこそこの使徒連中が今日自分たちのいかさま治療を世界にもたらすことができるような、そういった立場に到達するために行なわれなければならなかったことをはっきり意識していない。

人類の進歩は、終りのないはしごを登るのに似ている。まず下の段を踏まねば、上の段に達することはまったくできない。したがって、アーリア人種は現実が示した道をば歩くべきであって、現代の平和主義者の空想が夢見る道を歩んではならなかった。だが現実の道は困難であり、辛いものであるが、ただその道だけが、他の道が人類を好んで夢想させはしても、実際には残念ながら近づけるより

文化に奉仕する最初の技術的な道具であったのだ。

だから、アーリア人種がより劣った民族と遭遇してかれらを征服し、自分の意志に服従させた場所に、最初の文化が生じたのは少しも偶然なことではない。その場合これらの民族は生成しつつあった文化に奉仕する最初の技術的な道具であったのだ。

**混血の結果**　だが、それでもってアーリア人種の進むべき道が、明白に指令されたのではなかった。かれらは征服者として劣った人間を従え、そしてこれらの人間の実際的な活動を自分たちの命令の下に、自分たちの意欲に従って、自分たちの目標のために規制したのだ。しかし、かれらがこれらの人間をそのように辛くはあっても有用な活動に導く際に、かれらは被征服者の生活を保護しただけでなく、そのものたちに、おそらく以前のいわゆる「自由」であった頃よりも、いっそうよい身の上さえも与えたのである。かれらが支配者の地位に断固として固執しているかぎり、現実的に支配者に止まっているだけでなく文化の保持者であり、推進者でもあった。なぜなら、文化はもっぱらかれらの能力、したがってかれらの保持それ自体に基づいていたからである。被征服者がかれら自身を高めはじめ、多分言葉の上でも征服者に近づくようになると、支配者と奴隷の間の厳格な隔壁も崩れた。アーリア人種はかれらの血の純粋性を放棄し、それとともに自分自身のために創造した楽園の居所を失った。かれらは人種の混血によって没落し、徐々に、ますます自分の文化能力を失い、ついには、精神的なだけでなく肉体的にも、自分の先祖たちに似るよりも、むしろ被征服者や原住民に、より似はじめたのである。ある時期は、かれらもまだ現存する文化財で食いつなぐこともできたが、だがその後硬直が現われて、かれらは忘却されてしまった。

そのようにして、文化と国家は新しい創造物に場所をあけるために崩壊する。

混血、およびそれによってひき起された人種の水準の低下は、あらゆる文化の死滅の唯一の原因である。なにしろ、人間は敗戦によって滅亡はしないものであり、ただ純粋な血だけが所有することのできる抵抗力を失うことによって、滅びるものであるからである。

この世界では、よい人種でないものはクズである。

あらゆる世界史的事件は、よかれあしかれもろもろの人種の自己保存衝動の表現にすぎない。

＊

**アーリア人種の意義の根拠**　アーリア人種の本性がもつ、卓越した意義の内的根拠についての問いは、次のように答えられる。つまり、その意義は自己保存の衝動そのものを、より強く素質としてもっていることにではなく、むしろ、その衝動を特別な仕方で発現することの中に求められうるということなのである。生存への意志は、主観的に見れば、いずれも同じように大きいのであって、ただ実際に具体化する形式からだけ異なっているに過ぎない。もっとも原始的な生物では、自己保存衝動が自分の自我に対する関心以上に出ることはない。われわれはこの傾向をエゴイズムと呼ぶが、エゴイズムはこの場合、時間さえも包んでしまい、その結果瞬間自体があらためてすべてを要求し、来たるべき時間になにものも与えようと欲しないところまでも進むのである。動物はこの状態の中で、ただ自分のために生きているのであり、ただその時々の空腹のために、えさを求め、自分の生存のためにだけ闘争する。だが、自己保存衝動がこのような仕方で発現されるかぎり、一つの共同体を形成するための基礎はそれがたとえ家族の原始的形式であるとしてもまるで欠けている。雄と雌の間の共同体でさえ、単純な結合を越え出て自己保存衝動の拡大を要求するが、その場合は、自分の自我のため

の関心と闘争は他の半分の部分にも向けられるのである。雄はしばしば、雌のためにえさを探すが、ほとんどの場合両者は子供たちのために食餌(しょくじ)を求める。一方を守るためにほとんどつねに他方が味方し、したがってこの場合犠牲的精神のきわめて単純ではあってもその最初の形式が生じている。家族のせまいわくの限界を破ってこの精神が拡張されると、より大きな結合、そして最後に正式な国家を形成するための前提が生じる。

地上のもっとも劣等な人間では、この犠牲は非常に小さな範囲にだけ存在しているだけであって、家族の形成を多くの場合越えない程度のものである。それゆえ、純粋に個人的な関心を喜んで無視しようという気持ちが増大すればするほど、ますます包括的な共同体を建設する能力も高まる。

**共同体への奉仕**　個人的な労働を傾注し、また必要ならば、他のために自分の生命をも犠牲にしようとするこの意志は、アーリア人種ではもっとも強力に養われている。アーリア人種は精神的特性そのものが最大であるのでなく、あらゆる能力を共同体に喜んで奉仕させようとする程度が最大なのである。かれらにおいて、自己保存衝動はもっとも高尚な形式に達したが、そのさい、かれらは自分の自我を全体社会の生活に進んで従属させ、必要な時には犠牲にさえした。

アーリア人種の文化を形成し、改造する能力の源泉は知的天分にだけ求められるものではない。かれらが、それだけしかもたなかったとすれば、知的天分によって、その能力はいつもただ破壊的に働きうるだけであり、けっして、組織的に働くことはなかっただろう。なぜなら、あらゆる組織のもっとも内面的な本質は、個々人が自分の個人的意見や関心を主張するのを断念し、両方ともに、多数の人間のため犠牲とすることに基づいている。この一般性という回り道を通ってはじめて、かれらは自

分の分け前を取戻す。たとえば、かれらは今や直接自分自身のために労働するのではなく、自分の活動と一緒に全体社会のわくの中にはいり込むが、それもただ自己の利益のためばかりでなく、全体の利益のためにそうする。この信念のもっともすばらしい説明は、かれらの「労働」という言葉によって与えられる。かれらはこの言葉によって、けっして生活維持そのもののための活動を理解していないのであり、一般の利益に矛盾しない創造だけを考えている。他の場合には、かれらは人間の働きを示すのに、それが同時代の人々の幸福を顧慮せずに自己保存衝動に奉仕する限りでは、盗み、暴利、強奪、押し込み等々の言葉を用いる。

自分の自我の関心を、共同体の保存のために押し殺してしまうこの信念は、実際あらゆる真に人間的な文化の第一の前提条件である。それからのみ、創始者はほとんど報われないにしても、後世にはきわめて豊かな繁栄をもたらす、人類のあらゆる偉大な労作は生じる。まったくそれからしか、どうして非常に多くの人々がかれら自身にただ貧乏と質素な生活を強いながら、だが全体社会の存在の基礎を確実にするつつましい生活を誠実に耐えることができるのかは理解しえない。あらゆる労働者、農民、発明者、官吏等々は、自身では相変わらず幸福や裕福になることができずに活動しているが、かれらは、たとえ自分の行為のより深い意味が自身につねに気づかれていないとしても、この高い理念のにない手である。

**全体社会に対する犠牲能力**　だが、人類の扶養およびあらゆる人間的進歩の基礎としての労働に当てはまることは、よりいっそう人間およびその文化の保護について当てはまることである。共同体の生存のために、自分の生命をささげることはあらゆる犠牲的精神の中でも最高のものである。ただ

これだけが、人間の手が築いたものを再び人間の手で破滅させたり、あるいは自然によって全滅させたりすることを阻止する。

まさしくわがドイツ語は、この意味での行為をみごとに表わす言葉、義務の遂行――つまり自己自身を満足させるのでなく公衆に奉仕する行為――を所有している。そのような行為が出てくるところの根本的な志操を、われわれは――エゴイズムや私利と区別して――理想主義と名づける。われわれはその言葉によって、ただ個人が全体社会に対する、かれの同胞に対する犠牲能力を理解するのである。

しかし、理想主義はなにか余計な感情発現を示すものではなく、それは実は、われわれが人類の文化といっているものの前提条件で過去にあったし、現在あり、また未来もあるだろうということ、それどころか理想主義のみが「人間」という概念を創造したということ、これらのことを再三、再四認識し直すことは非常に重要なことである。アーリア人種はこの内面的な志操によってこの世界におけるかれらの地位をえたのであり、世界に人間が存在しているのもその志操のお陰である。なぜなら、その志操だけが純粋な精神の創造的な力を陶冶したのであり、この力が粗野な腕力と天才的な知性のすばらしい結婚を通じて、人類の文化の記念碑をつくり出したからである。

かれらの理想的な志操がなければ、すべて精神のほんとうにまぶしいような能力も、ただ精神それ自体に過ぎず、内面的な価値をもたぬ外面的見せかけであり、けっして創造力ではないだろう。

**もっとも純粋な理想主義・もっとも深い認識**　ところで、真の理想主義は個人の関心や生命を全体社会に従属させることに外ならないが、だが、それはまたあらゆる種類の組織的形態を形成する前

提条件を意味するのだから、理想主義は究極的には自然の最高意志に対応するのである。理想主義だけが人間を導いて、力と強さの特権を喜んで承認させ、そのようにして全宇宙を形作り、組織しているあの自然の秩序の前に人間を微分子とする。

もっとも純粋な理想主義は無意識の中に、もっとも深い認識と一致する。

どれほどこのことが当っており、またどれほど真の理想主義が不真面目な空想とかけ離れているかは、たとえば、堕落していない子供、健全な少年に意見をいわせてみればすぐわかることである。ある「空想的」平和主義者の長広舌を理解できず、拒否するような同様な青年は、かれの民族全体の理想のために若い生命を喜んで投げ出すのだ。

この場合、意識せずに本能は、必要ならば個人を犠牲にしても、種を保存しようという、より深い必然性の認識に従い、平和主義的おしゃべり連中の空想に抗議する。かれらはまぎらわしいことをいっていても、ほんとうはなお臆病なエゴイストだから進化の法則に違反する。なぜなら、この法則は公衆のための個人の献身によってひき起されるものであって、臆病な知ったかぶりの連中や、自然の批判者の病的な観念によって実現されるものではない。

理想的な志操がまさに消滅にひんしている時代には、それゆえわれわれは、共同体を形作り、そうして文化の前提条件を創出する力の低下をすぐにも認めうるのである。エゴイズムがある民族の支配者となりさえすれば、秩序の紐帯(ちゅうたい)はゆるめられ、そしてせかせかと自分の幸福を追い求めている中に、人間は天国からいよいよ地獄へ落ち込むのである。

たしかに後世の人々でさえも、自分の利益にのみふけった人々は忘れて、自分の幸福を断念した英雄をほめそやすのだ。

*

## アーリア人種とユダヤ人

アーリア人種に、もっとも激しい対照的な立場をとっているのはユダヤ人である。世界のどの民族でも、いわゆる選ばれた民族より以上に自己保存衝動の強く発達しているものはない。これについてのもっともよい証拠としては、この人種が存在しているという単純な事実だけでもう十分である。過去の二千年間に、内面的素質や性格等がユダヤ民族ほど少ししか変化を受けなかったような民族はどこにあるだろうか？　最後に、どの民族がこれよりもより大きな波瀾を体験しただろうか——またどの民族が、それにもかかわらず、つねに同一の民族として人類の驚くべき破局の中から、変わることなく出てきたのだろうか？　これらの事実は生命に対し、種の保存に対し、なんという不屈きわまりない意志が存在していたかということを証明する！

ユダヤ人の知的性質は幾千年の月日によって教育されたものである。ユダヤ人は、今日では「利口」で通用しているし、またある意味では、あらゆる時代にそうであった。しかし、かれらの知性は自分が進化した結果ではなく、他者をお手本の実物教授の結果である。人間の精神も段階をへなければ高く登ることはできない。精神は上に登る一歩ごとに過去の残した基礎を必要とするのだ。しかも、一般的な文化の中でだけその基礎は出現しうるのだという広い意味においてである。あらゆる思考作用は、わずかな部分だけが自分の認識に基づいているが、そのほとんどは過去の時代の経験に基づくものである。一般的な文化水準は、多くの場合気づかれはしていないが個々人に予備知識を非常に豊富に供給する。それゆえ、そのように準備された個人は、容易に自分の歩みをさらに踏み出してゆくことができる。たとえば今日の少年は、ここ数百年に現われた実に無数の技術的成果の下に成長しているので、百年前にはまだ最大の知力をもった人々にも謎であった多くの事柄を、たとえかれにとっ

て、そうした方面でのわれわれの進歩を追跡し理解するためには決定的な意味があるにしても、自明のこととしてもはや少しも気にとめないのだ。天才的知力の持ち主でさえも、前世紀の二十年代に没して、今日突然かれの墓から出てきたとすれば、ただかれの精神を今日の時代に適応させることだけでさえも、このごろの天分も普通な十五歳の少年の場合よりいっそう困難に違いない。なぜなら、かれには数限りない予備教育がすべて欠けているが、これを、現代人は成長する間に、その時々の一般的な文化現象の中でいわば無意識的に受けているからである。

だがユダヤ人は——間もなく明らかになる理由から——けっして自分の文化をもってはいなかったから、かれらの精神的労作の基礎は、つねに他から与えられていたのだ。かれらの知性はあらゆる時代を通じて、かれらの周囲にある文化圏にたよって発達した。

けっして、その逆の経過が生じたことはなかった。

なぜなら、ユダヤ民族の自己保存の衝動は弱いどころか、他の民族よりもむしろずっと強かったとしても、またかれらの精神的な能力がややもすれば、他の人種の知的天分と匹敵するかのような印象を与えたとしても、なお文化民族に対するもっとも本質的な前提、つまり理想主義的志操はまったく欠けているからである。

ユダヤ民族における犠牲的精神は、個人のあからさまな自己保存の衝動を越え出てはいない。一見して強い同族感情は、この世界での他の多くの生物にも同様に見られるような非常に原始的な群居本能に基づくものである。その場合、群居衝動がつねに共通の危険によって目的にかなうか、あるいは避けがたいものと見える時に限って、相互扶助にまで達するにすぎないという事実は注目に値する。たった今、獲物に共同で襲いかかっているその同じおおかみの群が、空腹が和らげば、再び一ぴきず

つの動物になって散ってしまう。馬についても同じことがいえるのであり、襲撃者には一致して防ごうとするが、危険を乗り越えてしまうと再び散り散りになる。

**ユダヤ的エゴイズムの結果**　ユダヤ人の場合も似た事情にある。かれらの犠牲心は外見上だけのものである。それは、各個人の生存にとって無条件に必要である期間だけ続くに過ぎない。だが、共通の敵が克服され、皆を脅かしていた危険が取り除かれ、獲物が隠されてしまうと同時に、ユダヤ人相互間の見せかけの調和は中断してしまい、もとから存在していた素質が再びとってかわるのである。ユダヤ人は共通の危険がそのように強制するか、共通の餌食(えじき)がそそのかす場合にだけ一致するのであって、この二つの理由が消えてしまえば、きわめてはなはだしいエゴイズムの本性が当然のこととなり、一致した民族からてのひらを裏返すように、相互に血みどろの闘争をするねずみの群が現われてくる。

この世界にユダヤ人だけがいるのなら、かれらは泥や汚物に息がつまりながらも、憎しみに満ち満ちた闘争の中で相互にペテンにかけよう、根こそぎにしようと努めるに違いない。ただしかし、それはかれらの臆病に示されている犠牲心の完全な欠如が、この場合にも、この闘争を猿芝居にしてしまわなければの話である。

したがって、ユダヤ人が闘争において、あるいはもっと適切にいうならば、かれらの隣人から強奪する場合において、団結しているという事実から、かれらにある種の典型的な犠牲心が存在するのだと推論しようとするのは、根本的な誤りである。

この場合でもユダヤ人を導くものは、個人のあからさまなエゴイズム以外のなにものでもないのだ。

したがって、ユダヤ人の国家も――これはある人種の自己保存と増加のための活発な有機体であるとされるが――領域的にまったく限られていない。なにしろ、国家組織を一定の空間でもって理解するのは、つねに国家的人種という理想主義的な志操、特に労働という概念の正しい把握を前提にしなければならぬからである。まさしくこの態度の欠如する程度に応じて、空間的に限られている国家を形成しようとする試みばかりか、保持しようとする試みさえもだめになる。だがそれとともに、文化を成立させうる唯一の基礎もなくなってしまう。

**ユダヤ人の見せかけの文化**　したがってユダヤ民族は、あらゆる外見上での知性的特性をもっているにもかかわらず、なお真の文化、とくに自身の文化をもっていない。なぜならば、ユダヤ人が今日見せかけの文化においてもっているものは、他の民族のものであったのがかれらの手によってほとんどもうだめにされてしまった文化財なのである。

人類文化の問題に対するその態度についてユダヤ主義の批判をする際に、本質的特徴としてつねに注意を怠ってならないことは、けっしてユダヤ人の芸術など存在しなかったということ、だから今日でも存在していないこと、とりわけ、あらゆる芸術の中でも女王の位を占める二分野である建築と音楽は、ユダヤ人全体になんの独創も負うことはできないということである。この芸術の分野でかれらによって行なわれたことは、改良を企ててかえって改悪したことか、あるいは精神的ぬすみとりである。したがって創造的な、それゆえ文化的な天分のある人種を選別させる特質はユダヤ人に欠けている。

どれほどユダヤ人が、ただ後から共感しつつ、より適切にいえば堕落させつつ他民族の文化を引き

継いでいるかは、自分の工夫も最少ですむように思われる芸術、つまり演劇術にユダヤ人がもっとも多く見出されることから明白である。だがこの場合でさえも、かれらはほんとうは「道化師」にすぎず、もっと適切にいうならばさる真似である。なにしろここでさえ、かれらはほんとうに偉大なものについての究極的な描出ができないからである。ここでさえかれらは独創的な創作者ではなく、皮相な模倣者であり、その場合、あらゆるそこで使用される道化やトリックもけっしてかれらの創作能力が内面的に生命を欠いていることをだまし通すことはできないのである。だがそのさい、ユダヤ新聞はきわめて好意的に後援して、ただユダヤ人でありさえすればだれでも、たとえどんな平凡な大根役者であろうとかまわずに、ホジアナーとたいそうな賛美の叫び声をあげるので、他の人々はついに、ほんとうは哀れな役者を見ているに過ぎないのにもかかわらず、芸術家を自分たちは見ているのだと思い込んでしまう。

いや、ユダヤ人はどのような文化形成力ももっていない。というのは、それがなければ人類の真により高い発展が不可能であるような理想主義がかれらには存在していないし、また存在したことがなかったからである。だから、かれらの知性はけっして建設的に活動しないだろうし、かえって破壊的に働き、おそらくきわめて稀(まれ)な場合にせいぜい人を刺激するくらいのものである。しかもこの場合、「つねに悪を欲してしかもつねに善を行なう力」[8]の原型として働くに過ぎない。ユダヤ人によって、人類のなにかある進歩がなされたということはないのであって、かれらに反抗して、進歩はなされるのである。

**ユダヤ人は遊牧民でない**　ユダヤ人は一定の領域の境界をもつ国家をけっして所有しなかったし、

したがってまた、自分に固有なものと呼ぶ文化ももたなかったから、遊牧民の系統に数えられるべき民族であるかのような観念が生じた。これは大きな危険な誤りである。遊牧民が一定の限られた生活圏をもっていることはまったくたしかなことであり、ただ、かれらはその生活圏を定住的な農民のように耕作することなく、自分の領域を一緒にさすらっているかれらの家畜の収益でもって生活しているというに過ぎない。この外面的な理由は、定住を簡単に許さない土地の乏しい産出力に求められる。しかし、より深い原因はある時代、ある民族の技術的文化とある生活圏の自然的貧困との間の不均衡にある。アーリア人種でもそこでは、千年以上もかかって発展させた技術を使うことで、やっと団体的植民により広い土地の支配者となり、生活の必要物をそこからまかなうようになるというような地域もあるのだ。アーリア人種がこの技術を所有しないと仮定すれば、かれらはこの地域を避けるか、遊牧民と同じように不断にさまよって暮らしを立てなければならぬに違いない。それもかれらの千年間もの定住の訓練と習慣がこの暮らしをまったく耐えられないと思わせないことが前提されての上である。アメリカ大陸の開拓の時代に数多くのアーリア人種がわなで狩猟したり、猟師等になって生活を戦いとり、しかも、しばしば女や子供を伴ったかなりの大集団でつねに移住して、かれらの存在は完全に遊牧民のそれと同じであったことは熟慮されなければならない。だが、かれらの数の増加とより優れた手段によって荒地を開墾（かいこん）し原住民に対抗しうるようになるやいなや、定住地が国内に急激にますます成長していったのだ。

**ユダヤ人は寄生虫**　多分、アーリア人種も最初は遊牧民であり、時代の流れとともに定住するようになっただろう。だがそれだからこそ、かれらはけっしてユダヤ人などではなかったのだ！　否、

ユダヤ人は遊牧民ではない。なにしろ、遊牧民でも「労働」という概念に対して一定の態度をすでにもっていたのであり、この態度は後の発展のための基礎として、発展に対する必然的で精神的な前提条件が存在している限りで役立ちえた。だが理想主義的な根本的見解は、たとえきわめて薄かったには違いないとしても遊牧民には与えられていた。したがって、遊牧民はかれらの存在様式の全体にわたってアーリア民族とはおそらく無関係であるように見えるとしても、だが性の合わぬものではないだろう。これに反して、ユダヤ人にはおよそそうした態度は存在していないのであり、それゆえかれらは遊牧民でもなく、つねに他民族の体内に住む**寄生虫**に過ぎない。しかもかれらがしばしば今まで住んでいた生活圏を放棄してきたことは、かれらの意図によるものではなく、追出された結果であり、かれらは、時々悪用した母体民族によって追出しを受けた。だがかれらの自己繁殖は、すべての寄生虫に典型的な現象であり、かれらはつねに自己の人種のために新しい母体を探している。

しかし、これは遊牧生活とはなんの関係もない。というのはユダヤ人は自分の占めた地域を再びあけようなどとは考えもせず、腰を下したところに止まり、しかも暴力によって非常に困難であるとしてもかろうじて追放できるほどにがんこなのである。かれらが常に新しい国々へ延び広がってゆくのも、そこにかれらの生存のための一定の条件が与えられる時機がきてはじめて可能である。ただかれらはそれによって——遊牧民のように——今までの住居を変えることはないのである。かれらは典型的な寄生虫であり続ける。つまり悪性なバチルスと同じように、好ましい母体が引き寄せられさえすればますます広がってゆく寄生動物なのである。そしてかれらの生存の影響もまた寄生動物のそれと似ている。かれらが現われるところでは、遅かれ早かれ母体民族は死滅するのだ。

ユダヤ人はこのようにして、あらゆる時代を通じて他民族の国家の中に生活して、そこで自分自身

の国家を形成していたが、この国家はもちろん外面的な事情がその本質をすっかりあばいて見せなかった間は、「宗教共同体」の名称の下に仮装して行動するのがつねであった。だがかれらはひとたび自分を守るおおいがなくてもすませるほど十分に強くなったと信じたならば、いよいよそのヴェールを落して、急に、非常に多数の人々が以前には信じもまた見ようとも欲しなかったもの、つまりユダヤ人になったのである。

他国民および他国家の体内に住む寄生虫としてのユダヤ人の生活中には、ある特性がたしかに存在している。これはかつてショーペンハワーに、すでに引用しておいた金言を語らせたものである。つまり、ユダヤ人は「嘘の大名人」であるといわせたのだ。生存するためにユダヤ人は嘘をいわなければならないが、しかも北欧人が暖かい衣服の着用を余儀なくさせられると同じように、不断の嘘つき屋にまで駆りたてられるのだ。

**ユダヤ人の「宗教共同体」**　他民族の内部でのかれらの生活は、かれらが問題にするのは一つの民族ではなく、特殊なものであるとしても一つの「宗教共同体」であるというような意見を、一般に呼び起すことが成功する場合にのみ、継続が保証される。

しかし、これは第一の大きな嘘である。

かれらは、民族の寄生虫として自分の生存をつづけてゆくためには、自分の固有の存在様式を放棄しなければならない。個々のユダヤ人が知性的であればあるほど、この詐欺もいっそう成功する。たしかに、母体民族の大部分がついには、ユダヤ人は特殊な信仰箇条をもってはいても、実際上はフランス人あるいはイギリス人、ドイツ人またはイタリア人であると真面目に信じてしまうほどまでに成

功する。とくに、つねづね知識の歴史的断片ばかり詰め込まされているように思える国家の役人たちが、この恥ずべき詐欺に一番たやすく犠牲となる。自主的に考えることは、この社会ではしばしば神聖な立身にそむくほんとうの罪であるとみなされて、その結果たとえばバイエルンの内閣が今日でもまだ、ユダヤ人がある民族に属するものであり、ある「宗派」に属するものではないということに、ぼんやりした予感をもっていないとしても、驚く必要もない。だが、ユダヤ人に所有されている新聞の世界を一見するだけで、もっとも低い知力の持ち主にさえ、このことはすぐに明らかになるはずである。もちろん「ダス・ユーディッシェ・エヒョウ」紙はまだ官報ではないので、したがって、このような政府の権力者たちの知性にとっては、考える規準にならないものかも知れない。

ユダヤ人は、つねに一定の人種的特性をそなえた民族だったのであり、けっして宗教だったのではない。ただかれらの生活の必要が、自民族に属するものに向けられている不愉快な注意をまぎらわせうる手段を、すでに早くからユダヤ人に求めさせていたのだ。だが、宗教共同体という他から借りた概念をすべり込ませるより以外に、より目的にかなうと同時により無害であるような、どんな手段が存在しただろうか？ というのはこの場合でも、すべては借りものであり、より適切にいうならば盗んだものである。——元来自己の存在様式からして、理想主義をどのような形式にしろもたず、したがってまた、彼岸に対する信仰にも完全に無縁であるという点だけで、ユダヤ人は宗教制度など所持できない。だがどのような形式にしろ、死後の生命への確信を欠くような宗教は、アーリア人種の見解からは考えることができない。実際にまた、タルムード(9)は彼岸の準備のための書物ではなく、この世での実際生活、しかもそう悪くはない生活のための書物にすぎない。

**ユダヤ教の教義**　ユダヤ教の教義は、第一は、ユダヤ人の血の純粋さを保存するための、またユダヤ人相互の交際およびそれ以上に他の人々、つまり非ユダヤ人との交際までも規制するための命令である。だがここでも、けっして倫理的問題は扱われずに、極端につましい経済的問題が論じられている。ユダヤ教の教理の倫理的価値については、かなり突っ込んだ研究が今日存在しているし、いつの時代にもすでに存在していた。（ユダヤ人の側からではない研究のことである。ユダヤ人自身のそれについての駄弁は当然目的にかなっている。）これらの研究はこの種の宗教がアーリア的概念から見れば、まさに無気味なものであることを教えている。しかしなお、最上の特徴表示はこの宗教教育の産物、すなわちユダヤ人自身によって与えられる。かれらの生活はただこの世のものであるに過ぎず、かれらの精神は真のキリスト教とは内面的にまったく無関係であり、その本質は二千年以前に新しい教義の偉大な創始者、つまりキリストにさえもそのように考えられた。もちろんキリストは、自分の見解をユダヤ民族に少しも隠さなかったし、必要な時には主のいます神殿から、当時でも相変わらず宗教を営業をやってゆく上のたんなる手段と考えていた、このすべての人類の敵を追い払うためにはむちすらも握った。ところが、そのためにキリストは当然十字架につけられたが、これに反して、わが国の今日のキリスト教政党は、選挙にはユダヤ人の投票をねだり、後には無神論的ユダヤ政党と政治的不正取引を協定しようと努めるまでに品位を落としている。それも自分の民族の利益に反してのことなのである。

ユダヤ主義とは人種ではなく宗教のことであるという、この最初の、また最大の嘘の上に、避けることのできぬ帰結として、ますます続きの嘘が重ねられてゆく。ユダヤ人の言語に関する嘘もまたそれらの嘘に属している。言語はかれらには自分の思想を表わすための手段ではなく、その思想を隠す

巧をこらしていてもただ自分の民族性の本質を享楽して生きている。

ユダヤ人が他の民族の支配者になってしまわない限り、かれらはいやおうなしにそれら民族の言語を話さなければならない。けれども、もし他の民族がユダヤ人の奴隷になるようなことがあれば、かれらはすべて一つの世界語（たとえばエスペラント！）を学ばねばならないに違いない。その結果この手段によってもユダヤ人はかれらをより容易に支配できることだろう！

「シオンの賢人」　この民族の全存在が、どれほど間断のない嘘に基づいているかということはユダヤ人から徹底的にいやがられている「シオンの賢人の議定書」[10]によって、非常によく示されるのだ。それは偽作であるに違いない、とくり返し「フランクフルター・ツァイトゥング」は世界に向かってうめいているが、これこそそれがほんものであるということのもっともよい証明である。多くのユダヤ人が無意識的に行なうかも知れぬことが、ここでは意識的に説明されている。そして、その点が問題であるのだ。この秘密の打ち明けが、どのユダヤ人の頭から出ているかはまったくどうでもよいことである。だが、それがまさにぞっとするほどの確実さでもってユダヤ民族の本質と活動を打ち明けており、それらの内面的関連と最後の究極目標を明らかにしている、ということが決定的である。けれども、議定書に対する最上の批判は現実がやってくれる。この書の観点から最近の二百年間の歴史的発展を再吟味するものは、ユダヤ新聞のあの叫びもすぐに理解するだろう。なにしろ、この書が一度でもある民族に知れわたってしまう時は、ユダヤ人の危険はすでに摘み取られたと考えてもよいからである。

＊

**ユダヤ人の発展過程**　ユダヤ人を知るためには、かれらが他民族の内部で、また数百年の時の流れの中で歩んできた道を研究するのが最上の方法である。その場合にも、必要な認識に到達するためには、ただ一つの例についてだけ追跡すれば十分なのである。かれらの発展過程は、つねにあらゆる時代を通じて同一であったが、それは、かれらによって侵蝕（しんしょく）された民族も、つねに同一であったのとまったく同様である。したがって、そのような観察ではかれらの発展を一定の時期に分けることは当をえている。わたしはこの場合簡単にするためアルファベットで時期を示すことにしよう。

ローマ人の侵入の進行中に、最初のユダヤ人がゲルマニア[11]にやってきたが、それも相変わらず商人としてであった。だが民族大移動の暴風にあって、かれらは再び消失したように見えた。それゆえ、最初のゲルマン国家形成の時代が、新しくそして今日でもつづいている中央および北部ヨーロッパのユダヤ化の端初と見なされる。どこでだろうとユダヤ人がアーリア人種とぶつかった場合には、つねに同一かあるいは似たような発展がはじまる。

＊

(a)　最初の確定的な定住地が成立するとともにユダヤ人は素早くも「そこに」いるのである。かれらは商人としてやってきて、はじめはまだ自分の民族性を隠すことにあまり注意を払うことはない。ユダヤ人はまだユダヤ人である。おそらくその理由の一部はかれらと母体民族の間にある外面的な人種の相違があまりにも大き過ぎるのに、かれらの言語的知識はなお少な過ぎるし、その上また母体民族の閉鎖性は、かれらが他民族の商人以外のなにかあるものにあえて見せかけようとするには、堅固すぎるに違いない。かれらのすばしこさと母体民族の経験の乏しさのお陰で、ユダヤ人としてのかれ

らの特徴を保持していることは、けっしてかれらの不利益であるどころか、むしろ利益とさえなるのだ。異国の人は親切に歓迎されるのである。

(b) 次第にかれらは生産者としてではなく、もっぱら仲買人として、経済の中で緩慢に活動をはじめる。千年にわたる商人としての老練さにおいて、かれらはまだ無器用な、とくに際限のない正直さをもったアーリア人種にはるかに勝っている。だからして、もはや商業は近いうちにかれらの独占となりそうである。かれらは金貸をはじめるが、それも相変わらずの高利貸を始めるのだ。実際に、かれらはまたそれによって利子ももち込む。この新しい制度の危険ははじめは認識されず、かえって当座の便利さのために歓迎されさえする。

(c) ユダヤ人は完全に定住してしまう。つまり、かれは都市や町の特殊な区域に定住し、ますます国家の中に国家を形成する。商業も全金融業もかれらには自分にもっとも固有な特権と考えられ、かれらは容赦せずにそれを利用しつくす。

(d) 金融業と商業は、あますところなくかれらの独占となってしまう。かれらの高利はついに反抗をひきおこし、かれらの増長してゆくその他の厚かましさは激怒を、かれらの富はねたみをひきおこす。かれらが地所をも自分の商業上の対象物の範囲に引き入れて、それを売ることができる、より適切にいうならば、取引の可能である商品にまで引き下げる時、堪忍袋の緒が切れる。かれら自身は土地を耕さず、ただ搾取のための財貨とだけみなしており、その土地に農夫はなるほど止まっていられるが、ただその現在の主人の側からの、きわめてみじめな強奪を受けなければならないから、かれらに対する嫌悪は次第に公然の憎悪へと高まってゆく。かれらの吸血鬼的非道さは大変なものであって、その結果はかれらに対する暴動となって現われる。この異民族はますます注意深く観察されはじめ、

かれらの中にいっそう新たな、いやな特徴や人間性が見出されるにおよんで、ついに両者のみぞは調停できないほどになる。

ついに苦難きわまりない時期にかれらに対する激怒は破裂し、搾取されておちぶれた大衆はアッチラから身を守るために自衛に訴える。大衆は数百年の年月の経過の中でかれらと知り合いになり、かれらがただ存在するだけでもすでにペストと同じくらい危険であることを感じ取る。

(e)　いまやユダヤ人は自分のほんとうの性質を隠さなくなりはじめる。胸くそ悪いようなおせじを使って、かれらは政府に近づいてかれらの金の力を働かせ、このようにして、ますますかれらの犠牲者を新しく搾取するための特許状を確保する。しばしば、この永遠の吸血虫に対する民族の激怒が炎々と燃え上るとしても、この怒りはほんの数年もたたぬ間に、再びユダヤ人がほんのさっき立ち去ったばかりの場所に新たに現われて、昔の生活を最初からやりはじめるのを少しも妨げるものではない。どんな迫害もかれら流儀の人類搾取を止めさせることはできず、どんな迫害もかれらを追放できないのであり、追放されるごとにかれらはすぐ戻ってくるのであり、それも前のままの姿である。

少なくとも、もっとも邪悪なものだけは阻止するために、人々はユダヤ人に土地の取得を法律でまったく不可能にするように決め、かれらの高利貸的な手から土地を取り上げはじめる。

(f)　諸侯の権力が強まりはじめるに応じて、かれらはますます諸侯に近づいてゆく。かれらは「特許状」や「特権」をねだり、つねに財政的に苦しい君主たちから相応した支払いでもって、大喜びでもらい受ける。これはかれらにとって、どれほど出費させようとも、かれらは数年もせぬ間に支出した金を利子や複利と一緒に回収する。これは不幸な国民の肉体にくっついているほんとうの吸血虫であって、諸侯自身が再び金を必要として吸い取られた血を、お手ずから、かれらからまき上げるまで

は離れることはない。

この芝居はつねに新しくくり返されるが、そのさいのいわゆる「ドイツ諸侯」の役割は、ユダヤ人自身の役割とまったく同じであさましいものである。かれら、つまりこれらの君主達は実際かれらの愛する国民にとっては神の刑罰であったし、かれらと比較されるようなものとしては、今日の諸大臣ぐらいしか見出せない。

ドイツ国民が、ユダヤ人の危険から最終的に解放されえなかったのは、このドイツ諸侯のお陰である。残念ながらその点についてはは後になっても少しも変更がなかったので、かれらがかつて国民に犯した罪に対しては、ユダヤ人から千倍も当然の報いが諸侯に与えられたに過ぎなかった。諸侯は悪魔と同盟し、悪魔の手に落ちた。

(g) したがって、ユダヤ人の諸侯籠絡（ろうらく）は諸侯の退廃にまで導く。かれらが国民の利益に奉仕することを止めてしまい、そのかわりに自分の臣民から不当な利益を収めるようになるに応じて、徐々にではあるが確実に国民に対する諸侯の地位はぐらついてくる。ユダヤ人はかれらの最後を正確に知っており、それを可能なかぎり早めようと努める。ユダヤ人はかれらを真の課題からますます遠ざけ、きわめて邪悪な追従でもって取り入り、悪徳に導き、このようにして、いっそう自分をなくてはならぬものにさせることによって、諸侯の絶え間のない財政困難を促進する。金銭問題すべてについて有能であり、より適切にいえば良心のとがめをもたないユダヤ人は、つねに搾取されている臣民から新しい富を絞り出し、いやはぎ取ることをわきまえている。したがって、これら臣民はますます死出の旅を急ぐことになるのである。このようにして、どの宮廷もそれぞれ「宮廷ユダヤ人」――愛する国民を絶望させるまで苦しめるが、諸侯には絶えざる慰安を用意する怪物がそう呼ばれるのだが――をも

っている。人類のこの装飾品が、ついには、外面的にも盛装させられて、世襲の貴族階級にまで立身することがだれを驚かそうか。かれらはこの制度をただ笑いものにするだけでなく、毒殺することさえも手伝う。

今や、かれらは当然のことながら、いよいよ自分の地位を、繁栄のために使用できる。最後に、かれらは土着の人間のもっている可能性と権利のすべてを所有しうるためには、ただ洗礼を受けさえすればよい。かれらはこの用事をすませることによって、実際、幾度となく、新しく息子が獲得されたことのために教会を喜ばせ、他方、ペテンが成功したことのためにイスラエルを喜ばせる。

(h)　今や、ユダヤ人の中にある変化が実現しはじめる。かれらは今まではユダヤ人であった。つまりかれらはユダヤ人以外のあるものに見せかけようということにあまり重点をおいていなかった。そして、このことはまた、きわめてはっきりした人種的特徴が両方にあったので、不可能でもあった。まだフリードリッヒ大王の時代には、ユダヤ人の中に「異」民族以外のなにかを見つけ出そうとはだれも思いつきはしない。ゲーテもやはり、将来キリスト教徒とユダヤ人の間の結婚はもはや法律で禁じられてはならない、という思想に驚いた。だが、なんといってもゲーテは、神に誓って、反動でもなかったし、さらに加えて奴隷でもなかった。かれによって語られたことは、血と理性の声に外ならなかった。こうして——宮廷でのすべての恥ずべき行為にもかかわらず——国民はユダヤ人を自分の体内に入っている異質な物体と本能的に見てとり、かれらにもそれに応じた態度をとった。

けれども、今やこのことは変わらねばならなかった。千年以上の時の流れの中で、かれらは母体民族の言語をすっかり使いこなすほど習得したので、将来、かれらのユダヤ的民族性を幾分少なめにし、

他方かれらの「ドイツ民族性」をより正面に出してゆくことが、あえてできると信じる。なぜなら、これは最初の頃は非常におかしなものであるし、それどころか狂気の沙汰であるように見えもするが、かれらはそれでもなおずうずうしく振舞い、「ゲルマン人」に、したがってこの場合には「ドイツ人」になりすます。考えられうる限りでももっとも下劣な詐欺がこのことからはじめられる。かれらはドイツ民族性に関しては、実のところ、ドイツ語——これもなおすさまじいものだが——を片言まじりに話す技術以外になにももたない。だが、それ以外ではけっしてドイツ人と関係できなかったので、したがってかれらのドイツ民族性はすべて言語だけに依存する。しかし、人種は言語の中にあるのではなく、もっぱら血の中にある。これはまさに、自分の言語の保存にはほとんど重きをおいていないが、それに反して自分の血の純粋保存にはあらゆる考慮を払うユダヤ人が一番よく知っている。人間は無造作に言語を変えることができる、つまり、他の言語を使用できる。しかしその場合は、新しい言語で以前の思想を表現するだろうから、その人間のもっとも内面的な本質は変化しないであろう。このことは、千の言語を語りうるが、それにもかかわらず、つねに同一のユダヤ人に止まっているユダヤ人がもっともよく示している。かれらが二千年前に穀物商人としてオスティア港でラテン語を話したとしても、あるいは小麦粉のやみ商人として今日ドイツ語をユダヤなまりで話そうと、かれらの性格の特徴は同一でありつづける。つねに同一のユダヤ人である。この自明なことが、精神も正常である今日の内閣参事官や高級な警察官吏に理解されないということも、もちろん自明である。なにしろ、現在のわが国の模範的な国家当局のこれら公僕ほどに、本能と知力に欠けているものが、ぶらつきまわっていることは、ほとんどないからである。

なぜ、突然「ドイツ人」になろうとユダヤ人が決意するのか、その理由は簡単である。かれらは諸

侯の権力が次第に動揺しだすのを感じるのであり、したがって早い時期にかれらのこれから立つべき足場をえようと試みるのだ。そして更に、経済全体に対するかれらの金融的支配がすでに非常に進展しているので、かれらは「国家市民」権をすべて所有せずにはその巨大な全組織をもはやこれ以上支えられないし、どっちみち、かれらの勢力をこれより先、増大させることもできない。だがかれらはこの両方を望む。なぜなら、かれらはより高くよじ登れば登るほど、過去のヴェールの中からかれらの古い、かつてかれらに約束された、目標がますます魅力的に頭をもち上げてきて、貪欲の熱病に浮かされてしまい、かれらのきわめて明晰(めいせき)な頭脳も、世界支配の夢をまたもや手に届く近さに見るのである。そのようにして、かれらの唯一の努力は「国家市民」権の完全取得を実現することに向けられる。

このことはユダヤ人地区からの解放の理由である。

(i)　このようにして、宮廷ユダヤ人から徐々に国民ユダヤ人が発展する。このことは当然、ユダヤ人は以前と同じように高貴な君主の周囲に止まっており、いやかれらはむしろますますこの社会にすべり込もうと努めることをふくんでいる。しかし同時に、かれらの種族の他の部分が愛すべき国民にへつらうのだ。もし人々がどれほどかれらが数百年の間に大衆に対して罪を犯したか、またかれらがどれほど大衆をつねにくり返し無慈悲にしぼり、その血を吸い尽したか、ということを熟慮する時、またさらに、どれほど国民がそのことによってかれらを次第に憎むことを学び、そして最後には、実に、かれらの存在の中にわずかにユダヤ人以外の民族に対する天罰だけを見てとるようになったか、ということを熟慮する時、人々は、ユダヤ人にとってこの転向がどれほど困難とならざるをえないかを理解しうるはずである。たしかに皮まではがれた犠牲者に、突然自分を「人類の友」であると見せ

かけるのは骨の折れる仕事である。

実際、ユダヤ人ははじめのうち、今までかれらが国民に対して犯してきたことを償うかのようにみせびらかしはじめる。かれらは人類の「慈善家」に変装しはじめる。かれらの新しい善行は実際的な動機があるので、かれらは古い聖書の言葉、右手の与えるものを左手に知らしてはならない、で十分であるとばかり思ってもいられないのだ。かれらはよかれあしかれどれほどかれらが大衆の悩みを感じているか、またそのためには、みずからあらゆるものを犠牲にささげようとしているのだということを、可能なかぎり、多くの人々に知らせなければ満足できない。この確かに生まれつきのお慎ましやかさでもって、かれらは自分の功徳を他の人々がほんとうに信じはじめるまで、世間に向かってやかましいばかりに広言する。このことを信じないものは、かれらをひどく侮辱しているのだ。短い期間に早くもかれらは、今までおよそ自分たちだけがつねに不正を加えられてきたのであり、けっしてその逆ではなかったかのように事態をこじつけはじめる。とくに愚鈍な人々はそのことを信じ、この哀れで「不幸な人々」に同情しないではいられない。

ついでにこのさい、なお注意されなければならないことは、ユダヤ人はあらゆる献身的態度にもかかわらず、個人としてはもちろんなお少しも貧乏になっていないことである。かれらはまったく分配方法を心得ている。いや、多くの場合かれらの善行は実に肥料にのみ比較されることができる。というのは肥料は耕地に対する愛からまかれるものではなく、そのさきの自分の利益に対する予想から与えられるのだからである。だがとにかく、比較的短い期間にユダヤ人は「慈善家で人類の友」となってしまったのをすべての人が認める。なんと珍しい変態が起ったことだろうか！

だが、ユダヤ人以外の人々には多かれ少なかれ自明のことと見なされていることが、それがユダヤ

人にはなにも自明でないというただその理由でもって最高の驚きを、いや多くの人々に明らかな賛美を引き起す。したがって、他の人類よりもかれらがこのような行為をする場合のほうが、なおずっとより高く評価されるということも起ってくる。

だが、その上さらに、ユダヤ人は急にリベラルになり、人類に必要な進歩について夢中になりはじめる。

かれらはそのようにして、徐々に新しい時代の代弁者になっていく。

かれらはもちろん、真に国民の利益になる経済の基礎をますます根本的に破壊する。かれらは株式という間接的手段で、国民生産の循環過程にしのび込み、これを金で自由になる、より適切にいえば取引が可能となる暴利の対象にしてしまい、そのことによって企業体から個人的な所有権の基礎を取り上げてしまう。このことによってはじめて、雇主と雇人の間に後の政治的階級分裂にまで進む内面的不和が現われる。

だがついにユダヤ人の経済的利害に対する影響は、今や恐ろしいほどの速さで、取引所の上に拡大していく。かれらは国民労働力の所有者になる、あるいはそれほどまでではなくとも、その監督者になる。

自分の政治的地位を強めるために、かれらは、差し当ってなおも自分たちにいたるところで制約を加えていた人種的、国家市民的制限を取り除こうと努める。かれらはこの目的に向かって、かれら独自の粘り強さを総動員して宗教的寛容のために闘争する。――そして、完全にかれらの所有に帰してしまったフリーメイスン[12]団制度は、かれらの目標を弁護し、また押し通すための主要な道具となる。支配者層も、政治的、経済的ブルジョア階級の上層も、フリーメイスンの意のままに、それとまった

く気づきもしないで、かれらの術中に落ち込む。

ただ民衆そのものの、あるいはむしろ、目覚めてみずから自己の権利と自由のために戦っている階級だけは、フリーメイスンによって、より深く、またより広い層にわたって、十分浸透されるということはありえない。しかし、この人々を十分つかむということは一番必要なことである。なにしろ、ユダヤ人は自分の前に「露払い」が見つからなければ、自分が支配的役割にまで上昇することはできないだろうと感じているからである。だが、かれらはこの仕事をしてくれるものが、ブルジョア階級の中に、しかもその階級のもっとも広い層の中に見つけ出せると思っている。しかし、手袋職人や亜麻布職工は、フリーメイスンの上品な網ではつかめないので、ここでは、よりきめは粗いとしても、それにもかかわらず効果はけっして劣らない手段が試みられねばならない。そこで、ユダヤ主義に奉仕する第二番目の武器として、フリーメイスンに新聞が加わる。これを所有するため、かれらは粘り強さと手腕を十二分に発揮する。かれらは新聞を通じて、徐々に公共生活全体にまといつき、籠絡し、指導し、操りはじめるが、それもかれらが今日では、「世論」という名前でもって二、三十年以前に比べればずっとよく知られている力を生み出し、操る立場にあるからである。

その場合にかれらは、個人的にはつねに自分をかぎりなく知識欲に燃えているように見せかけ、あらゆる進歩を賞賛するのであるが、もちろん他人を破滅に導く者を一番よくほめる。なにしろ、かれらは必ず自分の民族性を振興する可能性の有無からだけ、すべての知識や発展を評価するからである。そして、この可能性が欠けている場合には、かれらはすべての光に対して容赦のない不倶戴天（ふぐたいてん）の敵となり、また真の文化であっても一切憎悪するからである。かれらはそのようにして、他人の授業から獲得したあらゆる知識を、自分の人種に役立たせることだけに利用する。

しかし、かれらはこの自分の民族性を以前には見られなかったほど監督する。かれらは「啓蒙」「進歩」「自由」「人間性」等々で満ちあふれているように見えるが、他方かれら自身は自分の人種をきわめて厳格に他人種から隔離する。なるほどかれらは、しばしば自分の娘を勢力家のキリスト教徒の妻にすることはあるが、しかし自分の男系の子供は原則としてつねに純粋に保つ。かれらは他人種の血をだめにするが、自分自身のは保護する。男子のユダヤ人は、ほとんど女子のキリスト教徒と結婚しないが、男子のキリスト教徒は女子のユダヤ人と結婚する。だが、混血児にはそれでもなおユダヤ人の傾向が強く現われる。とくに高位の貴族の一部分は完全に腐敗する。ユダヤ人はそうしたことをまったく正しく理解しており、したがって自分の人種的敵の精神的指導者層をこのような仕方で計画的に「武装解除」する。けれども、この仕事をカムフラージしたり、かれらの犠牲者を眠り込ませるために、かれらはよりいっそうすべての人間の平等について語り、人種や色から注意をそらさせる。愚鈍なひとびとはかれらのいう通りに信じはじめる。

しかしながら、かれらの全存在様式は相変わらず極度に異民族的な臭気を身のまわりにぷんぷんさせているので、とくに国民中の大衆はあっさりかれらの網にかかるようなことはない。そこでかれらは、自分の新聞によって、実際とはすこしも似ていないで、逆に自分の望んでいる目的に役立つような具合に、自分の肖像をえがかせる。とくにこっけい新聞において、ユダヤ人は害のない小さな民族であるという主張が力を込めてなされる。つまり、この小民族はたしかに自分の特殊性格をもっている、――他の民族もそうであると全く同じように――だがしかし、かれらのおそらくは幾分よそよそしい気持ちを起させる顔つきの中にさえも、あるいはこっけいかも知れぬが、しかし、つねに心底から正直で善良な魂が自然と現われているのだ、と。つねに、かれらを危険であるよりも、むしろつま

らぬものと見せかけるのに、一体どれほど骨が折られることだろうか。

だが、この段階でのかれらの究極目標は、民主主義の勝利することである。あるいは、かれらの理解するところでは、議会主義の支配である。民主主義はほとんどの場合、かれらの要求に一致する。なにしろ、それは人格を排除し——その代りに、愚鈍、無能、そしてこれらに劣らず臆病さ、これらで構成されている多数をもち込むからである。

この最終結果は君主政の崩壊となるのであり、これは早かれ遅かれ生じなければならない。

(j) 巨大な経済発展は国民の社会層の変動を起す。小さな手工業は徐々に死滅してゆき、したがって労働者の自立した生存を獲得できる可能性がますます小さくなるので、かれらは見る見るうちにプロレタリア化していく。産業「工場労働者」が生まれるが、かれらのもっとも本質的特徴は、かれらはいくら生活を続けていても自立できるような状況にはけっしてならない、という点に求められる。かれらは言葉のもっとも真実な意味において無産者であるし、その晩年は苦しみでしかなく、もはやほとんど生活と表現されるものではない。

以前すでに、同じような状況が一度生じたことがあるが、それは解消するように強制的な圧力が加わり、解消もしたのである。農夫や手工業者に対して、それと違った階級として徐々に、官吏および使用人——とくに国家に使用される——が加わっていった。かれらもまったく言葉通りの無産者であった。国家はこの不健全な状態の打開策をついに見つけだしたが、それは自身では晩年の生活に対してなにも用意できない国家の使用人の扶養を引き受け、恩給や年金の制度を取り入れることによってであった。徐々にこの例にならう私的企業もぐんぐん増加して、今日では、常雇である頭脳労働者は、その勤めている企業がすでに一定の大きさに達しているか、越えているかぎり、ほとんどすべてが老

齢年金を受けている。そして、国家官吏の晩年における生活の保障によってはじめて、戦前のドイツ官吏全体のもっとも優れた特性であった、私心のない義務に対する忠実な態度が育てられた。

そのようにして、無産状態となっていた階級の全員が、賢明な方法によって社会的不幸から免れて、それとともに全国民の内部に編入されていった。

**工場労働者階級**　ところでこの問題はまたもや、そして今度はずっと大規模に、国家と国民に近づいてきた。絶えず新たに、何百万にものぼるたくさんの人間が、新興産業で工場労働者として毎日のパンをえるために、農村から大都市へと引っ越してきた。この新たな階級の労働および生活の状況は悲惨どころの話ではなかった。旧職人や農夫の古くさい労働方法を多かれ少なかれ機械的に新しい形式へ転用することからして、もうなんとしても不都合であった。そのどちらの仕事も、もはや産業工場労働者がしなければならぬ努力とは比較にならなかった。昔の手職では時間はおそらく大して重要ではなかっただろうが、新しい労働方法では時間の果たす役割がますます大切になってきた。昔の労働時間を形式的に工業的大企業に引継いだことは、まさしく悲惨な影響をもたらした。なぜなら、以前の労働の実際的な能率は今日のように労働方法が強化されていなかったから、ほんの小さなものだったからである。したがって、昔は一日十四、五時間の労働時間もまだ我慢できたにしても、一分、一分がすべてぎりぎりまで利用されぬいているような時代には、もうとても耐えられぬことは確実であった。実際昔の労働時間の新しい工業的な仕事へのこのような馬鹿げた引継ぎの結果は、二重の意味で不幸であった。まず健康が破壊され、より高い正義についての信仰が滅びてしまった。そしてついに、それに加えてみじめな解雇が一方では生じ、他方では、それによってますます雇主の地位が高

まってゆくのが明白であった。

田舎では社会問題は起りえなかったが、それというのも、主人と作男が同じ仕事をし、とりわけ同じ物を食べていたからである。しかしここでも変化が生じた。

今や雇人と雇主の分離は生活のすべての領域で完成されたように思われる。その場合に、もうどれほどわが国の内面的ユダヤ化が進行しているかは、人々が軽蔑とまではいかないにしても、手職そのものにたいしてほとんど尊敬をはらわないことからうかがうことができる。これがドイツ的であるとは考えられない。実はユダヤ化であったわが国の生活の外国化によってはじめて、手職に対して以前払われていた尊敬は肉体労働すべてに一般的となったある種の軽蔑に変わった。

このようにして、新たな、ほとんど少しの尊敬も払われないような階級が事実出現するので、およそ国民がおのずとその新階級を一般社会に再編入する力をもつにいたるのだろうか、あるいは身分的相違が階級的分裂にまで広げられるだろうか、といった問いがいつかは現われるに違いない。

だが、一つだけは確実である。すなわち、その新しい階級は自分の仲間の中に、最低の不良分子をもったのではなく、正反対にどんな場合にも、もっとも力強い分子をもった。いわゆる文化の度の過ぎたお上品さは、まだここでは解体的、破壊的な影響を与えてはいなかった。新階級の大部分はまだ平和主義的軟弱の毒によって柔弱化されていず、たくましく、また必要な折には残酷でもあった。

ブルジョアジーがこの非常に深刻な問題を一般に気にかけず、無関心に成行きにまかせている間に、ユダヤ人はこの場合に将来に現われることを考えれば見逃すことのできぬ可能性に気がつく。そしてかれらは一方では、人類搾取の資本主義的方法をとことんまで組織化してゆきながら、自分の精神や支配の犠牲者に取り入って、短期間にもう自分自身に対してなされる犠牲者の闘争の指導者となる。

もちろん、「自分自身に対して」というのは、ただ比喩的にいっているに過ぎない。なにしろ、この嘘の名人は相変わらず自分を潔白なものと見せかけ、罪を他人にかぶせる術を承知しているからである。かれらは大衆を自分で指導するほど厚かましいので、大衆は古今を通じても見られないようなきわめて下劣な詐欺が行なわれえようなどとは、思いもしない。

しかし、それにもかかわらずそのことは真実だった。

**ユダヤ人の戦術**　この新階級が一般的な経済変化から抜け出して発展していくかと思ううちに、ユダヤ人はすでに自分自身がさらに前進するため利用できる新しい露払いをはっきりと見出してもいる。かれらは最初ブルジョア階級を封建的世界に対して破城槌に利用したが、今やブルジョア階級に対して労働者を利用するようになった。だが以前にかれらはブルジョア階級の陰から、市民権をこっそり手に入れることを知ったが、今は労働者の生存のための闘争の中で、自分が支配者になれる道を見つけ出そうと望む。

その時以来、労働者は、もうユダヤ民族の将来のために戦うという課題をもつに過ぎなくなる。かれらは無意識のうちに、かれらが克服しようと思っている権力に、かえって奉仕させられる。かれらは外見上では資本を攻撃させられるが、その場合でも、まさしくこの資本のためにきわめて容易に闘争させられうるのである。そのさい、ユダヤ人は国際資本に反対してつねにののしっているが、その実は国民経済を頭においている。すなわち、国民経済が破滅させられ、それによって国際的な株式取引所の連中が、その死骸のころがった戦場で凱歌をあげうるようにと望む。

ユダヤ人のそのさいの処置は次のようである。

つまり、かれらは労働者に取り入って、その人々の運命に同情するようにみせかけ、あるいは悲惨であり、また貧しくもある宿命に憤慨さえしているように見せかけて、そうして信頼をうる。かれらはあらゆる個々の実際上の、あるいはまた想像上のその人々の生活の困難さを研究して――そのような生活の変革への憧れを呼び覚まそうと骨折る。アーリア人ならともかくだれにでも眠っている社会正義への欲求を、かれらは際限のない狡猾(こうかつ)さでもって幸運な人々への憎しみにまで高め、その際に社会的弊害を取り除くための闘争に対して絶対確実の世界観的刻印を押す。かれらはマルクス主義理論を創始する。

**マルクス主義世界観の核心**　かれらはこの理論を、非常に多数の社会正義の主張と離れがたく統合していると言明することにより、その理論の普及を促進させるとともに、逆に真面目な人々にそれらの主張に従うことを嫌わせるようにうながす。というのは、この主張はそのような形式や付随物を伴って行なわれるかぎり、最初から不正であり、いや実現不可能と見られるからである。なぜなら、この純粋に社会的な思想であるというマントの下に、真に悪魔的な意図が隠されているからである。いや、その意図はきわめてずうずうしい露骨さで、完全に公開されているともいえるだろう。この理論は理性と人間的狂気の分けにくい混合物を示しているが、つねに狂気だけは実現されても、けっして理性のほうは実現されることがないのである。人格を、したがってまた国民とその人種的内容を無条件に否認することによって、その理論は全人類文化の根本的な基礎を破壊する。というのは、文化はまさにそれらの要素に依存するからである。このことがマルクス主義世界観の真に内面的な核心であるといってよいが、それはただこの犯罪者的頭脳からの生まれ損ないが「世界観」と呼ばれてもよ

いというかぎりでのことである。人格と人種が破壊されれば、低級な人間——これはユダヤ人であるが——の支配を妨げる本質的な障害物はなくなる。

まさしく経済的、政治的なナンセンスの中にこそ、この理論の真意が存在している。なにしろ、そのナンセンスのために真に聡明な人々が皆この理論に奉仕するのを阻止されてしまい、他方精神の働きの乏しいものや、経済について低い教養しかない連中だけが旗をひるがえしてこの理論にかけつけるに過ぎないからである。だが、この運動——なにしろ、この運動でも存続するためにはインテリを必要とする——のためのインテリは、ユダヤ人が自分自身の仲間の中から「犠牲にささげた」ものである。

このようにして純粋な手工業労働者運動はユダヤ人の指導の下に成立する。それは外見上は労働者の地位を向上させることを目指しているが、実はあらゆる非ユダヤ民族の奴隷化と、したがって絶滅をもくろむものである。

**マルクス主義世界論の組織化**　いわゆるインテリの社会に、国民的自己保存衝動の一般的な平和主義的マヒを目指して、フリーメイスンが持ち込んだものは、今日ますますユダヤ的になっている大新聞の活動によって、大衆、とりわけブルジョア階級に伝えられる。この二つの破壊の武器に、今や第三の、そしてはるかに恐ろしい武器として野蛮な暴力の組織が加わる。マルクス主義は攻撃隊、突撃隊として、二つの最初の武器によって破壊工作を準備し、すでに瓦解するまでに成熟させてあるものを、仕上げるべきものである。

このようにして、ほんとうに巧妙な合同工作が実施される。その結果、多かれ少なかれ神話的でし

かない国家権威の代表者とつねに好んで名乗ることを欲する当の諸制度が、それに対して多くの場合無能であったとしても、実際驚く必要はない。わが国の高級な、また最高の国家官吏団の中に、ユダヤ人はあらゆる時代を通じて(少しの例外を無視すれば)自分の破壊工作をきわめて従順に援助してくれるものを見つけている。「上」に対する追従的な奴隷根性と「下」に対する尊大な高慢ちきは、しばしば罰当りな固陋さと同様にこの階級を目立たせるものである。この固陋さを打ち負かすことができるものといったら、しばしばお目にかかるまったく驚くような自負心くらいしかない。

だが、これらはユダヤ人がわが国の官庁に対して入用であり、したがってまた欲しもする特性である。

今やはじまった実際的な闘争は、大ざっぱに表わせば、次のようになる。

つまり、ただ単に世界の経済的征服に尽きることなく、世界の政治的な隷属化をも要求するかれらの闘争の究極目標に対応して、ユダヤ人はマルクス主義世界論の組織化を半分ずつに分ける。それらは外見は相互に切り離されているように見えるが、真実は不可分の全体を形成している。つまり、政治運動と労働組合運動である。

労働運動は宣伝運動である。その運動は、多くの企業家の強欲と目先の利かぬために、労働者がしなければならない困難な生存闘争において、労働者に援助と保護を提供し、したがって、よりよい生活条件を勝ち取る可能性を提供する。労働者が、組織化された民族共同体つまり国家が労働者のことにほとんどといってよいくらい配慮しないような時代にあって、自分の人間としての生活権利の擁護を部分的には責任意識がほとんどなかったり、しばしば無情でもあるような連中の盲目的な自由裁量に任せたいと望むのでなければ、かれらはこの防御を自分の手で行なわなければならない。ところで、

いわゆる民族的ブルジョア階級が金銭上の利益で盲目になって、この生活闘争にはなはだしくひどい妨害をするならば、すなわち非人間的な長い労働時間の短縮、年少者労働の廃止、女子の保護と援助、工場や住居の衛生状況の改良等のためのあらゆる試みに、ただ反対するだけでなく、しばしば実際にもサボるとすれば、それにかならず応じて、抜け目のないユダヤ人はそのように抑圧されている人々を世話する。かれらは徐々に労働組合運動の指導者になっていくが、これは非常に楽なことである。というのも、かれらにとっては真剣に社会的欠陥を実際に取り除くことなど問題にはならず、ただかれらに盲目的に服従している経済的闘争部隊を国民経済の独立の崩壊のために教育することだけが目的であるからである。なにしろ、健全な社会政策の指導とは絶えず一方では国民の健康の維持、他方では独立した国民経済の保全という原則の間を調停するものであろうのに、闘争をしていたユダヤ人にとっては、この二つの観点がただ無視されるばかりでなく、その観点の排除こそがかれらの生活目標とされるからである。かれらは独立した国民経済の維持を望まず、かえってその破滅を望む。それゆえに、労働組合の指導者として、目的からはずれているだけでなく、その目的の遂行が実践上不可能であるか、または国民経済の滅亡を意味するような主張を出すことに、少しも良心のとがめを感じえない。かれらはまた、健全で、たくましい種族を自分の前に見たくもないのであり、腐った、圧制できる愚民を望む。この願望はさらに、かれらにきわめてナンセンスな主張を行なわせる。その実際の遂行が不可能であることはかれら自身知っており、したがってそんな主張はちっとも事情を変えることができないだけでなく、せいぜい大衆をめちゃくちゃに興奮させるに過ぎない。しかし、かれらはそこに関心があるのであり、大衆の社会的地位を現実的に、誠実に改良してゆくことには目もくれない。

したがって、労働組合関係におけるユダヤ主義の支配は、巨大な啓蒙活動が大衆に影響を及ぼして、かれらのけっして終ることのない悲惨さについて大衆の誤りを正してやるか、あるいは国家がユダヤ人とかれらの仕事をやっつけないかぎり、確実なものである。なぜなら、大衆の洞察というものは今日と同様大したことはなく、国家も今日のように無関心である限り、この大衆は相変わらずまっさきに経済の事柄についてきわめて恥知らずな約束をしてくれるものに、まず従うだろう。だがその点では、ユダヤ人は達人である。なにしろ、かれらの全活動は少しも道徳的配慮によって妨げられることはないのだ！

このようにして、かれらがこの領域から短期間にすべての競争者を追っぱらってしまうのはなんといっても必然的である。あらゆるかれらの内面にある強欲な残酷さにふさわしく、かれらは労働組合運動を同時にきわめて残酷な暴力使用にもっていく。ユダヤ人の誘惑を見抜き反対するものがあるとしても、その人々の勇気も認識もテロでもって破られるのである。そのような活動の結果は法外なものである。

実際、ユダヤ人は国民にとって神の恵みでありうるはずの労働組合を通じて、国家経済の基礎を破壊する。

これと平行して、政治的組織化も進行する。

政治的組織は、労働組合運動が大衆を自己のために準備し、いや暴力で強制的に政治的組織の中へ追い込んでくれる限りでは、労働組合運動と協力する。それはさらに、政治的組織がその巨大な機関を食わせてゆくための絶えざる資金源である。それは個々人の政治的活動の制御機関であり、政治的性格をもつあらゆる大きなデモに駆り立てる役目を果たす。だが最後に、それはおよそ経済的利害に

はもう立ち入ることなく、自己の主要闘争手段である労働放棄、マッセンストやゼネストを政治的理念に用立てる。

その内容が、もっとも教養に乏しい人間の精神の理解力に適応した新聞を創刊することによって、政治的、労働組合的組織は、ついに国民の最下層の人々ががむしゃらきわまる行動に移りたくなるような興奮を与える仕掛けを手にするのである。その新聞の課題は、けっして人間を低級な意見の泥沼から引っぱり出し、より高い段階へ引き上げることではなく、かれらのもっとも低劣な本能に調子を合わせることである。それは考えることがきらいで、しばしばうぬぼれもする大衆に対するものであるから、投機的でもあり、また利益もある仕事である。

とりわけこの新聞は、国民的独立および国民の文化的高さや経済的自立を援助すると見なされうるもののすべてに、まさに熱狂的な中傷の戦いをしかけて酷評を浴びせかけるのである。

この新聞はなによりもまず、ユダヤ人の支配権横領に対して腰をかがめようと欲しない人々、あるいはその独創的な能力それだけですでにユダヤ人に危険だと思われている人々、こういった節操のある人物すべてに対してがんがんとがなりたてるのである。なにしろユダヤ人から憎まれるためには、かれらと戦う必要はないのであり、自分以外のものが将来戦いをしかけようという考えを起すかも知れないとか、あるいはその人々の卓越した独創力のためにユダヤ人には敵対的な民族の力と大きさを拡張する人間であるかも知れない、といった懸念だけでもう十分である。

これらの事柄に関するかれらのたしかな本能はあらゆる人々の心の中の本性をかぎ出し、かれらの精神に同調しない人々は確実にかれらのうらみを買う。ユダヤ人は攻撃を加えられる側ではなく攻撃者であるので、かれらを攻撃する者ばかりか、抵抗する者までもがかれらの敵と見なされる。だが、

非常に大胆でしかも正直な人々を破滅させようとして、かれらが用いる手段は正々堂々たる戦いと呼ばれるものではなく、嘘と中傷である。

この場合、かれらはどんなことにもしりごみせず、卑劣さという面では途方もなくでかくなるので、わが民族がまぎれもないユダヤ人の姿にあらゆる悪の象徴としての悪魔の化身を見ているとしても、驚くことは不必要である。

ユダヤ人の内的本性について大衆が知っていないことや、わが国の上流階層が感受性に欠けて固陋なことなどが、民族を簡単にこのユダヤ人の嘘つきキャンペインの犠牲にしてしまう。

上流階層が生まれつきの臆病からユダヤ人によってこのように嘘と中傷で攻撃をしかけられた人々を見捨てるのに、他方大衆は愚鈍さや単純さからあらゆるものを信じ込むのがつねである。だが、国家の諸官庁はかたくなに沈黙しているか、あるいはほとんどの場合、ユダヤ人の新聞キャンペインを終結させるため、不当に攻撃されている人々を迫害する。これがそのような官職についているロバ連中の目には、国家権威の保護、安寧秩序の保証であると映るのだ。

徐々に、ユダヤ人のマルクス主義的武器に対する恐怖が、真面目な人々の頭脳と心を悪夢のように苦しめる。

人々はこの恐ろしい敵に対してふるえ出しはじめ、それとともにかれらの決定的な犠牲となってしまう。

**組織センターとしてのパレスティナ**　(k)　国家におけるユダヤ人の支配はもはやすっかり安定したと思われる。そこでかれらはいまや再びユダヤ人と自分を呼ぶことができるばかりでなく、また、

かれらの民族的、政治的思想の究極の本音を無遠慮に承認もする。かれらの人種の一部のものはすでにまったく堂々と自分が異民族であることを公言するが、そのさいまたもや嘘をつくのをやめない。なぜというに、シオニズムでもって他の世界の人々に、ユダヤ人の民族自決はパレスティナ国家の創設でもって満足するだろう、ということを真実だと思い込ます努力をしつつ、ユダヤ人たちはこの上なくずる賢く、再び愚かな非ユダヤ人をだますのだ。かれらはパレスティナに自分が住むかも知れぬということのためにユダヤ国家を建設しようなどとは全然考えていないのであり、ただ自分の主権をもち、他の国家の介入を封じたかれらの国際的な世界瞞着組織（まんちゃくそしき）のセンター、つまり正真正銘のルンペンどもの隠れ家や将来の嘘つき連中の大学を作ろうと望んでいるに過ぎない。

けれども、まだ一部のものがドイツ人、フランス人あるいはイギリス人をよそおってごまかしている時代に、他の部分が厚かましくおおっぴらに自分をユダヤ人種だと表明するのはかれらの自信の高まった徴候であるだけでなく、かれらの安全感を示すものである。

どれほどはっきりとかれらが勝利の迫ったことをすでに眼前に見ているかは、かれらが他の民族に属する人々と交際する際の恐ろしいやり方から知られるのである。

黒い髪のユダヤ青年は顔に悪魔のような喜びを見せながらなんの疑念ももたない娘を長い時間待ち伏せして、かれらの血で彼女を汚し、それによってその娘の属する民族から彼女を盗むのである。あらゆる手段を使って、かれらは征服しようとしている民族の人種的基礎を腐敗させようとする。かれら自身は計画的に婦人や娘を堕落させるとともに、より広い範囲にわたって他民族に対して血液的境界線を取り除くことにさえも躊躇（ちゅうちょ）しない。黒人をライン地方にもたらしたのはユダヤ人であったし、いまでもそうであるが、その場合いつも同様の下心と明瞭（めいりょう）な目標がかれらにある。つまり、ユダヤ人

は、そのことによって不可避的に生じる混血化を通じて自分の憎む白色人種を破滅させ、また高度なその文化的、政治的位置から堕落させて、自分がかれらの支配者の地位に上ろうと企てるのである。なにしろ、自分の血を自覚しているような人種的に純粋な民族は、けっしてユダヤ人によって征服されることはありえないだろう。ユダヤ人はこの世界では永遠にただ混血民族の支配者に止まるだろう。

したがってかれらは、計画的に個人個人を継続的にだめにしていって、人種の水準を下落させようと試みる。

**プロレタリア階級の独裁**　だが政治的には、かれらは民主主義の思想をプロレタリア階級の独裁によって交代させはじめる。

マルクス主義で組織された大衆の中に、ユダヤ人は自分に民主主義を不必要にさせ、またそれに代って民族を独裁的に残酷なげんこつでもって征服し、支配させてくれる武器を見出したのである。計画的に、かれらは二つの方面で革命化を目指して努力する、つまり経済的および政治的方面である。

内側からの攻撃に対してあまりにも強烈に抵抗を示す民族には、かれらは自分の国際的勢力を動員して、敵の網でからみつけ、その民族を戦争に追い込み、最後に、必要とあれば戦場にまでも革命の旗を打ち立てるのだ。

かれらは経済的には、利益があがらなくなった公共的企業が国有化を廃止され、かれらの金融支配に従属させられるまで、国家を揺すぶりつづける。

政治的には、かれらは国家に自己保存の手段を許さず、あらゆる国家的自己主張の防衛の基礎を破壊し、指導に対する信念を抹殺し、歴史と過去を軽蔑し、あらゆる真に偉大なものをどぶの中に捨ててしまう。

文化的には、かれらは芸術、文学、演劇を悪風に感染させ、自然の感受性を馬鹿にし、美と崇高、高尚と善に関するあらゆる概念を瓦解させ、そのかわりに人間をかれら独自の低劣な気質の影響下に引きずり入れる。

宗教は茶化され、慣習と道徳は時代おくれのものと言明され、この世界での生存をかけた闘争で民族を支えてくれる最後のものまでも崩壊するにいたる。

**民族的ユダヤ人から血にうえたユダヤ人へ**　(1)　ところで大きな最後の革命がはじまる。ユダヤ人は政治権力を戦いとったので、かれらがまだ身につけているわずかなヴェールをかなぐり捨てる。民主主義的ユダヤ人から血にうえたユダヤ人、民族の暴君が出てくる。幾年もたたぬうちにかれらは国民的なインテリ階層を根こそぎにし、民族からその自然な精神的指導者を奪い取ることにより、それら民族が不断の隷属という奴隷の身の上に落ち込むよう準備をととのえる。

この種のもっとも恐ろしい例はロシアに見られる。そこでは、ユダヤ人文士と金融ギャングの一隊に大民族の支配権を確実に渡してやるために、三千万の人間が実に狂信的な野蛮さでもって、一部分は非人道的な苦痛を与えられて殺されたり、あるいは餓死させられた。

だが、その結末はただユダヤ人に抑圧されている民族の自由の終末にとどまらず、この民族の寄生動物自身も終りをつげることである。犠牲者が死んだ後には吸血鬼も遅かれ早かれ死ぬのだ。

＊

**混血民族**　もし、われわれがドイツの瓦解のあらゆる原因を自分の目で検討するならば、その場合最後のそして決定的な原因として、人種問題、とくにユダヤ人の危険を認識しなかったことが残るだろう。

一九一八年八月に戦場で敗北したことは、ぞうさなく容易に耐えることができるに違いない。この敗北はわが民族の幾多の勝利とは無関係であった。敗北がわれわれを破滅させたのではなく、われわれはこの敗北を準備していた力によって破壊させせられたのだ。というのも、その力は数十年前から計画的にわが民族から政治的、道徳的な本能と力を奪ったが、ただこれらだけが民族の生存を可能にし、したがってまたその権利を与えるものだからである。

旧ドイツ国はわが民族の人種的基礎の保存という問題をば注意することなく見過ごしてしまい、この世界で生命を与える唯一の権利をも軽視した。自分で混血を行なったり、また混血するのを放任した民族は、永遠の神の摂理が命ずるものに違反しており、かれらがより強い民族によって滅亡させられることは、したがってかれらに加えられる不正ではなく、ただ正義の回復に過ぎない。もし一民族が、自然から与えられ、その血に根づいている自民族の本質的特徴にもはや注意を払おうと思わなくなったとしたら、自民族の地上の生存を喪失するとしてももはや不平をいう権利はない。

すべて地上にあるものは改良されなければならない。敗北はすべて後の勝利の父となりうるのだ。それぞれの敗戦は後の高揚の原因となり、それぞれの困難は人間のエネルギーの結実となり、それぞれの抑圧は新しい精神的再建に力を与えうるものである——血が純粋に保存されているかぎりはであるが。

血の純粋さが失われた場合だけ内面的幸福は永遠に破壊され、人間は永久に没落し、その結果というものはけっしてもう肉体からも精神からも取り除くことはできない。

もし、この唯一無比の問題でもって他のすべての生活の諸問題を吟味し、比較するとすれば、この問題で計られることによって、われわれははじめてそれらが笑えるほど小さな問題であるということを知るであろう。それらすべては時間的に制約されている——だが、血を純粋に保存するか保存しないかの問題は、人間が存在する限り存続するだろう。

大戦前における真に重大な堕落現象はすべて結局のところ人種的根拠に還元される。

一般的な法律の問題、あるいは経済生活の欠陥、文化の退廃現象、あるいは政治的な堕落事象、失敗した学校教育の問題、あるいは新聞による成人への悪い影響等々は、いずれが問題になるにせよすべてつねにまたどこででも、もっとも深い根底においては自分の民族の人種的利害に対する不注意、あるいは異民族の人種的危険を見なかったことに原因がある。

**旧ドイツ国の見かけ上の繁栄**　したがって、あらゆる改革の企て、すべての社会的救護事業と政治的骨折、あらゆる経済的好況および精神科学のあらゆる見かけ上の進歩もすべて、つまるところにおいてはそれでもなお重要ではなかった。国民、およびかれらにこの地上の生活を可能にしまた確保する有機体である国家は内面的により健全にはならず、見る見るうちにますます病み衰えていった。旧ドイツ国のあらゆる見かけ上の繁栄は内面の欠点を隠すことができず、わが国をほんとうに強化する企てはすべてもっとも重大な問題を見落したためいつも失敗ばかりしていた。

**内面の敵を認識せぬこと**　さまざまな政治的傾向を支持しつつ、ドイツの民族体にあれこれと治療を試みた人々、いや、ある部分については、指導者たちでさえもが、もともと悪い、あるいは悪意をもった人間であった、と考えるのは不適当であるに違いない。かれらの活動はただ、かれらがもっともうまくやった場合でもせいぜいわが国の一般的な病気の現象形態を見出し、これを克服しようと試みたに過ぎず、そして病原体には盲目的で気づかずに済んでしまった、という理由によってのみ不毛なものだと宣告されるにすぎなかった。旧ドイツ国の政治的発展の線が整然と追跡されるならば冷静な再検査によって、ドイツ国民の統一された、したがって国運の上昇した時代でさえも、内面的な堕落はすでに完全に進行していたということ、および、あらゆる見かけ上の政治的首尾や上昇する経済的富にもかかわらず、一般的状況は年々悪くなっていったこと、これらのことが洞察されるに違いない。帝国議会の選挙でさえも、マルクス主義者の投票の外面的な膨張の中に、ますます近づいてくる内面的な、したがって外面的でもある崩壊を示したのだ。いわゆるブルジョア政党のすべての成果は無価値であったが、それもただかれらがいわゆるブルジョア階級選挙を勝利してさえも、マルクス主義の上げ潮の頭数の増水を阻止できなかったというだけにとどまらず、なによりもまずかれら自身がすでに解体の酵素を自分の中にもっていたという理由からである。そのことに気づくことなく、ブルジョア階級の世界はマルクス主義的観念のプトマインによって内面的にすでに中毒を起していたし、かれらの抵抗は、全力を尽して戦う決心をしている相手を原則的に拒絶するというよりも、功名心に燃えた指導者達の競争相手へのそねみからしばしば出てきた。この長い年月を通じて、ただひとり確固として変わることなく戦ったものがあるが、これこそ**ユダヤ人**であった。かれらの六芒星[13]は、われわれ民族の自己保存の意志が消えてゆくのに正比例して、ますます高く上っていった。

したがって、一九一四年八月には攻撃を決意した民族が戦場に突進したのでもなく、むしろ、わが民族体内に進行している平和主義的、マルクス主義的マヒに対する国民的な自己保存衝動の最後の燃え上りが生じたに過ぎなかった。この運命的な日々にあっても内部の敵が認識されていなかったから、外部への抵抗はすべてむだであり、そして神の摂理は無敵の剣に報いることなく、永遠の因果応報という法則に従った。

**ドイツ国民のゲルマン国家**　このような内面的認識をすることによって、われわれに対して、新しい運動の主旨と目的が形成さるべきであった。これらは、われわれの信念によれば、ドイツ民族の没落をとめうるだけでなく、将来、国家がその上に存立しうる花崗岩（かこうがん）のような固い基礎をつくることのできる唯一のものであった。この国家は経済的利益や関心の民族とは無関係なメカニズムではなく、民族的有機体を表わすものである。

つまり、

**ドイツ国民のゲルマン国家**

を表わすものである。

# 第十二章　国家社会主義ドイツ労働者党の最初の発展時代

わたしは、この巻の終りに当って、われわれの運動の最初の発展時代を描き、それによって引き起された一連の諸問題を簡単に論じようと思うが、これは運動の精神的目標についての論文を書くためにするのではない。この新運動の目標と課題は非常に巨大であって、これを扱うためにはそれだけで優に一巻の書物を必要とする。それゆえ、わたしは第二巻で運動の綱領的基礎を立ち入って議論し、われわれが「国家」という言葉で考えているものについての一つの観念を示すことを試みるだろう。わたしはその場合、「われわれ」という言葉でもって、つまるところは皆同じものを熱望しているのだが、心の内で思い浮かべているものを個々に細かく叙述する言葉を見出せないでいるような、数十万の人々すべてを考えている。なぜなら、あらゆる偉大な改革で注目すべきことは、その改革がさし当り主張者をただ一人だけしかもたぬことがしばしばあるのに、それを支持するものは数百万も存在するからである。改革の目標は、しばしば、すでに幾百年も以前から数十万の人々の心の中の憧れに満ちた願望であるが、それは一人の人間がそのような一般的な意欲の告知者としてあえて乗り出し、旗手となって新しい理念でもって昔の憧れに勝利を達成させるまでは、単なる願望にとどまる。

だが数百万の人々が内心で、今日存在する状況を根本的に変革したいという願望をもっていることは、かれらが悩んでいる深刻な不満から知ることができる。この不満は種々雑多なあらわれ方をしている。ある人は無気力となり希望を失うが、他の人は憎悪、立腹、激昂のとりことなり、またさらに、

後者は無関心に、前者は今度は度を越した激怒にといった風にである。選挙に飽いた人々やまた左翼の熱狂的な過激派に傾倒する人々の存在も、この内面的な不満を証明するものとみてよいだろう。

そしてまず第一に、この若い運動もまたこれらの人々に望みをかけるべきであった。運動は満足したもの、倦怠(けんたい)したものの組織をつくるべきではなく、悩み、苦しみそして煩悶(はんもん)しているもの、不幸でありまた不満であるものを結集すべきであり、とりわけ、民族体の表面を泳ぐのではなく、その根底に根をはやさなければならない。

＊

**革命後の状況**　純粋に政治的に見た場合、一九一八年には次のような光景が生じていた、すなわち一つの国民が二つの部分にひき裂かれていた。一方は問題にならぬほど少数であって、あらゆる肉体的労働をしているものを排除した残りの国民的インテリ階層を含んでいる。かれらは外面的には国民的だが、かれらにはこの国民的という言葉でもっていわゆる国家的利益、これはまた王家の利益と同一だと思われているが、この利益を非常に陳腐にまた弱々しく擁護することしか思いつかないのである。かれらは自分の思想と目標を精神的な武器で擁護しようとするが、その武器は不完全であり、また皮相的であって、敵の野蛮さに対してはそれ自体もうなんの役にも立たないのだ。恐ろしい打撃をたった一つくらっただけで、ほんの少し前まではまだ支配していたこの階級はノックアウトされ、震えながら臆病にも無情な勝利者の軽蔑をすべて我慢する。

かれらに対して、第二の階級として手工労働者の大衆が対立している。この階級は、多かれ少なかれ、急進マルクス主義運動に握られており、あらゆる精神的抵抗を暴力によって打ち破る決意をしている。かれらは国民的であろうと欲せず、意識的に国家的利益の促進はすべて拒否し、逆にあらゆる

ず、また不可能であるような国民の構成要素を包括している。

なにしろ一九一八年にはもちろんすでに、ドイツ民族の立ち直りは外的な力を再獲得しなければ可能にならない、ということは明白であったに違いないからである。だがこのための前提は、わがブルジョア「政治家」がいつもおしゃべりして回っていたように武器であるのではなく、意志の力である。ドイツ民族は、かつて武器を十二分にもっていた。われわれは武器で自由を守ることができなかったが、それは、国民の自己保存衝動のエネルギー、つまり自己保存意志が欠けていたからである。最上の武器も、それを用いる心の用意ができていず、用いようと意欲し、決意する精神が欠けている限り、死んだ、価値もない道具に過ぎない。ドイツは防備のない国になったが、それは武器を欠いたからでなく、民族の存続のために武器を維持する意志が欠けていたからである。

今日とくにわが左翼政治家は、武器をもたなかったことが、自分達に不決断な、譲歩的な、だが実のところは反逆者的な外交政策を止むなく取らせた原因であると宣伝するのに骨を折っているが、そのことについて、かれらはただの一言で答えられなければならぬ。否、その逆が正しいのだ、と。国家的利益の課題についての、君達の非国民的、犯罪者的政策によって、君達はかつて武器を明け渡してしまった。そして今や君達は武器の欠乏を、君達の軽蔑すべきみじめさを正当化する原因に見せかけようと努力する。これは、君達の行為のすべてがそうであるように嘘であり、偽造である、と。

しかしながら、このような非難は寸分違わず右翼の政治家にも当っている。なにしろ、かれらの哀れな臆病さのお陰で、一九一八年に支配権を手に入れたユダヤ人の賤民が国民から武器を盗むことができたからである。したがってかれらもまた、今日武器を欠いていることがかれらに賢明な慎重さ

って、無防備はかれらの臆病さの結果である。
それであるからドイツの力を回復する問題は、われわれがどのようにして武器を製造するか？　などといったことではなく、われわれが一民族を武装させることができるような精神をどのようにして呼び起すか？　といったことである。もしこの精神が一民族を支配さえすれば、望みのままにその中のどれもが武器に通じる種々様々な道を見つけ出すだろう！　だが腰抜けに十丁のピストルを与えても、攻撃された場合には一発も撃つことはできぬだろう。したがって、かれにとってそのピストルは、勇気のある男にとって一本のただの節だらけの杖をもつよりもより小さな価値しかないのである。

**政治的力の回復**　わが民族の政治的力の回復の問題は、第一に次のような理由からしてすでにわが国民の自己保存衝動を健全にする問題である。つまり、あらゆる準備されつつある外交政策や国家自体の評価というものは、経験からすれば、現在保有している武器によるよりも、認識されているか、あるいはとにかくも想像されている国民の精神的抵抗能力によって一層大きく左右されるものである。ある国民の同盟可能性は、激しく燃える国民の自己保存意志や英雄的な決死の勇気が明白に存在していることによって、より強く決定されるのであり、現存している生命のない武器の量によって決定されることははるかに少ない。なぜなら、同盟は武器と結ばれるのではなく人間と結ばれるからである。したがってイギリス国民は、かれらの指導者層と大衆の精神の中に、一度開始された戦いは時間と犠牲を無視し、あらゆる手段を用いて最後の勝利まで貫き通そうと決心しているあの野蛮さと粘り強さが期待される限り、世界で一番貴重な同盟仲間であると見なされなければならぬだろう。その際には、

目下現存している軍備を他の諸国家の軍備と比較する必要は全くないのだ。
だが、ドイツ国民の復興はわれわれの政治的な自己保存意志を回復する問題である、ということが理解されるならば、そのためにはもともとすでに意欲は少なくとも国民的である分子を獲得することでは十分でなく、意識的に非国民的である大衆を国民化することによってのみその復興が可能なことも明白である。

**大衆の獲得**　したがって、若い運動の目標が自らの主権をもつドイツ国家の再建を目指すからには、その闘争を徹底的に大衆の獲得に向けなければならぬだろう。一般的にわが国のいわゆる「国民的ブルジョア階層」がどれほどあさましいとしても、そしてかれらの国民的信念がどれほど不十分なものに見えるとしても、その場合この人々の側から、強力な国家主義的内政外交に対する真剣な抵抗が将来期待されぬことは確実である。あのよく知られた固陋(ころう)な近視眼的理由でもって、ドイツのブルジョア階層がすでに昔ビスマルクのような人物に対して行なったように、来たるべき解放の時期に消極的なレジスタンスを固執することがあるとしてさえ、かれらの積極的反対などは周知のことわざになりそうなかれらの臆病さを思えば、けっして恐れる必要はない。
国際主義的立場に立つわが国民同胞の大衆については事情は違う。かれらは単純素朴であるため暴力で片づける考え方により強く賛成するばかりでなく、かれらのユダヤ人指導者はかれら以上に残酷であり無情である。かれらは以前にドイツ軍隊の根幹をへし折ったと全く同じように、あらゆるドイツの高揚を打倒するだろう。だがとりわけかれらはこの議会主義で支配されている国家では、かれらの多数の力で国家主義的な外交政策をすべて妨害するだけでなく、ドイツの力がより高く評価される

ことも、したがって同盟の可能性もすべて閉め出してしまうだろう。なぜかといえば、われわれだけがわが国の千五百万にのぼるマルクス主義者、民主主義者、平和主義者、中央党びいきの連中がもっている欠点に気づいているばかりでなく、外国にそのことは一層よく知られているからである。諸外国はわが国との間に可能である同盟の価値を、このような重荷となる勢力に従って計っている。どんな国も国民の活動的な部分が、すべて決定された外交政策に、きわめて消極的な態度しかとらないような国家とは同盟しないのである。

さらに、国民を裏切るこれら党派の指導者は単なる自己保存衝動からだけでも、もはやあらゆる高揚に敵対的な態度をとらなければならず、またそうなるという事実が以上のことにつけ加わる。ドイツ国民が、わが国家を襲った未聞の崩壊に対する原因と機会をつくった人々と論判せずに、今一度以前の地位をとり戻しうるということは、歴史的に見てまったく考えられない。なぜなら、後世の審判は一九一八年の十一月を大逆罪ではなく、国家に対する反逆罪と認めるに違いないからである。したがって、すべて外部に対してドイツの独立を回復することは、第一にわが国民の内側の意志の一致をとり戻すことと結びついている。

しかし純粋に技術的に考えてみても、外部に対してドイツを解放しようという思想は、大衆の心の中にもまたこの自由の思想に奉仕しようとする精神的準備が整っていない限りナンセンスに思える。純粋に軍事的に見れば、とりわけ将校ならだれでも少し考えれば外国との戦いは学生部隊ではできず、そのためには国民の頭脳以外にげんこつも必要であることを理解するだろう。この場合、ただいわゆるインテリ階層にだけ依存する国家防衛は償うことのできぬ財宝をほんとうにむだづかいしたのだ、ということがなおも注意されなければならない。一九一四年の秋に志願兵連隊員としてフランドル平

野で戦死した若いドイツのインテリは、後になって痛烈にその死がくやまれたのである。かれらは国民のもっていた最上の財宝であったし、かれらを亡くしたことは戦争の最中にはもはや補充することができなかった。しかし、突撃してゆく大隊がその隊伍の中に労働者大衆をもたなければ戦争そのものが貫徹されないだけでなく、わが民族体の内部の意志の統一が欠けていては、技術的な面での準備も実現できない。ヴェルサイユ平和条約によって、武装解除されたままで日を送らねばならぬことをきびしく監視されているほかならぬわが民族は、自由と人間の独立性を獲得するためのどのような技術的準備も、内部のいぬ連中の大群がすっかり片づけられて、生まれつきの無節操によって周知の銀三十枚のためにあらゆるものをすべて裏切るような人間[1]しか残らなくなるまでは実行できない。しかし、このような人間はどうにでもなる。それに反して、政治的信念から国家の高揚に反対する数百万の人間は、克服できにくいように見える――かれらの敵対する原因である国際的マルクス主義世界観を克服して、かれらの心臓と頭脳からこれをむしりとらない限り克服は困難である。

したがって、どのような観点から、すなわち外交政策の準備、軍隊の技術的な装備、あるいは戦争そのもの、そのいずれからわが国の国家的、民族的な独立を再び戦いとる可能性が吟味されようとまったく同じであり、わが国の国家的独立という思想をわが民族大衆の心に呼び起すことがあらゆることの前提として残るのである。

だが、外面的自由を回復しなければ、すべての国内の改革自体は最上の場合でさえも、植民地としてのわが国の収益能力の増強を意味するに過ぎない。いわゆる経済的繁栄のすべてから生じる剰余は、われわれの国際的管理人のだんな様方に役立つに過ぎず、社会的改善もすべて、もっともよい場合でさえこの方々のために労働能率を高めるだけである。文化的進歩もけっしてドイツ国民には分け前を

与えないだろう。およそ文化の進歩は、ある民族の政治的独立と尊厳にきわめて密接に結びついているのだ。

＊

**大衆の国民化**　したがって、ドイツ国の将来に有利な解決はわが民族大衆の国民的信念と結びつき合っているのであるから、その活動が現在を満足させるに尽きず、ただ将来に予想される結果でもって一切の自分の行為を吟味すべきであるような運動の最高で最大の課題もまた、この国民的信念を目指さなければならない。

こうして、われわれは一九一九年にはすでに、この新しい運動が最高目標として、さし当り大衆の国民化を成就しなければならぬことをはっきり認識していた。

そこから、戦術的観点でもって一連の主張が生じた。

(1)　国家の高揚に大衆の心を引きつけるためには、どんな社会的犠牲も大きすぎるということはない。

たとえわが国の賃労働者に今日どれほど大きな経済的譲歩がなされようとも、その譲歩がこの広い階層を再び民族の中にとり戻すことに役立つならば、この譲歩などは全国民の利益と比べて問題にはならないのだ。残念ながら、しばしばわが国の企業家階級の中に見出せるような近視眼的な固陋さだけが、わが国民の内部の民族的な団結心が回復されない時には、結局かれらにとって経済的好況も存在しないし、したがって経済的利得もありえないということを見誤りうる。

もし、ドイツ労働組合が戦時中に少しの容赦もなく労働者階級の利益を守ったとすれば、また、もし組合が戦時中でさえも当時の配当金に貪欲な企業家階級に対してひんぱんにストライキでもってか

れらが代表している労働者の要求に同意することを強いていたならば、さらにまた、もし組合が国家の防衛という関心事についても同様に熱狂的に自分のドイツ主義信奉を公言し、また、もし組合が同じように他のことを顧慮せず祖国に属するものを祖国に与えていたとするならば、けっして戦争に負けていなかったことだろう。だがどのような経済的譲歩も、そして最大の譲歩でさえも、戦勝のもつ巨大な意味に対してはどれほど笑うべき小さなものであったことだろう。

したがって、ドイツ労働者を再びドイツ民族にとり戻すことを意図する運動は、およそこの問題に関しては経済的犠牲などは、国民経済の維持と独立がそれによって脅かされるのではない限りなんの意味もない、ということを認識していなければならない。

(2) 大衆に対する国民教育は社会的向上という回り道を通ってはじめて可能であるが、それは、もっぱらその道によってのみ個々人が国民の文化的財産にも関与することを可能にさせるような一般的な経済的前提がつくり出されるからである。

(3) 大衆の国民化はけっして中途半端や、いわゆる客観的立場での弱々しい強調ぐらいでは起るものではなく、とにかく追求しようと思った目標に向かって容赦のない態度、熱狂的に一方的な態度をとることによって可能となるものである。だから結局一民族はわが国の今日のブルジョア階層の使っている意味では、すなわちあれこれのたくさんの制限つきの意味では、「国民的」になることはできないのであり、極端にはつきものである激烈さを残さずもった国民主義だけが必要なのである。毒は反対の毒によってだけ破壊されるのであり、無気力なブルジョア的情緒だけが、中間の道を天国に通じる道と考えるに過ぎない。

民族大衆は大学教授からも、そして外交官からも成り立っているのではない。かれらが少ししか抽

象的な知識をもっていないことはかれらの気持ちを感情の世界により多く住むようにさせる。かれらの肯定的であるか、そうでなければ否定的である態度は、その点に基づくのである。かれらはこの二つの方向中一方の活動だけを感じるのであり、この両者の中間を浮動している中途半端にはけっして感受性をもたない。だがかれらの感情的態度は、同時にかれらをはなはだしく堅固にする。信念は知識よりも動揺させることがむずかしく、愛情は尊敬よりも変化をこうむることが少なく、怨恨（えんこん）は嫌悪よりも永続的である。この地上でもっとも巨大な革命の原動力は、どんな時代でも、大衆を支配している科学的認識にあるというよりは、むしろかれらを鼓舞している熱狂、また往々かれらをかり立てるヒステリーの中にあった。

大衆を獲得しようと欲するものは、かれらの心の扉を開く鍵を知らなければならない。その鍵は客観性でもなければしたがって優柔不断でもなく、意志と力である。

(4)　民衆の心を獲得することは、自分の目標に対して積極的な闘争を指導してゆくことと並んで、この目標の敵対者を絶滅させる場合にのみ成功できる。

民衆はどんな時代でも、敵に対する容赦のない攻撃を加えることの中に自分の正義の証明を見出し、逆に他者の絶滅を断念することは、たとえそれを自分が正しくないことの証拠と感じはしないにしても、自分の正義についての不確実さと感じとる。

大衆は本能のかたまりに過ぎず、かれらの感情は、敵同士であることを望んでいると主張している人々の間のお互いの握手を理解しはしない。かれらが望んでいることは、より強力なものの勝利とより弱いものの絶滅あるいは弱いものの無条件の隷属である。

わが国の大衆の国民化は、わが民族の魂をとらえるためにあらゆる積極的な闘争を行なうことによ

って、国際主義的な大衆の毒殺者を根絶することができてはじめて成功するだろう。

(5) およそ現代の大問題はすべて刹那の問題に過ぎず、特定の原因から生じた結果現象を示しているに止まる。だがそれらの中で一つだけ、つまり、民族の人種的保存の問題だけは根源的な意味をもっている。血液の中にだけ、人間の力も弱さもその基礎をもっている。自己の人種的基礎のもつ意味を認識せず、また尊重しない民族は、グレーハウンド犬の速力もプードル犬の利発さもけっして教え込まれたものでなく、その種に生まれつきの性質であることがわからないで、ちんにグレーハウンド犬の性質を教え込もうとしているような人間に等しい。自己の人種の純粋性を維持することを断念する民族は、そのことによって自己のあらゆる面に発現する生命の統一を断念することにもなる。かれらの存在様式のまとまりのなさは、かれらの血のごちゃごちゃに混じってしまったことからの自然な必然的結果であり、かれらの精神的、創造的力の変質はかれらの人種的基礎が変化した結果であるに過ぎない。

今日のドイツ民族から、かれらにはもともと本質的に縁遠い意見や悪徳を取り除こうと思うならば、まずこれらの意見や悪徳を生じさせている異民族の病原体から、ドイツ民族を救い出さなければならないだろう。

人種問題、したがってユダヤ人問題をきわめて明白に認識するのでなければ、ドイツ国民の再興はもはや行なわれないだろう。

人種問題は世界史を理解する鍵を与えるばかりでなく、人種文化一般をも明らかにしてくれる。

(6) 今日国際主義の陣営に入っているわが民族大衆を、国家主義的な民族共同体に編入することは、正当な身分上の利益を守ることの断念を意味するものではない。身分や職業の利害が相違していると

いうことは、階級分裂と同じではなく、われわれの経済生活から生じるわかり切った結果現象である。職業的グループ分けは真の民族共同体と少しも対立するものではない。というのも民族共同体は、その民族それ自体に関係する問題のすべてにわたって民族を統一するところに成立するものだからである。

階級にまでなっているある身分を民族共同体――あるいはただ国家にしても――に編入することは、上位の階級を引き下げることによってではなく、下位の階級を引き上げることによって実現される。またこの過程をになうものはけっして上位の階級ではありえず、自己の同等の権利のために闘争している下位の階級でなければならない。今日のブルジョア階層は貴族の措置によって国家に編入されたのではなく、みずからの指導による自己の行動力によって国家の構成員となった。

ドイツ労働者は弱々しい兄弟愛的シーンの連続といった回り道では、ドイツ民族共同体のわくの中まで高められず、意識的に自己の社会的、文化的状態を、一番重要な区別が取り除かれたと見なしてもよいところまで、高めることが必要である。この発展を目標とする運動は、その際自己の味方をまず第一に労働者の陣営から呼び寄せなければならないだろう。その運動は、インテリがこのような追求さるべき目標をすでに残らず把握してしまっている場合にだけ、これらのインテリをつかむことができるに過ぎない。このような変化と前進の過程は、十年や二十年では終らないだろうし、経験からすれば多くの世代交替を必要とする。

今日の労働者が国民的な民族共同体に向かって前進してゆく場合、一番むずかしい障害はかれらの身分上の利益擁護にではなく、かれらの国際主義的な、民族および祖国に敵対する指導と態度の中にある。同じ労働組合が、熱狂的な国家主義でもって政治的および民族的関心事へと指導されてゆくと

すれば、数百万の労働者は民族のもっとも価値高い構成員に仕上げられ、その場合単なる経済的な関心事について生じる個々の闘争には考慮を払わないに違いない。

ドイツ労働者を誠実にその民族にとり戻し、国際主義的幻想から覚醒（かくせい）させようと望んでいる運動は、とりわけ企業家階層内に支配的な意見に対して、もっとも激しく反対しなければならない。つまりかれらによれば、民族共同体では賃労働者は雇主に対して抵抗することなく経済的降服をすべきであり、賃労働者が正当な経済的生存のための利益を守るすべての企てすらも、民族共同体への攻撃と見なされなければならないのだ。この意見を支持することは意識的な嘘を支持することである。というのは、民族共同体はもちろん一方だけにではなく、他方にもまたその義務を負わせるからである。

もし労働者が公共の福祉や国民経済の存続を考慮せずに、自己の力に頼ってゆすりのように要求を出せば、かれらはほんとうの民族共同体の精神を犯すことはたしかであるが、だが、企業家が非人間的、搾取的な経営管理をして国民的労働力を濫費し、その汗の結晶から数百万の金をぼろもうけするならば、かれらもまたこの共同体をはなはだしく破壊するものである。その時は、かれらは自分が国民的であると振舞う権利も民族共同体について語る権利もなく、かれらは利己主義的なルンペンに過ぎない。というのも、かれらは社会的不和をもち込むことによって、どっちみち国民にとって損害になるに違いない後の闘争を誘発するからである。

この若い運動がその支持者を汲み出さねばならぬ貯水タンクはしたがって第一にわが賃労働者大衆であるだろう。必要なことはかれらを国際主義的幻想から覚醒させ、社会的苦境から解放し、文化的みじめさから解除してやり、そして、国民として感じ、国民的であろうと欲する団結した貴重な構成要素として民族共同体の中へ導き込むことである。

もし国民的なインテリ階層の中に、民族とその将来に対してきわめて思いやりのある心をもち、また、これら大衆の魂をつかむための闘争の意味をほんとうに深く認識しているような人々があれば、その人々はこの運動の隊伍の中で貴重な精神的根幹として大いなる歓迎を受けるのである。だが、この運動の目標は、けっしてブルジョア的で無定見な選挙人連中を獲得することではありえない。そのような場合にはこの運動は、その全体的性格からして広い層の人に対する組織力をマヒさせてしまうような大衆まで背負わねばならぬことだろう。なにしろ、ただこの運動のわくの中だけで上下にわたるもっとも広範な大衆を一括指導するという思想は理論的には美しいにもかかわらず、やはりそれに対しては次の事実を考え合わせなければならない。つまり、一般的なデモンストレーションをかけることにより、ブルジョア階層大衆に心理的影響を与えれば、たしかに種々の感情をひき起したり、いやそれどころか認識さえも広げさせることができるが、しかし、人格的特性、あるいはもっと適切に表現すれば、その生成と形成に数百年もかかった悪徳をなくすることはだめである。両者の文化的水準や両者の経済的利害の問題に対する態度の差異は、目下のところなお非常に大きく、それゆえデモンストレーションの陶酔が消えるやいなや、たちまちその差異は妨害となって現象してくることだろう。

だが最後に、もともと国民的な陣営内部での組み変えを企てるのが目標ではなく、非国民的陣営が獲得されねばならない点を注意しよう。

そして、このような観点が結局、この運動全体の戦術的態度を決定するものである。

(7)　この一面的な、しかしそれだから明白な立場は運動の宣伝の中でも表現されなければならないし、他方また宣伝的理由からしてさえも要求されることである。

宣伝がこの運動にとって有効であるためには、それはただ一方にだけ向けられねばならない。というのは、そうしない場合には、問題になっている両方の陣営の知的な素養が違っているから、一方から理解されなかったり、あるいは他方から自明のこと、したがって退屈なこととして拒否されるに違いないからである。

個々の表現法や語調でさえも、きわめて極端な二つの階層には同じように効果をもつことはできない。もし、宣伝が素朴な表現法をやめるとすれば、大衆の感覚に通じる道を失ってしまう。それに反して、宣伝が言葉や身ぶりに大衆の感情の言辞のもつあけすけさを用いれば、いわゆるインテリから野卑で月並だとされて受けつけられないだろう。今日は道路清掃夫、錠前屋、溝掃除人などの聴衆を前に語り、明日は大学教授や学生の聴衆の前で必要上同じ思想内容の講演をして、同じ効果をうることができるような人間は、いわゆる雄弁家の中でも百人に十人はいまい。だが、錠前屋と大学教授を同時に前において、両方の理解能力に一致するだけではなく、両方を同じく効果的に感動もさせ、あるいは万雷のような拍手の嵐をまき起すまでも酔わせるようなやり方で語り終えることのできる人間は、千人の雄弁家中にもおそらくわずか一人しかいないだろう。だが人々はすぐれた理論の中の最上の思想といったものでさえも、多くの場合その普及は凡人によって、もっとも平凡な人間によってのみなされうる、ということをつねに忘れてはならない。ここではある理念の天才的創造者が心がけることがらが問題なのではなく、この理念の告知者がなにをどんな形式で、またどんな成果でもって、大衆に伝えるかが問題であるのだ。

社会民主党のみならず、マルクス主義運動全体に通じる強力な宣伝力は、大部分がかれらが呼びかけた聴衆の単一さと、それにともなう一面性に基づくものである。その場合、かれらの主旨が見たと

ころ乏しければ乏しかったほど、いや固陋(ころう)であればあったほど、それだけ一層容易に、その知的水準が主張されたことがらの水準に対応していた大衆に受け入れられ、同化されていったのである。

このようなわけで、この新しい運動にとっても同様に単純で明白な線が打ち出された。

つまり、宣伝は内容と形式において大衆に適合されねばならず、その正しさはもっぱら有効な成果でもって計られなければならない。

広範な階層が集った民衆集会では、出席のインテリに知的に一番近い演説家が最上というわけではなく、大衆の心を獲得するものが最上の演説家なのである。

そのような集会に出席しているインテリが、ねらっている下層の人々の心に演説家の影響が明らかに見られるにもかかわらず、その演説を知的な高さという点で酷評するならば、かれの思考作用の完全な無能さと、この若い運動に対するかれらの人間としての無価値さがそれによって証明されているのである。この運動にとっては、運動の課題と目標をすでに非常にはっきりと把握しており、その結果宣伝の活動ももっぱらその結果によって評価することを知っており、その宣伝が自分自身に与えた印象によっては評価しないような、そういったインテリだけが問題になる。なにしろ、もともとすでに国民的な考え方をしている人間を楽しませることに宣伝は奉仕すべきでなく、それは、わが民族の敵を——かれらがわれわれと同じ血をもっている限り——克服することに奉仕すべきだからである。

一般的には今やこの若い運動にとって、わたしが戦時宣伝のところですでに簡単にまとめたあの主旨が運動独自の啓蒙(けいもう)活動の仕方と実施を決定し、それらに規準を与えてもよいと思われる。

その主旨が正しかったことは、その成功が証明した。

(8)　政治的改革運動の目標は、啓蒙活動や支配している権力者に影響を与えることなどでえられは

しないのであり、政治権力を獲得することによってのみ到達される。すべて世界を動かしてゆく理念には、その主旨を実施しうるような手段を保証する権利ばかりでなく義務さえある。成功するかどうかが、そのような行動の正、不正についての地上の唯一の審判者であるが、しかしその際成功という言葉でもって、一九一八年の時のような権力の獲得それ自体が理解されてはならないのであって、民族にとって祝福に満ちた権力の成就こそが成功という言葉の意味である。したがってクーデターは、ドイツの軽率な検事が今日そう思い込んでいるように、革命者が国家権力の占取に成功した場合にそれで直ちに成功したと見なされてはならず、このような革命的行為の底にある意図と目標が現実化されて、国民が過去の統治の下にあった時よりも一層幸福になった場合に、はじめて成功したといわなければならない。それは、一九一八年秋の悪漢どもによる行動が自らそう呼んだようなドイツ革命については、当てはまらないことなのである。

だが、政治権力の獲得が改革的意図の実践的な遂行に対する前提を形成するのであるから、改革的意図をもった運動はその成立した最初の日から、大衆運動であることの自覚をもち、けっして文学的なお茶のみクラブや、俗物的な玉ころがし遊びの会合と考えてはならない。

**最高権威——最高責任**　(9)　この若い運動はその本質および内部の組織からして、反議会主義である。つまりこの運動は一般に、それ自体の内的構造においてもそうであるように、多数決の原理を拒否する。というのは、この原理では指導者はただ他人の意志と意見の執行者に下落してしまうからである。この運動は、事の大小を問わず、最高の責任と結合された無条件の指導者権威の原則を主張する。

この原則の運動における実践的な結果は次のようである。

つまり、ある地区グループの第一議長はすぐ上級の指導者によって任命される。かれはその地区グループの責任をもった指揮者である。全委員会はかれの支配下にあり、逆にかれが委員会に支配されるのではない。票決委員会は存在せず、作業委員会だけが存在する。作業は責任指揮者、つまり第一議長が分配する。同様の原則がすぐ上級の組織、小管区、中管区、あるいは大管区にも妥当する。つねに、指導者は上から任命され、同時に無制限の全権と権威を与えられる。ただ全党の指導者だけが、党規則にもとづいて、全党員大会で選ばれる。だが、かれはこの運動の独占的指導者である。全委員会はかれの支配下にあり、逆に、かれが委員会に支配されるのではない。かれは決定し、それによってしかし自分の双肩に責任をになうのである。かれがこの運動の原則に違反したり、運動の利益によく奉仕しなかったとすれば、新しい選挙の裁きの前でかれに責任を取らせ、かれの地位をとり上げることは、運動の支持者の自由である。そのとき、かれのかわりに、より能力のある新人が現われるが、けれども、かれは同じ権威と同じ責任をもつのである。

この原理をただ運動自体の隊列の中だけでなく、全国家に対しても決定的な原理とすることは、この運動の最高課題の一つである。

指導者になろうと欲するものは最高の無制約の権威をもつと同時に、究極のもっとも重大な責任もになう。

そうしたことができず、あるいは臆病なため自分の行為の結果に責任をもつことのできぬものは指導者となる値打がない。英雄だけが指導者に適している。

人類の進歩と文化は多数決の所産ではなく、もっぱら個人の独創力と行動力に基づいている。

このような個人を訓育して、それぞれの資格に応じたところへ配置することは、わが民族の偉大さと力を回復するための一つの前提である。

したがってこの運動は反議会主義的であり、運動が議会制度へ参加するのでさえ、ただそれを破壊するための、つまりわれわれが人類のもっとも深刻な退廃現象の一つと認めなければならない制度をとり除くための活動という意味しかもちえない。

**宗教論争の拒絶**(10) この運動は、自己の政治的活動のわくの外にある問題や、自己にとって原則的意味をもたぬため重要でない問題には、どのような立場の表明も断固として拒否する。運動の課題は宗教上の改革のような点にあるのではなく、わが民族の政治的再組織に関するものである。運動は、両宗派(2)がわが民族の存続に対して同じく貴重な柱石であると見ており、したがってわが民族体の倫理・宗教的、精神的な安定化につとめるこの基礎を自己の党派的利益の道具に堕落させようと望んでいるような政党と闘争する。

**君主政でもなければ共和政でもない** この運動は、最後に、ある特定の政体の回復や、ある他の政体に対して闘争することを自己の課題とは考えないで、それがなければ共和政も君主政も結局のところ存立しえないような原則的基礎を創造することを課題にする。その使命は君主政を創設することでもなければ、共和政を安定させることでもなく、ゲルマン国家の創造にある。

この国家の外面的な形態の問題、つまり国家が冠を戴くかどうかの問題は原則上は重要でなく、それはただ実際に都合がよいかどうかによって決められるに過ぎない。

自己の生存という大きな問題と課題をあらかじめ把握している民族では、外面的手続の問題はもはや民族内部での闘争にまではならないだろう。

**組織という必要悪**　(11)　運動の内部組織の問題は、都合のよしあしの問題であって、原理上の問題ではない。

最上の組織とは、運動の指導層と個々の支持者の間に最大の媒介装置を挿入している組織ではなく、最小のそうした装置をもっている組織のことである。なぜなら、組織の課題はある特定の理念――これはさし当りつねにただ一人の頭から生まれる――を多数の人間に媒介するとともに、その理念を現実化するのを監視することであるからである。

したがって、組織はすべての点で必要悪であるに過ぎない。それはせいぜいよくても目的のための手段であり、最悪の場合に自己目的となる。

世界は精神的な人物よりも、機械的な人間をより多く生み出すので、たいてい組織の形式は、理念自体よりも一層容易につくられがちである。

あらゆる実現を目指している理念の進行、とくに改革的性格をもったその進行は、大胆に描けば次のようである。

つまり、なにかある独創的な思想が、自己の認識を他の人類に伝えることを使命と感じているような人間の頭脳に生じてくる。かれは自己の直覚を説教し、徐々に一定の範囲の支持者を獲得する。このように一人の人間の理念が直接的、個人的に他の同胞に伝達されるという経過はもっとも理想的であり、もっとも自然である。だが新しい教義の支持者が上昇的に増大すると、徐々にその理念の所有

者にとって、個人的に無数の支持者達を直接感化し、指導し、指揮し続けることが不可能になってくる。団体の増大の結果、直接的なもっとも身近な触れ合いが不可能になってゆくまさしくその程度に応じて、両者を結合する関節の必要性が生じてくる。すなわち理想的な状態はそれでもって終り、その代りに組織という必要悪が現われる。小さな下部グループが形成される。これは政治運動の中ではたとえば地区グループとして、より後の組織を生み出す胚細胞なのである。

**本部の権威**　それにもかかわらず、教義の統一性をなくさないようにしようと思えば、精神的創設者およびかれによって教育された追随者集団の権威が絶対的に承認されたものと見なされる時がくるまでは、そのような下部組織をつくることはできないのである。運動に本部としての中心地点があることは、地理政治学的(3)に見てこの場合いくら高く評価しても高過ぎるということはありえない。そのようなメッカあるいはローマといった土地がもっている魔術的な魅力で取り囲まれた地点がただ存在するというだけで、内部的統一の存在やこの統一を表わす頂点を認知することから生じる力が、結局運動に贈られるのである。

したがって、最初の組織的な胚細胞をつくる場合には、理念の本来の発祥地についてただその意味づけをし続けるだけでなく、そこをきわめて意味深い地点にまで高めてゆくように注意を怠ってはならない。運動の発祥地点・指揮地点のもつ精神的、道徳的、実際的な巨大な意味をそのように高めることは、無数となった運動の最下部の胚細胞が、新しい連合の組織的形式を要求するまさにその度合いに応じて、進められなければならないのである。

なぜなら、個々の支持者の数の増加と、かれらとそれ以上直接に触れ合うことが不可能になったこ

とが、最下部に各地での集合を招いたと同じように、この最下部の組織形式の無数の増加は最後には再びより上部の連合すなわち政治的には大管区連合あるいは小管区連合とでも呼びうるものを欠くことができなくなる。

原点としての本部の権威を最下部の地区グループに対して確保してゆくことは、おそらくまだやさしいだろうが、この地点を今後形成されてゆくより上部の組織形式に対して維持していくことはもはや困難になるだろう。だが、このことは運動がまとまりを失わずに存続してゆくための、したがってある理念を遂行してゆくための前提なのである。

最後に、このようなより大きな中間的関節組織が新たな組織形式として結合されたとしても、これらに対してさえ、原点としての創設地点やそこでの追随者達がもっている絶対的な指導的性格を保持してゆくことはますます困難ともなるのである。

したがって組織を機械的に形成することは、本部の精神的な観念上の権威が無条件で維持されているように見える限り、その程度に緊密に応じてはじめて許される。政治的組織では、この点に対する保証はしばしばただ実際の権力によってのみ与えられているように思われる。

**運動の内部構造**　今までのべたところから、運動の内部構造に関する次の方針が生じた。

(a)当初は、すべての仕事を唯一の場所、つまりミュンヘンに集中すること。無条件に信用のおける支持者の団体を教育して、その理念を今後普及するための一派を形成すること。今後のために必要な権威をば、可能な限り大きな、明白な成功をこの一つの場所で収めることによって獲得すること。

運動とその指導者を周知のものにするためには、マルクス主義の教義が無敵であることへの信仰を

一つの場所であらゆる人々に見えるように動揺させるだけでなく、それと対抗する運動が可能であることを実証する必要があった。

(b)ミュンヘンにおける本部の指揮の権威が絶対的に承認されたと見なすことができた場合、はじめて地区グループを形成すること。

(c)小管区、大管区、あるいは州のそれぞれの連合体の形成は、同様に、それらの必要性そのものからだけでなく、本部に対する無条件の承認が確実なものになったかどうかに従って決められなければならない。

だがさらに、組織的隊形を形成してよいかどうかは、指導者としての資格があると思われる人物が現存しているか否かにかかっている。

この場合、二つの方法がある。

(a)運動は能力のある人材を後の指導層として教育し、養成するために必要な資金を都合する。運動は、このようにして獲得された人材を、さらに計画的に戦術的およびその他の都合を考慮して配置する。

この方法はより容易で、またより迅速である。しかしながら、この方法には巨大な資金が必要である。なぜなら、このような指導者的人材が運動のために働きうるのには、どうしても給料を払わねばならないからである。

(b)運動は、資金が不足しているから、公職的指導者を任命することはできないので、はじめのうちは名誉職として活動してくれる人々に頼る外はない。

この方法はより手間がかかり、またより困難でもある。

運動の指導層は支持者の中から、指揮に自己を投げうって、その地域の運動を組織、指導してゆく能力と意欲のある人物が現われない限り、都合によっては広大な地域を不活発のままに放っておかなければならない。

ある時は広大な地域に人物が一人もいないのに、他の場所ではそれに反して二人あるいは三人までもほとんど同じような能力の人物が存在しているということもないわけではない。そのような出現の場合に生じる困難は大きなものであり、数年にしてやっと克服できるものでもある。

しかし、組織隊形の形成に必要な前提はつねにそれを指導する能力のある人物であり、それ以外にはなにもありえない。

将校がいなければあらゆる組織的隊形をそなえた軍隊も無価値であるように、適切な指導者をもたぬ政治的組織は同じように無価値である。

運動にとっては、指揮をとり前進の原動力となるような指導的人物を欠いたために、地区グループの組織化で失敗するよりも、そのようなグループ形成を思い止まったほうがより望ましいのである。

およそ指導者その人には意志だけでなく才能もそなわっていて当然であるが、しかしながらその場合独創力そのものよりも、意志力および実行力により大きな意味が認められなければならず、さらに才能、決断力、および根気が結合されている場合はもっとも貴重である。

**不寛容な熱狂** (12)　ある運動の未来は、支持者がその運動をそれだけが正しいものであると主張し、同じような性質の他の組織に対して最後まで貫き通す際の熱狂、いや不寛容さによって左右される。

ある運動の強さが、他の同じような性質をもった運動と統合することによって増加するなどと信じるのは、大変な誤謬(ごびゅう)である。そのような方法では増大は、当初はもちろん外面的な大きさの増加、したがって皮相な観察者の目には勢力の増加をも意味するが、しかしほんとうは、後になって活動的になってくる内部的衰弱の病原を受けとっただけである。

なぜならば、たとえどんなことを人々が二つの運動の同質性について語りうるとしても、しかしそのような同質性など現実には存在しないからである。なにしろそのように同質の場合には、実際上二つの運動ではなく、一つの運動だけが存在するに違いないからである。そして区別がどこにあろうと――区別が指導層の才能の相違に基づくだけであったにしても――問題ではなく、区別は存在するのである。だがあらゆる進化の自然法則は、二つのまったく同種でない組織の結合を望まないのであり、より強いほうの勝利と、その法則に制約された闘争からのみ可能になる勝利者の力と強さの高度の淘汰こそが要求されているのだ。

ほとんど同じような政党組織が統合されると当座の利益は生じるだろうが、結局のところはそのような仕方でえられた成果はすべて後に出現してくる内部的衰弱の原因である。

ある運動の偉大さは、もっぱらその内部の力の自由な発展により、またあらゆる競争者に対して決定的な勝利を収めるまで、それが不断に上昇してゆくことによって保障される。

それどころか、運動の強さ、したがってまたその存続資格は一般に運動が闘争の原則を自己が発達するための前提と承認する限りにおいてのみ、増大を続けることができるし、完全な勝利の運命が自己の側に傾いた瞬間に自己の力は峠を越して下り坂になったということができる。

したがって、運動にとっては、時間的に当座の成果をもたらすのでなくて、無条件の不寛容から生

じる長い闘争持続を通じて、長期の成長をも与えるような形式でこの勝利が追求されてのみ有益なのである。

自己が成長するのには、もっぱら同様な組織のいわゆる合併によらなければならないような、したがってその強さも妥協の産物であるような運動は温室の植物に似ている。それらはぐんぐん成長するが、しかし数百年の年月にたえ、猛烈な嵐に抵抗してゆく力に欠けている。

ある理念のこの世界における具体化と見なされるあらゆる強力な組織の偉大さは、その組織が熱狂的に自己の正当さを確信して、他のあらゆるものに対して不寛容で貫き通す宗教的熱狂の中に存在している。ある理念がそれ自体正当なものであり、さらにこんな風に武装されてこの地上の闘争をはじめる場合には、その理念は無敵であり、それに対する迫害もすべてその内部的強化をもたらすだけだろう。

キリスト教の偉大であったのは、幾分類似した性質をもっていた古代の哲学的意見と妥協交渉を試みた点にあるのではなく、自己の教義の厳格な熱狂的告知と、その弁護に基づくものであった。たとえ、幾つかの運動が合併によって外見上の優位性をもつことがあったとしても、それは、独立を続けながら自己自身のために戦う教義とその組織が、絶えずその力を増大してゆくならば、十分追いつきうるものである。

**闘争のための教育** (13)　この運動は原則としてその構成員を、かれらが闘争をなにか自然に成長するに任せてよいものと考えるのではなく、自ら追い求めなければならぬものと見なすように教育しなければならない。したがって、かれらは相手の敵意を恐れてはならず、かえって自己の存在資格を

与えてくれる前提と感じなければならない。かれらはわが民族およびわれわれの世界観に対して敵が抱く憎悪とその憎悪の発現を避けてはならず、かえって待ちこがれなくてはならない。そして嘘や中傷もこの憎悪の発現に数えられるものである。

ユダヤ人の新聞で非難されず、したがって中傷や誹謗を受けないものは尊敬すべきドイツ人ではなく、ほんものの国家社会主義者でもない。われわれの主義の価値、われわれの信念の公明さ、われわれの意欲の力を測る最上の測定器は、わが民族の不倶戴天の敵の側からわれわれに示される敵意である。

運動の支持者、および広い意味では全民族は、ユダヤ人が自己の新聞でつねに嘘をついており、ほんの一度の真実の記事でさえもただ一層大きな偽造を隠すためのものであり、したがってそれ自体もまた故意の偽りであることを、再三再四告げ知らされなければならない。ユダヤ人は嘘の大名人であり、詐欺は闘争のためのかれらの武器である。

あらゆるユダヤ人の中傷、あらゆるユダヤ人の嘘はわれらが闘士の肉体が受けとる名誉の負傷である。

かれらがもっとも多く誹謗する人は、われわれにもっとも近いものであり、かれらがもっとも極端に憎む人は、われわれの最善の友である。

朝ユダヤ人の新聞を読んで、その中で自己が中傷されている記事を見出さないものは、前の日を有効に利用しなかったのである。というのは、もし有効に過ごしたのであれば、かれはユダヤ人から迫害され、誹謗され、中傷され、侮辱され、評判を悪くされるに違いないからである。そして、ただわが民族およびあらゆるアーリア人種とアーリア文化のこの不倶戴天の敵に、もっとも効果的に対抗し

たものだけが、自分にもこの人種の中傷と、したがってこの民族の闘争が向けられている記事を見出す期待を許されるのである。

この原則がわれわれの支持者の肉と血になれば、運動は確固としたものになり、無敵となるだろう。

**人物に対する尊敬の教育**　⑭　この運動は人物に対する尊敬を、あらゆる手段を尽して助長しなければならない。あらゆる人間的なものの価値は人物の価値の中にあること、またあらゆる理念およびあらゆる仕事はある人間の独創力の産物であること、さらに大立物に対する崇拝はただこの人物に感謝の意を表わすことだけに終るのではなく、統一の帯でもって感謝している人々を結んでしまうこと、以上のようなことをこの運動はけっして忘れてはならない。

人物は代理がきかない。もしかれが機械的な構成要素ではなく、文化的、創造的な構成要素としての役割を果たしている場合は、とくにそうである。名人は代理がきかず、他人がかれの半分仕上ったままで後に残された絵を引き受けることができないと同じように、偉大な詩人や思想家、偉大な政治家や偉大な将軍は代理がきかない。なぜなら、かれらの活動はつねに至芸の領域でのことであり、それは機械的に教え込まれるものではなく、神の寵愛(ちょうあい)による生得のものだからである。

この地上での最大の革命と成果、最大の文化的業績、政治の領域における不朽の行動等々、これらは永久にある人の名前と不可分に結合しており、その名前によって代表される。ある偉大な人間に対して帰服することをやめてしまうことは、あらゆる偉大な男女の名前からわき出る測り知れない力をなくすことである。

ユダヤ人はこのことをもっともよく知っている。まさしく人類とその文化を破壊する点にだけ偉大

ただ諸民族がそれぞれに固有な偉人を尊敬することを、品位のないことのように極力主張し、それに対して「個人崇拝」の極印を押すのである。

ある民族がこのユダヤ人の越権と厚かましさに負けてしまうほどに臆病になるやいなや、その民族は自己がもっている巨大な力を断念することになる。なにしろこの力は大衆を尊敬することにではなく、天才を崇拝すること、および天才による高揚と教化に基づくのだからである。

人間の意志がくじけ、精神が絶望してしまう場合、過去のたそがれの中から、困窮と不安、不名誉と悲惨、精神的隷属と肉体的強制、これらすべてを征服した偉人がかれらを見下し、失望した人間に自己の永遠の手を伸ばすのである！

その手をとらえることを恥じる民族に災いあれ！

＊

**運動が無視される危険**　われわれの運動の生成の最初の時代には、われわれの名称が問題とされず、知られていないこと、またそれらの理由だけでもう成功が疑わしく思われることなどをわれわれはなによりも悩んだ。この最初の時代には、弁士の演説を聞くために集る人々がしばしばたった六、七、八人しかなかったが、一番困難だったことは、このきわめて小さなサークルの中に、運動の巨大な未来に対する信念を目覚まし、また保持してゆくことであった。

六、七人の男たち、まったく無名のあわれな連中が一つの運動をつくる意図をもって集り合っているのを想像するがよい。この運動は、今までに強力な大政党ができなかったこと、つまり一層増大した力と尊厳をもったドイツ国の再建を、いつかはやりとげようというのである。人々が当時われわれ

を攻撃したならば、いやそれどころかわれわれをただあざけり笑ってくれたとしても、いずれにしてもわれわれは幸福感にひたったに違いない。なにしろ、われわれの憂鬱だったのはただ完全に無視されたことである。われわれは当時その通りであったし、わたしが当時一番悩んだのもそのことであった。

**みじめだったいわゆる「集会」**　わたしがこの数人のサークルにはいった頃は、党も運動も話題となりえなかった。わたしは自分の印象を、この小さな組織と最初に出会った時の文章の中ですでに書いておいた。わたしは当時のそれに続く数週間というものは、このいわゆる党のなによりもまずおそまつ極まる様子を研究する時間と機会をもった。その光景は、神に誓って、締めつけられるように憂鬱なものであった。なにもなかった。もともとまるっきりなにもなかったのだ。党という名称はあっても、その委員会は実際には全党員なのであり、かれらもどっちみち自分達が克服しようと努めていたもの、つまりちっぽけではあるが議会主義者であった。ここでも、票決が支配した。大きなほうの議会が少なくともまだかなり大きな問題について、数か月間のどをからして叫んでいるのに対して、この小さなサークルでは、幸運にも自分達に届いた一通の手紙の返事のことでもう際限もない話し合いがはじまった！

世間はこれらすべてについて、当然のことだが一般になにも知らなかった。ミュンヘンでは、その数人の支持者とかれらの少数の知人を除いて、だれも党の名称すら知らなかった。

毎週の水曜日には、ミュンヘンのあるカフェーでいわゆる委員会が行なわれたし、週に一回談話の夕べが催された。差し当り、この「運動」の構成員全部が委員会に席をもっていたから、出席者は当

然いつも同じであった。そこで遂にこの小さなサークルを越えて新しい支持者を獲得することが、だがなによりもまずこの運動の名称をどんな犠牲を払ってでも有名にすることが、問題とならねばならなかった。

われわれはその際、次のような手法を使用した。

つまり、毎月、後になって二週間毎に、われわれは一度の「集会」を催そうと企てた。これの招待状はタイプライターで、あるいは一部はまた直接手で紙片に書かれて、最初の数回はわれわれ自身によって分配され、配達された。各人は自分の知人層に、一人でも二人でもこれらの開催の一つに出てもらうよう依頼した。

その首尾はみじめだった。

わたしは今なお思い出すが、このような最初の時代のある日のことわたし自身このビラを約八十枚配達して、夕方われわれはそこへ来るはずの民衆を待っていた。

一時間遅刻して、「議長」は遂に「集会」を開催しなければならなかった。われわれはまたもや七人、相変わらずの七人だった。

われわれは招待状をミュンヘンのある文房具商のところでタイプライターで打ち、複写させるところまで進んだ。その首尾は次の集会で少しばかり聴衆が増加したことに現われた。このようにして、その数は徐々に十一人から十三人へ、遂には十七人、二十三人、三十四人の聴衆へと上昇した。

**最初の集会**　われわれすかんぴん連中のまったく僅少な金を持ち寄ることにより、ようやく当時ミュンヘンでの独立新聞「ミュンヒナー・ベオバハター」の広告で集会を予告することができるだけ

の資金が調達された。今度の首尾はたしかに驚くほどだった。われわれは集会をミュンヘン・ホーフブロイハウスケラー（ミュンヘンホーフブロイハウスのフェストザールと混同しないこと）で試みたが、それはきっちり百三十人収容できる小さなホールであった。この部屋はわたし自身には大広間のような感じであったし、われわれの仲間のだれもが、その晩にこの「でっかい」建築物を人間で満たすことに成功するかどうか心配していた。

七時には百十一人が出席していた。そして集会が開かれた。

あるミュンヘンの大学教授が主要報告演説を行ない、わたしは第二番目の弁士として、はじめて公衆に話すこととなった。

党の当時の第一議長だったハラー氏には、このことは大変な向う見ずの行為と見られた。平常たしかに公正なこの紳士は、なるほどわたしがほかのことならなんでもできるだろうが、演説だけはやれない男だと、まったく決め込んでいた。この意見をかれは後の時代になっても曲げようとはしなかった。

だが状況はそうはならなかった。私には、この最初の公衆に話しかけるべき集会で、二十分の演説時間が認められていた。

わたしは三十分話した。そしてわたしが以前に、どうしてだかは知らないが、ただ内心で感じていただけのことが今や現実でもって証明された、わたしは演説ができたのだ！　三十分後、この小さな部屋にいた人々は強い衝動を与えられたのであり、その感激はなによりもまず、出席者の犠牲心へのわたしの訴えが三百マルクの寄付金を集めたということに現われた。そしてこのことによって、大きな悩みがわれわれから取り除かれた。財政の乏しさはこの時代にはいかにもひどいものであって、わ

れわれは運動のために趣意書を印刷させたり、あるいはパンフレットを出版することさえできなかった。今や小さな基金のための根幹が置かれて、その後はそこから少なくとも、もっとも必要なもの、もっともやむをえないものが支払われることができた。

しかしながら、他の観点からしても、この最初のかなり大きな集会の成功は意味深かった。

**運動の根幹としての兵士**　わたしは当時、委員会に数人の新手の力に満ちた若者達を連れ込みはじめていた。わたしは長年の軍隊生活期間中に、かなり多数の信用のおける友達と知り合ったが、かれらは今や徐々に私の説得によってこの運動の仲間に加わりはじめた。かれらは真に実行力のある若者達であったし、規律に慣れており、軍隊時代から、不可能なものはまったくなにもない、欲すればなんでもうまくゆくものだ、という原則の下に育ってきた。

だが、このような輸血がどれほど必要であったかを、わたし自身は数週間も協同しないうちに早くも認識した。

党の当時の第一議長だったハラー氏は、もともとジャーナリストであり、そのような人間としてたしかに広い教養を身につけていた。だが、彼は党指導者としてはきわめてやっかいな素質をもっていた。かれは大衆向きの演説家ではなかった。かれの仕事それ自体は、非常にきちょうめんで良心的で、そして正確であったにしても、けれどもかれには——おそらく、まさしく偉大な演説家の才能が欠けていたことが原因したであろう——はなはだしく熱弁が欠けていたのでもあった。当時ミュンヘン地区グループの議長であったドレクスラー氏はただの労働者であったが、演説家としては同様取り立てていうほどのこともなく、さらに兵士でもなかった。かれは軍隊に服役したことがなく、また戦争中

も兵士ではなかったので、かれの自己の全性格からしてもともと柔弱でしっかりしていなかった上に、あやふやでめめしい本性の人間を男子に鍛えることができた唯一の学校にも行かなかったことになる。このようにこれら二人の男は、心の中に運動の勝利に対する熱狂的な信念をもっているばかりでなく、びくともしない意志の力でもって、また必要ならばきわめて残酷な無情さでもって、新しい理念の上昇を妨げるかも知れぬ抵抗を取り除くことができるような、そんなたちの人間ではなかった。この目的にかなうのはただ、精神と肉体があの軍隊的美徳、すなわちグレーハウンドのような敏捷さ、革のような強靭さ、クルップ鋼のような固さなどでおそらくもっともよく表現されうる美徳を自己のものとした人柄だけであった。

わたしは当時まだ自身兵士だった。わたしの肉体と精神はほとんど六年間もぴしぴし鍛えられたので、わたしは当初このサークルではおそらく異質のものと感じられたに違いなかった。わたしとしても、それはだめだ、あるいはそれはだめだろう、そんなことをあえてするな、まだそれは危険過ぎる、等々の言葉を忘れてしまっていた。

というのは、形勢はもちろん危険だったからである。一九二〇年には、ドイツの多くの地方で、大衆に訴えて公然とかれらの出席を誘うことをあえてするような国家主義的集会を催すことなどまったく不可能であった。そのような集会の参加者は、血だらけの頭をしてなぐり散らされ、追い払われた。もちろん、そうした芸当はたいしたことではなかった。なにしろ、きわめて大きないわゆるブルジョア階層の大集会でさえ一ダースの共産党員によって、まるで犬の前のうさぎのように散会させられ、逃げ出すのが毎度のことだったからである。赤の連中はこのようなブルジョア階層のぺちゃくちゃクラブが本質的にお人よしであり、したがって自分達にとって危険でないことをこのクラブ・メンバー

自身よりよく知っていたからほとんど注意を払わなかったけれども、だがかれらは自分達にとって危険と見られる運動はあらゆる方法を用いてやっつけてしまおうと決心していた――だがしかし、そのような場合にもっとも有効な手段は、どんな時代にもテロであり、暴力であった。

しかし、今まで国際主義的で、マルクス主義的な、ユダヤ人・株式取引所御用党にもっぱら役立ってきた大衆の獲得を自己の明白な目標に掲げる運動は、マルクス主義的民族欺瞞者によって一番憎まれる運命にあった。もう、「ドイツ労働者党」という党名からして刺激を与えた。したがって適当な機会があればすぐに、当時はまだ勝利に酔っていたマルクス主義扇動者との対決がはじまるだろうということは容易に想像できた。

**第二回目の集会**　当時の運動の小さなサークルの人々は、このような闘争にはなんといってもある種の不安を感じていた。かれらは打ちのめされはしないかという恐怖から、もうできる限り世間の前に出ようとは望まなかった。かれらは心の中では、最初の大集会がきっと解散させられ、そして運動もおそらく永久に片づけられてしまうものと観測していた。わたしは、かれらがこの闘争を避けずに対抗し、したがってそれだけが暴力を防ぎうる武装を手に入れなければならぬというわたしの見解を主張して窮境に立っていた。テロは精神によってではなく、テロによってだけ打ち破られる。最初の集会の成功はこの方角でのわたしの立場を強めた。かれらは第二回目の、もちろん幾分より大きな集会を開催する勇気をもつにいたった。

一九一九年の十月頃、(4) エーベアルブロイケラーで第二回目の一層大きな集会が開催された。テーマはブレスト・リトフスクとヴェルサイユであった。演説者は四人だった。わたし自身も一時間近く話

したが、第一回の示威集会よりもずっと成功した。参会者の数は百三十人を越えた。妨害も一度企てられたが、わたしの同僚によってすぐ大事にならぬうちに制圧された。暴徒は頭に散々こぶをつくり、階段を飛ぶようにかけ降りていった。

それから十四日して、同じホールで次の集会が開催された。参会者数は百七十人を越えた——部屋は結構満員となった。わたしはまたもや演説したが、今回もこの前の集会より大きな成功を収めた。

わたしはもっと大きなホールを熱望した。遂に、われわれは町の反対側のはずれに望みの場所を見つけたが、それはダッハウアー街の「ドイッチェス・ライヒ」であった。新しい場所での最初の集会は、前回よりも参会者が減ってやっと百四十人に過ぎなかった。委員会では希望が再び失われはじめて、きりのない懐疑家は来会者の少なかった原因をわれわれの「示威集会」があまりにもくり返され過ぎる点に見出すべきだと信じた。猛烈な論争が行なわれたが、わたしはその中で、七十万の人口をもつ都市は十四日毎に一度ばかりではなく、毎週十回の集会でも平気に違いない、反動があったからといって迷ったりしてはならない、またわれわれの進んでいる道は正しいものであり、つねに同じように辛抱してゆけば遅かれ早かれ成功するに違いない、という立場を擁護した。およそ、この一九一九年から二〇年にかけての冬の全期間は、この若い運動の決定的な威力に対する信頼を強化し、信念となって山をも動かしうる熱狂にまで高めるための無類の闘争で明け暮れした。

同じホールでの次の集会は、またもやわたしの正しさを証明した。参会者の数は二百人を越えて、外部的にも、財政的にも立派な成功であった。

わたしは次の開催をすぐに準備するよう急がせた。十四日もせぬうちに次の集会は開かれ、聴衆の数は二百七十人を越えた。

十四日後、われわれは第七回目として、若い運動の支持者や賛助者を呼び集めたが、この場所がかろうじて人々を収容できたほど、つまり四百人を越えた人が参会した。

**運動の内部構成**　この時代にはこの若い運動の内部編成が行なわれた。その際、小さなサークル内でしばしば多かれ少なかれ熱烈な論争が生じた。さまざまな角度から――今日でもそうであると同じように、すでに当時も――若い運動の、党という名称に酷評がなされた。わたしはそのような批評を、いつもただそれらの人々の実際上の無能力と精神的な平凡さを証拠立てるものとのみ見ていた。外面的なものを内面的なものから区別できず、運動の価値を、もうできる限り誇張して印象づける名称から評価しようと試みる人々はどんな時代にも存在する。だがその場合には大変不幸なことだが、われわれの祖先の語彙はもっともひどくしりぬぐいをさせられる。

当時、およそ運動は自己の理念の勝利や、またしたがって目標を達成しない限り、千度名称を変えたところでやはり党である、ということを人々に理解させるのは困難であった。

もしある人が、実現されれば同胞の利益に効果があると思われる大胆な思想を実際に成就しようと望むとすれば、かれは差し当って自分の意図に味方をしようと覚悟する支持者を探さなければならない。そして、たとえこの意図がただ現に存在している政党組織を破滅させ、党派分裂を終了させる点にのみあるとしても、この見解の擁護やこの決意の告知者は目標が達成されるまではまさしくかれら自身党なのである。もし、実際の成果が自身の知恵と反比例しているにもかかわらず、ある旧式な民族主義的理論家が、あらゆる若い運動が党としてもっている性格をその名称を変えることによって、変えられると自負するならかれは小理屈屋であり、瞞着者である。

反対なのである。

もしなにかあることが非民族的であるとすれば、それこそ特に古代ゲルマン的な表現をかれらのように乱雑に用いることである。このような表現は今日の時代には適当でないし、その上ある特別のものも表現せず、かえってややもすれば運動の意味をその外面的な語彙の中にだけ見出すことに導くこともありうるものである。これはまったくの横暴であるが、今日際限もなく見られうる。

**ドイツ民族主義遍歴学生**　要するに、わたしは当時すでに、そしてまたその後の時代にも再三再四、実際の仕事はいつもゼロに等しいのに自負心はけっしてだれにも負けを取らぬドイツ民族主義遍歴学生に警戒せよと注意しなければならなかった。この若い運動は、多くの場合、自分達はもう三十年、あるいは四十年も同じ理念のために闘争してきたという告白だけしか紹介状にもたない人々のはいってこないように警戒しなければならなかったし、今日でもそうである。だが、四十年間一つのいわゆる理念のために働いて、最小の成果すらもたらすことができず、それどころか敵の勝利を阻止することもできなかった人間は、四十年間の活動で自己の無能さを証明したのである。その危険性はなによりもまず、このような性質をもったものは平メンバーとして運動に加入しようと望んでいるのではなく、自分が大昔から活動してきたという理由だけで、かれがその後の活動をするための適当な場所と自認する指導者サークルについてだぼらを吹くことにある。このような連中に若い運動が任されたとしたら、災いあれかし！　四十年間働くことによって大きな店を徹底的につぶしてしまった商人が新しい店の創立者としてあまり役に立たないと同様、ちょうどそれくらいの年月の間にある偉大な理念をだめにし、老いぼれさせてしまった民族主義者のメトゥザレム(5)も新しい、若い運動の指導者

にはふさわしくない！

その外に、これらすべての人々のうち、運動に奉仕し、新しい教養の理念に役立つために新しい運動にはいってくるのは一部分に過ぎず、ほとんどの場合は、運動の保護を受けて、あるいは運動が提供する可能性によって、人類をもう一回自己自身の理念でもって不幸にしようとしてはいってくるのである。だが、それがどんな種類の理念であるかをいうのはきわめて困難である。

**ブリキの刀と剝製のクマの皮**　古代ゲルマンの英雄達や、太古の時代、石おの、投げやり、たてなどについて夢想していても、現実には想像されうる限りでも最大の臆病者であるということが、それらの本性をもつ人々の特徴なのである。なにしろ、古代ドイツのものに用意周到に似せたブリキの刀を空中に振り動かし、ひげをはやした首に、雄牛の角のついた剝製のクマの毛皮をかむった同一人が、現代に対してはいつもただ精神的な武器での闘争ばかりお説教し、共産主義者のゴム製の警棒の前では例外なしに大急ぎでそこから逃げ去ってしまうからである。後世の人達は、いつか新しい叙事詩の中でこの人々の珍奇な英雄的存在を賛美する動機などほとんどもたないだろう。

わたしはこれらの人々を十分過ぎるほど知っていたので、かれらのみじめな芝居の前ではこの上なくむかつきを感じた。だが、かれらは大衆におどけた印象を与えるので、ユダヤ人がこれらの民族主義的コメディアンを保護し、将来のドイツ国家のための真の闘士よりもむしろかれらを好ましいと思ったのは、まったく理由があるのだ。その際、これらの人間はやはり度外れて自負心が強く、かれらの完全な無能さはあらゆる点で証明ずみにもかかわらず、あらゆることに知ったかぶりをする。そしてかれらは、英雄達を単に過去の中でのみ尊敬するのではなく、自分もまた自らの行為によって同じ

ような姿を後世に与えようとして努力している誠実で、信頼できるすべての闘士にとってほんとうに重荷となる。

また、これらの人々の中のだれが生まれつきの愚鈍さあるいは無能から行為しているのか、あるいはだれが一定の理由からただそのように振舞っているに過ぎないのか、ということを区別するのは大変むずかしい場合がたびたびある。とくに、古代ゲルマン的基礎に依存するいわゆる宗教改革者については、わたしはいつもかれらがわが民族の復興を望まない諸国から派遣されているのではないかという感情を抱く。なにしろ、かれらの全活動は民族を共通の敵であるユダヤ人に対する共通の闘争から連れ去って、その代りに民族の力をナンセンスであると同時に不幸でもある国内の宗教闘争に消耗させているからである。だが、まさしくこの理由からして、運動を指導する場合の無条件の権威という意味での強力な本部権力の創設が必要である。この創設によってはじめて、このような危険な構成分子の行為を終らせることができる。もちろんこの理由から、統一的で、厳重に指導され、また指揮されている運動に対する最大の敵が、これらの民族主義的な永遠流浪のユダヤ人の仲間の中にも見つけ出される。かれらはこの運動の中に、自己の不正を制止する力を憎んでいる。

**「民族主義的」という言葉の拒絶**　この若い運動は以前、ある一定の綱領を規定したが、その際「民族主義的」という言葉を使用しなかったのは理由がなかったことではない。民族主義的という概念は、その概念が限定されていないために、運動にとって可能な原則ではないし、そのような運動のメンバーであるための規範を提供するものでもない。この概念が実際上で定義できないものであればあるほど、またそれが解釈をより多く、またより広範に許せば許すほど、その概念は人々によって引

合いに出される可能性も一層大きくなる。この種の規定されにくい、そしてさまざまに解釈可能な概念を政治闘争の中にもち込むことは、あらゆるがっしりした闘争団体を解散に導くのである。というのは、およそ闘争団体は、個々人にかれらの信念と意図の規定そのものを放任しておくことができないからである。

今日だれが「民族主義的」という言葉をかついであらゆることに横柄な顔をしてうろつき回っているか、またどれほどの人々がこの概念について自分の見解をもっているか、これらの答えも恥ずべきものである。バイエルンのある周知の大学教授は、精神的武器の使用では有名な闘士であり、同様に多くの精神的業績でベルリンにも進出していたが、かれは民族主義的という概念を君主政の立場と同一視した。この博識の頭脳は、過去のわがドイツの君主政治と今日の民族主義的見解とが同一であることについてよりくわしく説明することを明らかに今日まで忘れてしまっている。また、わたしはこの紳士にそれはほとんどできないだろうとも気づかっている。なにしろ、大部分のドイツ君主政体以上に非民族主義的なものは、まったく想像できないからである。もし、そうでないとしたら、それらは消滅することもなかったに違いないし、あるいは、その消滅が民族主義的世界観の正しくないことの証拠を提出しているに違いない。

そのようにして、すべての人々がこの概念を自分がちょうど理解したように解釈する。しかし、政治的闘争運動のための基礎としては、そのような意見の多様性は問題になりえないのである。

二十世紀のこのような民族主義的ヨハネ達[6]の世間知らずや、とくにかれらの民族精神に対する無知については、この際わたしは完全に無視しよう。かれらがなんであるかは左翼にうまく扱われているこっけいさで十分に解明されている。かれらにおしゃべりをさせて、からかってやろう。

しかし、この世界で自分の敵に憎まれることができないようなものは、わたしにとっては味方として大きな価値があるとも思われない。したがって、このような人間がわれわれの若い運動に示す友情も、ただ無価値であるばかりでなく、つねに有害であるに過ぎなかったし、また、われわれが第一に「党」という名称を選んだ主要な理由もその点にあった――われわれはそうすることによってのみ、これらの民族主義的夢遊病者の全集団をわれわれから追い払うことを期待できた――さらにまた、それは、われわれが第二に**国家社会主義ドイツ労働者党**と名乗った主要な理由でもあった。

**「精神的武器」――「おとなしい労働者」**　この名称の前の部分の表現はわれわれから、古代心酔者、すなわちいわゆる「民族主義的理念」という言葉に小理屈をつけたり、この唱え文句ばかりこつこつと吟味している皮相な人間達を遠ざけてくれた。またあとの表現は、「精神的な」剣を帯びた騎士というやっかいな連中全部、および「精神的武器」を自分達の実際の臆病さを擁護するたてと考えているみじめな青二才ども全部からわれわれを解放した。

無論のこと、われわれはその次の時代には、とくにこのあとの連中からもっともはげしく攻撃されたが、それはもちろん暴力によってではなく、ただペンによってだけであった。このような民族主義的鵞ペンからは、まったくそれ以外のことは期待できぬに違いない。かれらにとっては、「われわれに暴力で立ち向かってくるものには、われわれも暴力で身を守る」というわれわれの原則は、それ自体もちろんある気味悪さをもっていた。かれらは、われわれがゴム製警棒を野蛮にも熱愛しているだけではなく、われわれ自身に知性が欠けているとまでいって、この上ないしつこさで非難した。大衆集会のようなところでは、ほんの五十人ほどの無知な連中でも口とげんこつに物をいわせて話させま

いと望めば、デモステネス[7]のような雄弁家さえ沈黙させられるという道理は、そのようないかさま治療師の心には全然なにも通じないのだ。かれらは生まれつきの臆病から、そのような危険には関係しないのである。なにしろ、かれらは「そうぞうしく」、「さしでがましく」活動するのではなく、「おとなしく」働くのだ。

わたしは今日でも、われわれの若い運動に、このいわゆる「おとなしい労働者」の網にかかる危険について、どれほど警告してもし過ぎることはありえない。かれらは臆病者であるだけでなく、つねに無能者であり、なまけものでもある、およそ、事実を知り、危険が存在しているのを認め、自分の目で救済の可能性を見出している人間ならば、「おとなしく」働くのではなく、あらゆる公衆の前にでて、悪に対してその治療を引き受けるという、人類に課せられている義務と責任をもつであろう。このことを果たさなければ、かれは義務を忘れた、みじめな弱虫であるのだが、それもかれらが臆病、あるいは怠惰と無能力のためになんの役にも立てないからである。しかし、これら「おとなしい労働者」の大部分は、たいてい何かしら知っているかのようにどしどし振舞うのである。かれらはすべてなにもできないのに、だが全世界を自分達の手品であざむこうと企てる。かれらは怠惰であるのに、しかし自分達の主張する「おとなしい」仕事でもって、巨大で勤勉な活動をしているかのような印象を起させる。要するに、かれらはペテン師であり、生まれつきの政治的やみ取引屋であって、他の人の誠実な仕事を憎む連中である。このような民族主義的な蛾みたいなものが「おとなしさ」の価値を主張するやいなや、かれらがそのようにおとなしくしていてなにも作り出しはせず、盗むのであり、他人の仕事の結果を盗むのであることは九割九分九厘うけ合いうる。

それに加えて、さらに尊大さと自負心の強い厚かましさによって、これらの実際には怠惰に過ごし

ている、日光を恐れる無頼漢どもは、他人の仕事を非難し、隅々まで酷評を試み、そのようにしてほんとうのところはわが民族の不倶戴天（ふぐたいてん）の敵を助けるのだ。

たとえ最低の扇動者であっても、かれが自分の敵に囲まれつつ飲食店の食卓の上に立って、男らしく率直に、自己の意見を主張する勇気をもっているならば、これらの嘘つきで卑劣な偽善者を千人合わせたより以上のことをやってのけるものである。かれは疑いもなく一人や二人を転向させ、運動に加えることができるだろう。かれの仕事が再検討されるならば、かれの行為の効果というものは、その仕事の成功したかどうかによって確認することができるだろう。ただ、自分の「おとなしい」仕事を賞賛し、それゆえ、卑しむべき匿名の隠れみので身を隠してもいる臆病なペテン師だけはまるきり役に立たないのであり、かれらは、言葉の正真正銘の意味で、わが民族復興におけるいそうろうと見なされてよいものである。

＊

**第一回目の大衆大集会**　一九二〇年のはじめに、わたしは第一回目の大々的な大衆集会を挙行することを催促した。このことに関しては意見の相違が生じた。数人の指導的党員は、事が余りにも早過ぎるので、したがってその結果は不吉なものになるだろうと主張した。赤色新聞はわれわれについて書きはじめており、われわれは徐々にかれらに憎悪されていたので、すっかり満足であった。われわれは、討論の弁士としてよその集会にも登壇しはじめていた。もちろん、われわれの弁士は必ずぐにやじり倒された。しかし、それにもかかわらず成果はあった。人々はわれわれを知るようになった。そしてわれわれについて知識が深まるに正比例して、われわれに対する嫌悪も高まった。したがって、われわれが第一回目の大衆大集会を開けば、もちろん赤色陣営からきわめて大規模なわれらの

友人の訪問を受けることを期待してよかった。

集会がめちゃめちゃにされる確率が高いことは、わたしもまたよく知っていた。しかし、この闘争は今でなければ、二、三か月後に必ず解決されなければならなかった。すでに第一日目から、運動をやみくもに、容赦のない擁護によって永遠的なものにするのはまったくわれわれの責任であった。なによりもまず、わたしは左翼の支持者の気質を非常によく知っていたので、もっとも徹底した抗争はもっとも早く感銘を呼び起すだけでなく、支持者をも獲得するということも理解していた。この抗争についてわれわれは今や決心しなければならなかった。

党の当時の第一議長であったハラー氏は、選ばれた時期についてのわたしの見解に同意できぬと思った。そして、その結果として、かれは誠実で正直な人間だったので運動の指導者の地位から引退した。かれの代りにアントン・ドレスクラー氏が就任した。わたし自身は宣伝組織を引き受け、これを今度こそ容赦することもなく実施していった。

**このようにして、この第一回目のまだ有名でない運動による大衆大集会の挙行期日は、一九二〇年二月二十四日と決定した。**

諸準備はわたしが自身で指揮した。準備は非常に簡単だった。一般的にいって、全機構は一瞬の間に決断を行ないうるように調整された。時事問題に対しては、大衆集会の形式によって二十四時間のうちに態度が決められるはずであった。集会の予告はポスターとパンフレットで行なわれることに決まったが、この両者の傾向は、わたしが宣伝についての論述の箇所で大要はすでに書いておいたあの観点に従って決定された。つまり、大衆への影響を考えること、少数の点に集中すること、同一のことを絶えずくり返すこと、教養のテキストを疑いのない主張の形式にまで自己に確信をもちまた自負

心をもって要約すること、普及には最大の堅忍さをもち、影響の期待には忍耐をもつこと等であった。
色は原則として赤が選ばれた。赤はもっとも刺激する色であって、われわれの敵をもっとも激しく憤慨させ、挑発し、そのことによりいずれにしてもわれわれをかれらに知らせ、記憶させるに違いなかった。

**マルクス主義と中央党の団結**　その次の時期には、バイエルンでもマルクス主義と中央党の政党としての内的団結がきわめてはっきりと示されたが、それはこの地で政権をとっていたバイエルン人民党が、われわれのポスターが急進的な労働者大衆に与える効果を弱め、後には阻止してしまおうと企てた骨折りの中に見とられる。警察はポスターに干渉する他の手段が見出せなかったので結局「交通上のしんしゃく」を理由にもち出さなければならなかった。そしてついには、州内のおとなしい、赤色同盟者のために、いわゆるドイツ国民人民党(8)の支援的な助力のもとに、数十万の国際主義的な、扇動され、堕落させられた労働者を、ドイツ民族に取りもどそうとしているこのポスターを完全に禁じてしまった。このポスター——この巻の第一版と第二版に付録として付けられてある——は、この若い運動がその時代に戦った激烈な奮闘を、もっともよく証明することができる。だが、それらのポスターはまた後世のために、われわれの主義のもっている意図と正当さを証明し、そしてわが民族大衆の国民化、したがって国民としての奪還をば、自分達にわずらわしいことだとして、阻止したいわゆる国民のお役所の横暴を証明するものとなろう。
それらはまた、バイエルンに国民主義的な政府がもともとあったのだというような意見を打ち砕くにも力を貸すだろう。そしてそれらは、一九一九、一九二〇、一九二一、一九二二、一九二三年に存

在した国民主義的バイエルンはなにも国民主義的な政府のせいではなく、徐々に国民的な感情をもちだした民衆に対して、ただ政府が止むをえず考慮を払わねばならなかったというに過ぎぬことを、後世に対して文書でもって証明するものであろう。

政府自体はこの回復過程を阻止し、不可能にするためにあらゆる手をつくした。

**ペーナーとフリック**　その際、二人の人物だけは除外しなければならない。

つまり、当時の警視総監**エルンスト・ペーナー**とかれの忠実な助言者であった**フリック**長官は、すでに当時において、まずドイツ人であり、その後において官吏であろうとする勇気をもったまれにみる高官であった。責任ある地位についているもので、大衆のごきげんを取らず、自己の民族に責任を感じており、自分がなによりも愛しているドイツ民族の復興のためには、すべてを、また必要ならば自分自身の生存をも賭け、犠牲にする覚悟ができていたのは、エルンスト・ペーナーだけであった。かれは自分達に任されている国民的財貨の繁栄などはお構いなく、また民族の利益や民族に必要な自由の高揚より、パンを与えるものの命令のほうが自己の行為の規範を決めているような腐敗した役人連中にとっては、実際つねに目の上のこぶであった。

しかし、とりわけてかれは、われわれのいわゆる国家の権威の番人の大部分とは違って、民族や国家に反逆する連中の敵意を恐れずに、かえってこの敵意をば真面目な男ならむろんもつべき財宝として熱望するような性質の人間に属していた。ユダヤ人やマルクス主義者の憎悪およびかれらの嘘と中傷に満ちた全闘争は、わが民族の悲惨のただ中にいるかれにとって唯一の幸福であった。

かれは、花崗岩(かこうがん)のように固い実直さ、古代風の質朴さ、ドイツ人的率直さをもつ男であり、「奴隷

であるよりは、むしろ死を」という言葉はかれにとってカラ文句ではなくかれの全性格の本質をつくっているものであった。

かれとその協力者フリック博士は、わたしの目から見れば、国家の官職を占めている人々の中で国民主義的バイエルンの建設協力者と見なされる権利をもつまれな人物である。――

**綱領の起草**　ところでわれわれは、第一回目の大衆集会の開催に向かって進む前に、必要な宣伝材料を用意するだけでなく、綱領の主旨をも印刷しなければならなかった。

とくに綱領の起草に際してわれわれが意図した方針を、わたしは第二巻できわめて根本的に説明するだろう。わたしはここではただ若い運動に形式と内容を与えるためだけではなく、その目標を大衆に理解させるためにこの綱領がつくられた、ということを確認するだけにしておこう。

いわゆるインテリ階層はこれについて、からかい、ひやかし、また批評しようと企てた。しかし、われわれの当時の見解が正しかったことは、この綱領の効果となって証拠立てられた。

わたしはこの数年間に、新しい運動が幾ダースとなく発生するのを見たが、それらはすべて再び跡形もなく消え、四散してしまった。ただ一つ残ったが、それは国家社会主義ドイツ労働者党であった。そして今日は、わたしはいままでより以上に、わが党が戦いをいどまれ、無力化を企てられ、あるいはつまらぬ政党大臣がわれわれに演説や口を開くことを禁じることができたにしても、われわれの思想の勝利はけっしてかれらによって阻止されることはないだろう、という確信をもっている。

今日存在している国家観の全体およびその主張者がもはや名前すら忘れ去られる場合でも、国家社会主義的綱領の基礎は将来の国家の礎石となるだろう。

一九二〇年一月までの四か月間の集会活動は、徐々に、われわれの最初のパンフレット、最初のポスター、およびわれわれの綱領を印刷するに必要な小額の資金をわれわれに貯えさせたのである。わたしがこの巻の終結として、運動のこの第一回目の大衆大集会を選んだのは、この集会によって党が小さな結社の狭いわくを破って、現代のもっとも強力な要因、つまり世論にはじめて決定的な影響を及ぼしたという理由からである。

当時、わたし自身ただ一つのことを心配していた、すなわちホールは満員になるだろうか、あるいはわれわれはがらあきの会場で話すことになるだろうか？　と。わたしは、もし人間さえくるとしたら、この日は若い運動によって大成功となるに違いないと心の中で岩のように固い確信をもっていた。このようにして、わたしは当日の夜を心配していた。

七時三十分きっかりに開会の予定だった。七時十五分に、わたしはミュンヘンのプラッツルにあるホーフブロイハウスのフェストザールにはいっていったが、心臓はほとんど喜びのために破裂しそうだった。巨大な部屋、なにしろ当時のわたしにはまだ巨大に見えたが、その部屋は人で立錐の余地もなかった。ひしめき合った人々はほとんど二千人を数えるほどであった。そしてとりわけ──われわれが呼びかけたいと思っていた連中がきていたのだ。ホールの半分よりずっと以上が共産党員と独立社会党員(9)で席を占められているように思われた。われわれの第一回目の大デモンストレーションは、かれらによって即座に結末がつけられるように決定されていたのだ。

**綱領の最初の説明**　しかし、別の結果となった。最初の弁士が終った後、わたしが話しはじめた。数分もたたぬうちに、ヤジがあられのようにとび、ホールの中は猛烈な衝突が起った。少人数のきわ

めて忠実な戦友達やその他の支持者達は妨害者となぐり合い、少しずつではあったがやっと、いくらか静粛さが回復できた。わたしは再び話し続けることができた。三十分後には賛成の拍手がののしり声やうなり声を徐々に圧倒しはじめた。

そして今や、わたしは綱領をとらえて、これについての最初の説明をはじめた。

十五分たち、また十五分と時のたつうちにヤジは賛成の歓呼によって次第に圧倒されていった。そして、わたしがついに二十五か条を一か条ずつ大衆に提案して、かれらにこれらについての判断を聞かせてもらうよう求めた時、これら綱領はつぎつぎと、ますます高まる歓呼によって満場一致につぐ満場一致で採択されていった。そしてこのようにして最後の条項が大衆の心に受け入れられた時、わたしの前には新しい確信、新しい信念、新しい意志で結び合わされた人々で満員の会場があった。

約四時間たった後、部屋がからになりはじめ、大衆がひしめき合い押し合いながら、ゆるやかな河の流れのように出口に進んでいった時、わたしは、今こそ運動の原則はドイツ民族の中にはいり込んだのであり、もはや忘却されることがないのだということを知った。

**運動がその進路をとる**　一つの火が燃え立たされた。この炎熱によって、将来剣がつくられるに違いない。そして、その剣はゲルマンのジークフリードに自由を、ドイツ国民に生命を回復させるはずのものである。

そして将来の高揚と並んで、わたしは容赦のない復讐（ふくしゅう）の女神が一九一八年十一月九日(10)の偽証罪に向かって歩んでいるのを感じた。

このようにして、ホールは徐々にからになっていった。

運動は自己の進路を進んだ。

# 訳注（I）

## 第一章

(1) ドイツとオーストリアのこと。

(2) 一九二三年、フランスのルール地方占領のとき、工場破壊などで抵抗したドイツの狂信的国家主義者の一人。

(3) 従来ヒトラーの家系については種々の説が立てられていた。第一はチェコ人の血をひいているという説で、第二はユダヤ血統説である。しかし現在ではヒトラー研究家のヴェルナー・マーザーによって、そのどちらも確証がないこと、そしてヒトラーが、一八八九年四月二十日にオーストリア・ハンガリー帝室ならびに王室税関事務官アロイス・ヒトラーの（三回目の結婚の）第四子として、イン河畔ブラウナウに生まれ、三年後パッサウへ移り、一八九四年にリンツに移り、九五年父の退職後は九七年まで、ラムバッハ近郊のハーフェルトのりっぱな邸に住んでいたことが明らかにされている。

(4) 日雇農夫（Häusler）というのは、家屋だけを持っていて、農地をほとんどかまったく持っていない農民のことであるが、ヒトラーの父アロイスの父は粉ひき職人であって日雇農夫ではなく、また大伯父ネーポムクは自作農で豊かであった。自分の父の生涯と自分自身の境遇のみじめさを故意に誇張している。

(5) 父アロイスは靴職人で、かなりほがらかな性格であったといわれている。かれは一八五五年オーストリア・ハンガリー帝国大蔵省守衛（国境監視の雇人）、ついで六四年大蔵省守衛・報告者として官吏に任用され、税関勤務臨時事務官補、同事務官、検査官補を経て、一八七五年には税関事務官、一八九二年には臨時上級事務官に当時の民衆学校出としては異例の昇進をした。生涯に三度結婚したが、アロイスの結婚相手は三人ともかなり持参金をもっていたといわれている。

(6) 父アロイスの生活は決してまずしくなかった。地方都市の中産階級の上と考えられている。恩給生活にはいったのは

一八九五年六月二十五日で満五十八歳で、当時の民衆学校長の俸給と同額の恩給をもらい、故郷の村とたえず連絡をとっていた。最初ラムバッハ近郊で家畜など飼っていたが多少の欠損のためひきはらい、一八九八年リンツ郊外のレオンディングに住んだ。

(7) ヒトラーは一八九五年から九六年までフィッシェルハルムの単級民衆学校に、九六年から九八年までベネディクト派のラムバッハ修道院学校の第二、第三学年に通い、その修道院の少年合唱団の聖歌隊員であった。そのときの修道院長ハーゲンの家紋がハーケンクロイツ(かぎ十字)であったという。

(8) ヒトラーの民衆学校での成績はよかったといわれている。しかし、通常官吏になるためには民衆学校四学年を終えたあとギムナジウム(人文科高等学校)へ入学し、ラテン語を勉強する必要があったのに、ヒトラーの父が官吏にする目的でヒトラーを実科学校へ入れた、というのはおかしい。むしろ父がヒトラーの画才を認めていたからこそ実科学校へ入れたと見るのが正しいであろう。

(9) マーザーによれば、ヒトラーは実科学校でも図画、歴史、地理の成績はよかった。しかしリンツ実科学校第一学年で「操行―良、勤怠―可、自然史と数学―不可」の成績で落第している。またマーザーは、実科学校で悪い成績をとったことは、かれの知性と才能からすれば明らかにふさわしくなく、系統的な勉強をすぐに強制と監督としてうけとめにめぐまれていたこと、しかし学校というわくにはめこませることがむずかしく、勤勉でもなかったといっている。たことの反発のせいにしている。リンツ実科学校でドイツ語、フランス語を教えたヒューマー教授はヒトラーが才能第二学年で父の死にあっている。成績は数学が不合格で追試で合格、第三学年フランス語不合格、怠けものであったため他校へ転校するという条件で第三学年を及第し、シュタイエル実科学校に転校した。シュタイエルの第四学年ではドイツ語と数学に落第点をとった。ここであきらめて退学したようである。地理と世界史は第四学年ではともに成績「可」である。

(10) オストマルクとはオーストリアの古い名称。

(11) オーストリア国民は、ドイツ系、ハンガリア系の民族のほかに、チェコ人、ポーランド人、スロバック人、セルビア人等、多数の民族からなっていた。

(12) 神聖ローマ帝国成立以来、帝国自体がドイツの統一国家のように見られたこともあったが、事実上は多くの領邦に分裂し、対立していた。十八世紀以降は、オーストリアとプロイセンがそれぞれ単一の強国として存在した。しかしドイツ人はオーストリアをつねにドイツ国の一部と考えていた。それは、大部分のオーストリア人の用語がドイツ語であったことが、最大の原因と思われる。

(13) ともにドイツ国外におけるドイツ主義擁護のための団体で、これが、ヒトラーの政権獲得後に Volksbund für das Deutschtum im Ausland（外国におけるドイツ主義維持のための民族連盟）に発展した。

(14) 日本語の「バンザイ」の意味。

(15) オーストリア国歌。

(16) ドイツ国歌。「世界に冠たるドイツ」の意。

(17) マーザーは、この間のヒトラーの歴史観形成を、あとからのつくりごとにすぎない、としている。ペッチュは当時、リンツ市議会のドイツ民族的人民党の代表者として活躍し、生徒たちに汎ドイツ連盟の理論を吹き込んでいた。またペッチュはヒトラーのいうように生徒たちが熱中した唯一の教師であった。

ヒトラーは「わが闘争」を献辞をそえてルートヴィヒ・ペッチュ博士に送ったが、かれはこれに対して無愛想に礼をいい、自分の名はルートヴィヒでなくレオポルトだと注意した。「わが闘争」の中の名前はその後、訂正されている。ペッチュはヒトラー政権獲得後もヒトラーをきらっていた。ヒトラーが歴史好きの証拠固めのため（成績を考えれば）ペッチュのごきげんとりをした、という説が正しいであろう。

(18) ハープスブルク王家のこと。

(19) 一九一八年までオーストリア皇太子は、大公と称していた。したがってこれは皇太子の宮殿をさす。

(20) ワーグナーのこと。

(21) この説明は多くのヒトラー研究家は信用していない。ヒトラーが重病にかかったという証拠はない。

(22) ヒトラーは、母の長年の病臥中、小康時にヴィーンの美術大学を受験し、入試に失敗した後もヴィーンにいた。したがって母の死に立ち会うことができず、葬式の時にはじめて姿をあらわしたという説（イェツィンガー、村瀬）と、

(23) これについては、まったく信用されていない。ヒトラーは父の孤児年金や遺産収入で、当時の大学卒の収入よりもよい収入を得ていたことや、かなりの遺産があったことが定説となっている。

(24) 一九〇八年二月中頃と思われている。しかし、トランク一つでなく、かなりの金をもって（独身青年としてはかなりぜいたくできる程度）ヴィーンへ行ったといわれている。

## 第二章

(1) ヒトラーは十六歳になる前にはじめてヴィーンへきた、と書いているが、村瀬説ではその一年後の一九〇六年五月である。

(2) 一九〇七年九月美術学校絵画科入試のためヴィーンへきた。入試成績表には「才能、貧弱。入試絵画。不可」とある。母には知らせていない。

(3) ハンス・クリスチャン・ハンセン（一八〇三―一八八三）のこと。デンマークの建築家。ギリシア風建築にすぐれていた。

(4) 母の死後、一九〇八年二月にヴィーンへきて以後、持ってきた金できままな生活を送っていた。一九〇九年十一月まで下宿生活をし、十一月から十二月までマイトリング浮浪者収容所に住み、昼間は補助労働者として働き、同年クリスマス前に独身者合宿所へ移っている。

(5) 原文は Phäakenstadt となっている。ユリシーズがおとずれた奢侈な町のこと。

(6) ヒトラーが食費のかさんだことや、毎日のような劇場通いで、次第に生活費に窮してきたことは事実のようである。

(7) これは信じがたい。読んだとしてもそれはパンフレットのたぐいか、通俗書にすぎなかったようである。

(8) 「はじめてのテロ」を参照のこと。

(9) Herberge und Massenquartier となっている。

(10)(11) 労働者の社会の人々のこと。

(12) この間の事情から、多くのヒトラー研究者は、ヒトラーの書いた労働者の生活が正規の労働者や補助労働者のそれでなく、むしろ浮浪者のそれであり、そこにヒトラーが労働者として正規に働いたことのない証拠を見ている。しかし、マーザーは必ずしもそうはいっていない。

(13) ドイツやオーストリアの小学校のこと。

(14) 多くの研究者はヒトラーが画工として自立していたのでなく、あいかわらず孤児恩給と叔母からの援助をうけていた、としている。しかしマーザーは、酒もタバコものまず、女遊びもしないヒトラーが、毎日売るための絵を一枚ずつ描き、かなりかせいでいたとしている。それにしても孤児年金はうけていた。

(15) これについては、単にパンフレット、新聞のたぐいこそ読まなかったという説、かなり読みはしたが系統的な勉強はなにもしていないという説等いろいろある。しかしかれが一冊もまともな本の名をあげていないことは、これらの説を裏付けていると考えてよい。

(16) ヒトラーがはじめて肉体労働をしたのがこれだと考えられる。

(17) 経済闘争をさす。

(18) 労働者階級の要求にある程度こたえた社会的立法処置等をいう。

(19) 三四三頁を参照。

(20) ユダヤ人迫害事件のこと。

(21) マーザーは、ヒトラーの父が反ユダヤ主義者であったこと、リンツ実科学校に反ユダヤ主義の教師がいたこと等から、ヴィーン時代以前から反ユダヤ主義者だったとしている。

(22) 近東諸民族、特に東欧ユダヤ人が用いる長上着。

(23) これは一九〇五年以来、狂信的人種差別主義者ゲオルク・ランツ・フォン・リーベンフェルスによって出版され、ハーケンクロイツのマークをつけていた雑誌「オスタラ」であると推測されている。一時、発行部数は十万部に達したといわれている。しかし、オスタラでないという説も強い。

(24) シオンとはエルサレム付近の丘の名称。シオン主義とは、宗教上、民族政策上から、ユダヤ人がその故地パレスチナ

を復活させようとする思想あるいは運動のこと。第二次大戦後の一九四八年にイスラエル共和国としてこの望みはすでに実現されている。

(25) ユダヤ民族のこと。

(26) アウステルリッツとは、「労働者新聞」主筆のフリードリッヒ・アウステルリッツ、アドラーは社会主義者のマックス・アドラーとヴィクター・アドラー、ダーヴィットはヨーハン・ネーポムク・ダーヴィットであろう。当時の新聞界にユダヤ人が支配的権力をふるっていたことは事実であるが、しかし「ノイエ・フライエ・プレセ」をはじめほとんどが、ユダヤ人の手で、ドイツ主義を擁護し、オーストリアの親スラブ主義に反対していた。

(27) キリストを迫害したため、ユダヤ人は死後もデウスのもとへ行くことができない、というのがキリスト教徒の考え方である。

(28) 地球のこと。

## 第三章

(1) 普墺戦争の結果ドイツに敗れたオーストリアは、国家秩序再建の必要上、一八六七年フランツ・ヨーゼフ一世がマジャール人と妥協してハンガリー王国の建設を認めるとともに、オーストリア皇帝がハンガリー王位をかね、ここに二重王国が成立した。外交、財政、国防を共同にする以外は、政治はおのおの別の政府と議会によって行なわれた。ともに専制国家であったが、オーストリアではやがて立憲君主制を採用、一九〇七年には普通選挙が施行された。しかしチェコ人など国内でのスラブ民族の反対が強く、社会主義運動もこれと連携した。外交的にはドイツとともにバルカン半島の汎ドイツ主義を推進し、一九〇八年にはボスニア・ヘルツェゴヴィナを併合し、第一次大戦の遠因を形成した。

(2) オーストリア皇帝のこと。

(3) ブルガリア、セルビア等をさす。

(4) Ordo Minorum Cappuccinorum 一五二五年マテオ・ダ・バッシがフランシスコ修道会から分かれて創立したが、そ

の創立の趣旨は聖フランシスコの戒律に従い、フランシスコ修道会創立当時の精神に帰り、清貧に徹した生活をするにあった。修道会の名称は、修道服についている帽巾（カプッチョ）に由来する。ヴィーンにあるオーストリア皇帝陵はカプチーナー・グルフトという。

(5) フランスの二月革命の影響で、一八四八年三月ドイツ各地に起ったいわゆる三月革命をさす。オーストリアでは三月十三日ヴィーンに暴動が起って、保守反動の巨頭メッテルニヒはイギリスに亡命し、憲法制定の動きが起った。革命はさらに全ドイツに波及し、五月にはフランクフルト国民議会が成立し、ドイツ統一、憲法制定を議した。しかし、十月にはヴィーンで、十一月にはベルリンで反革命が行なわれ、革命は失敗に終わった。

(6) 直訳すれば帝国評議会となる。オーストリア国会のこと。

(7) サー・チャールズ・バリィ（一七九五―一八六〇）のこと。イギリスの建築家で一八四〇年から五二年にロンドンの国会議事堂をつくったが、イギリス・ゴシック式を採用し、イギリスの建築彫刻の一大飛躍をなしたといわれる。

(8) ドイツの建築家。

(9) ゲーテ「ファウスト」からの引用句。

(10) 紀元前四九五年ころ―前四二九年。古代ギリシアの最もすぐれた政治家の一人で、アテナイ民主政治の完成者といわれる。前四六二年アレオパゴス会議の実権を奪って評議会を民衆裁判所に移し、役人選出に抽選を用い、役人に日当を支給するなど国制の民主化につとめた。

(11) ドイツのザクセンの町。住民の愚行が伝説的に伝えられている。

(12) トランプ遊びの一種。

(13) 「最も神聖な神々の殿堂」または「すべての神々の神殿」の意。

(14) イギリスのマンチェスターの商業会議所を本拠として、スミス、リカードらの古典学派経済学の主張した自由放任主義と自由貿易主義を宣伝した人々をマンチェスター学派という。

(15) 普墺戦争。ドイツ統一をめぐって小ドイツ主義のプロイセンと大ドイツ主義のオーストリアの間に行なわれた戦争。ビスマルクは巧妙な外交政策でイタリア、フランス、ロシアに中立を守らせ、モルトケの作戦下にオーストリアの主

力をたちまち撃破し、わずか七週間でオーストリアを降伏させ、プラハ和約を結び、その結果オーストリアはドイツからしめだされ、プロイセンの北ドイツ連邦組織が承認され、ドイツ統一の基礎をつくった。

(16) 普仏戦争のこと。スペイン国王選出問題をめぐる両国の紛争。七〇年七月十九日フランスが宣戦布告。プロイセンはドイツ諸国の協力をえて連戦連勝。九月二日ナポレオン三世が降伏。共和政権が成立。七一年二月ヴェルサイユで平和協定、五月フランクフルトで講和条約締結。フランスはドイツに賠償金五十億フランを支払い、アルザス＝ロレーヌの大部分を割譲。この間一月十八日、ヴェルサイユでドイツ帝国の成立が宣言された。

(17) ケーニヒグレーツの戦いとドイツではいう。普墺戦争のさい、ボヘミアに侵入したプロイセン軍の主力が、一八六六年七月三日にオーストリア軍の主力を破って、大勢を決した戦い。

(18) フランツ・ヨーゼフ一世をさす。

(19) 注(17)を見よ。

(20) プロイセンのホーエンツォレルン王家をさす。

(21) シェーネラー（一八四二―一九二一）の祖父はペンキ工で貧しかったが、父は下級貴族の称号をうるまでになっていた。ゲオルク・フォン・シェーネラーは、一八七三年オーストリアの下院議員となり、自由派に属していたが、同年の経済恐慌時に社会改革的要求を出し、七六年には自由派から脱退し、七六年以降の文化闘争時代には、汎ドイツ主義の立場からカトリック反対を主張し、さらにボスニア・ヘルツェゴヴィナ占領というオーストリア政府の政策に反対し、ヴィーン大学生を中心とする過激民族主義グループの英雄となり、明確に反ユダヤ主義とドイツ帝国崇拝者に転向した。一八八五年にリンツ綱領に反ユダヤ主義の項目を入れたのはかれで、ビスマルク崇拝者でもあった。その後のかれの運動の盛衰はほぼヒトラーの記述に近い。

(22) ルエーガー（一八四四―一九一〇）は貧しい家庭に生まれ、苦学してヴィーン大学を終え、一八七〇年に法学博士号を得た。元来保守的な思想をもち、大ドイツ主義者として汎ドイツ主義運動に反対していた。かれは自由派が見すてていた下層階級を味方につけ、一八八五年には民主派としてオーストリア議会に選出され、当時最も人気のある政治家であった。しかしかれはもともと反ユダヤ主義者ではなかったといわれている。

シェーネラーとルエーガーについての記述は、ヒトラーがルエーガーの大衆向け反ユダヤ主義的デマゴギーにまどわされた点を除外しても、比較的妥当な評価をしているようである。しかしマーザーはこうしたヒトラーの言、つまりこの当時かかる評価をしうるまでにヒトラーがなっていた点は、ありそうもないと述べている。おそらくずっとあとである勉強をした結果であろう。しかしこのころヒトラーが反ユダヤ主義者同盟の会員となったことは事実である。

(23) ここの記述は若干の主観性と資料不足を除けば、ほぼヒトラーの見方は正しいといえよう。

(24) ブタのこと。

(25) オーストリアの自由派の教権制限運動とビスマルクの文化闘争の影響をうけて、カトリック教会がハープスブルク王家と結んでドイツ民族運動を抑圧していたために学生の反抗が王家からカトリック教会に対するものにエスカレートした。シェーネラーは一八九八年末議会で「ローマからの分離」を叫び、翌年「汎ドイツ派」のカトリックからの大衆的脱退を計画、自らルター派に改宗したが、一万人がこれに従ったのみで終わったといわれている。

(26) ユダヤ教の説教師。

(27) 反カトリック教会の闘争。注(21)、(25)参照。

(28) シェーネラー派孤立の原因の一つは、たしかに文化闘争にあり、反対派に民衆の宗教感情を利用して勢力拡大をゆるすとともにカトリックの強力な聖職者階級をすべて汎ドイツ主義反対へおしやった。しかし失脚の直接原因は、シェーネラーの協力者であったヴォルフがシェーネラーから離反したことである。

(29) これについては注(22)を参照。

(30) これはヒトラーがミュンヘン移住をあとから正統化するための弁明にすぎないと見られている。事実は兵役忌避罪に問われることを恐れたため、とヒトラー研究者の間では一致した見解がみられる。

(31) ここでヒトラーはヴィーン時代を回想して、美化しているが、多くのヒトラー研究者によれば、これはまったくのでたらめにすぎない。かれの生活態度、行状をつぶさに研究したものは反ユダヤ感情の形成を度外視すれば、ヴィーン時代のヒトラーにはこういう大見得を切りうるほどの余裕は経済的にも時間的にもなく、幾年かあとにこの時代の行動を正統化する理論を見いだしたものと考えられている。

## 第四章

(1) 一九一二年春というのは事実とちがい、多くの記録は一九一三年五月二十四日にヴィーンを出発し、二十六日にミュンヘンで無国籍者として住所申告をしている。同年八月十一日リンツ市庁警察部は徴兵検査に出頭しなかったので追及しはじめ、ヴィーン警察本部がミュンヘン移住をつきとめ、リンツ市庁警察部からミュンヘン駐在オーストリア総領事あてに、検査令状が発送されている。忌避の理由が政治的なものか心理的なものであったのかはわからない。

(2) ミュンヘンのシュライスハイマー通りの仕立屋ポップの家に間借りしたヒトラーの生活が、ヴィーン時代よりよくなったかどうかについては二説ある。月々一〇〇マルクである程度の生活を送ることができたという説と、あいかわらず困窮していたという説と。

(3) マーザーはこれについても本当らしくないとの見解をとっている。

(4) イタリア政府のこと。

(5) 日露戦争をさす。

(6) 第一次世界大戦のこと。

(7) 徴兵義務でできあがった国民皆兵という意味での軍隊をいう。

(8) ハメルンの町にネズミがはびこったとき、笛を吹いてねずみをさそい、海で溺死させたものをいう。

(9) インド＝ヨーロッパ語族に属し、インドやイランに定住した人々。かれらは中央アジアで遊牧生活をしていたが、一派は南に下り、アフガニスタンをへて、インドにはいり、他の一派は西に向かいイランにはいった。十八世紀末、サンスクリット語とギリシア語の類似が発見されて以来、インド＝ヨーロッパ語族なる概念ができた。インド、イラン、ギリシア、ローマ、ケルト、チュートン、スラブなどの人種を含むインド＝ヨーロッパまたはインド＝ゲルマンをアーリア人種と総称する。しかしヒトラーは主としてゲルマンをさし、スラブを除外して考えている。

(10) ユダヤ教のこと。旧約聖書はもともとユダヤ教のものである。

(11) シラーの詩から引用。

## 第五章

(1) ナポレオンのロシア遠征失敗後、一八一三年、プロイセン・オーストリア・ロシア連合軍がライプチッヒでナポレオン軍と戦いを決し、その後一五年までつづいた。

(2) 「若いころから『平和主義』でなかった」というヒトラーの主義は誤りである。しかし第一次大戦直前に戦争を期待していたことはたしかである。

(3) 典型的な帝国主義侵略戦争。南アフリカにオランダ系のブール人が建てたトランスヴァール共和国に十九世紀後半ダイヤモンドと金が発見されると、イギリス人がこれを支配しようとした。トランスヴァールはオレンジ自由国と同盟し、一八九九年十月から一九〇二年五月まで戦ったが、ついにイギリス植民地にされた。

(4) 一九一二年にトルコに対してブルガリア、セルビア、ギリシア、モンテネグロ四か国のバルカン同盟が戦い、二か月たらずで勝ったが、ついで占領地たる旧トルコ領分割をめぐってブルガリアが他の三国と開戦、それに失地回復をはかったトルコが加わり、ついにブルガリアが屈し、一三年のブカレスト平和条約でブルガリアは南ドブルジャ、マケドニアを失った。第一次大戦の一つの近因となる。

(5) 皇帝レオポルト二世やマリー＝アントワネットの母。ドイツ女帝。オーストリア大公妃。オーストリアに啓蒙絶対主義的、重商主義的な政治を行なった。

(6) 前章注(1)と本章(2)を比較されたい。

(7) 八月十六日、予備歩兵第十六連隊に入隊。大学生やインテリの志願兵が多く、「リスト連隊」と最初の連隊長の名をとって呼ばれていたこの連隊には、後にナチス党員として活躍したルドルフ・ヘス、マッリス・アマンがいた。

(8) 一九一四年十月二十一日戦線に向けて出発し、十月末から十一月にかけての戦闘で、リスト連隊は三五〇〇人から六〇〇人に減少している。ヒトラーは伝令兵であった。かれは十一月一日上等兵に進級、十二月一日付で二級鉄十字勲章をもらっている。

## 第六章

(1) 人間のこと。

## 第七章

(1) 九月末のソンムの大会戦でヒトラーははじめて機甲戦を経験し、十月にはバポームで戦っていたが、左大腿部に軽い負傷をし、十月九日から十二月四日まで入院。

(2) 今までのみじめすぎる生活に比して、軍隊では一人前として取扱われることを喜び、銃後の生活をきらったこと、また階級秩序と命令の単純明瞭な生活が気分にぴったりしていたこと等が指摘されている。

(3) ドイツ社会民主党中央機関紙（日刊）。

(4) イタリアの将軍の名。

(5) 第一次大戦当時のフランス兵とイギリス兵のあだ名。

(6) 予備歩兵第十六連隊にもどったヒトラーは、十七年のアラースの戦い、ついでイープルの第三回目の戦闘に参加、この間九月十七日に第三級軍事功労十字章をもらった。ついで一九一八年春のドイツ軍大攻撃に加わり、同年五月十八日黒色負傷者袖章を、八月四日に一級鉄十字章をもらっている。

(7) フリードリヒ・エーベルト、社会民主党員、ヴァイマル共和国大統領。フィリップ・シャイデマン、社会民主党員、ドイツ革命ではいち早く共和国を宣言、初代首相。カール・リープクネヒト、社会民主党最左翼の闘士、スパルタクス団を組織し、後ドイツ共産党を創立。

(8) 旧バイエルン王家。

(9) 前戦にいたころ戦友エルンスト・シュミットに未来の職業についてなん度も相談したが、建築家になるか、政治家になるかはっきりしていなかったという。病院で決心したのである。

## 第八章

(1) バイエルン軍隊に帰ったヒトラーは、まずトラウンシュタインに配属され、ついで歩兵第二連隊第二復員中隊に移されてミュンヘンにもどった。三十歳直前。

(2) 戦友。シュミートでなく、シュミットが正しい。前章注(9)を参照。

(3) クルト・アイスナー。ドイツ社会民主党員、ユダヤ人。第一次大戦前「フォアヴェルツ」の編集者。十八年十一月ミュンヘン革命指導者としてバイエルン政府首相となる。十九年二月暗殺さる。

(4) ドイツ革命のさい労働者や兵士が各地で自主的に組織した一種の指導部。

(5) この事実はない。これは別のエップ義勇軍のさいの事件とすりかえられている、とマーザーは主張している。

(6) 五月二日ミュンヘンは反革命義勇軍と郷土防衛軍が占領し、評議会政権は終わった。

(7) 除隊兵や帰還兵に反革命的精神をうえつける啓発コース。

(8) 一九一八年秋以来、雑誌「南ドイツ月報」で頭角をあらわしてきた極右派の大学講師で、工学修士。トゥーレ協会に所属していた。

(9) 教育係将校というのは通常軍務から休暇をとって勉強している将校を指すので、ヒトラーは単に「信任者」であった、といわれている。

## 第九章

(1) 当時ミュンヘンに「ドイツ的労働者の平和のための自由委員会」、「ゲルマン騎士団」という反ユダヤ団体の擬装団体たる「トゥーレ協会」、「政治的労働者クラブ」等の極右団体があった。これらの一つの「ドイツ労働者党」をヒトラーは上官のマイル大尉の命令で、調査した。

(2) この主張は正しい。

(3) 従来ドイツでは兵士に選挙権が与えられていなかった。第一次大戦後与えられたが、後にまたとりあげられた。

(4) カトリック系の政党、現在の「キリスト教民主同盟」の前身。
(5) バウマンという名の教授。
(6) ドレクスラーの「わが政治的覚醒――ドイツの一社会主義的労働者の日記より」。ドレクスラーは、ミュンヘンの鉄道金具工で反ユダヤ主義組織「ドイツ的労働者のための自由委員会」のミュンヘン支部をつくり、ついでスポーツ記者カール・ハラー（トゥーレ協会員）と「政治的労働者クラブ」をつくり、「ドイツ労働者党」にも関係していた。
(7) これをマーザーはヒトラーと何らつながりのない人生行路をたどってきた職人ドレクスラーに対する親しみのこもったジェスチュアにすぎない、という。
(8) これは意図的なウソであるといわれている。ヒトラーはドイツ労働者党の実行委員会の第七番目の番号であったが、党員としては五十五番目で、党員ナンバーは五五五であった。党員番号が五〇一番からはじまっていたからである。実行委員会はアントン・ドレクスラー（金具工）第一委員長、カール・ハラー（ジャーナリスト）、ミヒァエル・ロッター（機関車運転手）第一書記、アドルフ・ビルクホーファー（学生）第一会計係、ヨハン・B・ケルブル第二書記、フランツ・ギリッシュ（ヤスリ目立工）第二会計係、ヒトラー（画家）宣伝係長。
ヒトラーの弁説の才についてはマイル大尉がこれをほめそやしている。

## 第十章

(1) アルトゥール・ショーペンハワー（一七八八―一八六〇）のこと。ドイツの哲学者。その厭世観が有名。
(2) シリア人の財貨の神のこと。財貨、富の象徴。
(3) フーゴー・シュティネス（一八七〇―一九二四）。ドイツの実業家で第一次大戦のインフレ時代に、いわゆるシュティネスコンツェルンを作り上げた。
(4) この節とこのあとの二節は、訳者たちが参照した真鍋良一氏の「吾が闘争」（昭和十七年発行）で削除されている。この程度の君主政一般についての批評も敗戦前のわが国では訳出を遠慮しなければならなかった事実について、とくに戦後世代の読者の注意を求めたい。

(5) 一九一八年十一月八日夜皇帝退位を要求するゼネ・ストの決定に続いて、明けて九日、独立社会民主党、スパルタクス団指導の下に革命化した大衆および軍隊の一部が宮殿に迫った事件を指していると思われる。エルンスト・トラーの「ドイツの青春」参照。なお左翼の赤腕章をヒトラーがナチ運動に逆用することについては、(下) の本文の中でヒトラー自身によって語られている。

(6) 「旧約聖書」の「出エジプト記」(十六の三) に出てくる言葉で、美食あるいは安楽な生活の比喩に用いられる。直訳すれば、「エジプトの肉のなべ」。

(7) 「旧約聖書」、「創世記」第十九章の二四にこのような叙述がある。ソドムとゴモラはともに住民の悪徳のために神によって滅亡させられたと伝えられる死海の近くにあった古代都市。

(8) 第一章 (上) の訳注(8)参照。

(9) 本来は、ロシア社会民主党の多数派―ロシア語でボルシェヴィーキー (一九一七年の革命以後のロシア共産党員) の思想のことであるが、一般に過激思想を意味する。

(10) あらゆる形状を立体的に表現しようとする芸術様式のことで、立体派と邦訳されている。

(11) 芸術様式を表わす言葉で、未来派の最極端を示す虚無主義的な一派のこと。

(12) ドイツ社会民主党首で、ドイツのワイマール共和国の初代大統領 (一九一九―二五)。

(13) ギリシアのアテネのアクロポリスの丘にある神殿のこと。紀元前四三八年ごろ建立されたドリア式建築物の典型とみなされている。

(14) 両人ともにドイツ人画家。シュヴィント (一八〇四―一八七一)、ベックリン (一八二七―一九〇一)。

(15) 第五章 (上) の訳注(1)参照。

(16) カール大帝の子 (七七八―八四〇)。

(17) とがったアーチと屋根を特徴とする、中世最末期、ルネッサンス直前の建築その他の美術様式のこと。

(18) ホーマーのイリアッドに出てくる、五十人に匹敵する声量をもっていたといわれる人物のこと。

(19) イギリス人でナチズム・イデオロギーの先駆的思想家 (一八五三―一九二七) のこと。主著に「十九世紀の基礎」が

ある。

(20) スエーデン首相で一五八三年に生まれ一六五四年に没。

(21) デンマークとノルウェーとの間の北海の湾入部のこと。

(22) この節と次の節は君主政体を批判しているために、先に訳注でも触れた箇所とともに戦時中の真鍋氏の邦訳で省略された箇所である。

(23) ワイマール共和国保護法（前出）。

(24) ヴェルサイユ平和会議のこと。

## 第十一章

(1) ヨーロッパの大部分、小アジア、ペルシア、インド、アフガニスタン地方に住むインド・アーリア語を話す人種のこと。ナチズムではとくにユダヤ人を区別して用いる。たとえばアーリア化といえば、官庁や実業界からユダヤ人を追放することであった。ついでに語原的にみれば、アーリアとはサンスクリット語で、「高貴な」だとか「貴族」という意味がある。

(2) アーリア人種の一支族のことで、その代表的子孫はドイツ人であり、ドイツ人を英語でジャーマンというのはその一例である。

(3) ロマンス語・ラテン語系（たとえばフランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語等）の国語を話す民族のこと。

(4) この大変に長い節および以下の五節（原書で約十一ページ半）は、真鍋氏が訳出を遠慮された箇所である。

(5) ギリシア文化、ギリシア精神のこと。

(6) 「新約聖書」マタイ伝第十三章五七に、キリストの言葉として、「予言者はおのが郷、おのが家の外にて尊ばれざる事なし」とある。

(7) シラーの「フィエスコの反乱」第三幕第四景にほとんどそっくりの台詞がある。なお、ムーア人はドイツ語で黒い馬

をも意味する。ヒトラーもここでは、その意味を含ませていると思われる。

(8) ゲーテの「ファウスト」第一部一三三六行目に出てくるメフィストフェレスの台詞。

(9) ユダヤの律法とその解説のこと。

(10) ユダヤ人の秘密会議の議事録と称せられるもの。ユダヤ人による世界支配がそこで唱えられているという。

(11) ゲルマニアはゲルマン人の居住地の意味で、古代ローマ人は最初かれらによってライン河左岸に移動させられた諸部族をゲルマン人と呼んだ。その後ライン、ドナウ両河の北方に住む全部族をもそのように呼ぶようになった。

(12) 起源は石工組合を母体として結成された秘密結社で、現在では広く世界中に会員を集め、その数四百万を越すと想像されている。会員相互の扶助と友愛を目的にし、さらに理想社会の実現を目ざす団体のこと。

(13) ダヴィデの星あるいはソロモンの紋章とも呼ばれる六星形のこと。ここではユダヤ人を象徴している。

## 第十二章

(1) キリストを銀三十枚で裏切ったイスカリオテのユダのことであるが、ここではユダヤ人を指す。「新約聖書」マタイ伝第二十六章一四―一六参照。

(2) カトリックとプロテスタントのこと。

(3) スエーデンの政治学者で汎ゲルマン地理学者であったルドルフ・キェレン（一八六四―一九二二）の造語である。政治地理学・経済地理学を外交政策に応用したもので、ナチズム国土膨張政策の理論的裏づけとなった。

(4) ソ連西部の都市の名前で、一九一八年十二月この地でドイツはロシアと単独講和（ブレスト・リトヴスク休戦条約）を結んだ。ヴェルサイユは一九一九年六月にいわゆるヴェルサイユ条約が調印されたパリの宮殿であるが、ここではいうまでもなく、連合国の対独平和条約をさす。

(5) メトセラともいう。「旧約聖書」創世記第五章二一―二七参照。九百六十九歳で死んだとされる。長命者の意味に用いられる。

(6) 洗礼者ヨハネはキリストの歩む道を平坦にする役割を演じた。ここでは草分けの意味。「新約聖書」マタイ伝第三章

参照。

(7) アテネの政治家で雄弁家（紀元前三八四？—前三二二）。

(8) 旧保守党を中心とする、君主政復活を唱えた大地主政党のこと。一九一九年の国民議会選挙では議席四十四をえた。ついでながら、このいわゆるワイマール憲法を制定すべきだった国民議会の選挙では、社会民主党は百六十三、中央党九十一、ドイツ民主党（中央党とともにブルジョア政党）七十五議席等が主なものであった。なお共産党は選挙をボイコットした。もちろん当時ヒトラーたちのサークルは正式の政党とはいえぬものであった。

(9) 当時の左翼政党の一つで、一九二〇年に分裂し、左派は共産党に、右派は社会民主党にそれぞれ合流した。左派社会党といったところ。

(10) 当時の内閣に参加していた社会民主党の幹部たちが、ドイツ革命を成就するためにとった戦術をさす。とくに閣僚であったシャイデマンの動きをさすであろう。

# 解説（I）

本書はAdolf Hitler, Mein Kampf, 2Bde. の全訳である。『わが闘争』の原本は、第一巻は一九二五年に、第二巻は一九二七年にそれぞれ初版が出されている。この書はその後全一冊にまとめられているが、ここでは第一巻については一九二六年発行の第二版、第二巻については翌二七年発行の初版（ともにVerlag Franz Eher Nachfolger G. m. b. H., München 発行）を参考にしながら一九三六年発行の213./217. Ausgabe (Zwei Bände in einem Band, Ungekürzte Ausgabe. Zentralverlag der NSDAP. Frz. Eher Nachf., München 発行）によった。内容はほとんど変わっていないが「小見出し」が、いくぶんかえられている。

**『わが闘争』と初期のナチ運動**　「わが闘争」はヒトラーの序文にあるように、国事犯として、レヒ河畔のランツベルク要塞拘置所に収容されていた間に（後にはハウス・ヴァッヘンフェルトで）、かれの協力者であったエミール・モーリスと、その後ヒトラーの片腕となり、第二次大戦中イギリスへ政治亡命をしたルドルフ・ヘスを相手に口述したものである。原稿は大部分ヘスが筆記したが、その整理にあたっては、ヘスのほかに反ユダヤ新聞の記者ベルンハルト・シュテンプレ神父とナチの機関紙フェルキッシャー・ベオバハターの記者であったヨーゼフ・ツェルニーがあたった。シュテンプレは文章をなおし、文法上の誤りをただし、政治的に反感をもたれると思われる部分を抹消し、ツェルニーは第一巻の再版のさい改訂の任にあたり、つごうの悪い用語や文章を削除したり、変更したりした、

といわれている。
拘置所に国事犯として拘留されていたにもかかわらず、その間にどうしてかかる自由が許されていたのか、という疑問に答えるためには、ワイマール体制下のドイツの政治状勢をいささか知っておく必要があろう。
一九一八年十一月九日、敗戦の結果ドイツは、ベルリンにおいて共和制を宣言し、いわゆるワイマール共和国が成立した。しかしこの不幸な共和国は、成立当初から内外ともに強力な敵にかこまれていた。外とはいうまでもなくドイツの戦争責任に対して物質的補償を強くせまる連合国であり、内とは敗戦の責任を国内の社会民主主義者、共産主義者にかぶせようとするミリタントなナショナリストであった。当時のドイツでは、君主制の崩壊によってその存立基盤をぐらつかせていたとはいえ、右翼勢力はいぜん強力であり、その根幹はホーエンツォレルン君主制を存続せしめようとした保守主義者や、ルーデンドルフ、ヒンデンブルクらを代表とするドイツ陸軍の首脳部であった。しかもかれらは降伏文書に署名して、ドイツの敗戦とそれに続く苦難の責任を負うことを回避して、これを社会民主主義者におしつけることに成功した。当時素朴にも、多くのドイツ人は、前線におけるドイツ軍の武力が弱体化し、武器の不足によって抗戦不能におちいった結果降伏したのだ、とは信じておらず、むしろ銃後で社会主義者に裏切られ、いわゆる「背後から刺された」結果敗戦にいたったのだ、という伝説が、狂信的なまでに信じられていたからである。
かかる状勢下、政権の座についた社会民主党は、むしろ君主制の温存とそれのイギリス的立憲君主制への移行をあらわにするほどに、左翼革命に反対する保守第二政党的立場に立っていた。したがってローザ・ルクセンブルクやカール・リープクネヒトのひきいる共産系スパルタクス団に対立し、つ

いには残存せる十万の陸軍の指導者たるヒンデンブルクらと結んでボルシェヴィキを弾圧し、陸軍のいっさいの伝統をうけつがんとするにいたったのである。かくて旧ドイツ陸軍の根幹はそっくりそのまま温存された。「カイザーは去ったが、将軍たちは残った」という評言は、まさに正しかった。

とかくするうちに、一九一九年六月二十八日ヴェルサイユ条約が締結された。この条約はその苛酷さにおいて、未曽有の条件を有していた。したがっていぜんとして経済的実権をにぎっていた保守階層はもとよりのこと、永続的な民主共和制確立の確固たる見通しをもたない社会民主政権のおかげで伝統を温存した陸軍も、これに抵抗しようとした。加うるにマルクの急激な下落と、その悪性インフレによる賠償支払いの停滞とが、フランスのルール占領をひきおこすにいたった。これはマルクの下落をさらに幾倍か急速に早め、民衆のヴェルサイユ体制に対する不満と、それを契機とする民心の反連合国的、国家主義的団結を招来せしめた。極度に混乱した社会経済状態と、反ヴェルサイユ的民衆感情と、ヴェルサイユ条約の軍事制限条項の裏をかいくぐって着々勢力を増しつつあった陸軍の軍国主義復活の波とは、ヒトラーが共和制をくつがえすのに絶好の機会をかもし出していた。

ヒトラーはあらゆる場所で、敗戦と困窮の責任が、ワイマール共和制の責任者――ヒトラーの言によれば十一月革命の犯罪者たる社会民主党にあること、さらにヴェルサイユ条約を破棄することがドイツ再興の近道であることを、くりかえしくりかえし説いたのである。

ところでヒトラーは除隊後ただちにナチの前身たる「ドイツ労働者党」に入党した。「ドイツ労働者党」は、マルクシズム、ボルシェヴィズム、平和主義、ユダヤ主義等に反対して、一九一八年三月七日ミュンヘンにつくられた「よき平和のための自由な労働委員会のミュンヘン支部」を母胎とするものであった。その長はアントン・ドレクスラーであったが、かれはその後、極右民族主義の団体

「ゲルマニア教団」のバイエルン地方組織として一九一八年一月に結成され「ミュンヒナー・ベオバハター」という機関紙と一五〇〇人の会員を擁していた「トゥーレ協会」の会員であるカール・ハラーと結んで「政治的労働者サークル」を結成した。時に一九一八年十月二十日。これはもちろん労働者兵士農民評議会（いわゆるレーテ）支配下では非合法組織であった。こういう背景のもとにドレクスラーは一九一九年一月五日、二五名をもって「ドイツ労働者党」を結成し、トゥーレ協会の全面的バックアップをうけた。

ヒトラーは「わが闘争」の中で、かれの入党以前の「ドイツ労働者党」を極度にみじめな状態にあった、と描写しているが、事実はかなりの有力な背景をもっていたといえよう。ヒトラーはここへ党員番号五五五（五〇一番から始まっているので、実際は五五番目）として登録されている。一九二〇年二月二十四日ホーフブロイハウスの大集会で党は、「二五カ条」の綱領を発表したが、綱領作成についてはドレクスラー、エッカート、フェーダーが参加したのであって、ヒトラーは集会の議長としてそれを公表したにすぎない。

しかしすでに一九二〇年一月には、トゥーレ協会員として「ドイツ労働者党」を陰に陽に後援してきたハラーが、ヒトラーによって党から追放されていた。ドレクスラーは党第一議長として第一人者の地位を保ってはいたが、集会でのアジ演説のうまさによって、次第にヒトラーが地歩を固めてきた。綱領公表直後に党は「国家社会主義ドイツ労働者党（NSDAP）」と改称し、このころからナチはめざましい発展をとげている。

もちろん右翼勢力はバイエルン地方で発展していただけではない。二〇年三月十三日にベルリンでは、極右政治家カップが軍部と結んだいわゆるカップ一揆が起こっている。ナチ内部では合法的議会

主義的な道をとろうとするドレクスラーと急進的暴力的方法をとろうとするヒトラーとの間で抗争が行なわれたが、ついに一九二一年七月二十九日ヒトラーが党の全権をにぎるにいたった。ナチの組織そのものも次第に整備され、一九二〇年夏に「整理隊」として成立した防衛組織は、二一年春には「百人隊」と名称をかえ、さらに同年九月から十一月にかけて非公式にも公式にも「突撃隊（SA）」と改称した。また「ミュンヒナー・ベオバハター」紙と改称していたが、二〇年十二月十七日にはナチがこれを買収し、機関紙として週二回発行していた。二二年一月二十九日―三十日の党大会では登録党員六〇〇〇人を数え、三月にはヒトラー・ユーゲントの前身たるナチ党青年同盟が発足した。

二二年六月二十四日から七月二十七日までバイエルン同盟の集会のさいの暴行によってヒトラーは投獄され、同年十一月以降プロイセンをはじめドイツ各地でナチ党が禁止されるといったような動きがあったにもかかわらず、党勢は拡大の一途をたどった。同年末にはニュールンベルクのシュトライヒャーを党首とするドイツ社会党が合流し、翌二三年二月には「フェルキッシャー・ベオバハター」を日刊にしうるまでにいたったのである。

一九二二年―二三年のドイツ人の生活は最悪の状態をむかえていた。クノーのベルリン中央政府は崩壊し、ドイツ人民党のグスタフ・シュトレーゼマンが内閣を組織すると同時に、陸軍による共産党弾圧と賠償支払い再開による対外信用回復をはかった。バイエルン州政府はもともと中央政府に非協力的であったが、一九二三年九月二十六日方針を変更し、中央政府の政策に同調するとともに、これに反対すると予測された極右勢力をおさえるために非常事態を布告し、フォン・カールをバイエルンの総監に任命した。これを挑戦とうけとったヒトラーは、十月十六日レンテン・マルク支払い告示に

いとみるや、ベルリン中央政府を倒すために、まずバイエルン州政府のてんぷくを企てたのである。一九二三年十一月八日、バイエルン州政府の実力者がミュンヘンのビアホール、ビュルガーブロイケラーで演説会を開く機会を利用して有名なビアホール・プッチ（暴動）をおこした。しかし結果はみじめな失敗に終わった。ヒトラーは逮捕され、一九二四年二月二十六日から裁判が開始され、四月一日に五か年の禁固刑に処せられた。しかし、国家反逆罪として通常なら終身刑になるはずのものがわずか五か年の禁固刑、しかも六か月後には保釈しうるという軽い刑であった（実際には九か月後の十二月二十日に保釈されている）。反逆罪は当時のドイツ、とりわけバイエルンの国家主義的傾向を反映して、共和制論者にはきびしく適用されたが、共和制に反対する右翼には寛大であったのだ。

かれはミュンヘン西方のランツベルク要塞拘置所に収容されたが、ここではすばらしい部屋を与えられ、賓客待遇をうけたのである。プッチは失敗したが、この事件はかれをいちはやく、ルーデンドルフと並ぶ大人物に仕立てあげ、多くの保守的なドイツ人に英雄、愛国者とうつるようになったのである。『わが闘争』は、この獄中で口述された。本書の巻頭の黒枠の中に見える名前は、プッチのさい死んだ人の名前である。

その後、二五年から大恐慌がくるまでナチは、しばらく雌伏期にあったが、エーベルト大統領急死の一日前――一九二五年二月二十七日ビュルガーブロイケラーで党の再建大会を開き、合法的政権獲得に方針を変更した。ヒトラーは自他ともにゆるす扇動的雄弁家であったが、またすぐれたオルガナイザーでもあった。ナチ党員数は一九二五年末に二万七千人、二六年に四万九千人、二七年に七万二千人、二八年に十万八千人、二九年に一七万八千人と着実に上昇している。また党組織はガウ（大管

区）、クライス（管区）、オルト（地区）を国会議員の選挙区に応じてつくりあげ、突撃隊を再編し、さらに親衛隊（SS）をつくった。かくてナチ党は一九三〇年九月十四日の総選挙で一〇七の議席を得、その後二度の総選挙を経て、三三年三月五日の総選挙では二八八議席を獲得し、それに先立つ一月三十日にヒンデンブルク大統領のもとに首相に就任していたヒトラーは、ここで一気にナチ革命を推進した。三月二十三日には国会で全権賦与法を可決し、ついでユダヤ人排斥、社会民主党禁止、新党新説禁止などの独裁政策をうちだし、一九三四年八月二日ヒンデンブルクの死とともにドイツ国総統に就任し、ついに一九三五年三月十六日にはヴェルサイユ条約の軍事条項を廃棄し、一般兵役義務制を復活し、着々と第二次大戦の準備を開始するにいたったのである。

**『わが闘争』とヒトラー伝説**　ヒトラーの政権獲得とその後のドイツの運命については、すでに多く語られてきた。その多くはワイマール共和国それ自体の問題、あるいは社会民主党の定見のなさ、さらにはヴェルサイユ体制をおしつけた連合国の責任について意見を述べている。またヒトラー自身の非凡な政治的手腕に帰す意見もある。おそらくそのどれもが真実であろう。しかしなによりもわれわれが注意しなければならないのは、ヒトラーに国民の運命を託した市民一人一人の責任である。社会主義的仮面の下にあったヒトラーの真意を、多くの市民が見誤った。たしかにそれ以上にヒトラーに攻撃の材料を提供し、デマゴギーに乗ずるすきを与えてナチを太らせ、ついにはあの破局に導くにいたらしめた政治家、一部の産業資本家、軍部の責任は大きいといわねばならない。もって他山の石とすべきではなかろうか。

なお、一つ注意すべきことがらがある。「わが闘争」の中で述べている多くの箇所に、幾多の故意

の粉飾がある、ということである。この点については最近の多くのヒトラー研究書が明らかにしてくれている。こうしたヒトラー神話成立の裏面を見るために適したいくつかの文献をあげておこう。特にマーザーとフェストの最近の研究は、最もすぐれていると思われる。

・Maser, W., Frühgeschichte der NSDAP, 1965.（邦訳、ヴェルナー・マーザー著／村瀬興雄・栗原優訳「ヒトラー」一九六九年、紀伊國屋書店）
・Maser, W., Adolf Hitler-Legende, Mythos, Wirklichkeit, Bechtle Verlag, München & Eßlingen, 1971.
・Maser, W., Hitlers Briefe und Notizen—Sein Weltbild in handschriftlichen Dokumenten, Econ Verlag, 1973.（邦訳、ヴェルナー・マーザー編著／西義之訳「ヒトラー自身のヒトラー」一九七四年、読売新聞社）
・Fest, J. C., Hitler, Propyläen Verlag, 1973.（邦訳、ヨアヒム・フェスト著／赤羽竜夫等訳「ヒトラー上、下」一九七五年、河出書房新社）
・Langer, W., The Mind of Adolf Hitler, Basic Books, Inc., 1972.（邦訳、W. C. ランガー著／ガース暢子訳「ヒトラーの心——米国戦時秘密報告」一九七四年、平凡社）

なお上巻第一章より第九章までと、下巻第一章より第十二章までの訳を平野が、上巻第十章より第十二章までと下巻第十三章より第十五章までの訳を将積が担当した。

平野一郎

# わが闘争

（上）

アドルフ・ヒトラー

平野一郎・将積茂＝訳

角川文庫　3143

昭和四十八年十月二十日　初版発行
平成十三年十月十五日　改版初版発行
平成十八年一月二十五日　改版十版発行

発行者――田口惠司
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　編集(〇三)三二三八―八五五五
営業(〇三)三二三八―八五二一
〒一〇二―八一七七
振替〇〇一三〇―九―一九五二〇八

印刷所――旭印刷　製本所――BBC
装幀者――杉浦康平



落丁・乱丁本はご面倒でも小社受注センター読者係にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。



ヒ 3-1　ISBN4-04-322401-X　C0131

# 角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

# 角川文庫海外作品

## 五人の妻を愛した男(上)(下)
ルイーズ・アードリック
小林理子＝訳

借金逃れのため、焼死したと見せかけ姿をくらましたジャック。彼の葬儀の帰途、一台の車に乗り合わせた妻たちは吹雪に閉じこめられて……

## ブラッド・キング
ティム・ウィロックス
峯村利哉＝訳

始まりは殺した筈の元警部から届いた遺言状だった。精神科医グライムズは逃れる術なく狂気のゲームへと呑み込まれていく…。戦慄のサスペンス。

## グリーンリバー・ライジング
ティム・ウィロックス
東江一紀＝訳

囚人たちの暴動で完全に秩序を失ったグリーンリバー刑務所。仮出所直前の囚人医師は、ぎりぎりの理性を揺るがせながら善悪の彼我を彷徨する。

## ホットロック
ドナルド・E・ウエストレイク
平井イサク＝訳

出所早々、盗みの天才ドートマンダーに国連大使から大エメラルドを盗む話が舞い込む。不運な泥棒ドートマンダーの珍妙で痛快なミステリー。

## 強盗プロフェッショナル
ドナルド・E・ウエストレイク
渡辺栄一郎＝訳

盗みの天才ドートマンダーの今度のやまは、トレーラーで仮営業中の銀行をそっくりそのまま盗むというもの。かくして銀行は手に入ったが……。

## 星の王子さまを探して
ポール・ウェブスター
長島良三＝訳

世界中で読みつがれる『星の王子さま』を生んだサン＝テグジュペリ。空に憧れ、愛を求め続けた永遠の少年の魂の軌跡を描く伝記文学。

## エクスタシー
アーヴィン・ウェルシュ
池田真紀子＝訳

MDMAが中枢を駆けめぐる！　この悲惨で最低な人生に真実の愛はあるのか？　現代の不安と焦燥をテーマに構成された圧倒的中篇傑作集。

# 角川文庫海外作品

**ハイロー・カントリー**
マックス・エヴァンズ
鈴木　恵＝訳
第二次大戦後の西部。広漠とした牧場の続くハイロー・カントリーに戻ってきた青年と、その親友が織りなす愛と欲望、友情と裏切りのドラマ。

**アメリカン・サイコ(上)(下)**
ブレット・E・エリス
小川高義＝訳
昼は、ブランドで身を固めたビジネスエリートが、夜は異常性欲の限りを尽くす殺人鬼と化す。現代の病巣を鋭くえぐり取った衝撃の問題作。

**不滅の恋**
ジェイムズ・エリソン
小西敦子＝訳
ベートーヴェンが死に臨み、全ての財産を贈ると記した〝不滅の恋人〟とは……。〝世界的音楽家〟の秘められた愛と魂の物語。

**シティ・オヴ・グラス**
P・オースター
山本楡美子
郷原　宏＝訳
ニューヨーク、深夜。孤独な作家のもとにかかってきた一本の間違い電話が全ての発端だった……。カフカ的世界への彷徨が幕を開ける。

**リービング・ラスベガス**
ジョン・オブライエン
小林理子＝訳
若くしてアル中。男はラスベガスを死に場所に決め、情夫から逃れた娼婦と暮らし始めた。二人は短いがゆえに純化された愛を生ききった。

**X-ファイル（I〜V）**
クリス・カーター他
チャールズ・グラント
南山　宏＝訳
科学では解決不能とされた怪事件簿・X-ファイルにFBI特別捜査官が挑む！　全米で超人気ドラマシリーズのオリジナル小説。

**X-ファイル**
～闇に潜むもの
クリス・カーター
チャールズ・グラント
南山　宏＝訳
科学では解決不能とされた怪事件簿・X-ファイルにFBI特別捜査官が挑む！　全米で超人気ドラマシリーズのオリジナル小説。

# 角川文庫海外作品

## X-ファイル～旋風
チャールズ・グラント
クリス・カーター
南山宏＝訳

インディアン居住区で、牛と人間の無惨な変死体が発見された。モルダー捜査官は論理的思考の相棒スカリーと現地へ赴くが……。

## X-ファイル～グラウンド・ゼロ
ケヴィン・J・アンダーソン
クリス・カーター
南山宏＝訳

核物質のない研究室で、爆発が起こった。しかし、現場からは大量の放射線が検出された。さらに同様の不可解な核事故が各地で相次ぐ……。

## X-ファイル～遺跡
ケヴィン・J・アンダーソン
クリス・カーター
南山宏＝訳

メキシコの古代マヤ遺跡で発掘調査隊が忽然と姿を消した。失踪者が続発するこの地では、地球外起源らしき遺物も出土していた……。

## X-ファイル～呪われた抗体
ケヴィン・J・アンダーソン
クリス・カーター
南山宏＝訳

ガン研究所襲撃の裏に隠されている真実とは？二人の捜査を阻む影の組織の正体がいよいよ明かされる、待望のオリジナル小説、第五弾！

## 奇跡の少年
オースン・スコット・カード
小西敦子＝訳

七番目の息子の七番目の息子であるアルヴィンには不思議なパワーが授けられていた。米SF界の俊英が描くファンタジー。世界幻想文学賞受賞作。

## 赤い予言者
オースン・スコット・カード
小西敦子＝訳

開拓時代のアメリカ。〝メーカー（造る者）〟として、大地の意志を伝える予言者とともに過酷な冒険に挑む少年の魂の旅路。

## あいどる
ウィリアム・ギブスン
浅倉久志＝訳

情報と現実をシンクロさせるレイニーは、ホログラム「あいどる」を調査するため東京へと向ったが……。幻視者ギブスンによる21世紀東京の姿！

# 角川文庫海外作品

アメリカン・ゴシック（1～4）
ショーン・キャシディ他
長橋美穂＝訳
アメリカ南部の平凡な町で突然起きた超常現象に巻き込まれる少年と家族の姿。「X-ファイル」に続く全米TVシリーズ話題作、小説化！

アメリカン・ゴシック1
ショーン・キャシディ他
長橋美穂＝訳
アメリカ南部の平凡な町で突然起きた超常現象に巻き込まれる少年と家族の姿。「X-ファイル」に続く全米TVシリーズ話題作、小説化！

アメリカン・ゴシック2
ショーン・キャシディ他
長橋美穂＝訳
次々と起る謎の事件に、少年は勇敢に立ち向かう。ホラー映画界の鬼才、サム・ライミが製作総指揮を務める話題の全米TVシリーズの小説第二弾！

アメリカン・ゴシック3
ショーン・キャシディ他
長橋美穂＝訳
姉の死の真実が暴かれそうになった時、男(ヤツ)は――。全米TVシリーズには登場しない、数十年前に起こった謎にも迫る小説第三弾。

アメリカン・ゴシック4
ショーン・キャシディ他
長橋美穂＝訳
数十年前からの怨念の対決、未来を変えるパワーとの勝負など、「アメリカン・ゴシック」のみどころのすべてを結集した、シリーズ最終編！

ジェネレーションX
加速された文化のための物語たち
ダグラス・クープランド
黒丸尚＝訳
エリートたちの拝金主義にうんざりし、都会を逃げ出し砂漠に移り住んだX世代の若者たち。圧倒的に支持されたX世代のバイブル。

切り裂き魔の森
A・クラヴァン
中野圭二＝訳
緑の森に囲まれた家、優しい夫と二人の子供。ホワイト夫人の生活は平穏だった。夫へのある疑惑が生じるまでは……。

カバー　旭印刷

ISBN4-04-322401-X
C0131 ¥800E
定価：本体800円（税別）

突如として世界に巻き起こったヒトラー・ブーム、この不気味な現象は、いったい何を意味し、何を志向しているか。この謎を解くカギを秘めた『わが闘争』、それは独裁者ヒトラーの出現を許した混迷の政治風土と酷似する現代において、予想外の意味をもってわれわれに迫ってくる。ヒトラーが本書で語るその恐るべき政治哲学・魔術に近い巧妙な政治技術は、現代政治の虚構を見抜く有力な手掛りとして、今なお多くの示唆を放っている。戦争体験のない若人は勿論のこと、全国民にとって、批判的必読の書といえよう。